RECONSTRUCTION

改造

政變批判・婦人解放

朝永三十郎
佐々木惣一
賀川豊彦
野上俊夫
大島正德
堀江歸一
姉崎正治

山川均
野村淳治
美濃部達吉
堺利彦
富士川游
室伏高信
小泉信三

創作拾四篇集

坪内逍遙
里見弴
芥川龍之介
片上伸
正宗白鳥
志賀直哉
幸田露伴

武者小路實篤
德田秋聲
水上瀧太郎
長與善郎
宇野浩二
藤森成吉
谷崎潤一郎

壹週年記念號

改造四月號目次

（創作十四篇）

（創作十四篇）

書目

◎經子史部（拾六冊）

四書　一冊
易經、書經　一冊
詩經　一冊
禮記　一冊
春秋左氏傳　二冊
老、莊、列子　一冊
墨子、荀子　一冊

韓非子　一冊
七書（孫子、吳子、司馬法、尉繚子、六韜、三略、李衛公問對）、鬼谷子、新語　一冊
淮南子　一冊
戰國策　一冊
史記（全篇）　四冊

◎文學部（拾六冊）

楚辭　一冊
文選　三冊
唐詩選　一冊
三體詩　一冊
八家文　二冊
西廂記、琵琶記　一冊

還魂記、燕子箋　一冊
桃花扇、長生殿　一冊
晉唐小說　一冊
宣和遺事、剪燈新話、餘話　一冊
紅樓夢　三冊

譯註諸家

（イロハ順）

東京帝大教授文學博士　服部宇之吉
文學博士　幸田露伴
東京帝大教授文學博士　宇野哲人
學習院教授　岡田正之
第一高等學校教授　箭内亘
宗教大學教授　山口察常
第一高等學校教授　安井小太郎
東京女子大學教授　後藤朝太郎
公田連太郎
學習院教授　小柳司氣太
宮内省御用掛貴族院議員　小牧昌業
東京高等師範學校教授　兒島獻吉郎
奈良女子高等師範學校教授　佐久節
明治大學教授　笹川臨風
拓殖大學教授　宮原民平
東京帝國大學教授　鹽谷温
釋清潭
東洋大學教授　平岡龍城

◎卅二冊

津田青楓氏意匠、菊判總クロース製、天金、一冊紙數約八百頁

内容　經子史部　十六冊
　　　文學部　十六冊
兩部又は一部申込隨意

◎入會申込は四月卅日限

略規

會費　申込金　送本

經子史部、文學部の各部會費は毎月金五圓、但、一人にて兩部申込は毎月金九圓五十錢。各部金五圓、兩部金九圓五十錢、但此申込金は最終の會費に引當て、會費中より控除す。來る六月より毎月各部一冊宛刊行送本す。

▼内容装幀詳細見本は御申越次第送呈

東京市神田區小川町一番地
電話神田三二六〇番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

賀川豊彦著

人間苦と人間建築

菊判總クロース表紙

コロタイプ四月上旬發賣凸版數葉

定價參圓五拾錢

送料拾貳錢

尾崎行雄序文
田川大吉郎著

英國の王室及び議會

菊版五百餘頁箱入美本

近日發賣

母の愛の進化

理學博士 谷津直秀著

▽新刊△

三六判洋布表紙箱入

著者秘藏の寫眞二十五葉

□定價壹圓貳拾錢

□送料八錢

動物の母が子を愛する事は誰でも知つてゐることであるが如何なる程度に兒を愛するか、人の母が子を愛するのと如何に異れるか。人の母の愛が如何に進化して動物の母の愛から出てきたものかといふ問題を種々面白き例を擧げて論じたものが本書である。豐富なる而して面白き材料より成れる本書は母も讀んで面白く子も讀んで又面白い。

醫學上より見たる人

谷津理學博士校閲及序

クライル博士原著

小野寺一男譯

▽新刊△

定價貳圓

送料拾錢

人を生物界の一員として其の活動現象等を系統發生の歴史より見たるもの。

版元 東京尾張町 警醒社書店 振替東京五五三番

京都帝國大學文學部經濟學部講師 米田庄太郎先生著

新刊

輓近社會思想の研究

中巻 革命的サンヂカリズムの研究

正價 參圓五十錢
郵送料 金拾貳錢

第一章 佛國に於ける勞働運動の發達と「勞働總同盟會」及び「勞働取引所聯合會」の成立

第二章 「勞働總同盟會」と「勞働取引所聯合會」との合同、幷に兩者に於ける革命的サンヂカリズムの根本思想の形成

第三章 「勞働總同盟會」内に於ける社會思想の二潮流＝革命的サンヂカリズムと改良主義サンヂカリズム

第四章 「勞働總同盟會」内に於ける革命的サンヂカリズムの發達幷に其の優勢＝「總同盟會」の運動の過激化

第五章 「勞働總同盟會」内に於ける改良主義サンヂカリズムの勢力の發達＝「總同盟會」の運動の穩和化

第六章 休戰條約成立後に於ける「勞働總同盟會」の穩和化の形勢（自大正七年十一月 至大正八年十二月）

發行所 京都市丸太町通寺町東入 振替大阪三五二六四番 弘文堂

東京帝國大學經濟學部教授 法學博士 渡邊鐵藏先生著

社會問題批判

◆菊判上質紙印刷 總クロース美本

◆正價金二圓 送料十二錢

現下の經濟問題社會問題都市問題等を餘す所なく犀利なる觀察と眞摯にして痛烈なる筆鋒を以て論斷せる快著を見よ

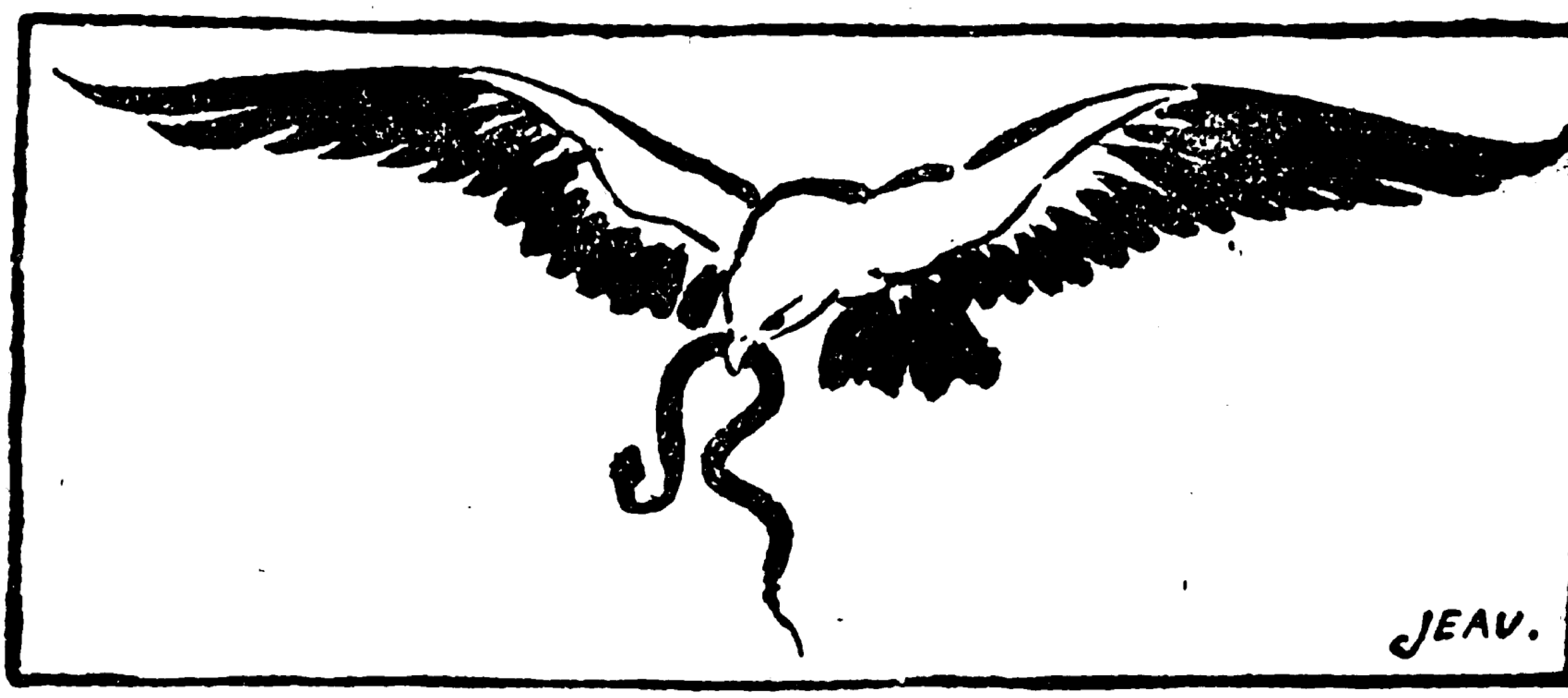
新刊

都市問題は現實的社會の大問題にして其の解決は刻下須要の急問題である著者が鋭敏なる觀察と深遠なる研究により表示せる合理徹底的解決と其の方法の如何に微細に渡れるかを都市問題研究の第一人者少壯氣鋭の著者にして始めて此著あるのみ廣く一讀を乞ふ。

◎發行所

東京市神田區表神保町二 振替東京二六四四番 修文館

大阪市東區博勞町五 振替大阪四七一番 修文館



《改造四月號》

思想家と政治家の闘爭

或るものは、ヘーゲル哲學が大學から驅逐されたのを喜び、或る思想家は、我政界より官僚、閥族が剿滅されたと得意の眉を揚げていた。ヘーゲル派の衰頽、カント黨の復興、そのもの自身については我等は寸毫も關知する所はないにせよ、その求むる哲學によつて民衆思潮のいかに變化して行くかゞ判明しやう。

我等は現代の政治家と稱する人々へ對して何等の趣味も有たない。隨つて何等の期待も有せないのである。寧ろ思潮と民衆に何等の諒解なくして、逐鹿場裡に立てる舊時代の遺物に對して滑稽の感と、悲哀の情とを催すのみである。

解散前の議院外の民衆の聲と、院內の論調とを檢討して見れば、同じ普選を提唱するにしても、その意氣と、その思想とは萬里の差があつた。憲政會や、國民黨の提案は姑息でお負けに四圍に逡巡して遂に政友會の爲めに見ん事、脊負投げを喰はれてしまつた。何事につけても躊躇と逡巡は禁物である。

獨りその禁物を破つて邁往勇進しゝあるは司法當局者である。原敬氏を法相に戴く司法當局の言論取締の峻厳さにある。人類の躍動、民族の擡頭が司法權の極度の發動によつていかなる結果を齎らすべき乎。大人格の出現は開發教育に俟ち、緩かな自由の氣流に育まれる。假令へ、司法官にしてペスタロッチーや、ヘルバルトの教育思想を汲まないとは云へ、見を持てる一人前の司法官も思想に依つて來る所を究める必要がある。

我等は司法官を怨嗟するものではない。國を同じくする同胞として、類を同じくする人間として、人間のなすべき事業、人間の有する思想には敬意と理解とを有つて貰いたいのである。現代我國の憂は、貧富階級の闘爭以外に、所謂政治に衣食する政治家と、新思想に憧憬する思想家の闘爭にある。新思想を奉ずるものが是か、舊來の保守思想に囚はれたる政治家が非であるか。しかしその政治家も曾ては閥族や、官僚の時代後れなるを痛罵した新思想家であつた。廻る因果の小車は果して誰を決定的勝利者たらしむるか。時はよくその審判者であらうが、固有の日本精神などと囈語を並べておるうちに、脚下から起るべき旋渦が起つたら如何にするつもりか。新日本の將來はこの思想家と政治家の決戰の結果に俟たねばならぬ。

思想と評論



「思想問題」と哲學的精神

文學博士　朝永三十郎

一

私は此處で現下の所謂「思想問題」の內容に立入つて論じやうとは思はない。其れは目下の吾邦に於て非常に重要なことであるとは思ふが、併し其れを研究する餘裕を有たぬ私は之を論ずる充分の自信を有たぬ。それで私は唯其最一般的な形式上のことに就て一言しやうと思ふ。即ち思想問題に就て國家なり思想家自身なりに依て取られて居る二三の態度に就て少しく考へて見たい。

思想問題に關する今日の流行語中最目立つものは言ふまでもなく「危險思想」といふ語である。私は第一に從來如何

なるものが事實上主として危險思想と考へらるゝ傾向を有したか考へて見て其れが極めて廣い意味に於ての哲學的精神の産物であつたといふことを見出す。それで私は何故に其れが危險思想と見らるゝかを考へて、而して其れが果して正當なことであるかを見、次に眞に危險思想と言はるべきものは何であるかを考へて見たい。

尙ほ次に盛に流行する言葉は『世界の大勢に協調する』とか『世界の新趨勢に順應する』とか或は之に類似した意味の語である。これは普通進歩派と稱せらるゝ側の人が屢自己の態度を表示するに用うる語であると言へると思ふが、之に對する普通保守派と呼ばるゝ一派に於て之に反對の態度を示す言葉にはこれ程目立つた新流行語はない樣に思ふ。國粹保存若くば國粹尊重といふ語は最正しい立場を示すに適切であるかとも思ふ（其理由は後に述べやうと思ふ）が、併し舊來長く慣用された語であるため刺戟性を失つたと感ぜらるゝ結果か今日は俠客の團體の名稱位に用ゐらるゝのみで餘り流行しない樣である。傳統尊重、若くば之に類似の語は其れよりも頻繁に目擊する。兎に角意味に於ては、傳統其者、歷史其者に價値を置いて、之を棄てゝ徒らに世界の大勢や新趨勢に走るは危險であるといふやうなことが主張されて居る。但し進歩、保守と云へば多くの場合直ちに褒貶の意が附隨して居る樣に思ふが、併し私は此處ではさういふ意味はまだ毫も含めて居ないといふことを斷つて置きたい。双方の態度にどれ丈けの理が含まれて居るかを見ることがこれから考へて見やうとする問題の一部である。尙ほ、言ふまでもなく此の如き二樣の態度の對立は特に今日の我邦に限られた現象でなく、何れの邦、何れの時代にもあるのであるが、併し此度の世界的大變革を機として其れが特に顯著に現はれて居るといふことは言ふまでもない。是等二樣の態度は畢竟大勢、新趨勢、歷史又は傳統といふことを多き若くば少き度に於て價値判斷の標準として成立つて居ると見ねばならぬ。それで私は第二に其等が價値判斷の標準として果して正當なものであるか、若しであるとすれば如何なる程度に於てゞあるかを考へて見たい。此問題は第一の問題と密接に關聯して答へらるべきものである。私は此二つの問題をば哲學の學徒としての立場から見て行かうと思ふのであるが併し其れは又た後に次第に明かになるであらう樣に、一般に學徒としてさう考へねばならぬことであると思ふ。尙ほ

引例及び說明材料の大部分で西洋哲學史より取られて居ることは私の專門上已むを得ない結果として豫め諒恕を願つて置きたい。

二

事實問題と價値問題とを峻別するといふことは哲學上非常に重要なことゝ考へられて居る。此處で事實といふは思惟、意志、感情に亘つた心理的事實を意味する。吾々が現實に如何に思惟し、意志し、感情するかといふ事實の記述、若くば如何にしてしか思惟し、意志し、感情するやうになつたかといふ事實の說明に依ては、吾々が如何に思惟し、意志し感情せねばならぬかといふことは論定することは出來ぬ。これは今日哲學の學徒の間に於ては殆んど『トウルイズム』であると言つて差支ないと思ふ。

此事を明確に主張して其れを哲學の出發點としたのはカントであつて、彼は之に依て事實の記述又は說明に依て哲學の中心問題である眞、善、美、の價値問題を論究せんとして居た從來の哲學を根柢より破壞して全く新しい基礎の上に哲學を打建てたのであるが、併し其れは單に哲學問題の論究のみに限らず、吾々の日常生活に於ける價値判斷にも適用されねばならぬことであり、而し現に或程度までは適用されつゝあることである、而して殊に藝術、宗教、道德、科學等の諸領域に於て文化の進歩に大なる貢獻をなした廣き意味に於ける思想上の偉人、就中哲學者に依て特に目立つて實行されて來て居ることである。吾々は日常の眞僞正邪の判斷に於て常に事實を其儘認容せず、何等かの當爲（ゾルレン）の標準に訴へて之を是非褒貶しつゝある。正邪善惡といふ概念が既に共判斷が少くとも直接當面の事實にだけは囚はれて居ないといふことを含んで居る。然らざれば其れは正邪善惡の判斷とは言へない譯である。唯日常生活に於ける此の如き價値判斷に於ては多くの場合當爲の標準が尙ほ事實に支配されて居ることが多い。即ち經驗的に事實的に成立つて居る個人的の需用、利害、又は好惡、社會的の傳統、慣例、又は約束といふ樣なものをば漠然と多き若くば少なき度に於て不動なる當爲の標準として直接當面の事實を是非するといふ場合が多い。唯嚴義に於て（藝術、宗教、道德、科學等の凡てに亘

つて）思想家と呼ばるるものが思想家として立つ場合に（思想家と雖も日常生活に於ては多く常人と同樣の考へ方をして居る、）是等の需用や利害や傳統や慣例や約束やをも彼等が絕對的價值を有すると思惟するところの當爲の標準に訴へて明確なる意識を以て批判せんとする。常人と雖も必然事實に盲從して居るのではない、絕えず事實に對して是非の判斷を下しつゝあるのであるが、併し其是非の標準其者が更に他の事實に基いたものであることがあり、若くば、事實が量に於て夫である—即ち多數者が一定の意見を有する—か、力に於て强い—即ち或有力者は權威者が一定の意見を有する—かの場合には、當爲が威力を失なつて或は事實と妥協し、若くば事實に屈從して所謂『長いものには卷かれる』樣な結果に了ることがあるのである。思想上の偉人に本質的な資格の一は正に、事實が量に於て如何に大であつても力に於て如何に强くとも、其れに對して當爲の威力を屈せしめない點にある。宗教上、道德上、藝術上、及び科學上の偉人は皆な大なる若くば强き事實に對して當爲の權威を維持顯揚した人々であるが、其れが最顯著に且つ明確に現はれて居るのは哲學者に於てゞある。

三

哲學は事實として成立つて居る、量若くば力に於て大なる人生觀及び世界觀に囚はれて居た個人精神が思惟上明確に自己內面の當爲に目さめることに端を開く。希臘哲學出生以前に於ても既に、次第に傳統の支配を脫しつゝあつた抒情詩人、箴言詩人、七賢人等の宗教的、道德的、藝術的良心に依て事實として成立つて居た宗教的觀念、道德、藝術等が改造される端は開けて居たが、其れが更に徹底して世界觀其者が論理的當爲の要求に應じて改造され始めし時に、或は世界其者が凡ての人が感性知覺に映ずる儘の姿に於て實在であると思惟して居た概念的に改造され始めし時に、哲學は生れ出でたとされる。近世哲學の出生に先つて既に神秘家、宗教改革者、政治論者、自然研究者等に依て、宗教的、道德的、理論的良心は次第に事實上成立つて居た舊教教權の拘束を離脫しつゝあつたが、併し彼等は未だ事實上成立つて居た聖書の證權や、物體界の存立を認むる感性的世界觀中に對しては是非の判斷を下すことは出來なかつた。デカート

が出でゝ是等一切の事實を理性の訴庭に拉し來つて其認容を得ざるものは絕對的に是認せぬといふ態度を取るに至て近世哲學は初めて純なる形を以て生れ出てたのである。

斯して現はれた哲學者の世界は當爲の要求を充たす世界であらねばならぬ世界である。彼等は單に當爲の要求に依て思惟上、社會及び人生を改造せんとしたのみでなく、世界其者を改造せんとした（哲學の世界は常に思惟の世界である無論其思惟は製作や行動となつて現はれ若くば之に影響することはあるが、併し其れは最早哲學の本領に屬せずして藝術、道德、宗教に屬する）。事實上吾々が認むるところの世界は概念的思惟の要求を充たすことは出來ぬ。之を充たさんが爲めには我々は或者を概念的に構成し案出せねばならぬ。而して此構成された或者が眞在と認められる。哲學者の眞在は理論上しか考へられねばならぬといふ要求を滿たさんが爲めに構成されたものであつて、此意味に於て其れは大體上論理的當爲の實體化 Hypostasirung であつた。（此處で特に大體上といふ理由は眞在の概念の構成に關與するものは事實に於ては必ずしも論理的當爲のみでなく、時に美的當爲や實踐的當爲の混入することを免かれなかつたからである。たとへば『エレア』が眞在を完全なる球體と考へたのは理論的要求の結果といふよりも寧ろ美的要求の結果であつたと考へられる。）斯くて哲學は、古代に於ては、單に實踐的當爲の要求を徹底せしめた結果事實上大多數の人が重要な價値を置いて居る欲求の對象の絕對的無價値を力說して事實上成立つて居る一切の世間的諸善を否定した『ストア』の樣なものを出したのみならず、又た論理的當爲を徹底せしめて事實として成立つて居る此生滅轉化の世界其者をば根柢より否定し之を『非有』と斷じて無宇宙論を說くに至つた『エレア』の如きものをも生み出した。近世に入つても、常識に依て其自身に於ける客觀的實在と考へられた外界は哲學に於ける理論的當爲の徹底の結果次第に其自存性を失つて第一にデカート、ロック等に於ては色聲香味等の感性的性質（即ち所謂『第二性質』）が主觀的となり、次いでカントに至つて時間性、空間性、因果性、實在性までも主觀的とさるゝ樣になり（此處の主觀的は前の『第二性質』の主觀的とは多少意味は違ふが）唯僅かに超感的感實體としての物自體の概念のみが當爲の排斥を免かれて居たが、フィヒテは更に

實驗的當爲の要求を徹底せしめんが爲めに之をも否定し去つて徹底した唯心論を說き、獨逸唯心論的諸體系の端を開いた。

併し此の如きは單に顯著なる一二の實例に過ぎない。其他の何れの哲學と雖も當爲を以て事實に臨み、多き若くば少なき程度に於て事實上の世界を改修し改造せざるものは無い。無論是等の思想が內容上如何ほど眞として認容さるべきかは別の問題である。事實を批判し、改修し、若くば否認した哲學も、一旦現はれた以上其自身一の事實である。之を其儘認容するは哲學の生命たる理性の自律、當爲の權威に棄權する所以である。又た哲學に於て一旦否認せられた事實が更に又た異なつた意味を以て改造された世界中に復活し來り得ぬであらうかといふことも此處の問題ではない。此處では唯、如何なる事實も單なる事實としては當爲の矢面てに立つことは出來ぬ、當爲の前には一切の事實は單なる事實としては全然力を失はねばならぬといふことが、哲學の根本精神であるといふことが明かになれば充分である。バークレーが唯心論を說いて形體界は根柢よりして吾々の表象であると說いたときに、ドクトル、ジヨンソンが石を蹴つて之も汝の表象かと叫んだといふが、其處にジヨンソンの面目は躍如として現はれて居るが併し其れは又た同時に哲學の根本精神に對する彼れの全然の無理解を示して居る。

四

尤も、當爲の要求に應じて事實上の世界を改造するといふことは哲學のみの特有では無い。詩人の世界も、宗教者の世界も、科學者の世界も、其れ〳〵の當爲に依て改修され、改造された世界である。殊に科學者の世界は此改修が思惟の形を以て自意的且つ方法的に行はるゝ點に於て哲學者の其れと同一の性質を有して居る。例へば物理學者の世界は理論的良心がしかあらねばならぬとするところの世界である。其旋渦元子といひ電子といふ樣な物質の概念はあるべきものである。物理學者は思惟上當爲に依ての世界の改造者である。若し物理學が唯吾々があると思ふことの記述にすぎぬとすれば、其れは物理學でなくて單なる物象記述に過ぎないであらう。同樣の事は他の學に就ても又た言はれ得ると思

ふ。たとへば若し法學が事實上の現行法を不動の標準と見て單にその解釋又は運用のみを事とするならば其れが學といはるべき意義は餘程弱められて寧ろ法律の運用術即ち言はゞ運法術とでも名けられ得べきものとなるであらう。此の如き新造語其者は專門上より見たならば非常に不都合のものであらう。又た法律の運用に於ても當爲の働きは絕えず必要であるに相違ない。殊に法文の解釋に當て之に普通とは異なつた意味を與へるといふ樣な場合には、當體的には當爲に依ての法律の改造と同樣のことを爲して居るのである。從つて此處に所謂運法術と法學とは具體的の場合には常に密接に結付いて居るに相違ない。併しながら大體上現實の國家がしか意志するといふ事實を表示すると考へらるべき現行法をば左右すべからざる不動の標準なるものと、當爲を以て現實の國家の意志に臨み必要の場合には之が改造をも論じ得べきものとを概念上區別するといふことは學なるものゝ品位を維持せんが爲めに緊要なることではあるまいか。之と同樣に若し經濟學が現在の經濟組織の事實に囚はれて當爲を以て之に臨むことが無いとすれば、それは經濟學ではなくして言はゞ單なる運財術とでも名けらるべきものに過ぎないと言はれ得るであらう。斯くて苟くも學と呼ばるべきものは皆思惟上有意的且つ方法的に當爲に依て事實を批判することをば共通特徴として居ると言ふことが出來る。

併し是等の特殊學は哲學が尙ほ疑問とするところの種々の假定又は豫想の上に立つて居る。哲學は特殊學が疑問とせずして假定又は豫想して居るところのことを更に進んで疑問とする。尤も哲學と雖も其自身全然無豫想であり得るや否やは疑問である。哲學は絕對的に無豫想でなければならぬといふ主張はあるが、併し實際に此要求を完全に充たしたものは無い。併し出來得る丈け豫想を少くせねばならぬといふ要求は哲學の生命である。而して事實上又た其れは、日常生活に於ては無論のこと他の特殊學と雖も問題とはせずして認容して居る種々の豫想をば常に問題として居つて、此處に哲學の獨特の領域があるのである。而して豫想若くば假定は事實上多くの人に依て思惟、意志、或は感情せられて居ること、若くば凡ての人に依て思惟、意志、或は感情せられて居ると當該思想家に依て考へらるゝところのことに外ならぬ。從つて之を問題とする哲學は他の學に比して一層嚴肅の態度を以て事實に臨み一層當爲の要求を徹底せしむるも

のであるといふことは否定することは出來ぬ。

斯くて吾々は日常生活に於ても絶えず或程度に於て當爲を以て事實に臨みつゝあり、更に藝術、道德、宗教、特殊學業の圏域に於て功業を立てた人に於ては一層其程度を高め、而して哲學、殊に其に於て獨創の見を立てた思想家に於てそれが最徹底するといふことが出來る。從つて事實問題と價値問題との對立は哲學に於て最峻嚴であるといふことが出來やう。カントのかの區別は畢竟、斯くして吾々が日常爲しつゝある、而して哲學が最高度に於て爲し來つたことを反省して、之に依て彼れ以前邪途に踏み迷つて居た哲學を正道に呼びもどさんとしたものに外ならないのである。尤もカント哲學の眼目は其自身當爲を以て事實を加工改修し世界人生を改造することでなく、吾々が依て以て加工改修するところの當爲其者の研究であつて、其處に彼れの哲學の一特色が存するのであるが、併し其事に立入るは吾々の當面の問題には關係はない。

斯くて私は、思惟上有意的且つ方法的に當爲の要求を徹底せしむるといふことは、他の特殊學に於ても或程度に於て且つ一定の圏域に於て、行はれて居ることであるが、併し哲學に於て最顯著に現はれて居るといふ理由を以て、之をば廣き意味に於て哲學的精神と呼び、他の學も亦此精神が徹底する度に應じて哲學的であると考へることが必ずしも事實を誣ゆる所以でないと思ふ。

五

さて斯の如く哲學的精神は思惟上當爲の要求を徹底せしめんとするにありとし、哲學は最徹底した形に於ける、當爲に依ての事實の批評、改修、若くは其當爲其者の研究であるとすれば、哲學的精神の產物殊に哲學が當爲の是認を經ざる、若くば經あたはざる唯の事實としての思想、若くば此思想に基礎を置いて居る或權威に對して常に多少の危險性を帶びて居るといふことは其本領上當然の結果でなければならぬ。宗教、道德、特殊學のやうなもの—殊に是等の領域に於ける革新や新發見等は尙更のこと—事實の繫縛に對する當爲の覺醒として、單なる事實上の思想若くは之に基いた

權威に對して或程度の危險性を帶びて居るといふは自然の結果でなければならぬ。個人又は或階級の欲望といふが如き唯の心理的事實を基礎とした思想、又は此思想に基いた權力や權勢に對しては一般に厳粛なる宗教や道徳や其存在を危ふするものでなければならぬ。啓示に基いた自然觀を不可爭とする宗教者に取ては一般に自由なる自然研究は危險思想でなければならぬ。日蓮や親鸞やは當時の教權若くば之と結付いた政權に取ては危險人物であつた。孔子春秋を書いて亂臣賊子恐れたとあるが、其恐れたといふことか何處まで事實であつたかは別問題として、兎に角春秋の筆法よりすれば當時の權力者權勢者の多數は或度に於て亂臣賊子であると言はねばならぬであらうし、而して彼等に取ては孔子の思想は思想上に於ける其立脚の基礎を脅かすものであるといふ意味に於て危險思想であつたと言へる。大義名分論や勤王論や幕府に取ては危險思想であつた。アリストテレース・プトレマイオス説を公認説として居た舊教々權に對してはコペルニクス説は危險思想であつた。法學や經濟學やも其れが眞の意味に於て學であつて私の謂ふ單なる運法術や運財術でない限り、單なる事實の上に基礎を置いて居る法的又は經濟的の權力者又は權勢者に對しては當然或危險性を帶びるべきものである。併し是等の宗教や、倫理や、特殊學やが尙ほ認定して居るところの根本豫想をば更に疑問として一切の事實を理性（此處で謂ふ理性は理知のみでない、廣く利、意、情の三面に亘つた當爲を含む）の訴庭に拉し來つて當爲の審判に服せしめねば止まぬといふ、哲學的精神が最徹底した結果たる哲學の危險性は更に普遍的でなければならぬ。即ち其危險性は宗教、道徳、政治、法律、特殊の凡ての圏域に亘つて居なければならぬ。例へば、若し時間や空間や因果律や實體恒存律やを素朴的に客觀的實在と信じて此豫想なくしては物理學は不可能であると考へる物理學者があるとすれば、此豫想を疑問とする、或は更に進んで此根本豫想を否定するところの哲學は彼れの物理學に取ては物理學の基礎を根柢より破壞するところの危險思想でなければならぬ。其他哲學が政治、法律、道徳、宗教等の問題に接觸する場合に就ても同樣のことが言はれ得る。尤も事實に於ては多くの哲學者は是等凡ての圏域に其當爲の徹底を推擴けることが出來て居ない。從つて其所謂危險性は斯の如き廣き範圍の凡てに亘つて表面に表はれはしない。併し其結果の

如何に拘らず、是等種々の圏域に對して獨斷的臆想を許さぬ、或は少くとも之を最小限度まで還元せねばならぬとする態度其者、他が不可疑の出發點とするところのことを疑問とするといふ態度其者には、必然的に多少の危險性を伴はねばならぬ。而して現に其或圏域に於ては哲學は屢危險視せられて疾視、壓迫、若くは迫害の對象となつて居る。

之を西洋哲學史に就て見れば斯の如き疾視や壓迫や迫害の起つたのは多くは宗教問題に就てゞあり、其疾視者壓迫者又は迫害者は主として教權、若くは之と結付いた政權又は群衆であつた。これは一方に於ては宗教問題が哲學の根本問題と最直接の關係を有し如何なる哲學者も之に接觸せざるものは殆んど無いといふことゝ、他方に於ては基督教々權—これは無論中世及び近世に限つたことであるが—が強き不寛容の傾向を有して居たといふことゝの自然の結果であらう。無論此の如き壓迫や迫害の現象は輓近に近くに隨つて次第に減少して來て居るが、併し第十八世紀までの重要な獨創的の哲學にして多少の度に於て斯る壓迫や迫害を受けぬものはないと言て差支ない。ソークラテース、ブルーノーの如き殉道的哲學者の場合は言ふまでもない。ロックの樣な志士的風格、プラトーン、フィヒテ等のやうな改革者的氣魄に富んだ思想家、溫和なる隱遁的學究の外裝の內面に凛乎たる殉道者的氣魄を奧深く藏するスピノーザの場合の如きも無論である。世の非議に依て攻學と瞑想とが妨害さるゝことを極端に恐れて百方韜晦に力め、「祖國の宗教、法律、習慣に順依せよ」といふことを其實踐道德訓の第一に揭げ、ガリレイの所刑を聞いて四ケ年に亘つた苦心の結果たる大著(Le Monde)をば永久に世界より埋むり去つたほどのデカートの哲學すら尙ほ、「ビゴット」や舊哲學を株守する教授やの爲めに危險思想視せられて讒謗罵詈の標的となつたのみならず裁判沙汰まで惹起すといふ運命を脫れなかつた。「調和」の哲學者として、科學と基督、教哲と史的信仰、而して更に進んでルター教と羅馬舊教とまでも調和せんとし、政治家的素質を有し處々の官庭に出入して其特別の眷顧を受けて哲學者としては稀有なる高貴の爵位官職を贏ち得たライプニッツすら尙ほ異端の嫌疑を受け「無信者」と呼ばれて寂漠の晩年を終つたといふ。カントの「宗教論」は發賣禁止の厄に遭ひ、その宗教に關する講義は禁ぜられた。ナポレオン戰敗後の反動期の獨逸殊にプロイセンの政府に歡迎せら

れ、現存の國家、政體、宗教を擁護すべき唯一の哲學としてプロイセンの官僚哲學とまで稱せられたヘーゲル哲學すら尙ほ、其裡にはフリードリッヒ・ヰルヘルム四世が「ヘーゲル汎神論の龍齒 Drachensaat と呼んだ危險思想の種子を藏することが發見せられて異端視せらるゝを免れなかつた。但し前世紀に入つてからの哲學に對する反對は壓迫又は迫害といはれ得るほどのものではない。ヘーゲルの場合もさうである。總じて哲學に對する壓迫又は迫害といはるべきほどの著しき酷遇は、共に第十八世紀末に起つたカントに對する其れと、フィヒテか無神論々爭に依てイェナ大學を追はれしを終りとして前世紀以後には大體跡を絕つたと言ふことが出來る。而して其れは又た賢明な、且つ正當なことであつた。何となれば、第一に、斯の如き迫害や壓迫は到底其企圖した効果を奏し得るものではないから、第一に、此の如き思想は—若し其れが眞に當爲に基礎を置いて居るものであるならば—決して眞の意味に於て危險思想と言はるべきものではないからである。

六

第一に當爲に基礎を有する思想をば單なる事實としての思想若くば何等かの外的權威の力に依て壓伏若くは禁壓することは絕對的に不可能でなければならぬ。行動の世界に於てと異なりて思惟の世界に於ては當爲の矢面てに立ち得る事實も權威もない筈である。當爲の上に立つ思想をば事實又は權威の力に依て禁壓することは當爲に徹底せんとする哲學的精神の存する限り不可能でなければならぬ。而して學と稱せられ得るものは皆な或程度、或範圍に於て此精神の上に成立つものであるとすれば、其れは又た凡ての學を撲滅せざる限り不可能でなければならぬ。尤も、外的權威は思想の外的發表を禁壓することに依て或程度まで其れの傳播を妨害することは出來る。併し其れは眞に或程度までに過ぎぬ。而かも單に一時の間に過ぎぬ。何となれば、之を禁壓するといふことは其れが或程度に於て既に發表されて居るといふことゝ、其內容が或程度に於て何人かに知られて居るといふことを豫想する。併し當爲は力である。若し眞に當爲の上に立つ思想であるならば、それが如何なる程度にもせよ一旦發表せられた以上、如何なる妨害に遭はうとも其當爲自身に

具はる力に依て何時かは人心を征服しなければ已まない筈である。而して歷史の事實も亦之を實證して居る。古來如何なる權威が正理の上に立つところの思想を外的に抑制することに成効したか。

のみならず、哲學的精神若くば一般に學に伴ふ危險性は當爲の審判を經ざる、若くは經あたはざる唯の事實上の思想若くは之に基礎を置いて居る權威の生存又は繁榮に對してこそ危險性であるが、正理の上に立つ思想若くば權威に取ては毫も危險性である理はない。眞に當爲の試驗に耐え得る事實又は權威であるならば哲學若くは哲學的精神を恐れ若くば危險視する理由は少しも無い。其れは亂臣賊子でない以上孔子の春秋を恐るゝ理由は少しも無いと同樣である。

尙ほ其れのみに止まらない。其等の事實、權威等は哲學若くは哲學精神的に依て初めて確實な基礎を得來らねばならぬ。而して哲學の最重要な職分は實に此積極的の基礎づけにあるのである。哲學は一切を疑つて出發する。此意味に於て其れは唯の事實及び其上に立つ一切のものゝ根柢を危ふするものでなければならぬ。併し哲學は疑はんが爲めに疑ふのではない、單に事實を否定せんが爲めに之を試驗するのではない。事實の中に於て眞僞正邪を辨別せんが爲めに、疑ふべきことゝ疑ふべからざることゝ、否定すべきことゝ否定すべからざることゝを明確に辨別せんが爲めに疑ふのである。デカートは已れが肉體を有することも、神の存在も、外界の存在も疑つた。併し其れは是等の事實をば能ふべくんば更に當爲の審判に耐え得る樣な確實なる基礎の上に置き、且つ之に關して事實上成立つて居るところの見解が如何なる程度まで當爲の要求を充たし得るかを考査せんが爲めであつた。カントは彼以前の哲學に於ける種々の獨斷的豫想を排するといふことを其哲學の根本特徵の一として標榜して出發したが、併し其眼目は事實として成立つて居る、而して彼れ以前の哲學に於て基礎を危ふされて居た種々の形の文化現象に强固なる基礎を與へんとするにあつた。彼はヒュームの懷疑論の破壞的結果よりして自然科學を救護した。英佛の感覺論、快樂論、決定論、要するに自然主義の破壞的結果よりして倫理を救護し、人間の自由と道德の尊嚴とを回復して。佛國啓蒙哲學の唯物論、無神論、無靈魂論よりして宗敎的信仰を救護した。第十八世紀の自然科學的、機械的世界觀と内心の宗敎的信仰及び自由の要求との衝突乖離より

して多くの眞摯なる精神を救出したものは實に此哲學であつた。「道徳の根據は破壞せられ、義務の概念は凡ての字典より抹殺せられ了つた」時代に於て「義務と徳とが可能なること」を示して「頭腦と心臟との分裂」の苦みよりフィヒテを救出したものも、盲目的機械的の大自然、巨大な、死んだ、無際涯な、吾々の四肢を粉碎する爲めに容赦もなく冷酷に廻り行くところの「蒸汽機關」より吾々を解放して「絶對不眠の三週間」の絶望と煩悶とよりカーライルを救出したのも此哲學であつた。斯くてカントは此哲學に依て科學と宗教と道徳と人間の品位と貴嚴とを救護し、更に此根本思想に基いて國家や法やをも基礎づけんとした。尤もカントが此最後の企圖に於て如何なる程度まで成功したか、彼れの見解が如何ほどまで正當であるかは別の問題である。實を言へば此方面に於ては彼れは尚ほ第十八世紀に一般的な誤まつた思想を脱し得て得ないのであるが、併し第十八世紀に於ては單に多數個人の生存と幸福との爲めの方便としての寄合世帶以上の意義を有せぬと考へられた國家が、其自身個人を超越した儼然たる目的と意義とを有すると考へらるゝに至つた。次期に完成した思想に道を開き與へたものは實にカント哲學に外ならなかつた

是等は實に一二の實例に過ぎない。之を哲學史に徴するに極めて僅少な懷疑論者を除く外、多少の度に於て、有意若くは無意に、此の如き積極的事業を其本領とせぬ哲學は無い。かの前述の樣な意味に於て危險性を帶びると考へらるゝ哲學に於ける消極的契機は畢竟、此積極的結果に達せんが爲めの必然的前階に外ならないのである。而してこれは單に哲學に就てのみならず、又た凡ての學に就ても言はれ得ると思ふ。

反覆してカントを例に取て言ふ。カントが前述の如く科學、道徳、宗教等を第十八世紀の懷疑思潮、唯物思潮、自然主義思潮の破壞的結果より救護して之に確實な基礎を與へ得たのは一應所謂「危險思想」を經由し、常識若くは從來の科學、道徳、宗教に於て不可爭と考へられて居た多くの事實を犧牲とした結果に外ならなかつた。自然科學を救護せんが爲めには彼は一先づヒュームと等しく因果概念の客觀妥當性と因果律の必然性とを疑つたのみならず、從來常識は言ふまでもなく凡ての認識論の共通豫想となつて居た模寫說を根柢より破壞し、普通の自然科學者が不可爭のことゝ認め

て居た時間性、空間性、因果律、實體恒存律等の客觀性を否定して悟性をして自然の立法者たらしめた。道德を救護せんが爲めには、常識若くは從來多數の哲學的及び神學的倫理說が採用して居たあらゆる形の結果論、他律道德說、權威道德說を根本的に排斥した。宗教の救護に當ても亦た宗教的意識の自律を力說して、理性は自然及び道德の自律的立法者であるのみならず又た宗教的眞理の自律的生源でなければならぬとして、啓示をば單に啓示であるといふ理由を以て史的信仰をば單に史的であるといふ理由を以て信ぜねばならぬとすることをば迷信として根本的に排斥したのである。而して是等三樣の消極的契機はたしかに舊來の模寫說や素朴的實在論の上に立つて居る通俗の自然觀や、通俗の道德觀及び宗教に取ては所謂危險思想であつたのである。

　而して此の如きは單にカントの場合のみに限らない。其れは單に、凡ての哲學に存ずる共通性がカントに於て特に顯著に特に鮮かに現はれて居るといふに過ぎぬ。先づ一切の傳統的宗教を疑つて初めて宗教的信仰を確實なる基礎の上に置くことが出來る。先づ世界の現實性、人生の意義を根底より疑つて初めて、世界は確實なる基礎を具へ、人性は眞面目なる意義を有つて新たに展開し來るであらう。而して此間に單に事實上に於て價値を有するとさるゝのみであつて當爲の審判に耐えることの出來ない多くのものが犧牲にされることがあるといふことは實に已むを得ざることでなければならぬ。否なそれは實に文化の進歩上當然拂はれねばならぬ犧牲である。身を捨てゝ初めて浮ぶ瀨を見出す。これ即ち哲學的精神の本領であり、運命である。思想も人の性格と同樣、數々の試錬を經、數々の犧牲を拂ひ、死生の間に出入することに依て偉大と堅實と深邃とを加へ來る。カント哲學の偉大と堅實と深邃とは實に、凡庸の精神が到底疑ふ能はざることを疑ひ、到底拂ふ能はざる犧牲を拂ひ、到底耐え能はざる試錬と危險とに耐えることに依て初めて贏ち得られたる報酬に外ならぬカント哲學出現以來既に殆ど一世紀半を經過した、而して其間宗教、政治、藝術自然科學等に於ては數々の新たなものが生れ出で其根底には幾多の變遷や變革があつたにも拘らず、而して是等の變遷や變革よりして幾多の脅威を受け動搖を感じたにも拘らず、尚ほ其根本精神に於て儼として動かないといふことの重要な原因の一は實に

此大なる犧牲と冒險とに外ならぬ。脅威や動搖に對して充分に安全なる充分に强固なる思想は決して獨斷を墨守することに依て達せられない、哲學的精神に充分に自由なる活動の餘地を與へることに初め達せてられる。

而して國家我國に於ては思想對敎權の關係は目下問題となつて居ないと思ふから此處には唯思想對國家の問題のみに接觸するなるものが思想に基礎を有して初めて存立し得るものであるとすれば。而して國家なるものが理念を體現して初めて存立の意義を有し其れに特有なる文化を離れては意義を有せぬものであるとすればーこれは尙ほ特別の述論を持つて肯定され得ることであらうがし、其れは自己の健全なる存立及び發展の爲めには、其事實に對する當爲の權威を充分に認め、哲學的精神に充分なる自由活動の餘地を與へねばならぬ。文化は事實に對する當爲の權威を離れては成立することも進歩することも出來ぬ。眞に堅實なる思想は哲學的精神の徹底を待たずしてば成立することは出來ぬ。反覆して言ふ、哲學的精神或は一般に當爲に徹底せんとする精神は當爲を以て事實に臨む結果、單なる事實として現存する或ものに對して或危險を有するといふことは可能であるが、併し其れは人類文化の進歩と國家の存立發展に缺ぐ可らざることである。之なくしては人類文化の進歩は止まり、國家の生命は枯渴する。哲學的精神は國家の良心である。從つて時機によつては又た其れに對する諫爭者である。哲學的精神が此の如き本領を有する以上、其自身としての國家の嫌忌に觸れることがあるといふことは初めよりして覺悟して居なければならぬことであるが、併し之と共に又た國家の側よりしては其れが眞にあるべき國家たらんが爲めには、哲學的精神に對して充分の活動の自由を與へ虛心坦懷に其批評に聽くことが必要である。

七

無論當爲の上に立つと考へらるゝ或思想が眞に當爲の審判に耐へ得るものであるか否かは別の問題である。前にも述べた樣に是等の思想と雖も吾々は更に之を事實として當爲の試檢に服せしめねばならぬ。唯當爲の上に立つと考へらるゝ思想を審判し得るものは當爲其者の外にはあり得ない。ベータレーの唯心論に對して眞に誤謬の宣告を下し得たもの

は常識家ジョンソンでなくして學究カントであつた。ナポレオンの强大なる政權や武威を以て之に臨み著書の禁抑や搾口やの手段を盡しても尙ほ彼れの眼上の瘤であつた「イデオロジスト」の勢力を如何ともすることが出來なかつた。舊教々權の至上權威に基いた傳統派(トラディシヨナリスト)の之に對する反對も無効であつた。「イデオロジスト」をして存在の理由を失はしめたものは思想上よりして其根柢となつて居るところの第十八世紀の感覺論を打破すると共に其思想中取るべきものと然らざるものとを辨別したメーヌ・ドゥ・ビラン及びヴィクトル・クザンであつた。

尙又た、當爲の上に立つと考へらるゝ思想が互に相反對矛盾するといふことも事實上常に起ることである。併し若し双方に唯々當爲に徹底せんとする無私の精神さへあるならば自由なる論究に依て何時かは双方互に相一致し得る點が發見さるべきである。若し双方共正當の要求の上に立ちつゝ尙ほ反對せねばならぬといふ樣な思想があるとすれば、其れは現在双方が立脚して居る立場からは統一することは出來ないが、併し更に一段高き立場からは互に融解せられ其處に止揚(アウフヘーベン)せられて一段高級の思想を産み出すべきものであつて、人類の思想及び生活の進歩の道程に必然的な反對であると見るべきである。斯の如き反對は重要な意義を有つた反對であつて、其存在は決して其れを有する人類の爲にも決して悲むべきものでは無い。吾々が無私の精神を以て其反對を戰はせつゝある間に其れの融解と止揚との道はおのづから開けて來る、其何れにも justice をなす樣な一段高等な立場がおのづから發見されねばならぬ。而して思想の進歩と發展とは其間に行はるゝのである。

斯くて、誤まつた思想を匡正するにも、互に反對した思想の間の正邪を判定し若くは其統一、調和、融解を求むるにも、當爲に徹底せんとする哲學的精神を銳敏にして之に反するといふことの外に何等の方法も無い。從つて思想に對する國家の要務は、自ら內容に關して思想に干涉し若くは外的に其統一を企圖するといふ樣なことでなくして、出來る丈けあらゆる方面に亘つて當爲に徹底せんとする精神を涵養すべき機關を整へるといふことでなければならぬ。國家が大學を設けて研究の自由を許すといふことは實に此の如き精神に基くものでなければならぬ。無論當爲に基礎を有すると

して現はるゝ思想と雖も前に述べた樣に其内容に於ては必ずしも正鵠を得て居るとは言へぬ、而して一般民衆は無論のこと所謂有識階級と稱せらるゝものと雖も大部分は必ずしも鋭敏なる哲學的良心を有つて居るとは言へぬ、常に當爲以外の關係に支配されて取捨選擇をなし又は正邪無差別に附和雷同するといふ恐れがある（之に就ては次節に述べる）以上、題目によつては之に關する思想の發表の方法に幾分の制限を設けるといふやうなことは已むを得ぬことであらう。併し其れは前述の根本精神と出來る丈け背馳せぬ樣爲されねばならぬ。但し其具體的の方法の如何といふやうなことは今の問題ではない、又た私が自信を以て論じ得べき範圍にも屬しない其れにはおのづから其人があらう。私は唯だ國家が哲學的精神或は一般に學に對して取る態度が凡て此の如き根本精神に依て決定されねばならぬといふことを述べるに止めて置く。

八

併し、哲學的精神の徹底に對する眞の勁敵は外よりして之を壓迫するところの教權や政權やでなくして寧ろ思想其者の內にある。外的權威は思想の發表としての外的行動を掣肘若くは壓迫することは出來るが併し思想其者には一指をも着けることは出來ない。之に反して若し思想其者の內に哲學的精神の徹底を鈍らし若くは掣肘するものがあるならば、其れは哲學的精神に取て最重大な敵であり。從つて又た前述の理由に基いて眞にあるべき國家に取つて大なる禍であり、即ち之に對して眞誠の意味に於ける危險思想でなければならぬ。然らば其重大な敵とは何であるか。

哲學的精神に對する重大なる敵とは一般的に言へば、言ふまでもなく有意無意の當爲無視か若くは當爲ならざるものを價値判斷の標準とすることかの二つでなければならぬ。併し前者に對しては特に言說すべきことはない。何となれば思想上の當爲無視は思想上の義務無視であつて、其れに對しては吾々は道德上の義務無視に對してと同樣、唯義務を尊重せよ、當爲の權威を認めよと反復する外に術はないからである。之に反して當爲ならざるものを價値判斷の標準とするといふことに就ては多少言說を費やす餘地があると思ふ。併し此處でも私は其當爲の內容に立入つて考查しやうとす

るのではない。唯最一般的な形式に關する考査に止めるのである。

最一般的に言つて當爲ならざるものとは何であるかと言へばそれは言ふまでもなく事實の外には無い。即ち事實を價値判斷の標準とするといふことが此誤まつた考へ方の本質である。而して事實が價値判斷の標準とされるには人間の自然の性情に基いて三つの重要な場合があると思ふ。第一は事實の新其者が其標準と見らるゝ場合、第二はその舊其者、第三はその多其者が其標準とされる場合である。第一の場合には唯々新奇な思想であるから尊といとせられ、第二の場合には唯々傳來の思想なるが故に價値があるとせられ、第三の場合には唯々多數の人がしか考へるが故に眞であると考へられる、第一の場合には盲目的の「新趨勢順應」即ち輕佻なる迎新主義が成立ち、第二の場合には盲目的の「傳統尊重」即ち固陋なる守舊主義が成立ち第三の場合には盲目的の「大勢協調」即ち思想上の事大主義が成立つ。世界の新趨勢といひ、傳統といひ、宇内の大勢といひ、其自身に於て價値判斷の標準となるべきものではない。成るほど、新奇なるものを歡迎するといふことも、舊きものに名殘を惜むといふことも、人間自然の性情である。群衆の力に動かされるといふことも群衆心理の法則である。併し其れは其自身に於ては唯の心理的事實に過ぎぬ。其れに依て直ちに價値を決定するといふことは事實問題と價値問題とを峻別せねばならぬとする哲學的精神に背反する。盲目的の新趨勢順應と盲目的の傳統尊重とは全然正反對の方向を取つては居るが、併し共に價値問題をば理性の法庭に訴へずして事實に依て決するといふ共通の出發點より出でたものに外ならない。而して群衆の思想は主として動反動の心理的必然性に支配されて時には多く新に傾き時には多く舊に傾くものであるから、思想上の事大主義は時には迎新主義と結付き、時には守舊主義と結付く。

今日の吾邦に於ては大勢順應論は迎新と結付いて居るが併し若し傳統尊重が勢力を得る時勢に於ては之と握手し得るのである。而して此三種の思想は哲學的精神に背反することに依て又た同時に國家、社會にも災すべきものである。即ち一國又は一社會内に於て舊に囚はるゝものと新に迎合するものとの兩者が主として勢力を得て群衆は只管此兩者の何

れかに附和雷同し、而して此兩者の間に立つて當爲に基いて公平に之を審判する哲學的精神がない場合には或は其れがあつても多數民衆が之に聽かざる場合には、其國又は社會は其れが成立する爲めの必須的制約たる共通の精神的結帶common moral bond を失なつて其統一は危うされねばならぬ。吾々は其通例としてソークラテス、プラトーン時代の希臘國家や革命前後の佛國を擧げ得ると思ふ。

而して哲學史の事實に徵すれば此兩極を排するといふことは哲學の重要な仕事となつて居る。其主なる對敵が舊に囚はるゝものであるか新に附加するものであるかは時と事情と哲學者の素質とに依て幾分づゝ異なつては居るが、併し皆な或比例に於て此双方の敵と戰つて居る。これは實に無批判に舊形式を墨守する保守思想と無批判に新を迎ふる輕佻なる學風とに對する二重の戰爭の爲めに生涯を奉げたソークラテース以來哲學者の傳統的運命、傳統的使命であつた。而してそれは實に哲學其者の本質と人間自然の性情との關係より起る必然の結果に外ならないのである。

九

事實上の新即ち所謂新趨勢が其自身價値判斷たり得るものでないことは明かなことであるとして、然らば新趨勢は特に顧慮する價値のないものであらうか。さうでは無い。何故かなれば、價値あるもの、當爲に合致するものは歷史的現實の中に漸次的に現はれて來る。事實は其儘直ちに價値あるものではないが、併し價値あるものは事實の中に次第に新たに現はれ出でる。從つて吾々は新趨勢に眼を閉ぢるだけ其れ丈け新しき價値あるものに眼を閉ぢることとなるのである。新趨勢は其儘黃金ではないが併し吾々が之よりして鑛滓を淘汰することに依て黃金を抽き出し得べき原鑛である。此意味に於て、而して唯々此意味に於て、吾々は新趨勢に對して絕えず注意を怠つてはならぬ。此意味に於て、新しきものに眼を閉ぢるところの固陋の保守思想をば飽くまで排せねばならぬ。新は其自身に於て絕對的の價値を有するものではないが、眞に達する最重要なる前階として重要なる相對的の價値を有する。

傳統尊重に就ても亦た之に類似したことが言はれ得る。事實上の舊或はそれが連綿して今日まで傳はつて居る傳統は

それが善であり傳統であるといふ故を以て決して價値を有すべきものではないが、併しその中には其れに具備するまことの價値の力に依て長歲月間の試錬と淘汰とに耐えて生存し來つた多くの高貴なるものを含んで居るといふ可能を有して居る。此意味に於て—これは唯言葉の問題に過ぎないが—傳統を唯傳統として尊重するといふ意味の傳統尊重の語よりも其中の價値あるものを尊重するといふ意味の國粹尊重の語が寧ろ正しい立場を表示して居ると言へる。吾々が種々の文化現象の歷史、若くは種々の邦土殊に自國の歷史の研究より受け得るところの興味の重要部分は實に吾々が其中に於て多くの價値あるものを見出し得るといふことよりして來るのである。哲學史に於てプラトーンやカントの哲學は言はゞ一種の傳統であるが、吾々が其研究に大なる興味を感ずるは單なる傳統としてでなくして其中に眞に價値あるもの眞に當爲に合致する多くのものを含むが故である。從つて歷史を無視して徒らに新に奔る者は此の如き價値あるもの〻多くを逸せねばならない。邦土又は民族の歷史に就ても同樣のことが言へる。此意味に於て吾々は唯外來の新奇を迎ふる輕佻なる新趨勢協調家を排して傳統尊重家に相當の敬意を拂はねばならぬ。無論其傳統が—或は之を特に目下の吾邦の問題と關係せしむれば我邦の傳統が、實際如何程純粹なるもの價値あるものを含んで居るかは別の問題である。私は唯純粹に形式上よりして盲目的なる傳統尊重が誤まつて居ると同樣盲目的なる傳統輕視が重大な謬見であると言ふのみである。

のみならず、若し傳統輕視家の間に次の樣な誤想があつて、其れが傳統輕視の意識的若くは無意識的の思惟動機となつて居るとすれば、其れは哲學に依て充分に匡正されねばならぬ。其誤想とは即ち一般的者又は普遍的者 das Allgemeine のみに價値を置いて個性的者 das Individuelle と獨異性 das Unikum との價値を無視するといふことである。此誤想は西洋の思想史に於て種々の形を以て現はれて居り、殊に近世に於ては第十七、八世紀に於て、其本領上單に一般的者を對象とする自然科學の考へ方が其正當な圏域以外に勢力を逞ふしたことに結付いて一時有力な現象とてし現はれて居る。自然科學の對象は常に且つ到る處に同樣なる、絕えず反復さるるところの一般的法則である、從つて自然科學に對

しては又た其れのみが價値あるものである。個物は其れに獨特な個性を具有するものとしてゞなく唯類型の見本として意義を有するに過ぎない。此考へ方が普遍化した結果此時期に於ては個性と獨異性との意義は殆んど認められなかつた。此時期に於ても個人は次第に尊重されて來た。併し個性の意義は尙ほ殆んど認められて居ない。個人は唯物理學者の「アトム」の比論に依て考へられた。此時期に於ても國家は大なる威力を有するものと考へられた。併し其國家は一定の特色ある歷史と國民性とを有つもの、特色ある文化を代表若くは體現するものとして意義が認められたのではなかつた。此時期殊に第十八世紀の哲學者の多くは特有の起原と歷史とを有する既成宗敎の獨異性に何等の價値をも認めなかつた否な既成宗敎は之あるが爲めに眞を遠かるものと考へて、自然科學上の理論同樣全然時代と邦土と歷史とを超越した「理性敎」なるものを案出して之を既成宗敎に代らしめんとした。要するに價値あるものは唯一般的者、類型であつて、獨異性、個性、特殊性は無價値又は無意義のものであるとされたのである。後者に價値が認められ始めたのは大體ルソーからであつて、獨逸のローマン派に至て此思潮は非常に有勢となつた。卽ち自然科學的思潮、啓蒙思潮、及び文藝上の尙古主義の一般者過重、類型過重に反對して獨異性、個性、特殊性の價値を辯護するといふことは獨逸ローマン派の重要特徵の一であつた。哲學者側ではカント、フィヒテまでは尙ほ一般性過重の傾向を脫し得て居ないが、シュライエルマッヘン及びヘーゲルに至つて初めてローマン派の個性及び獨異性尊重の思想は完全に哲學に導入れられて其れに哲學的基礎が與へられた。一般者は特殊化して初めて充分に其意義を實現し得るといふ思想が確立したのである。私が今此處に此史的事實を敍するのは、其他種々の問題に就て吾邦の思想は尙ほ强く第十八世紀及び前世紀中葉の歐洲に勢力を得た自然科學的考へ方に支配されて居り、其れが思想をば種々の邪逕に導入れて居りはせぬかと思ふ、而して今問題となつて居る點に就ても亦た同樣ではないかといふ疑を懷いて居るからである。兎に角吾々は他人の思想、他民族の文化に對しては强き感受性を有たねばならないが、併し之が爲めに自己の個性、自民族の獨異性を棄て若くは粗略にしてはならない。若しそれが成熟したものであるならばよく其意味を闡明し幼稚なものであるならばよく之を培ひ養

て丶行くといふことが文化に對する吾々の義務でなければならぬ。過度の大勢順應の爲めに之を忽にするは文化に對する義務怠慢である。

× × × × ×

以上述べたことは哲學の專攻者は取ては固より凡て「トゥルイズム」であると思ふ。或は一般の人々に對しても同樣であるかも知れぬ。若しさうであるとすれば、私は思想界の消息に關して迂遠の誹を免れないのであるが、併し我邦の文化の爲めに慶すべきことであるとして其誹を甘受する。（大正九年二月末日）

本論文の第七、八、九節には「先驅」三月號掲載の拙文と一致した場處がある。該拙文はもと同誌を機關とする新人會諸氏に對する私信であつて、私が其れを書いた動機（それは該拙文中に明かである）は極めて眞面目なものであつたが、併し其形式は即興的に組立てた三題話しじみたもので極めて不整頓なものであり。公表される資格のあるものではなかつたが、筆者の承諾なしに且つ其意志に反して同誌に掲載されてしまつた。といふことを後ちに初めて知つた。本論文はもと此私信と同じ内容を稍秩序を立てゝ述べて見やうと思つたのが其起りであつて（出來上つたものは其れに比して問題の範圍も廣く中心點も違つて來たが）、一部に一致した場處があるのは其結果である。操觚道德上此事を一言して置く必要があると感じて。――三月八日追記。

階級意識と恩義觀念

文學博士　姉崎正治

自分は小石川に住むで居るから、屢ば砲兵工廠の側を通行する。特に夕方に工場が退ける頃にあのあたりを通つて見ると、數百數千の職工勞働者が人の流れをなして、門を出て來るのを見、其の度每に考へる。此等の人々は各々自分の職分を有し、各自傭はれて來た徑路を異にし、而して此から各々家路に急ぎ、十五分乃至二三十分後には、家族と共に食卓に就くであらう。其の間には、種々境遇の違ひもあれば、利害、感情、思想も隨分異なるであらう。それにしても此の如く人の流を作つて、朝には朝日影を受けて工場に入り込む時、夕に電燈の下に群をなして工場を出る時、どうしてそこに集團意識を生じ、又一種の力を感ぜずに居られう。彼等個々の感情利害は、少くとも此の人間の流をなして居る際には殆ど消滅して、共通の生活共通の利害目的に動いて居るといふ意識から、一種の靈感ともいふべき感動（恐らく明白に意識しないで）に活きて居るに違ひない。兵卒が軍隊として動く時、そこに esprit de corps に支配せられると同じ樣な心持ちが、此の人の流の中に流動して居るに違ひない。而して此の狀態は、現代工業のある所にはどこにも存する事實である。

フランスで住んで居たブーローニ市は、セイヌ河に沿ふた一工業地であるが、朝夕、河畔を散歩して同じ光景を見て同樣の感を抱いたが、フランスやベルジクの都會で、Maison du Peuple とか Bourse de Travail とかいふ組織に親炙しては、實に勞働者間に流動して居る團體意識が、具體的の組織を得て、職業、生活、教育、遊戲などの事業で相互扶助の實を盡して居る有樣を目擊して、工業組織の結果は、どうしてもこゝに至らざるを得ないといふ事をつくづく感

した。大規摸の工業を營みつゝ勞働者の組織や彼等の相互扶助生活を阻ふ人は、全く人間の心理を無視した者である。經濟問題とか社會組織とか大きな方の見解を全然離れて見ても、人間が苟も人間としての心で活きて居る以上、此の大勢を壓抑し得る譯はない。假令ひ、經濟上の眞理だとして、勞働を貨物と同一視し、單に賃金受授の方面から勞働者を觀察しても、その「貨物」が心を有して動いて居る「貨物」である限りは、其の心の働きを取り去る事は、神といへどもなし能はざる所である。

此の如き集團、意識の發生するのは、獨り勞働者ばかりでなく、日々東京市到る所に見る、學校生徒の流れ、官廳や事務所の書記階級の流れ、乃至（少々臭氣があるが）板橋街道や甲州街道の糞車の流れ、皆多少とも此に似た狀態がその間に存在する。又其の昔、大名の列を行つた士卒や、多數驅り集められて農場に往復した黑人奴隸などにも、同樣の狀態があつたと想像する。此の如き具體的の集團に、敎養境遇、氣風、習慣、利害等の共通が加はれば、玆に階級意識が生ずるのであるが、古代の社會にも、又東西何れの國にも、事實此の如き階級が存在して、階級意識は其の間に動いて居た。勿論其の意識の內容、種類、程度には、時により場合によつて種々の別があつたに違ひないが、概括して、階級意識は、人類の社會生活があれば、必ずどこかの方面にどれだけか發生せさるを得ない。然しながら、階級意識が存しても、必然に發動するとは限らず、西洋では、ギリシヤ以來、奴隸制度が行はれたが、奴隸は自分等の生活は此の如きものと定めて居たから、階級意識は明白にならず、云はゞあきらめて運命に服從するといふ消極的方面に限られて居た。又、日本の武士階級の如きは、階級としての意識を助けて、敎養氣風を特別にしたが、一つはそれが權力者としての得意の狀態にあつたのと、一つは封建的に割據して居たので、其の發動は固定的維持的方面に限られて居た。其の他、德川時代の町人階級、フランスのブルジョア階級、ドイツのユンケル階級など、各々どれだけかの階級意識を開發したゞ、近代の勞働階級に於けるが如き具體的又組織的の發動をなさなかつた。（此等の差別と其の原因については一々述べない。）

されば、今までの階級意識と其の發動とに比して、近代の勞働運動に現はれた階級意識は、頗る類を異にして、それが現代の社會問題に中樞となつて來た。卽ち、其の發動には、對抗すべき一定の對手を得て來たので、意識が强烈に、其の內容が明確に團體的となつて來た。その內容は、主として階級戰といふ觀念に向ひ、消極的ではあるが而かも進擊的である此の觀念は、一轉して將來の社會改造といふ理想にも進み、そこで現在の苦鬪に加へて理想の希望が加はつて來たから、其の階級意識は强烈明確と共に、豐富になり、規模が遠大になつて來た。此の大規模といふ事は一國の範圍であらゆる職業の團結を促すのみならず、所謂る「國際的」團結にも進み、此の點は、大戰の結末に際して、一層確的になつて來た。國內ではまだ勞働者の組合を組合と認めない日本ですら、ワシントンの勞働會議には、公式に勞働の代表を出したではないか。兎に角、善惡得失は別としても、勞働者の階級意識は、世界的になり、世界全體の文明に對して大なる意義を有する事實となつて來た。

そこで、問題はかうなる。今までの社會にも階級といふ事實は存して居たに拘らず、階級意識が發動せず、又發生しても今日の如く强く明に弘いものでなかつた。然るに、今日此が大に起つて來た原因と、其の將來の意義と如何。此等の點は、今までにも社會運動に關して、隨分考へられて居る事で、今更之を論ずる要もない樣であるが、日本では、まだ其の間の消息を無視する人があり、事實の眞相に基かないで、是非の論斷をする向も少なからずあるから、事の成行を明にする必要がある。又事實の消息に關しては考へのある向きでも、此の階級意識の將來に關しては、之をどうするかといふ問題を經濟の一面のみで解釋する傾向がある。それ故、依つて來る所を尋ねると共に、行末について、單に經濟的でない方面に着目する要がある。

階級意識の最も直接な動力が經濟問題たる事は、恐らく異論のない點であらう、卽ち大規模の工業と新富源の開發とで非常に堆積した富は、何れの國でも分配が甚だ不平均で、其の不平均は工業と共に增進して來た。其には又諒とすべき事情が附き纏つて居るには違ひなく、あながちに資本家階級の私欲とのみは斷ぜられない。それにしても、その不平

均の中で貧乏の方の分配に與る者は、他の富豐の方からあらゆる壓迫（有意、無意共に）を受ける。此の點こそ、一々説明するもない事で、此の對照と、富の壓力とは、特に富源の開發と市場の擴張とを國家的にして來た十九世紀以來の狀態で著しく增進し、經濟上の壓迫は政治上の威力と結びついて來たのであるから、貧乏階級の之に對する感じが強く鋭くなるのは自然である。凡そ壓迫を受ける者は、其の方に鋭感になつて、他の方面に着目する餘裕がなくなるが常であり（但し進撃し壓抑する側にも同じ心理はある）勞働者が資本家に對抗する方面を主として其の階級意識を強く明にするのは、是れ亦必然の勢である。但し、そこに前途の希望と共に危險もある事は、社會全般が十分に之を認識するを要する。

總ての解決を階級戰に求める氣風、生產は勞働のみから出るといふ考へ、その續きとして全收權の要求、此等現代勞働運動の動力になつて居る思想要求は、此の如き事情に養はれた階級意識の產物である。而して所謂資本側も亦之に對抗して、資本集中、勞働貨物などの考を發達し、兩端が相挑發しつゝあるのが現狀である。

此の如き經濟上（之に併せて政治上）の原因は、最も直接で又重要であるが、此のみでは事態の説明を盡したものとは云へない。例へば、他方面から見て、同樣の（程度は多少異なつて居つたにしても）壓迫は、他の時代にもあつたので、奴隷制度の時代に於ける彼等の悲慘な狀態、封建時代に於ける農民の奴隷狀態など、社會上にも經濟上にも、隨分ひしかつたが、其の間に階級としての對抗精神は殆ど生じなかつた（時々の一揆騷動は別として）。卽ち經濟上の壓迫又は社會上の壓抑より外に更に今日の階級意識を養成する原因のある事を認めざるを得ない。

劈頭に述べた集團といふ具體的事實が、此に於て重大の意味を持つて來る。集團から生ずる自覺、卽ち直接の階級意識は、彼の所謂る群集心理と或點で似て居るが、此の類似は寧ろ表面的の事であつて、根本に大差がある。卽ち通常の群集心理狀態は、所謂烏合の衆であつて（但しそこに共通の「空氣」が通つては居るが）、其中に沒入した者は、自己の意識を減じ又は失つて、群衆に從つて動くにある。之に反して今日勞働階級に見る所の集團意識（group conscious-

ness）又其から發達した階級意識は、各自の人としての意識を以て、而かも共通の生活、共通の力を感じ、自分自らに此の集團幷に階級の活氣勢力を感得するにある。此の狀態は、先に述べた如く、朝夕工場の出入に際しても見得るが、特に勞働者の會合、即ち Maison de peuple や Bourse de travail などの種々の會合で、職業問題や敎育問題や宣傳方法を議する場合のみならず、娛樂、遠足等の場合を觀れば、局外者でも其の空氣を呼吸し、其の生氣に觸れざるを得ない。兎に角、此の如き自由民（勿論制限ある）としての勞働者の集團に、宏大な力の源泉がある事を、特に注意するを要する。其故に、若し勞働者間に階級意識の發生を防止したいと思ふ人があれば、先づ彼等の工場出入に一々門口か又は時刻を別にし、又何事に係らず彼等が四五人以上集まる事を禁ずる外ない。

此の集團意識を助け、之を延長して、階級意識を國際的にまで進める刺激は、交通の開發にある。現代社會に於てあらゆる思想の交通は、交通方法の開發と之に伴ふ刊行物の流行とで、前古に見ない盛況を呈しつゝあるが、勞働者の階級意識は、此に助を得此に刺激せられて、翼を得て傳播する様になつた。此の點は一々述べるまでもない事、又勞働階級に限つた事でないが、近代に於ける勞働階級の意志結合には、此の有力な媒介があるといふ事を忘れない爲に、特に記す。即ち勞働者の階級意識を防壓せうとするならば、あらゆる交通を杜絕し、刊行物（新聞でも小冊子でも）を絕滅するを要する。

* * *

それで問題は、此等の外部的原因又は媒介から進んで階級意識の內容に入らなければならぬ。

此の內容を最も直接の上から云はば、境遇を同うするとの感じであつて、事實の上に於ては利害を共にするといふ意識となつて現はれる。此を延長すれば、同情であり、終には理想を共にするといふ感動となつて動く。一體、社會的結合には、氣風敎養を同ふするといふ點が隨分大切であつて、武士やブルジョアの場合には、此が中心となつて居るが現代の勞働階級は、宏大な範圍も包括するから、氣風敎養は一樣でない。又境遇の上から云はゞ、技能ある熟練職工と一

般勞働者との間には相違はあるが、然かも資本家に對する場合には、境遇利害を共にするとの感が強く働かざるを得ない。卽ち右資產に對して無資產とか、特權者に對して無特權者とか、極端になつては lazy class に對して working class といふ如き意識は、現代の產業から出て來る自然の產物として、勞働階級に共通の意識を作り出したのである。其の樣な考が不都合だといつても何といつても、兎に角、事實、此の意識が生じて來たのである。

一體、概括して無資產と有資產との對照は、何れの世にも存して居た事實であるが、前者の後者に對する態度が違ふ。例へば今の日本には尙ほ殘つて居る勞働者の氣風の中で、「御大家」の法被、しるし袢天を着て、其を誇とするのは、要するに無資產者が有資產者の庇護を賴みとして生存した爲であつて、「立ちよれば大木の蔭」といふ諺が此の心理狀態を表白して居る。（又少し方向と方法は違ふが、足利時代や西洋中世の下尅上も、心理的根柢に於ては同じである）卽ち二者の關係が、「賴む」「賴まれる」といふ主從狀態から出る結果であるが、現代の工業組織では此の如き關係は、小部分には存しても、全體には存し得ない。而して組織のみならず、資本主の側は勞働者を「物貨」として扱つても、勞働者の側には自由の自覺がある。又此が益す發達せざるを得ない。昔、パスカルは人の生命の脆いのを芦に譬へ、而かも只の葦でなく、「考へのある芦」（roseau pensant）といつたが、勞働は「物貨」であつても、「意識のある物貨」（conscious commodity）として、自由の要求と力の自覺とを具へて居る。此の自覺は、資本側が、勞働を「物貨」として扱へば扱ふだけ、それだけ成長する。「一寸の蟲にも五分の魂」而して其の魂は、いつまでも五分に留まるものでない。

此の如く自由の民として、而かも無資產者だといふ境遇共通感は、消極的には有資產階級に對抗しての產物であるが又積極的には、政治上の大勢（特にフランス革命の齎らした觀念）敎育の普及に加へて、先に述べた刊行物の傳播などが其の原因をなして居る。然し此等の因緣事情を包括して、其の根本となつて居るのは、道德的意識の力であつて、其は感情に於ては同情となり、事實に於ては相互扶助の活動となる。而して此の同情は、互に相憐むといふ commisera

ILO が第一着であるが、其れから進むで積極的の同情、即ち理想を共にするといふ方に進む。

此點は、單に經濟上の立場からは出ない事、又單に勞働問題だけの産物でなく、近代文明の一特色たる人道感の發達が至大な影響を勞働問題に與へた點である。十九世紀は、一方に於て確に猛烈な經濟競爭國家鬪爭の時代であつて、其の極端は今度の大戰に破裂したが、他方、人道觀念と其の實行とに於て又新記錄を作つた時代である。(日本では前者の方にのみ着目する人が多い、而して後者を遺却するから、近代運動の眞義を解し得ない)。其の最大なるものは、奴隷廢止の遂行であつた。此の運動は何等の利害をも交へない純潔の人道觀念の發現であつて、其に至るまでの運動者の高義熱情を別としても、イギリスは此の爲に數億の賠償を拂ひ、アメリカは此の爲に六年の大戰をも敢てした。其の後に於ける黑人に對する待遇には勿論非難すべき事はあるが、兎に角、奴隷廢止に至る迄の運動は無私高潔の運動であつた。特に、それが西洋では、ギリシヤ以來の經濟組織であり、且つイスパニアや合衆國の南部になつて大な利害のあつた事であるのに、終に世界的に之を遂行し得たのは、實に今古に稀な人道觀念の勝利であつた。其他イギリスで百年前に出來た幼年者勞働の制限、近くは列國協調で出來た支那の阿片禁止、其の中間に起つた數多い運動も亦同樣であつて、此等の成績は、十九世紀の罪惡を、全くは償ひ得ないにしても、少くとも其の汚點の一部を拭ふに足るべき事蹟である。其から現代の社會問題にもつと密接して、ロバート・オーウエンでも、プルードンでも、十九世紀前半に出た社會改革者の主張には、深遠な人道的根柢があり、同後半に出たロシヤの思想家改革者には、此の色彩が一層濃厚になつて居る。

此等の思想や運動や其の效果を數へ立てるのは、今の目的でないが、十九世紀の文化を觀察する上に於て、人道主義の發達は頗る重大の項目であるのみならず、此が實に勞働運動の重要な背景又後援になつて居る。而るに、勞働階級の要求に對して、贊成、反對、共に此點に注意を缺いて居るから、特に此を一言しておく。尙ほ又、日本では、人道主義と云へば、國家を無視する超越思想だといふ樣な誤解が行はれて居るが、此に對しては、小著「世界文明の新紀元」の中「人本主義の實行」で之を辯じておいたから、今一々之を論じない。但し、こゝに必要な點を一つ述べる。即ち、人

道主義といふ事は、此の如く遠きに求むるを要せず、日常生活の間にも、人情を重んずる、人間を人間として扱ふといふ事に過ぎない。之を延長すれば種々の方面に及ぶが、心髓はこゝにある。されば、人道觀念の最も直接な發表は、社會生活に於ける同情であつて、此が先にも述べた十九世紀の種々の運動に現はれ、二十世紀になつては特に社會的奉公 Social service 又は社會的救濟 Social salvation の觀念及事業として現はれて居るが、此等の詳細は別に論述する機會に讓る。

同情から出發して世界的効果を擧げた人道主義、此に最も感動し易いのは、十九世紀文明の弱者たる勞働階級であつて、其の强者、卽ち權力、財力、武力の把持者は、殆ど之に動かされないのみならず、寧ろ之に反對した（此點は、中央公論三月號の論文に述べた）。そこで、世界的運動を起した人道主義は、第一に勞働階級を動かし、且つ又、彼等の間の生活は、今までにも小規模で同情、相互扶助を實行して居たが、今度は其の同情を社會的に又世界的に擴張する樣になつて來た。この同情發揮の背後には、利害の念や境遇共通の感が働いて居るが、又此等を包括し陶冶したのは、人道的同情といふ道德的勢力であつて、其の實行は、種々の形と目的とで行はれる相互組織 (mutuality) 組合組織 (cooperatives) となつて居る。其に加へて、一層大切な事は、卽ち共同の理想といふ觀念であつて、此が勞働問題否一般の社會問題に對して、將來文化の進退を決する樞域である。

* * *

此點を明にする爲には、少しく一般に亙つて、人類の社會的結合 (solidarity) を作る原動力を觀察する要がある。結合力の最も根本的なのは、本能に基く自然の情であつて、個人の生存なり、種族の保存發達を目的とした自然結合をさせる。此が、家族、種類、民族の團結を結合する力で、原則としては血族關係の親味から出る。然し、境遇、生活狀態、性格、氣風乃至利害を共にする所から生ずる友情關係も此の自然結合の延長であつて、今日の勞働階級には、第一には劈頭に述べた集團意識と、それ以上に境遇利害の同情からして此と同樣の結合を生じつゝある。所謂「國際

的」社會運動者が互に comrade, brother 等と呼ぶのは、即ち自然本能に似た、若くは其から出た同胞 fraternité の感があるからである。而して近代の勞働問題で、ストライキ等に對する壓迫を受ける場合には、時に此の結合力が刺戟を受けて發達するのは、最も注意すべき事情であつて、sympathetic strike は職業の種類別を越えて、此の結合力が勞働者階級といふ意識に發動する現象である。

次には義理結合、即ちレオンブルショアの所謂る契約結合の力で、此は主義主張（勿論、利害と離れないが）即ち一定の cause（原因といふ意味でなく、主義目的といふ意味で）に基き、之に同意を表し、一旦之を誓つた以上は、全體の cause に服從する忠誠の態度を中心とする。國家（假に民族といふ側と引き離して）又は其他一定の目的又は主義から成つた組合、團體等は此の表はれであるが、現代の勞働運動には、義としての主張から來る結合で此の方の結合力が大に加はつて居る。生存權の觀念勞働生産觀の主張、即ち一般に社會的正義の要求が、勞働者の階級意義に於ける義理結合の力であつて、彼等の間に fraternité の外に fidélité の感が發達しつゝあるのは、此の爲である。勞働者の會議或は組合の總會、又は一國勞働者の聯合會、又は近年段々增して來た國際會議（昨年だけでも三回の大きな命令があつた）を見るに、其の議題、討議、決議には、總て此の義理結合の意識、之に對する忠誠の念が、迅速に又強固に發達しつゝあるを看取するに足る。

最後第三に、理想結合は、何れの方面から見るにしても、人生の理想歸趣を仰ぎ、此の理想の感動から來る渴仰の力で結びつく。ダンテが信仰を說いて、「仰ぎ望む事の本體、未だ見ざる事の證明」といつた、其の本體に親炙し、其の證明に感應した狀態が、此の結合力の中心であつて、一言にして蔽へば、宗教信仰の態度から出る感應、communion 即ち人生觀から出る結合、精神的團結 spiritual fellowship の意識である。平易にいへば、自由天眞な人間の生活に依つて、共存の意義を充實し、人生の理想的意義を發揮するといふ心である。此は、今まで諸の宗教が其の教會で實現せうと努めた點、又先に述べた近代の人道的運動が斷片的に實行した精神狀態であるが、此の理想的方面がどれだけ現代

勞働者間に於ける階級意識の內容に現はれて居るかといふ事實は、容易に測定し得ない。何となれば、先にも述べた種々の相互組織や相互扶助　觀念には、人道觀念の發現を認め得るが、現在に於ては、其等が、他方資本階級に對して餘りに多く對抗的の意味を含蓄し、直接の利害に拘泥するから、まだ純粹に人道的の精神團結たる域に達しない。此點は諸の宗教に存する（神道にも）共產的觀念と共に、先に述べたオーウエンやプルードンの思想シオ十三世から始まつたロマ教會の公教社會主義クロポトキンの相互扶助觀、それからギルド社會主義に於ける產業と精神との分別協調觀等に究明すべき點があるが、階級意識といふ點とは少し離れるから、別の論題に讓る。併し現代の勞働運動に段々精神的要素が發達して居る消息は、看過すべからざる事で、此に將來の社會問題、宗教問題に對する重大なる現象がある。

＊　＊　＊

以上、階級意識の發生と其の內容とについて、大體を述べたつもりであるが、此の如き階級意識が近代の工業組織を素地として勞働者の間に起り、一部の農業社會にも、亦自由職業者にすら及び、此に於て特權階級に對する無特權階級といふ意識が、社會の運動に大勢力を及ぼするに至つた。此の意識は、相互の同情が元になり、現在の利害境遇で之を增進し、而して將來の理想に對する感動の力で、人生全般に亙る向上心として發動しつゝある。

此の階級意識は、現在に於て何れの國でも、單に利害の問題から一轉して權利の要求となり、正義の主張となり而して此の主張要求を遮らうとする特權階級幷に社會制度に對する階級戰となつて發現して居る。即ち實質上では利害、道德上では權利正義方法に於ては戰鬪（種々の形で）而して目指す目的にては、何かの形の共產といふ事になつて來た。

此の中、利害といふ事は、階級利といふ事實の存在する限りはどうしても消滅する事ではないが、然し、同じ利害でも之に對する心持ち、即ち精神的態度に於ては、決して不動の事實でない。マルクス主義や、又ダーウヰンの學說を社會に應用する方面では、經濟事情、生存の必要などを、恰も不可抗で動かすべからざる宿命的勢力の如く見る向が甚だ多いが、此は人事の觀察に於て、人心の態度といふ重大要素を無視した大な誤であつて、人事の運動には、客觀と主觀

との兩勢力があり、此の二者の比例案配は決して一定したものでない。其の上、又主觀分子の中でも、大まかに分けて理智と感情との二要素について、社會的定命論者は理智のみに重き、理智の中でも利害の打算といふ事を偏重するが、之を對して、感情、特に道德感情の勢力が個人の生活にも重大であると共に、社會生活、特に集團意識の中には最も重大な勢力たる事を力說せざるを得ない。此の事を詳しく說明するには別の論題に讓る外ないが、社會運動を觀察する上に於て、又運動の當事者（資本でも勞働者でも）が自らを測り他を測る上に於ても、自他の精神的態度を檢査し、特に其の中でも道德的感情乃至理想の感動を自他共に觀測してかゝる事が、問題の進行に重大の關係ある事を指摘しておく。

そこで、要求主張と理想目的との二點は少しく後にして、階級戰といふ方法を觀るに、今までの成行と現在の狀態で判斷すれば、勞働階級の勝利（程度は時に應じて違はうが）に到らなければ、調攝或は平和の途はないらしく見える。「日本の勞働問題は、そこまでに行つて居ない」などいふ樂觀もあらうが、此を樂觀と稱すべくば、自分は反對に悲觀を抱く。「西洋ほどにはない」などいふ觀測の反對に、今まで西洋ほどにはなかつたものが、急激に同樣の潮流に踏み込むだといふ點に、一層の危險あるを悟らなければならぬ。イギリスの如く、百年以上に亘つて段々穩健に解釋を求めて來た國でさへ、現狀は決して樂觀を許さない。然るに此の百年以上の變化を數年の間に經やうとしつつある日本の現狀に對して、「なあに勞働者が」とか、「なあに西洋直譯の勞働運動が」などゝ言ふだけでなく、眞にさう思つて居る人があれば、それは fool's paradise を畫いて居るに外ならぬ。

一體、勞働問題や階級問題に限らず、思想問題でも教育問題でも、又政治、外交、あらゆる方面に亘つて、日本の特權階級は社會の事實運動を動的 dynamic に觀察する能力を缺き、德川時代の人が、いつまでも世は同じと考へて居たに似て、靜的にのみ見る。その結果はあらゆる方面に現はれて居るが、一昨年は大戰の結末で大まごつきにまごつき、昨年以來は、社會運動、思想問題であわて出し、何でも勝手の違ふ事、又都合の惡い事があれば、外來思想の直輸入だとか、西洋の眞似だとか見て、或は單に之を呪咀し、或は多寡をくつてかゝる。どこでも同じ社會情勢があれば同樣

の思想運動が起り、今日では世界共通の大原動力が各國を動かしつゝある事、それが即ち日本の問題たる事を動的に看取し得ない。つまり歸着する所、人間精神の動く原則社會變化の起る所以の情勢、而して其等の歸趣たる人生運動の道德的意義、此等を看取するは、頭腦が餘りに形式的機械的に働き、心情が餘りに自己中心に固まり過ぎて居るのである。

* * *

そこで、階級戰の落ち着く先を觀測し、又多少でも案配し左右するには、現代の要求主張について、道德的歸趣を採る必要を生ずる。勞働階級の主張は權利正義にある。一體正義及權利といふ觀念は、當る得べきものを得ず、又當にあるべき事のあらざるに對して當に得べきもの、當にあるべきものを主張するので、道德上には消極的德目、社會上には對抗的態度が主になつて居る。但し、之を要求する者の自覺心、自覺に伴ふ向上心といふ積極的含蓄が、其中に存するのは勿論で、現代の勞働運動には、先に述べた如く足利時代の下尅上と全く道德的意義を異にした向上心の盛なる事は觀測の一隻眼ある者には明瞭なる事實である。此の向上心の內容には、機會均等といふ意味での平等の主張、力の自覺に基く自由自主の要求を含み、直接には生活狀態を改善するといふ欲望で動くが、此が進んでは、人類共存の意義を自由に發揮し、各自の性格人格を社會的に鍛練せうとする進歩の心になりつゝある。此等の點に關しても、日本ではそこまで進んで居ないといふ人もあらうが、現在の方向は其の方に進まなければ止まないといふ動的針路を示しつゝある。

此の如き意味での向上心が、勞働者階級意識の根底に流れ、又其の行く先の目標であるとすれば、此の理想目的に對する自覺を正當に健全に發達させるのが問題解決の唯一の方法である。此の如き理想目的は獨り勞働階級のみの事でなく社會生活を潤達に圓滿に發達させる爲には、何人も協力して進むべき大道だといふ事が、全般の覺悟で實行されさへすれば、問題は正當の道をたどつた、健全に解釋せられるのである。之に反して、特權階級が、一方には自利と僻見とに固着し、他方には勞働階級を輕侮して、此の向上心の發達を沮害すれば、此の向上心は曲りくねつた道を取り、恰も堰き込められた水が終には、堰を破壞する如く、暴動的方法を執る虞がある。而して現在、階級戰といふ觀念は、此の如

き變態の一發表であるから、危險は勞働階級の向上心そのものにあるのでなく、此の向上心が沮止防害を受ける爲に出て來る憂患である。先に階級戰に關して悲觀すると云つたのも、此の意味での悲觀、即ち權力財力の特權階級の無覺醒に對する悲觀、それと同時に勞働階級の激越性急に對する悲觀である。

現在の狀勢には悲觀するが、全體と永遠とに亘つては樂觀する。即ち、勞働階級の向上心は、つまり民衆一般の自覺を代表し、權利の主張は人類共存の理想に向ふ出發點であるから、現代の階級意識は終に人類の結合、人間社會生活の實質に進み、其の實行には社會的奉公、社會的救濟の方法が具はるに違ひない。寧ろ消極的な權利要求、正義主張は終には相互主義に基いた生活の中に積極的理想たる恩義の觀念に進まざるを得ない。そこで、階級意識の觀察は、最後に轉じて恩義觀念の實質を研究するを要する。

* * *

必しも特權階級の偏見でなく、道德上には高尚な觀念を抱きつゝも、而かも在來の形式に囚はれる人が能く云ふ言は「近頃の人間は權利の主張を知るのみで、恩義恩德の觀念がない」といふ。此の考には餘程の眞理がある。併し、其の中に、又恩義恩德といふ事を在來の上下從屬のみの見地で見て居るといふ根本缺點がある。此の如き誤り（善い意から出ての）は、社會問題だけでなく、親が青年期に達した子等に達する態度にも能く現はれる事。即ち青年期の煩悶を、其の根底と歸趣とに應じて善導し、青年の自由自主を健全に發達させるべきを、親たる者が青春期の心理狀態を顧みないで、干涉し壓迫する爲に、其が善意から出るに拘らず、却て仇となるのは、世間に多く見る事例である。（東京の或る學校の調には、此が軍人と敎員どの子弟に最も多いといふが、偶然でない）。つまり現代に於ける勞働者の階級意識は、恰も個人の青年期と同じ發達期に遭遇して居るので、危險も多いが、又前途多望である。此の多望の前途を健全に開拓するのは、先に述べた、自然結合と義理結合とから一步を進めて理想結合を自由濶達に健全に發達せしめるにある。此の目的を達するには、民衆社會、否人生一般に具はつて居る相互扶助の心人類共存の理想に基いて人間同志の恩義恩德

を感ずる心を養ふにある。養ふといつても、單に教訓を施すのでなく、全體に社會狀態を其の樣に仕向けるを要する。

一體今までの道德觀念では、恩義、恩德、即ちお蔭を蒙るといふ事を上下從屬のみに偏して、所謂る下に位する者が上のお蔭を受けて之に感謝する狀態を指して居る。此が果して恩義觀念の全體であるならば、今の勞働問題に於ける主張要求と恩義觀念とは矛盾相容れない。若くは頗る方向を異にして居る事は明白である。然るに、佛教の如きは、四恩の中で衆生の恩を教へ、四誓願の第一要件として衆生濟度を擧げ、而して相互恩德の共同生活を以て人生社會の大本として居る（歸一協會叢書第五輯法華經行者日蓮、二七八頁以下參照）のみならず、親子の關係にしても、親が年長たる以上、恩德は先づ親から發するに定まつて居るが、親は子を育て上げると云ふ天職を盡す上に於て、子に對する愛情を發揮し、それによつて父としての自らの天性を發展する上に於て、子に負ふ所ある以上、此も恩德として、子に對し、一個の人格として之を扱ふべきである。師弟關係も同樣であつて、上下從屬以外に、更に對等相互の恩義を認めるを要する。（君臣關係については、封建時代の主從關係も同じであるが、現在の社會では主權といふ法理問題が加はるからそれだけ複雜になり、此は別論に讓る）。兎に角、封建的社會では、社會生活を上下主從といふ關係のみで作り上げ、道德も此に相當して出來上つたから、恩義觀念も、其の支配を免れなかつたが、此は情義道德の一面であつて、他の一面には、對等相互關係の恩義が重要なるを忘れてはならぬ。

此の點を一般人性の上から觀察して見るに、社會生活に於て人性は兩極を以て發動する。即ち、一方は對人關係の義理を正す理智と、他方は人間相互の關係に基本的結合力となる愛情と、此二つであつて、儒教では義と仁と、佛教では慈と悲と、或は折伏と攝受との兩極になる。然し此の二つは、反對でなく、其の中間を連ねて見れば、二者の聯結を見るに足る。一々之を陳述する代りに、表の樣にして見れば、大體左の如くなる。

理智（即ち法）——制裁——正義——權利——權能——責任——義務——義理（俗語で使ふ意味で）——相互依屬——
恩義——恩德——感謝——報恩——同情親愛——恩愛（愛情一般　即ち情味）。

此はスペクトラムの兩極、赤と紫とが他の五色で連結して居ると同じ樣に、各々の境堺線には互に混合して、而かも段々に異彩を呈する。而して先にも述べた如く、社會結合の自然本能的方面と、義理合意的方面とは、此二端を代表するもので、此から一步を進むれば、兩者を總合した理想結合になるのは、つまり理性と愛情と（仁義又は慈悲）の總合であつて、人生は此の總合によつて、完全に人性を發揮し、又社會生活を圓滿にし得る。即ち相互恩義、回向功德の生活が、個人の心を支配する事に依つて社會生活を進めるにある。此が根本的意義での人道主義である。

* * *

少しく抽象の理談に走つた樣であるが、人間の天性に此の如き聯絡の根據がある以上、而して此の如き人性の社會的發表が、總の個人の自覺から出た結合に進むべき以上、勞働運動の現在には悲觀し憂慮すべき方面にあつても、其に正當又自由の發展を容しさへすれば、其の將來には、此の如き理想に進むべき樂觀方面の存在する事は、爭へない。而して、現に勞働者の階級的運動には、先にも述べた如く、現に種々の相互組織が行はれ、其の間には相互依屬の實狀並に情味から生ずる相互恩義の觀念は、盛に發生しつつあるのである。此がさしづめ利害問題に基いて發生したにせよ、總て人事の進行は、利害から出發しても、落ちつく先は道德問題となり、經濟生活の問題も、深く人心の根底に入れば、精神問題となるといふ消息は、此の間にも段々明になりつつある。

即ち現代勞働運動の中心となつて居る階級意識と、其から生ずる實行問題は、今までの意味での恩義、即ち單にお蔭を蒙る、恩惠を受けるといふ見地に反對し、其目的の消極的又は理智的方面が權利の主張となり、而して之に對抗し、之を沮害する特權階級に對する**宣戰となりつつある。世の所謂溫情主義で、恩惠を以て此の問題を解決せうとする**努力は、此の如き權利の主張に對しては無力である、此の如き恩惠主義は、要するに、特權階級の利己心乃至負詩心から出る非社會的見地である。人類の社會的生存は、總ての個人が互に相依り、互に相助けて、共々に人性を鍛錬し、共共に結合を增進し、共々に理想に向つて進むにある。其の間に立つて、一方は恩想を施し、其の恩を被せて、他に服從

追從を期待し又は强制するが如きは、私心の甚しきもの、決して眞の恩義でない。恰も、或る種類の親が、後には左團扇の生活を遂げうとの目的で美人の女子を大切に育て上げ、而かも其が思ふ樣に親の命に從はない場合に、恩を忘れる不孝の子だと罵ると同じである。眞の恩義關係は、此の如きものでなく、心底の同情愛情から出ての温情で、他に恩義を盡すと共に、他の恩德をも十分に感謝する相互恩義でなくば、道德的生活とはいへない。

そこで、此の如き相互恩義は、總ての階級制を廢棄した後でなくば發生しないか、若くは階級制は何等かの形又程度で存在しても發生し得るか。此の問題に對して、自分は明確な判斷を下し得ない。但し、階級制が、富若くは權利の有無で固定し、無權力無資産の者は、到底自由の生活で、自己の性格を鍛錬する機會も希望もない社會ならば、其處には相互恩義の道德が發生し得ない。此の一事だけは、今までのあらゆる史實から歸納して斷言し得ると思ふ。つまり、相互恩義の道德は、人間が互に人として自他の人格を尊重するから生ずる社會的道德であるから、峻別的階級、形式的壓迫が人格の發達を沮止する所には、少くとも順當に又活潑に發生し得ない。而して他方、階級別といふ事を廣義に見て、職業、氣風、生活狀態によつて、多少の差別があり、同氣相求めて、一社會內にも各々多少異なる生活をするといふ事にすれば、此の如き階級別が人生に全然消滅するといふ事は、先づあり得ない、又あるのが必しも願はしい事ではなからう。然らば、社會結合の力が普く及むで、此の如き廣義で又融通のつく階級別をも包括する力があれば、其處には相互恩義の道德は發生し、共々に、又相互にする回向功德の社會生活は出來得るに違ひない。但し、少くとも、特權階級の私利壟斷と、無特權階級の反抗憤懣とが相激發しないだけの融通、即ち社會上の機會均等行はれるを要する。

現代の勞働運動に於ける階級意識は、蓋し寧ろ激發狀態にあつて、先に述べた如き融和の希望は、雙方共に少ない事は爭はれない。然し、此と同時に、勞働階級其自らの中に相互扶助の心情と實行とが段々に現はれて有効に赴いて居る事は、段々に述べた通りであつて、其の間には相互恩義の觀念は、宗教的色彩をすら帶びる傾向を表はす。即ち自己階級の特別な主張以上に、此の恩義觀念を自由に實行し得る樣な社會改造の理想も發生しつゝあるのは特に注目さる事實

である。而して今まで人類の社會的進化、社會文化の變遷を觀れば、上層卽ち特權階級（種々の力で出來上つた）の生活や文化が固定し、爛熟して、終に自ら崩壞する場合に、其後を承けて新鮮の生氣を發揮し、次代の文化を擔任するのは、今までの無特權階級の道德力である。日本では、藤原氏の閥族腐爛に對して、生氣を新にした東國武士の、野性ながら健剛の活力。ロマ帝國に於ける富と權との貴族文明が自滅した後に、新生氣を以て起つた信心堅固のキリスト教民其他幾多の實例は、此の如き文明の新運動が、下層民衆の中から生ずるといふ事、而して其の力は彼等の相互扶助の恩義道德にあるを示す。（勿論、前時代に比して、相互扶助の恩義を多く玩味し實行する民衆）。今は、十九世紀の强者文化が、自らの中に包藏する破綻を呈して、危機に瀕する時、將來の社會文化を擔任すべき者を他に求める場合、今の勞働階級に於ける相互主義の恩義道德が、將來の擔任者たる事を望むのは果して不當であらうか。

＊　＊　＊

德川の中紀に、賢明な一政治家は、嘆じて、「武士道は武士の仲間には消滅して、市井に落ちた」といつたが、現代は此と同樣社會を心とし、社會的奉公に從事するの忠誠熱情が、果して特權階級にあらうか、又其が無特權階級には存在しないか。奉公とか忠誠とか、又は段々述べ來つた恩義觀念を、在來の形式で律するならば、此の如きものは、現代の民衆（並に靑年）には存しない、或は少くとも稀薄であらう。併し、現代民衆の奉公心は、階級意識を通じてながら勃興しつつある。又此と同樣に靑年學生の間に於ける社會的思索には、實に眞劍勝負的に眞面目なものがある。而して恩義觀念は、階級意識の城內であるに拘はらず、深厚に赴きつつある。それ故、階級戰の主義方面を消極的對抗から解脫せしめて、積極的建設に向ふ樣に、適當の事情勢力が具はりさへすれば、民衆の恩義觀念は自由濶達な發達を遂げて舊文化崩壞後の新文化を擔任する望は、十分にある。階級意識は其れ自身には決して喜ぶべき現象でない。然し其中に含蓄する人情と義理とを發揚すれば、堂々たる理想に進運して、萬民相互の恩義道德を基礎とする文化を開發するに至る。今の特權階級には、此の進運を沮止せず、大に之を鼓發する雅量があるか。又今の無特權階級は、此の天職を遂行する覺悟と責任とを有するか。此に現代並に將來の問題が横はる。

ナショナル・ギルドの建設

室伏高信

（序の一）

ギルド社會主義が英國において初めて唱え出されたのは一九〇六年のことである。この年にオレーヂは雜誌 Contempory Review のうちでギルド社會主義を主張した。ペンテイもまたこの年に一書 The Restoration of the Guild System を著はして中世ギルド組織の復興を提唱した。そのうちペンテイの提唱は中世ギルドの復興を主張したに止まつてゐたがオレーヂは歴史的並に近代的經濟發展に對してナショナル・ギルドの組織を結合すべきことを提唱した。即ちギルド社會主義を提唱したのである。オレーヂは一九〇六年から一九一二年に至るまで引續き彼れの主宰する週刊雜誌 The New Age においてギルド社會主義の建設と宣傳とに努力した。一九一四年オレーヂの名によつて出版された National Guilds はこの時代の產物である。[1]この書物の出版によつてギルド社會主義の理論的基礎は大體に出來上つたように思はれる。その後一九一五年にギルド社會主義宣傳の中央機關としてのナショナル・ギルド同盟 National Guilds League がロンドンに設立され、そこから數種の小册子が出版されたためにギルド社會主義の輪廓は明瞭に示されることゝなつた。また一方にはコール、ホブソン、オレーヂ、アンダアソン、レキットペンテイ、ベツヒフオハア、エウエア、メラア、パートン、」ラッセル、ラッセルス等の諸氏がギルド社會主義の建設と宣傳とに努力してきた結果、それがフエビアンニムに取つて代らうとしつゝあることは現代英國における最も顯著な社會現象である。かくしてギルド社會主義の思想は英國に生れたものである。ベルトランド・ラッセルはそれをもつて英國特有の妥協的精神の產物であるとなしてゐるが、その思想は今日で

は英國海峽によつて遮斷されてゐる思想ではなくして伊太利に入り獨逸[2]に入りさうして米國[3]においてもそれはブラム・プランとして現れてゐるのである。

(1) 小泉信三君は日本におけるギルド社會主義の最も卓越した研究者の一人である。同君は本年二月の『三田學會雜誌』で『ギルド社會主義再論』なる一研究を發表してゐる。それが有益な研究であることはいふまでもないことである。しかしそのうちに小泉君はギルド社會主義の起原についてそれが一九一二年頃から New Age で唱へ出されたように述べてゐるがホブソンに從へば既に一九〇六年からであり、またオレーヂが最初にギルド社會主義を提唱したのは New Age においてゞはなくして Contemporary Review においてゞあると述べてゐる。

(2) Towards National Guilds in Italy (The New Age, Oct. 23, 1919) 參照

(3) M. Booth, Social Reconstruction in Germany, PP. 25–8 參照

（其の二）

ギルド社會主義にはオレーヂ一派のナショナル・ギルド National Guilds とペンティの地方ギルド Local Guilds とを區別することができる。ペンティはナショナル・ギルドを批評して最後性（ファイナリテー）のないものであるといつてゐる。そして次のように述べる『勞働者が一度自ら產業を所有するに至ると、產業主義のもとに橫はつてゐる根本的の矛盾が解決を要求し、そしてその要求はわれ等を地方ギルドへの道に向はしめるであらう』と。卽ち[1]ペンティに從へば『ナショナル・ギルド』とはたゞ『ローカル・ギルド』への道程ではあるにしても社會改造の要求はこれをもつて滿足することなくして更に地方ギルドへと行かなくてはならない。かくしてギルド社會主義のうちにはこの地方ギルドの主張の存在することをも閑却することはできない。しかし地方ギルドはたゞペンティによつて支持せられる程度であつて少しも勢をなすに至らないと、ペンティ自身もこのローカル・ギルドが直に實現の可能性をもつてゐるものとは信じてゐない。[2]ギルド社會主義の中流はいふまでもなくナショナル・ギルドであり、ナショナル・ギルドそのものが[3]ギルド社會主義そのものとして受取られてゐるのである。

(1) Ponty, Old World for New, P. 9

(2) ibid., P. 8.

(3) 婦人評論家山田わか子女史はその論文（『太陽』二月號）のうちでギ

ルド社會主義とナショナル・ギルドとを明確に區別して全く別物として取扱はれてゐるが多分何かの勘違ひでゞもあらう。

(序の三)

ギルド社會主義と中世ギルドとの關係についてはナショナル・ギルド派の立場と地方ギルド主義者との間に大なる距りがある。地方ギルドは主として中世ギルドの復興を主張するものであり、ペンテイはピイタア・クロポトキンとともに『社會主義者の目的とするものゝ大部分が中世都市に存在しておつた』ことを主張してゐるものである。これに反してナショナル・ギルドの主張者はナショナル・ギルドと中世ギルドとの間に殆んど何等の共通點もなくたゞ中世ギルドが Trade monopoly を要求したに對しナショナル・ギルドが Monopoly of Labour を要求するの點だけが共通してゐるとなしてゐる。[2]

(1) Penty, op. cit., P. 49.

(2) S. G. Hobson, National Guilds, P. 275.

(序の四)

ギルド社會主義は國家社會主義に對する批評として、並にサンヂカリズムの影響のもとに生れたものである。それは國家社會主義の一切の要素に反對するものでもなくまたサンヂカリズムの一切の態度に反對するものでもなく、この二つの思想の影響と、そして批評とのうちに生れたものである。從つてギルド社會主義は國家社會主義でもなく、サンヂカリズムでもないとともに、またこの二つの思想との間に重要な接觸點を持つてゐる。國家社會主義に對しては消費者の自由を維持せんとすることにおいて、サンヂカリズムに對しては生產者の自由を樹立せんとすることにおいて、それ〴〵重要な接觸點をもつてゐるのである。しかしまた國家社會主義に對しては生產者の權利を要求することの點において、サンヂカリズムに對しては消費者の權利を要求するの點において、それぞれに重要な區別をもつてゐる。從つてギルド社會主義について說明するためには國家社會主義及びサンヂカリズムについて說明し、これ等のものゝ關係を明らかにすることが必要であるが、この點は他の機會に讓ることゝし、こゝには主としてギルド社會主義の梗概を述べて見たいと思ふ。

（一）

ギルド社會主義は國家社會主義（コレクチヴイズム）と同じく資本主義に取つて代らうとするものである。しかし資本主義に對するギルド社會主義の態度と國家社會主義の態度との間における共通の點はたゞ資本主義に反對するといふの一點に過ぎない。國家社會主義は資本主義の精髓をもつて生産手段の私有にありとなしてゐる。この立場は修正社會主義としてのフエービアニズムがそれを支持してゐるばかりではなしに正統マルクス派の立場もまたこの點においてはフエービアニズムと同一であるといふことができる。從つて國家社會主義の要求するところは生産手段の私有に對する生産手段の公有である。生産手段を地理的團體の手に集中することは國家社會主義の精髓であるといふことができる。ギルド社會主義の立場はこれとは全然反對の立場をとつてゐる。ギルド社會主義は資本主義の精髓をもつて單なる生産手段の所有者の點にあるとはしない。それの所有者の如何にかゝわらず資本主義は存在するものであるとするのがギルド社會主義の立場である。即ちギルド社會主義に從へば生産手段の所有者が何ものであるかの問題は資本主義を決定すべき何等の理由ともなるものではない。それが少數の個人に屬するにしても、また國家その他の地理的團體に屬するにしても資本主義は依然として資本主義である。たゞ個人的資本主義 Private capitalism と國家資本主義 State Captalism との相違があるのみである。個人的資本主義においては少數の個人が雇主であり、絞取者であり、從つて勞働者、——生産者は被傭人であり、被絞取者である。國家資本主義においては國家は雇主であり、絞取者であり、從つて勞働者——生産者は被傭者であり、被絞取者である。雇主は變化する。雇主は個人から國家へと移る。しかし勞働者の立場は依然として被傭者であり、被絞取者である。彼れは資本主義のもとにおいてはその勞働を彼れ自身から抽出して、商品としての彼れの勞働と利潤を目的として彼れの勞働を買はうとする彼れの雇主——個人的雇主にと賣つた。そしてその代りに生産組織について、並に彼れの勞働の生産物についての統制權を彼れの雇主にと讓らさるをえなかつた。こゝに賃銀奴隷としての第四階級が發生したのである。しかしその生産手段が國家またはその他の地理的團體の手に集中されたとした時に、この賃銀勞働者は如何なる地位に置かれてゐるのであらうか。彼れの雇主は個人または少數の個人の團體ではなくして國

家またはその他の地理的團體となるに至るであらう。しかし依然として雇主が存在し、また依然として賃銀制度が存續する以上、[1]勞働者は彼れの勞働を彼れの人間性から抽出して賃銀の反對給付としてそれを國家に賣らなくてはならない。それに對して彼れの新らしい主人は彼れに賃銀を支拂ふであらう。しかしその賃銀を受取る代りに彼れはその生産の組織についての統制權とその勞働の生産物についての統制權とを彼れの新らしい主人に讓り渡さなくてはならないであらう。こうした場合に彼れは如何なる地位に立つてゐるか。『それは都市社會主義にしてもまた國家社會主義にしても、ともに賃銀制度の方法によつて勞働の絞取……を行ふのである。』ギルド社會主義はこう主張する。[2]從つて國家社會主義もまた一つの資本主義――國家資本主義であるとするのがギルド社會主義の立場である。ギルド社會主義はこの點においてサンヂカリズムとその立場を一つにするものである。

(1) コールはその著書のうちで國家社會主義のもとにおいて賃銀制度が存續するであらうと述べてゐる。彼れ曰く『彼等(ナショナル・ギルツメン)は國家社會主義のもとにおいて賃銀制度が存續するであらうこと、并に國家がその勞働を商品として買ふことを繼續するであらうことの危險を指摘した。丁度郵便や鐵道勞働者の勞働が今日商品として取扱はれてゐるがごとくに、彼等の雇主が政府であらうとまた地方官憲であらうと、凡ての勞働者の勞働はコレクチヴィズムの一般的制度のもとに商品として取扱はれるであらう。(……)國家社會主義が賃銀制度を撤廢するといふ保障は存在しない。實にそれが賃銀制度を撤廢しないだらうといふあらゆる見込が存在する。何となればそれは資本主義のあらゆる專制の根本である賃銀制度を直接に敲きつけないからである』(G. D. H. Cole, Self-Government Industry, P. 154)

(2) Hobson, National Guilds, P. 21.

(二)

ギルド社會主義は資本主義の眞髓をもつて單なる生産手段の所有者の問題に歸せしめるものではなくしてもつと深いところに眼を放つてゐる。賃銀制度がこれである。賃銀制度をもつて資本主義の眞髓であるとなすことは決してギルド社會主義の創見ではないにしても、それはギルド社會主義の資本主義に對する批評の中心であり、國家社會主義に對する批評の最も重要な點の一つであり、そしてこの批評からしてギルド社會主義の第一歩が築かれたのである。この點についてはギルド社會主義者

のみな一致してゐるところである。

『産業不安の原因は何か？

それは主として三つである。無産階級に對する賃銀制度の壓迫、この壓迫に對する無産者の反抗、そしてそれ（産業不安）を産出するところの賃銀制度から解放されようとする願望の三つがこれである。』(1)

ナショナル・ギルド同盟の解説に從へば産業不安の原因もまた賃銀制度にある。賃銀制度は資本主義の眞髓であるとともにまた資本主義の根本的の弊害であるとするのである。そこで先づ賃銀制度とは何かの問題について述べることが必要でなくてはならない、ナショナル・ギルド同盟は賃銀制度を次のように解説する『賃銀制度とは資本の所有者が勞働力を商品として買ひ、そしてそれを使つて後――即ちそれの原料に對する適用を指導して後に賣却するその生産物を擅有するの方法である』(2)と。コールの解説は一層明白である。彼れは次のように述べてゐる。

一、賃銀制度は勞働を勞働者から抽出し、かくして勞働は勞働者としてゞなしに賣買することができる。

二、從つて賃銀は資本家が勞働者の勞働を使用することが利益である時にのみ賃銀勞働者に支拂はれる。

三、賃銀勞働者は、その賃銀をうることのために、生産組織に對する一切の統制權を明け渡してしまう。

四、賃銀勞働者は、その賃銀をうることのために、彼れの勞働の生産物に對する一切の要求權を明け渡してしまう。』(3)

即ちギルド社會主義に從へば賃銀制度とは先づ勞働者から勞働を抽出する。そしてそれを商品として勞働市場 Labour market において賣買する。從つて其賣買される勞働は人格としての勞働者とは無關係に取扱はれる商品であり、需要供給の原理に從つてその勞働力に應じて賣買されるものである。『製造業者又は工場における費用管理者の見解からすれば『勞働』は生産費の要素である。地代、建物、機械、機械の消耗破損、原料、管理勞働……生産費をもつて仕上げ、生産は是等の凡ての費用を包含してゐる。生産費においてのある種の要素は固定し、あるものは動く。地代は固定した費用であり、原料の代價は時々變化する。從つて勞働の代價も變化する。然らば何ものが勞働の代價を決定するか？概していへば確實に各種の材料及び商品の代價を決定するもの――即ちそれ等自身の生産費によつて表面上決した基本的の費用と、それに需要供給によつて決定された

不動的費用とを加へたものである。『勞働市場』は金屬市場よりも神經過敏であり、浮動的傾向をもつてゐる。……勞働は機械や綿俵が必然に商品であるごとくに商品である。』[4]その結果はその勞働が企業家にとつて利益である時にのみ賣買される。勞働者はその勞働を賣ることなくしてはその生活を支へることができないに反して資本家はたゞ彼れに利益である時にのみ勞働を買ひとるのである。こゝに資本家の權力が築かれる。主人としての資本家の權力が樹立せられる。それとともに勞働者の從屬が始まつてくる。奴僕としての勞働者の階級が成立する。『賃銀奴隷制度は勞働者が生ける道具として、生産機械の部分としてまた多量の勞働豫備のために殆んど健康に適する生活資料の費用に價しないものとして取扱はれ、かくして彼れの雇主に對して丁度機械が彼れに對する關係(彼れの思つてゐる)と同じ關係に立つてゐる時に、存在する』[5]賃銀制度は人間の社會を二つの階級、雇主と被傭人、主人と奴僕との二つの階級に分ける。奴隷階級はその勞働を彼れの主人に賣ることによつて彼れの産業についての一切の統制權を彼れの主人に明け渡してしまう。彼れは最早や一個の獨立なる勞働者ではなくして一つの機械である。彼れは一個の自由なる人格ではなくして賃銀の鐵鎖に拘束される奴隷である。賃金奴隷がこれである。賃銀制度は奴隷制度である。賃銀奴隷制度Wage slavery である。こゝに資本主義の精髓が存在する。ギルド社會主義はこう主張するのである。この點がギルド社會主義の批評の根柢であるとともにまたそれの一切の立場を基礎付けるものである。ギルド社會主義を理解しようとするものは先づこの點に着目しなくてはならない。

(1) Catechism of National Guilds (N. G. L. Pamphlet, P. 1.
(2) ibid. (3) Cole, Self-Government in Industry, P. 134 (4) Cole, Labour in the Commonwealth, PP. 17-8. (5) National Guilds: An Appeal to Trade Unionists (N. G. L. Pamphlet) PP. 1-2.

(三)

生産手段の私有をもつて資本主義の精髓であるとなす國家社會主義が先づその生産手段の私有を廢止することを主張すると同じく、賃銀制度をもつて資本主義の眞髓であるとなしてゐるギルド社會主義は直に賃銀制度の撤廢を主張する。賃銀制度の撤廢はギルド社會主義の基礎をなす第一の要求である。もとよりこの點はギルド社會主義の創見ではなくしてサンヂカリズム

もまた賃銀制度の撤廢を主張してゐる。アメリカ・サンヂカリズムとしてのI・W・W・もまた賃銀制度の撤廢を主張する。[1]ギルド社會主義はサンヂカリズムから賃銀制度の撤廢を學んだのである。そしてI・W・W・がその綱領の緒言中において、またC・G・T・がその綱領において賃銀制度の撤廢を主張するごとくに、ナショナル・ギルド同盟もまた賃銀制度の撤廢をもつてその綱領の第一となしてゐるのである。『[3]古るき勞働組合主義は公正な勞働に對する公正な賃銀の實現を目的とする純然たる團體協約並に相互保險の機關であつた。しかし今日勞働組合のうちに新らしい精神が生してゐる。それのモツトウは勞働組合の革命と、そしてある範圍まで産業的基礎によつての社會改造とを目的とする、賃銀制度撤廢である。』[4]即ち古るき勞働組合主義の目的としての 'a fair day's wage for a fair day's work' に對して賃銀制度の撤廢 Abolition of wage system を主張するのである。[5]賃銀制度の撤廢とは何んぞや。

賃銀制度の撤廢には少くとも二つの方法がある。その一つは賃銀制度から他の奴隷制度 Chattel-slavery に復歸すること、である。ギルド社會主義に從へばこの Chattel-slavery への復歸にも二つの方法がある。其一つは資本家の大トラストによるものである。他の一つは國家社會主義（コレクチヴヰズム）である。[6]即ちギルド社會主義に從へは國家社會主義もまた Chattel-slavery の制度である。ギルド社會主義はもとよりこの Chattel-slavery へ復歸するものではなく、彼れは彼れの所謂賃銀制度撤廢の第二の方法を撰もうとするものである。第二の方法とは何んぞや。

ギルド社會主義に從へば、賃銀制度の本質は勞働商品主義である。即ち勞働を勞働者から抽象してこれを勞働市場において『綿俵と同樣に』商品 Commodity として賣買することである。そして主人と奴僕との關係のもとに、生産者がその生産の組織並に勞働の生産物についての統制權を雇主に明け渡すことである。從つて賃銀制度の撤廢は第一には勞働商品主義の廢止である。『彼れが賃銀制度の廢止といふ時には彼れは商品的評價の撤廢を意味する。』[7]『勞働商品主義の廢止は『人間としての承認並に支拂である。』[8]從つてその支拂は勞働そのものに對しての支拂ひではなくして失業に對しても病氣の場合にも、等しく支拂はれるものでなくてはならない。こゝに勞働者の人格の回復が存在する。また從つて勞働者は最早や『主人』にその勞働の生産物並に生産の組織についての統制權を明け渡すことの必要が存在

しないことゝなる。そこで第二の問題が起つてくる。產業自治の問題がこれである。

(1) I・W・W・は一九〇六年の會議の決議によりて成立した綱領の序言のうちで『われ等はわれ等の旗に革命的標語、「賃銀制度の撤廢」と書かなくてはならぬ』と記るしてゐる。

(2) 勞働總同盟(C・G・T・)憲章には『賃銀制度の撤廢を呼號するための階級鬪爭』云々と記されてゐる。

(3) ナショナル・ギルド同盟は『賃銀制度の廢止と幷に國家と協同して働くナショナル・ギルドの制度を通じての產業自治を樹立する』ことを主張するために設立されたものである。

(4) Cole, World of Labour, P. 31 (5) Catechism of National Guilds, P. 4 (6) ibid., (7) Hobson, Guild Principles in War and Peace, P. 27 (8) Cole, Self-Government in Industry, P. 155

(四)

ギルド社會主義は賃銀制度の撤廢を主張するとともに『國家と協同して働くナショナル・ギルドの制度を通しての產業自治の樹立』を提唱する。產業自治の要求はギルド社會主義の第二の要素である。自由をもつて第一義とするギルド社會主義[4]は單なる貧乏の問題に滿足するものではなくして自由なる產業組織を要求する。自由なる產業組織とは單なる資本の公有またはそれの社會的管理ではなくして生產者の自治であるとするのがギルド社會主義の立場である。こゝにギルド社會主義と國家社會主義との重要な區別が存在する。即ち國家社會主義は生產手段の國有または公有を主張するとともに生產及び生產物についての國家の統制權を要求する。シドニー・ウェッヴに從へば一、何を幾何生產すべきか二、如何にして生產すべきかの問題が消費者によつて決定せらるべきものであるのみならず三、勞働條件を如何にすべきかの問題については、ウェッヴは一方に消費者の偏見を指摘し、民主的國家における產業管理が、『彼れ自身の事業を自分勝手に管理することの權利』を要求した舊式の資本家制度におけるよりも、もつと復雜な問題であることをも指摘し、そしてこれ等の條件の取り極めが『その組合員によつて支配されてゐる勞働組合の專門の商議等によつて行はるべきものであることを主張してゐる。しかしウェッヴは更にこの勞働組合のうへに社會の權利を承認し、この勞働條件が『全體としての國家の永久的利益』に從つて國家の選擧せられたる代表者並に役人 Civil service によりて最後の決定權を掌握せらるべ

きものであることを主張してゐるのである。[1]これに對しサンヂカリズムはこれ等の三つの場合が恐く生産者によつて決定せらるべきことを主張する。ギルド社會主義は國家社會主義とサンヂカリズムの中間に立つてゐる。即ち第一の場合、何が幾何生産せらるべきかの問題についてはギルド社會主義は國家社會主義の立場に全然一致することができるのである。即ちそれは『組織されたる消費者の意思によつて指導せらるべきものである。』[3]第二の問題即ち生産過程においての統制權の問題についてはギルド社會主義は『搾取に對して社會を保障するために』國家に對して統制權の分前をなすべきことを許容してゐる。何となれば消費者もまた生産過程に間接の關係をもつてゐるからである。[4]しかしそれの大部分は明らかに生産者の權利に屬するものであることを主張する。[5]そして第三の問題、即ち勞働條件の決定權の問題についてはギルド社會主義は國家社會主義の立場に反對して生産者の權利を主張する。[6]即ちギルド社會主義は國家社會主義のごとくに産業上の統制權を國家の手に集中することを主張するものではなくして主としてそれを生産者の手に集中することを主張するものである。それは生産者の專制に陷らさる範圍において、即ち消費者の利益を考量しつゝ生産者によつての産業統制を行はうとするものである。だからギルド社會主義にとつて第一の事業は「勞働階級の産業統制の思想を進めることである。』[7]こゝにギルド社會主義の第三の要素が存在するのである。しかしギルド社會主義の産業統制權の要求は以上に述べてきたとほり決して絶對的ではない。それは産業上における消費者の利益をも承認する。從て産業上における國家の權力をも承認するものである。この點においてギルド社會主義はサンヂカリズムともマルクス派産業組合主義とも區別せらるべきものである。この點においてコールが夙にギルド社會主義を批評して『ニュー・エーヂのギルド社會主義は國家と勞働組合とによつての産業の協同經營の提唱である。』[8]となしてゐることはギルド社會主義の中核をよくいひ表はした言葉であるといふことができる。

(1) National Guilds; An Appeal to Trade-Unionists, P. 1 (2) S. & B. Webb, Industrial Democracy, P. 822 (3) Cole, World of Labour, PP. 353-5 (4) ibid., PP. 358-9 (5) ibid., P. 357 (6) ibid., PP. 360-2 (7) Cole, Self-Government in Industry, P. 220 (8) Cole, World of Labour, P. 363.

（五）

ギルド社會主義の社會においては、その社會は二つの要素から成立する。勞働組合と國家とがこれである。この二つの制度は資本主義の制度においても存在する。國家社會主義の制度においても存在するとされてゐる。[1]しかしギルド社會主義のもとにおける國家と勞働組合とは資本主義社會または國家社會主義のものにおける國家または勞働組合と同一のものではない。先づ勞働組合の側から見るに、資本主義制度のもとにおける勞働組合とは『雇傭條件を維持または改善することを目的とする賃銀勞働者の永續的團體である。』[2]即ち勞働組合とは『賃銀勞働者』の團體であるとともに、雇傭條件の維持または改善を目的とする團體である。しかしギルド社會主義のもとにおいては既に述べてきたとほり賃銀制度の撤廢を要求する。勞働者は最早やその勞働を商品市場に賣買する賃銀勞働者ではなくして一個獨立にして自由なる生産者である。從つてギルド社會主義のもとにおいては『賃銀勞働者』の團體なるものは存在することができない。また勞働組合が單なる勞働條件の維持または改善を目的とすることは勞働組合をしてコールの謂ふところの Benefit club とするものであり、これによつて勞働者は自由なる生産者となることはできない。賃銀制度によつて繋ながれたる奴隷となすことである。勞働者に對して『産業統制の思想を進めそことをもつて第一義とする』ギルド社會主義は決してかゝる勞働組合の存立と兩立するものではない。彼れは單なる勞働條件の問題についての要求をもつて滿足してゐるものではなくして彼れの求むるところは自由である。彼れの欲するところは解放である。ロバアト・オウエンを動かした理想主義はまたギルド社會主義の精神である。[3]ナショナル・ギルド同盟は勞働組合を次のごとくに定義する『勞働組合は賃銀制度を撤廢し并に民主化せる國家と協同して産業統制を擔當する目的のための勞働者の結合でなくてはならない』と。

(1) Webb, Industrial Democracy, P. 818　(2) Webb, History of Trade Unionism, P. 1　(3) Cole, The Meaning of Industrial Freedom, P. 9　(4) National Guilds: An Appeal to Trade Unionists, P. 4.

（六）

ナショナル・ギルドの建設は勞働組合の改造から着手せられる。[4]勞働組合の改造とは勞働組合そのものゝ廢止ではなくして、賃銀勞働者の團體としての組合 Union を自由なる生産者

の團體としてのギルドに進めることである。ナショナル・ギルド同盟の謂ふところの國民的産業ギルド National Industrial Guilds に進めることである。ギルドとは何か。ナショナル・ギルド同盟は次のように答へる『ギルドとは産業における勞働力の完全なる獨占をなす生産者の自治團 Self-governing brotherhood of producers である。』國民的産業ギルドとは何か。『國民的ギルドとは國家と協同して産業を國民的に運營するごときギルドである。』然らば勞働組合とギルドとの區別如何。ナショナル・ギルド同盟は次のごとくに答へる『今日の勞働組合は、ギルドとは違つて、産業を經營するために組織されてゐるのではなくしてたゞその組合員の雇傭條件を改善または維持するために組織されてゐるものである。それはたゞ賃銀勞働者を包容するのみであつて月給階級とそして管理及び技術上の職員の大部分を除外する。從つてそれは産業の處理に必要なる勞働力の獨占をもつものでない。』と。卽ちギルドは一、産業の經營を要求する。二、勞働力の獨占 Monopoly of the labour power necessary for the conduct of industry を要求する。然らば今日の勞働組合は如何にしてギルドに改造することができるか。ナショナル・ギルド同盟は次のように答へる『勞働組合は各段階の連絡によつてのみギルドとなることができる。それの第一歩は産業的基礎のうへに、部分的な、競爭的な、重疊せる組合を合同することである。』と。[3]卽ち先づ産業的組合主義 Industrial unionism の要求である。

勞働組合の改造とは、ギルド社會主義に從へば先づ産業的組合主義へと行くことである。産業的組合主義はギルド社會主義にとつては必然的の要求である。この點において彼れはマルクス派産業組合主義とその立場を同じくするものである。産業組合主義とはその要求として二つの内容をもつてゐる。その一つはそれが産業的基礎のうへに立つことである。卽ちクラフト・ユニオニズムが職業による組合を要求し、從つて熟練勞働者の組合を要求するものであるに對し、インダストリアル・ユニオニズムはクラフトまたはオツキユペーションによる組合を排斥して一つの生産物または生産物の一集合を製造するためにする凡ての過程に働く勞働者を組織することを要求する。彼れの要求する組合とは大工の組合、機械工の組合ではなくして、凡ての坑夫を一組合に、凡ての建築勞働者を一組合に、凡ての紡績勞働者を一組合に組織することである。[4]インダストリアル・ユニオニズムはかくのごとくにした大規模組合主義である。しかし

それは單なる大規模組合の要求ではなくして階級的精神によつて組織された新組合精神の主體である。』產業別に組織されたる組合は必然的に新天地にと導くものではない。精神の變化なくしてはそれは一時奴隷國の來ることを防止するに過ぎないであらう。(5)』產業組合主義は階級的精神をもつて浸透されたものでなくてはならない。卽(6)ちインダストリアル・ユニオニズムは階級的精神によつて指導せられ產業的基礎のうへに組み立てられたる組合を要求する。また從つてナショナル・ギルドの勞働組合の改造とは古るきクラフト・ユニオニズムに代ゆるに階級的精神によつて指導せられ產業的基礎のうへに立てられたる新組合及び新組合主義の要求であるといふことができる。故にギルド社會主義はいふ『必要なことは到る所に甞つてオーウエンの日において勞働組合主義を動かした精神を再び捕へることである。』と。(7)

しかしギルド社會主義は勞働組合を階級的精神を有する、そして產業的基礎のうへに組織するだけをもつて勞働組合の改造が終つたと考へてゐるものではない。彼れは勞働の獨占を要求する。勞働獨占のためには、彼れは勞働組合――ギルドが產業の處理に必要なる一切の勞働力を獨占することを要求する。その結果は一方に勞働組合をクラフト・ユニオンからインダストリアル・ユニオンへと變更することを要求するとともに更に一切の勞働力の所有者をギルドに結合することを要求する。卽ちナショナル・ギルドにおいてのギルドとは獨り體力勞働者のみではなくして頭腦勞働者もまたそのギルドのうちに結合せらるべきものである。『到達せらるべき目的は全社會のための自由である。產業についての狹い見解は手段として役立つに至らないであらう。體力勞働者の問題が先入主となつて、インダストリアル・ユニオニストは眞の產業的組合が、手によつて働くものと頭腦によつて働くもの〻如何を問はず、關係產業に從事する凡ての人を包含しなくてはならないことを忘れることに傾いてきた。勞働の組織は凡ての體力勞働者が組合に加へられた時に止まるものではない。書記や、職工長や、工場支配人や、支配人や、驛長や、製圖家や、設計家や、建築技師は彼等の適當する產業組合に參加しなくてはならない。何となれば彼等は體力勞働者よりもより重要でない產業の部分ではないからである。』(8)

しかしギルド社會主義はロバート・オーウエンの理想への復歸である。それは單なる一產業內における組合を要求するに止

まつてゐるのではない。「產業的組合主義は各產業內だけのソリダリチイを意味するものではない。それは一つの產業が他の產業からの孤立を包んでゐるのではなくして、凡ての生產團體を一つの堅固な團體に連結することを含むものである。何となれば志す目的は如何なる團體の擴大でもなくして、全體としての社會の利益においての生產者自身によつてする產業の國民的組織であるからである。

『かくして頭腦勞働者は專制及び外部からの統制に對する鬪爭において體力勞働者とともにその分前を行はなくてはならない。各產業はそれ自身を一つの堅實なる組織に建設しなくてはならない。そして凡ての產業は共同の敵を前にして相提携するものでなくてはならない。

『しかし凡ての企てにおいて、完全なるソリダリティの理想は常に忘れてはならない。あらゆる等級を包含する團體のみが產業の完全な運營を引受けることができる。戰鬪的產業組合から經營的且つ生產的ギルドが生れるであらう。そしてインダストリアル・ユニオニズムはナショナル・ギルドへの第一步である。自由なる社會においては組織的生產者は彼等自身の生活と勞働とを統制しなくてはならない。そしてかゝる統制はたゞ勞働組合主義の發展によつてのみ來たることができる。現存の機關をもつてすらも、それのあらゆる不完全にもかゝわらず、勞働者は統制への第一步をとることができる。

「勞働組合からギルドが來たらなくてはならない——目的及び構造の變化によつて、そして組合員を增大することによつて。然らばこれ等のナショナル・ギルドの性質は如何、そしてそれは如何に今日の勞働組合と異つてゐるか。それは利潤を取得する主人階級に對してゐる防禦的組織ではなくして、社會に對して確定的關係をもつてゐる勞働者の組織である。——最早や協約團體ではなくして統制的團體である。個人的所有主や、國家や、地方官憲によつて運營される工場の代りに、勞働者が發言權をもたない工場の代りに、そこに產業自治が存在するであらう——規律は外的權威によつて課せられるのではなくして彼等のうへに彼等の自身によつて課せられる。今日工場立法によつて成就され——滅茶々々にされた——ものは、勞働者自身によつて勞働者自身のために作られるであらう。勞働の時間と條件とは最早個人的の利得者または國家によつて定められるに至らないであらう。そして彼等の生活を支配する人々によつて支配せられるに至るであらう。

『今日の個人所有の工場を見よ、諸君は何を發見するか？不安な仕事をもつ勞働者、彼れが支配することのできない雇主によつて或は雇はれ或は解雇され、彼れが選擧しない職長によつて、指揮せられ、社會の使用のためではなくしてたゞ個人的利潤のために貨物を製造し、彼れの製造するものゝ性質またはそれが製造される過程についての統制權なく、自ら撰まずして仕事を失ひまた仕事を行ひ、過剩生産と生産不足の結果に傾き易く——要するに單なる生産費の一要素であり、そして産業の處理においての責任ある分前者ではない勞働者。

『または國家のデパートメントのもとにおける勞働者の地位を見よ、彼れの仕事により多くの安定がある。ある場合にはよりよき雇傭條件も與へられる。しかしストライキの權利が減縮されてより多く嚴格な訓練に服する。かゝる勞働者は彼れの職長に對して支配權をもつのではなく、または彼れが製造するもの及びそれの製造される方法——彼れがなす勤めとそれが組織される方法とのうへに支配權をもたない。個人的工場においてもまた國家或は都市のもとにおける工場においても、雇はれたる人々は、せい〳〵彼れの仕事の危險を抗議することができるに過ぎない。そして決して發議または統制することはできない。

『この地位をナショナル・ギルドのもとにおける工場の地位と比較せよ。工場における凡ての勞働者は、社會の需要に應ずる生産をなしつゝ、彼れの仲間の勞働者に責任をもつであらう。彼れの仕事は安全であらう。彼れは資本家または資本家の被指名者にも、或は上から任命された外的の役人にも從屬することなくしてたゞ彼れの同僚の統制に從ふ。從れは彼れの撰んだ人によつて統制され、使用のために貨物を製造して利潤のために製造せず、ギルドによつて決定された時間と條件のもとに働き機械によつて支配せられる代りに機械を支配して、大規模生産を消費者と生産者の双方の需要に應ぜしめる地位に立ち、そして勞働の單調を救ふであらう。要するに彼れは最早や賃銀勞働者ではなく、産業における責任あり且つ自治的分前者である。彼れは最早や腐敗せる制度の最惡の濫用に對して抗議することができるのみではなしに、彼れは自由にして民主的なる組織において彼れ自ら生産を發議し且つ統制するであらう。

『われ等は一工場から始めた。……しかしギルドが國民的であるといふことを知ることが肝要である。そして諸工場や諸鑛山がそれの適應するナショナル・ギルドに連結されるであらうこ

とを知ることが肝要である。それは明日の國民的産業組合の方法によつて、今日の國民的勞働組合から生れるであらう。』[9]

ギルド社會主義は勞働組合の改造を以上のごとくに説明してゐるのである。

(1)(2)(3)(4)Catechism of National Guilds, P. 4 (5)National Guild (N. G. L. P.), P. 4 (6)Cole, The Meaning of Industrial Freedom, P. 17 (7)(8)National Guilds (N. G. L. P.) (9)ibid., PP. 5—7.

（七）

ナショナル・ギルドの建設はその一歩を勞働組合の改造から始める。今日の雇人の集團としての勞働組合を明日の自由なる生産者の團體としての國民的産業ギルドへと改造することである。しかし國民的産業ギルドは果して自由なる團體であることができるか。こゝに第二の問題が起される。この問題に答へるためには先づ各國民的ギルド National Guild と個々の工場との關係を知るべきである。

『ナショナル・ギルドと個々の工場との關係は何うなるであらうか？この答のうへにギルド・マンが獲得せんとする自由の實體がかゝつてゐる。國民的勞働組合主義は殆んど官僚政治に傾き、そして役員によつて易く征服されることを免れないと屢々いはれてゐる。ナショナル・ギルドもまた同樣に官僚的支配のもとに陷りはしないか、そして各個の勞働者の自由を今日と同樣に錯覺に終らしめるではないであらうか？

その答へは、全體としてのナショナル・ギルドとそれを成立させる工場との間における職分の區別のうちに横はつてゐる。大體においていへば、工場の職分は生産であり、ナショナル・ギルドの職分は整同と交換とであるといふことができる。疑もなくナショナル・ギルドは標準を定め一般的條件を規定するの程度において生産を取扱ふであらう。しかし主としては、實際上の貨物の製造または勞務の供與は各個の工場の掌中に握られるであらう。これに反してナショナル・ギルドは、國民的需要に對する國民的供給を充當するの意味において、主として交換の任に當るものである。かくして各個の勞働者は彼れに最も多く關係するもの——彼れの實際の勞働生活の條件について直接的統制權をもつであらう。この直接的統制をなすにおいて彼れは彼れのナショナル・ギルドの大單位を統制することを知るであらう。』[1]この職分の相違は、各個の工場をしてナショナル・ギ

ルドの奴隷となすに至らないであらう。ナショナル・ギルドの組織はかくして職分的 Functional である。職分的であるがゆえに各個の機關相互の關係はたゞ職分の相違であり、從つてその關係は權力服從の關係となることはできない。こゝにナショナル・ギルドの組織としての自由の第一步が始まるのである。次にはギルドの內部組織である。『第一にギルドの役員は外部から產業に侵入した官僚ではなくして、組合員自身によりて地方的並に國民的に選擧された指導者である。そのうへ、ギルドにおける地方的並に國民的の役員の職分は今日の勞働組合における甚だしい衝突のごとくに衝突しないであらう。官僚政治は被支配者の默從を含むでゐるに對し、ギルド組織はあらゆるギルド・マンの活動を促すように設計されてゐる。その組合員の意思の感得される程度にまで、產業上の單位を小さくし且つ管理のできる程度のものとする。產業民主主義は直接民主主義であり、そしてそれのイムミデアシイは自由の保障である。

『明らかに、產業と產業との間における區別の存在を考量しなくては、ギルド組織についての輪廓は誤解せられなくてはならない。あるものには生產と賣買との區別は他のものにおいてよりも遙に不明瞭であらう。時としては建築におけるごとく、ギルドは全く地方的必要のために生產するであらう。時としては鐵道におけるがごとく高度の集中が必要であらう。中央統制權と地方的自治體との間における權衡は產業の種類に從つて非常に相違したものであらう。しかし概していへば指導的の原則は坑や、工場(Pit, mill, factory, workshop)をして實際上の生產事業をできるだけ自由に行はしめ、それとともに中央から需要供給の國民的整同 Co-ordination を保障することである原料を獲得することと並に一般的標準と條件を定めると等しく生產物の處分に對する中央集權とともに、自發力を保障し且つ價値ある特性を保持する。地方的並に工場內における自治は、特に個々の消費者のために完成生產物を製造する產業において必要である。

『產業から產業へと中央集權の程度が相違するごとくに、ギルドの全部における政治の方法もまた相違するであらう。全體を通じて、指導的の原理は產業民主主義でなくてはならない。職長、工場支配人、及び凡てのギルドの役員または行政委員は、こ彼等が指導すべき勞働者によつて選擧せられるであらう。かくして各種の工場內における勞働者は彼等自身の役員と委員とな

選擧し、各地方の勞働者は地方的役員及び委員を選むであらう。そしてギルドの全人員は直接または間接にナショナル・ギルドの役員と委員とを選むであらう。……專門家の選任は各候補者の個人的資格を研究することのできる小團體によつて選まれなくてはならない。そしてそれ等の場合において、專門家の選擧人はその專門家が助言する地方的または國民的の委員であらうと思はれる。

『また各ギルド及び各工場は多數の階級及びクラフトから成立するであらう。一つの機械工場は鑄形製造者も、モールダアもフイツタアも、タアナアも、勞働者も、書記も、荷造人も、またその他のものをも包含するであらう。若し工場内及びギルド内における自治を實際に有効ならしめようとすれば、それ〴〵のクラフト(職)はその政治機關に代表者をもたなくてはならない。かくして工場單位における政治機關は恐らく各種のショップ及びクラフトからの代表者によつて成立するであらう。……ある一定地方内における及び全國民的産業に對するギルド官憲は各工場及び各クラフトの利害を調和し且つ代表しなくてはならない。從つて國民的行政部は恐らく各地方及び各クラフトの代表者を包含するであらう。』(2)

(1) National Guilds; An Appeal to Trade Unionists, P. 7 (2) ibid., PP. 7-8.

(八)

次に各産業内におけるナショナル・ギルド間における關係をどうするかの問題に答へなくてはならない。ギルド社會主義は前にも述べたとほりロバアト・オーウエンへの復歸である。彼れは各産業が孤立したる存在であることに滿足するものではなくして各産業の連合によつてナショナル・ギルドの組織を統一することを要求する。即ちナショナル・ギルドの組織がギルド會議 Guild Congress に結合されることを要求するのである。ギルド會議とはギルド社會主義においては、國家と並んで最高機關である。それは生産者の最高代表としての機關である。これによつて生産者の自由を表現することを主張する。彼れの職分は具體的にいへば『全體としての國民的生産の整同と、ギルド以上に關係する問題の解決、及び國家との商議』がそれである。(1)凡てのギルドを代表する合議體としてのギルド會議は、國家が消費者の側におけると同じく、生産者の最高權威であらう。(2)

しかしギルド會議は國民的にのみ存在するものではなくして地方的にもまた存在するであらう。『ナショナル・ギルドが相互に且つ國家に對して關係をもつてゐるごとくに、ギルドの地方支部は相互に且つ地方官憲に對して關係をもつであらう。』(2)

(1)(2) National Guilds; An Appeal to Trade Unionists, P. 8.

(九)

ギルド社會主義は全社會を消費者と生産者とに區別する。生産者と消費者とはギルド社會主義においてはサンヂカリズムの見解のごとくに同一人の兩面であるに過ぎないものではなくして互に利害を異にする立場をもつてゐるものである。ギルド社會主義に從へば國家社會主義(コレクチウイズム)とは消費者の利益において生産者を絞取するものである。ペンテイの言葉を借りていへばそれは『人民の、人民によつての、人民のための絞取である。』(1)それとともに生産者のうへに一切の社會組織を集中することを要求するサンヂカリズムは生産者の專制に終るものである。ギルド社會主義は一方に生産者の專制に反對するとともに消費者の絞取にも反對する。彼れはサンヂカリズムから生産者の組織を學んだ。國家社會主義から消費者の組織を學ばうとする。ギルド社會主義においては社會は生産者と消費者の二つの要素から成立する。從つて彼れの求むる社會組織は二重組織である。一方に生産者組織を要求する。他方に消費者の組織を要求する。生産者の組織とはギルドである。それの最高表現としてギルド會議が存在することは既に述べた。然らば消費者の代表とは何かギルド社會主義はこれを國家または地方官憲と名ける。

『何故に國家はギルドにとつて必要であるか?

『各ギルドはそれ自身の産業内の生産者を代表するだけである、そこで凡てのギルド及びギルド會議はたゞ全生産團體を代表するだけであるがゆえに、ギルド及びギルド會議はその補助者として消費者を代表する團結をもたなくてはならない。――即ち國家及び地方官憲のうちに彼れの補助者をもたなくてはならぬ。

『しかし二種の團結の必要があらうか?生産者と消費者とは大部分同一の人ではないか?

『民主的國家においては、大抵の消費者は生産者であらう。凡ての生産者が消費者でなければならないがごとくに。しかしこの同一の人々が今日消費者としてまたは生産者として集團してゐるかは全く別である。

『その相違を説明することができるか?

『同一の町における消費組合と勞働會議とは主として同一の人

々を代表してゐるであらう。しかし彼等は消費組合の被傭者のうちにおけるストライキについて全く別個の見解をとるであらう。双方の見解が代表されることが必要である。』[2]

かくしてギルド社會主義においては一方にギルド會議が存在するとともにこれと對立して消費者の代表者、國家（または地方自治體）の組織を承認する。この點においてギルド社會主義はサンヂカリズムまたはマルクス派産業組合主義と見解を異にするのである。そして國家を承認することにおいて、國家社會主義とも、資本主義ともその立場を一つにするものである。しかしギルド社會主義においての國家とは資本主義においての國家のごとくに壓迫の機關としての國家でないとともに、國家社會主義においての國家のごとくに奴隷國 Servile state ではない。彼れの要求する國家とはたゞ消費者の利益を代表する機關である。即ち生産者會議としてのギルド會議に對して消費者を代表するのである。もつと正しくいへば生産者會議と別個の人を代表するのではなくして別個の見解――別個の經濟的職分を代表するものである。[3] 從つて國家とは一定地域内における人民の消費者としての經濟的職分を代表するものである。また從つてギルド社會主義においての國家とは職分的國家である。それは生産者を壓迫しまたは絞取するの國家ではなくして生産者と對立しての消費者の自由を保障するの職分をもつてゐるものである。即ち眞實なる民主的國家であるとされてゐるのである。

かくしてギルド社會主義の組織は二重である。それは國家とそして夫と對立する機關としてのギルド會議の建設を提唱する

(1) Penty, Old World for New, P. 29 (2) Catechism of National Guilds, P. 7 (3) National Guilds League Pamphlet (N. G.), P. 10.

（十）

次に起つてくる問題はギルド會議と國家との關係である。ギルド社會主義においての國家とは既に職分的の國家である。從つて彼れはギルド會議に對して權力服從の關係に立つことのできないのは當然である。然らばその關係如何。

『ギルドと國家との關係はどうなるであらうか？

『國家は生産手段を所有するであらう。そしてそれをギルドに賃貸するであらう。それはまた産業の膨脹に必要なる資本を供給するであらう。これに對してギルドは國家に對し、それ自身の組合員に對し、他のギルドに對し、そして公衆に對して責任を負擔するであらう。

『國家に對するギルドの直接の責任如何？

『各ギルドはそれの監督に委託された産業の經營に對して責任

を有するであらう。そして地代の代りに國民豫算に對して年租を納めるであらう。

『ギルドがそれの組合員に對する責任如何？

『これ等の責任は、その組合員に對して、病氣及び健康の時、並に職業において及び失業においての、用意とを含むであらう。そして彼等の職を遂行することの條件及び手段、並にその職の熟練を習得または使用することの準備、前途ある組合員を訓練することの準備、そして凡ての組合員に對してギルド内における地位を保持することの機會を含む。

『他のギルドに對するギルドの責任如何？

『ギルド諸團體は相互にそれ〲生産した生産物の製造者幷に使用者として頻繁に相互間の關係をもつであらう。……こゝにギルド會議の必要が存在する。

『公衆に對するギルドの責任如何？

『就中、能率的且つ公正な勞務、そして公正な物價。

『ギルドが參加する四關係においての爭議は如何にして解決せらるべきか？

『國家または公衆との爭議は關係ギルド、ギルド會議、そして國家とを合せて代表する團體の前にもち出されるであらう。そして若しこの團體によつて決定されないとすれば國家とギルド會議とを代表する合同委員會の前に持出されるだらう。』

『ギルド相互間の爭議は如何にして解決せらるべきか？

『若し爭議者が一致點を見出すことができなかつたとすれば、』ギルド會議によつて。[1]

以上の問答によつてギルド相互關係、幷にギルドと國家との關係が大體において明らかにされたと思ふ。

(1) National Guilds; An Appeal to Trade Unionists, PP. 7-8.

（十一）

以上によつてナショナル・ギルドの輪廓とその建設とは大體に明らかにされたことと思ふ。しかし以上はたゞ産業上の關係においてのギルド社會主義の立場を述べたに止まつてゐる。ギルド社會主義は社會の職分をもつて産業に限らうとするものではない。彼れにおいては生産は人間生活の一切ではない。ギルド社會主義はもつと廣い立場から社會を觀察するものである。彼れに從へば社會は産業的要素と非産業的要素とから成立する。從つて彼れの畫いてゐる社會は次のごときものとなる。

- 社會
  - 産業的職分
    - 消費者的職分――國家
    - 生産者的職分――ギルド會議
  - 非産業的職分｛教育、衛生其他

私は最後に非産業的職分について述べる必要に遭遇した。しかしそれは他の機會に讓るであらう。（大正九年二月十三日）

無政府主義の學說と大學教授の職分

法學博士　佐々木惣一

本論は他の機關に依ても發表したものであるが、問題の性質上成るべく廣く流布せしめたいので、本誌の餘白をかりることゝした。

一　大學令に所謂「國家思想ノ涵養」の疑義

大學教授が無政府主義の學說を唱へることは、大學教授の職務の違反なるや否やの問題を研究せねばならぬ。大學教授の職務に關する法規は大學令である。然るに、大學令に於ては大學の任務を定むるの規定はあるけれども、直接に大學教授の職務を規定したるものは、之を見ないのである。併し、大學教授の職務は大學の任務を實現する所以である。大學令が大學の任務を規定して居るのは、即ち、大學教授の職務を規定して居るのである。然れば、大學教授の職務を、大學令の規定に依て知ることが出來る。大學の任務が反射して大學教授の職務となるのである。然らば大學の任務、從て大學教授の職務は如何なるものであるか。

大學令第一條に依れば、大學の本來の任務は、學問の研究と學問の授業とであつて、兼ねて、國家思想の涵養に留意すべきものとせられて居る。其の所謂國家思想の涵養とは如何なる意味を有つて居るものであらうか。元來此の如き文句は、大正七年十二月五日發布、同八年四月一日施行の新大學令に於て、初めて、用ゐられたものであつて、其の以前の大學制度に於ては之を見なかつたのである。所で、此の文字は、實は、意義不明である。其の意義が不明であると云ふのは、それを大學令中に於て大學の任務に附隨せしめてあるものとして考へる場合に就て云ふのである。之を大學令より切り離して考ふるときは、或は明瞭に考へらるゝかも知れない。然しながら、今知るを要するのは、大學令中の大學の任務に附隨せしめて用ゐられたる、國家思想の涵養と云ふの意味である。言ひ換ふれば、大學教授

の職務として考へられたる、國家思想の涵養と云ふことは如何なる意味を有つかと云ふことである。之は決して明瞭であるとは云へない。現に今日大學教授たる人々の中に在ても、此の點に關しては、疑義を懷て居る者が少くあるまいと思ふのである。然らば其の意味は如何であるか。

元來根本に考へて見なければならないのは、新大學令に於て特に此の文字を附け加ふるに當て、吾々は果して、明確なる意味を考へて、其の意味を有するものとして、此の文字を用ゐたものであるかどうかと云ふことである。之に就ては私は消極的に答へざるを得ないやうに感ずる。先づ其の制定に參與した者の意見はどうであらうか。私は制定に參與した者も、恐らく、明確なる意味を考へて居なかつたのではないかと思はれるのである。私は、研究の爲めに、當時大學令の制定に參與せられたる一二の人々に就て、國家思想の涵養に留意すると云ふの意味を尋ねて見たのであるが、其の何れからも明瞭なる答を得なかつたのである。殊に此の規定は本來教育調査會の立案中には存在して居なかつたのであつて、樞密院に於て之を設けたと云ふことを聞いた。卽ち本令制定の當時制定に參與したる者の間に於ても、一般に、右の文句の意味に就て、明瞭なる內容を意識して居なかつたと思はれるのである。次に現に大學の教授たる人々の間に就て見ても、此の文字が附け加へられたるが爲めに、特に新大學令の下に於て、其の職務の內容に變化を生じたものと考へ、又は舊大學令の下に於て有して居た職務以外に新なる職務を生じたものと考へた人は、恐くは一人もあるまい。更に翻て一般の社會の人々に就て見ても、此の文字に依て大學教授の職務に新たなるものを要求せられたと云ふことは、少しも考へて居なかつたと思ふ。然れば、新大學令制定に際して、此の文字を附け加ふることに依て、制定に參與したる者も、大學教授自身も、又一般社會も、之が爲めに、從來大學教授の有して居たる職務以外に何等か新たなる職務を附け加へたものとは考へず、卽ち、何等重大なる意味を有するものとは見ないで、輕く看過したものと云ふの外はない。然るに、今日より云ふときは、之は非常なる不注意であつて、殊に大學教授たる者自身から云ふならば、其の不注意に就ては責任を免かるゝことは出來ない。少なくとも、私自身は、制定當時に於ては、特に注意せずして、今日特に之を論議せなければならないと云ふことに就ては、自ら慚愧に堪へないのである。斯く云ふのは理由があるのである。それは、本論の問題たる無政府主義の學說を

立つる者に就て、右の國家思想の涵養に留意すべきものであると云ふ文字を引用して、此の規定あるが故に、無政府主義を立つると云ふことは、國家思想の涵養に留意するの、職務に違反して居るのであると云ふの見解が、往々散見せられるからである。此の見解は、皮相的に考へると、如何にも尤もらしいのである。よく考へるならば、此の如き見解の妥當でないと云ふことは、勿論、直に明白となるのであるけれども、併し、此の如き見解は、世間に於てはかなり廣く行はれて居り、甚しきは、學界に於ても之に接することがある。此に於てか、今や、國家思想の涵養に留意すると云ふことは、果して如何なる意味を有するものであるかと云ふ疑問が起つたのである。此の疑問を明に決定して置くの必要が生じたのである。之は一時の便宜的手段としての要ではなく、永遠の理論的必要である。又特定の一つの大學のみの必要ではなく、總ての大學に共通する必要である。又、獨り大學のみの必要ではなく大學に學問の研究を委托して居る一般の社會の必要であると思ふ。それ故に、此のことを明にして、茲に其の解釋を研究し、之を定めて置くの必要があるのである。而して、若し其の解釋にして、大學の性質に照して、適當ならざるものを生ずるの外はないとするならば、進んで彼の大學令の改正を要求するの外はないのである。そこで私は、今、自分の解釋する處を公にしやうと思ふのである。之を公にするのは、固より自分の解釋を正しいと信ずるに依るのであるけれども、併し、寧ろ問題の提出其のことに重きを置きたいのである。

二　解釋の根本見地

大學令の解釋を爲すに當て、無視するを得ざる根本見地がある。之は最も注意を要することである。

其の一は、大學の任務から學問の研究なるものを引き離してはならないと云ふことである。一般に社會が大學と云ふものを観念するとき、それが學問の研究を爲す處であると考ふることは、普通である。それは必ずしも、制度の規定を俟たないのである。之を制度に徴して見ても、此のことは從來の大學令の下に於て、何等異論のないことであつたし、新大學令の實施後に於ても、此の點に就ては、何等の變更をも見ないと云ふの外はない。然れば、新大學令に於て、大學に關する如何なる規定を設けたとしても、大學から學問の研究を引き離したと云ふことは考へられないのである。それ故に、大學令の解釋に就ても、

大學から其の本來の任務である所の、學問の研究を引離すの結果を生ずるが如き、解釋を爲すことは、許されないのである。此のことは最も明瞭に定めて置かなければならない。それ故に大學令が大學の任務に附隨して、國家思想の涵養に留意すべきものと規定しても、其の意味は、學問の研究と云ふことを大學から引き離すが如きものであつてはならない。即ち、學問の研究と牴觸するが如き意味に於て、此の文字を用ゐたものとは云へないのである。然れば、此の文字を解釋するに當つても、學問の研究と云ふことゝ兩立するが如き意味を附するの外はないのである。

其の二は、大學令は、其の制定の當時存在して居た大學の狀態を、其の儘認めて、其の狀態の上に、制定せられたものであると云ふことである。而して、其の狀態は、前に述べた如く、今日に至るまでは、何等の變更をも見ないのである。然れば、大學令制定の當時から今日に至るまでの大學の實狀は、大學令の規定に依る任務を實現して居るものと云はなければならない。即ち、大學令に所謂國家思想の涵養に留意して居るものと云はなければならない。之も、又、國家思想の涵養と云ふことの解釋上、必要なる點である。

三　涵養の字義の限定の必要

前に、私は、現今の大學の實狀が、大學令の下に於て國家思想の涵養に留意して居るものと云はねばならないと云つた。然るに、斯く云ひ得るが爲めには、國家思想の涵養と云ふことに特別の意義を與へるの必要があるのである。それは、國家思想と云ふの意義に就てゞはなく、涵養と云ふ意義に就てである。

涵養なる文字は、字義通りに云ふならば、養成するとか、又は注入するとか云ふ、積極的の意味を持て居るのである。併し若し、此の字義通りに、之を解釋すべしとするならば、今日の大學教授は、大部分、職務に違反するものとならざるを得ないのである。何故なれば、今日の大學教授の大部分は、國家思想の養成又は注入と云ふが如きことを行なつて居ない。それのみならず初めより國家思想など云ふことゝ何等の關係のない處のものゝ研究に從事して居るからである。彼の醫學や理學や工學や農學の研究の如きは、明かに然うである。法學や文學や經濟學の如きものを研究する者でも、初めから國家思想など、關係のない研究を爲して居る者が、寧ろ多いのであつて、國家思想と關係のある研究を爲して居るものは極めて少いのである。然

れば、國家思想の涵養と云ふことを、文字通りに解釋するならば、今日の大學教授の大部分は、職務違反とならざるを得ないのである。かくの如き解釋の妥當でないと云ふことは、何人も爭はない處であらう。即ち、今日、一般に、大學令に依る任務を果して居るものと考へられて居る大學の現狀に顧みて、合理的に大學令を解釋しやうとするならば、國家思想の涵養と云ふことを、文字通りの積極的の意義とすることは、到底出來ないのである。そこで、消極的に之れを解釋して、國家思想を妨害しないと云ふ程の意義に解するの外はない。然しながら、此のことは、國家思想と云ふの意義に關するのでなくて、其の涵養と云ふの意義に關する議論である。そこで、國家思想と云ふ意義は更に進んで之を定めなければならないのである。

四　國家思想の意義

國家思想なる語は、多くの人の用ゐる所であるけれども、決して明瞭なる意義を持て居るとは考へられないのである。今、大學令が用ゐて居るものとして、其の意義を明にするに當つては、注意せなければならないことがある。それは、其の意義を一般の社會觀念に據て定めなければならないと云ふことである。各個の個人が、特種の意義を與へて、之を用ゆることがあるのであるが、此の如き、個人的の、主觀的の意義は、其の用法自身が本來適當なるや否やは別論とし、從て、假令それが適當であるとしても、法典上の用語の解釋としては、之に依ることを得ないのである。法典上の用語の說明に在ては、全く社會觀念として、國家思想に與へて居る意義を見るの外はないのである。

然るに、此の如く、客觀的に考へられたものとしても、其の意義は必ずしも一つに歸しないのである。それ故に、次の如き解釋方法を取るの外はない。即ち、社會觀念として、國家思想なるものゝ下に想像せらるべき種々の意義を考へ、その意義の中唯、大學令が本來規定せんとする、大學の任務たる、學問の研究と云ふことゝ兩立し得るものを採用するの一途あるのみである。然るに、國家思想と云ふ言葉を用ゐる場合に、最も普通に考へられ又用ゐられて居る處に依れば、全く具體的の考へ方である。吾々が現在國民として所屬して居る國家の具體的の命令に服從するの精神と云ふに外ならないのである。例ば法律の命ずる處に從ひ、又行政處分の命ずる處に服すると云ふが如く國家が具體的に命ずる處に服從して、其の命令に違背しないと

云ふ精神を指すのである。國家は何故に存在するのであるかと云ふ問題を理論的に考へて、之を是認するか又は否認するかと質し、それを是認すと推論すると云ふやうなことではないのである。即ち、吾々が理論的に考へて、それを是認せねばならぬと論ずることではなくて、唯、國家の命ずる個々の命令に服從するの精神を有つと云ふことである。此のことに就ては、今少しく說明せなければならない。

吾々が國家の具體的の命令に服從するのは、決して其の命令が内容上正當であるかどうかと云ふことは關係なく、それが國家の命令であるからである。故に、吾々は、一方國家の具體的の命令には服從しつゝも、他方に於ては、其の命令そのものゝ内容を正當でないとして之を非議することがあるのである。國家の個々の制度を批評し、又時に命令の効力を法的救濟を以て爭ふことを許されて居るのは、皆右の趣旨に基くのである。吾々は、國家の命令を、内容上正當にするが爲めに、之れを批評し、其の不當とする所のものがあるならば、之を正當なものたらしむる爲めに、之を爭ふのは、寧ろ、國家をして正當なる行動をなさしむる樣に努力するものである。眞の愛國の精神と云ふものは茲に存して在るのである。此の眞正の愛國の精神を一に國家思想と云ふてよいのである。此の如き意味に於て、國家思想と云ふ語を用ゐたいと、私は常に考へて居るのである。併し、此の意義は、客觀的に用ゐられたる社會觀念であると云ふことは出來ないから、大學令の解釋に就て、之を引用することは當を得ないのである。此の如く國家の具體的の命令に服從するの精神、之を國家思想と普通に云ふて居るのであつて、此の意味に於ける國家思想と云ふに所謂思想とは、精神と云ふ意にして、理論と云ふの義ではないのである。そこで、右の國家思想、即ち、國家の具體的の命令に服從するの精神を妨害しないと云ふこと、之を國家思想の涵養に留意すると云ふとするの外はない。

五　學說としての無政府主義と國家思想の涵養

學說として無政府主義を唱へると云ふことは、決して、それ自身は當然に、國家の命令に服從するの精神を妨害するものでないのである。吾々は國家の或命令の内容を不當としつゝも、之に服從するの精神を持つことが出來る。のみならず、それが吾々の國家生活に必要である。獨り國家生活のみならず、一般の

團體生活に於て然うである。吾々は、吾々の屬する團體の行動を不當であると考へる場合に於ても、尙ほそれに服從することを要する。それでこそ、團體的生活が維持せられるのである。それと同じく、理想的には、權力なき社會生活即ち無政府の社會生活と云ふものを希望すると云ふても、決して、それは、國家の具體的の命令に服從しないと云ふことではないのである。右の如き學說を主張しつゝも、尙ほ現實の國家の命令に服從することは少しも妨げないのである。然れば、學說として無政府主義を唱へるが爲めに前述べた意味の、國家思想の涵養を妨害するものであるとは云へないのである。即ち、之を目して、大學令に依る大學敎授の職務に違反したものと云ふことは出來ないのである。

元來無政府主義と、一口に云ふけれども、二種のものを區別して考へねばならない。政治學者や法學者の間に用ゐられて居る言葉としては、無政府主義は一つの國家理論であり、一つの國家學說であると云ふことは、論を待たない。然るに、往々、今直に、無政府主義を實現しやうとする者があつて、暴力破壞の行動を取る者もある。此等の者も通俗には無政府主義者と云はれて居る。此等の者は、現在の國家の具體的の命令に抵抗するの態度を取つて居る。此に於て、無政府主義を實現する爲めに暴力破壞を行ひ、國家の命令に服從せざることと其のことを以て無政府主義であるかの如く誤解するの傾向が生じた。然しながら、之は學說としての無政府主義と全然區別して考へなければならないのである。然れば、學說としての無政府主義は、一つの國家理論であり、一つの國家學說であると云ふことを、特に明にして置かなければならない。此のことは彼の公法學者イエリネツク敎授の如きも明に言明して居る所であり、又、特に無政府主義のことを研究して其の結果を發表して居る彼の私法學者エルツバツヘル敎授も明にして居る所である。然れば、學說としての無政府主義を取ることは、決して、それ自身に、前述の國家思想、即ち、國家の具體的の命令に服從する精神を妨害すると云ふことゝ、少しも、關係がないのである。それは、恰も、吾々が國家の具體的命令を不當としつゝも、尙ほ之に服從することが出來るのと、同樣である。

六 反對の解釋の不可能

大學令に所謂、國家思想の涵養なることは、右の如く解釋することに依てのみ、學問の研究と云ふ大學の任務と兩立するの

である。若し、此の如く解釋しないならば、大學に於ては、價値判斷と云ふ立場から、國家の研究を爲すことは、到底出來ないこと丶なるであらう。

元來、價値判斷と云ふ立場から、國家の研究を爲すの方法は種々あるけれども、之を大別すると、一般に國家の存在の理由如何と云ふ問題と、國家の個々の行動の理由如何と云ふ問題とに、分れるのである。後の問題は個々の政策の問題であつて、實は前の國家の存在の理由の問題よりして、引き出されなければならないのである。國家の存在の理由を知ることとなしに、國家の政策を立てることは、到底出來ないのである。勿論之は、彼の實際政治家などの議論する政策を云ふのではない。學理としての政策を云ふのである。それ故に、價値判斷と云ふ立場から、國家の研究を爲すに當ては、國家の存在の理由如何と云ふことが、實に根本的なる前提の問題である。苟も正確に、國家學や政治學を研究せんとするならば、必ず、先づ、此の問題より着手せなければならないのである。然るに、此の問題より着手する以上は、其の研究の經過に依り、如何なる結論を得るかは、勿論始めより知ることが出來ない。之に就て、少しく說明する必要がある。

凡そ學問の研究に在ては、或獨斷を前提とすることを許さない。然れば、或事物を、學問として研究すると云ふ場合に、若し、其の結論として想像せらるべき二つの場合を考へて、其の中の一たる特定の結論を、推斷してはならないとせられるならば、それは、眞の學問の研究ではないのである。學問として或事物を研究するに當ては、其の結論は、自然に生ずべきものであつて、特定の結論を得るやうに研究し、又は、特定の結論を避くるやうに研究すると云ふが如きことは到底出來ないのである。尤も、研究の方法として、時に、或假定を設けることはある。殊に自然科學の研究に在ては、此の如き研究方法を採ることは、珍しくはない。然しながら、それは、或囚へられざる眞理に到達するまでの手段として、暫時之を立て丶置くに過ぎない。其の假定の內容を、動かすべからざるものとして、之より他のものを、演繹せんとするのではないのである。寧ろ、其の假定自身の可能なるや否やを檢査するが爲めに、其の假定を立つるのである。それは或獨斷を前提とするものとは、全く異なつて居る。然れば、或獨斷を、動かすべからざる、前提と定めて、其の前提たる獨斷に關係しない範圍で研究するとか、又は之に關係しても之を動かないものとして研究をすると云ふが如きこ

とは、學問の研究ではないのである。

此の學問の研究の本義は、國家の存在の理由如何を研究する場合にも同樣であらねばならぬ。即ち、苟くも國家の存在の理由如何の研究を爲すと云ふ以上は、初めから其の結論を指圖すべきものではない。其の結論は、研究の推理に依て、自然に生ずるものを俟つの外はないのである。若し、初めより、國家の存在の理由を否認すべからざることを、獨斷的に、決定して置くならば如何にして、其の存在の理由の研究を爲すことが出來るであらうか。それは到底不可能である。之は、敢て、之を否認すべからずと獨斷する場合のみには限らない。之を否認せよと指圖せられる場合でも同じである。即ち、國家の存在に就て、初めから、或は是認すべしと定め、或は否認すべしと定むるが如きは、結局國家の存在の理由を研究すべからずと云ふとに外ならないのである。然れば、學問の研究と云ふ見地から云ふならば、國家の存在の理由を否認するとが惡いと初めから定めるのは、つまり、國家の存在の理由を研究するとが惡いと云ふとに外ならぬのであるから、獨り國家を否認する無政府主義の主張のみが惡いのではなく、之を是認するの國家主義の主張も惡いと云はざるを得なくなる。「國家の存在の理由如何を研究せよ、但無政府主義の學說を立つることを許さない必ず國家主義を唱へよ」と云ふが如きことが、如何にして學問の研究と云へるであらうか。それ故に若し此の如き見地を取るならば、初めより、國家の存在の理由如何と云ふ問題を提出することが非常なる矛盾である。此の如き問題の提出の意味のあるのは、其の研究の結果に依て、或は之を是認し或は之を否認することがあるからである。若し、之を是認すべしと云ふの獨斷を立つるならば、初めより右の問題そのものが無意味となるのである。然るに、現に東京帝國大學教授小野塚博士は、其の政治學の著書に於て、此の問題を提出して研究せられて居る。恐らくは、同大學の講義に於ても、此の問題を提出せられて居るであらう余も、亦京都帝國大學に於て此の問題を研究して居る。兩帝國大學や他の大學に於ける教授諸氏中、他にも、此の問題を提出せられて居る人は、あるであらう。此等の研究態度は、皆、國家を是認すべきか否認すべきかの點が研究の結果に依て明となるとするに於て、始めて意味を有つのである。若し、初めより國家を是認すべしと定められて居るならば、我帝國大學に於て爲されつゝある問題の提出は實に無意味のものとなるのである然れば、私自身の見地に於ては、國家存在の理由の研究の結果

は、國家主義に歸着するのであるけれども、然しながら、之が爲めに、其の結論を異にする無政府主義も、亦研究の結果に外ならないことを認めねばならぬ。それ故に、大學教授が國家の存在の理由を研究するの結果、國家の存在の理由を否認するに至ても、それも、亦畢竟學問の研究の結果たるに外ならない。學問の研究は大學教授の職務である。然らば、大學教授が、國家の存在の理由を研究するの結果、無政府主義なる學說を立つることは、其の大學教授に取ては、それ自身、職務を行ふた結果に外ならぬ。職務を行ふた結果なる學說の主張が職務違反なりとは、到底考へられないのである。且それが國家の命令に服從する精神と關係のないことは、前に述べた如くである。

七　官吏たる大學教授

以上述べたる處は、一般に大學教授の問題であつて、帝國大學の教授たると、私立大學の教授たるとを分つべきではない。或は、帝國大學の教授は官吏であると云ふの故を以て、無政府主義を唱ふるを非とする者があるかも知れないが、此の如き見解は、到底其の何の意たるを解し難いのである。大學教授が、其の研究の結果、無政府主義の學說を立てゝも、之が爲めに、職務違反とならないで、寧ろ職務を行ふた結果に過ぎないと云ふこと、前述の如くであるとするならば、それは、やがて、其の大學教授が官吏として有する職務を盡したものに外ならない此の場合に大學教授が官吏たると否とを分つの根據は、少しもないのである。要は、大學教授たるの職務から見るべきである。帝國大學教授が官吏であると云ふことは、單に無內容に、官吏と云ふのではない、大學教授の職務を有する官吏である。而して、それが、大學教授の職務を盡した場合に、官吏たるの義務に違反すると云ふが如きことは、到底理解せられないのである。

八　餘論

以上私は、大學教授が、無政府主義を主張することが、制度上如何に取扱はるべきものであるかを論じたのである。之は無政府主義其のものゝ當否の問題とは全然關係のないことである。無政府主義の當否の問題は本論以外の問題であつて其自身別に研究するの外はないが、私は之に贊成しない、私は國家の存在を是認する國家主義を主張する者である。然るに、世上往々、無政府主義其のものを非とするの點を根據として、其の學說の制度上の取扱の問題を解決しようとするの見解のあるのは全く問題の論點を見誤つて居るものに外ならぬ。惜むべきである。

(三月七日)

勞働總同盟（C・G・T）の研究

山川均

一　C・G・Tの起原

佛國革命の歷史的意義は、新興の資本家階級が、封建的特權階級に代つて、自己の政治的特權を確立したものに外ならぬ。そこで革命は一方には舊來の階級關係を廢止すると同時に、他方には直ちに、新たなる階級關係を確立した。そして一七九一年には、早くも革命の反動的、紳士閥的性質は明かとなり。自由平等を標語とするデモクラシーは、畢竟、新興資本閥の獨裁政治（ディクテエトルシップ）に外ならぬことが暴露された。

斯くて佛國革命は、一七九〇年八月の法律によつて、一切の市民に對して集會及び結社の自由を保障し、更に九一年三月の法律はギルドを廢止して、謂ゆる『勞働の自由（リベルテ・デユ・ツラヴアユ）を』確立し、資本的搾取の道を淸めた。然るに九〇年法の結果として九一年の夏には、賃銀問題を論議する幾多の勞働者の大集會は巴里に開かれ、當時の運動の中堅となつてゐた大工の間には、共濟會の名の下に強大なる勞働組合の組織を見た。この組合運動勃興の結果は、一切の職業的團結の禁止を目的とする彼の有名なル・シャプリエ法の制定であつた。團結は國家のうちに國家を造るものである。國家の內部には、各人の特殊の利害と、一般の利害とがあるのみである。何人と雖も、市民に中間的の利害を鼓吹し、團體的利害によつて、市民を分裂せしめることを許さない』。ル・シャプリエ法は斯ような立場から、傭者被傭者に均しく職業上の團結を禁止したが、其目的が勞働者の組合運動の鎭壓に存したことは云ふまでもない。

此政策は、ナポレオン執政時代を通じて變る所がない。一八三〇年三月の立法は、或種の勞働者には身分證明の携有を命じたが、四月の立法はこれを全ての勞働者に及ぼし、且つ團結的の行動を禁止した。更に一八三四年四月の立法は、違法と見做さ

れた團體の成員に對する刑罰を重くし、二十名以上の團體は解散を命じ得ることゝした。

一八四八年の革命は、民衆が一七八九年の當時に返へらんとする努力であつて、普通選擧權及び十時間勞働の獲得、一七九一年、一八〇三年及び一八三四年法の廢止を見、法律は『勞働者が其勞働の利益を享有する爲に團結するの權利』を認めたが、資本階級は一八五二年の立法によつて、再び是等の成果を奪ひ去つた。

それにも拘らず、是等の年代を通じて勞働爭議は到る處に起り、罷工裁判事件は每年數十件に上ぼつてゐた。是等の罷工は多くは團體なき勞働者の自然の曝發であつたが、中には、種々なる方法の下に法律を潜ぐつて存續した勞働團體によつて指導せられたものもあつた。是等の勞働團體には三種ある。最も古くからあるものは『コンパンノンナーヂュ』であつて、中世のギルド制度の下に起つた獨身者旅職人の共濟團體である。次には共濟會(ミュチュアリテ)であつて、共濟會は英國の勞働運動史に見るが如く、佛國に於ても久しく勞働組合の任務を果してゐた。更に是等の外に經濟上の新形勢に促がされて起つた抵抗的團體(ソシエテ・ド・レシスタンス)がある。此種の團體は各々特殊の會名をもつて居るが、何づれも傭主に對抗して、團體的交渉權の獲得、勞働條件の支配を目的とするもので手當金制度には一般に重きを置かぬ。是等の團體は何づれも秘密の結社ではあるが、而かもコンパンノンナーヂュに見るが如き、宗教上儀式上の中世紀的色彩を有しない、純粹の勞働組合と見做すべきものである。此種の團體に屬する最古のものは恐らく一八三三年に里昂織工の間に組織せられた『ドュヴォア・ミュチュエル』である。

以上三種の團體は、何づれも團結の力によつて傭主を壓迫し單に勞働條件の改善を得ようとすることを以て、唯一の目的とし、又は其目的の一部としたものである。然るに一八三〇年に至つては、佛國勞働者の間には全く新たなる思想が勃興した。即ち私有財產を基礎とする現在の經濟組織そのものを否定し、新たなる產業組織を以て之に代へんとする、社會主義の思想である。そして之が實行方法として選ばれたものは、協同生產組合であつた。生產組合を以て賃銀制度に代へようとする思想はサン・シモン及びフウリエーの學徒により、ブュセイによりて夙に唱導せられたが、ルイ・ブランの宣傳によつて初て勞働者の間に勢力を占め、一八四八年の革命は、佛國の勞働運動に深く此思想を印象した。

一八四八年の革命は、抵抗的團體の如き純粹の勞働團體の發達に、大なる刺戟を與へた。是より先、此種の勞働團體は僅かに少數職業の間に限られてゐたが、今や多くの團體は種々なる職業の間に勃興した。然るに一八五一年のクウデターは四八年の勝利の結果を覆えし、第二帝政時代の最初の十年間に是等の團體は多くは鎭壓せられ、鎭壓を免れたものは再び往年の秘密結社となるか、さもなくば共濟會の假面に隱れて、僅かに存在を續けてゐた。ところが一八六〇年代になると、組合運動は俄然として、捲土重來の勢を以て勃興した。此年代に於ける組合運動勃興の原因は、第一には佛國の工業化であつた。一八五一年から六一年の間には、工業用の機械及び動力は三倍弱の增加をし、其進歩の割合は、一八一五年に初めて蒸氣力による機械の輸入せられてより一九一〇年に至る、何づれの期間にも比類がない。第二には萬國博覽會を機會として、佛國の勞働者が英國勞働者と交歡し、其組合運動の影響を蒙つたことである。第三には、勞働階級が漸く政治上のデモクラシーに失望し、「勞働階級の解放は勞働者自らに待たざる可らずといふ自覺が漸く高まり來つたことである。」最後に、而かも最も重要なる直接の刺戟を與へたものが、彼のマルクス等を中心とする萬國勞働者(インタナショナル)協會の出現であつたことは云ふまでもない。

斯くて一八六八年六月の法律は、不完全ながらも勞働團結の權利を公認したが、此法律は畢竟、止むを得ず既成の事實を承認したものに過ぎなかつた。此法律の制定に先つて、勞働者は自己の實力によつて既に此權利を行使して居つた。彼等は團結的行動が尙ほ不合法的行爲であつた時に、自己の實力によつて、事實上に團結を造つてゐた。法律は此既成の事實が最早如何ともすることの出來ないほど强大となつたので、此事實を止むなく承認したものに外ならぬ。「斯くて一八六七年には我法律の下に公然、靴工のジヤムブル・サンヂカルの設立を見、次いで巴里勞働團體聯合會議所(シヤンブル)の設立を見た。組合運動は漸く滿潮に達しようとした。此時普佛戰爭は俄然として、多數の勞働者を階級戰の戰列より奪つて國家戰の戰線に拉し去り、更に巴里コムミユンの悲慘な最後は、多くの勞働階級の鬪士と精英とを市街戰と絞首臺との上に失ひ、次いで萬國勞働者協會佛國支部の鎭壓となり、『商工業傭主同盟』(リユニオン・ナシオナル・デユ・コンメルス・エ・ド・ランヂユストリー)の出現となり、さしも遼火の勢を示した組合運動は、一時全く聲を潛めて了つた。

巴里コムミユン後の組合運動は、先づ急進共和主義たるベルブレーによつて起された。ベルブレーは同盟罷工を以て『民主

主義に對する大逆罪』なりとし、之が回避の方法として組合の組織の急を主張し、生産組合を以て最後の目標とした。一八七二年、彼れの影響の下に巴里には既に數個の組合の成立を見、次いで『傭主同盟』に對立するの目的を以て、是等の組合の聯合團體たる勞働者組合團を組織した。之は佛國に於ける最初の組合聯合團體の試みであつたが、間もなく政府によつて解散を命ぜられた。それにも拘らず、組合は長足の進歩をなし、一八七五年、巴里には百三十五の組合を算し、翌七六年十月二十二日を以て、佛國最初の勞働大會が巴里に開かれた。大會には勞働組合、生産組合、共濟會を代表して、巴里より二百五十五人、地方より百五人の代議員が列席した。此時大會を支配したものは尙ほベルプレーの勞資協調思想であつて、勞働爭議の平和的解決を力說し、罷工に反對し、生産組合を以て勞働解放の最後の方法として、社會主義思想を排斥した。同時に大會は集會及び團結の自由を要求し、當時問題となつてゐたロクロア法案に對する反對を聲明した。

第二回大會は、一八七八年を以て里昂に開かれたが、ベルプレー派の共濟主義者は依然として多數を占め、大會は、土地及び生産機關公有の決議の採決をすこしも肯んじなかつたけれども此時既に、大勢は暗遷默移のうちに動いてゐた。一八七九年マルセイユに於ける第三回大會は、明らかに佛國の組合運動の新時期を報じたもので、大會を支配したものは、最早やベルプレーの共濟主義ではなくて、ジュール・ゲード等の集産主義の思想であつた。大會の採用した綱領は、政治上經濟上の二樣の綱領を含んでゐたが、而かも經濟上の綱領は、政治上の綱領の實現、即ち政權の獲得によつて初めて實現せらるるものとした。そして之が爲には、勞働階級による獨立の政黨を以て第一の必要とした。ゲード派の綱領は、二十二對七十三票の多數を以て大會を通過したが、此政治運動主義に對しては、ベルプレー派の反對があつたばかりでなく、ローシユの率ゆる純組合主義派の反對を見た。此一派は國家を以て『有害なる政治的利害を防禦するの機關』に過ぎずとし、シヤムブル・サンヂカルの目的は、唯だ革命思想の焦點たるの一事にありと主張した。

ゲード派の勝利によつて、組合運動は共濟主義と生産組合主義の時代から政治運動の時代に進入した。一八七九年以降、勞働大會を支配した思想の基調は政治運動となり、一八八〇年のアヴル大會に至つて、溫和派及び生産組合論者は革命的集産主義者より分離し、別に佛國勞働者職業會議所同盟を組織して

一八八一年及び八二年に大會を開き、專ら組合法規の改良を主張したが、其勢力は微弱であつた。

然るにアヴル大會以後になると、共同の敵に對して一致して居つた社會主義者の間にも、勢ひ分裂を生ずることゝなつた。社會主義分派の爭は、先づ議會政策を主張する集産主義者と無政府共産主義者との間に初り、一八八二年のサン・テチアンヌ大會に至つては、集産主義者は更にゲード派とブルウス派とに分裂した。ゲード派はゲード、ロンゲーの勢力下に佛國勞働黨（パルテー・ウーヴリエル・フランセイ）を組織し、正統マルクス派の革命的科學的社會主義を標榜し、資本制度の下に於ける改良の不可能と、議會による政權の掌握を主張し、従つて其運動の基調は政治運動であつた。然るにブルース及びジョフランの佛國革命的社會主義勞働黨（パルテー・ウーヴリエ・ソーシヤリスト・レヴォリユシヨネエル・フランス）に集まつたブルウス派は、改良の可能を主張する謂ゆる『可能派（ポシビリスト）』であつて、集産主義を目的とし、階級鬪爭を認める點では、ゲード派と同じであるが、一層漸進的に中央及び地方の立法部に勢力を占めることを主張し、佛國勞働黨（パルテー・ウーヴリエル・フランセイ）の中央集權的組織に對して、一層地方自治的の組織を取り、自治體の政治に重きを置く。

然るに一八九〇年に至つてゼー・アルマンは、ブルウス派中の革命主義的分子を率ゐて同派から分離し、別の一黨を組織した

組合運動に對する此三派の關係を見ると、ゲード派は純政治運動主義で、政黨の節制の下に、組合を單に投票の機關たらしめようとするに對し、ブルウス派は一層組合の自治を認め、アルマン派に至つては、組合の經濟的行動を主として、政黨の政治的行動を従とする。

以上の外にもブランキー派、獨立派の兩派があつたが、是等の社會黨の分派の間に、爭奪の目的となつたものは勢ひ組合であつて、勞働組合が政黨運動の渦中に捲込まれた結果は組合の分裂となり、競爭的組合の對立となり、勞働者の勞働的結合は之が爲に甚しく阻害された。然るに經濟上の狀況は、益々勞働者の階級的組織を必要とするばかりでなく、勞働者も亦た、漸やく議會的改良運動の效果に疑ひを挾み、同盟罷工を以て信頼すべき唯一の武器として、純粹なる階級的團結と經濟的行動とに歸へらんとするの思想が盛んになり、組合は到る處に簇生した。そこで一八八四年には、是等の組合は最早や到底鎭壓し難い實際勢力となつたので、ワルデック・ルソー内閣は三月二十一日の新立法により、一定條件の下に勞働組合と組合の聯合團體とを公認した。一八八四年の法律が、一八六八年の法律と同じく勞働者が實力によつて達成し、既に如何ともすべからざる、既

成の事實の承認に外ならぬことは云ふまでもない。

けれども組合公認の條件たる規定には、組合運動に對する大なる陥穽を藏してゐた。そこで一般組合界は不信の眼を以て組合法を迎へたので、此法律の爲に組合數の著るしい增加は見なかつた。

斯くの如き形勢の下に、一八八六年には里昂に勞働組合大會が開かれた。大會は前年の組合法に反對の態度を聲明した許りでなく、此大會の結果として佛國勞働組合及び職業團體聯合會の組織を見、全國的聯合運動に一歩を進めたが、此聯合團體はゲード派の佛國勞働黨の機械たる性質を帶びて居つたので、間もなく反對派社會主義によつて、之に對立する勞働取引所聯合會の組織を見た。

勞働取引所は、市又は縣の奬勵と補助との下に開かれたもので、勞働團體ではなく、建物を指したものであるが、自然其地方に於ける諸種の組合の本部となり、集會所となり、職業紹介所ともなり、講演會、講習會、圖書館等も其内に開かれ、斯くてブールスは同一地域に於ける、職業を異にする一切の勞働組合間の連鎖となり、組合運動に於ける思想と行動との焦點となつた。一八八七年に巴里のブールスが開かれると、ベチエー、モンペリエー、セト、リヨン、マルセイユ、サン・テチアンヌ、ニイム、ツウルウス、ボルドー、ツウロン其他の大都市は續々其例に倣つた。是等のブールスには、多くはアルマン派の社會主義者が中心となつて活動して居つたので、彼等はゲード派の組合聯合會に對して、ブールス聯合會の組織を企て、一八九二年サン・テチアンヌ大會の結果として、勞働取引所聯合會の成立を見た。

是より先、總同盟罷工の思想は、漸次佛國勞働者の間に勢力を占めて居つたが、一八八八年、ボルドーに開かれたゲード派の組合聯合會の大會に於て初て議題に上り、アルマン派は一八九一年及び九二年の大會に於て之が採用の決議をなし、一八九二年ツールに於けるブウルス聯合の大會も、ペルーチエーの努力によつて同樣の決議を通過し、ブランキイ派も或制限の下に此思想を採用した。獨りゲード派は、飽くまで議會政策による政權の獲得に固執して、總同盟罷工を排し、一八九〇年、リールに於ける佛國勞働黨の大會に於て反對の決議をしたにも拘らず、此思想は勞働黨の勢力下にあつた組合聯合會のうちにも漸次に勢力を占め、一八九二年のマルセイユ大會では、ブリアンはツールの決議と同樣の決議案を提出し、三十七對六十七票

の多數を以て大會に通告したので、ゲード派は大會を脫退した
　巴里のプールスは一八九三年七月を以て、プールス聯合會第二回大會の命を受けて、巴里に一切の組合團體を網羅する全國大會を開催したが、政府はプールス所屬組合の中に一八八四年法に從つて規約及び役員名簿の提出をして居らぬ者があると云ふに口實の下に、大會の一ヶ月前に巴里のプールスを閉鎖した。此政策は勞働界の激昂を起し、却つて多くの組合を大會に參加せしめることゝなつた。大會は政府の挑戰に對する示威的色彩を帶び、先つ總同盟罷工の原則を採用し、次に現存の組合は、一面職業別による聯合を組織すると同時に、他面にはプールスに加盟して、一定地域內に於ける地方的聯合を組織し、是等の二樣の聯合團體を合して、全國聯合團體を組織すべきものなることを決議し、組合聯合會(フエデラシオン・デ・サンヂカ)とプールス聯合會とに對して、合同の勸說をした。
　翌一八九四年には、ゲード派の反對があつたにも拘らず、巴里大會の決議に基づき、ナントに於て第二回組合一般大會が開かれた。大會は重ねて總同盟罷工贊成の決議をし、宣傳委員會を任命したので、ゲード派は大會より脫退した。此大會に於いて、組合運動は全くゲード派の政治運動と分袂し、組合聯合會(ソエデーラシオン・デ・サンヂカ)は漸次に凋落して、ペルーチエーの指導の下に、プールス聯合會が組合運動の中心的勢力となり、佛國の組合運動はこゝに第三期に進入した。
　此間に組合運動は量に於ても非常の進歩をした。一八八四年組合公認當時の組合總數は六十八であつたが、一八九四年には二千百七十八となり、其內千六百六十二組合はナント大會に參加した。當時プールス聯合會には三十四プールス、六百六組合が加盟して居つた。
　ゲード派退席後のナント大會は、全國勞働評議會(コンセーイ・ナシヨナル・ウーヴリエー)を設けて、全國組合運動の中央機關としたが、一八九四年度には僅に八十五サンチームの收入と、四十七法六十五サンチームの支出を見たるに過ぎず、其成績は不充分であつたので、翌九五年のリモーヂュ大會は、右の評議會を廢して新たなる組織に着手した。此新組織は規約の劈頭に『佛國並に殖民地に於ける、男女勞働者及び使用人の種々なる勞働組合、並に組合の職業的聯合團を結合する一個の集合的團體を組織し、勞働總同盟(コンフエデラシオン・ゼネラル・デュ・トラヴアユ)と名つく』と云ひ、『勞働總同盟の加入團體は、有ゆる政派の外に立つ可し』『勞働總同盟は勞働者の全的解放を目的とする鬪爭の爲に、全然經濟的基礎の上に勞働者を一致團結せしめることを以て目的とす

る』と明記して、佛國組織運動の新たなる方向を確立した。斯くて勞働總同盟の成立は、議會政策派に對する總同盟罷工派政治運動主義に對する純經濟運動思想の勝利を意味して居る。コムミユン以後の佛國組合運動は、共濟主義、生產組合主義の如き保存的の經濟運動に對する、政治運動主義の勝利によつて初めて革命的となり、組合運動史の第二期に入つたが、今や政治運動主義に對する、革命的經濟運動主義の勝利によつて、第三期に進入したものである。此變化は勞働組合を以て、單に政黨の附屬物たらしめようとする思想から、勞働者の組合に獨立の階級的組織たる價値を認める思想への變化であつて、ゲード社會主義に對するアルマン派社會主義の勝利と見ることができる。一八九六年、倫敦に開かれた第四回萬國大會は、政治運動と組合運動との間に殘されてゐた最後の關係を斷絕した。

勞働總同盟の最初の五年間は、其組織に於ても思想に於ても尙ほ形成期に屬してゐた。そして組合運動の實力は、依然としてプールス聯合會の掌中にあつた。殊にリモーヂユ大會に依て採用せられた規約によると、勞働總同盟は同一職業(又は產業)に屬する組合の全國聯合會以外にも、個々の組合、並びに個々のプールスの加入を認めたので、總同盟とプールス聯合會とは勢ひ對立の姿となつた。一八九六年にはツールに於て、プールス聯合會の大會と總同盟の大會とが相前後して開かれた。當時兩團體の合同が漸く問題となつてゐたので、プールス聯合會の大會は、總同盟は組合及びプールスの、各聯合團體のみによつて組織せらる可しと云ふ決議をして、兩團體合同の基礎條件を暗示したが、總同盟の大會の方では、此問題には觸れなかつたけれども翌一八九七年のツウルウズ大會に於ては、總同盟は規約を改め、加盟資格を(一)プールス聯合會、(二)同一職業又は同一產業に屬する組合の全國聯合が、總同盟に加入せざる場合に限り、單獨の組合と云ふことにした。其結果同年プールス聯合會は總同盟に加入したが、翌九八年のランヌ大會は再び總同盟の規約を改めて、加盟資格を(一)同一職業に屬する組合の聯合會と、(二)全國組合とに限り、プールス聯合會を除外した。

此時、總同盟を指導してゐた精神は、漸次左傾して居つたが尙ほ幹部は改良派の掌中にあつた。然るに一八九九年、ワルデツク・ルソーは社會黨よりミルランを拔いて內閣に列せしめ、勞働階級の陣營を兩分しようと試みた。此出來事は一般勞働界の空氣を緊張せしめ、總同盟の內部にあつては、改良派に代つて革命派の勢力を確立せしめることゝなつた。一九〇〇—一九〇

一年は、勞働總同盟が漸く其發達史の第二期に進入した時代であつて、一九〇〇年を以て總同盟は初めて有給役員を置き、エミール・プウゼーの編輯の下に、多年の宿望であつた機關雜誌を創刊した。また此時まで總同盟の大會には、加盟外の勞働團體をも參加せしめたが、一九〇一年の里昻大會を機として、大會は加盟團體の代議員のみによつて組織せられることゝなつた里昻大會に集まつた代議員は總て二百二十六名で、一千三十五組合、二十四萬五千の組合員を代表する、二十六個のブールスと八個の地區同盟（ユニオン・ローカル）、二百六十四組合三萬六千の組合員を代表する八個の地方同盟（ユニオン・レヂヨナル）、五百七組合十九萬六千の組合員を代表する八個の職業別又は産業別聯合會との外に、六萬の組合員を有する四百九十二組合を包含して居つた。總同盟罷工の問題は、毎次の大會の議に上ぼつたが、里昻大會は總同盟罷工を以て、單に勞働者の生活改善の手段たるに止らず、勞働階級の最后の解放を目的とするものであると聲明した。大會はまた、非政治運動の色彩を益々鮮明にし、ワルデック・ルソー及びミルランの社會的立法に對しては、勞働階級の革命的行動を沮止しようとするものであるとして、罷工取締法及び仲裁法等に對しても大多數を以て反對を表明した。

斯ような形勢は、總同盟とブールス聯合との合同を促進するものであつたに拘らず、里昻大會は總同盟加入資格を、同一職業又は同一産業に屬する組合の地方的聯合にまで擴張して、却つてブールス聯合會に對抗するの氣勢を示した。けれども一九〇二年のモンペリエー大會に至つては、合同の機運は既に熟してゐた。大會はブウルセーを委員長として、二十五名より成る特別委員會を任命して、兩團體合同問題を調査せしめることゝした。委員會の成案は大多數を以て大會を通過し、一九〇三年一月一日より實施せられることゝなつたが、此改正規約によつて總同盟は、同一産業又は同一職業別による組合聯合及び單獨組合部と、ブールス聯合部との二部に分かれ、兩部は各々獨立の幹事局を有し、獨立の會計を有し、完全なる自治を保ちつゝ而かも總同盟委員會（コミテー・コンフエデラル）によつて統一せられることゝなり、初めて現在のC・G・Tの構成を見るに至つた。

　兩團體の合同は、更に總同盟の歷史に一新時期を畫したものであつて、實際組合運動界に於ける總同盟の活動と進歩とは、殆ど悉く此時以後に屬して居ると云つてよい。合同後の總同盟は益々革命的の傾向を帶び、大會は常に左黨の勝利に歸して居る。改良派は之を以て投票制度の缺陷に歸し、一組合一票の平

等投票權に代るに、組合員の實數による比例投票を用ゆることを主張し、屢々大會の議題としたが、一九〇八年のマルセイユ大會も、三百八十三對七百四十一票の多數を以て革命派の勝利に終つた。合同後の大會に於ても、對政黨問題は多少の波瀾を起したが、一九〇五年、佛國社會黨兩派の合同が成立し、合同社會黨の組織を見るに至り、對社會黨問題は、一九〇六年のアミアン大會の主要問題となつた。けれども社會黨との間に一定の關係を作るべしといふ纖維業聯合會の動議は、七百二十四票對三十四票(棄權三十七)を以て敗れ、更に大會は三對八百三十票の壓倒的多數を以て、總同盟は一切の政黨政派の外に立つべしといふ、規約第二條を固執する、グリフユールの決議案を通過した。

アミアン大會はまた、三百二十對四百八十八票を以て非軍隊主義の決議をしたが、一九〇八年のマルセイユ大會に於ては、非軍隊主義の決議は六百八十一票を得た。

一九〇三年以來、萬國勞働組合書記局は隔年に國際大會を開催することゝなり、總同盟は一九〇三年のダブリン大會に代議員を送つたが、アムステルダム及びクリスチアナの第二回第三回の大會は、總同盟罷工を議題とすることを拒んだので、總同盟は參加しなかつた。總同盟のマルセイユ大會では、萬國書記局との間に密接なる關係を結ぶべき決議をしたので、爾後總同盟は巴里(一九〇九年)、ブダペスト(一九一一年)、ツーリヒ(一九一三年)、の萬國會議に代議員を送つて居る。

二　C・G・Tの要素

勞働總同盟（Confédération Générale du Travail）略してC・G・Tと呼ぶ）の現在の組織は、一九〇二年のモンペリエー大會に於て改訂せられた規約に基くものである。現行規約第二條はC・G・T加入の資格を、次の三つに限つて居る。

(一)産業別又は職業別による全國聯合會（全國聯合會なき場合は地方聯合會、)並に全國組合。

(二)種々なる職業の地區、縣、又は地方的同盟としてのブールス。

(三)産業別又は職業別の聯合會を有せざる單獨組合、又は其聯合會がC・G・Tに加盟せざる單獨組合。

斯ようにC・G・Tは單獨の組合にも加入の途を開いては居るが、それは例外の場合であつて、原則としては同一産業(又は職業)による組合の全國聯合會(例へば鐵工組合全國聯合會)と一定の地域にある種々なる産業(又は職業)の組合を結合した組

合同盟との、縦横二様の聯合團體によつて構成せられて居るものである。即ち組合聯合會は、勞働階級を産業的（又は職業的）に結束してC・G・Tのうちに代表し、地方同盟會は種々なる勞働者を地方的に團結してC・G・Tのうちに代表する。そこで原則としては、一個の組合に、縦横二様の聯合團體によつて、二重にC・G・Tのうちに代表せらるることゝなる。そして此二様の階級的組織を綜合したものが、即ちC G・Tである。パウロウスキーはC・G・Tの組織を四階建の家に例へて、階下には幾多の組合の本部があり、二階には壁一重で聯合會とブールスとが隣合ひ三階にはC・G・T、四階には總同盟委員會が陣取つて居ると云ひ更に之を大小順次に重なつて居る數個の圏で説明するならば、一番外の大きな圏は種々なる組合を現はし、其次の圏は聯合會とブールスとを現はし、第三の圏はブールス聯合會、第四の圏は總同盟委員會、中心點は即ち總同盟幹事局を現はすとも云つて居る。斯ようにC・G・Tの組織は極めて複雑であるが、其細胞をなすものは個々の組合である。そこでC・G・Tを知るには、先づ個々の組合を知らなければならぬ。

三 サンヂカ

組合（サンヂカ） Syndicat の名稱は、一八六七年代のシャンブル・サンヂカル Chambre syndicale に初まつたものである。當年のシャンブル・サンヂカルは、實際上には同一職業に屬する全ての勞働者の加入を許したが、當時二十人以上の職業團體は違法とせられてゐたので、其事務は普通に十八人より成る常任委員會の手に委ね、此委員會が表向きの組合と認められてゐた。然るに一八八〇年代となつて、シャムブル・サンヂカルは單にサンヂカといふ稱呼を取り、純粋に勞働組合を意味するものとなつた。

サンヂカは大體に於て英語のツレード・ユニオン Trad Union・に均しいもので、各地方に於ける同一職業の勞働者、同一産業の勞働者、又は類似の必要を滿たして居る勞働者によつて組織せられ、混成組合（サンヂカ・ミキスト）の外は勞働階級者以外の入會を許さない。

入會の資格は組合によつて異なる。例せば木工は年齢と國籍の如何を問はず入會せしめるが、セイヌ縣製紙及び罫線工は之に反して、年齢は十六才以上、男子は一週五十法女子は三十法以上の賃銀を受ける者に限つて居る。年齢の制限も亦た同一でない。巴里屠獸人では十四才を最少限度とする。其他冶金工は特に規約の明文に搾取者（エキスプロイター）の入會を禁ずる旨を規定し、家屋ペンキ師も請負人及び親方の入會を禁じて居る。セイヌ製鎚工は組

介人二名を有するか、又は現に其職業に就事して居る旨を證明し得る者は、無制限に入會せしめる。アップヴィルの印刷工では品行方正を以て資格の一つとして居る。多くの職業、殊に冶金工及び化學工業では、女子の入會を歡迎して居るが、女子を入れないものも少くない。印刷工の如きは其一例である。

會費も亦、組合によつて甚しく等差があるが、概して會費の安いことは佛國組合の一特徴である。最も會費の安いのは恐らく樵夫の一ケ月廿五サンチームで、坑夫、セイヌ冶金工、アミアンの織物工、グルノブルのペンキ師等は五十サンチーム、巴里市使傭人、セイヌ屠獸人、アミアンの家具師、リモーヂュの靴工等は一法、何づれも會費の同額、又は半額の入會金を課して居る。巴里印刷工は會費三法、入會金は年齢によつて三法乃至十五法で、最も會費の高い少數の實例である。巴里製帽工では一週十五法以上の賃銀を受ける者に對しては、八十サンチームの會費を課して居る。女子と十八才以下の少年に對しては、大抵會費の減額を行つてゐる。例せばセイヌ冶金工は男子の一法に對し、婦人及び十八才以下の少年は五十サンチーム、入會金は全て五十サンチーム、リモーヂュ靴工は男子の一法廿五サンチーム(入會金一法)に對し、婦人は七十五サンチーム、入會金も半額である。要するに會費の大小は、組合が共濟的施設に重きを置くか否かによつて定まる。

組合員の數には固より差異があるし、同一組合にしても多くは急速に增加してゐる。例せば巴里では、學術試驗用具製造工の組合は、一八九二年には僅に二百七十人であつたが、一九〇六年には三千に上ぼつて居る。同じく巴里の活版工組合は、一九〇七年の會費納付者は三千五百人、巴里使傭人の組合は一萬人、屠獸者は千五百人、機械工は三千人、製帽工は千六百人の組合員を有してゐた。けれども多數の組合は、遙かに人員が少ない。例せばアミアンでは、家具師は二十三人、ペンキ師は八十五人、藥劑師は十五人、鑄工は十三人、大工は二十五人、織工は二十五人、石版工は四十六人、染色及び仕上工は七十五人の小組合である。

佛國の組合は一八八四年、ワルデック・ルソー內閣の制定した組合法によつて公認せられたものであつて、右の法律は(一)一七九一年の團結禁止法を撤廢し、刑法の一部を廢止し、又は組合に適用しないこと、(二)二十人以上の職業團體と雖も、政府の許可なくして自由に組織されること、(三)工業上、商業上、農業上の經濟的利害を研究し、擁護するものを以て組合と認め

ること、(四)右の目的を以て他の組合との間に、自由に共同行爲を取り得ること、但し聯合團體は不動産を所有し、又は法律上の主體となり得ないことを規定した。斯くて組合の組織と集會とは自由となつたが、其第四條は組合公認の條件として、組合は其規約と役員名簿の提出を命じて居る。此條項は組合運動中の活動分子を、絶えず官憲の監視下に置かんとするものであつて、當時組合は猛烈に此法律に反對した。從つて佛國の組合中には、此法律に從つて規約及び役員名簿を登錄して居らぬものが甚だ多い。是等の組合は要するに非合法的のものであつて英國の組合中に、組合法によつて法人の登記を受けて居らぬものが多いのと、趣きを同じくする。

サンヂカの管理機關は評議員會(コンセーイ)である。評議員は組合員の總會に於て選擧し、多くは十名乃至十五名である。例へばセイヌ製錠工では評議員會は十五名より成り、其うちより幹事及び會計各一名を選ぶ。會計は五百法までを保管することが出來る。セイヌ冶金工では評議員會は十一人より成り、六ケ月每に半數を改選し、役員には俸給なく、執務一時間に對し一法の報償を與へる。然るに石版工では三十人より委員會(コミテイ)を設けて居るが、六ケ月交替を以て全組合員よりA・B・C順の廻り持である。幹事長には一週三千法、副幹事及び會計には各二十法の給料を支拂ひ、別に任期一年の監査役四名を置く。更に巴里印刷工では委員(コミテイ)は十五人より成り、委員會は幹事、(一週七十五法)副幹事、會計を任命する。別に三十名より成る監査委員會があつて、委員(コミテイ)會の決定を變更するの權がある。各印刷所には會費徵集委員を選用する。

評議員會の職分は總會の決議執行であるが、臨時の問題は評議員會が決定する。但し如何なる場合にも、最後の決定權を持つて居るのは總會である。

總會はセイヌ製錠工では每月一回、セイヌ冶金工では年四回巴里印刷工では年二回である。總會は出席の多少に拘らず、現在出席者によつて成立する。そこでサンヂカの總會は、自然組合員の中でも階級的の自覺に富み、組合運動に熱心な活動分子が多く集ることゝなり、從つて是等の自覺ある活動分子が、常に無自覺な多數を率ゐて行くことになる。

サンヂカの職分は三つに區別することが出來る。(一)階級鬪爭の機關としては、勞働者の職業上の利害を監視し、傭主に對して勞働條件の改善を迫り、組合賃銀率を主張し、勞働の搾取に對する抵抗力となる。(二)敎育の機關としては、勞働階級の

解放の爲に勞働者を敎育し、將來自由社會の建設に必要なる心理を作ること。(三)共濟機關としては、失業者の爲に職業紹介等の任に當る。

サンヂカのうちには。職業紹介以外にも、失業疾病手當等の制度を設けて居るものがある。けれどもサンヂカの主要な職分は初めの二項目であつて、共濟的方面は一般に閑却せられて居る。佛國の組合主義者は、固より勞働者の現狀が、共濟的施設を必要として居ることを承認する。けれども單なる共濟運動、共濟の爲の共濟運動は、畢竟するに、勞働者が現在の經濟組織に順應する事に外ならぬ。例へば組合が組合員に失業手當を支給することは、資本家をして多少の賃銀增額を讓歩せしめた代りに、是等の賃銀中から失業の費用を負擔することゝなる。失業てふ現象は、資本家制度に避く可らざる必然の病弊であつて、其責任は當然、資本制度そのものゝ負擔すべきものである。然るに組合が失業手當を支給することは、即ち資本家制度の責任を勞働階級が其賃銀のうちから負擔することにより、資本制度を維持する結果となる。

然しながら當面の必要から云へば、固より失業者に對する共濟的の施設は決して無用のことではない。たゞ組合の第一義は共濟事業ではなくて階級鬪爭である。之が佛國の組合主義の一般に取つて居る見解であつて、曾ては佛國の組合も、多くは共濟會といふ形を取つたが、要するに之は團結禁止法による壓迫を回避する假面として用ひられたものである。佛國の組合運動は、協同生產組合を以て唯一の解放の手段と信じた時代もあるが、今や勞働者は生產組合の無力を覺ると同時に、其組合は鬪爭を以て第一の職分とするに至つたものである。

此點に就ては、佛國の組合は英國又は獨逸從來の組合と頗る傾向を異にする。佛國の政府も英獨の資本家政府と同じく、組合運動を成るべく共濟事業の方面に誘致して、戰鬪的精神を沮止しようとし、失業手當基金の制度を設けて居る組合の間に、年額十萬法の補助金を分配する法律を制定したが、佛國の勞働者は直ちに政府資本家の奸計を看破したので、補助金制度の爲に失業手當基金を設けた組合は極めて稀である。一九〇五年の調査によると、約五千の組合中、共濟的施設を行つて居る組合數は次表の通りである。

職業紹介制度を設くるもの	一三六六
職業に關する文庫を設くるもの	一四一二
共濟基金を有するもの	九二五

失業基金を有するもの	七一八
求職旅費支給制度を設くるもの	六九五
職業上の講習及學校を有するもの	五一二
退職手當基金を有するもの	七六
共同金融基金を有するもの	五四
消費組合を經營するもの	八三
生產組合を經營するもの	三四

斯ように補助金制度があるにも拘らず、失業手當基金を設けて居るものは、全體の七分の一に達しない。そして一九〇五年以降も增加の傾向がない。一九〇八年の調査によると、五千五百の組合中、共濟基金を有するものは約一千であつて、失業基金を有するものは其內の七百四十三組合に過ぎぬ。更に右のうちには、共濟施設を主とする黃色組合をも含んで居る。是等はC・G・Tに加盟しないものであるから、C・G・Tの組成分子たる戰鬪的組合のみに就て見れば、此割合は更に少ない譯である。

尙ほサンデカが失業其他の共濟施設を營む場合には、大抵は獨立の事業として經營せられるもので、組合員が之に加入すると否とは自由である。卽ち種々なる共濟手當金のある場合にもそれは團結の紐帶となつて居るものではない。佛國の組合が戰鬪的であつて共濟施設を輕視することは組合員の少い原因であるといふ者がある。コールは之に對して、現に白耳義では組合の會費を增した爲に、著しく組合員を增加した。英獨の勞働者の多くが、共濟手當を目的として組合に加入して居ることも事實である。けれども直に之を佛國に當嵌めることは出來ぬ。佛國にあつては。之は寧ろ原因ではなくて、勞働者の特殊な心理より來つた結果と見做すべきであると云つて居る。

勞働者が共濟手當の爲に組合に殺到することは、戰鬪的精神の破滅として、佛國組合主義者の寧ろ恐れとする所である。罷工の如きも、罷工基金によつて成功を收めようとするものは稀である。全國同業聯合に加入して居る場合にも、基金は主として臨時に募集せられるものである。一定の基金を拂込むことには、何等の生命も感激もないが、臨時の基金募集は却つて勞働者の階級的自覺を喚起し、團結と行動との精神を振作するの効がある。一九〇八年中には千七十三件の罷工があり、其內八百三十七件は組合勞働者によつて起されたが、正規の罷工手當を受けたものは僅に四十六件に過ぎなかつた。

一九〇八年の統計によれば、組合總數は五千五百であつて[illegible]內三千五百、卽ち約三分の二はC・G・Tに加盟して居る。最も佛國の統計は槪て粗雜であるから、精確なる數字を知ることが出

來ぬが、實數は寧ろ五千五百以下と推定せられて居る。現に大工業地たるノオル縣だけでも、幾百の有名無實の小組合が一時に起つたことがある。是等は資本家がカトリック教會を手先に使ひ、各工場に職工長を幹事として二三十名づゝの組合員を狩集めて急造したものである。そこで是等の有名無實の黄色組合を控除したならば、C・G・T加入組合の割合は、右の比率よりも多いと見て差支ない。

四　ブウルス又は組合同盟

是等のサンヂカがC・G・Tに加入するの通路は二つある。即ちサンヂカは

(一)同一都市、又は同一地方に集合する、種々なる職業(又は産業)に屬するサンヂカの聯合團體

(二)全國に散在する同一産業(又は職業)に屬するサンヂカの聯合團體

この二樣の聯合團體の一つを通じて、又は双方を通じてC・G・Tに加入することが出來る。第一の聯合團體はブールス又は組合(ユニオン)同盟であつて、第二の聯合團體は、全國聯合會(フエデラシオン・ナシヨナル)である。

勞働者の階級的自覺は、勢ひ地理的の制限と職業的の制限とを受ける。勞働階級の共通の利害は、先づ同一職業に屬する勞働者の間に自覺されるが、而かも此自覺は先づ不斷に接觸する勞働者の間から起る。近世勞働者の階級的發達は、心理的の方面から見れば、此自覺が地理的及び職業的の、二樣の障壁を漸次に突破したことに外ならぬ。そこで勞働者の階級的運動が、先づ同一地區の中なる同職勞働者の組合となつて現はれるのは自然の勢である。斯くて孤立の無力を悟つた勞働者は、同職者の組合を組織したが、孤立した組合の無力なことは、尙ほ孤立した勞働者の無力と同じである。けれども此時勞働者の眼界は尙ほ全國の同業勞働者の共通の利害を包括するには足らなかつた。又た實際に於ても、同一地區に於ける各種の組合の協力を以て焦眉の急とした。そこで佛國の組合運動史の上では、第一の聯合團體は第二の聯合團體に先つて發達した。

此地方的聯合運動の焦點となつたものは勞働取引所(ブウルス・デュ・トラヴァユ)(Bourse du Travail略してブールスと云ふ)である。勞働取引所を設けて、勞働市場に於ける需要供給の圓滑を計るといふ思想は、遠く革命當時より存したが、一八八四年の組合公認後となつては其意義は遙かに廣汎なものとなり、一八八七年、最初のブールスが巴里に開設せられた時には、それは最早本來の意味での勞

働取引所ではなくて　其地方に於ける有ゆる組合の爲に本部となり、集會所となり、講演會も此所に開かれ、圖書館も其内に設けられ、更に職業紹介所ともなるものであつた。そこでブールスなる名稱は、時としては建物を指し、時としては組合の同盟そのものを指し、又時としては、此同盟の幹部を指して居るが、精確に云へば建物と其設備とを意味するものである。

ブールスは勞働階級の實際上の必要に應じたものであつたのと、大抵、市の奬勵の下に、其補助金によつて開設せられたので、進歩は急速であつた。一八八七年に初て巴里に開設せられ全國の大都會は競ふて之に倣つたので、一八九五年には三十四(所屬組合六百六)となり、一九〇二年には八十三(千百十二組合)となつた。

けれども市がブールスを奬勵保護した動機は、當時組合の態度が益々戰鬪的になつたので、之を職業上の行動以外の通路に導いて緩和し制限すること、組合を選擧に利用せんとすることであつた。然るにブールスは漸次、市政治家の本來の目的外に進出して來たので、ブールスと其保護者との間には、絕えず紛爭を生じ、市は補助金の停止その他の惡辣な手段によつて壓迫を試みた。政府對ブールスの鬪爭の最も顯著な實例は、巴里と里昂のブールスに見ることが出來る。

そこで組合は市の羈絆より獨立しようとし、斯くて組織せられたものが卽ち組合同盟(Union des Syndicats 略してユニオンと云ふ)であつた。ユニオンの性質と目的とは、次に掲げる巴里組合同盟の宣言によつて明かにすることが出來る。

『組合が共同の利害を研究し擁護するが爲に自由に團結し、組合各自又は一般の要求を決定し貫徹する爲に一致の行動を取ることは、權利にして又た必要である。

『然るに勞働取引所は、一九〇〇年三月十七日の布告、並びに右の布告に基づく市の取締規則によつて支配せられ、市に屬する制度として、巴里市に課せられた特別管理の下に置かれるものである。從つて之が實際上の管理は、セイヌ縣知事の權力下に屬するものである。

『斯くの如き狀態にあつては、巴里勞働取引所と名くる制度は、勞働組合の共同會館を意味せずして、單に之が集會を開く可き建物を意味するに過ぎない。

『故に次の規約に加盟するセイヌ縣の勞働組合は、一八八四年三月二十一日の法律第五條に準じ、セイヌ縣組合同盟と(從來は巴里勞働取引所と稱せらる)と名づくる聯合團體を組織

し、其本部をシャトオ・ドュウ街三、中央勞働取引所、第二階六號室に置くことを宣言す。」

そこで多くの地方では、巴里の例に倣つてブールス以外にユニオンを組織したので、同一地方にブールスとユニオンとが併立することゝなつた。殊に前掲の宣言に見られるやうに、ユニオンも亦たブールスと同一建物のうちに本部を置き、且つ多くの場合、兩者の役員は同一人物であつた。そこでユニオンと雖も、全くは市の羈絆を脱し得なかつたが、ブールスに比すれば一層行動の自由を有することゝなつた。更にユニオンが漸次に獨立の本部を有するやうになり、市の勢力から自立するに從つて、勞働者の自信は強まつた。斯ようにブールスとユニオンとが、同一地方に併立する場合には、市の補助金を有するブールスは、主として費用を要する共濟事業や敎育事業の中心となり、組合的行動の焦點となるものはユニオンであつた。そこでC・G・Tの加盟團體と認められるのも、ブールスではなくてユニオンである。一九〇二年のC・G・Tの規約は、ユニオンに加盟資格を認めて、ブールスには加盟の資格を認めなかつた。けれどもブールス以外にユニオンの組織なき場合には、ブールスは即ち實際上のユニオンであつて、C・G・Tの現行規約が、加盟資格のうちに、特に『サンヂカ同盟の意味でのブールス』と云つたのは之が爲である。歴史的の關係から、今尙ほ普通には、ブールスなる稱呼が多く用ひられて居るが、此場合にも單に建物を指す意味でのブールスではなくて、ユニオン、若くはサンヂカの同盟團體といふ意味でのブールスを意味して居ることは云ふ迄もない。

ブールス（又はユニオン）の組織の原則は集權主義に對する聯合主義であつて、各組合は完全なる自治を保留する。ユニオンの管理は、各組合から選出せられた代議員によつて組織する、管理委員會（コンミッシヨン・アドミニストラチフ）の手によつて行はれ、此代議員には任期かなく、常に選出組合の命令によつて行動し、何時でも解任されるのが常である。

巴里や里昂のブールスは、一九〇五年の市の取締規則によつて、甚しく市の干渉を受けて居るが、モンペリエーのそれは同年十月の取締規則によつて自由を與へられて居る。そこでブールスに管理の一例として、モンペリエーのそれを擧げて見る。最高の管理機關は總務委員會（コミテイ・ゼネラル）であつて、所屬組合より選出する各二名の代議員より成り、諸般の決定を行ふ。執行機關としては、總務委員會の任命する管理評議會（コンセーユ・ドミニストラシオン）がある。管理評議會は幹

事、副幹事、會計、副會計各一名と、別に三名の代議員より成る。執行評議會の外に、總同盟罷工小委員會がある。同一性質の組合が二つある場合には、一組合のみプールスに加入を許すこととなつて居る。アミアンのプールスも自治を保有して居るが、こゝでは總務委員は所屬組合より、其組合の人員による比例投票を以て選出される。總務委員會は幹事長一名、常任副幹事三名、會計一名より成る管理評議會を選出する。

之に反してロアンヌでは、一九〇〇年の取締規則により、プールスの自治は完全でない。即ち市參事會は市の補助金の使途につき、監督權を保留して居る。

前述の如く、ユニオンはプールスと併立して居る場合もあるし、補助金のない場合には、全くプールスに代つて居る場合もある。ユニオンが全く市の補助金の餘澤を蒙らぬ場合には。其行動は財政的には制限せられて居るが、外來の勢力の侵入しないだけ、其精神的の任務は一層廣濶である。何等の覊束をも蒙らぬ、完全なる自治と獨立とを有するプールスの典型としては、セイヌ縣のユニオンを擧げることが出來る。ユニオン加入の資格は、サンチカは純粹に被傭者より成立つて居ること、一定の組織を有すること、傭主に對する鬪爭と抵抗とを基礎とすることである。總務委員會(コミテー・ゼネラル)は各組合より一名宛の代議員より成り、サンチカの加入及び除名に關しては、殆ど全權を握つて居る。總務委員會は其決議を執行せしめる爲、三十名より成り執行委員會(コンミツシオン・エキゼキユチヴ)を選ぶ。委員は一回の會議に對し、六十サンチームの手當を受けることが出來る。更に罷工や黑表等に關して勞働者の爲に法廷に爭ふ爲に、六名の辯護士、六名の醫師、並に組合員にして勞働爭議審理會の判事たる者、及び執行委員中の六名から成る法律評議會(コンセーイ・ジュヂシエール)がある。ユニオンの幹事及會計係は、一時間の執務に對し一法廿五サンチームの報償を受け、一日の執務は八時間以内に限られて居る。

ペルウチエーはプールスの職能を四つに區別して居る。

(一)共濟。 此種類に屬するプールスの事業には職業紹介、失業手當、疾病及び傷害手當、求職旅行手當等を數へることが出來る。此中で最も發達して居るのは職業紹介である。共濟基金は概して貧弱である。求職旅行手當(ヴイアチツム)は職業を求めて旅行する勞働者の爲に、聯路の各プールスが其資力に應じて補助する制度であつて、其手當は概して一日一法乃至二法であるが、多くのプールスでは其一部分を現金で支給し、宿泊の便宜と食事とを支給する場合が多い。

(二)教育。 教育的施設としては圖書館、工藝上の講習會、科學及び文藝上の講演會等がある。プールスは多くは月刊の機關雜誌を發行し、職業上の智識を與へると共に、社會學上の智識を供給して、現在の經濟制度に對する反抗的精神を鼓吹して居る。プールスは又、勞働日の祝祭を組織し、法律上醫療上の顧問部を設けて居るものがある。

(三)宣傳。 プールスは勞働者の智力上の進歩を促し、階級的自覺を强め、組合運動促進の爲に絕えず宣傳に從事する。プールスは一方に於ては既存の組合を援助して組合員の增加を計ると共に、他方には新組合の組織、ユニオン、聯合等の組織の爲に宣傳する。例せばブレストのプールスは、ブレタンヌ地方の組合運動を起し、プウルヂエのプールスは、多くの屠獸者組合の創立に成功し、ミヂーのプールスは、葡萄栽培者の間に幾多の有力な組合を創立した。

(四)抵抗。 然しながら、プールスの最も精力を傾倒して居るものは、資本階級に對する抵抗であつて、罷工に當つてはプールスは個々のサンヂカ又は聯合團體を助け、物質上精神上の有ゆる援助を吝まない。罷工が起れば、プールスは自づから罷工勞働者の集合する中心となり、又た糧源地となる。又た罷工者の爲に炊出しを行つたり、幼兒を引取つたりなどもする。プールスは又た○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○。組合員の入營者には、兵卒手當(スウ・ヂュ・ソルダー)を支給して組合との接觸を失はしめぬようにして居る。

是等の事業は、プールスの實力の大小によつて固より程度を異にする。プールスの間には、其人員に於ても、其資力に於ても大なる相異がある。同一地方に三個以上のサンヂカのある場合はプールスを組織することゝなつて居るので、或者は數個の小組合より成り、或者は數千の組合員を有する、數十の大組合より成るものもある。組合數から見れば多いものにはセイヌ(巴里)サンヂカ同盟の百七十七組合を筆頭に、里昂の五十五組合リヴ・ド・ヂエルの五十一組合、サン・テチアンヌの三十八組合、マルセイユの三十三組合と云つた風で、十乃至二十組合のものは最も多く、ダンケルク、サント、ロマン、コニヤック等の三組合、ソオムユル、イシー・レ・ムウリノー等は僅に二組合(一九〇五年調査)である。人員より見れば巴里の二十一萬二千六百人、マルセイユの二萬四千百人、ボルドーの一萬八千三百人、里昂の一萬三千百、サンテチアンヌの一萬五千五百人(以上一九一〇年調査)は最も大きいもので、五百名以下のものも少く

ない。

一九〇八年の調査によると、プールスの總數は百五十七で、ブウゼーは加盟組合總數を二千六百と推算して居る。一九一〇年度のC・G・Tの報告は百五十四ゴールス、千八百四十九組合と云ひ、同年の政府の調査は二千五百六十六組合と算へて居る。以上の數字は何づれも大體を知るの資料に過ぎず、決して正確なものではない。

プールス(又はユニオン)は佛國の組合組織の一特徴であつて英獨の組合に於ける勞働評議會(トレース・カウンシル)は稍々職分を同じくするものであるが、常に組合運動の活動の焦點となり、革命が精神の泉源となつて居る點に於ても、プールスは獨特の地位を占めるものである。プールスによつて實現せられて居る、勞働運動の地方的集中は、英獨の組合運動に於て全く類を見ざるものと云はれて居る。プールスは狹隘なる職業的、利己的の眼界を打破し、廣き階級的の團結を起し、現在の社會に於ける階級の對立を明白にした。更にプールスは、勞働運動を地方的に集中したと同時に、之を分散した。プールスによつて佛國の勞働運動は、首都に於ける運動から、全國各地に於ける運動となつた。斯くて佛國勞働階級の心理を形成する上に、プールスは最も偉大なる貢獻をしたものであつて、佛國勞働者の有する明白なる階級的自覺と、遠大なる理想とは、伊太利の勞働者を除いては、他に其類を見ずと云はれて居る。

殊に佛國の組合主義者は、プールスを以て、將來の自由社會に於て、市町村の如き自治體の行政部を繼承すべき重要なる社會組織の胚種と見做して居る。

五　プウルス聯合及び地方同盟

是等のプールス(又はユニオン)は、勞働取引所聯合會(フェデラシオン・デ・ブールス・デュ・トラヴァイユ)(Féderation des Bourses du Travail 略してプールス聯合と云ふ)に綜合せられて居る。プールス聯合は一八九二年、ゲード派の組合聯合會(フェデラシオン・デ・サンディカ)に對立する目的を以て、アルマン派の勢力の下に組織せられたものであるが、成立の當初から、專らプールスの經濟的職分に重きを置く、非政治的の傾向に進んでゐた。此傾向は一八九四年、ペルウチエーが幹事長となるに至つて、益々鮮明になつた。

プールス聯合は、全國の全てのプールスの聯合團體であつて一八九二年には、十四プールスを以て組織せられたが、幹事長ペルウチエーの在職八年間に長足の發達をなし、一九〇二年に

は一千百十二組合を包含する八十三プールスの聯合團體となつた。プールス聯合の管理は、各プールスより選出する聯合委員會（コミテー・フエデラル）によつて行はれる。プールスは各々一名の代議員を委員會に選出するの權利を有し、一人の代議員が數個のプールスの代議員を兼ねることが出來る。且つ聯合委員會は巴里に置かれてゐるので、プールスは勢ひ、其組合員以外の人物を代議員に擧げて居る。當初は聯合會幹事長が候補者を定め、此候補者名簿の中より各プールスによつて選擧せられてゐたが、此方法に對しては種々の不滿を生じたので、後ちには候補者名簿には、各候補者の政治上の派別をも明記することゝなつた。之が結果として聯合委員會には、社會主義の種々なる分派を包容することゝなつた。一八九九年には、聯合所屬のプールスは四十八個であつて、聯合委員會は即ち四十八プールスの代議員より成立して居つたが、内三名はブランキー派、十一名はアルマン派、五名はゲード派に屬してゐた。

プールス聯合の組織は、飽くまで聯合主義であつて、各プールスは毫も其自治を犯されない。プールスは聯合委員會の決議に從ひ、又は之を拒むことが出來る。プールス聯合の執行機關としては、各一名の幹事長、副幹事、會計があるだけで、聯合委員會は毎月二回開催せられるが、別に議長を設けず、特に難問題に就いて意見の纏まらぬ場合の外は、投票によつて採決を行ふこともない。大抵の問題は坐談的の商議によつて、意見の一致點に到達する。

プールス聯合の職分は、獨立の團體として行動することではなく、プールスに共通の問題を捉え、之を研究し、之に對する適當なる行動を暗示して、プールスの運動に調和と統一とを齎らすことである。故に組合的行動の中心は聯合ではなくて、依然として個々のプールスに存して居る。

一九〇一―二年度に於けるプールス聯合の收入は五千五百四十一法餘、支出は四千三百二十法餘であつて、財力に乏しいことが、勢ひ聯合會の事業を制限して居ることは止むを得ぬ。

斯ように個々のプールスは、一個のプールス聯合に綜合せられて居るが、其間の紐帶は極て弛緩である。そこで個々のプールスとプールス全國聯合との中間的の紐帶として、地方同盟と名づける中間的の聯合團體が生じて居る。地方同盟（ユニオン・レヂヨナル）（Union régionale）は或る一地方に於ける、種々なる組合を包括する聯合團體であつて、一つの工業地域を以て同盟の範圍とする。例せば北部九州、又は阪神地方といふの類である。地方同盟の一種

として、行政上の區劃たる一縣下を以て同盟の範圍としたものがある。此場合には特に縣同盟(Union départementale)と呼ぶ。そこで前項に述べたプールス又はユニオンも同じく同一地域に於ける種々なる組合の地方同盟ではあるが、此場合の地方は比較的狹い地域を指すもので、例へば東京、大阪といふような、一地區内の組合同盟であつて、『ユニオン・レヂョナル』に對して之を『ユニオン・ローカル』(Union lokale)と呼んで居る假りに之を大地方同盟と小地方同盟と呼んでもよい。其地方同盟たることに於ては何等の違ひもなく、地方同盟はプールスの大なるものと見て差支ない。但し是等の大地方同盟(又は縣同盟)は、組合運動の上に於て、小地方同盟たるプールス(又はユニオン)に代るものではない。組合的行動の中心は依然として小地方同盟たるプールス(又はユニオン)に存して居る。例へばセイヌ及びマルヌ縣同盟はムラン、モオ、ヌムウル其他の小地方同盟(プールス)を包括し、アルプス・マリチーム縣同盟のうちには、ニイス、マントン其他の小地方同盟がある。そして組合的行動の中心となるものは、セイヌ及びマルヌ縣同盟ではなくて、ムラン組合同盟モオ組合同盟といふ譯になる。

然しながら、大小二重の同盟のある場合には直接C・G・Tに加入するのは大なる同盟である。地方同盟(又は縣同盟)のある場合には個々のプールス(又はユニオン)は直接CGTに加入せず、地方同盟によつてC・G・Tのうちに代表せられるものである。C・G・T規約第二條第二項に、『種々なる職業團體の、地區、縣又は地方的同盟の意味でのプールス。但し重複を許さず』とあるのは、此場合を規定したものである。

六　産業聯合及び全國組合

プールス又はユニオンによつて、地方的橫斷的に、聯合して居る佛國のサンヂカは、他方には、業別的・縱斷的の聯合を形造つて居る。組合の全國聯合Fédération nationale)及び全國組合(Syndicat nationale)が之である。

全國聯合には(一)同一職業に屬する組合の聯合、即ち職業的聯合(Fédération de Métier)と、(二)同一産業に屬する各種の組合の聯合、即ち産業的聯合(Fédération d'industrie)とがある。前者の例としては鑄鐵工、機械工、染色工などの聯合、後者の例としては冶金工、鞣皮工、坑夫、印刷工、建築工などの聯合を擧げることが出來る。更に(三)此兩者の中間には、同一産業全體を包括するには至らないが、嚴格に一職業に限らないで、

數個の類似した職業の組合を包括したものがある。

職別的の聯合と、産業別的聯合との優劣は、久しく組合界の問題となつてゐた。一九〇〇年の大會に於てすらも、職別的聯合は成るべく産業別的聯合とすべしといふ主張が聞かれてゐた。最初C・G・Tは職別聯合、産業別聯合共に加盟を許したが、一九〇六年のアミアン大會に於て、加盟資格を産業別聯合に限り現在加盟の職別聯合以外には、爾後加入を許さぬことゝした。大會は共理由を説明して、機械の進歩が勞働階級の職業的障壁を撤廢したること、又た職業團體としても、包容力の廣汎なる聯合の一層有力なことを主張して居る。佛國組合界の趨勢は、漸次職別的聯合より産業別的聯合に進みつゝあるものであつて此點に就いて革命派は保守派に對して勝利を占めた。彼等の主張によれば、職別的聯合は、最早や現在の資本家階級に對抗して、充分なる鬪爭力を有しないばかりでなく、將來の新社會に於ける經濟組織として、産業的聯合は極めて重要な意義を有するものである。一九〇〇年、冶金工は鑄工、機械工、銅工の三職別聯合に對して合同の提議をしたが、三聯合團體は此提議を卻けた。然るに一九〇四年には鐵工と鑄工との間に、一九〇五年には鐵工と銅工との間に特殊の關係が結ばれ、産業的聯合に向つて歩を轉じたのも、此傾向を示したものである。

全國組合(サンヂカ・ナシオナル)は一職業又は一産業に屬する全國の勞働者を、唯一個の組合に包括せんとするものであつて、此點に於ては、同業聯合との間に共通の性質をもつて居る。

ブールス(又はユニオン)が、同一地方に於ける有ゆる種類の勞働者を團結するに反して、同業聯合は全國に根を張つて、到る所に散在する同業勞働者を結束する。ブールスが職別的の障壁を撤して、勞働者の眼界を開くに對して、同業聯合は地方的の限界を排して、階級的の自覺を鮮明にする。斯くて同業聯合は勞働者の共通利害の觀念を強よめ、團結及び行動の一致を來す上に、大なる貢献をなして居る。又た同業聯合は、傭主に對する勞働者の對抗力を著るしく高めて居る。聯合は何づれも多少の罷工基金を有し、其基金は固より手薄ではあるが、聯合が全國的であるから、全體が一時に直接戰線に立つ場合は稀れであり、從つて戰鬪の中心地點に向つて是等の基金を集中することが出來る。そこで聯合の基金は比較的少くても、比較的有力に利用することが出來る。次に同業聯合は、全國各地の勞働條件を一樣にし、最も不利な地方にある勞働者の、例外的の搾取を妨ぐの効がある。同業聯合の共濟的施設は、大抵求職旅行手(ヴイアチクム)

當と失業手當とに限られて居るが、固より例外がある。斯くて佛國の組合組織は。縱横二樣の紐帶によつて、勞働階級の團結力を、最大限度にまで尖鋭にして居るのである。

同業聯合の内部の組織は、之を三種に區別することが出來る

（一）自治的聯合を基礎とするもの。多數の同業聯合は中央集權的の組織を排し　從つて聯合の手に財力を集中することをも欲しない。其組織は飽くまで聯合主義であつて、各サンヂカは最大限度の自治權を保留する。サンヂカは其大小に拘らず、各々一名の代議員を出だし、是等の代議員によつて聯合評議會（コンセーイ・フエデラル）を組織する。各サンヂカは、何時たりとも其代議員を解任することが出來る。此種の聯合には建築工、冶金工、屠獸者、硝子工鑄工、纖維工、獸皮工、ミヂー地方の農業勞働者等の聯合を數へることが出來る。此種の聯合は一般に戰鬪的である。

聯合主義による聯合の一例として、鐵工聯合の管理を見ると聯合委員會（コミテー・フエデラル）は加入組合より選出する各一名の代議員より成立する。但し代議員は巴里の組合員中から選ぶことゝなつて居る。聯合委員會は執行委員會を選任する。此內委員會の幹事局は何づれも、聯合會の大會によつて選ばれる。幹事は月額二百三十四法の報酬を受ける。一九〇五年の第十二回大會は、一層宣傳の効果を擧げる目的で、全國の七大鐵工地の各々に地方幹事局を置き、常任幹事には月額百八十法を支給することゝした。

（二）中央集權的の組織を有するもの。此種の聯合は最も舊くからある聯合團體であるが、其數は幾何もない。中央集權的の聯合の標本的なものは印刷工のそれであつて、此聯合は佛國の組合聯合中、最も富強なものである。印刷工聯合（フエデラシオン・デュ・リーヴル）は印刷工、製本工、校正係其他を包括する產業的全國聯合であつて、一九〇八年には百八十のサンヂカより成つてゐた。其組織は中央集權的であつて、個々の組合の自治權は殆ど認めてない。個々の組合は失業手當基金、疾病傷害手當基金の管理及び支辨に任ずることが、主要の任務であつて、一般職業上の利害に關する問題に就ては、中央委員會は專權を握つて居る。罷工宣布の權も亦た聯合會の掌中にあつて、個々のサンヂカは其承認を經ずして罷工することは出來ぬ。聯合會の管理は、任期三年の中央委員會（コミテー・サントラル）によつて行ひ、委員は各サンヂカから選出するものではなく、加盟組合員の總會に於て、單記投票によつて選出される。且つ隨時解任することは出來ぬ。斯ように革命的組合主義者の最も尊重して居る二原則、卽ち自治主義と各組合を單位として代議員を出すの權利とは、此聯合では全く拒否せられて居る。中央委（コミテー）

員會の人員は、各サンヂカの代りに加盟組合全體を部に分ち、各部を通じて二十五名を出だし、外に類似のサンヂカの各々より二名づゝの割合で選出する。種々なる基金の收支は、監査委員によつて監督せられて居る。

會費は加盟組合員一名に付き一ケ月一法。失業手當、罷工手當(一日三法半)、求職旅行手當、疾病手當等の施設がある。以上は印刷工組合聯合の組織であるが、此聯合は中央集權的聯合の典型と見て差支ない。此種の聯合は、英國のツレーズ・ユニオンに彷彿し、資力は富裕にして其思想は溫健に、世間の評判がよい。

(三)全國組合(Syndicat nationale)これはサンヂカの聯合團體ではなく、普通のサンヂカが地方的組合なるに對し、一個の全國的組合であるが、佛國勞働組合の組織のうちでは、聯合團體と同一階級に屬するのである。そこでC・G・Tの規約も亦た、聯合團體と同列に加盟資格を認めて居る。此種の組合は新なる經濟的必要に應じて起つたもので、其起源は比較的新らしく、國家事業、又は大會社の勞働者によつて組織せられて居るものである。殊に官業勞働者の場合には、事業そのものが中央集權的となつて居るので、之に對抗する勞働團體が、一大組合の形態を取ることは、或點までは必要に出づるものといふことが出來る。けれども其れと同時に、此種の官業勞働者が、中央集權的の組織を好むのは、知らず識らずの間に現代國家組織の影響を蒙り、官僚主義の心理に感染して居る爲だといふ觀察も、全く謂はれ無きものではない。全國的組合には基本組合の無い代りに、全體は多くの支部に分たれて居る。此種の組合の典型は全國鐵道從業員組合であつて、組合の管理は、大會の選擧により三十名の評議會によつて行はれ、評議會は其うちより幹事長、副幹事、會計長、副會計、書記各一名を選出する。別に十五名より成る監査委員會がある。組合員五十名以上ある地方には、評議會は組合員の推薦に基づき、會費徴集主任及び幹事各一名を置く。總同盟罷工に關しては、特に規約を以て次の如く規定して居る。即ち總同盟罷工は、管理評議員中の十六名以上によつて提議せられ、毎年の大會が特殊の比例を以て、各鐵道系統の間に割當てゝ選出する二十六名の委員會に於て、少くとも二十名以上の贊成を得なければ宣布することは出來ぬ。一九一〇年の調査によると、全國鐵道從業員組合は三百四十支部を有してゐた。郵便電話電信使傭人の組合も亦た此種の全國的團體である。

以上は三種の聯合團體の管理につき、其大體を示したもので管理の形式には多少の相異がある。例せば機械工の聯合會では大會は十一名の聯合評議會（コンセーイフエデラル）を連記投票によつて選出するが、投票の比例は組合員百名につき一票、百名以上五百名毎に一票を増す。大會の代議員にも同じく比例代表制を取つて居る。

聯合會にも固より大小がある。一方には建築工の四百八十五組合、食料品の百三十二組合、纖維業の百二十五組合、石工の百六十七組合、屠獸者の百十五組合、獸皮工の百一組合（以上一九一〇年）等があり、他方には機械鉱工の六組合、蹄鐵工の八組合、燐寸工の六組合、洗濯工の四組合等（一九〇五年）がある。人員の上から見れば、鐵道從業員の四萬七千人、建築工の八萬五千人、纖維工の二萬人（以上一九一〇年）、印刷工の一萬人、屠獸者の二萬人、鐵工の一萬人等（以上一九〇五年）は大きい部類に屬して居る。

會費は印刷工聯合の會員一人に對し一ケ月二法は（内四十サンチームは失業手當基金として別途に積立てる）例外的の場合であつて、一般には十サンチーム乃至四十サンチームである。製帽工聯合では一週十五サンチーム（女子十サンチーム）であるが、一九〇一年以來は、各組合は別に組合員百人に對し一ケ年十二法半を納付し、新に加盟する團體よりは五法の入會金を徴集する。石版工聯合では三十サンチームで、内十サンチームは罷工及びヴイアチリムとして積立てる。理髮師聯合は十サンチーム、ペンキ師は五サンチーム（但し一組合の最低額二法）、獸皮工聯合は二十サンチーム、鐵道從業者は入會金五十サンチーム（女子二十五サンチーム）、會費三ケ月一法（女子一ケ年一法以下）である。

會費の安いことは、聯合の場合に於ても、サンヂカの場合と同樣の理由に基くものである。聯合團體は本來專ら鬪爭的の目的を有するものであつて、少數の例外を除いては、共濟事業は閑却せられて居る。求職旅行手當は大抵の聯合團體でやつて居るが、失業手當はやつて居らぬものも少くない。罷工基金も甚だ薄弱であつて、多くは臨時の醵金に待つて居る。サンヂカの場合と同じく、聯合の場合でも、共濟施設に重きを置くと否とは各組合の罷工宣布權の上に大なる差異を來して居る。多くの共濟手當基金を有する聯合は、勢ひ保守的であつて、其組織は中央集權的となり、從つて罷工宣布の權は各サンヂカの手から聯合委員會の手に移つて居る。自治主義聯合主義を取る聯合會が概して戰鬪的なのも之が爲である。例せば冶金工聯合では、[illegible]

工宣布の權は各組合にあるが、罷工に先つて成る可く聯合幹部の助言を求めることゝなつて居る。又罷工の場合に、爭議を政府の仲裁に委ねることを規約によつて禁じて居る。此種の規定を有するものは、他にも少くない。獸皮工の如きも其一つである。鐵工聯合では罷工手當の額は一定しないで、其時々の財政狀態によつて定める。罷工者に對する炊出制度は鐵工の間に最もよく發達して居る。求職旅行手當は一日一法で、加盟組合は何づれも之を行ふ義務がある。手當は巴里以外では一箇所で二日以內、一ケ年に二十五日以內である。

印刷工聯合では、罷工宣布の權は聯合會に屬して居る。共濟施設としては(一)罷工手當は入會後六ケ月を經過する者に限り日曜日を除き、十三週間以內とし、一日三法半、(二)求職旅行手當は、隣接の組合所在地より四十基米迄では二法、それ以上は二十基米每に五十サンチームを增し、二百基米を最大限とする。合計百法のヴイアチリムを受けたものは、十八ケ月間は支給を受けられぬ。但し六ケ月以上組合に加入して居る者に限られる。(三)疾病及び失業手當、入會後一ケ年を經過するものに限り、一週十二法、一ケ年を通じ七十二法を限度とする。(四)死亡手當五十法がある。

機械工聯合では、罷工に先つて有ゆる和解の方法を講ずることゝなつて居る。聯合會の基金から支出せらるるのは、(一)聯合委員會の同意を得たる罷工に對しては、一日二法の罷工手當(二)一日一法、四週間以內の失業手當、(三)失業の爲め他の都會に移る場合には十法、(四)求職旅行手當、一日二法、一都市六法以內である。其他製帽工聯合の如きは、罷工に先つて、聯合會の臨時委員會の許可を求めることゝなつて居る。斯ように各組合の自治權は、手當金制度に比例して消長を見るのである尤も之には固より例外がある。例へば建築工の聯合は、印刷工のそれと同じく中央集權的であり、而かも印刷工に次いで會費の高い聯合團體であるが、其態度は戰鬪的である。但し此聯合では、大體の組織が中央集權的であるにも拘らず、罷工宣布の權が、各組合に屬して居ることは注意に値ひする。

聯合團體は大抵皆、機關雜誌を有し、定期の大會を開く。大會は聯合の最高の決定機關である。大會は大抵每年一回、又は六ケ月に一回、少くとも二年に一回開かれて居るが、印刷工聯合は五年に一回、機械工聯合は三年に一回である。全國組合は每年一回である。

以上三種の聯合は、何づれもC・G・Tに加盟の資格がある。但し全聯合の存しある場合には、一地方の聯合團體に加盟の資格を認める。一九〇八年には約六十の聯合と三つの全國組合があつて、加入組合數は約二千六百、組合員二十九萬五千人であつた。但しブーゼーは右は實數よりも少いと云つて居る。(續)

價値學說の「改造」論に於ける地位

——リカルドオ、ロオドベルトス、プルドン、マルクス——

小泉信三

（一）

勞働者をして勞働產物の全部を收得せしめよと云ふ積極的の形に於てするか、或は人が財產權の力に依て收受する利潤利子地代等の無勤勞所得を非なりとする消極的の形に於てするか、兎に角人が人の勞働を搾取することを不當とする思想は社會主義思想その者と殆ど同じ樣に古いものであつて、同時に今日に於ても殆ど凡べての社會主義者の現社會に對する批評の一論據となつて居る。假にサア・トオマス・モアの「ユウトピヤ」を以て近世社會主義的文書の最初のものであるとして、モア以後最近に至る迄の同傾向の文書を通覽して見れば、社會主義諸流派を通じて現社會に對する批評として勞働搾取の事實を指摘してゐないものは殆ど全くないと云つて宜からう。ところで此勞働搾取の說は特に理論的訓練を經た頭腦を俟て始めて生る可きものではない。それは貧富の懸隔ある社會に生れ、貧者勞して富者逸する事實を見て、この兩事實を因果關係に結付けて考へるものの甚だ容易く到着する結論であらう。それ故これ丈けのとこでは此說は左程特別に經濟學研究者の興味を引くべきものではろない。然るに十九世紀の始め、英吉利正統派の經濟學が物の價値をその物の製作に投ぜられた勞働量に歸する勞働價値說なるものを確立するに及んで、之を利用して勞働搾取說は特殊の發展を遂げ、而してその發展はマルクスの餘剩價値說に至て其極致に達したのである。本誌の前號で私は、マルサス—リカルドオの賃銀學說がフエルヂナンド・ラッサルの手で利用せられて鐵

逸に於ける社會運動の論據にせられた事を述べた。此文章では同じリカルドオの價値學說が社會主義者の繼承利用するところとなり、勞働搾取說の完成の爲めに特殊の貢献をなした顚末に就て書かうと思ふ。

(二)

リカルドオの價値學說もその賃銀學說と同樣に主として千八百十七年の著「經濟學及び租稅原理」の中に說かれてゐる。而して彼れの賃銀學說が前人未發の新說と稱す可きものではなかつたと同樣に、通常リカルドオの名を以て記憶せらるゝ勞働價値說も亦決してリカルドオを以て新たに始まるものではない。固より私は此處でリカルドオ以前に於ける勞働價値說の沿革を述べるつもりでない。私はたゞリカルドオと同軌の說若しくはその萌芽と見るべきものが十八十七兩世紀の經濟論中に屢々發見せられると丈けを記して自ら甘じる。たゞリカルドオに先だツ事百五十年にして、貨物と貨物との交換比率を決するものは夫れ〳〵二者の製作に費やされた勞働量であると云ふ、勞働價値說の神髓を最も明確に斷言して、「勞働價値說の父」なる名を得たサア・ヰリヤム・ペチイの意見丈けは玆に其一端を記して置き度い。ペチイは貨物の內的價値と外的價値とを分ける。前者は貨物の自然價値で後者はその市場價値である。そこで自然價値は如何にして決せられるかと云ふに彼れはそれを一六六二年の著「租稅及び貢納論」の中に說明して居る。玆に一人の人が自分の手で一定面積の土地を耘り耕やして穀物を作るものとする。而して此人が「その收獲物の中から種子を控除し、又自分で食べたもの及び衣服その他の必要物に換えて他人に與へたものを差引くと殘りの穀物は即ち土地に對する其年の自然地代若しくは眞實地代である。」ところで此穀物又は地代は英吉利の貨幣にして幾許の價値があるかと云ふ問題が起る。予は答へて曰ふ(ペチイが謂ふ)それは別に一人の人が全然貨幣を造ることに從事したものとして、その人が同じ時間內にその經費以上に蓄積し得た丈けの貨幣に相當する。即ちその人が銀產國に渡航し、銀を採掘し精錬し、それを第一の人が穀物を作つて居る場所まで持ち來る。而してそれを鑄造する。同時にその間の食物衣服費用を支辨する。斯くして同時間內に一切の費用以上に剩まし得た丈けの銀は第一の人の穀物と等しき價値を有す可きものである。假に一方が銀二十オンスで他方が穀物が二十ブッシュルあるとすれば、この穀物一ブッシエルの價格は銀一オンス

と云ふ事になるのである。即ち「若しも人が一ブッシエルの穀物を生產すると同じ時間內に一オンスの銀をペルウの地中から倫敦まで持ち來たすことが出來るならば、その一方は他方の自然價格である。さて假に新しき、採掘の一層容易なる鑛山の爲めに人が從來一オンスを得ると同じ容易さを以て二オンスの銀を得ることが出來るものとすれば、穀物は前に五志だつたものが十志になるのが相當であらう。(但し一切の他の條件は等しきものと假定して)」「一人が十人分の穀物を生產するときの方が僅かに六人分を生產し得るときよりも穀物の價は廉い。：：二百人の勞働者が前に百人がなし得たと同じ事をなし得る場合に於ては穀物の價は二倍に騰貴する。」

この頗る明瞭に言明せられた勞働價値說の中心思想は或は修正せられ、或は異なる濃淡の度に於てロック、ベンジヤミンフランクリン、カンチロン、ジエエムス、スチユアルト、アダム・スミス等の主張するところとなつて十九世紀に傳はり、リカルドオに至つて再び最も明確な代表者を見出したのである。

（三）

價値論はリカルドオ「經濟學及び租稅原理」の卷頭第一章の內容をなすと同時に、リカルドオ經濟學全系統中その要石（キーストオン）とたるべき最も重要の部分であつた。彼れがその價値論に於て說明しやうとした事は何であつたか。リカルドオが其念頭に置いたのは所謂交換價値若しくは相對價値であるが、彼れは之を定義して或は一貨物の有する購買力なりと云ひ、或は一貨物の一定量と交換せらるる他の貨物の分量だと云つた。一貨物に對して一定の時市場に於て偶々現實に交換せらるゝ他の貨物の分量は時の需要供給の關係で定まるものであつて、需要の增加に依て騰貴し、供給の增加に依て下降する。然しリカルドオがその價値論で說明しようとしたのはこの時々の市場價格又は現實價格ではない。彼れはこの市場價格の外、別に究極に於て之を支配する自然價格なるものゝあることを想像した。即ち時々の市場價格は需要供給に從て或は高く或は低いけれども、市場價格は到底久しきに亘つて自然價格以上又は以下に離れることが出來ない。此時間內に於ては市場價格は究極自然價格に一致すべき約束を有つて居る。ところでリカルドオが說明しようとする交換價格なるものは實にこの自然價格の謂なのである。然らばこの自然價格即ち交換價値の尺度となるものは何かと云ふに、リカルドは先づ物が交換價値を有せんが爲めには其前提として

使用價値（効用）がなければならぬと云ふ。何となれば、どんな方法に於ても人の欲望滿足に貢献するところのないものに交換價値のあるべき筈がないからだと云ふのである。けれども効用大にして價値小なるか、又は皆無なるものがあるし、其反對に効用小にして價値大なるものゝある事は人の日常目撃するところであるから、効用は直ちに以て價値の尺度とする譯には行かない事が明である。即ちリカルドが佛蘭西のセエに與へた手紙の文言によると「物の効用は疑もなく價値の根基ではあるけれども効用の度は以て價値の尺度とはなる事が出來ない。」のである。そこでリカルドオは貨物を二の種類に大別して、その各々に向つて別の尺度を適用する。貨物の二種類と云ふのは人力を以て増加す可からざる貨物及び勞働を投下することに依て任意に複造し得る貨物である。第一種の貨物の價値はその珍奇の程度と購買者の貧富及びその嗜好の强弱に依て定まる。古美術品珍書、古泉、一定の土地に限つて栽培せらるゝ葡萄で醸した葡萄酒の如きは是である。併しリカルドオの觀るところに依れば一般貨物の中人間の力で複造することの出來ないものは甚だ稀な例外であつて大部分の貨物は勞働を投下することに依て殆ど無制限に其分量を増加することの出來るものである。而してリカルドオが價値の法則を研究するに當て、其念頭に置いたのはこの第二種の貨物である。而して此種の貨物の價値は之を造る爲に投ぜられた勞働量に依て決すると云ふのである。曰く、「此種の貨物の交換價値若しくは一貨物の幾許が他の貨物と交換せらる可きやを決定する規則は、殆ど全く、その各々に投ぜられたる勞働の相對量に依て決せられる。」而して貨物に投ぜられたる勞働量がその交換價値を左右するものならば、貨物に投ぜられたる勞働量の増加は貨物の價値を高めその減少は價値を引下げなければならぬ筈であると。リカルドオの此思想を得たのは彼れがその「經濟學及び租稅原理」を著はす以前にあつたので、一八一五年に公にした「穀物價格の低廉が資本利潤に及ぼす影響」と題する冊子の中には既に同主旨の事が明記せられて居る。「一切貨物の價値はその生產の困難が增すや否や直ちに騰貴する。即ちより多くの勞働が必要となりたる爲めに穀物生產に新たなる困難を生じ、一方金銀麻布等を生產する爲めに要する勞働量は變らないとすれば、是等のものに比較して穀物の交換價値は必然的に騰貴しなければならない。反之穀物若しくは或他の貨物の生產が容易となり、爲めにより少なき勞働を以て之を造ることを得るに至ればその交換價値は下落する。木棉工

業に於ける機械の改良は棉製品の交換價値を低下せしめ、鑛山業に於ける改良、若しくは產出力より大なる新しき金銀鑛の發見は金銀の價値を下降せしめる。同じ事を別の言葉で云へば一切の他の商品の價格を騰貴せしめる。何時でも競爭がその作用を完全に發揮し、而して生產が、例へば或種の葡萄酒の場合に於けるが如く、自然に依て制限せられてない場合には究極その交換價値を左右するのはその生產の難易でなければならぬ」と。

（四）

生產の爲めに投ぜられた勞働の相對量が貨物の價値を決定する事は上述の通りであるが玆にリカルドオが所謂投ぜられたる勞働とは單に直接或貨物の生產に投ぜられた勞働のみに限らず、或貨物の生產の爲めに使用せらるる資本の生產の爲め費やさるる勞働をも含むのである。リカルドオはアダム・スミスを引用する。スミスは原始社會に於て鹿と海狸との交換の割合は通常此二者を捕獲する爲めに要する勞働量に依て決せられ、鹿に較べて海狸を捕獲する爲めには二倍の勞働を要すとすれば二頭の鹿は一頭の海狸と交換せらるべしと記して居るが、此場合に於ても交換比率を決するものは獵師の勞働のみではなくて獵具の生產に要する勞働も亦之に與かるのである。假に海狸を捕獲する事は困難で之を射擊する爲めには鹿に對するときよりも精巧な武器を要し、從てより多くの勞働をその製作に投ずる必要があるものとすれば一頭の海狸は二頭の鹿以上の價値があるであらう。又二種の獵具に費やさるゝ勞働量は相互同じであつても、一方の獵具は使用が久しきに堪え、他の一方は速かに破壞するものとすれば、使用久しきに堪ゆる道具を以て造つた生產物の價値は然らざるものに比して比較的低廉であるだらう。何となれば存續長きに亘る生產要具は速かに消耗する生產要具に比して其價値のより小さき部分が生產物の價値に移されるからである。此道理は原始社會に於けると文明社會に於けるとに依りて異なることなく、貨物の價値を決するものは常に直接一物を造る爲めに投ずる勞働の外、其場合に使用する機械道具原料等に投ぜられた勞働の合計である。例へば靴下の他の貨物に對する價値を決するものは之を作り之を市場に販出する爲めに要する各種勞働の總量である。試みにリカルドオに從つてそれを列擧して見やうか。第一は棉を作る爲めに土地を耕耘するに要する勞働である。第二に棉を靴下の製造せらるゝ國迄運搬する

勞働。その中には運搬する爲めに棉を積込む船の建造に投ぜられた勞働の一部分を含む。第三に紡織工の勞働。第四に建物機械を建造する機械工、鍛冶、大工の勞働の一部、第五に小賣商その他多くの人々の勞働である。是等各種の勞働の總量が沓下の他の貨物に對する價値を決定するので、他の貨物の側に於ても矢張り同じ事が云はれるのである。而して是等各種勞働の何れかの部分が增減すれば貨物の價値は必ず昇降しなければ止まないのである。

此理はまた生產要具の使用者がその所有者と同一人であるかないかに依て二三にせらるる事なく、また生產物が生產要具の所有者と使用者、卽ち資本家と勞働者との間に如何なる割合に於て分配せられるかは貨物の交換比率には影響しない。卽ちリカルドオの見るところに從へば價値は費やされたる勞働量の增減に依てのみ變動するもので、賃銀率及び利潤率の變動は價値變動の原因にはならないと云ふのである。何故と云ふのに、假に賃銀が騰貴したとすれば（リカルドオが賃銀の騰貴下落を曰ふときには何時もその一般率の變動を斥して謂ふのである）この騰貴は各種の產業に對して均等の壓迫を加へる譯であるから特にそれが爲めに一貨物の價値が騰貴する筈はないのである。例へば漁業の產物たる鮭と狩獵の產物たる獸とが、假に鮭二、鹿一の割合で交換せられ、而して之をまた金に比較すれば鮭は一磅、鹿は二磅に當るものとすれば漁業、狩獵及び採金に要する勞働量に變化のない限り如何に賃銀率に變動があつてもこの三つのもの丶交換比率は少しも變動することはない。賃銀が高くなつたと云ふ理由で、漁業家並びに狩獵者がその獲物の價値を引上げるならば同じ理由で金鑛の持主も亦金の價値を引上げるであらう。從て鮭、鹿及び金なる三つのもの丶交換比率は賃銀騰貴の前と後とで少しも變はるところはないと云ふのである。

要するに價値變動の原因は投下勞働量の變動以外に之を覓めることは出來ないと云ふのがリカルドオの主張である。リカルドオの價値學說は決して之を以て盡きて居るのではない。彼れが價値論の章の末段に至て重大な修正を加へた爲めに讀者をして適從に苦しませる事は後に至つて說明するが、併し兎に角普通にリカルドオの勞働價値說として通用して居るもの丶大要は右に述べたところを以て略ぼ盡くされてゐるのである。

（五）

右に述べたやうな價値學說が社會主義的傾向を帶びた論客に依て何う云ふ風に利用せらるべきかは略ぼ豫想するに難からぬところである。貨物の價値はその生產に投じられた勞働量に依て左右せらるゝものであつて、而して生產に用ゐられた原料及び生產要具の價値はその生產の爲めに消耗された丈けが生產物の價値に移されるものとすれば、消耗せられた資本を回收して猶それ以上に資本家が收得する利潤なるものゝ發生すべき餘地は全くない。價値が勞働の所產であるならば、勞働せざる地主資本家の所得は、勞働に依て造られた價値の一部を搾取したものに外ならぬ。即ち利潤及び地代は支拂はれざる勞働だと云ふ事になる譯である。この推論が果してリカルドオの價値學說を正當に解釋したものであるかないかは今措いて問はない。たゞ十九世紀前半の英國に於ける、社會的不安の裡に生れた社會主義的論客に取て、經濟學の最高權威たるリカルドオの學說が甚だ有利に利用し得べきものであつた事は疑を容れないのである。當時英吉利に輩出したヰリヤム・トムソン、ジョン・グレイ、トオマス・ホジスキン、フランシス・ブレイ、チヤアルス・ホオル等を稱して Ricardian Socialists と稱するものがあるのは之が爲めである。而して最も聞こえて居るのはヰリヤム・トムソンであらう。私は當時英吉利社會の或方面に於ける輿論の一端を窺ふ爲めトムソンが千八百廿四年に公にした「最もよく人間の幸福に導く可き富の分配の原理に關する硏究」の中から勞働搾取を論じた兩三節を引用する。（ヰリヤム・トムソンが殊に有名になつたのはアントン・メンガアが「勞働全收權論」の中で彼れを推賞して、カアル・マルクスの餘剩價値論はトムソンから得たものだと云ふ斷定を下してからの事であらう。マルクスの「種本」に就てはこの外別にトオマス・ホジスキンを擧げるものもある。私は此種の考證に興味をも感じ有益だとも思つて居るが、同時に誰れの何の說は誰れの何の說から取つたものだと云ふ斷定を下すには餘程愼重の態度を以てしなければならぬとひそかに考へて居る。一方にマルクス、エンゲルスの「共產黨宣言」は佛蘭西人コンシデランの小册から剽竊したものだと云ふ攻擊があるが、カウツキイは之に答へて、マルクス、エンゲルスがコンシデランを寫したと云ふのは當時の多くの社會主義者の中でコンシデラン丈けしか知らない者の云ふ事である。「共產黨宣言」とコンシデランの宣言との間に共通なるものは、他の凡べての佛蘭西社會主義者と共通なるものだからであると云つて居る。この言は恐らくトムソン、ホジスキン等に就ても適

用する事の出來るものであらう。）

（六）

さてトムソンは先づ最初に勞働は富の父母なることを云ふ。「富は勞働によつて造られたもので、勞働が費やされたと云ふ事のみが一の欲望の目的物を化して富とする。勞働は富の唯一の普遍的尺度であつて、又その區別的特徵である。」土地、空氣熱、光線、電流、人馬、水等は、たゞそれ丈けのものとしては富と呼ばれる資格がない。是等のものは欲望若しくは幸福の目的物ではあるだらう。併乍ら勞働の手が之に觸れるまでは彼等は富ではないのである。野生の牛馬は富ではない。たゞ人間が勞働を投じて之を捕へて來るに及んで始めて富となるのである。是等の動物の價値は之を擔荷獸なり又は食用獸として役に立つやうにする爲め、普通の膂力と熟練とを有する人がそれに投ずることを要する平均勞働量に依て定まるのである。たゞ効用がある許りで、何等かの形ちで勞働が之に具體されるに非されど如何なるものも富とはならぬ。勞働が具體されるに及んで、「それは他の欲望對象若しくは幸福の資料から離れて富と云ふものになる」のである。さて次に現在の制度の下では生産要具は勞働者の手にはなくて生産に參加しないもの丶手中に屬して居る。さうして勞働者が何物かを生産しようとすれば、之をその持主から借りなくてはならぬ。ところでこの借用に對しては如何なる代償を支拂ふべきか。「勞働者が生産必要具（土地家屋衣服道具原料食物）の使用又は購入に對して提供し得る唯一の物品は之れ亦彼れの勞働の一部分である。然るに、資本家なる名の下に是等の必要物を占有してゐる人々が、その使用又は貸附に對して要求する勞働の部分は非常に大きくて、爲めに勞働者の生産物の大部分は彼れの手中から取去られて、是等の必富物を蓄積し、且つ之を實際の生産に貸與すると云ふ以上には、生産に參加する事をしない人々に依て消費せられるのである。是等の生産要具の所有者は啻に無爲にして、眞實の生産者の中最も熟練勤勉なるものが得るに等しき享樂を恣にするのみならず、その（資本）蓄積額に比例して、生産者の極度の勞働が獲得し得るより十倍、百倍又は千倍の貨物を獲得するのである。勿論機械原料等の形に於ける資本がなくて、たゞの勞働だけではその生産力が割合に低いのは事實である。從て勞働者がその使用に對して代價を支拂ふのは固より正當の事であるが、問題は生産要具の使用に對して彼れの勞働産物の中から幾許を差引かる

可きやと云ふ事にある。ところで、此使用の價値に就ては、勞働者の資本家のと二つの尺度がある。勞働者の尺度に從へば資本の消耗を銷却し、且つ之にその持主又は監理者をして、生產的勞働者と安樂の程度を同ふする生活をなさしめ得る丈けの額を加ふる丈けを以て足れりとする。之に反して資本家の標準となるものは同一量の勞働が機械其他の資本を使用する結果として生產する餘分の價値であつて、かゝる餘剩價値 Surplus value は資本を蓄積し且つ之を勞働者に貸與へる才智と技術とに對する報償として全部之を資本家をして收得せしむ可きものだと云ふに在る。而して史初以來今日に至る迄資本家と勞働者とはこの余剩價値を目的物として相競爭し、その競爭の結果として資本家は此價値の大部分を占有して居る云々。(同書、第一章第一節及第十四節)

前にも述べたやうにヰリヤム・トムソンの說は他と趣を異にする全然特異の產物ではなくて、同時代の全傾向の論の一標本に過ぎないのである。マルクスもプルドオンに對する駁論「哲學の貧困」の中で斯う云ふて居る。「英吉利に於ける經濟學の發達に少し通じて居るものには此國の殆ど凡べての社會主義者がリカルドオの學說の平等主義的應用を試みた事が知られてない事はない。吾々はプルドオン君に向つて、ホジスキンの經濟學(一八二二年)ヰリヤム・トムソンの「富の分配の原理研究」(一八二四年)エドワアヅの「實際的道德的及び政治的經濟」(一八二八年)等等等等、猶ほ四頁の等々を擧げることが出來るだらう」云々と。

(七)

大陸でリカルドオの價値論を社會主義說の基礎として利用したものの中最も重なるものは佛蘭西ではプルドオン、獨逸ではロオドベルトスであらう。

プルドオンはそのマルクスの駁擊を招いた「經濟的矛盾の制度。別題貧困の哲學」(一八四六年)の第二章で價値を論じて居る。プルドオンに從へば一切の富の要素を產出し、また之を比例の法則に從て結合するものは勞働であつて、又實に勞働のみである。一言以て蔽へば富の素材を動かしまた之を形成するものは勞働である。斯うして見ると、「價値なるものは、之を生產者等が分業と交換とに依て組織する社會に於て之を見るに、富を形成する生產物の比例關係であつて、而して人が特に一生產物の價値と稱するものは、この生產物の一般の富に對する比例を

貨幣の數字で示す一形式なのである。効用は價値の根基をなし、勞働はその割合を確定し、價格はこの割合を示す表現である。」然るにプルドオンの見るところでは勞働は價値の比例を定める原理だと云ふ命題は單に事實を云ひ現はしたものに止まらずして、同時に又「進歩の目標、社會的幸福の條件並びに形式、經濟學の始めにして且つ終り」なのである。そこで彼れは人をしてその生産に投じた勞働丈けの價値のものを他より收得することを得せしめんが爲めにその勞働貨幣の案出に到達したのである。曰く、一切の價値は勞働より生ずる。各生産物は勞働の代表記號である。從て各生産物は他の各生産物と交換せられる。然らば貨幣が一般に他のものよりも尊重されるのは何う云ふ譯かと云ふに、それは貨幣がその價値の公に定められた唯一の商品だからである。明確に定められた價値を有するが爲めに、貨幣は一切の商業取引の媒介者として役立つのである。併し乍ら此役目は凡ての商品の價値が公に定められさへするならば何の商品でも同樣に果たす事が出來るのである。……一度び凡べての商品の價値が貨幣の價値と同じ樣に定められて、而してそれに依て凡べての商品が「可通用」となるならば、即ち約言すれば鑄貨同樣に一切の支拂に於て受取られるやうになるならば、この一事實に依て社會は交換上の見地から見た其發展の最高度に到達するであらう。社會經濟はその時交換に就ては完成の狀態に在るであらう。生産は未だ完全に組織されてないが、交換及び流通は既に其域に達した譯なのである。而して勞働者は富と幸福とを得んが爲めにはたゞ生産しさへすれば好い、間斷なく生産しさへすれば好いのである。」と。プルドオンの見るところに從へば勞働力は充分存在して居る。人が物を買ふ事を妨げるものは貨幣の缺乏である。それ故貨幣と云ふものを全然廢して、これからは各々の勞働の生産物その者を貨幣にしなければ行けないと云ふのである。今日では生産物を貨幣と交換し、その貨幣を更に生産物と交換するのであるが、それを「人民銀行」の媒介に依て生産物と生産物とを直接交換せしめることにしようと云ふのである。この人民銀行は各生産者の提供する生産物に對して交換切符を交附する、例へば靴工が靴を提供すると、銀行はそれに對して靴の價値額に相當する丈けの切符を交附する。靴の價値は之れに投じた勞働時間及びその他の支出とに依て決定するが、利潤はその中に加算しないのである。

人をしてその勞働の全産物を收得せしめると云ふ主意から勞働貨幣の案出に到達した人はプルドオンの外にもまだある。國

家社會主義の大理論家ロオドベルトス・ヤゲッツオウも亦たその一人である。

(八)

ロオドベルトスが一八四二年に公にした「國家經濟的狀態の認識に就て」と題する書は分量の上から云へば二百頁に滿たぬ小冊であるが、その主張の理路の透徹せる點に於ては獨逸理論經濟學に於ける第一流の好著として屈指せらるべきものであらう。その論ずるところは經濟財の價値及び土地並に資本賃料(レント)であつて、一言にして云へばリカルドオから出發してリカルドオを完成しようとしたものと云つて好からう。內容は經濟財、經濟價値、資本及び土地賃料、理想的貨幣に關する五個の定理(テオレエメ)の證明である。第一の定理は「一切の經濟財は勞働がかゝつて居る(kosten)而して勞働のみが掛つて居る」と云ふにある。別の言葉で云へば「勞働の費やされたる財のみが經濟財である。併し勞働以外には財の費やされたる何物もない。別語を以て云へば財の發生史上に於て、費用として見るべき唯一の要素は勞働である。」第二の定理に曰く「財の價値が常にその勞働費用額に等しきものならば勞働は最良なる「價値の尺度」であるだらう」と。ロオドベルトスは之を稍々詳しく說明して云ふ樣「如何なる財が最もよく價値の尺度として役立つべきか。答へに曰く、疑もなくそれは常に財の眞價(レアルエルト)を最も忠實に示すことの最も確實なるものである。貴金屬は人の知る通り、其れ自身の價格が變動すると云ふ缺點を持つて居る。反之勞働は凡べての財の自然的價格決定原因その者である。それ故に若しも財の相互交換せらるゝ分量が兩貨物に含まれたる同一量の勞働に依て決定せらるゝもの、換言すればAなる貨物とBなる貨物とは常に此兩貨物に投ぜられたる同一の勞働量が決定する分量に於て交換せらるゝもの、更に換言すればX勞働の作る貨物量は常にX勞働の作る貨物量に對して交換せらるゝものとするか、或はさうなるやうな設備をするものとすれば、勞働は啻に之を財の價値の尺度として用ゐ得べきのみならず、貴金屬よりは一層よくその役目を果たすであらう。何となれば勞働は何等價格の變動を被ることなく常に同一なる財の費用尺度たるものだからである。」かるが故にロオドベルトスの第五の定理に曰く「財の價値が常に勞働費用額に等しき狀態の下に於ては「流通手段」並に「價格尺度」としての一切の要求を滿たして、而かも自ら物財にあらず、又今日の紙幣の如く物財を代表することもせざる新しき貨幣を作

ることが出來る」と。そこで彼れは一種の貨幣を考案した。それは紙片に勞働量を記入したもので、各人はその生産物に投じた丈けの勞働量を記載した紙片を受取り、その受取つた紙片に記載してある數字に相當する丈けの勞働量の生産物を買ふ事が出來るのである。但しこの勞働貨幣の考案に關する詳細はロオドベルトスが漸く後に至つて、その「標準勞働時間」と題する論文の中で説明したのである。

（九）

リカルドオを本とするトムソン、プルドオン、ロオドベルトス等の說と同じ系統を引く思想はマルクスの餘剩價値論に至つて最も徹底した、精緻なる形を取て現はれた。ロオドベルトスはマルクスがその典據として己れの名を擧げなかつた事に不平で、その人に與へた書簡の中に上記の「國家經濟的狀態の認識に就て」の內容に言及し、この思想は「余の名を擧ぐる事なくしてマルクスの利用するところとなつた」と云ひ、又「予は今日シエッフレ及びマルクスの予の名を示す事なくして予の說を盜めるを見る」或は「予の經濟學に關する第三書簡の中に於て、余は資本家の餘剩價値の泉源を事實上マルクスと同じ方法を以て、たゞそれよりは一層明瞭簡潔に、說明したり」と記して居る。之に對しては、エンゲルスがマルクス「哲學の貧困」の序文及び資本論第二卷序文中に駁論を揭げてその妄を正して居る。その中でエンゲルスの記すところに依ると、マルクスは一八五九年に至る迄ロオドベルトスの述作を知らなかつた。而してその時には彼れ自身の經濟學に對する批評の基礎は既に出來上つて居つたのである。マルクスが巴里で經濟學研究を始めたのは一八四三年の事で、彼れは英吉利及び佛蘭西のオ、ソリチイの書を以て出發し、獨逸の經濟學者ではラウとリストとしか知らなかつた。後に一八四八年新萊因新聞紙上で代議士及び商務大臣としてのロオドベルトスの演說を批評する必要が起つた時にも、吾々（マルクス、エンゲルス）はロオドベルトスの何者なるかを知らなかつた。一方にマルクスは一八四七年の「哲學の貧困」を見ても、又同年ブラッセルで試みた「賃銀勞働と資本」に關する講演を見ても分かる通り、既に餘剩價値が如何なる泉源から生ずるかを知つて居たのである。マルクスはロオドベルトスなる經濟學者のある事を始めて一八五九年ラッセルかのら聞いてその書を一見したのだと云ふ事である。

このエンゲルスの證言は吾々はその眞僞を確かめることの出

來ない地位に居るのであるから、それを信じやうと信じまいとは人の隨意である。たゞ吾々にも之れ丈けの事は言へる。マルクスの餘剩價値說も空に憑つて獨斷的に案出した新說でない以上は、何れその據り處(と云ふか或は落想の機緣と云ふか)になつたものがあるには相違ないが、それが必ずロオドベルトスでなければならないと云ふ理由はない。マルクスは既に前に掲げた駁プルドオン論中の一節で、リカルドオから出發した幾多の英吉利社會主義者の名を擧げてゐる。價値は勞働の所産であると云ふ思想から出發して地代利潤利子等の不勞所得は勞働產物の一部を横領するものに外ならぬと云ふ結論を引くのは當年論壇の一角に於ける風潮をなして居たのであつて、たゞ是れ丈けの事を知る爲めには必しも一人のロオドベルトス出づることを俟たないのである。

たゞマルクスはトムソン——ロオドベルトス等の諸家と違つてその餘剩價値論を社會改造の論據にはしなかつた。既に上に記した通り、トムソン以下の諸家の見るところに從へば、價値は勞働の所產であるにも拘らず、今日の社會では勞働者はその所產の全部を收得することが出來ない。彼等は之を不當とし、斯る制度を改て勞働者をしてその所產の全價値を收得せむるがし如き、即ち所謂勞働全收の實を擧げ得るやうな正しい社會を造らなければならぬと主張する。即ち勞働價値說と正義感情(ゲレヒチヒカイツゲフユール)(1)、道念の要求とが結付いて彼等の社會改造論の根據をなして居るのである。此點に於てはマルクスは全く前人の途とその踏むところを異にして居る。マルクスは今日の社會に於ては資本家又は地主が勞働者の造るところの餘剩價値を横奪して居る。それが怪しからぬから今日の社會を改造せよと主張した事は一度もない。勿論マルクスも、資本家の餘剩價値占有を不當とする感情を、全然口吻に漏らした事がないとは云ひ悄くい様であるが、併し彼れの社會主義なるものは有產者の不勞所得を不當として、この不當の事なからしめんとする道義的要求から生じた結論でないことは疑ふ餘地がない。これはマルクス自身の所說には無論現はれて居るが、同時にまた最も權威あるマルクス註釋家の、樣々の機會に於て反覆言明するところである。即ちフリイドリヒ・エンゲルスは「哲學の貧困」の序文に於てマルクスのロドベルトス剽窃說の妄を辨じた後に記して「マルクスは嘗て此事(勞働者が其產出全價値を收得せずと云ふ事)をその共產主義的要求の根據とした事はない。その根據となるものは常に吾々の目前に行はれんとする資本的生產方法の必然的瓦解である」と

曰つた。マルクスに取つては「餘剰價値は支拂はれざる勞働を以て成ると云ふ事はたゞ一個の事實に過ぎなかつた」のである。

リカルドオも嘗てその價値學說を準繩として一社會制度の當不當を論ずることをしなかつた。彼れに取ては價値學說は單に貨物交換の比率を說明し、併せてその所得分配論の鎖鑰となる丈けの役目をしか持つて居なかつた。此點に於てはマルクスは彼れが認めて「吾世紀の最も卓越せる經濟學者」となしたリカルドオとその立場は相近似して居る。彼れの餘剰價値論はたゞ事實を事實として說明するに過ぎないのである。マルクスもリカルドオ經濟學の系統を引くことに於てはトムソン、プルドオン、ロオドベルトス等と變はるところはなかつたが、勞働價値學說のマルクス系統に於ける意義はそのトムソン等の場合に於けると全然趣きを異にして居る。「改造」論上に於ける價値學說の地位はマルクスに至つて一變したと云つても好い。勞働價値說はマルクスの社會主義に利用せられたと云ふよりも、マルクスと云ふ社會主義者に繼承擴充せられたと云つた方が正しいやうに思はれるのである。

（十）

マルクスの價値論及び餘剰價値論はその既に紹介され過ぎる程紹介せられて居る今日、更に改めて多言を之が爲めに費やすのは（何か特別に嶄新な着眼を以て之を批評し解釋し得ると云ふ自信のあるものでない限り）徒勞である。たゞ此文章の中には全然之を缺く譯には行かないので已むを得ずして次の樣な簡略な記述を以て彼れを紹介する。

「資本的生産方法の行はれてゐる社會の富は無數の商品から成る。」商品とは市場に賣ることを目的として造られた勞働の生産物である。而してマルクスはこの商品の價値を支配する法則を立てようとするのである。リカルドオがその勞働價値說の適用範圍を任意に複造し得べき財に限つたと同じ樣に、マルクスも亦た(イ)例へば土地の樣にその効用の勞働投下を俟つて發生したるにあらざるもの、及び(ロ)勞働の産物ではあつても、今日勞働の投下に依つて複造することの出來ぬ事古美術品の如きものは始めからその價値法則の領域外に驅逐して居るのである。さて、商品なるものは相互交換せられる。するとマルクスは抑も二つのものが相交換せられるのは、その二つのもの丶間に共通な

ものがあるからだと論結するのである。假にXクオタアの小麥とYツエントネルの鐵とが交換せられるとする。X quarter wheat＝Y centner iron さうするとこの方程式は抑も何を意味するか。マルクス答へて曰く、それは此の小麥と鐵と云ふ二つの違つたものの間に、共通なる等量の或ものが存することを示す。故に此二つのものはその何れにもあらざる第三のものに等しい二つのものゝ各々はそれが一個の交換價値である限り、この第三のものに引直されなくてはならぬと。それではその共通の或ものは何かと云ふ事になる。然るにそれは商品の幾何學的、物理學的性質であるべき筈はないと云ふので、段々にそのある可からざる性質を引き抽いて行くと、最後にこの兩者は共に等しく勞働の生産物だと云ふ一事丈けが殘る。この最後に殘る共通の或ものが即ち價値である。即ち「一個の財はそれに人間の勞働が具體されたる故にのみ價値を有す」るのである。然らば價値の大小は何に由て定まるか。投ぜられたる勞働の分量である。而して勞働の分量は勞働時間に依て測られる。併し乍らこの勞働時間は特定の人が特定の場合に生産に投じたる個々の勞働時間ではなくて、「一定の社會に於て、普通の生産條件の下に、普通の熟練及び勞働强度を以てして一使用價値（一財）を生産するに要せらるゝ勞働時間、」即ち「社會的に必要なる勞働時間」であるそこで、「等量の勞働が具體されてある、若しくは同じ勞働時間内に生産され得る商品は同じ價値を有つて居る。一商品の價値の他の商品の價値に對する關係は一商品の生産に要する勞働時間と他の商品の生産に要する勞働時間との關係に等しい。」「商品はその價値に從つて交換せられる」又は「等價のものは等價のものと交換せられる」のである。

以上述べたところ基をとしてマルクスの餘剩價値說は生じて來る。その大略を云ふと、先づ生産要具の所有者と、勞働力以外に何等の財産を有たぬ勞働者とが對立し、而して後者が法律上自由人格者なるところでは、勞働力その者は一個の商品となつて市場で賣買せられる。然らば勞働力の價値は何うして定まるかと云ふに、他の商品に於けると同じく之を作る爲めに要する勞働時間に依て定まる。勿論勞働力は勞働者と不可離のものであるから、勞働力その者は生産する譯には行かないが、勞働者の勞働力を維持し補充する爲めに必要なる生活資料は生産することが出來る。それ故勞働者の一家が一日に消費する生活資料の總量は、一日分勞働力の價値に等しい譯である。そこで假に資本家が一日分の勞働力を買ふ、而して勞働者の生活維持に必要な

物品を生産する爲めに社會的に必要なる勞働時間は六時間であるとする。而して又この六時間は貨幣にして三馬克に相當するものとする。さうすると資本家は此場合勞働力を三馬克で買ふ事が出來る。併乍ら勞働力の價値が六時間で生産されるからと云つて資本家はその勞働者を六時間以上働かせずに置かねばならぬと云ふ譯がない。そこで假に資本家は勞働者を十二時間働かせるものとする。さうすると、六時間の勞働で勞働力の價値は造られるのであるから、それ以上に跡の六時間で生産せられた價値丈けが剩る。之れが餘剩價値である。ところで資本家は勞働者には三馬克を支拂つて、十二時間の勞働産物全體を自分のものにするのであるから、此場合、後の六時間の生産物丈けは勞働者に對價を支拂ふことなく之を懷中に收める。卽ち此說に從へば資本家の收得する利潤は勞働者の勞働産物の一部を搾取したものに外ならぬと云ふ事になるのである。

エンゲルスはマルクスが玆で勞働の價値とせずして勞働「力」の價値に着眼したところにマルクスの功績を認めて居る。斯くすることに依て彼れはリカルドオ等が遂に解くこと能はざりし余剩價値の謎を解き得たと云ふのである。その說に曰く「勞働は價値の尺度である。然るに現實の勞働は、その資本との交換に於て、實際勞働と交換せらるゝ、商品に具體せられた勞働よりは、低い價値を有つて居る。現實勞働の一定量の價値なる賃銀は、この同一勞働量に依て生産せられた商品の價値よりも常に低い。この形ちで提出すれば此問題は實際不可解である 然るにマルクスは今之れを正しい形ちで云ひ現はし、而してそれに對する答へを與へて居る。價値を有するものは勞働ではない。價値を生み出す一の行爲として、勞働はそれ自體に特定の價値を有する能はざる事は、重力に特定の重量なく、熱に特定の溫度なく、又電氣に特定の電力なきと擇ぶところはない。賣買せられるのは勞働ではなくて勞働「力」である。勞働力が一個の商品となるや、その價値はこの商品に具體せられた勞働に依て定められる。この價値はこの商品の生産及び再生産に要する社會的勞働に等しきものである。それ故にこそ、此價値を基礎としての勞働力の賣買は價値の經濟法則とは抵觸しないのである」と(資本論第二卷序)

（十一）

さて右に述べたやうな余剩價値說、從てまたこの基礎となるところの勞働價値說は果して正しいものであらうか、或は間違

つたものであらうか。[illegible]率の[illegible]に對して人を首肯せしめる程周到な答へは與へることと困難であるかも知れない。併し乍ら勞働價値に內在する困難、即ち勞働價値說の主張者の立場を一應は是認しても、貨物と貨物との交換比率は投下勞働量に依て（投下勞働量に依てのみ）左右せられるものだと云ふ斷案を、徹底的に主張するの困難なること丈けは比較的容易に之を示すことが出來る。それはマルクスの實例を殷鑑にすれば好い。所謂マルクスの價値論と價格論との「矛盾」なるものを指示すれば好いのである。マルクスの說に從へば新なる價値を生むものは勞働のみであつて、原料機械道具等は生產行程上消耗し減損した丈けの價値が生產物の價値となつて再現するに過ぎない。それ故マルクスは資本家の資本中勞働者の賃銀として支出せらるる部分と、物的生產要素購入の爲めに支出する部分とを區別して前者を可變、後者を不變資本と名つけて居るが、マルクスの考へに從ふと餘剩價値は可變資本のみから生れる筈であるから、同額の資本を以て生產に從事しても、之を組織する可變、不變の兩部分の割合が同じでなければ、利潤率は違つて來なければならぬ筈である（餘剩價値の可變資本に對する割合を餘剩價値率、餘剩價値の資本全額に對する割合を利潤率と呼ぶ。）然るに實際の事實は明かに之と違つて、同額の資本は、それを組成する可變不變兩部分の割合如何に關係なく、同額の利潤を擧げて居り、而してマルクスは明かに此事實を認めて居る。此處に至つてマルクスの勞働價値說は甚だ困難な立場に陷つたと云はなくてはならない。勿論マルクスはこの困難を解決するの途ありとしてその所謂生產價格の說を唱へたのであるが、この生產價格の說と、彼れが始めに唱へた勞働價値說とは普通人の見るところを以てすれば相調和し難きものである。生產價格とは生產原費に加ふるに平均利潤を以てしたものである。而して平均利潤とは一切の產業から生ずる餘剩價値の合計と凡べての產業に投ぜられた資本總額の合計との比なる平均利潤率を、特定の產業に支出せられた資本額に乘じて得た積である。今マルクスに從へば資本制度の發達した社會に於ては商品はその價値で賣れずに、その生產價格で賣れる。然るに一商品の生產價格はマルクスの明かに認めた通り、或は價値（投下勞働量）よりも高く、或は之よりも低い。（資本中、可變部分の重を占むる產業に於ては、價値は原則として生產價格よりも高く、その反對の場合に於ては價値は生產價格よりも低し。）之は矛盾であると云つても、またさうでないと云つても言葉はどつちでも好い。たゞマルクスの立場

から出發しても、商品の交換比率を決するものは勞働量であると云ふ原理を、一貫して主張することが出來なかつた事丈けは明かに之を認めなくてはならぬのである。併しマルクスの價値論價格論の關係に就ては近頃私は之を批評する一西洋學者の議論を紹介した許りであるから（雜誌「解放」本年一月號參照）茲に詳論することを省く。たゞ此機會に於て、私はマルクス以前に、矢張り大體に於てマルクスと同じやうに、勞働價値說の原則を以て一貫することの出來なかつた顯著な一例を引いて讀者の注意を促がし度い。それは云ふ迄もなくマルクスの所謂「吾世紀の最も卓越した經濟學者」リカルドオである。

（十二）

前にリカルドオの價値說を紹介したところではリカルドオは貨物の相對價値は投下勞働量の增減のみに依て左右せらるるものであつて利潤率賃銀率の昇降は貨物の交換比率の影響するものではないと云ふ說だと云つた。併し同時に私は特に斷つて、リカルドオの價値說は決して之れ丈けを以て盡きて居るものではなくて、彼れが價値論の章の末段に至つて、前に述べた原則に對し甚だ重大な修正を加へた事を云つて置いた。之から述べやうとするのはその「修正」の部分である。

リカルドオは一度びその「經濟學原理」を公にした後、その友人でもあり弟子でもあるマツカロツクに書を與へて、その中、で斯う云つた。「此問題（價値問題）に就て最善の思索を重ねた結果、私は貨物の相對價値を動かす原因が二つある事を信ずるものである。第一は貨物を製作する爲め必要なる相對的勞働量、第二は勞働の結果が市場に齎出される迄に經過する時間の長短である。而して固定資本に關する一切の問題は右の第二の規則の範圍内に落ちるものである」と。今彼れの「修正」もこの「時」を擧げて、貨物の價値が、生產に要する勞働量には變化がなくても、貨物の生產せられてから市場に運び出される迄の時間の長短に依て、能く變動すべきの理を示さうしたもの外ならぬのである。リカルドは一例を按じて曰く、茲に人があつて金千磅を投じ、一年間二十人の勞働者を傭つて或貨物の生產に從事せしめ、次年に於て其貨物を完成せしめんが爲めに、更に千磅を投じて再び二十人を一年間雇傭し、二年目の終りに之を市場に賣出したする。此場合利潤率が一割であるとすれば彼れはその貨物を $\{(1000\times1.1)+1000\}\times1.1=2310$ に賣らなくてはならぬ。然るに別に人があつて同量の勞働を投じて或物を造らしめても、

彼れは二十人の勞働者を二年に亘つて雇傭せず、直ちに二千磅を投じて四十人の勞働者を一年間雇傭したものとすれば、彼れは其貨物に對して、二千二百磅（2000×1,1＝2200）を要求するだらう。即ちこの二の場合に於て、費やさるゝところの勞働量は正に同一であるが、時間の要素に異同のある爲め、二貨物の價値は相等しくないのである。而して「時」の要素に依て價値に變動を生ずると云ふのは畢竟利潤の要素に依て價値の變動を生ずと云ふ事に歸着する。さうなると前にリカルドオが價値を決定するものは費やされたる勞働量のみ、賃銀の高低從て利潤の異同は、（リカルドオの分配論では賃銀と利潤とは常に正反對に動く。この二つのものは一定量のものを分割するのであるから一が增加すれば他が減少し、反對の場合はまた反對の事が起るのである）之に與かることなしと云つた、始めの原則は著しい制限を受けるものと云はなくてはならぬ。

ところで直接に勞働を費やして或物を造るのと、先づ勞働を費やして、器具機械即ち固定資本を作り、然る後この固定資本を利用して或物を生産するのとの差異は畢竟之を勞働の生産物が市場に販出せらるゝ時間の長短の差異として考へることが出來る。即ちリカルドオが前に揭げた書簡の中に、固定資本に關する一切の問題は時間長短の問題に屬すると記した所以である。即ち固定資本を利用する事の多いものは利潤の影響を受けることの甚しいもので、さうでないものは之を受けることの少ないものである。そこで之を一般的に云ふと二種の產業があつて之に同額の資本が投下せられて居つても、その資本中に於て固定資本と流動資本との占めて居る割合が同じからざるときは、投下勞働量には何等の變化がなくても、二貨物の比價は利潤率の高低、即ち賃銀の落騰に依て變動する。即ち利潤率騰貴するときは比較的多くの固定資本を以て生產せらるゝ貨物の比價は騰貴し、反對の事が行はれゝば、又反對の結果が生ずると云ふのである。而して又リカルドオの說に從へば、固定資本流動資本の區別は謂はば程度の差であつて、消耗の最も速かなるものが流動資本、消耗に時を要するものが固定資本である。それ故固定資本の中にあつても、その消耗の速度の比較的急なるものは性質上それ丈け流動資本に接近して來る譯である。從つて右に述べた流動資本と固定資本の割合の異同から生ずる價値變動の法則は、流動資本と固定資本との割合は同じであつても、固定資本の耐久力 durability の同じからざる場合にも利用せらる可き道理である。

そこでリカルドオの勞働價値學說の價値は甚しく局限せられざるを得ない。即ちリカルドオ自記して曰く、貨物の交換價値

が費やされたる勞働量に依て左右せらるゝ場合左の如し。曰く、

（一）人が生產上何等の機械を用ゐずして勞働のみを使用し、且つ貨物が市場に持來たさるゝ迄に經過する時間の長さ同一なる場合、

（二）人が同價値にして、且つ存續（耐久）力を同ふする固定資本を用ゐる場合。

是なりと。

玆に至つて思出されたのは後年エンゲルスが、所謂價値と生產價格との「矛盾」に就てマルクスを辯護し、マルクスの價値法則は平均利潤率未だ發生せず、生產要具は勞働者自身の手に屬したる如き、未開經濟狀態の下に於ては現實に交換比率を支配したものであると、而して斯る未開狀態は基督紀元前三千五百乃至五千年から第十五世紀まで續いたものであるから、マルクスの法則は五千乃至七千年間實際に行はれて來たのだと云つた事である。經濟學者シユルツエ・ゲヱルニツツ之を評して曰く、資本論第三卷が出て、生產價格の說が發表されてからマルクス主義者の猶ほ支持しようとする價値說に就ては Le roi règne mais il ne gouverne pas.（王は君臨すれども統治せず）の諺が宛てはまる。然るにエンゲルスに從へばこの王は統治せざるのみならず既に死んだのであると。私はシユルツエの批評の奇警なることを喜ぶものである。

社會の中の、勞働せざる一部分が、勞働に服して居る他の部分の擔負となつて居る事實は別に理論の證明を俟つまでもなく、吾々が普通の觀察に依て最も明白に知り得ることである。たゞこの事を價値學說に依て證明し、若しくは之に基づいて批評しようとした幾多の試みを上に述べて來たやうな經過を示して今日に及んで居る。私はその沿革に興味を感じてそれを此文の主題に擇んだのである。（完）

前號『河上福田問題の總勘定』正誤

▲六一頁上段十三行目――『侵擊として』は『侵擊を直に社會共者に對する侵擊として』

▲六四頁上段三行目――『見出したことは、福田博士說によると……今や到來した』は『見出したことは、即ち福田博士が當日の講演中にも推賞を怠られざる、マルクスの學理的功業ではなかつたか』

▲六四頁下段終より二行目――『學者仲間からの推賞を怠らざる……功業ではなかつたか』『學者仲間からの黑表（ブラツクリスト）をまで含んで居るようである』

▲六五頁上段六行目――『進步』は『延長』

▲同上十二行目――『然しながら……如くに見える』は『然しながら學者の說によると、並行線と雖も無限に延長すれば、何處かで切れ合ふものだそうである。そして並行線の切れ合ふ可き時に、今や到來した。』

▲六五頁下段最終行――『運動の』は『運動と、之を沮止しようとする運動との』の組違ひなり、其他誤植の爲め意義の不明となりたる箇所少からず、讀者の寬恕を俟つ。

咬豆茶話

△咬豆子もなが〳〵流行性サボに罹つていたが、昨今の陽氣で、サボ全快、イヤ近頃はサボ處の騒ぎではない。この好い陽氣なるにも拘らず、アイコノクラズムとか、ニヒリズムとか。アナーキズムとか、クロポートキンとか物騒な奴が現れて、乃公もどうやら立退きを食ひそうな形勢に陷つた。

△クロポートキンで思ひ出したが、森戸辰男君の岳父、渡邊莊と云へば、牟田口元學あたりと聯合して東京の外濠電車を創立した人で信仰にかけては鐵石を渡る底の仁だそうな。何でも五、六年前京都大學に一金五萬圓也を寄附して基督敎講座を設けた程の信心家だそうなこの人にしてこの婿ありかネと某哲學者は話していた。

△山川帝大總長は、近いうちイヨ〳〵引退するそうだ、森戸問題がなければ三月には辭職する豫定だつたが、今引退させては若いものどもに對して困るからモウすこし遣つておれとの文部省の註文だそうだが、妙な意地や、妙な註文もあつたものだ。

△そしてその後繼者には。文科からは上田萬年を推す、法科からは小野塚喜平次を推しておるので、幾分か競爭でもないかと心配するものもある。小野塚は上田に比して少々後輩であるからマツ〳〵上田に決定しそうだと云ふが、モウ頭の白黒や、甲羅の生え工合なぞを問題にする時代ぢやあるまい。

△大學總長と云へば、荒木京大はなか〳〵思想問題にも諒解がある。膽もあるし、全く近代の名總長との評判がある。森戸問題で、佐々木敎授が敢然と起つたので、その歸済を擁して總長始め有志の敎授は一日氏を招聘して氏の法律的見解を聽取したなぞは、山川總長の態度に比較して面白いアイロニーである。

△アイロニーといへば、東大の政治科に新思想の二俊才がある。それが一人は元國權黨の親分、佐々友房の嫡子で、その二は前山本内閣の翰長山之内一次の嫡子だというから、造物者も隨分思ひ切つた皮肉の製造をするものだ。

○岡山の太原社會問題研究所はいよ〳〵高野博士を所長に戴いて堂々たる陣容で開所式を擧ぐることとなつた。その各部主任の顔觸れは曰く米田庄太郎、曰く河田嗣郎、曰く森戸辰男、曰く櫛田民藏、曰く北澤新次郎の諸君で斯界の權威者をのみ網羅した。そうなると帝大の研究所なぞよりは、内容が充實してくる。勞資協調會なぞは朝野名士の總出でおりながら、その陣容に於て、その内容に於て到底比べものにならん。政府當路者も宜しく鑑みる所があつて可なりだ。

△某工學博士時事に憤激して曰く「日本の飛行機は永遠に發達せぬ、發達せぬ原因は氣流の關係でもなく、機械の關係でもなく、ガソリンの關係でもない。外國飛行家が日本飛行機で縱横に翺翔する以上、器械その物は合理的のものであることは分明する、そうすると其病因は人そのものにあらねばならぬ、—君——日本の飛行家は箱根の山頂でウヰスキーを傾けておるそうでないか——勞働問題でも思想問題でもその通り、命を的に地上を離れた以上、モツト眞劍に、モツト眞面目にやらねば飛行家に限らず墜落するよ、思想問題なぞに對する學者の臆病にして、法廷を恐れ、内務省を怖れ、パンに離るゝことを恐れていては日本の學問の前途も大抵見すえおつからというものさ」と呵々大笑していたサテナ。

解散及總選擧批判

民衆を敵とする政治

法學博士　堀江歸一

理由なき解散

原内閣は普通選擧法案の議事中、政府の見込み通り、同法案は衆議院で否決されることの判然たる事實のあつたに拘らず、突然衆議院を解散して、政府の信任を輿論に問はんとすると稱して居る。思ふに原内閣は政友會の掌裡に政權の存する時に總選擧を行ひ、官憲と金權とを自由に行使して、衆議院に絕對過半數を制し、更に此勢で貴族院を壓倒し、永く政權を壟斷しやうと云ふ野心の滿々たるものがあるので、遂に解散を斷行したものであらうが、私は日本國民が如何に政治上に事大思想に富み、又官憲に阿附する性癖を持つて居るとは云ひながら、尚ほ斯くまでに一政黨の天下に横行して、私心私慾を逞うすることを許すであらうか、一個の問題とせざるを得ない。元來衆議院の解散は政府が或る所信の下に行はんとする重要なる政策又は此政策を體現する議案に對して、衆議院が反對を表するとか又は衆議院自ら進んで政府不信任の意思を表明し、然も政府は斯る不信任的表決に服しないと云ふ場合に、政府と衆議院との孰れに理義の正しきものあるやを國民の意嚮に徴する爲に行はるる可きものであつて、固より我國でも時に衆議院の極端なる政府反對熱を冷却させやうとか、又は衆議院を懲してやらうと云ふやうな目的で、解散の行はれた場合もないではないが、大體に於て多數の解散は以上の理據に基ひて行はれたのである。

斯く論ずれば原内閣の衆議院解散には何等の理據を存しないと云はなければならぬ。若しも先達つて新政會其他の團體に屬する金權議員が政府の提出した所得税改正法案に反對し、全國の商業會議所や、其他の團體と氣脈を通じて、反對運動や、修正運動を試みた其際に、政府が飽くまでも原案に固執して衆議院を解散したならば、尙ほ一個の見識を以て許されもしやうが其時には直に修正説を容れて、政友會自ら發案した位の次第である。次に普通選擧の問題で在野黨が多數を占める勢にでも爲つたならば、是れ亦解散に依て、事の可否を國民に糺すのも一つの道であらうが、兎に角手段の正邪は別として、政府の政黨に對する懐柔に効を奏したので、普通選擧案の潰れるのも分り切つて居つたから、此點でも解散の理由は求めることが出來ない。

唯政友會が怪し氣な與黨を率いて、衆議院に多數を制しながら、憂慮に堪へなかつたのは、第一普通選擧問題に關して反政府の國民的感情の日に盛に爲りつゝあること、第二貴族院の物價問題に關する攻擊的質問が次第に熱烈と爲り、結局政府の責任を問はねば已まない狀態と爲つたこと、第三講和全權報告書の一條が上下兩院の大問題と爲り、閣僚の地位に動搖を來さなければ到底解決し難きに至つたこと、第四此有様で時局が推移したならば、内閣の瓦解は目睫の間に在つて、隨つて大正十年の總選擧は原内閣の下で行ひ難きに至ることの諸點に外ならぬ。政府が今度のやうに突然普通選擧に就て、輿論の在る所を問はうと云ふ途方もないことを理由として、衆議院を解散したのは、詰り右の如くに切迫した現狀を切り拔け、更に原内閣の下に行はるゝ總選擧で、絕對多數を制して、政界に拔く可からざる勢力を得て、局面を有利に展開する意圖を包藏する結果であつて、今日の原内閣の如きは、實に立憲政治の看板を揭げながら、實際には一黨專制の非立憲政治を行はんとするものに外ならないのである。

原内閣は非を遂ぐるを得るか

原内閣の考では、内閣の組織以來懐柔し、親昵した幾多の富豪から御用金を徵するなり、又政府の所藏する特殊の資金なりを選擧の運動費とし、數回の更迭で、原内閣藥籠中の物とした地方官と通謀したならば、反對黨に一大痛棒を喫させ、思ふ儘に政友會候補者の當選を謀り得るものと豫期して居るやに見受けられるが、此期待は果して實際に之を裏切る所の事實に接せ

さることを得るであらうか。成る程近年我國の經濟社會は之を概觀すれば繁昌を極めて居る。物資を生產する農業家や、工業家の數の多い地方では何を作り、何を賣つても、其代價の高い所から、莫大の利益を占めて、殆ど有頂天の狀である。原內閣や政友會に言はせると、此經濟的利益こそ原內閣の施政宜しきを得た爲めに、齎されたものであつて、原內閣の存續する限り經濟上の好景氣も亦維持して見せると說くであらう。今度の總選擧に臨んでも、斯る手前勝手を並べ立てることゝ想像されるが、私として批評させれば、最近數年間我國の經濟社會が空前の殷賑を告げたのは歐洲戰爭の餘波であつて、何人の力にも歸す可きものでない。若しも好景氣の持續に就て、原內閣に何がな功勞があるとしたならば、所謂自由放任政策の下で、自然の趨勢の赴く所に任せて、何等の干涉を加へなかつた一事に存するかも知れないが、斯く放任無干涉の方針を取つたことの代りに、商工業の好景氣は目先維持されて居ると共に、一方に恐る可き危險を經濟社會に伴ひつゝあるのである。其第一は斯る人爲的好景氣の反動として、他日來る可き不景氣の慘害を甚だしからしむることであつて、第二は都會の生活者殊に中流の俸給衣食者に生活上の脅威を加へつゝあることに外ならぬ。

原內閣の上記二個の事情に對する觀測は甚だしく事實を誤まつて居る。即ち原內閣の閣僚等は從來の好景氣が何時までも續き得るものと考へ、又一方に俸給衣食者の生活難は增俸なり、府市で行ふ公設市場や、共同貸家や其他些細の社會的施設で、救濟し得るものと、多寡を括つて居るやうである。成る程政友會の有象無象が會社を濫設し、種々の手段で權利株に値段を出して、地方人士に賣付けるやうな事實に着眼すれば好景氣は今日現に持續されて居るし、將來にも此勢が及ぶやに思はれるが、經濟社會に於て、好景氣と不景氣とが順環するのは、殆ど一定の法則に從ふものであつて、何人の力を以てしても、容易に之を左右し得る譯でない。現に如何なる犧牲を拂つても、經濟上の好景氣を維持しやうとする原內閣があつても、昨今は種々の方面に反動的趨勢の歷然たるものがある。現に市中の諸銀行は非常に金融を引締めて、金銀在高の增加を謀つて居るではないか、日本銀行は昨年來頻に金利を引上げて、市場を警戒して居るではないか、諸株式の市價は一時市場の最高潮に達した時に比較すれば、餘程低いではないか、貿易は輸入超過に傾ひて經濟上の大勢を不利に導いて居るではないか。數へ來れば我國の經濟社會に反動的趨勢の到來するとは、要するに時期の問題たる

に過ぎない。然らば如何なる時期に於て此事があるかと云ふ問題に爲れば、私は米國の市場に不景氣を招いた時と答へるの外はないのであつて、米國の市場に不景氣の來る以上は、我國に於て永く好景氣を持續し得るが如くに考へる原内閣の意見は世人を欺くの言に過ぎない。原内閣を以て好景氣の保護神であるが如くに崇めるのは、政友會一派の爲めにする所信であつて、何等根據の認む可きものはないのである。現に私が本文の此處を起草しつゝある際、新聞紙の報道する處に據ると米國に於ては昨今既に不景氣の兆候の襲ひ來れる事實があつて、生絲の如き當業者は從來のやうな高値で買約したことを悔ゆるの趣があると云ふ新歸朝者の談話を揭げて居る。又我國の貿易には從來の如き輸出超過は其跡を絕ち、漸次輸入超過と爲り、然も其入超額は次第に增加する事實の明なるものがある。是等は即ち經濟社會に反動的趨勢の到來したことを語るものであつて、一葉落ちて、天下の秋を知るの感なきを得ない。金權者階級が何時まで原内閣を德とするであらうか、一個の問題である。否原内閣の爲めに、露骨に金權政治の行はれたことは有產者階級と無產者階級との間に於ける溝渠を深くし、又兩者の階級的反動を大ならしめた所以であつて、我國の金權者階級が永久に斯る階級的反感の爲めに、何等の苦痛を蒙らなければ兎に角、遠からず此反感に惱まされ、苦しまさるゝものとする以上は、彼等は果して原内閣を德とす可きであるか、又は怨んで然る可きか、判斷に迷ふことゝ想像される。

原内閣は中流階級の敵なり

若し夫れ中流階級殊に俸給衣食者に取つては、原内閣は不倶戴天の仇である。原内閣が金權者階級に媚る爲めに、物價騰貴の勢を煽揚する政策を取つたればこそ、物價は今日の如く騰貴して、中流階級の生活を壓迫しつゝあるのである。物價騰貴の勢を抑制し、中流階級の生活難を緩和するには、通貨を收縮することが必要であり、此事は萬人の認めて異論なき所であるに拘らず、獨り原内閣は通貨と物貨との無關係を强辯して、通貨を其膨脹するに任せ、結局中流階級の利益を金權者階級の犧牲に供して、憚らない。原首相は普通選擧論者が普通選擧を通じて社會に於ける階級の差別を撤廢するものであると主張した議論を攻擊し、殊更に、我國に階級的反感を深くすることの非を指摘したやうであるが、原内閣が今日まで行ひ來つた政治こそ實に階級的色彩の濃厚なるものであつて、其結果として平生富

に接近しつゝある金權者階級を富まし、一方に中流階級を虐げたことの幾何であるか殆ど測り知る可からざる次第である。

然らば勞働者階級に對しては、原內閣は如何なる政策を施したか、治安警察法を適用して、勞働者の運動を最も手酷く壓迫したのも、勞働者團結の機運に妨害を加へたのも、國際勞働會議に臨んで、最も保守的の、又資本家の利益に偏重した主張をして勞働者の利益を傷けたのも、足尾釜石兩鑛山、小石川砲兵工廠に於ける罷業を始め、最近の製鐵所罷業に對して、甚だしき高壓手段を弄し、全然勞働者の利益を蹂躙し去つたのも、盡く原內閣であつて、此內閣位ひ、勞働者を敵として、彼等を苦しめたものは、他に比類を見ないのである。而して原內閣が斯る頑冥なる勞働政策を實際に施したのは、必ずしも確乎たる定見に命ぜられた爲めではなく、單に金權者階級の歡心を結んで、他日の用に供しやうと云ふ政友會の傳統的信念に支配された結果であつて、偶々今日議會の解散、總選擧の執行と爲つて、富豪に御用金を徵發するの必要に迫られゝば、政友會に取つては筋書通りに芝居が打たれて居るものと云へやう。

原內閣が普選を恐るゝ所以

原內閣が普通選擧を蛇蝎の如くに、忌み嫌ひ、議會の解散を賭して、普選派議員を威嚇し、飽くまでも制限選擧制の下で勢威を張ることを期したのは、畢竟平生から國民の多數を占める中流階級や、勞働階級の利益に背反する政策を遠慮なく行つて金權者階級の利益ばかり謀つて居つた結果、若しも普通選擧が實行されて、中流階級や勞働階級が夫れ〳〵選擧權を持ち政友會を敵として、爭うに至つたならば、黨勢を維持する上に由々しき大事を生ずる恐れがあるので、理が非でも普通選擧の實施を妨げんとするものに相違ない。即ち原內閣は政友會に比較的好都合な制限選擧の下で、與黨の勢力を築き上げ、一方では普通選擧の實行を遷延させ、他の一方では、貴族院や官僚其他の政治的勢力を政友會の衆議院に於ける絕對多數で威嚇して、飽くまでも政權を一黨の專有に歸せしめやうとするのであらうが前述の通り、中流階級を敵視した政策を以て能事とする政友會に依て、果して斯う云ふ計畫が實現され得るであらうか、中流階級や勞働階級に何等政治的自覺の存せざる場合には兎に角、今日のやうに是等の階級には如何に自分達の利益が虐げられて居るか、之を伸暢するには如何なる政治を必要とするかと云ふ點に就て相當の理解の行はれて居る場合に何時まで政友會の責

金時代の續くこを期し得るであらうか、私の覺束なく感ずる所である。

近頃我國の社會に於て、著しく世人の耳目を惹くものは民衆と勞働者との政治運動であつて、二者共に普通選擧制度の下で選擧權を獲得することに猛進して居る。何故に兩者が斯く熱心に政治上の方面に運動するやうに爲つたかと云へば、其原因は要するに原內閣の爲めに、各自の生存上に又は生活上に大なる脅威を受けたことに顧み、政治上の權利を獲得して、斯る內閣を倒すことの必要を認めたと云ふ一事に歸着するのであつて、隨つて原內閣が物價政策や其他誤まつた經濟政策で民衆を苦しめ、又苛酷の勞働政策で勞働者を虐げつゝあることは、取りも直さず民衆と勞働者との政治運動を刺戟し、彼等をして普通選擧の實行に向はしむることゝ爲つたのである。故に原內閣一個の安否から云へば、斯る場合に普通選擧を實行し、原內閣を敵とする、少なくとも其金權政治を憎惡する民衆や勞働者の勢力を世界に伸張させることは、即ち內閣の生命に刄を擬する所以であつて、原內閣や政友會が必死と爲つて、普通選擧運動を抑壓することに力を致しつゝある次第であるが、官權の威力で何時まで民衆の運動を妨害することが出來るであらうか、一時妨害し得たとした所で、原內閣に國民生活を安全にするだけの實力もなく又誠意もなく却て金權者階級の利益を謀ることにのみ腐心して居つたならは、民衆の非政友會熱は次第に昂進して遂に內閣を倒さゞれば已まないのである。

金權政治は原內閣獨特の政策ではない、歷代の內閣に此病弊のあつたことは、私の明に認める所であるが、唯原內閣に至つて、其色彩の濃厚と爲つたことは、否定す可からざる所である。例へば物價を調節する爲に、通貨の收縮を要することでも、金利の引上げで、投機熱を抑制することでも、國內に於ける國民生活の必要品に對して、輸出を制限することでも、斯る物資に對して、公定價格を制定することでも、萬人が其必要を認めたに拘はらず、原內閣は頑强にも是等の政策を排斥し、內閣組織の當初に於ては却て反對の政策すら施して、憚らなかつた。唯其後世間の物議甚だしく、經濟問題から一轉して政治問題と爲るやうな狀勢を生じてから、申し譯ばかりに政府自ら公債を發行したり、特殊銀行をして債劵を發行させたりして、通貨を收縮すると稱し、又二三の物資に對して輸出の禁止や關稅の減免を行つたが、斯る小策で固より大勢の赴く所を左右し得る道理はたい。原內閣は物價を調節すれば、金權者階級の非難を招く

左ればと云つて全然之を放任すれば、民衆の怨府と爲る地位に陷つたのであるが、原内閣としては民衆の利害の如きは、殆ど齒牙に懸けず、只管ら金權者階級の利益を尊重し、飽くまでも物價を騰貴させ、事業を繁昌させ、斯くて金權者流を富ませて政友會の地盤を固めやうと腐心した。斯くて原内閣と金權者階級との間には動かす可からざる連鎖が出來上り、金權と政權と相合した結果として、民衆の利害は不幸にも政府と金權者階級との双方から壓倒せられざるを得ないことゝ爲つたのである。

勞働運動に對する危險性の有無

如何にも我國に於て近來勞働者の運動が遽に活氣を帶びたのは、爭ふ可からざる事實である。是れは外國思想の影響もあらう、外國勞働運動の模倣もあらう、國際勞働會議の決議に刺戟された關係もあらうが、我國の勞働者は斯る運動に依て、何を要求して居るかと云へば、單に勞働時間の短縮と賃銀の增率とだけであつて、此以外に生產組織を勞働者自ら管理しやうとか、又は資本主義其ものを破壞しやうとか、云ふやうなことを望んで居る譯ではない。而して我國の勞働者が要求して居るのは單純なる勞働條件の改善であつて、然も之を實現するの手段としては、所謂議會政策に依賴しやうとするものに外ならない。彼等が普通選擧を要望して已まないのは、即ち此事を證明する有力なる材料である。今日の議會に對しては、私の如きは、殆ど望みを絕つて居る一人である。國民生活が如何に危險な狀態に陷つて居つても、議會は之を改善しやうとしないではないか。國家に施設す可き要務は山ほど積まれて居つても、議會は黨爭にのみ耽つて殆ど之を閑却しつゝあるではないか。議會の惡狀は斯の如くであつても、尙ほ民衆は議會に絕望しない、普通選擧の下に、民衆の代表者を議會に送つたならば、幾分か議會の實質を改善し立法の力で、自分等に有利なる效果を與へることが出來るものと信じて居る。是れが今日普通選擧に對する民衆の運動の勃然として起り來つた所以であつて、制限選擧の爲めに從來抑壓されつゝあつた民衆の要求としては、事の自然的であることを認めなければならぬ。

然るに今原内閣の如き、民衆に對して何等理解のない政治を無遠慮に施すものがあり、議會が幾度び開かれても、民意は少しも代表されず、時には理由なき解散が行はれ、政府黨に不自然な膨脹を來して、益々其橫暴を助長する、民意を徹底させる一の方便たる普通選擧に對しても、政府が力の限りを盡して其

實行を妨害すると云ふ有様であつたならば、民衆は政治其ものに對して、如何なる感を懐くであらうか。彼等が議會はあつても、少しも自分達の利益に適う立法に從つて與れない、政府も亦議會を通じて、何等適切な立法的施設を試みないと斷定した時は、即ち民衆が議會其ものに愛想を盡かした時であつて、更に言を換へて言へば民衆は議會政策即ち「パーラメンタリズム」に不信の念を懐くことゝ爲るのである。民衆が議會政策に絶望し議院其ものに見切りを付けた曉に、何を以て自家の利益を保護する手段に出るであらうか、私は此點を考へて、我國の將來に深憂を懐かざるを得ない。原首相を始めとして、政友會の一派は我國の現狀に於て普通選擧を實行することを以て恰も危險思想を爆發させ、社會の秩序を壞廢するものゝ如くに、認めて居るやうであるが、是れは普通選擧を誣ゆるの甚だしき言であつて私を以て見れば普通選擧の實行を拒否し、民衆の意思の政治上に發現されることを妨害する原内閣こそ、民衆をして直接行動を採らしめることを促して居るの譏を免かれない。今日は日本の民衆が議會政策で立法の力に依賴し、社會の現狀を維持しつつ或る方面に於ける改善を成就するか、又は直接行動に訴へて社會の現狀を打破するか、孰れの道に出るかの分岐點に立つて居るものであるが、原内閣のやうに民衆の政治上に於ける最小限度の要求である普通選擧すら、尙ほ之を許さないとしたならば、是れぞ民衆を驅つて直接行動の危險手段に走らせるものではあるまいか、私は此點に就て頑冥なる原内閣の存續することを以て我國の將來に大なる危險を齎すものと信ぜざるを得ない。

物價調節の責任

原内閣が政治上に負うて居る致命傷は少なしとしない。所謂重大外交事件にしても、幾ら衆議院を解散して、政友會の絶對多數を制した所で、事件其ものが消滅する筈はない。物價調節問題にした處で、今日までのやうな無方針であつたならば、又金權者階級に媚びる爲めに、景氣を煽揚する政策を斷念しない以上は、解決される道はないのである。或は昨今世間では、原内閣は一方に總選擧で政友會に豫定の勝利を收めると同時に、他の一方には内閣を改造し、鐵道大臣や司法大臣を新任し、又外務農商務の兩大臣を更任して、内閣に對する世間の人氣を一新しやうとする說がある。重大外交事件が外務大臣の革職だけで、責任を濟まし得るか、どうか此點は先づ之を措き、物價調節問題に就て、農商務大臣を罷免するが如きは、見當違ひの甚だ

しきものである。山本農相は寧ろ物價調節論者であつて、自己の所管内に於ける權限で調節の目的を達する効果の微弱なるに苦しんで居つたのは、動かす可からざる事實である。而して原首相の如きは、物價問題に就ては、黨略上の見地から、常に其調節に反對する側に立つたのであつて、彼の高橋藏相が彼の如き無謀なる又放漫なる物價煽揚政策を實行して憚らなかつたのも、其背後に首相の裏書があり、又黨略上政友會に歡迎されると云ふ保證があつたからである。随て物價問題で閣僚中に責任を負う可き人があるとすれば、其れは農商務大臣ではなく總理大臣と大藏大臣との兩人に外ならない。農商務大臣一人を革職すると云ふそんな申譯ばかりの處置で原内閣に對する民衆の反感を緩和するが如きは、到底望む可からざる所である。

議會政策と直接行動

議會政策に對する非難は餘程以前から、私共の耳にする所である。近來「サンヂカリスト」の主張が世間に現はれてから益々非議會政策論は其強きを致した觀がある。又日本に於ける議會の狀況などを基礎として考へると、議會政策は殆ど形なしであつて、何としても議會政策で民衆の利益を舉げることは出來ないやうである。然しながら議會なるもの、政治上にあることは、何としても否定するを得ない。年々幾億の經費が支辨されるのも、幾億の收入が徴收されるのも、國民の生活なり、產業の運命なりを律する法律の制定されるのも、盡く議會の働きである。随て此働きを正しき方に向けるか、邪しまな方に向けるかに依て、民衆の利害に重大な影響を及ぼすことは論を俟たない。日本の議會が開設以來三十餘年の星霜を經たに拘はらず此間に於て國民生活に資する働きをしなかつた、否近年に於ては議會あるが故に、却て民衆の利益の傷けられると云ふ錯誤を生じ來つたつたのは、甚だ恐る可き事實に相違ないが、然し我我は此事あるの故を以て、直に議會政策を呪咀するは早計であると考へる。何故と云へば、我國從來の議會は極端なる制限選舉の下に選出された議員から組織されて居る關係上社會に於ける特殊の階級の利害は代表されるが、一般の利害は必ずしも代表されない。卽ち社會階級中、議會に於て利害の代表されないもの、あるは勿論であつて、中產階級とか勞働者階級などは之に當るものと云はなければならぬ。斯る畸形的に組織された議會であればこそ、民衆の生活と少しも交渉のない又民衆の生活を蹂躙するやうな政治を施して憚らない結果と爲る。斯く論ずれ

ば日本で惡いのは議會でもなければ議員でもない。從來制限選擧制度の結果として、金權者階級を代表するやうに出來て居つた制度其ものが惡いのであつて、此點を改良し兎に角民衆の利害を代表する議會を作つたならば、議會政策に對して、絶望することを要しないのである。誠に議會政策は今日の不公正なる經濟組織に苦しみつゝある民衆に對しては、有力なる安全瓣であつて、此安全瓣を無用のものにしたならば、民衆は勢の激する所必ず直接行動に向はざるを得ないのである。

直接行動の何ものたるやに就ては、私は深く說明することを憚る。然しながら我國に於ける現狀を見るに政府は勞働運動に對して甚だ臆病であつて、勞働者の罷業權を認めないのは勿論少しく規模の大なる同盟罷業が起れば警察權を以て兵備を以て之を壓抑するばかりでなく、司法權を以て、罷業の首謀者を所罰しなければ已まない。勞働者の直接行動が社會を騷がし、又其治安を害することは、同盟罷業と同日に談ず可きでない。機械工場其他工業上の設備の破壞され、人命の損傷されるのは勿論、世間を擧げて恐怖時代に陷らせることも絶無としない。我國の政府が從來の如き方針を以て、民衆や勞働者に臨むのは、卽ち彼等をして議會政策を棄て、一足飛びに直接行動に至らしめるものであつて、危險なること此上もない。或は民衆の運動に對しては兵力を以て、之を抑壓すれば何等恐るゝものがないと云ふ考もあらう。然し一國の兵力を國内の爭に用ゆることは正しきものであるか、どうか又兵士も實に民衆から選拔されたものである以上は、軍隊の力で民衆の運動を抑壓する場合に甚だしき不自然の關係を生ずると云ふ二點は爲政者に於て充分に其腦裡に記憶して然る可き所と思はれる。

原氏が個人として如何に詭辯を弄しやうとも、堅白異同の說を述べやうとも、私の關する所ではないが苟も帝國の宰相として普通選擧を以て社會存立の基礎を脅かすとか、階級的差別を無視するものであるとか云ふやうな僻說を公言するに至つては知識の低調さ加減を暴露したものであるのみならず、他日に及んで自繩自縛の恐に陷るであらうと想像される。產業上のデモクラシーと政治上のデモクラシーと相並び行はれて、始めて社會改造の目的の達せられるは私共の確信する所であるが、原氏の如き政治家は要するに是等二樣の方面にデモクラシーの行はるゝことを妨げて、如何なる政治を行はんとするものであるか斯る時代錯誤の思想を懷抱する知識的老衰者が帝國の宰相として、假令ひ一場の幻想であるとしても、衆議院に絶對多數黨を得ると云ふやうな考を起するに至つた我國現下の事情に對しては私は言う可き所を知らないのである。

政變の心理論理及倫理

帝大助教授　大島正德

一

議會解散の當時、予は、東京日日新聞紙上に於て、政變に關する國民心理的及倫理的批判の一端を述べてをいたが、今日に於ても、同樣の解釋のなし得ることを認むるもので、簡單に、所見を略述しやう。

形式的法理の論からは、今回の解散を非立憲といふことは出來まいが、殆んど、凡ての國民に、極めて意外の感を抱かしめたことは、爭はれぬことである。政府當局者中二三の閣員を除いては、何人も之を知らず、能くも、あれほどの秘密が保たれたと敵味方に感嘆せられるほどであるから、政府反對黨員の思ひもよらぬこととなるは、いふまでもなく、政府與黨の者も殆んど之を豫知するものはなかつたのである。從つて我々一般のものが意想外といふ感に脅かされたことは、無理もないことである。何故に意想外と思へるかといはゞ、政治に關する慣例乃至國民的常識を殺したからである。いかに慣例に異なり常識に背いたかといへば、普選案は、政府與黨の思ひ通り否決されることは、明白に確實になつたに拘らず、突然解散が奏請され宣告されたからである。之を聞いて驚かざるものは、國民中僅、數人の外にはあるまい。

或は、語るものがあるかも知れぬ。國民の驚くのは、勝手である、政治は要するに手腕にある、不法でなければ、所謂國民の常識に背き、從來の慣例に違つても、少しも非議すべき所はない、政治家の機略手腕を見ずして、國民の常識に依つて彼是れ批評するのは、幼稚であると。勿論、一國の政治を料理するには、凡手には出來ぬことである、所謂手腕もなければ、ならぬ、機を見るの明もなければならぬ。從つて國民一般の常識判斷とは異なり、隨分思ひもよらぬ政策の樹てられることはあり得る。併し、其の場合に於ては、必ず、やがて國民の常識を修正し、國民をして翻つて承認首肯せしめ得るものでなくてはな

らぬ。即ち國民の常識判斷を異にしたのは、其の以上に出て高處にあつたからであつて、其の埒外に出て乃至は其の以下に下つたからであつてはならぬ。要するに、やがては國民の政治的常識を深め高める意味のものでなくてはならぬ。然らざる限り、國民の政治的常識に異なるといふことは、國民の健全なる政治的意識を攪亂するものといはなくてはならぬ。殊に立憲政治に於ては、輿論といひ國論といひ、國民意識を本として施政されねばならぬのであるから、國民的常識判斷と異なることは、やがて之を高め深めしめるものならば可、然らざる限り、俄に意表に出づることは、却つて之を惑亂するものといはねばならぬ。而して、今回の意表外なる解散は國民の政治的常識を高め深めるものであるか、乃至は之を攪亂して、疑惑に置き、狡智に走らしむるものであるか、といはゞ、予は乍遺憾、後者に屬することを思はざるを得ぬ。

只今回の解散に關して、立憲的であると稱し得べきことは、解散奏請の理由が、原首相に依つて說明されたことである。勿論其の理由を正當として是認すべきや否やは、次ぎの問題であるけれども、とにかく其の理由を議會に向ひ、天下に向つて公言したといふことは公明を期するに見えて、國民の政治的生活のために、結構のことである。是れあるがために、我々の如き門外漢も、一國民として思考する所の批評を加へ得、かくて御互に國民の公生活を公明化し理想化することに、向ふことが出來るからである。

二

然し、說明されたる解散の理由に依つて、我々の思想外であるとする第一印象の疑惑を、公明に正當に解除し、以て、いかに我々の所謂常識判斷なるものが幼稚で低級で未熟であつたかといふことを覺らしむるに足るものがあるかといふと、決して、然りといふことは出來ぬ。普選案の問題は、政治上の重大問題であるから、國民の公平なる判斷に愬へるために、解散を奏請したのであるといふ。然らば普選案は、政府當局者乃至與黨が考へてをる通り、議會に運ばれずして、紛糾錯綜した問題となり、全く議會に於ては決着のつかぬ、乃至は反對黨が多數を占める勢を示せるためであるかといふと、事實は決してさうではない。彌次的紛擾こそ多少はあれ、大體に於て而かも普選案上程の日近く、反對黨諸派の不協調や、憲政會内部の内輪揉めに依つて、益々政府黨の勝利は確實であつたのである。然る

にも拘らず、議會を解散したのであるから、世人が之を意表外として驚かざるものなきは當然の次第である。明白に便に政府黨の議會に勝利を占め得るに拘らず、之を解散したのは、議會乃至多數自薦は、國民の意志を代表するものにあらざることを、自ら疑ふことがなければ、出來ない筈である。勿論數年前、多數選擧民から選出されたる議員は、現代の如き破天荒の時代精神の變化ある際には、適當に如實に、國民の新精神新要求を代表し充足することは出來ぬとも考へられるが、其は次ぎに近く來る筈の常規の總選擧に依つて、其の正當なる改造が行はれべきであつて、其れまでは、議員を督勵し刺激し、時代意識に添うやうに、彼等の職業をつくさしむべきである。而してここに現に多數意見の現はれる所に、國民意志の表徴あるものを見て、問題を決定處理して行くべきである。國民のみが進んで、議員丈が時代に後れるといふこともない譯であるからである。たとへ、院外に於て種々の批難攻擊があらうとも、其には又相當の言論的對策を施し、とにかく院內に於て、多數を決せられることは、其を神聖なるものとして、取扱つて毫も差支ない譯である。然るに其の多數其者の合理性を疑つて、敢て廣く國民の判斷に愬へるといふのであるから、よほど第四十二議會に於ける議員の實質的資格を疑ひ、而かも且つ政府黨其者の代表的意義なきを疑へるのでなければ、かゝる解散は出來得る筈のものではない。若し敢て之をなし得べく又なすべくば、議會開會の當初に於て、彼等議員が新時代に於て國民の輿望に副ひ得るや否やを、先づ問ふべきである。或は一步進めては、かゝる議員の多數を率ゐる內閣諸公其自身が、身を引いて、輿望ある後繼者を奏薦すべきである。

けれども、原首相乃至政友會領袖の胸中に秘められたる論理は、決してかくの如きものでないことは、想像するに難からぬことである。若し眞にかくの如く、自ら多數黨に居るの實質的價値を疑ひ、正直に公平に、此の際國民の判斷に愬へるといふのであれば、其の動機に於て、見上げたものともいはねばならぬが、從來の政黨的人情として、既に議會に於て相當の多數を占めながら、其の少數化し得る危險を冒して、敢て慣例を破つて、國民の判斷に向ふなどゝいふことは、甚だ推測しがたき心理である。果然政友會員會合の席上に於て、御互に囁語してをる通り、此の解散に依つて、從來より多くの黨員を議會に送り、出來得べくば、絕對多數にまで上せようといふ野心の存することは歷然としてをる。故に、先きに述べた如く、解散奏請

の正當なる論理はまことに不可能であるけれども、其の心理は政黨心理の上に理解出來る。卽ち、此の解散に依り、此の臨時總選擧を利用し、自已作製の選擧制度に依り、政府黨といふ一種の强味を有ち、地方民の、必ずしも現政府の政策を不可としないのに乘じて、大に黨勢を擴張しやうといふのである。而して、かくの如く、其の心理にする所と論理とする所が、相協調せず、一見論理的なるが如く見えて、實は私に其の心理的要求の滿足を計るといふことは、黨情に立たずして、公平なる第三者的立場に立てる國民一般の正常なる判斷意識を翻弄するものと稱して然るべきである。是に於て倫理的には、今回の政府は政治の理想を示すに向はず、術策卽政治なるの感を抱かしむるものがあつて、國民の政治的意識を低下せしむるの憂あることを思はざるを得ない。

三

かくの如く、一般的態度から批判すれば、解散の理由は論理上極めて不可能なるものであるが、直接政府反對黨に對しては、相當の理由になつてをることは、否定することの出來ぬ點であつて、是れ又原首相の所謂老檜といはるゝに値する所である。然し又いかに政治は對政黨的であつて、國民的でなく、卽ちいかに一般に國民の意嚮は無視され、國民の聲は重きをなさず、又其の聲が眞に力あるものとなつて現はれてゐないかを示すものといつてよい。直接に對政黨的に一種の論理力を有つてをるといふことは、政府反對黨諸派が、普選案の上程を策するに當り、議院の内外に於て、極めて喧しく、是は國論である輿論である、之を通過せしむるは國民の聲に從ふものであると疾呼したる、其の聲其儘に應諾して、然らば、國民の判斷に愬へて、果して、普選案を今日に實施することが、國論であるや否やを問はうといふ論議應酬になつてをるのであるから、反對黨としては、たとへ其の事の意外なるに驚き且つ怒つても、論理上は、自分等の主張通りになつたと認容せねばならぬ羽目になつてゐるからである。是れ原總裁の黨略手腕の妙味を示すものであつて、かくて、政府與黨は、國論無視黨であるといふ世上轟々たる非難の聲に肩を透かし、憲政會其他の反對黨を烟に捲き、所謂一杯喰せたるものと評せざるを得ない。玆に、黨略戰に於ては、原氏の手腕の勝れたることを認めなくてはならぬが、廣く國民の政治生活に省みて、果して之は何を教訓するかと思ひ廻せば、それより得る處極めて尠く、而かも得たるもの

は、單なる喧嘩上手の技術を見物し得たるに過ぎぬ。

四

單に議會の可否に問ふだけでは不十分である、國民の公平なる判斷に愬へなくてはならぬといふ理由の、更に根據をなせるものとして、原首相は、反對黨が普選案提出の理由とする所が今日の國家社會の組織を脅威するやうな危險思想に本づいてをるといふ點を、高調して指摘してをる。けれども、議會内に於ては、かゝる危險思想を理由としてをる筈の普選案は、小數否決の運命に陷るにきまつてをるのであるから、解散の理由の根抵に、今更かくの如きことがなり得る筈はない。又たとへ解散しても、既にかゝる思想が世間に行はれるならば、思想として之を批正しない限りは、たとへ政友派が選擧場裡に大勝したところで、其の思想其のものが湮滅する筈はない。却つて反對に反撥的に現はれるかも知れぬ。而かもかゝる思想は、選擧權を所有せざるものにある譯であるから、單に解散しただけで、所謂國民に向ふといつただけで、其の思想の何たるか、其の思想の如何に謬れるかを明白に解決しなければ、かゝる所謂脅威的思想をなくなす譯には行かぬ。然るに、是等に關する解釋說明は殆んどない。何を以て國家社會の組織を脅威する思想といふのであるか、甚だ不明である。普通選擧論共者を以て危險思想と認むるものでないことは、原首相の辯明中に既に明白である。只敢て普通選擧といはず、言葉を換へて、選擧擴張といふだけである。或は普選の說明中に、階級打破といふ理由が語られるから、脅威思想と名くるのであるかも知れぬが、其はあたりまへのことで、納稅資格を撤廢すれば、夫れだけは、少くも階級打破に相違ない。洵に、普選又は原首相の所謂選擧權擴張は、或意味での階級打破である。宜しく過去の囚はれたる人爲的な、不當の階級別は打破すべきである。けれども、其は必ずしも惡平等と混同視すべきものではない。其の邊、おのづから相違する所がある。然らば、普選案提出の理由とする所に、いかなる危險性を帶びた脅威的思想であるかを知るに苦しむ次第である。尤も院外に於ける諸團體並民衆の大示威運動は、反對政黨とも氣脈を通する所があつて、政府並に其の與黨には薄氣味惡く思はれたに相違ない。政府攻擊の民衆運動の高調に達せんとする矢先きに、解散を宣することは、其の氣勢を挫き、不慮の災から遠かり、かくて更に政府黨の陣容を盛に整へた曉には、國論は普選實施にあらずして尙早にあることをも言ひ得る

の強味を得ると考へられたに相違ない。さてこそ解散の方法に出でたのであらうが、是は謂はば自黨保全法と稱すべきものであつて、決して主義に忠實であり主張に勇なるものといふことは出來ぬ。一時の延命法にはなるに相違ないが、自黨が懷抱する普選尙早の理由について、明白に國民一般に說明し宣傳し之が納得を得なければ、かくの如き民衆運動が都下に絕ゆることはない。要するに、解散の論理は國民的に公明なるを得ず、其の心理は、黨略の外を出でない。然らば其倫理は、無理想にあることを論定しなければならぬ。從來の諸內閣が、現內閣以上、有理想であつたかは、疑ふべき所であるが、現時に於て、之を明白に指摘し得ることは、我が政黨政治のいかに低級なるかに、深く警告を加へ猛省を促さなければならぬことである。

五

尙轉じて、政府反對政黨の態度について評言を加へておかう。解散といふ意外なる不意打に、驚きもし、腹も立つたには相違ないが、對黨的論理に於ては、先きに述べた如く、相應する所があるのであるから、今更之を憤慨するに專らなることは出來ない。第三者的に一般的には、以上の如き批評はなかるべからざる所であるが、元々今回の解散は、政黨對政黨の駈引きの上に成り立つてをつて、國論なり輿論にきけ、と呼はる反對黨の聲に從つて、然らば國論に問はうと、政府側は解散の途に出でたのであるから、在野黨としては勝負を國民の公野に爭はうと快諾する外に、無下に怒り不平をいふ所はないのである。當然此の態度に深く臍を固めたものもあるが、中には頻りに解散の不法を鳴らしてをるものもあつたやうであるが、國論は自黨に在りと信ずるものとしては、其の態度まことに怪むべきことである。中には解散攻擊の矢を更に進めて、普選の可否を今日の選擧民に問ふことは、例へば、華族廢止の可否を華族に問ふやうなもので、特權廢止の可否を政治上の特權階級なる少數選擧民に問ふは、愚の至りであると唱へるものもある。鋭き論のやうにきこえるけれど、再考してみれば、亂暴の論であつて、出來ない相談を持ちかけてをるに過ぎぬ。若し今日の選擧民に普選の可否を問ふことが、特種階級に可否を問ふことで、望みのないことであるといふならば、既にかゝる選擧民に依つて選出されたる議員に、之が可否を問ふなども、全く望みのない問題を揭げてをるものといはねばならぬ。若し議員なるものは、單に其の一地方選擧民の利害を代表してをるものでなく、

廣く國民全般の得失を考へねばならぬものであるが故に、議會に之を問ふは、通過の望があるといふならば、又選擧民其者に於て考へても、彼等は、彼等が特權階級たる利益保護のために、投票權を有し且つ行ふべきものではなく、少數なる彼等は、國民凡ての安寧幸福を考へて、適當なる議員候補者を選出すべき筈のものであるからに、彼等の意志を通じて、尙廣く國民全般の意嚮を見ることが出來る譯である。されば、議會に普選の可否を問ふ以上に、選擧民に其の可否を問ふは、夫れだけ廣く全國民の判斷を彼等を介して問ふことになるのである。普選促進論者は、夫れだけ廣く國民の判斷に愬へ得る機會の作られたることを慶せねばならぬ筈である。然し、固より種々の問題について今日の選擧有資格者に問ふだけでは、國論を十分に知ることは出來ないといふのは明である。夫故に今や普選論の生じてをる譯であるが、法制改正の正當なる順序としては、右の如き次第を以て進むより外に方法はない。若し、今日の選擧權有資格者は、國民全般の將來利害を思はず萬事、己等の特殊利益のために、其の特權を行使するものであるならば、選擧權所有者との間に、所謂階級鬪爭といふが如きものも起り得る恐はある譯であるが、何にも今日の選擧民をかくの如き極惡のものに想像する必要はない理由はない。強いてかくの如く考へるのは、近代的流行語の惡用に外ならぬ。若し普選論者乃至要求者が思ふが如く、今日の選擧民が思はず普選に冷淡であり理解なく同情なしとすれば、今回の如き、明白に公選の理由問題が天下に揭げられてをる時に、普選の行はさるべからざる理由を遊說宣傳して、眞に天下の輿論を翕合し、大勢の赴くべき所を明にするのが肝要である。然るに、かくの如き普選宣傳の絕好機會を快く利用せずして、今日の少數選擧民に之を問ふは、特權階級に輿論を問ふに外ならずとして、拾鉢文句を弄するは、所謂直接行動や非常手段を取るを好むものか、乃至は默々をこねるものといふ外はない。

六

最後に、聊か考へてみねばならぬことは、今日の選擧民乃至國民一般の、普選に對する態度に就てゞある。普通選擧は正論であり、輿論でなくてはならぬ筈のものであり、早晩來らねばならぬものであることは、無論のことゝ考へるが、現在に於て、一般國民其自身が普選を要求してをることが、所謂輿論であるや否やについては、尙疑を存せねばならぬところである。

我々が、合理的要求として、普選の輿論たるべきを主張することゝ相應して、客觀的に事實的に、國民一般が自覺的に之を要求しつゝあるかは、問題である。卽ち玆に、總選擧といふ國民の意識を刺戟する問題を提出して、選擧民を介して、國民的反應を知らんとするのであるが、今日の狀態を以て推測すると、普選論者のよほどの努力を注ぐにあらざれば、之を事實上の輿論に引き上げることは、却々の困難であらうと思はれる。都會に於てこそ、普選實施の促進運動は、盛に行はれたのであるが、地方に於ては、如何ほど其の聲が盛であつたかは不明である。尤も都會は、かゝる運動をなすに適し、田舍は適せぬといふ事情もあるが、暫く其の形は問はずとも、彼等の心に於て、普選案に關して、何の位の自覺的要求あるかは、頗る怪むに足るものがある。何となれば、選擧其者に就ても、彼等がいかに道德的に政治的に自覺しつゝあるかは、大に怪むに足ることであるからである。勿論都下に於ても、普選運動者の悉くが、眞の自覺があるかは疑ふに足ることである、一應の自覺はあるにしても、其の深淺の度合は、よほど人々異にするものが、あらうが、槪していふと、都會地は、地方より、人智の程度高く、相互の思想的理解も早く、多數學生の十分なる知識者なるは、いふまでもなく、所謂勞働者といふが如きも、各大工場の職工などは、相當の知識あるものであるから、都會に於ては、普選は、客觀的にも事實的にも輿論であるといふことは出來る。然し、地方に於ては。之を當面の急務として、いかほど要求してをるかは、頗る怪むに足ることであり、選擧其事の意義さへ、果して十分に承知してをるかも疑はれる位であるから、都會人乃至新聞紙上の如き先覺者の論の現はれる所を以て、地方人の心裡を推定することは出來ぬ。是れが政府與黨のつかまへ所であり、尙早論を取り得る所以であつて、刻下の問題はいかにして、此の地方人を覺醒して、普選の必要を納得せしめ得るか否やにある。是れ將に、普選論者の大に奮發努力しなければならぬ所である。

今述べた通り、普選は正論である、輿論であるべき筈であるといふことと、普選は客觀的事實的に輿論であるといふこととの間には、相當の距離がある。前者は先覺者の主張であるが、後者は、國民全般の實際的要求態度である。今日の場合は、其者の意味に於ては全く論を要せぬことであるが、後者の意味に於ては、事實に就ての推定又は認識の相違がある。是に於て、解散となり、總選擧となり、卽時實施說と尙早說とに相分れ

て、此に何れが、勝利を得るかが懸案になりつゝある次第であるが、後説が事實主義保守主義であつて、前説が理想主義であることは明白である。理想主義進歩主義固より可であるが、普選論者が實行することでもなく、政府が實行することでもなく、國民共者がみづから投票することであるから、實際問題としては、客觀的に事實的に、今日の國民意識はいかなる程度にあるかも、深く留意しなければならぬことである。さりながら既に普選は、正論であり、國論でなくてはならぬ筈であり、出來るだけ早く實現せしめねばならぬことであるからには事實主義者保守主義者の如く、只國民の現狀心理を語るのみにして、安閑として、拱手して、國民意識の覺醒をまつてをるといふが如き態度にあるべきでは、決してない。むしろ、先覺者理想主義者の國民に對する倫理的義務として、普通選擧の合理的であり、國民凡ては政治的に自覺しなければならぬことを說明し主張し、一日もはやく、眞に國民的輿論を以て普選の實施に到るやう、努力しなくてはならぬ。普選は國民共自身の政治的行爲であるから、普選論者は、之が實施の必要を說くにつけて、只時の政府當局者に力說するよりも、むしろ、直接に國民共者に向つて說き、彼等の政治的自覺を促して、彼等をして四方より、時の政府當局者乃至議會に要求するやう行動せしむべきである。議會ある時にのみ、政府當局者に向つてのみ、反對論者に向つてのみ、普通選擧の實施を說くこと旺にして、國民一般に向つて廣く遊說すること薄く、所謂政治季節をはなれては忘れたるが如くであるは、決して主義理想に忠實なるものといふことは、出來ぬ。今回の解散の如きは、普選論者に取つては、其の正論とする所、理想とする所を、普く國民の面前に說明主張して、國民の自覺的要求を促し、眞に天下の輿論を、自說に傾けしむるに、絕好の機會を得たる譯であるから、其の主張を事實化し、其の理想を現實化し、理想主義者進歩主義の立場より事實主義者保守主義の根據を奪取するやうに、努めなくてはならぬ。若し今回に之を期することが出來なければ、次回に、次回に出來ねば、其の又次ぎに、單に、政府當局者や反對黨やに向つて、議會當時に限り、主張するに止まらず、四時間斷なく其の理想、其の主張を說くべきである。

階級的政黨の征服

法學博士　戸田海市

一

議會解散及び之れに續く總選擧に關し、先づ解散の動機より論ずるは必要な事であると思ふが、既に論じ盡されて居るが如く思はれるので、予は玆に其の結果より客觀的に考へて見たいと思ふ。

解散と云ふ事は既に生じたる結果中にて、最も重大なる問題で有るが、今回の議會に於て普通選擧法案に就ては、政府は確に自黨に勝算が有り乍ら、尙且つ該問題を以て表面上解散の理由となし、即ち憲政運用上の大事件に關しては此際更に汎く輿論に問ふの必要ありとなしたるものにて、此の表面の理由は少くとも現內閣の政治的良心が甚だ鋭敏である事を證明するものである。最も沒理想的な現實政治家が、非常に理想的な政策を行ふ場合が、世間には往々にあるが、今回の如きは偶然とは云ひ乍ら、全く其れで有て、最も甚だしき現實政治家たる原首相が、偶然にも理想的憲政運用法を示せるものと云ふ可きである。然れば國民たる者は須く、此の偶然開かれし先例を尊重して、憲政運用上、是も重大なる理由となし、之れが發達を期しなければならぬ。結局、一國の運命に關するが如き重大事項は國民投票に依つて決定するまでに進まねばならぬのである。既に起つた結果の主なるものと云へば、先づ此の解散の問題である。更に一言附け加へて置くが。此の普通選擧法案は議會に於ては政府黨に勝算が瞭かで有つたが、元來現在の議會が成立する當時は、普選案なるものは、何等の問題になつて居なかつたのであるから、今回新に起つた重大問題として國民の輿論を訊く爲めに玆に改選をなす必要を生じたものとも解釋できる何れにしても、今回の總選擧は甚だ重大な意義を持つて居るので、國民は餘程確固たる國民的自覺を持て掛らねばならぬのである。

二

第二に、議會解散の結果より來るべき總選擧が如何なる結果を示すであらう、と云ふ豫想に就て考へて見やう。世間の云ふ所を聞くと、今回の總選擧と雖も、前回の選擧に比して、其の選擧人の性質も界ぼ同樣であるし、選擧に關する一般の空氣も實質上大して變化がないのであるから、其の結果として我が政黨發達史上にも今回の選擧が特に別段の影響を與へはすまい、と考へる者も有るやうである。

然し乍ら、其れは餘りに眼界の狹い觀察で、假に選擧人の範圍が前選擧の際と同樣であるとしても、最近數年の間に、世界の風潮は、實に隔世の感ある大激變を生じて居るので、其の結果は必ず選擧の上に現はれなければならぬ。即ち今回の投票權は從來よりも一層眞面目に行使せらるゝものと考へねばならぬ

更に今回の總選擧は、依然として制限選擧ではあるが、兎も角も、選擧權が大に擴張せられて、有權者の數でも從前に比して約四割以上の增加を來して居るのである。從來の如く選擧權が、少數者の間にのみ限られて居た間は、候補者との情實、因緣に依つて行使せらるゝ場合が多かつた故、其の結果として、成立せる政黨も、餘程眞に確固たる地盤と、又は、必然的成立理由を缺いて居るのであるが、而も尚ほ、現在の政黨が多少でも必然的の黨派別を生ずる事になつて居るとするなれば、全く之れは、現選擧人中の下級者の力であると云はねばならぬ。即ち選擧人中納税額乃至社會的位置の比較的上層に位する有産者は、情實、因緣に依つて動かさるゝ事の最も多いのに反して言論主張の力に比較的多く動かさるゝ者は有權者中の下層者である。然るに今回選擧權の擴張は其意味に於ける下層に向つて約四割方擴張せられたるものなれば、以前よりも甚だしく言論主張の力が影響せらるゝであらうと想像せらるゝのである。

斯の如く、情實因緣の力に依らず、主義主張に依つて、選擧が行はるゝ事になると、結局は之れに依つて成立する所の政黨は、現在社會に於ける階級別の上に判然と基礎を置て離合を決する事にならねばならぬ。勿論從來の政黨に於ても、多少は社會階級に關係が有たやうであるが、今回の選擧に於ては階級の別に依る政黨の色彩が、益々明瞭に判明するであらうと考へられるのである。即ち階級の利害が中心になるが故に、必然的黨派別を生じて來ると云ふのだ。

三

然らば、此の社會階級に必然的の根據を有する所の政黨として

如何なる政黨が成り立つであらうかと云ふに、もとより今回の總選擧に依つて、全く新たなる大政黨が幾個か出現しやうとは考へられないので、當然、在來より成立せる政黨の內面に潜んで居る處の必然的理由が、時勢の變遷に應じて、益々明確になつて來ると云うのである。語を換ふれば、憲政會、政友會の內在的必然的理由が或る事情に刺激せられて發達して來ると云ふのだ。

然らば、既存の大政黨の內部に潜在せる、必然的成立理由と云ふものは何であるかと云ふに、之れを比較的著しき政友會に見るに、政友會は由來農民黨と稱せられて居るが、又今日までの發達の跡を尋ねても、其の前身たる自由黨が、何れも田舍出の志士に依つて創立せられしものにて、其後幾多の變遷はありしが、依然として地方農民の上に強い根據を有して居るやうである。今回の選擧に於ては、其の農民黨たるの色彩が愈々鮮明になる事と豫想せられる。而して農民と云ふものは、國家に依賴する精神の強いもので有て、是れを基礎として成立する政黨は官僚的國家主義を採用すると云ふ事になるので有る。從つて、此の國民の、自主自由と云ふ事には餘り重きを置かない。普通選擧に反對する現政府は、此の點に於て、農民黨たるを妨げないのである。

無理想なる原內閣の執りし政策としては恰んと奇蹟に近いと思はれる、租稅史上の大革命とも稱すべき、所得稅改正法案は今回の議會に於て、政府黨が恰んど主力を盡して鬪つた大問題で有た。是れなども勿論無理想なる現內閣の事だから、財政の必要に迫られて、成した仕事ではあるが、是れなども、富豪征伐の端緒をこそ開きたれ、農民の利害には何の關係もない問題で、今後も此の方面に進むには、是非とも農民黨の力に依賴せねばならぬのである。今日、選擧權を持て居る農民と云へば、有產者と云へない事はないが、其の最も上層に位するものと雖も、尙は商工業上の資本家に較ぶれば、誠に微々たるもので有て、農民選擧權者の大多數は、自作農及び自作兼小作の五反百姓で有つて、其の經濟的單位と云ふものは、恰んど都會の熟練職工程度の者であるのだから、富豪征伐を行ふのに農民の力を借りたと云ふ事は都合の好い事である。

西洋に於ても、從來勞働政策を行ふには、商工業の資本家に對抗する爲めに、農民黨の力を借りた事が頗る多いのであるが我が國民を職業別から見ると、今後も依然として農民が多數であり、且つ農民は其の所得を得る事が出來ないから、此點に於

て所得を、最近な言葉で云ふと誤魔化す事の出來る商工民とは異りて、遙かに重い直接國税を負擔して居るから、從つて有權者の數も多いのである。又假りに其の相違を度外視しても、尙ほ農民の方が多數を制するのであるから、今後とても、農民黨即ち政友會が、絕對過半數を占むるや否やは疑問であるが、我が國に於ける最大政黨である事は明瞭な事實である。而して其の政策は、官憲的國家主義を標傍して、或程度に富豪を征伐しつゝ、社會政策を進めて行く事は、恰も戰前の獨乙に於ける情態に類したものになるであらう。

次に、政友會に對立する現在の憲政會に就て考ふるに、其の運命は全く未知數である。或は今回の選擧が直ちに同黨の分裂を來して、各部分が各々其の成立理由たる社會階級的色彩を明かにする事となるかも知れない。元來憲政會の前身改進黨は、當初より粗野なる田舍の志士を排斥して、智識の進歩した紳士と商工業者を基礎とするもので有て、現代的有產者黨たるの要素を多大に含んで居るのである。是れは憲政會が本年の議會に於て、曖昧模糊の理由を以て所得税改正法案に反對した理由なのである。此の憲政會が普通選擧を主張したと云ふのは、主として議會戰と云ふ黨略から出たもので有て、本來の有產者的性質から當然に出て來べきものではないのである。然るに同じ憲政會の中にも、比較的眞面目なる普通選擧論者も有て、之等は必ずしも强烈なる有產者的性質を帶びて居ない、故に行々は之等の分子は、現在の憲政會から離脫して行くだらうし、其の後に殘る憲政會が、判然たる有產的政黨を維持する事になるであらう。

四

其他、今回の選擧にて、相當の成立理由を持つた、他の如何なる政黨が成立するかは全々豫想する事も出來ないが、農民と商工民を除き、其他の有權者の最も大なる者は、智識階級即ち官公吏、會社員なるが、此等の者と勞働者中の少數の有權者とが協力して眞面目に活動するものとすれば、或は今後少數乍らも、中產階級黨及び勞働黨と云ふものが發達する端緒を開く事になるかも知れないが、此點に就ては的確なる豫想を立てる事が出來ない。眞逆に普通選擧を主張すると云ふのみが當然の成立理由にもならないのである。

外國の例に見ても、自由黨は盛になり、金權黨は益々衰退しやうとして居る、此點でアスキスなども困却して居る次第である。要するに、有產黨は所得税の改正を看板にする譯にも行か

す、さりとて普通選擧なども內實は困るであらうし、我國の現在の國情としては、選擧權を擴張すればする程、有產黨には都合が惡く、是れに反し、農民黨は益々力を得て、玆に階級的政黨の征服が行はれ、或意味に於て社會改革の事實が擧げられるであらうと思ふ。(二月八日)

衆議院の解散に對する所感

法學博士　野村淳治

「一」解散前の議會に於ける政友會の地位

政治家の政治的作戰計畫の祕訣は、突然に人の意表に出つるの術策を斷行して、反對黨をして啞然たらしむることであると假定するならば、現內閣は最も良く此祕訣を了解し、最も有効に之を反對黨に應用したものである。何故ならば、現內閣は衆議院を解散して以て、憲政會に不意打を喰はし、少くも一時たりとも反對黨をして辟易せしめたからである。衆議院の解散せられたる今日に於て、第四十二議會の議事の模樣を回顧するに議會の議事は、二月十六日の報知新聞夕刊の指摘したるが如く相當に騷々しかつたと謂はなければならぬ。一月二十五日の衆議院の本會議に於ては、大藏大臣は其演說中に、憲政會議員を侮辱するの言語を用ひたとか云ふ廉によりて、憲政會の激怒を招き、其失言を訂正することを餘儀なくされた。二月五日には總理大臣は、呂運亨問題に關し、貴族院の本會議に於て陳謝的辯明を爲すに至つた。越へて二月十五日には大岡衆議院議長は憲政會議員濱口氏の演說を以て反對黨の議論なりと論定したが爲めに物議を起し、遂に其失言を取消さねばならなくなつた。

今日でも尙ほ世間の多くの人は、大臣宰相を以て最も偉大なる人物であると考へて居る。其最も偉大なるべき大臣宰相が、議會の本會議に於て、陳謝的辯明を爲すか又は失言の訂正を爲すにあらずむば、到底議會を切り拔けて行くことが出來なくな

つたと云ふのであるから、世間の人は非常に驚いた。一葉落ちて秋の到るを知ると云ふ諺がある。政府黨の陣立が次第に亂れて、政府側の勢が少しづゝ惡るくなると共に、内閣の運命もそろ／＼怪しくなつた、内閣も其内には辭職するやうになりはしないかと云ふことを、多くの人が考へ出すやうになつた。近來我邦に於ては内閣の壽命は至つて短かい。而して政友會内閣はもう既に一年半も續いたのである。從來の例から推測して、多くの人が、早晩内閣交迭の時機が來るだらうと考へたのは、必ずしも無理ではあるまい。

若も政友會内閣に於て、議會の解散を行はす、三月に至る迄引續いて議會に臨むで居たと假定するならば、之が衆議院に於ける政府黨の攻撃、貴族院内の若干の團體の反對、又は議院外の民衆の壓迫の爲めに、非常に苦しい立場に立つに至つたかも知れないと云ふのは、想像するに難からぬ。此際に於て、政友會の幹部の人が、議會の内外の形勢の政友會に取つて不利益にならむとするのを其儘に傍觀せず、議會の解散を奏請して反對黨に逆襲を加へ、天下の人心を一轉して總選擧の方に向はしめ政友會内閣の命脈を持ち直さしめたのは、政治上の駈引の上から云へば、餘程巧妙なりと謂ふべきである。此點に於て、政友會は反對黨に對して、確かに先手を打つたのである。

「二」解散は院内戰の必然の勢

昨今の新聞を見ると、其中に、今回の解散は政友會の黨派的利益を擁護するが爲めに、不適當なる時機に於て、又不充分なる理由に依つて斷行せられたものであるから、之は政治上不當であると云ふ説が隨分多く出て居る。政府の解散理由を不當なりと認める議論の中には、確かに有力なる根據がある。乍併四十二回議會開會後、議院内に於て、政府黨と反對黨との間に、政爭の行はれ來つた勢の上から見れば、今回の解散は止むを得ずして起つたもの〻やうに思はれる。

解散前の議會の有樣を見るに、憲政會、國民黨及其他の團體は相分かれて、增稅案の議事の際に於ては、相當に政府黨を惱ました。夫れが一先づ片着いて、政府黨が一と安心しやうとすると、今度は憲政會、國民黨及其他の人が相合して、普通選擧法律案を以て政府を攻め付けやうとしたのである。乍併政府の反對黨は無論夫れだけで滿足しやうとしたのでない。普通選擧法案が濟めば、憲政會又其他の議員は、連名して外交上の重大事件とかに付いて、手厳しい質問を試み、一歩進んでは、政府

不信任案をも提出せむとして居たのである。政府の反對黨が此等の大問題を提げて、恐るべき勢を以て政府に喰つて掛つて來ても、政府に於て更らに議會の解散をも奏請せず、反對黨が此等の大問題に關し、相互に結束して政府黨に當り、政友會の議院内に於ける多數黨たるの地位を覆さむとするに至つた場合に於ては、政府に於て潔く辭職して内閣を明け渡すとしたならば、或は政府の反對黨は、政府の其遣り方を立憲的なりとして稱賛したでもあらう。乍併政友會の側から云へば、夫れでは宋襄の仁を行つて、結局馬鹿を見たことになる。

戰爭に於て勝つた者は官軍と云はれるが、負けた者は、賊軍と云はれると云ふことがある。之は政黨の政權爭奪戰に於ても一樣に適用せらるゝことである。政戰に於て勝つた方は得意の絶頂に達するが、之に反して負けた方は失意のドン底に陷ることを免れぬ。此點から云へは、政黨が議會の内部に於て、又は院外に於て相互に政戰を爲すに際し、反對黨を閉息せしめべく、自から政權を把持するが爲めに、動もすれは深刻なる手段を執るに至ることのあるのは、止むを得ないのである。從來の例を見ても、政黨が政府に立つて總選擧を行ふた場合に於て、惡辣なる干渉を試みて、裁判沙汰になつたことも、いくらもある。從つて反對黨が政府を打倒すに當つても隨分深刻苛酷な方法を用ひて居る。政黨政派の間に於て、從來から、そんな種々複雜なる事情の存在して居たことを全然度外視し、政治道德論を高唱して、内閣の危機に際しては、内閣は宜ろしく辭職すべきである。議會を解散して反對黨に逆襲を加ふるが如きは辛辣であると云ふのは、政治上に於ける黨派の感情如何を無視した議論である。單純なる正義論から云ふならば、政府が二月廿六日に議會の解散を奏請しなかつた方が、正しかつたとも謂はれるであう。乍併政治上の勢の上から云へば、之は止むを得ずして起つたものである。

「三」　政府の公表せる解散理由の解剖

或者は今回の解散を以て不法であると主張する。乍併憲法な別に政府が議會を解散すべき場合及時期を限定して居ない。政府は如何なる理由に因りても、又大體如何なる時期に於ても解散の奏請を爲すことを得るのである。從つて政府に於て普通選擧法案の議事が危險性を帶びて居たと云ふ理由に依り、未だ其法案の議事が終了して其法案の運命の決定するに至らない前に於て、議會を解散することに定めたところが、別に之を以て憲

法違反なりと斷定する譯には行かない。唯問題と爲るのは、今回の解散は政治道德の上から見て適當であるかどうかと云ふことである。そこで解散の當否如何を判斷するに付ては、政府の議會解散理由を一瞥することを要する。

政府の人の說明に據るに、近來世間に行はれて居る普通選擧即時實行論は、選擧權を成るべく多數の國民に與へると云ふ單純なる意味を有するものではなくして、階級制度を打破することを目的とするものである。直接稅年額三圓以上を納むる者を一階級と見るの可否如何は之を別論として、假りに之を一階級と認むるならば、普通選擧法案提出者は其法律の力に因りて、其直接稅三圓以上を納むる階級を打破し、社會の狀態を脅迫せむとするのである。彼等は普通選擧實行に藉口して、國家に危險を及ぼさむとするものであるから、政府は之に贊成することを得ない。普通選擧法案提出者が、議院外の者と相呼應して無理押に此社會の狀態を脅さむとするの法律案を決定せむことを試むるのは、思はざるの甚たしいものである。政府側に於て國會議場に於ける多數決を以て、此法案を否決することは必ずしも不可能ではない。乍併政府が國會議場に於て此法律を否決し、反對黨側の普通選擧法案を消滅せしめたと云ふ丈けでは、問題が解決せられたことにはならない。故に議會を解散して選擧を行ひ、國民が政府の反對黨側の普通選擧法案に贊成するや否やを決定するの必要があると云ふのである。

之が政府の議會解散に付ての理由の要旨である。其理由の說明は非常に巧妙である。議會の解散を奏請した當の政府自身が此理由に依つて議會を解散したのであると公言して居るのであるから、先づ之を解散の理由と認めんければなるまい。乍併天下の人が之を以て解散の唯一の理由と認め、其外に解散の眞の理由は更らに存在しないものと考へるか、どうかは疑問である之と同樣に天下の人が政府の解散理由を以て一點の非難すべき所なきものと認め、政府が其理由に依つて議會の解散を行つたことに對して、全然贊成を表するか、どうか之も亦問題である

憲政會の島田三郎氏は本年二月廿四日、衆議院に於ける普通選擧法律案の第一讀會に於て、其法案提出の理由を說明し、我邦の現在に於て階級制度の弊害の甚だしきことを指摘して、階級制度打破の必要あることを述べ、其手段として普通選擧實行の必要あることを主張した。島田氏が其演說中に階級打破と云ふ强い文句を用ひたから、政府は其言葉の一箇を捕へて、普通選擧法案提出者は普通選擧實行に藉口して、階級制度を打破し

社會の狀態を脅迫せむことを企圖するものであると斷定するに至つたのであらう。

乍併之は、階級制度打破と云ふ短かい文字の中に含まれて居る深遠なる意味如何を問はずして、其言葉を文字通りに殘酷に解釋した者もある。島田氏の演說全體を讀で見れば、所謂階級制度打破と云ふのは、富豪其他資產階級其れ自身を撲滅することとでもなければ、社會の狀態を破壞することとでもないことは、一見して明らかである。現在のやうに、人民の納稅金額の有無及多寡を標準として、人民の參政權の有無を定むることゝ爲し成年に達して健全なる能力を具へて居る大多數の良民の中に、參政權者と參政無能力者との二階級を設くるときは、此二つの階級の中で參政權を有つて居る少數の階級の者が、國會議員と相結托して政治上、經濟上及社會上の利益を壟斷し、加之參政權を有つて居ない多數人民は、國會議員からはコンマ以下の人間と看做され、其政治上、經濟上及社會上の利益は、少數の參政權者の利益の爲めに犧牲にせらるゝことを免れない。此不公平なる結果の生することを防遏するが爲めに、國內の大部分の人民に一樣に選擧權を與へ、成年に達して健全なる能力を具ふる大多數の良民の中に、參政權者階級と參政無能力者階級の區別を設くるの制度を廢止すべしと云ふのが、所謂階級制度打破と云ふことの眞意に外ならぬのである。

普通選擧の實行論者は、成年に達して健全なる能力を具ふる大多數の良民の中に、納稅の有無又は多寡に基づき、選擧權者と選擧無能力者の區別を設くることを廢止し、政治上參政權の獲得に關し、富者をも、貧者をも皆平等に取扱はむことを主張するに止まるのである。國內に於ける富豪其他資產階級を全滅し經濟上の富の上に於て各人をして總て平等ならしむと云ふことは、更らに普通選擧實行論者の目的とする所ではないのである。こんな意味に、階級制度打破と云ふこと及普通選擧實行と云ふことを解釋するならば、所謂階級制度の打破及普通選擧の實行は更らに危險性を帶びては居ないのである。

歐米の諸國は普通選擧を實行して居る。乍併其等の國に於ても富豪其他資產階級は存在して居る。又社會の狀態は破壞されても居ない。普通選擧制は資產階級を打破するものでもなければ、又社會の狀態を破壞するものでもないことは、此一事に由りても明らかである。斯う云ふ見地から見れば、憲政會、國民黨及其他の團體から四十二回議會に提出した普通選擧法案も亦其れ自身に更らに危險性を帶びざるものである。假令憲政會の

人が其提案に際し、誤解を生じ易い危險なる言葉を使用したにしろ、之が爲めに其提出したる法律案其者を以て危險性を帶ぶるものと爲して、之を排斥すべき理由はないやうに思はれる。

私は解散前の議會に提出せられた普通選擧法案其れ自身は、更に危險性を有せざるものと認める。政府の人も亦之と同しく認めて居ないやうである。乍併政府に於て、普通選擧法案提出者が其法案を説明するに當りて危險なる文字を用ひたること、及院外の者が其法案の可決を促進せむが爲めに、示威運動を爲して議院を脅さむとしたことの事實を以て、危險なりと認めたと云ふならば、夫れも矢張り一つの見解であつて、之を誤なりと斷定する譯には行かぬ。乍併政府に於て此等の事實を以て危險なりと認め、其理由に基つき議會の解散を行ひ、國民の意見を問ふことにしたものだと假定して、然らば解散に因りて此危險は除かれるかと云ふに、私は必ずしも、さうは行かないと思ふ。

議會の解散前に於ては、普通選擧實行の宣傳は、東京、大阪京都又名古屋等の大都會に於て、盛んに行はれて居たに過ぎなかつた。乍併愈々普通選擧實行の可否如何と云ふ問題に因りて議會が解散せられて總選擧が行はれることになれば、政府反對黨の議員候補者は所謂階級制度打破を必要とするの理由に基つきて、全國に亙りて普通選擧實行の急務なることを、大仕掛に宣傳することになる。政府の危險と認むる階級打破の宣傳は、從來よりも一層猛烈に行はるゝに至るのみである。

又議會の解散後總選擧が執行せられて、政友會が大多數を占め、普通選擧法案を提出した憲政會又は國民黨が、非常な少數になつたと假定して、夫れで、普通選擧に對する民衆の示威運動は跡を絶つに至るかと云ふに、私は、夫れは今後益盛んになるのみであつて、終熄するものではないと思ふ。選擧權を有つて居ない大多數の人民が、普通選擧の實行に因りて、參政權を獲得するに至る迄は、普通選擧促進の爲めの示威運動は終熄すべき理由はない。四十二回議會に於て、憲政會、國民黨及其他の團體が、階級制度打破の必要を高唱して、普通選擧法案を提出し、之が院外の者と相呼應して、示威運動に因りて普通選擧法案の可決を促進せむとしたのが、國家の爲めに危險である。故に政府に於て議會を解散することを要したと云ふならば、總選擧後四十三回の議會が召集せらるゝに及んで、普通選擧法案が再び議院に提出せられ、院外の者が其法案の可決を促進する

が爲めに示威運動を爲す場合に於ても、亦今度と同一の理由に依りて、議會を解散するにあらずむば、主義一貫しないことになる。現在參政權を有つて居ない者が、普通選擧の實行に因りて、選擧權を獲得するに至る迄は、政府に於て何回議會を解散して見ても、議院の内外に於ける所謂危險なるものは、消滅しないやうに考へられる。

政府黨の人は、四十二回議會を解散して總選擧を行ひ、政府反對黨の提出した普通選擧法案の可否に付き、全國の選擧人の意向を問ひ、國内の選擧人の大多數か政府黨に賛成して、普通選擧實行論者たる反對黨に不賛成を表するに至るならば、夫れで以て、國内の輿論は普通選擧に賛成を表せざるものと看做し、之と共に普通選擧法案を葬り去らうとする考かも知れない。乍併現在我邦に於て選擧權を有つて居る者は僅々二百八十萬人に過ぎない。政府か此二百八十萬の選擧人の過半數の賛成を得て、總選擧に大捷利を占め、之を口實として普通選擧法案を葬り去らうとしても、此二百八十萬の納税選擧人の外に、勞働者、小作人及下級の官公吏員等か何百萬人も存在して居て、之が中々承知しないのである。政府黨が總選擧に大捷利を占め、其勢で普通選擧法案を葬り去らうとするならば、彼等何百萬人の無資産階級者は益々普通選擧實行の急務なることを絶叫し、之が爲めに一層示威運動をも盛んに行ふに至るべきことは分かり切つて居る。總選擧に於て政府黨が多數黨となつたにしても、政府は其多數の力を以て、將來に於て普通選擧促進運動の猖獗となるのを防遏することは不可能である。

議會の解散前、普通選擧法案に關聯して、議院の内外に存在して居た所謂危險なる空氣なるものが、解散に因りて幸に一掃せらるゝことを得るものであると假定するならば、政府が其目的で議會を解散したとは、大に理由あることになる。乍併反之議院の内外に蟠つて居た所謂危險なる空氣が、解散に因りて永續的に一掃せられないものであるとせば、政府が解散を爲したことは、無意味になる。無論議會か解散されて了へば、少くも一時は院内に於て普通選擧實行に關する危險なる宣傳は行はれないことになる。又之と同様に少くも一時は議院の外に於て、議員を脅さむとする示威運動は行はれないに相違ない。乍併夫れは、唯一時、何週間の間だけのことである。總選擧競爭の演說會か始まり、新議會か愈開會せらるゝ頃に至れば、普通選擧實行論者か再び、普通選擧實行の爲めに宣傳及示威運動を爲すに至るべきことは必然である。

普通選擧實行の目的を以て、宣傳及示威運動の盛んに行はるゝ所以のものは、政府に於て普通選擧の實行を尙早として、其實行を阻格するが爲めである。政府黨に於て民衆の要求を容れて、普通選擧實行法律を制定するの手續を採るならば、夫れで以て、普通選擧實行を目的とする所謂危險な宣傳及示威運動は、跡を絕つであらう。乍併其肝心の眼目たる普通選擧法律案を、何時までも握り潰ぶして置いて、民衆に不滿足を與へ其代りとして議會を何回解散して見たところが、其れで以て、普通選擧促進の爲めの宣傳及示威運動が終熄するに至るべき筈がない斯ふ云ふことを考へて見ると、普通選擧實行に關する危險なる宣傳及示威運動を一掃する目的を以て、議會を解散したのであると云ふ政府の說明は、一見甚た明瞭なるが如くであつて、其實甚だ不明瞭である。從つて政府の公言せる理由に基ついて、議會解散の政治上至當なることを證明するのは困難である。

「四」解散の理由如何。

政府の人の公にしたる解散の理由が不充分である爲めであるか、それとも外の原因に因るのであるか、夫れは能く分らないが、兎に角今日世間では、議會は政府の發表した理由に因つて解散せられたのではなくして、其以外に議會を解散しなければならない理由があつて、其の爲めに解散せられたのだと云ふ說が大分に行はれて居る。或人は政府は外交上の事件の爲めに極めて困難な地位に立つに至つたから、一時其困難を避けるが爲めに、政府は議會を解散したのであると云ふ。又或人は政府は物價調節問題に付き、上院から窘められて逃け路を見出すに苦んだから、議會を解散したのであると云ふ。乍併外交上の重大問題とかが、夫れ程迄に切迫して居たか、又貴族院の物價調節策に關する追及が、夫れ程酷しかつたか、これは能く分らない。從つて、そんな原因の爲めに、政府が議會を解散しのでないとも謂はれないが、夫れと同樣に、其の爲めに政府が議會を解散したのだと斷定する譯にも行はない。

乍併近頃では多くの人は、四十二回議會に於て、政友會と與黨との干係が圓滿を缺き、政友會に於て從來におけるが如く、與黨を賴りとして議會に多數を占め、之に因つて以て國務を停滯なく進めて行くに付き、困難を感ずるに至つたから、それで其困難を芟除するが爲めに、政府は議會を解散したのであると云ふことを唱へて居る。此說を以てすれば、今回の解散を最も

理論的に說明することが出來るやうに考へられる。從來は政友會は國民黨、新政會及無所屬の人などゝ相連合して、議會の大勢を左右して居た。然るに四十二回議會に入るに及んで、政友會と國民黨との關係が弛んで來た。增稅案の議事の時には、國民黨及正交俱樂部は修正案を提出した。そんな爲めでもあらうか、政友會は政府の折角提出した增稅案に、多少の修正を加へなければならないやうになつた。二月十九日衆議院に於ては政友會議員赤尾氏懲罰の件の爲めに秘密會議が開かれ、其會議の結果として、赤尾氏は遂に譴責を受くるの止むを得ざるに至つた(大正九年二月二十日官報號外、衆議院速記錄十五號、一六頁)。政友會としては、自黨の議員を懲罰に付することを好まなかつたでもあらうが、兎に角之が懲罰に付せらるゝに至つた。こんな模樣で行くと、議院內に大問題の突發する場合に於て、何時政府黨側が少數となつて敗北するかも分らない。政府黨の議院內に於ける地位が、そんな不確定な狀態であつては、政府は安心して政治を遣つて行く譯には行かない。故に政府は議會を解散して以て總選擧を行ひ、國民の內閣に對する信用如何を問ひ、總選擧に於て政府側が捷利を占めれば依然其位に踏み留まり、之に反して總選擧に於て政府側が敗北すれば、斷然其職を去ることに腹を極めたのであると云ふのが、如何にも筋の通つた說明であるやうである。

政府は無論そんな理由で議會を解散したのではないと云ふであらう。乍併政府以外の者が解散の眞の理由は其處にありと云ふことに對して、我々はさうではあるまいと謂ふべき丈けの根據を有しない。政黨內閣の是非に付ては議論がある。乍併內閣が政黨を背景と爲し、其後援を得て其地位を維持することが、寧ろ國の政治を圓滿に進めて行く上に於て望ましいことであるとせば、其政黨內閣が其後援者と爲して居る政黨の議院內に於ける地位の動搖した場合に於て、議院の分子を一新して內閣の地位を鞏固にするが爲めに、議會を解散することは、政治上決してない事ではあるまい。こんな理由で議會を解散するの例は、外國にもいくらもあらうと考へる。こんな理由に依りて、今回の解散の正當なることを說明することにするならば、一通り說明は付くかと考へる。

「五」、解散後の政黨の分野。

解散後總選擧の行はれたる場合に於て、其結果はどうであらうかと云ふことは、何人も皆一樣に考へる所である。乍併未だ

政府黨と反對黨との選擧競爭運動が猛烈に開始せられない今日に於て、其結果如何を豫測するのは極めて困難である。憲政會及國民黨に於て、總選擧に際し、選擧運動に全力を盡くし、政府の解散理由の不當なること、及普通選擧實行の急務なることを論証し之と同時に政府の內治外交に關する政策の誤謬なることを力說して、選擧人をして感服せしむることを得るならば、政府の反對黨が總選擧に捷利を得ることも無論出來得るであらう。

乍併今日の處では、普通選擧問題に關し、政府の反對側に立つた憲政會及國民黨が、相結束して政府黨に當ることを得ざるが如き地位に立つて居る。萬一多くの選擧區に於て、憲政會と國民黨の二つが各相分離して、別々に政友會に當ることにでもなるならば、之が爲めに憲政會及國民黨共に余程不利益な地位に立ち至ることを免れない。又憲政會及國民黨の人は、僅か二百八十萬の選擧人に選擧權を認むるに過ぎざる現在の制限選擧別を批難し、普通選擧制を採用して、少くも一千萬人以上の人民に選擧權を與ふるの必要なることを主張して居るのである。彼等は一方に於ては現在の少數の納稅選擧人は、多數國民の眞成の代表者を選擇するには不適當なることを公言しつゝ、而かも他の一方に於ては其少數の納稅選擧人に頭を下げて、之に對して自己を議員に選擧せむことを歎願しなければならないのである。彼等は現在の納稅選擧人の前に出でゝ、政見を發表するに當り、猛烈に普通選擧の必要を高唱して、現在の財產要件付選擧權制度を罵倒するならば、動もすれば選擧人の反感を招くことを免れぬ。之が憲政會及國民黨の人達が選擧區殊に郡部選擧區を遊說する場合に於て、多少不利益を受くる所である。其外從來の例に依ると、政府黨が何時も捷利を占めて、反對黨が不利益の地位に立つことになつて居る。こんな例から見ると、憲政會及國民黨の人は今回の總選擧には、余程苦戰しなければならないやうにも思はれる。

政友會は今度は、自から進んで議會を解散したのであるから、解散后の總選擧の結果に對しては、余程自信を有つて居るのであらう。昨年執行せられたる府縣會議員の選擧の際には、政友會は全國を通して、大分有利な地位に立つたのである、選擧法改正法律に依る衆議院議員選擧人の納稅金額も、府縣會議員選擧人の納稅金額も共に均しく三圓である。府縣會議員選擧人の數と、選擧法改正法律に依る衆議院議員選擧人の數とは、非常に多くは違はないのであるから、昨年の府縣會議員の選擧に

捷利を占めた政友會は、之と同様に、今年の衆議院議員選擧にも亦捷利を占める運命を有つて居るやうにも見える。其外政府黨は運動費を思ふ存分に有つて居るであらうし、選擧運動を爲すに際して、官憲から餘りに激げしい壓迫を受けないかも知れない。そんな點から見れば、政府黨が從來の例に於けるが如く總選擧に於ては、捷利を得るのではないかとも思はれる。乍併今日では政府の物價調節策等に對して、不平を鳴らして居る選擧人も少くはない、又新聞雜誌の大部分は普通選擧に賛成して居るから、此等は總選擧の際には、政府に對して猛烈なる反對を爲すかも知れない。從つて總選擧の結果は、政府の打算するが如く、必ず、政府側に有利なやうになると斷定する譯にも行くまい。

私は此處では、總選擧の期日迄政友會内閣が繼續して、選擧を執行するものとして、政友會、憲政會及國民黨の黨勢の消長如何を豫想したのである。萬一總選擧前に政友會内閣が俄かに交迭するやうなことにでもなるならば、我々の豫測と異つた結果を生ずるのは當然である。物價騰貴に伴ひ、同盟罷業其他種々面倒なる問題が頭を持ち上げんとして居る。内閣が此等の問題の爲めに突然に交迭するやうに至ることは、必ずしも絶對的に有り得べかざることでもあるまい。乍併そんな場合までをも豫想して、總選擧後の政黨の消長如何を推測することは先づ不可能である。

總選擧の結果に因りて、憲政會、及國民黨などの方が勝つか、又は政友會が勝つべきか、今の處未だ判明しないが、愈其中の孰れか一つが議院内の多數黨と爲つた場合に於て、内閣はどうなるか。假りに憲政會が多數黨になるとすれば、無論政友會内閣が倒れて、其代はりに憲政會内閣でも出來なければなるまい。乍併政友會が總選擧に於て從來に於けると同樣に、多數黨たるの地位に立つものであると假定するなれば、夫れで政友會内閣は何時迄も存續するかどうか。政友會内閣が新議會に於て多數黨たるに至るならば、政府は其議會に自黨の普通選擧法案を提出して、之を通過せしめ、之に因りて以て天下の人心を收攬して、相當に永く其存在を維持するであらうと云ふのも一つの見方である。乍併之と異り政友會が多數黨となつたにしても、内閣は外交問題又は物價問題の爲めに、貴族院で窘め付けられる危險に迫つて居る。又内閣は四十二回議會に於て、普通選擧實行を尙早としたが爲めに、新聞及民衆から大反對を受けることを免れない地位に在る。此等の事件の爲めに内閣は總

選擧後一定の期間を過ぐれば、當然辭職して、其地位を官僚派に讓るであらうと云ふのも、亦一つの見方でなる。

「六」、解散と普通選擧將來の運命

普通選擧を實行するの必要なることが、近來に至りて、國内の多數人民の間に汎く認めらるゝに至つたことは、注目すべき事柄である。乍併普通選擧は現に少數の富豪其他資産階級の獨占して居る參政權を汎く一般人民に及ぼし、國の政治が兎角富豪其他資産階級者の利益を偏重するに傾かむとするの弊害を匡正せむとするのである。其目的とする所は極めて遠大である。之を即時に實行しやうとすると、種々の方面から反對が起つて來る。普通選擧實行と云ふことを、政治上の大問題として、國民一般の注意を之に引き付け、國内の各地に普通選擧實行論を勃興せしめ、議會をして之を實行するの餘儀なきに至らしむるに付ては、如何なる手段を執るべきかと云ふことは、普通選擧實行論者の終始頭を痛めて勘考した所である。然るに今回政府は普通選擧問題に付て、議會を解散し、總選擧に際し全國の各選擧區に於て、議員候補者をして普通選擧の可否如何に關し論難攻擊せしむることゝ爲した。此結果として今回の總選擧に於て、普通選擧實行論が、全國の津々浦々に至る迄、隈なく宣傳せらるゝことを得るの運びと爲つた。普通選擧實行熱望論者から見れば、これ程喜ばしいことはない。總選擧に際し、議員候補者が全國の選擧區を巡つて、普通選擧の宣傳を遣つて行くならば、今迄は何も知らなかつた田夫野人に至る迄、皆普通選擧の何たるかを理解し、之は早晩實施しなければならない制度たることを自覺するに至るのは當然である。

政友會は四十二回議會に於て、憲政會、國民黨及其他の團體の提出に係る、普通選擧法案を議決せしめないで、議會の解散を斷行し、之に因つて同法案の確定法律と爲ることを阻止することを得た。乍併憲政會、國民黨及其他の團體に屬する議員候補者の、念入りの宣傳の結果に因りて、全國の大多數の人民が一樣に皆普通選擧實行の必要なることを認むるやうになるならば、政友會も遂に輿論に從ひ、之に贊成するに至るべきは當然である。こんな理由に依りて、私は議會解散の爲めに普通選擧實施の時期は一層近ついて來たものであると認める。

（大正九年三月十日稿）

近時の政界に就ての感想

法學博士　美濃部達吉

吾輩のやうな全く政治の圏外に立つて、法律學一點張りに、之を自分の分として、唯それのみに沒頭して居る者に向つて、政治問題に付いての評論を述べよと言はれても、それは甚だ迷惑の至である。吾輩は政治の事は成るべく政治家に任かせて置いて、よく／＼の場合の外は唯傍觀して居りたいと思つて居るばかりで、今日、別に公にしたいと思ふ程の意見も無い。唯强ひて何か話をせよと言はるれば、吾輩と雖も國民の一人として現時の政治問題に付いて多少の意見が無いでもないが、それを話したからと言つて、別に雜誌の光彩を增す譯でもなければ、世間の參考となる譯でもない、差當つては先づ傍觀者としての地位に立たせて置いて貰ひたいのであるが、强ひての御註文であるから、兎も角も何かお話しようと思ふ。題目は政界近時の諸問題に付いての感想といふことにしたが、或は多少脫線するかも知れず、言ふことも亦極めて平凡な事の外を出でないことは、豫め御承知を願ひ度い。

一

第一に先づ議會の解散のことであるが、今度の解散ほど世人の意表外に出で、突如として世人を驚かしたことは、世界の議會解散の歷史に於て、殆ど全く類例の無いことであらうと思ふ。吾輩は敢て廣く世界各國の議會歷史に通じて居る譯ではないが、吾輩の知つて居る範圍に於ては、今度の解散ほど、不合理な、普通の常識を以ては到底其の理由を解し得られないやうな解散は、他に其の例を求むることは來難い。政府の公表した所に依ると、選擧法は憲法附屬法で極めて大切な法律であるから、其の改正を議する爲には先づ民意に問ふ必要が有るといふのであるけれども、さういふ理由は、愈選擧法を改正しようと決心した者の側に於てのみ言ひ得る事柄で、若し今の政府が普

選擧の制を實行しようと決心し、唯之を實行するに付いては事頗る重大であるから、假令議會では多數を得る見込が有るにしても、先づ之を民意に問ひ、其の贊成を得て然る後に之を決行しようといふのならば、それは至極道理ある事柄で、解散の理由として充分首肯し得べき所であるけれども、今回の場合はそれとは全く異つて、政府は選擧法改正の意思なく、而も議會に於てもその改正案が通過すべき見込は全く無いのであつて、十が十までも選擧法は現在の儘に据ゑ置かるべき場合である。現在の儘に据ゑ置くことが議會の欲する所であり、又政府の欲する所であるとすれば、何の爲に更に民意を問ふの必要が有るのであらうか。更に其の理由を解することは出來ぬ。況んや、今の政府は昨年度に於ては何等民意に問ふが如き手續を取らず、平然として選擧法の改正を斷行した所の政府である。同じ憲法附屬法たる選擧法の改正に付いて、昨年は其の改正を斷行することすらも、少しも改めて民意に問ふ必要を認めなかつた政府が、今年に至つては之を現在の儘据ゑ置くことに付いて、突如として急に民意に問ふの必要を見出したといふことは、到底常識を以ては理解し得られない所である。

若し強ひて政府の自ら公表した理由以外に解散の理由を求めるならば、それは必ずしも想像し得られないではない。第一には、昨年度に於て選擧法が改正せられて、選擧權が兎も角も擴張せられ、選擧區制度も大に改まつたこと、是である。現在の衆議院議員は舊選擧法に依つて選擧せられたのであつて、而して舊選擧法が民意を代表するに不適當であるとして改正せられた以上は、一日も早く議會を改造して、新選擧法に依つて選出せられた新議會を組織すべきことは、選擧法改正から生ずる當然の論結である。選擧法を改正して置きながら、いつまでも舊制度に依る議會を存續して置くことは、改正の本旨に反するものと言はねばならぬ。第二には、世界の大戰が正に終を告げ、日本は比較的戰爭の影響を受くることが少いとは言ひながらも、尙社會經濟に於て、國民の政治思想に於て、急激なる大變化を來したことは疑ふべからざる事實であること、是である。此の急激なる變遷に際しては、民意の代表を求めるにも、必ずしも普通の四年の任期の終るのを待たず、此際組織を新にして現在の民意を代表する者を求むるのが或は適當であるかも知れぬ。若し今回の解散が此等の理由によつて行はれたものであるとすれば、それは敢て不合理の解散といふべきではない。政府が突然に解散を奏請したことも、其の公然に發表した理由の外

に、或は此等の事が其の眞實の理由を爲して居つたのかも知れぬ。併ながら、若し此等の理由に依つて解散を行ふとすれば、それは、豫め其の時期を見計ひ、重要なる法案の凡て議了するを待ち、且つ凡そ何月頃に解散を行ふべきことを豫め公表して自黨の議員は勿論反對黨の諒解をも得た後でなければならぬ。解散の其の日までも嚴重なる秘密を保つて何人も解散を豫期しない時に當り、殊に戰後の經綸を含んだ重要な豫算が將に貴族院の議に上らんとするに當つて、突如として解散を斷行したことは、何れにしても不合理極まるものと言はねばならぬ。

勿論、單純な形式的の法律論から言へば、解散を爲し得べき場合に付いて、憲法には何等の制限をも定めて居らぬのであるから、如何なる理由を以て解散したとしても、敢て違法であると言ふ譯ではないが、併ながら凡て政府が法律上に或る權力を有つて居る場合は、正當の理由なくして其の權力を行ひ得べきことが認められて居るのではなく、唯國家社會の爲に必要なる場合にのみ、其の權力を行使し得べきものであることは、勿論である。若し正當の理由なくして權力を行使するならば、それは權力の濫用である。政府の有する所の總ての權力は唯國利民福を達する爲の手段としてのみ許されて居るのであつて、苟くも之を濫用すべきものではない。權力の濫用ほど、國體の基礎を危うし、公共の秩序を紊亂することの甚しいものはない。吾輩は平生今の政府に對しては、前二三代の內閣に比して權力濫用の弊の比較的少ないことを感じて居た者であるが、今回の解散に付ては、甚しく驚かされたと共に、其の權力を濫用したことに付いて、大なる遺憾の念を禁じ得ない者である。

抑衆議院の解散は、政府が議會に對して有する所の最終の權力手段であつて、輕々しく斷行せらるべきものではない。英國は解散制度の祖國であるけれども、從來解散の行はれたのは、舊制に於ては、議員の任期が七ケ年とせられて居つて、それが餘りに長期に過ぎる爲に、五年くらゐ過ぎれば組織改造の爲に解散を行ふといふ例であつて、これは政府黨も反對黨も充分諒解が有つての上の解散である。政府が權力的に解散を行ふことは、近來に於ては殆ど其の例が無い。二十世紀に入つてからの例を見ても、千九百六年にはバルフオーア內閣は、議會にはまだ自分の黨派が多數を占めて居つたに拘はらず、補闕選擧に於て數回自分の黨派が敗北し、民心將に內閣を去らんとするを知つて、解散を行はずして自ら職を辭し、自由黨內閣が之に代つた。千九百九年には自由黨內閣の下に解散が行はれたが、是

は貴族院が政府の大方針たる豫算を否決した爲めであつて、殆ど貴族院の要求に依つて餘儀なくされたものと言つて可い。爾來千九百十一年には議員の任期が正式に五ケ年と改まり、而も戰時中其の任期が一年づゝ延長せられて。昨年まで任期を繼續し昨年僅に改選せられたのであつて、之を見ても、英國に於ても解散が單に政府の意向のみに依つて斷行せられるものでないことが知られるであらうと思ふ。佛國の如きは解散權は大統領に屬するものと憲法上には規定せられて居るけれども、それには元老院の同意を要するものであり、而も、實際には少くとも近頃に於ては全く實行せられたことはない。米國に至つては大統領は全然解散權を有せず、各州の「ガヴアーナー」も解散權を與へられて居るものは全く無い。

　吾輩は必ずしも全然解散權を否定することが正當であると信ずるものではないが、少くともそれは社會が一般に肯定し得べきだけの公明正大の理由によつてのみ斷行せらるべきものであることを主張せんとする者である。

二

併ながら權力の濫用の恐るべきことは、行政權よりも、司法權に於て一層甚しい。司法權は直接に吾々一個人の自由を拘束し、之に拭ふべからざる汚辱を被むらしむるもので、若しそれが多少なりとも濫用せらるることが有るとすれば、社會の安寧を保つが爲めの機關たる司法權は、却て社會の秩序を破壞し、國民生活を不安にし、遂には國體の基礎を危うする原因とならぬことを保し難い。假令それ程重大なる危險を招かないとしても、司法權の濫用ほど世界の文明國の間に於ける國家の信用を傷けることの甚しいものはないであらう。而して此の點に於て近頃の日本の司法權殊に檢事局の行動には、遺憾とすべきことが甚だ多い。

　吾輩は今茲に個々の具體的の實例を擧げて、司法權濫用の弊を說かうとするのではないが、唯一二の點に付いて、特に司法官憲の猛省を促したいと思ふ。

　第一に擧げたい事は、司法權を以て或る政治上若くは社會上の目的を達するが爲に利用することは、極めて愼しむべしといふことである。司法權の行動は絕えず公正に且つ平等に行はれなければならぬ、或る時には嚴に、或る時には寬に、檢擧常ならず、人をして適從する所に迷はしむるが如きは、最も避けねばならぬ所である。然るに時々變更する所の政府の方針に從つ

て、或る時には同盟罷工を抑制するが爲に嚴重なる監督を加へて、苟くも違法の行爲が有れば猶豫なく檢擧し、或る時には急進的の思想に反抗するが爲に、言論の自由に對する拘束を俄に嚴重にし、不穩と認むる言論の發表に對しては、一々之を起訴するが如き、其の時其の時に應じて、或る特定の目的を達する爲に、寛嚴其の度を異にすることは、これまでも屢見る所の例であつて、疑もなく司法權の濫用と稱すべきものである。司法權の行動は決して此の如く方針を二三にすべきものではない終始同一の態度を以て、公平無私、總ての場合に通じ總ての人に對して平等の取扱を爲すべきものでなければならぬ。

第二に司法官憲に要求し度いことは、能く普通の社會思想を諒解して、偏狹なる個人的私見に囚はれないこと、是である。此の點は殊に言論に對する司法權の行動に付いて、其の弊を見る所であつて、又外國に於ける國家の信用を害することの最も甚しい一つである。到底世界には通用しないやうな偏見を絕對の眞理の如くに固執し、それに反對する思想を抱く者はさながら國賊の如くに誤信し、而も其の誤信を抱く者が偶々權力者の地位に在るが爲に、その權力を利用して力の及ぶ限り反對思想を壓迫しようとすることは、歷史上屢々其の實例を見る所であつて、而も其の結果は國家の基礎を危うしなかつたものはない。吾輩は切に今日の我が司法官憲が此の如き弊に陷らないやうに、相當に世界の文明國民の思想を諒解することに努められんことを望むものである。

三

今年の議會に現はれた普通選擧運動に付いては、吾輩は多くの同情を表し得ない。吾輩は敢て普通選擧に反對するものではなく、却て昨年の選擧法改正の際に於ても、既に納稅資格を三圓に減ずるが如き姑息の改正は全く無意味であるとし、寧ろ全然納稅資格を撤廢するの至當なることを主張したものである。併ながら、昨年度に於ては全院殆んど擧つて熱心に普通選擧制に反對し、其の議案の提出にすらも、二十人の贊成者を得ることが出來ない爲に、遂に提案することを得なかつた有樣であつたのが、僅々一年の間に而も昨年改正せられた選擧法が未だ一回も實施せられない內に、更に普通選擧に改めようとすることは、到底之を誠意ある眞面目な確信から出たものとは認むることを得ない。況んや院外に於ける示威運動の有樣に至つては、普通選擧制に大なる同情を有つ者をすらも、甚しい反感を起さ

せるに至らしめた。

吾輩は遠からざる將來に於ては、必ず普通選擧にならねばならず、又必ずそれが實現せらるゝであらうと信ずる。それは固より敢て危險思想を以て目すべきものではない。併ながら普通選擧を行ふに付いては今少しく愼重の研究を要する。殊に比例代表の制、候補者屆出の制、運動費運動員又は運動方法の制限等は、普通選擧に伴うて必ず研究せられねばならぬものである。

此等の點に付いて別段の用意もなく、僅に一年ならぬ内に、再び選擧法を改正しようとし、殊に民衆の壓力を以て無理にも之を遂行しようとすることは、餘りに輕卒の譏を免れないものと思ふ。

こんな取りとめもない感想を話せば、まだいくらも話すことが有るが、モウ時間も遲くなつたからこれだけで止めよう。

何が幸ひになるか分らぬ

堺利彦

一　珍らしい演説の機會

『改造』記者足下。僕は先日、珍らしくも青年會館で演説をやりました。其日の演説會は『思想家の時局觀』と云つた樣な觸出しで、謂ゆる『思想家』のお歴々が顏を揃へられる筈だつたが、色々差支があつて思ふ樣に行かなかつた。そこで僕が其の補缺として急に驅り出されたわけだ。何が幸ひになるやら分らんもので、小十年もあの演壇に立つ機會を得なかつた僕が、偶然、思ひがけなくも其の機會を與へられたのだ。翌日の新聞には、堺の演説が中止になつて、混亂の中に解散したなどゝ見て來た樣な嘘が書いてあつたが、實は何のお咎めも受けず、無事演了したのでした。尤も、十分か廿分かの短演説で中止のヒマもスキも無かつたのだが、兎にかく僕も青年會館で演説がやれる、やらせられるといふ先例が開けたわけで、誠に有りがた

い。

そこで其日しやべつた事を土臺にして、此の一文を綴つて貴誌に寄せる。

二　森戸事件と河上君の激語

『改造』記者足下。世の中の事は實に何が幸ひになるやら分らぬ。僕は何事につけても樂觀蔵で、蹉跌失敗の間にも常に何等かの新らしい希望を發見する。

森戸事件の如き、恐ろしい言論の壓迫だと云つて騷いでゐる人が多い。其後續々として發生する、謂ゆる『筆禍』事件を見ると如何にも恐ろしい氣がしないではない。世界が急速力で進歩してゐる間に、日本の社會だけは段々跡戻りをしてゐるのではないかとも思はれる。然しあの事件の副産物は決して少なくない。

尤も、あの事件は、我々から見ると、華族の若樣が縄ノレンにはいつたといふ位のものに過ぎない。貧乏人に取つては縄ノレンにはいるのは當り前の事である。只だ若樣がはいれば世間の問題になる。クロポトキンやマルクスの學說を紹介して牢に入れられるのは一向珍らしい事ではない。只だ大學教授がそれをやつたから世間の問題になつたのだ。森戸君の人物に對しては、僕は十分の敬意を拂つてゐるが、社會現象としてのあの事件は、どうしても若樣の縄ノレンくゞりに過ぎない。

けれども又、其の効果から云へば、あの事件は矢張り頗る面白い。新聞に載せられた裁判所の判決文を讀んで、お蔭でクロポトキンの思想の要領が分つたなどゝいふ不心得者は論外としても、謂ゆる新思想家が、あの事件に依つて、一面には逃げ腰の醜態を曝露し、一面には眞劍になつてフンドシを締めなほした形がある。後者の最も顯著な一例としては、『社會問題研究』第十三册に於ける、河上肇君の『書簡一通』を擧げる事が出來る。河上君曰く、『一切の新思想は總て危險思想たらざるを得ぬのではありますまいか。』『新思想に對しては、之を健全に育て上げる爲に、成るべく酷い取扱をしなければならぬ。例へば大學教授で苟くも新思想を抱く者があつたならば、片端から免職にして仕舞ひ、免職でも利目がなければ、死刑にして仕舞ふ。さうするに限つたらうと思ひます。』『さうしたならば……滅多に新思想など唱へる人は無くなり、好い加減な附焼刃は皆な首を縮めて仕舞ふだらうと思ひます。』『下手を言ふと何時首が飛ぶかも分らぬ、と云ふやうになつて來れば、思想問題を取扱ふ

者の態度が眞劍になります。』『思想界の志士が各々生命懸けで爭鬪する。何時首が飛ぶかも知れぬと云ふ覺悟で、一言一句を吐き出す。大いに宜しい。』『それ故私は、極度の壓迫は、新思想をして健全に發達せしむる爲の最良策である、とも考へるのです。』

河上君の『おとなしい激語』が此くらゐ激調を帶びたのを初めて見た。僕は曩に此の事件について、『既に森戸をやつた以上此次は河上の征伐に掛るが當然だ』といふ意味の事を書いた。所がそれでは餘りに皮肉が皮肉すぎるからと云つて、記者足下は河上君に遠慮された樣だつた。然し河上君自身が既に之ほどの事を云はれる以上、記者足下も其の遠慮の無用であつた事を承認されるでせう。

何しろ河上君をして之だけの激語を發せしめた所、即ち之だけにフンドシを締めなほさせた所に、森戸事件の大なる效果がある。森戸君自身と雖も大ぶんフンドシが締めなほされてゐるだらう。何が幸ひになるやら分らぬ。

河上君の謂ゆる『附燒双』の連中の態度については、之からが見ものである。森戸事件發生の當初、可なりな醜態を現はしかけた人でも、其後森戸君に對する社會の同情の盛んなのを見て、急に又色氣を出して存外强さうな態度を見せてゐる人もある。そんな人氣取の連中が今後果してどこまで其の强さうな態度を持續し得るか、いつどんな事で正體を暴露して『首を縮めて仕舞ふ』か、實際おもしろい見ものである。

今から五十年ばかり前、獨逸で社會民主々義が初めて日の出の勢ひを示した時、勞働階級が糾然としてそれに向つたばかりでなく、有産階級中の有らゆる不平分子がそれに投じ、紳士閥に容れられぬ學者、文士、論客の徒が、爭つて勞働者の間に認識を求めようとした。社會黨内に於ける經驗に乏しい分子は大いに此の新來者を歡迎した。博士連や教授連が社會民主々義に來る以上、其の勝利も早いに相違ないと考へた。然し博士連や教授連は紳士閥と分離する者ではなかつた。彼等は只だ社會民主々義の助を借りて自分等を紳士閥に認識させようとしたのである。所が、それから間もなくビスマルクの社會主義鎭壓法が發布されて、學者的社會主義者等は大抵皆な恐怖して奔竄し、跡には本統の社會主義者ばかりが踏み止まつた。

我國にも斯ういふ篩のかゝる時節が今に來るだらう。其時、奔竄する學者、志士、論客が誰々であるか、今から見當を付けておいて見るのも一興だらう。

三　議會解散と資本家擁護

衆議院の今度の解散が少し意外であつたと同時に、普通選擧運動の爲に大なる迷惑であつた事は云ふまでもない。普選運動者の中には隨分如何はしい職業的運動者があつて、而もそれが新聞種の花形役者の觀を呈してゐたので、一面には運動の景氣を添へつゝも、一面には頗る其の威信を傷つけた形もあつたが兎にかくあれだけに溢れて來た滿潮の底には、多數國民の强い力が籠つてゐる事が分る。あの分で押して行けば、大正十年から確かに普選の實行される希望が見えてゐた。そこを解散で食ひ止められたのだから堪らない。之で先づ普選は大正十四年まで突き延ばされたわけである。

勿論、來年の事を云へば鬼が笑ふ。去年の春には今年の春の形勢を豫測する事が出來なかつた。如何なる變化、如何なる珍事、如何なる意外の發展が、甚だ近い將來に勃發しまいにも限らない。然し五月の總選擧が政友會の註文どほりの結果を呈し、政友會議員が註文どほりに絶對多數を占めて、原內閣が猶しばらく其の押しの强い存在を繼續するものと假定し、其の次の內閣が又、政友會の擁護の下に立つ後藤內閣か何かであると假定し、それらの諸內閣が金力と武力とを以てシヤニムニ其の最後の運命を引延ばさうと藻搔くものと想像すれば、普選は先づ以て大正十四年まで實現されぬものと明らめるより外はない。

太平の時代に在つては、四年は寧ろ短日月である。四年後の希望は現在の人心を鎭靜させる効力がある。然し今は太平の時代でない。此の急轉直下の勢ひを以て激變しつゝある世界の進運の前に於いて、四年は實に永い月日である。其の永い月日の四年後に於ける豫期豫約は、人心に希望を與へるよりは寧ろ只だ失望を與へるに過ぎない。

原內閣と政友會とは斯ういふ失望を國民の多數に與へて、而も其の解散の術策に得々としてゐる。然しながら記者足下、何が幸ひになるか分らぬ。僕は此の失望の中にも亦た大いなる利益を發見する。原內閣と政友會とが國民の多數から全く愛憎を盡される事が卽ち其の利益である。

政友會の前身は自由黨であつた。自由黨は藩閥政府に對して民權を主張し、多年の苦戰惡鬪を續けたものである。そして其の民權とは、實は百姓町人中の資產階級の權利だと云ふ事は、餘ほど後に至るまで（或は最近に至るまで）氣の付かない人が

多かつた。そこで自由黨が藩閥中の進歩分子と妥協して政友會となり、其の首が板垣伯から伊藤侯にスゲ替へられ、漸く明かに資産階級黨の正體を暴露した時でも、猶ほ國民は昔の歴史の記憶に依つて、政友會を民黨だと思つてゐた。後、伊藤公が退隱して西園寺侯が之に代つた時でも、侯が大阪の大富豪住友家の兄弟だと云ふ事よりも、寧ろ其の青年時代に、佛蘭西仕込の自由主義者としてアバれたものだと云ふ昔話に多少の希望が囑されてゐた。そして侯の周圍を取卷いてゐる政友會の有力者が次第に多く資本家的の色彩を發揮して來たに係はらず、猶ほ農民黨の名に依つて多數人民の味方でゝもあるかの樣に考へられてゐた。勿論、政友會は自由黨以來、地方の農村に多くの地盤を持つてゐる。然しそれは大地主の勢力の現はれであり、其の大地主なる者は近來に至つて、他の工商階級、若しくば實業家銀行家と同體（或は同類）の者であり、又其下に位する小地主なる者は、數に於いては優勢であつても、實質上、實力上、單に大地主、若しくば實業家、若しくば銀行家の附屬物である事は、今さら説明するまでもない。けれども、藩閥官僚の餘勢が猶ほ一方に蟠居してゐるお蔭を以て、幾分なりそれと對抗し爭鬪する政友會は、猶ほ民黨を以て目されてゐた。そこで一昨年原内閣が成立した時、政友會内の自由黨分子は既に全く凋落し盡し、杉田、江原等の諸老は貴族院に祭り込まれて纔かに其の殘喘を保ち、原、中橋、野田、山本、高橋などいふ顯著なる財閥の代表者が大臣席に列坐したに係はらず、只だ彼等が（高橋氏の外）貴族の爵を有せざるが故に、『平民内閣』の稱呼を與へられ、財閥内閣、金力内閣、資本家内閣の實質は、まだ餘ほど隱蔽されてゐた。從つて多數國民は猶ほ幾分か『平民内閣』の名に望を囑してゐた。

然るに其の平民内閣の施設は着々として非平民的なる事を暴露した。物價調節の問題に於いても、勞働問題に對する態度に於いても、現政府が純然たる資本家階級の擁護者たる事が、明瞭に實證された。そして其の最後が普通選擧拒絶の幕になつた。如何にお人好しの國民でも、如何に『衆愚』と呼ばれる國民でも最早や原内閣と政友會とに望を囑するわけに行かない。彼等がいよ／＼愛憎を盡され切つた事は、是非もない次第であり、又そこに却つて大なる利益を生ずるのである。

解散理由の説明としての原首相の演説は、ウツカリしてゐると尤もに聞えるほど巧妙に出來てゐる。首相が之に訴へるといふ國民の少部分（即ち選擧有權者三四百萬人）の中には、或は

此の巧妙な演説に胡麻化される者があるだらう。然し國民の大多數たる選擧無權者に取つては、此の演説は只だ資本階級擁護の宣言としか聞えないのである。

首相は頻りに『階級打破』の害惡を力說してゐる。普選主張者の根本目的は階級打破に在る。階級打破は『現在の社會の組織に向つて脅迫を與ふるものである。』『夫れでは國家は如何になるでありませうか。甚だ危險なものと考へる』と云ふのである首相が斯樣に『打破』される事を恐れてゐる『階級』とは、何の階級を意味するのか。云ふまでもなく資本階級である。故に首相の演說は、資本階級打破の主張は現社會組織に對する脅迫であると感じ、資本階級が打破されたら國家は如何になるだらうかと氣遣ひ、實に甚だ危險なものだと斷定したのである。之は資本階級を以て殆んど社會の全部と爲し、資本階級を以て殆んど國家と同一視する者でなくては、云はれない筈の言葉である。首相が斯樣に感じ、斯樣に氣遣ひ、斯樣に斷定するのは即ち彼れ自ら資本家であり、資本階級の護擁者である、最も明白な證據である。

五十餘年前、德川幕府打破の主張が起つた時、(其の主張者の中には今の山縣老公なども あつたのだが)、德川幕府としては『現在の社會の組織に對する脅迫と感じ』たに相違ない。又『夫れでは國家が如何になるであらうか』と氣遣つたに相違ない。そして『甚だ危險なものと考へ』たに相違ない。然し明治の新社會はそんな事に頓着なく駸々として興隆した。そして數年の後、藩籍は奉還せられ、武士階級は名殘りなく打破された。そして結局、當時の賊軍たりし東北盛岡藩の藩士にして、後に銅山王古河家の總番頭と稱された原敬君が、總理大臣になる樣な世の中が現出した。階級打破が必ずしも而く恐るべきものでなく却つて大いに歡迎すべきものである事は、此の一事でも分る筈である。然るに階級打破の餘澤として總理大臣になつた原其人が、今は却つて階級打破を危險視するのは、即ち彼が今正に昔しの幕府老中の地位に立つてゐる證據である。國民の多數が彼に對して全く愛憎を盡かしたのは當然である。

四　あのザマは何だ

然し愛憎を盡かされたのは原内閣と政友會とばかりではない。若し憲政會と國民黨とが今度の普選主張に依つて、幾許なり國民の信頼を博し得たと思ふなら、それは大きな大間違である。

憲政會のあのザマは何だ。元來、憲政會が改進黨の後身であつて、其の改進黨が英國流の民權を主張して實は最初から資產階級黨であり、近來藩閥官僚の一部と妥協して憲政會となり、日本最大富豪の政治的代表者加藤子を首領として、純然たる資本家黨となりました事は、自由黨から轉化した政友會の歷史と正に其の趣きを同じくしてゐる。されば加藤子が去年まで極力普選に反對し、今年の一月に至つても、躊躇、狐疑、逡巡して普選卽時施行の主張を決する事が出來ず、一時は實質上五年後の施行を標榜して苦境を切拔けようと試み、それもとう／＼心に任せずして、ヤットの事で苦い顏をしながら『獨立生計を營む者』といふ所まで漕ぎつけた。アノ不體裁は、加藤子として洵に無理のない事である。あのザマは何だと云つて、罵つて見ても張合のないわけである。要するに彼は只、政友會に對する憲政會、三井黨に對する三菱黨の勢力を維持せんが爲に、只だ其の弱味の爲に、民衆の力に引きずられて、首に繩をかけて引きずられた樣に、厭々ながらあそこまで來たのに過ぎない。昔しの民權論の長老たる河野廣中翁が白髯を撫して嘆息して見ても島田尾崎の諸君が失意の境遇から生じた最後の若返りに大見えを切つて見ても、憲政會全體の信望に一點一畫を加へる事は出來ない。

國民黨に至つては固より論ずるに足りない。犬養君が全く過去の人として國民の眼中から葬り去られたのはモウ餘ほど前の事である今頃になつての返り咲は只だ滑稽に過ぎない。但し彼もサル者、政友會と原首相とに對する鋭利な攻擊、痛快な嘲笑は、猶ほ昔日の意氣を示すに似たものがある。然しそれも眞劍な國民の目から見れば、只だ狼と梟との藝當に過ぎないのは、誠に氣の毒の至りである。

斯くて國民の多數は總ての舊政治家と舊政黨とに愛憎を盡かし切つた。但し國民の多數は必ずしも潔癖でない。憲政會にせよ、國民黨にせよ、加藤子にせよ、犬養氏にせよ、彼等が多少とも國民の爲に利益ある行動を取る間は、勿論それを利用するであらう。卽ち彼等が普選を主張する時、其の心事の如何に係はらず其の主張を利用する事を避ける者ではない。只だ普選の實行された曉、國民は最早や彼等に用事が無いだけの事である。

五　負ける者の幸ひ

そこで記者足下、僕は又繰返す、何が幸ひになるか分らぬ。今度の議會の解散と普選運動の失敗とは、國民の多數をして總

ての舊政黨、總ての舊政治家に愛憎を盡かし切らせた點に於いて、却つて大なる利益を生じた。

四年後か、或は存外（何等かの形勢の變化に依つて）それよりも早くか、いよ〳〵普選が實行される時、國民は最早や此の愛憎を盡かし切つた舊政黨の舊政治家を再び澤山に選擧するほど馬鹿ではあるまい。若し國民の多數が本統に覺醒して、全然無産階級の新人物ばかりを新議會に出すならば、其の効果は蓋し今年普選案が通過した以上であらう。

若し又、國民の多數が更に一歩を進めて、舊政黨と舊政治家とに愛憎を盡かし切つたと同じく、政治上の舊形式其者にも愛憎を盡かす樣な事があるなら、それは一層重大な意味を有するものである。

露西亞も獨逸も戰爭に負けて國内の根本的改革が行はれた。支那も日本に負けてから政治の改革をやつた。今後に於ける社會的改革、經濟的變革は、支那の方が日本よりも早いだらうと觀測されてゐる。それも色々な事に負けたお蔭である。何が幸ひになるか分らぬ。日本の無産階級は今のところ、負けるだけ負けて置くがいゝ。

新刊紹介

■最近社會思想の研究中卷　（革命的サンヂカリズムの研究前篇）（米田庄太郎著　本書は我思想界の權威たる京大講師たる氏が嚮きに公にせられたる最近思想に對する研究の續篇にして上卷と共もに氏の最も努力せられたる研究的産物である。上卷に於ては主として氏が經濟論叢其他專門雜誌に掲げられたる論文を組織的に集めたる一種の論文集なりしに比し、本書（中卷）に於ては上卷と趣を異にしまだ氏の發表せられざるサンヂカリズムに對する全然新らしき研究に成り從つて純然たる新著書である。從來革命的サンヂカリズムに就いては我國に於ても雜誌其他に於て屢々紹介され居れども、未だ之れを純學問的に論究せるは蓋し本書を以て最初のものとするのである。其研究の綿密詳細なる本書が六百頁に亙る廣汎なるものにも拘らず全部を其起源及發達を以て充して居るに見るも明かである。氏は本篇を中卷前篇として更らに後篇に於て其理論的基礎的の研究及其批判的考案を試み近く續刊する豫定であるとのことである、本研究にして完成されむか我學界の一大收穫であると共もに本邦唯一の新學參考書として必讀すべきものである（定價三圓五拾錢　京都市弘文堂發行）

■サボタージュ　（村島歸之著）經濟及社會叢書第五篇で川崎造船所怠業の眞相を秩序正しく記述した者で日本最初のサボタージュを知る上の好參考になる（定價七十五錢　神田錦町一ノ一[illegible]書店

■經濟學研究　（法學博士福田德三著）博士の著書たる經濟學研究乾坤二冊及續經濟學研究一冊を合本し經濟學研究とし前篇後篇の二卷に分てる通計二千二百餘頁の廣汎なるものにして、博士一流の朗々の文章を以て其蘊奥を披瀝せるもの（定價十二圓特價十圓　神田同文館發行）

婦人解放問題

女人文明の回復

賀川豐彥

"Das Ewig-Weibliche
Zieht uns hinan."

『無窮の女性は
我等を上に導く――』

ゲーテー『ファウスト』の末句

男人文明の墮落

男ばかりの、文明は、生存競爭の爲めに低下した飢餓の文明を意味する。凡ての過去の諸民族文明に於て、女性の地位を得なかつた文明は無い。然しその文明が經濟的に急迫を告げるか戰爭の爲めに軍國化するならばそれは段々低下して、淺間しくも子を產まざる、戀愛の無い、等な時代が出現するのである。民族が心理的に生理的に墮落して行くと、武勇と稱して女と戀愛と生產を輕蔑する時代がある。そして男色と、獨身生活と僧房生活が高調せられる。戰國時代に於て特に之が著しい。併し戰國時代に於て之が極端である爲めに、人々は之を罪惡視するが、多いか少ないか進化の迷路に迷ふた、民族文明には、この種類の墮落の無いものはない。

バビロン文明と女性

セミチック學者として、有名なセース博士は、バビロン文明の初期に於て、平和と豐饒が支配して居た時には、女性が非常に勢力があつたが、民族間の生存競爭が激しくなると共に、その美風は段々頽れて行つて、遂に女性は、家庭の薄暗き所につき込まれ、男性のみが威張る時代が來たと云ふことを歷史的に叙述して居る。(A. H. Sayce: Babylonians and Assyrians p. 13—43)

即ち同氏の說く所によると、バビロン文明は二種の文明──スミリアン文明と、セミチック文明──から成り立つて居るが、スミリアン文明は、女系を先に立て、男系を後にしたが、セミチック系統は、男系を尊ぶ傾向が有つたので、バビロン文明では常に男尊か、女尊かの爭ひが他え無かつたと云うて居る。然しバビロンに於ては主とし女系が勝利を得て居たので、女系の神イスタル Istar がバビロンに君臨して居たのである。所がイスタルの神も後にはセミチック民族のモアブ人の間に行つて、男神と化し、カンナ族に行くと、男性の女人化したものとして稱せられたのであつた。

何にしても、バビロンに於ては、最後まで女人の地位が非常に高く他人との賣買、契約、裁判所の證人、財產所有權をも持つて居たのである。(Sayce: Babylonians and Assyrians, P. 14) 處が、民族爭鬪が段々激しくなると共にこの風習は無くなつてしまつて、女性神は男性神と代り、男性のみが財產權讓政權を握つて、女は全く遺產に對し拋棄せねばならぬことになつたのである。

イエスラエルの歷史を見ても、アブラハムの如きバビロンを出たぬくいくの時代には、神を笑ひ得る様な勇氣ある女(アブラハムの妻サラ創世紀二十一ノ六)さへあつた。

併しヨシュアの時代になると凡てが男系の時代となり、微かに女子に民族の許可を得て遺產が保證せられることゝなり、更に下つては、女子の勢力は全く無くなつてしまつたのである。

エヂプトの女人文明

エヂプト文明は女人文明であつた。その宗教は女性に俟たなければならなかつた、財產相續權は女系によつた。王位の繼承も、女系によつた。王統は三十三王朝を代へたけれども女系によれる傳說的王統は絕え得なかつた。殊に黑人種のリビアン王朝以來、アメン・ラーの祭司長の官位は女性に與へられエヂプトは神に近づくに必ず、女性の手を經なければならなかつた。

エヂプトに於て、如何に女性が重ぜられたかは、男性の皇帝の禮拜より、女王の禮拜が遙かに早く發達し、且重ぜられたとによつて知れるのである。

女王ネフエルタリ (Nefertari) は女神として、否、活神として、禮拜せられた第一人者であつた。そして彼女の死後、彼女を崇めるものは、アメン・ムツト・コンスュの諸神と共に天にまで擧げられ、シーブスの三神と同格の神になつたと信じた。そし

てこの女王の禮拜は、六百年間繼續せられたのであつた。その他、女王の位置が如何に高かつたかはエヂプト宗教史に特筆大書すべきアメン・ホテプ四世 Amen-Hotep IV の母サイ Thiy の事業を見てもよくわかる。この婦人はエヂプト文化に自然主義を注入した、偉婦であつて、藝術、科學の保護者となり、當時惡風となつて居た兄弟間の血族結婚を排斥し、宗教には、自由主義を取り、社會的に、政治的に非常に進んだ設置をしたのであつた。その他、エヂプトの女王達にして、エヂプト文化に貢獻したものは二人や三人ではない歷代の王朝に、女性の活躍しなかつたことは無い。ペトリー Petrry の『エヂプトの女王 "Queens of Egypt"』と云ふ書物は小さい書物であるけれどもよくエヂプトの女人文明を說明してくれる。

然し不幸にして、エヂプトも民族爭鬪と貧富の懸隔の大きくなつた爲めに、女人文明を永續せしめることが出來なかつた。それは辛じて女神イシスを通じて、希臘羅馬文明に他少貢獻するに止つた。

希臘文化と女性の位置

希臘宗教の研究者として第一人者と考へられて居るオックスフード大學の婦人教授ミス・ゼーン・ハリソン Miss Jean Harrison の希臘宗教史の結論とセース博士のバビロン文明の研究の結果が相似て居るから面白い。

卽ち、ハリソン女史も古代希臘の文化は最初は非常に、婦人を重く見たが段々民族爭鬪が激しくなり、經濟的混亂が來ると共に女性の地位が低下して行つたと云ふのである。そして、女性の重ぜられる民族と、男性を重ずる民族が互に抱擁したのが、希臘民族であつて、南から來たものは女性を重ずるイオニック族で、北から來たのは男性的なドリアン民族であつたのだ。

ミケネとチリンスの時代にはまだ、女性神が勢力を持つて居るので、多く發掘せられるものは多く、女性神である。然しオリンピアの十二神座では、女神は僅かにその半分であつて、ヘラ Hera（自然界の大女神）アテナ Athena（ヂュウスの娘文化と藝術の保護者）アルテミス Artemis（月の女神）アプロデイト Aphrodite（美と戀の女神）ヘスチア Hestia（家庭の女神）デメテル Demeter（收獲の女神）が、他の六男神 Zeus, Posidon, Apollo, Ares, Haphaestus, Hermes と相對立して居る。

希臘宗教史家の間に議論があるけれども、兎に角女性が地位

を得て居たことは之を見てもわかるのである。併し希臘に於ても生存競爭の程度が激烈となると共に婦人の地位は段々蔭の方に追ひやられて、男子のみに勢力が移るようになつたのである。そして希臘の共和時代には女詩人もあれば女勇士もあり、ユリピデスや、プルタークの書いて居る所を見ると、女は自由に青年と交り、輕い自由な衣裳を纏ひ活潑に徒歩競爭なども青年と一緒にし、美しい文化の大勢力として、社會に地位を得て居たものである。その最も善き證據は、今日優れた女の塑像が多く發掘されることを見ても理解される。今日何處の國民が古代ギリシヤの様に優れて美しい女を持つて居たであらうか？「ホーマー」の詩の中に出てくるヘレナにしても、ユシリスの妻にしても、ヘクターの妻にしても皆實に立派な婦人である。併しこんな型を持つて居た希臘文明も、紀元前二世紀頃になると暗い影に追ひやられることになつたのである。

ケルトの女性文化とその感化

然し世界始つてからケルト族程女性を大事にして來た民族は無いであらう。先に云つた通り、ギリシヤ民族に女の尊ぶ可きを敎へたのはケルト族の感化であらうと云はれる位であるが、小亞細亞に起つた紀元前二、三世紀頃の諸宗教が多くは女性神であると云ふことはまた特別に注意す可きものであると共にケルト民族の感化であることも知つておかねばならぬ。小亞細亞の諸市の守護神が希臘に眞似て女性神で行つたことは注意を引くが、Cybele の如き殆ど全亞細亞的に擴まる程の勢力を持つて居たものがまた女性だと云ふのであるから特に注意を要するのである。

そしてこの小亞細亞に住んで居たセルチツク民族が、キリスト敎そのものまでも改造して、處女禮拜を興さしめたと云ふことは注意す可きことである。アジアの希臘的亞細亞宗教には、先に述べた通り女性に對する特別の尊敬があつて、ゼニタズ、(Genitas) と稱して處女禮拜の中心的偶像までも編み出したが、之はまた母性をも表象した。そしてこの様に女性を崇拜する處へキリスト敎が來たとてそれが勝利を得ることは不可能であつた。それで遂にはこの處女禮拜精神が、マリア禮拜として基督敎會の中にまで復活することになつたのである。之は小亞細亞文明の研究者として知られたる蘇國アベルチーン大學のサー・ウイリアム・ラムゼー博士の研究であつて、研究としては實に面白いものであり、また文明史の解釋上に有益な報告であ

る (Sir William Ramsay: Pauline and Other Studies, 及 Cities of St. Paul 參照)

即ち、キリスト教會に處女禮拜を教へたのは、亞細亞のセルチック民族であることが判明したが。更に、アイルランドの古代宗教や、フランスの古代宗教即ち一般に、セルチック民族の古代宗教を研究して見ると、凡て女性中心の宗教が出てくるのである。

之を以つて、私は、セルチック族は、その原始に於て、女性中心の幸福なる民族組織を持つて居たと云ふことを知るのである。そして之が今日猶ラチン民族が、キリスト教としても猶、マリア中心の宗教を擁して居る理由であると思へば、私は民族心理が宗教の上に及ぼす影響の大なるを思はざるを得ないのである。

古代女人文明の解釋

私は以上に於て、バビロン、エヂプト、ギリシヤ、ケルトの諸古代文明が凡て女人文明であつたことを說明した。併しこの外に女人中心の文明のあつたのは以上述べた四つだけには限ら無い。南アメリカのペルーのインカス文明も女人中心の文明であつたことは、其女性神の發達を見てもよくわかつて居る。『日本の最初の女は太陽であつたと平塚明子女史が叫ばれる』日本の民族の主神天照大御神が女性であつたことなども忘れ易いことであるが、文明の曙光に必ず女性が居たことは注意すべきことである。

それで問題はこの歴史上の事實から出發して、古代の女人文明をどう見るかと云ふことである。野蠻人の間にどんな風習が殘つて居るとか、家庭の進化は亂婚、群婚多婚を通じて發達して來たとか云ふ假說ばかりの上にこの解釋をすることは、餘りに眞理を踏み付けたことである。

私は寧ろ歴史だけに現れて居る明白な事實で、女人文明の解釋をしたい、そして文明の曙に於て女性が勢力を持つて居たことは爭ふ可らざる事實である。紐育博物館長ヘンリー・フラワー・オスボルンはその名著『石器時代の人類』に就て詳しい研究をして居るが、石器時代の偶像及藝術品の中に多くの女性神とも見る可きものを發見して居るのである。(H. F. Osborn: Men of Stone Ages, P., 321—332) 藝術や偶像の出現は石器時代でも比較的新らしい時代に屬するものであるが、兎に角、歐洲の石器時代の或時期に達して、女性の勢力が著しく發達し

た時代があると見ねばならぬのである。……その前には、オスボルンの記述などによつても、餘り女性は勢力を得なかつたであらうが……生殖と民族の成長が重ぜられるやうになつて女性の權威は一層有史文明の初期に於ては女の地位は確立して居たものと見ねばならぬのである。それが、生存競爭が激しくなり、强力と武力が必要になると共に、父長制度が現れて、女性と母權とは遠く蔭の方に追ひやられたと考へなければならないのである。

然らば文明の初期に於て何故如斯女性が勢力を得たか、何故母權がそんなに發達したか？ 之は、生物學的に考へるならば最もよくわかる。民族を中心として考へるならば蟻の社會でも蜂の社會でもみな母系社會である。男性は民族の附錄のやうなものである。そして母體は最も優れた種族を後世に殘して行く爲めに、最大の努力をするのである。即ち、個人としては無く、大きな民族を基礎として考へる時に、母性が最も貴重なものとなるのである。それで、地理學的に分布した各種の民族が相互に接觸することなくしてその民族の殷盛のみを計り得るとするならばそれは、凡ての生物が取つて居る方面と同一の方向即ち母性中心の社會を産み出すのである。民族間の生存競爭が激しく無い時代に母系社會が文明史の一時期を劃して居たのは全くこの爲めである。

生物學的に見たる母性の進化

動物の進化から云つても、母性の進化して居るもの程、高等動物であると云ふことが出來ると共に、更に、母性を進化させることが生存競爭に最も强いものであると云ふことが出來るのである。

日本に於てはクロパトキンの相互扶助論が非常に力を得て居る爲めに、相互扶助の本能より更に根深く生物の生活意志の根底に横はつて居る母性愛の進化に就ての研究が粗かにされて居る。併しダアヴヰンの云ふやうな個性的生存競爭の外に、種族としては、著しい母性愛の進化と云ふものがあるのである。それでもし、母性の愛と進化が無ければ、その種族は疾の昔に滅亡したものが多くある筈である。之に就て最も深く研究したのは『人類上進論』"Ascent of Man" を書いた、ヘンリー・ドラモンド Henry Drammond であつた。（Ascent of Man はダアウヰンの "Descent of Man" この逆倒言詞でもぢらしたのである）

彼が「人類上進論」を著く前に彼はアフリカ探検に出かけて如何に、白蟻の母が子供の爲めに巣の中で苦勞して遂には倒れるもの或は十年間も暗黒から出ることも無く次の種族の爲めに保護の任に當ることなどを見て、母性の進化に全く驚嘆して歸つて來たのである。そして、そのアフリカ探検を基礎として、母性愛の進化の上に、彼の學説を立てたのであつた。

併し最近の胎生學と、比較解剖學とは母性の進化が種族進化の最大要素であると云ふことを敎へてくれたのであつた。胎生學(エンブリオロヂー)から敎へられたことはゾナ・レヂアタ Zona Radiata の進化である。一つの精虫を守るにしても鳩の様な鳥類であれば僅かの細胞であるが、鼠のような哺乳動物であれば、之が多く増加し人間であれば、數多の細胞の番兵に守られて、生殖線から出てくるのである。

哺乳動物の胎盤の進化を見ても、私は母性進化の不可思議なるを思はさるを得ないのである。カンガルー類のやうな有袋類 Marsupial であれば、胎盤も何にも無い計りに、子宮の內壁が殆ど胎盤と同じ様な、作用をするのであるが、第二の進化した形即ち豚や、駱駝であるとプラセンタ・デフユサア Placenta Diffusa と稱して、カンガルーのものより一寸と進化しただけのものである。それが羊のやうなものになると、第三期の進化した胎盤が出來て Cotyledonary Placenta と云ふ、兩棲類の鼬(いたち)のような胎盤が發生し、殊に進化して、食肉類となると、帶のやうな胎盤が出來る。之が哺乳動物の第四期の胎盤進化である。之を Placenta Zonara と云ふ。

人類に於ては、胎盤が最も發達し、胎兒の營養が最も完全に行はれるように、第五期の進化を遂げて居る。之を比較解剖學の方では Discord Placenta と云うて居るが、上に述べて來たような、哺乳動物の胎盤の進化の五期を通じて、母性の進化は層一層著しくなつて居るのである。かう云ふ風であるから胎盤の進化から云うても、母性の進化は明かな事實であるが、更に之が心理的進化になれば、人類に於てはとても他の動物に見ることの出來ない、保育上の母性の進化がある。

アンリ・フアブルの研究などを見ると昆虫間に母性の犠牲とその任務の絶大であることは話にならない程であるが、哺乳動物などになると、それは生理的に、本能的に心理的に、道德的に益々大きくなつて來たのである。

かく母性の進化を生物學的に考察することによつて、母系社會の確立なるものは、父系社會の文明に比較して、下等で有つ

たと云ふことは決して無いのであつて、寧ろ、それは充分進化し得べき、民族的偉大性を貯藏した時代であつたのである。が不幸にして、民族間に派爭が起り、生存競爭が激烈となつて民族中心の社會は流れて、個人本位の社會が出現するに及んで、母性愛の社會は何處へか消えて無くなつてしまつたのである。

個性文明と母性文明

私は、個性中心の社會を決して下等な文明であるとは云は無い。併しそれは最上の文明では無い。トルストイは個性が完成して民族の凡てが、生殖欲を抑壓し得るならば、それで、人類の使命は終つたのであるから、生殖は必しも必要で無いと云うて居るが、個性主義から出た文明であれば、かう決論することは最も徹底的な行き方である。併し社會としては、個性の完成は全人類が責任を持つて居るのであつて、生殖欲の無くなつた時にその人類が、全滅するに遂ひ無いが、それで、人類が進化の絶頂に達したと云ふことは出來ないのである。で、彼が完成し得なかつた事業は、次の代のものが完成せなければならぬ。そして相繼承する中に、人類は更に進化の縄梯子を見付けて、攀ぢ上る可き階梯を更に昇るであらう。即ち、成長と云ひ、進化と云ふものは個性以上に延び上れ無いものでは無くて、(個性には死があり老衰がある)永遠の若さを持つ民族意志を以つて攀ぢ上ることの出來るものである。そしてそこに初めて、母性の任務と云ふものを考へるのである。

近代に於ける民族意志の復歸

然らば何故、近代に於て民族意志が特に八釜敷く云はれるかと云へば、それは全く産業組織、政治組織が段々、相互扶助の範圍を擴大して行つて國民經濟の樹立と共に、民族的に凡てのことが行動されるようになつてからである。

即ち今日の社會に於ては、所謂純粹の個人主義と云ふものは全く成立し得ないものであつて、個人の實在は全く國民經濟の樹立と共に安全になつたものである。で、今日、民衆を離れて個性を主張し得るものは全く無くなつた。田園に於てはトルストイのやうに個性を主張し得ようが(自足經濟であるから——トルストイは自分の靴も自分手に作つた)工場と都會に於てはそれは全く不可能なことである。

即ち近代に於て、社會意志は、古代女性文明と違つた意味で歸つて來た。昔の時代を社會學者(例へばギデングスの如

き）は、人種的社會と云ひ、後の時代を社會的と云うて居る。先の時代は生理的であつて、後の時代は心理的であると云ふ意味である。何しても集團生活に復歸したとだけは事實である。

そこで、集團生活が歸つてくれば、第一に問題になることは相互扶助と愛の問題であり、一面にはその實質の變革を要する必要上優種の問題となり、戀愛となり母性保護の問題となるのである。

即ち之が、社會主義に於て、常にパンの問題と、自由戀愛の問題を離して考へざる理由である。

パンと戀愛

今日の社會に於て、パンに飢えて居るものも多くはあるが、戀愛に飢えて居る人の數が更にそれ以上であるかも知れぬ。民衆が唯物的になつた爲めに金で貞操が賣買されるようになつてからは、眞正の戀愛と云ふものは、世界に見られ無くなつたのである。そこで我等が、今日最も必要として居る處は、この唯物的な戀愛の悲劇より、眞正なそして唯心的な（そう云へば肉を捨てると云ふやうに聞えるが、そうでは無い、肉體と意志が時間的又心理的に活躍することを私は假りに言葉が無いから唯心的と云ふのである。客觀的なそして唯物的なものとの對照によいからである）ものとして取り返さなければならないのである。

凡ての生物界の現象として明かである如く、パンの多い時には戀愛は自由となり、動物は比較的多產である。蝌蚪などでも、まだ男性、女性が決定して居らぬ時に、食物の量が多ければ、女性が增加し食物が少なければ男性が增加すると云ふ實驗があるが、蜜蜂の或種類にも、秋期には蜜が無いから生殖線の無い中性の蜜蜂のみを產み、春期には花と蜜が澤山あるから生殖線を多く產むと云ふ、マルサスの人口論を本能的調節を以つて實施して居るものがある。この事實は、人類にも行はれて居ることであつて、食物の多くある時には結婚が多く行はれて居るので、ウエステルマルクの如きも、昔は人類にも猿類と同じ樣に交尾期が一定して居つて、收穫期前後に最も子を多く產んだと云うて居る。今日でも、各國の出產統計を調査して見ると、人間の最も子を多く產むのは春先である。即ち二三月頃より夏の始めにかけてが最も子を多く產むのである。吳文聰氏も嘗て『人性』に日本の統計によつて之を指摘して居られたことを記憶して居る。

そして、人口の增加率も食物の增加と常に比例して增加して居るものである。即ちこの裏面にはパンと戀愛の相平行して行くことを私は見るのである。即ち近世になつて、機械文明が發達し、自然の力にのみ賴ら無くて、人間の能力に信賴して充分食物供給の一定量が補給し得ると云ふことが決定してから世界列國に於ける人口の增加は實に著しいものである。この人口の增加は明かに戀愛の機會が多くなつたことを意味して居るのである。

戀愛の商業化と戀愛至上主義

併しこんなに考へ得る一面に於て、資本の集中と、全力による階級制度の出現の爲めに、結婚制度が全力化したことも爭ふことの出來ない事實である。その爲めに公娼制度が商業化し、色情の販賣者とその購買者が現れて來たことも事實である。そしてこの眞正なる、戀愛を離れての、色情業者には生理的に生殖能力が全く缺けてくると云ふのも、また自然的に不思議なことである。

上村行彰氏などの研究によれば大阪の娼妓は千に對して八人乃至十五人しか子を產まぬそうである。京都大學の博士松下禎二氏の研究によれば、犬などにもこの娼妓の不姙と同一の實驗が出來ると云ふことである。即ち色情のみを欲求する人種が此處に、假りにありとしても、その人種は直に、自滅して了はねばならないと云ふのが、自然の理法である。即ち、戀愛と云ひ色情と云ふものはたゞ獨立した本能では無くして、それが人種保存と云ふ大きな事業を基礎として始めて、意義のあるものであつて、近世の分化的人類の心理には、戀愛と生殖とを全々分離して考へる傾向があるけれども、それは全く不徹底な話であつて、戀愛の發生したのはショペンハウエルの云ふ通り、人種保存が個性の活動の中の一大部分であるが爲めに强烈な趣味をつけ無ければ、個性がその任務を果さ無いからである。

それでもしも戀愛至上主義が、人種保存の欲求と分離し得る時がありとするならばそれは、社會組織上に著しい缺陷がある時代であつて、その戀愛は變性の戀愛である。ところが今日では、この變性の戀愛の方が多くて戀愛と生殖とが全く分離して居るのである。そしてこの分離して居る理由は、パンと社會と戀愛との隔離があるからである。それでいくら戀愛至上主義のものがあつたにしても、それが眞正の戀愛である以上は、必ずや、人間生產に關する事實までも必ず感情の中に入れて居るも

のである。即ちそれが眞正なればなる程、生活の全條件が灼熱的に還入つて、來るのである。つまり此處に戀愛せんとする、ものが花柳病患者であるとする。その場合に眞に戀せんとするものなれば、彼れは花柳病を以つて處女に接する勇氣は無いだらうし、處女も亦眞正の戀を彼に向つて起し得るかは頗る疑問である。花柳病者でも、肺病患者でも、戀愛する權利は充分持つて居る。然し病を移す權利は何人も持つて居ら無い。勿論肺病患者との戀が成立して、死をも覺悟して戀をすると云ふことはあり得ることである。然しこれは實に詩人と劇曲家に趣味のあることとで、生命の本流から湧いて來た戀愛では無い。戀愛は不死を意味して居る。それで法律を作つて花柳病患者に戀すべからずと云うても無効であるが、凡ての戀人が病氣を通じて情死する必要は無いのである。もし、情死を以つて、戀愛の極致だと奬勵するものがありとすれば、次の代には、戀愛そのものすら無くなつて了ふであらう。——人間は死ぬ爲めに戀せねばならぬのであるから。

で、戀愛は女の生命であると云はれて居るが、戀愛の自由は全くパンと社會性によつて束縛せられて居る。それで、先づパン問題を解決し無ければ戀愛問題も、職業問題も解決し得るものでは無い。

即ち、社會改造の根底には、生存權と戀愛權との二つが横たはつて居る。そしてパン問題は、刻下の問題であるが、戀愛問題は未來永遠の問題であり民族進化に關する大問題である。處が先に述べた通り、今日では、資本主義經濟の惡傾向を受けて、戀愛生活は極度にまで墮落し、殆ど凡ての結婚が金本位となり、資本家の令孃の結婚の如きは殆ど、手形の交換のやうなものとなつたのである。

それで、今日の戀愛の墮落を救濟する第一歩は經濟生活そのものゝ根本的改造にある。

婦人解放と婦人職業問題

經濟的獨立が無ければ、婦人の貞操の獨立が無いと云ふ、ことは既に説いた。そこで問題になるのは、婦人は個人として、獨立した生計を立つ可きか、それとも出産と保育をもその職業の中に入る可きかと云ふことである。之に就て批評する場合に私は出來るだけ獨斷を避けたい。私は之を傾向的に批評したい。

今日に至るまで、女は擁護せられて來た。『弱きものよ、汝の名は女なり』"Frailty, thy name is woman!" と西洋で

も云はれて來た。日本では高野の山にさへ登れ無かつた。そして女の職業は凡て家族的か家内工業的か又は農園の手傳ひ位いに限られて、男子の厄介物として取扱はれて來た。そして、生産の中でも最も優れた人間の生産に從事することが、一種の動物的作業であつて、穢れたるものゝ從事することであるかの樣に輕蔑されて來た。之は人間としは誤れるものであるにせよ、我等の先祖がその宗教觀念からさう考へて來たものである。

然し之は先にも述べた通りに、生産(リプロダクシヨン)と云ふものが如何に尊く如何に神聖なものであるかと云ふことを考へない時代の素朴的の哲學的觀念に支配されたものであつて、佛教が『生を迷夢だ』とその當時の社會經濟組織に感化せられて考へたものが、今度は哲學系統として結晶し支那日本などに這入つて、來た時に矢張りその哲學思想に共鳴するものが有つて、『生は迷夢だ』と考へたものだから、佛教に於ては凡て人間生産(リプロダクシヨン)に從事する女を下等なるものの中の最も下等なものとして考へざるを得なくなつたのである。

この傾向はたゞに佛教の樣な哲學組織を持たない所で、生を肯定する宗教のあるマホメツト敎國、基督敎國に於ても、生存競爭の激烈と、パンが急迫して來る時に、誤れる哲學が時々に現れて、厭世的な思想を流布する爲めに、保育と生産に全精力を奪はれて居る女性を無智と罵り、無能と侮る文學者も哲人も多く出て來たのである。

不幸にして、女性は『第二の國民』の爲めにより多く勞し、個性より民族に、現代より未來に生き無くてはならなかつた爲めに民族と未來と進化に理解の無かつた、人々は中世紀の宗教と、生存競爭の激しい地方から出て來た佛教の樣な宗教思想を信じて、女性に對する尊敬を根本的に喪失させたものである。

併し女子とても、生産(リプロダクシヨン)を捨てゝ、中性を取り、男子と共に勞働をし、個性のみを發達させることになれば、必しも男子に劣るものでは無い。それは近世の機械工業に於ける女子勞働作業に於て證明された。

女子と機械文明

機械文明が出來てから、今頃適當な職業の無かつた女子に職業が與へられることになつた。そして女子勞働問題は二重の意味を持つことになつた。

一、機械は纖弱勞働者を要求した。

二、婦人は無報酬の家庭勞働より解放されて賃銀奴隷となつ

た。

三、資本主義は之によつて、利する工夫を覺えた。

卽ち機械が來るまで、婦人の勞働は主として、家庭中心であつた。それでその勞働は無償であつた。そして生活は男子が保證した。そして、女子の勞働は民族保存の爲めに必要な勞働ではなかつたが、男子はそれに就て感謝するとを知ら無かつた。寧ろ家族のある爲めに、生活の急迫を常に訴へた。そこへ機械が來た。そして、女工の使用を初めた。それで、今迄無償の勞働をして居た婦人は、男子の如く有償で無くても善い。生活費全部を貰は無くても、善い。小使錢取りの積りで工場に出かけた。それで、資本主義は「人間動力」の善い鑛床を見つけた。そして女工は激增し日本に於ける如く、工場勞働者百三十萬人中八十五萬人は女工だと云はれる時代が來た。そして紡績女工の七割五分は十五才より十七才であると云ふ時代が來た。が、矢張り資本家は、その勞働に對して、男子だけは仕拂は無い。家庭で無償で勞働して居たものを使用する積で今でも僅かばかりの賃銀を支拂ふのである。

そこで國際勞働會議に於ける如く男女の同一質の勞働に對して、平等の賃銀が支拂はる可きものであると云ふことの正當なる要求が起つて來たのである。

如斯して、女子は凡て職業的に社會へ出て來ることになつたのであるが、英國の戰時女子勞働作業の如きは、極端に女子の有能なることを社會に證明したのである。然し此處で問題になるのは、女子が凡て家庭を捨て、中性蟻や中性蜂の如く、勞働にのみ從事する樣になつても民族的生產に影響が無いかと云ふことである。

今迄、パンに窮して居た勞働者の家庭に、多少なりとも小使錢だけでも這入るようになつて少しの助けにはなりはしたらうが、資本家がそれによつて不勞所得を增加することを覺えた時に、それは却つて貧民の家庭には災厄となつたのである。子持婦人の數時間勞働する家庭では、嬰兒の死亡率が增加し流產し、死產すると云ふ傾向を現して來た。英國スターホードサイアーのリード氏が、一九〇八年、母及寡婦の就動することの多い都會に於て嬰兒死亡率が高いと云ふことを報告して居る。

妻及寡婦の就働人口分率	調査部市數	乳兒死亡千分率
二二%以上	五	一八五
一二%—六%	一三	一五三
六%以下	八	一四〇

これを見ると、結婚した婦人が、他の町に比較して二倍以上就働する都市に於ては、乳兒死亡率が、約三割以上多いと云ふことが表示されて居るのである。（拙著精神運動社會運動五一三頁參照）その他東京市、大阪市に於ても勞働者の住宅區域に於て、死産と流産が然らざる地域の約二倍であると云ふことの報告は、矢張勞働婦人の苦痛を敎へて居るのである。

そこで、婦人が經濟的に獨立すると云ふことは、結婚するまでならば、なんでも無いことであるが、結婚して後に、人間生産と、物價生産とを共に並行させんとするならば、實に困難な問題に出會すのである。然し、戀愛の自由の爲めに職業的に獨立せねばならぬとすれば、それはどうしても、母性として勞働せねばならぬのである。そこで更に新しい問題が發生する。

母性保護と社會問題

即ちそれは、母性に向つて特別の保護を加へる必要があると云ふことである。そして之が、第一回萬國勞働會議で、姙婦保護の社會立法が成立した理由である。

母性の問題は、たゞ家庭だけの小さい問題では無い。それは民族の問題であり、社會の永續性の問題である。それで母性を保護することは社會の仕事である。即ち、この點から云ふならば、戀愛の自由と、母性の保護との問題は、たゞそれが個人の經濟的獨立によつて保護せられるばかりでなしに、（孤立的な自足經濟によつて、獨立が保證されるので無くして）社會經濟即ち、社會連帶の經濟組織によつて、その經濟獨立の保證を與へられなければならぬことになるのである。

私は、戀愛の自由が社會經濟によつて保證される必要があると云ふことを說く爲めに隨分廻り道をして來たが、自由社會——愛と相互扶助と母體進化を基礎とする——を産む爲めにはそれはどうしても、自由なる戀愛を基礎とせねばならぬが、既に戀愛が、社會の爲めであり、未來に於て社會の所有に屬するものを生産するものである以上、それは社會がその責任に任ぜねばならぬ。戀愛が社會に屬するものである以上、それは、社會經濟によつて保證すべきものである。今日の不完全な家庭經濟（その多くは資本主義的）より解放されて、新しき社會に浮び出無くてはならないのである。即ち之が一部の論者に「家庭破壞論」となつて現れるのであるが、私は、家庭經濟より解放されるならば問題は無いと思ふのである。之を見ても戀愛の自由から云うても社會改造は已み難き要求であらねばならぬ。即

ち、戀愛の自由と、母權の回復の爲めに今日の不安な、個人主義的經濟組織に於てその獨立を計ることは、とても不可能なことであるから、どうしても、社會化されたる經濟組織に移らねばならぬのである。

今日の經濟組織に於て、父權さへ保護されて居ら無いのである。況や母權をやである。今日の資本主義經濟は餘剩價値の發生と、不勞所得の計算とに餘念が無いから、とても人間のことなど考へて居れないのである。そこで我等は、戀愛の自由と女人解放を說く前に、經濟組織の改造を叫ぶのである。それでもし社會が戀愛と母性を保護し得る經濟組織が來るならば、その時に女として人間生産をすることが物質生産の爲めでは無くして、偉大なる事業の一つであることが充分理解されることゝ思ふのである。即ち、生存權と勞働全酬權が社會立法に依つて保證せられる時代が、母權が社會的に確立する時代であつて、その時に初めて、戀愛の自由と女人の解放が保證せられるのである。

新らしき女人文明の歡喜

かく考へると、古き時代の女人文明は民族的であり、生理的であつたが、新しき時代の女人文明は、社會的であり、意識的である。そこで問題となるのは、新しき女人文明に於て、女子は、戀愛と人間生産の外にたゞ一個の人間として、どれだけの文化的價値を加へるかと云ふ問題である。

そしてすぐ云はれることは、體力に於ても腦力に於ても、女子が男子に劣つて居るから女子は全く駄目だと云ふことである。腦力の差違は色々の人が測定して居る。表に示すと次の樣なものである。

測定者	男	女	差
ワグオー	一四一〇	一二六二	一四八
フシユケ	一四二四	一二七二	一五二
ブロカ	一三六五	一二一一	一五四
トピナアド	一三六〇	一二五〇	一一〇
ビシユコフ	一三六二	一二一九	一四三
ボイド	一三五四	一二二一	一三三
マヌヴリール	一三五三	一二二五	一二八
合計	一三七六	一二三七	一三九

即ち生理學の專門家七人が測定したものを平均すると女子の腦は男子に比較して一三九グラム少ないのであるが、併し、も

しも身長と體重と腦の比例を取るならば、女の方が却つて男子に勝るようになるのである。(Prof. Carl Kesley: The physicalbasis of society, P. 321 參照) 併しもしも、腦の發達で文明の高下を説くならば、アフリカの黒人は千三百グラム、日本人は千三百五十六グラム、歐洲人は千四百グラムであるから、日本人の文明は歐洲人の文明に、四十四グラム劣り、黒人文明の文明は百グラムだけ劣り、歐洲の女子は黒人よりも更に六十三グラム劣つて居る故に、それだけ黒人文明より劣つて居るとせねばならぬ。

併し腦の重量は永遠に不變的なものでは無い。エヂプト人の腦量は昔より今日の方が遙かに劣り、巴里人の腦量は七世紀前より約三十五立方糎だけ頭蓋骨の容量を増加して居ると云ふことである。それで女子の腦量が少ないとしても、それは使用することによつて増加することが出來るのである。

併し今日に於ても、女子の腦力が男子より劣つて居ると云ふ證據は少しも無い、それは全く教育の程度によるのである。今日米國の中等學校に於て、婦人の成績は男子の成績より善いのである。之は全く教育の力でさうなるのである。

或人は云ふ女子に天才が少ないと、併し女子に男子の間にある様な犯罪と痴呆が非常に少ないのである。卽ち女子は中庸を守つて來たのである。そしてたとひ女子に天才が少ないとしても、天才を産んだことは事實である。イエス・キリストでも、釋迦でもプラトーでも皆女の腹を借りたのである。それで女が下等だと云ふ理由にはならない。また或人は女子に藝術的創作が少ないと云ふ。併し私に云はせれば、「人間生産」の様な、立派な藝術的創作が出來ればそれで善いのである。

誠に我等が女人文明に期待する所のものは、この人間生産であり、人間建築である。飢餓と生存競爭の文明は、恐怖と、石塊の天才を招いて、血の通はざる藝術を創造すべきことを要求したが、新しく女人がその戀と母性愛によつて、世界に回復してくれる藝術は、人間建築そのものである。卽ち戰爭と略奪の藝術は、猛獸のような人間の、貪ることのみを知つて居る人々の銅像を街頭に立てた。そして之が、藝術だとして樂しまれた。展覽會にも、博覽會にも凡てその不安な非人間性が美と眞理の標準と成つた。この爲めに永遠の平和と、人間建築の欣びは、永劫に忘れられ、之を説くものは罵しられた。

併し私は、女人文明の再び復歸することを待つものである。私は、私等の母が社會を治めることを要求する。卽ち私は婦人

參政權を要求する。男性のみの文明は失敗で有つたでは無いか？　それは飢餓と飢饉と殺戮と、廢滅と、遊廓と、飲酒と大戰爭と不道德をのみ與へたでは無いか？

私はこの上、男人のみの文明を信用することが出來ない。もし私等の母達が社會を支配するとするならば、今日の戰爭が可能であらうか？　自分が產んだ子供等を互に殺し食ふことを母が要求するであらうか？　人間生產を本位とし、人間建築を目的とする文明では、それは許され無い。母としての立法の第一は平和である萬國的平和である。此意味に於て私は、世界の母が猛然立ち上つて、その子等が互に殺戮せさるが爲めに、政權を要求して貰ひたひのである。

母として妻として、また女として……そしてまた最も人間らしい人間として、女が政治に宗教に、科學に、藝術に、經濟に復歸してくれるとは喜ばしいとである。愛と平和の支配せざる文明は何の役にも立た無い。二十世紀は、女が文明に歸つて來てくれる時代である。今や失はれて居た光明が再び社會に歸つて來てくれる時代である。天の巖戸が再び我等の爲に開くのである。我等は靜に其光のさしてくるのを待つ。無窮の女性は、常に我等の文明を上に高く導くものである。（一九二〇年二月）

現代生活と男女兩性の接近

文學博士　野上俊夫

一、極めて重大なる問題

婦人問題は勞働問題と相並んで今後の世界が至急に何とか解決せざるべからざる大問題である。而して其範圍の廣汎なると關係の複雜なるとの點より之れを見れば、婦人問題は勞働問題よりも數等の重要の度を加へて居るものといはねばならぬ。即ちその範圍よりいへば實に全世界の人口の半數即ち八億餘の人々に關係するとであり、又その考究せらるべき問題の種類性質から云つても、單に賃銀とか勞働時間とか待遇とかいふやうな

比較的に明白に枚擧し得べき比較的少數の問題なるに止らずして、殆ど一々數へ盡すことの出來ない多數の問題が含まれて居るのである。

婦人問題が人の注意を比較的に明白に惹くやうになつたのは先づ第十九世紀の後半、英國に於いて婦人參政權運動の起つた頃から始まるのであらうが、それが廣く社會全般の人々の心を動かし、成る可く急速に解決せざる可からざる重大問題として人心に迫り來るやうになつたのは、云ふまでも無く今回の世界大戰の影響であつて、交戰諸國の婦人が殆ど全部の男子の出征したる後を引き受けて、如何に大なる働きをなし、男子をして毫も後顧の憂なからしめたかは、萬人周知の事實であり、隨つて其の爲めに人々は始めて婦人の力の案外に偉大なることを痛切に感じて、之れに對する報酬又は感謝として、從來男子のみの專有し來つた幾多の特權を與ふるに至り、多くの職業に女子の入ることを許し、女子をして男子と同等の敎育を受けることを得しめ、或は諸方の國々に於いて極めて困難なる問題として人々の頭腦を惱まして居た參政權をさへも容易に婦人に與へるやうになり、婦人の代議士も今はあまり珍らしからざるに至つた。

我が國に於いても亦この世界の風潮に動かされて、最近數年來此の問題の重要なることが次第に世間一般から認めらるゝに至り、殊に昨年の後半から其の實際運動の第一歩として婦人の集會が諸處に催さるゝに至り、志を同じうせる婦人が相會して互に切磋琢磨すると共に、一方に於いては社會に對する婦人の要望を發展することが盛に行はるゝやうになつた。これは廣く我が國文運の進歩の上にも極めて重要なる時期を劃するものであつて、誠に慶賀すべきことゝいはねばならぬ。

二、根本的省察を欠く

たゞ今日の婦人問題を論ずる人の多くは、まだ其の研究乃至議論の充分に熟せない點の少からざる結果、動もすると頗る皮相的な一時的な考へに走つて、根本的な永久的な點の省察に缺けることの少からざるやうに見えるのは、一方から已むを得ない點もあるであらうが、亦極めて遺憾なりといふべきである。殊に我が國に於ける婦人問題の論議が此の點に於いて最も缺けたる所が多いやうに思はれる。

勞働者が自己の力量知識を自覺して、從來の資本家の自己に對する態度の極めて不公平乃至慘酷なりしことを知り、資本家の專横に反抗して自己の權利を主張せんとすることが、今日の

勞働問題の重大なる動機を形づくつて居る如くに、今日の婦人問題の最重要なる動機は、婦人が自己の知能を自覺して、在來の男子が自己に對して頗る専恣慘虐なりしことを憤り、之に對して反抗し、男子と同等の社會的地位乃至權力を得んとするに在る。隨つて今日の婦人問題に對する論議は殆ど皆從來の男女間の區別として敎へられた多くの事柄が誤りなることを力說し女子も亦男子と殆ど有らゆる點に於いて同じものであることを證明し、殆ど有らゆる點に於いて同じ權力を得んと努力して居るやうに見受けらるゝ。即ち先づ第一に女子は其精神作用、就中知力に於いて男子と何等差異なきことを主張し、若し現在に於いて差異ありとすれば、それは從來の境遇乃至敎育の罪なりしことを證明し、隨つて第二には將來は男子と同樣なる敎育殊に高等敎育の機會を當然婦人にも與ふべきことを主張し、之によつて第三には從來過度に低くせられたる婦人の社會的地位を向上せしめて、少くも男子と同等なるに至らしめんことを要望し、更に第四には男女同一の才能を有する以上は兩者が同一の職業に從事するの途を開かるべきを主張し、隨つて第五には此等の職業に於いて男と女とが同樣の成績を擧げ得たらば其の報酬として得る所の賃銀は男女同額たるべく、決して單に女たるの故を以て低き賃銀を與へらるゝといふ如きと無なるべきを要求し、更に第六には社會的に同等の仕事をする以上は社會の運營に關して容喙する權力即ち參政權も亦男子と同樣に與へらるべきことを要求する。これ等が先づ今日我が邦に於ける婦人問題の先覺者によつて熱心に主張せらるゝことの重なるものであらう。而して斯くの如くに男女の同權若しくは同等といふことを出來る丈け明かにして後に、斯くの如き同權又は同等なる男女の結婚といふことが對等なる立場に於いて行はれるべく、兩性間の道德に關する社會の要求が在來の如く男に寛にして女にのみ酷なるが如きことなかるべしと主張するのである。

斯くの如き婦人問題硏究者の論議は、其の大體に於いて極めて正當であり、其の主張が成るべく近き將來に於いて實現せらるべきことを望むのは、公平なる考へを有する人の殆ど異議無かるべき所であると思はるゝが、たゞ一つ懸念すべきことは此等の論議が餘りに在來の舊き考へに對する反抗的精神を高潮するが爲めに、動もすると其の方の極端に走つて、男と女との間に永久に存在して居る重大なる差異のあることを無視せんとすることである。即ち一時の感情に驅られて強ひて何事にも男子と同じやうな事をせんとするのに急で、男と女との間は其の

身體に於いても精神に於いても根本的に異つて居る點が存在して居て、男女それ〲其の最も適する所に赴くことが卽ち男女各自の最大の能率を擧ぐる所以であることを忘れんとするは、頗る憂ふべきことゝ云はねばならぬ。

三、女子と育兒と

世の中に分業は極めて多いが、其の最も根本的にして永久に換ふること能はざるは男女の分業である。人類が其種族を繼續せしめんが爲めには、男女兩性の分業があつて、兩者相結合して子を産み、而して子を産むに關する仕事の大部分は女子が之れを負擔する。この事は儼然たる生物學的の事實であつて、苟も人類が世界から絶滅せざる以上は永久に變ずることは出來ぬ然るに子を産んで之れを育てると云ふことは極めて重大且困難な仕事であつて、其の爲めに婦人の心身の勢力の大部分は費されると云つてもよい。九個月餘の妊娠中の不快不便苦痛、又出産に際する所謂『生みの苦み』の激しきは云ふにも及ばず、生れたるのみでは極めて無力なる兒どもに乳を與へ、衣を與へ、大小便の始末をし、更に或る程度の敎育を施すといふことは、殆ど男子の想像だもすることが出來ない激しき心身の勞働と非常なる忍耐と、細かき深き愛情を要する。隨つて假りに一人の女が三年毎に一人宛子を産むものとしても、子供の養育といふことは殆ど結婚せる女子の勢力の大部分を費しても尙ほ且つ及ばざるを恐るゝ程度のもので、むしろ其の以外に薪炊裁縫などの時間の餘裕のあるのが不可思議に思はるゝ位である。

勿論『捨てゝおいても子は育つ』といふ如く、子供の敎育とても之れを社會乃至國家に任せてもよく、又出産そのものゝ苦みも本來が生理的な事實であるから、別に特に騷ぐほどの事も無く、現に未開人の女の如きは、一部落と共に移住する途中に出産することがあつても、殆ど一行に後るゝことすらも無くして前進を續けるといふやうなこともあるかも知れぬが、併し兎に角此の産兒及び育兒といふことは女子のみに特に委ねられたる大任であることは疑ひ無く、隨つて此の大任を果す爲めに女子の身體精神の構造及び機能が、男子に比して大に異るべきは當然の事であらう。

四、男女の身體の差異

男子と女子とが其の身體の構造に於いて大なる差異のあることは何人も認めて爭はざる所である。第一次的性的特徴といふ所のもの、卽ち生殖器管の差異は先づ自明のことゝして、論ずるの要は無いが、更にそれ以外にも普通に第二次的性的特徴と

して呼ばれて居る種々の身體的差異のあることも亦何人にも疑はれて居らぬ。例へば第一に身體各部の大さに於いて兩者の間に著しき差がある。即ち男子の身體に比して女子のそれは平均して小さく、骨や筋肉等の運動器官は弱小であるが骨盤は男子のに比して著しく大きく、又その形が可なり異つて居り、之れに聯關して歩行の有樣が男子と著しく差がある。日本では之れを外八文字と内八文字の差といひ、西洋の或る學者は男子の歩行は一歩々々を踏みしめて行くが、女子の歩行は倒れんとするのを辛うじて支へつゝ前進するのだと云つて居る。又女子は男子に比して胴が長くして四肢が小さい。尙ほ手や足の各部分の比例などや、或は手足の五本づゝの相互の長さなどについても兩者の間に差異のあることを種々の學者が主張して居る。

頭の形及び大いさについても兩者の間に差があつて、例へば男子は鼻の上方卽ち眉の部分が著しく突出し、大體に頭蓋骨が大きく且厚い。腦髓のことに至つては更に昔から多くの説があつて、種々の憶測爭論、迷信が少からず行はれた。平均して女子の腦髓が男子のよりも著しく小さいことは爭はれない事實であり、其の重量の差は先づ一割內外とせられて居る。たゞ女子の身體が男子のに比して小さいから、腦髓の比較的の重量は却て女子の方が大きいことになる。腦髓は尤も精神作用に關係の多いことは云ふ迄も無いから、此の男女の腦髓の比較からして世俗では動もすると男女の精神作用の優劣を推論しやうとして隨分と突飛奇怪なる空想が多く發表せられた。併しながら云ふ迄も無く、腦髓の目方や形などから精神作用の優劣を推論するのには、今日の所まだ材料は極めて不十分なのであつて、大體に於いて近頃腦髓研究者の結論では、全神經中樞の分量が男女の間に於いて何等かの差のあることは殆ど認められ難いといふことになつて居るやうである。尤も將來に於いて此の方面の知識が更に增加した時に於いては、種々の結論が下さるゝかも知れぬが、今日の所ではたゞ此の點について在來云はれて居つた事が著しく誇張されて居たといふことが云ひ得らるゝに過ぎない。

五、女子は兒童に近し

男女の身體的差異の重要なる第二の點は女子の早熟といふことである。これは精神的方面に於いても大體同樣であるが、身體の方面に於いて最も明かに現はれ來るのである。幼年少年の時代には男女の身體には餘り大なる差は無く、幾分か女子の方が小さいといふ位に過ぎないが、次ぎの青年期に入る頃に於い

て兩者の差が著しく急激にあらはれて來る。此の青年期に入るのには、平均して一年乃至二年だけ女子の方が早く、其の前後の發達がすべて女子の方が急激である。即ち青年期に於ける身體各部の急激なる發達、喉頭の發達による音聲の變化、乃至生殖器の成熟に伴ふ生殖素の分泌等は、女子に於いて男子よりも一二年速かに來り、此の時代に於いては男子に比して身體も大きく、知慧も進んで居り、大體に大人びて居る。然るに其の後男子が青春期に入つて急激なる成長を始めるに至ると、女子の成長は男子に追及することが能はずして、青春期の後半には其の身體の大いさ其の他に於いて男子に劣るに至るのである。通常結婚すべき男女の年齢に四五歳の差異のあるを通常とするは、即ち此の女子の早熟なることから起れることが多い。

併しながら一方に於いて此の女子の早熟といふことは決して女子の早老といふことを意味しては居らぬ。むしろ女子の身體は男子に比して大體に於いて兒童に近く、常に若々しきを保存して居り、男子が早く老いて早く死するに反して、女子は老ゆること遲く、又比較的長命である。六七十歳以上の老人の數は常に女子の方が男子よりも多きことは統計の明に示す所である女子の身體が男子に比して頗る兒童に近いことは、かなり古くから人に認められたことである。其の身體の組立てが比較的に華奢にして、頭が比較的に大きく、胸が大きく、頭部その他の形も著しく兒童に近い。殊に其の疾病に於いて女子と兒童との間に類似せるものが少からずあることも著しい事實である。

こゝに注意すべきことは、女子の身體が種々の點に於いて兒童に近いといふことは、決して女子が發達の點に於いて男子よりも劣つて居るといふことを意味するものでは無いといふことである。元來兒童が發達して大人となるのであるけれども、進化論的に見て大人が兒童よりも高い度の進化の段階にあるといふことは出來ない。例へば類人猿に於いては幼兒は成熟せる獸よりも遙に人間に類似して居る。換言すれば類人猿の幼兒は成熟せるものよりも進化の段階に於いて高い所にあるのであり、又其の雌は幼兒に近い爲めに雄よりも幾分高い位置を占めて居るのである。人類が類人猿の如きものから進化して來た時には決して成熟せる獸から進んだのでは無くして其の幼兒の如きものから轉じて來たのである。

人間に於いても此の關係は同樣である。人の幼兒は人類の特徴を最もよくあらはして居る。即ち其の頭蓋と腦髓との大なること顎の小なること、毛の無きこと及び骨格の薄弱なること

である。現在生存して居る世界に適應する點から云へば成人は兒童よりも遙かに優つて居るが、併し人類の進化といふ點から見ると成人の方に向つて成長するのは墮落又は老衰に近づきつつあるものと見るべきである。故に大體に於いて優等なる人類ほど長く兒供らしさを失はずに居るものであり、吾人の種族の進歩は其の若々しさに於ける進歩なりと云つても差支へない。

隨つて女子が兒童に近いといふことは決して女子が男子に劣つて居ることを意味するに非ずして、寧ろ反對にそれが現世に適應する點に於いては兎も角、人類進化といふ立場から見れば男子よりも却つて高い所に居ると考へるべきである。即ち人類が今後進みつゝある方向は男子の如き形に向ふのではなくして寧ろ女子の如き形に向つて居るのである。文明人類の頭大に顎小さく骨組弱きことは未開人類に比して著しく女性的である。又人類の骨盤も次第に婦人の骨盤に近づきつゝあるといふことである。

之れを要するに女子が兒童に近いといふことを以て直ちに男子より劣れりとなすは、成熟せるゴリラが昔の幼兒よりも顎小さく口大なるを見て、ゴリラよりも優等なる動物は更にゴリラよりも頭の小さくして口の大きなるものたるべしと考ふると同樣の誤りを犯すものである。

六、男女の精神的差異

此くの如く男女の身體的差異の頗る著しいものがあることは比較的に明了に具體的に指示し得らるゝ性質のものであるが爲に、今まで何人にも疑はれなかつたのであつた。隨つて體力殊に腕力を要する仕事には男の方が女よりも多く適して居ることも亦多くの人によつて承認されて居た。勿論多くの論者の中には此等の身體的差異も亦長い間の教育境遇の結果として起つたのであつて、決して本質的の差異では無いといふ人も無いでは無いが、此くの如き人は極めて少數である。

然るに轉じて男女の精神的の差異に至ると、身體の場合の如くに之れを指示することが容易で無いから、之れに關する意見は極めて區々であるが、概して云ふと、近頃の婦人問題の論者特に婦人の權利の伸張を主張し、男女同權なることを説く人々の間には、此の差異は全く本來無きものであると主張し、若し在來の境遇や教育の不公平が無かつたならば、男女の精神作用の間には何等の差異あること無く、特に知的方面に於いても決して兩者の間に區別の有るべきでは無いと説くものが少くない中には最近の實驗的心理學の結果は此の兩者間の差異の無きこ

とを證明したなど〻云ふ驚くべき無稽の言をなす人もある。

精神的方面に於ける男女の差異を實驗心理學的に定めんとするは極めて困難なことである。在來此くの如き實驗を試みた人は幾らかはあるが、其の結果はいづれも決定的なものを得ることは出來なかつた。ある少數の被驗者からして得られたる結果を以て、直ちに全體を推すことは、非常なる誤謬を生ずることはいふ迄も無く、又心理學の實驗には或る種の少數の精神作用を斷片的に抽出して、非常に緊張したる注意の下に短時間の間之れを比較するから、此くの如き不自然なる方法に於いては男女間の差異といふ如き複雜な自然的の狀態を知ることは極めて困難である。隨つて在來の此くの如き種類の研究の結論としては、多くは男女の間に著しい差異を認むることが難いといふことになるのは當然である。併しこの事からして直ちに兩者の差異の無いことが實驗心理學的に證明されたなど〻考ふることの誤りなるは云ふ迄も無い。

七、女子は保守的なり

併しながら此の種の問題は決して實驗的の方法によつてのみ解決すべきものとも限つては居らぬ。實驗ほど精確では無いが併し矢はり學問的なる種々の方法によりて幾分其の解決に近づくことは決して不可能では無い。例へば或る數の關係を多數の男女に提出して其の考案を求めて其の結果を統計的に整理することや、或は多數の男女學生を取扱ふ教育者たちが平生心理學的の見方で兩者を比較研究したり、或は古來の傑出せる男女を比較研究したり、或は人類學的又は土俗學的方法によつて現今の世界に於ける諸種の民族の男女の生活狀態を研究したり、或は歴史的に古來の文化民族を研究したりしても、男女の心的差異の問題に對して或る程度まで正確なる答へを與へることは決して不可能では無い。此等の方法によつて今迄に得られたる結果は、決して兩者の間に區別無きことを認むるに至るが如きことは無くして、むしろ次第に其の差別の極めて著しきものたることが證明せられんとしつ〻あるやうである。

第一に女子の心は男子の心に比して著しく保守的である。男子が現在の社會の狀態に順應して常に進歩せんとするに對して女子は常に舊來の狀態に安んじて變化をせざらんとする。隨つて男子のみに委ねて置けば、社會の變化は餘りに突飛になつて時に過激なる大擾亂を起す憂へがあるが、女子の保守性が之れを適當に制して行つて、社會の進歩が秩序ある健全なるものとなつて行くことが出來るのである。俗には進歩は常に保守に優

るもの〻やうに考へるから、單に此の區別を認めることを以て女子を侮辱するものなりと考へるものも有るが、此の考への誤りなることは多言を須ひない。人類の進歩或は一般に生物の進化は常に一方に於いては過去の悠久なる年代からの遺傳を背負うて、他方に於いては將來の無限なる年月に向つて歩み行くことである。十分に健全なる進化をするが爲めには、充分に過去の遺傳を多く取り入れて後に將來に向つて變化をせなければならぬ。若し過去の遺傳を取り入れることとなしに、現在の狀況に適應することのみに努めたならば、自己の據りて立つ所の根柢を失ひ、適當なる進歩の出來ないのみならず、却つて自ら覆滅するの悲運に陷るであらう。進歩と保守とは生物進化の二方面を指すものでそれを優れりとし、いづれを劣れりとする如きは何等意味の無いことである。女子の心の保守的傾向は、決して恥辱などで無いのみならず、男子の心のあまりに性急に早熟早老とならんとするを制馭して、なるべく永久の若々しさを失はせまいとすることに於いて、矢張り人間の進化の上に大なる寄與となすことは明かである。

八、女子は感情的なり

男子の精神活動の第一の重要なる差は、男子の理知的なるに對して女子の感情的なること、男子の意識的なるに對して女子の無意識的又は半意識的なること、男子の分析的なるに對して女子の直觀的なることである。而してこれは男女の身體的差異と極めて密接に關係して居る。吾人の感情生活が身體の內臟の變化と非常に密接な關係のあることは、最近の心理學の研究によつて次第に明かになつて來たことであるが、女子の內臟は男子に比して身體の頗る大なる部分を占め、殊に女子の生殖器官は男子に比して著しく大きく、又それが身體の中央の部分に占據して居て、長いリヅムの規則的變化をなすことは男子のよりも特に著しい特色である。女子が月經その他の變化によつて其の氣分乃至一般感情生活に大なる影響を受けることは、何人も知る所の事實である。約言すれば女子の感情生活は、其の精神生活全體に對して有する力が、男子に比して遙かに大きく且深い。隨つて自己の明かに意識せざる精神活動によつて動かされ、事をなし或は考へる時に半ば意識し又は全く意識せずしてすることが多い。

女子の感情が深く且細やかな點に於いて遙かに男子を凌駕せる一方に於いて、知識的又は意識的方面に於いて之れに及ばざる所あるは止むを得ない。女子の知識は大體に於いて直觀的

であつて分析的で無い。複雜なる多くの條件を比較考覈して、論理的に最後の斷案に到達するが如きことは女子の長所とする所ではない。併しその代りに或る程度までの結果を直觀して大體の判斷をなす時には多くの場合に於いて驚くべき正しさを現はすのである。これは矢はり女子の本來の最大切なる職分が兒を產みて之を育てるといふことにあるが爲に、其の仕事が比較的に變化の少きに反して、男子の職分は主として此の複雜なる世の中に立つてその限り無き變化に適應して行くことにある事の必然の結果なのであらう。

男子の精神の間に於ける此の差異は、近頃の男女同權論者の多くが最も力を用ひて否定し去らんとすることである。即ち此等の人々は女子が知識の方面に於いて男子よりも劣るといふことを以て、女子に對する大なる侮辱なりとし、現在の女子が此點に於いて男子に劣るとけ事實なりとしても、それは境遇殊に敎育の不公平なる爲めなりとし、其の證據として古來男子と同樣なる仕事をして男子にも劣らざる結果を示したる多くの女傑の名を引用して居る。政治家としての英國王エリザベスや露帝カザリンや、科學者としてのラヴアジエ夫人やキュリー夫人や文學者としての紫式部や、ブラヴュング夫人や、マダム・ド・スタエルや、或は軍人としてもジアンヌ・ダークなどすらも屢數へられて居るが、此れ等は少數の例外とも見らるゝのであつて一般の女子と男子との比較の論據には稍不充分である。境遇や敎育の不公平なりし事實は充分に之れを認めるとしても、之れを男女に於いて同等にすれば直ちに今日劣つて居る女子の知力が男子と同等になるであらうとの結論に行くことは稍困難のやうである。

加之、今日男女を殆ど同じ境遇に置いて敎育した場合、例へば男子の中學校と女子の高等女學校を比較し、或は歐米の男女共學の大學に於いて男女學生を比較したる時などに於いても、矢張り兩者の間に知力の差異があることは大體に於いて疑ふべからざることのやうに思はれる。勿論高等女學校に於いては中學校には無い多くの技藝的學科の爲めに時間を取られるから、他の知的の學科に於いて幾分劣ることは當然であるとも考へられるが、實際の差はたゞ此の點だけで說明するには餘りに大きいやうに思はるゝのである。

九、女子は個人差少し

男女の精神的差異の第三は、男の心が特殊的なるに對して女の心の典型的なることである。即ち男の心には個人差が多く、

それぐ\専門の職業などに從事するに適して居るが、女の心には此の差が餘り多くなくして、何の女も互に相類似せる心を有して居ることとである。此の事は男女の身體の比較に於いても亦同樣の事がいはるゝのであるが、心的方面に於いても著しい差がある。此の點に於いても女は餘程小兒に近い。これも亦女の本來の職分が兒童を養育するに在り、而して兒童を養育することは其の社會の狀態などによつて左まで大なる差異を生ずること無きが爲めに、現在の社會狀態に適應して種々に變化して行かねばならぬ男の心に比して、女の心が比較的に差別變化の少いといふことが寧ろ當然なのであるとも考へられる。隨つて此の差は勿論其の社會的境遇から來る結果として、後天的に生じた部分も勿論大にあるであらうが、一方に於いて小學校時代以下の男女を比較しても、亦此の種の差の幾分は既に先天的にも異つて居るのであらうと考へらるゝ點が無いでも無い。小兒時代の友人が何十年の後に相會すると、男子に於いては其の職業の異るものは殆ど互に相理解することの出來ない程懸け離れるが、女子に於いては斯くの如きことの少いのは、日常に多く經驗さるゝ事實であつて、既に社會上の仕事が男女互に相異るべきものであるとすれば、その萠芽が既に其の本來の精神作用の中に存在して居るべしと考ふることがむしろ眞に近いのであらうと思はれる。

尙ほその他の點に於いても男女の心的差異は少からずあるであらうが、其の間の最も主なる點を擧ぐるならば恐らく上の二つであらう。

一〇、男女の差異あるは當然なり

斯くの如く男と女とは、其の身體に於いても精神に於いても互に著しい差異を有して居るとは之れを認めざるを得ない。身體的方面の事は既に明白であつて之れを疑ふものは殆ど無いが精神的方面に於いても、研究の進むに隨つて、兩者の類似よりも差異の方が次第に認められ來るとは否定することが出來ない。

而して此等の男女心身の差異は、結局男と女との自然から與へられた生物學的使命の差異に基つく。卽ち女子は自己個體の完成よりも寧ろ自己の種族の存在に關する方面を多く司り、自己の現在の境遇は之れを幾分犧牲にしても、將來の自己の子孫を完全に育て上げ、自己の子孫をして自己よりも更に完全なるものたらしむべき任務を有し、大體に於いて現在よりもむしろ將來に生活して居る。之れに反して男子は主に現在に働き、現在の世の中に生きて、此の世に於いて出來る丈け自己を完成し

向上せしめんとして居る、隨つてこゝに一對の男女が集つて子を生む時には、女は其の子の發育に全力を盡して內に在り、男は主として外に出でゝ妻子の爲めに食物を得んが爲めに、猛獸と戰ひ、魚を釣り、木の實を取り、又は自己や妻子を襲擊して來る敵と戰つて妻子を保護するの任務を取るべきは明白である卽ち男は外に働き女は內に働き、男は自己の個體完成を主とし女は種族の永續向上を目的とすることは、恐らくは生物學的の事實として永久の過去から永久の將來に至るまで變ることの無いのではあるまいか。隨つて又此の根本的の分業に適するやうに男女の心身が作られて居り、女子は子を宿して之を生み之れを育てるのに適したやうに大なる軀幹を有し、男子は外に出でゝ働くに適したやうに強大なる四肢の力を有し、女子は育兒に缺くべからざる感情の深さと細やかさと、銳敏なる直觀とを有ち、男子は外の複雜なる世界に働くに必要なる知識と分析力とを有ち、育兒の任務が時と處とによつて餘り大なる差の無い爲めに女子の個人差は少く、外部の社會の千變萬化なる所に出でゝ働かねばならぬに應じて男子の個人差が非常に多いのではなからうか。

一一、現代の生活と男女の接近

現代文明の次第に進步するに伴うて社會の狀態の急激に變化するに隨ひ、男女間の大體の分業も其の些末なる點に於いては次第に變化し來ることは云ふ迄も無きことである。現代の男子の職業は必ずしも敵と戰ひ猛獸を斃し又は山野を跋涉するとでは無くして、むしろ事務室に靜座して讀み書きをするとになり或は工場內にをりても強き力を出すとは之れを機械に委ねて、人はたゞ其れ等機械の運轉の圓滑なるやうに監視すればよき事になり、大なる骨格や筋肉を勞するとは少くして、次第に小なる眼先き手先きの筋肉を勞し、又神經殊に腦髓を勞するとが最も多くなつた。隨つて其の職業の或る部分は筋骨の力の弱き女子にも亦出來るものが多くなり、隨つて女子が次第に男子の職業に蠶食し來ることは近代の產業の著しき特徵となつた。加之職業中の或るものに至つては却つて女子の方が良好の成績を舉ぐるものもあり、全然男の手より女の手に奪はれて了つたものも少からずある。特に此度の世界大戰に於いて歐米各國の男子の殆ど全部が出征した後を、女子が引き受けて案外に良好なる成績を舉げ、凡そ男子の爲し得る職業で女子も亦成し得ざるもの無しと信ぜらるゝ迄に至つた。こゝに於いて或る論者は此の點に於いて男女の區別を全く撤廢すべしと論ずるまでに至つた

加ふるに現在に於ける經濟的生活の困難は次第に年を追うて增加し來り、一家族中の男子のみに職業を任せて置くことは到底不可能になり、女子も亦出來るだけ家を出でゝ相當の勞働に從事し、之れによりて收入の途を增すことを心がくるに至り、子供を育兒所又は兒童預り所に預け、或は家内に監禁して置いて、工場に通ふ主婦の數は、日一日と增加し來る勢である。十八世紀の半から起つた產業革命の勢は既に舊來の父權的大家族制度を破壞し去つたのみならず、今や夫婦を基礎とする小家族制をも破壞し去らんとし、家庭は次第に荒廢し、次代の社會を作るべき貴重なる兒童は、劃一的規則づくめの學校に任せられ冷酷なる育兒所に預けられて春光の如き母の慈愛に浴すること能はず、人は現在の刹那的存在を保つことに追はれて、自己の後繼者が時々刻々に墮落し行くことを顧みるに暇がない。

或る人は此くの如きは現代社會の趨勢であつて如何ともなし難いといふ。人は生きんとする根本的欲望が脅かされて居る時に二十年三十年後の事を考へる餘裕を有たぬといふ。併しながらこれを何時までも此くの如くならしめて置くべきものであらうか。敢へて倫理學的に此くの如くならしめ置くことの善惡を論ぜずとするも、人間は果して此くの如き殺風景不自然なる社會に永く滿足して居ることが出來るであらうか。『改造』といふ言葉は現代の有らゆる方面に於いて掲げられて居る重要なる標語である。(而して此の雜誌の標題である)。現代に於いて最も速かに改造すべきものは即ち妻を家庭より奪ひ母を子供より奪ひ行く所の生活難の社會では無いか。妻が家庭にあり母が子供の貴き幼き心情を深き愛情を以て教育して、次代の民族を我々よりも更に數等完全ならしむる丈けの餘裕のある樣に現今の社會殊に其の產業組織を改造することが、現代の人々の最も努力すべき事柄なのではあるまいか。現代の人心は悉く此くの如き社會の來るべき事を要求して居るのでは無いか。而して若しも此くの如き社會の實現せられた曉に於いては、矢張り男女の業務の別は依然として存し、男は主として外に出でゝ職業に從事し、女は主として家庭にありて次代の國民の養育を司るといふ風になるのではないか。勞働時間を減少して勞働者に慰安を與へ、人として修養娛樂の餘裕を有たしめんとする運動は、稍々奏功して殆ど大部分は實現されて居る。現代の生活を辛うじて支へんが爲めに婦人を家庭より子供より奪ひ去るが如き狀態は今後決して永く續くとは考へられない。

一二、最大能率の問題

論者は動もすれば男子のする仕事は女子にも皆出來るといふ英國の陸相チャーチルが、彈藥工場に於いて男工の代りに女工を使用するやうになつたなら彈丸の誤つて爆發するもの丶數が非常に減少したと云つたといふことなどが屢引用されて居る。併しながら今日は男子の仕事にも出來るか否かと論じて居る時では無い。如何なる業務が最もよく男と女とに適當するか。換言すれば男として又女として最も多くの能率を擧げるのには如何なる仕事に從ふべきかを論ぜねばならぬ。重に頭腦を使つて居る俸給生活者でも、若し必要に迫られて車を引き又はハンマーを握るやうな力業をせねばならぬ時になれば、決して全く出來ないことは無く、或る程度までの成功を擧げるかも知らぬ。或は筋肉のみを使つて居た勞働者も必要に應じて書記や教員の仕事をしても全然出來ないといふことは無いであらう。たゞ問題はそれが其の人として最大の能率を發揮し得るか否かにある

女子が次第に男子の職業に侵入し來ることは世の勢であり又其の內の或るものは却つて女子の方が適して居ることの發見されたものもあるであらう。

併しながら大體から云つて職業に從事して居る未婚の女子又は職業の爲めに家庭を閑却して居る女子が幸福であるか否かは極めて疑はしい。勿論世には不自然なる結婚の爲めに日夜泣いて暮して居る不幸なる妻もあり、又教育の事業などに從事して衷心から天職を樂んで居る老孃も少くはない。併しながら概して云へば結婚せる婦人は何となく落ち附いて平和なる所があり未婚の老孃は心中に常に名狀すべからざる不安があり不滿があり悶えがあることは爭はれない。これには性慾といふ強力なる本能の滿足と否とが大なる關係のあることは云ふ迄も無いが、更にその外に既婚婦人は自分の愛情の對象たる夫殊に兒供があり、自己の感情を滿足せしむることが出來るのに反して、未婚婦人には此の事の求め得られざることが重大なる一つの原因となつて居る。子供を愛せんことを望む欲望は婦人の最も強い本能であることは、經濟上などの理由から結婚を避けて居る歐米の女や、又は結婚をしても子を產まない女が、その愛情を注ぐ目的物として小犬や猫を飼ふことによつても知らるゝ。

之れを要するに婦人の任務は決して男子と同じ仕事をすることでは無い。婦人は現代に活動し自己の個體を充分に發揮せしむることよりも、むしろ將來に生き、自己を犧牲としても自己の子孫を完全に近づけんとする尊き使命を有して居る。而して婦人の身體も精神も皆此の貴き重き使命を果さんが爲に男子と

は異つて作られて居る。最近數十年間の社會、殊に歐洲大戰以後の社會が幾分か變態的の狀態を呈したが爲めに、婦人が男子と同じやうな仕事をするものが多くなり、之れが爲めに動もすると男女の心身の差異は本來有るべきもので無く、漸次兩者相同じきものになり行かざるべからずといふ風に考へるものすら出來ないのは、慶賀すべきことでは無い。此の社會が更に健全なる餘裕あるものに進み行くに至れば、男女各其の相異れる天職を有することを自覺し、相共に樂んで異れる途を進みつゝ相助け相慰めつゝ行くといふ狀態に到達するであらうと思はれる

併しながら多數の人の間には少數のあることはいふ迄も無い決して女子の全部が結婚するものでもなく、又結婚した女が悉く子を產むものでは無く、又決して女子が悉く結婚すべきことを豫想すべきでも無い。今日に於いては結婚する女や結婚しても兒を產まぬ女の數はむしろ次第に增加して來つゝある勢である。斯くの如き例外の婦人に對しては、妻若しくは母としての以外の活動をすることは、差支の無いどころか大に奬勵すべきであり、又將來結婚すべき大多數もの婦人に對して、其幼時からの一擧一動を悉く妻たり母たる準備として見るべきで無いことも明かである。現代の婦人問題の論者が婦人に對して單に女として又は妻としての仕事以外に、『人として』の仕事をなさしむべきことを主張することは此の點から見て頗る正當なることである。たゞ動もすると其の『人として』といふことが單に男子の仕事の模倣に止る如きことは頗る忌むべきことであり、又一般の女子の『人として』の仕事の中で最も尊く且重きものは妻たり殊に母たる仕事であることを忘れてはなるまい。今日の女學校當事者の中の頑冥なる人々、又は今日の多數父兄などが、家事や裁縫などに何等興味をもたぬ尋常小學校の幼年級の女生徒に裁縫や家事を敎へ、餘り早き時から既に職業的敎育を施さんとすることの無謀なるは云ふ迄も無いが、一方に於いて家事や裁縫を習ふことを以て女子の人格を無視したものであるかの如くに考へて居る極端なる人々も非常な誤りに陷つて居るといはねばならぬ。

一三、女子の高等敎育

併しながら男女の職務が著しく相異つて居るものであるとしても、決して在來の社會殊に日本の社會に於けるやうに、婦人が不當なる壓迫を受け、男子と同じ敎育を受くる機會をすら有たないといふ現狀に甘んずべしといふ結論とはならぬ。否むしろ婦人の職務が次代の國民を養育するにあることの明かになる

程、婦人の教育殊に高等教育の必要なることが明になつて來る今後の複雜なる社會に立つべき次代の國民は、決して昔の國民のやうにたゞ一通り健康と腕力とを有したのでは充分で無い。此の忙しい世の無數の出來事に堪へ行くだけの强靱なる神經を有し、或る程度までの教育乃至技能を修得せねばならぬ。即ち可なり高い程度の教育を受ける必要がある。之れは勿論大部分は學校に於いてせらるゝが、併し家庭の母たるものが子女の一通りの復習をしてやり、一通りの質問に答へてやる丈けの學問がなければ眞の家庭教育は行はれ難い。今日の所謂中產階級の子女は少くとも中等學校を卒ふる迄は家庭に在り、又其他の一般の民衆に於いても、近き内に義務教育が更に二個年も延長せらるゝことになれば、其れ等の子女の母としては在來の如き低級なる高等女學校程度の教育では到底駄目であつて、少くも今日の男子の高等學校程度、若しくは出來得べくば大學程度の教育を受くる必要がある。

結婚をして妻となり母となる人々のみ高等教育が必要なのでは無い。結婚せずして獨立して行かうとする人にとつては尙ほ之よりも數層必要なることは更に明かである。

然るに今日の我邦の現狀は女子の高等教育に對しては尙ほ一般に極めて冷淡であり、女子の大學入學は此頃稍問題になつて來たけれども、それが一般に實現さるゝには尙ほ幾何かの年月を要すべき有様である。高等學校程度のものすら二つの女子高等師範といふ職業學校を除けば殆んど何物も無い。昨年かに文部省が四千萬圓を投じて男子の高等教育を完備せんと試みて大に世間の耳目を聳動せしめたが、女子の高等教育に對しては今以て何等の顧みる所が無い。女子の中等教育すら男子のに比すれば極めて低級であつて、四年程度の女學校を卒業してもその實力は男子の中學の二年生卒業と如何程の差があるかゞ疑はしく、徒らに家事とか裁縫とか手藝とかいふやうな手先きの仕事ばかりをさせるにつとめて、大切なる頭腦の練磨を怠つて居る。これは一つは日本の現代の社會一般に裁縫といふ末技を過度に重んじて、『しごと』といへば卽ち裁縫を意味するが如き陋習を有することが大に與つて力があるのであるが、一般人文の進步の上から見て誠に痛歎に堪へない。

一四、歐米の女子教育

但この點についてはたゞ我が日本のみを特に責める譯にも行かぬ。歐米の先進諸國と雖も概していへば女子の教育は著しく男子のに比較して幼稚なる状況にある。歐米の各國に於いて女

子の大學に入學することの許されたのは十九世紀の最後の三分の一ほどから後の事であつて、而かもそれが文化の最も進んだ國ほど早く許されたといふ譯でも無い。二流三流の小國に於いて案外早く許されて居る所があり、獨逸の如き學問の進歩を以て有名なる國に於いても漸く前世紀の最後の二三年から女子の大學入學の途が開け、而かもそれは如何なる學科にも悉く開かれたといふので無く、教授の意見によつて自己の講義を女子に聽講せしめざることを得るのである。千八百六十何年の頃、スコツトランドのエヂンバラ大學に始めて二人の聽講生があつた時、男の學生が之れを嘲笑し妨害して遂に教室の外に追ひ出したといふ話は頗る興味ある事である。

女子の中等教育ですら、歐米の現狀は案外に振はない所が多い。今より三十餘年前に佛國に於いて女子の中等教育を擴張するの議が起り、上下兩院に於いて委員會を設けて之れに關する討議をした時、目下例の國際聯盟の委員長として有名なるレオン、ブルジョア氏は反對黨の一員として、『若し諸君の妻君が高等女學校卒業生であつたらば、諸君が毎日の勤務から家に歸り妻君の澀顏によつて慰められやうと樂んで戸口をはいると、妻君は只今プラトンを研究中ですとか、或は天文を觀測中ですとか云つて出迎へもしなかつたらば隨分困るではないか」といふ意味の演說をしたことがある。今から見れば噴飯に堪へないのであるが、當時は極めて眞面目に論議されたのである。其の爲めもあらうが今日の佛國の女子中等教育は、男子のに比して著しく見劣りがするやうである。

斯くの如く歐米の第一流の諸國に於いても、今日尚ほ女子の教育は男子のに比して著しく低いことは事實であるが、それは決して日本の女子教育を現狀のまゝにして置いてよいといふことにはならぬ。寧ろ此の點に於いては日本は歐米に魁して速かに女子教育を改良進歩せしめ、時に歐米に比して數歩優れて居る高等教育については一日も早く其の制度設備を完全にし、せめて歐米先進國の現狀にでも追附くやうにせねばならぬ。

一五、婦人の社會的地位

更に日本に於ける婦人の社會的地位を考へると、歐米のそれに比して更に數等の下位にある。人間の普通の人の考へて居る良妻賢母なるものは、舅姑に對しては絶對に服從する奴隷なり夫に對しては絶對に從順なる下婢たるものを指すやうであるが婦人の地位が此くの如く下等なることは單に婦人自身にとつて不幸なるのみならず、男子にとつても又舅姑にとつても一層の

不幸たることは明かである。此の點は既に我國の婦人問題を論ずる幾多の人々が種々の方面から論議し盡して居るが故に、更に同樣の趣旨を茲に重ねて說くの必要はあるまい。たゞそれ等の論議に對して全然贊成なる旨を附記すれば足るであらう。

たゞ此の點についても一つ注意せざる可からざることは、此の婦人の社會的地位といふことに就いても、我が國人の多くは歐米各國の現狀について大なる誤解を有し、歐米の狀態を實際以上によいものに想像して居ることである。我が國の現狀に比して數等まされることは疑ひは無いが、我が國人の普通に考へて居るほどには立派なもので無いといふことである。

元來婦人は男子に比して腕力の弱いものであるから、腕力の重んぜらるゝ時期即ち戰爭の續く時代に於いては、婦人の社會的地位は低く、平和が續いて文明の盛になる時には次第に高くなるといふのが大體の法則である。古代希臘に於いては主に戰爭が續いた爲めに女子の地位は低かつたが、羅馬が世界を統一して自國獨特の文運が盛に興隆した時には婦人の地位は極めて高く、殆んど現代の歐米各國に於ける狀態に比して優るとも劣らざる有樣であつた。

然るに中世キリスト敎の勃興するに及んで、其の禁慾的方面を餘りに高潮した結果、男子に對しては婦人を以て罪惡の塊となし汚れたものとして、出來るだけ之れを蔑視し之れに近づかさらしめんとした。或る宗敎會議に於いては女子は男子の如く靈魂を有するものなりやといふ事が問題にされたとさへ傳へられて居り、敎會內に於いては女子の祭壇の近くに來ることを禁じ、神のつとめをすることも大抵禁止されて居た。結婚は子孫を得る目的の爲めに、或はそれ以上の惡德を防がんが爲めに、已むを得ずしてする方便であると聖アウガスチンの如きですら云つて居り、男女が終生の友として相助け相慰めるといふが如き考へは毫も認めることが出來なかつた。此くの如き考への結果として、キリスト敎の全盛を極めた中世を通じて、歐米の婦人の社會的地位の極めて低く憐れむべきものであつたことは寧ろ當然である。

更に中世の婦人の地位を低下せしむるに與つて力ありしものは此の時代に勃興し來れるチュートン民族の陋習と封建制度の壓制とである。チュートン民族は元來慓悍殺伐な人民であることは、今回の大戰に於ける獨墺の軍隊の殘虐によつても知らるるが、封建制度は卽ち諸侯が各地方に割據して相攻伐するものであるから、此の如き民族の跳梁する此の如き時代に於いて、弱く優しき女子の重んぜられざるは當然である。中世の武士は己れの妻が從順ならざる時は之れを打つことを許されて居り、或

は血を流すまでに至つた。武士は女の美よりもむしろ軍馬の美を賞するを以て尊ぶべきと、考へて居た。武士はその妻に對しては『そなたの美しき室に入つて隅の方に坐り、すきなやうにせよ、飲み度きを飲み食ひ度きを食ひ、着物を編み染め物をなせ、たゞ決して我等男子の仕事に喙を入れてはならぬぞ、我等の仕事は鐵の刄にて戰ふことなるぞ。默り居れ』といつたのであつて、丁度我國の封建時代に於いて『女子供の知ることならず』といつたのと全然同じ心であつた。

チユートン民族の婦人に對する侮蔑の念は、賣妻の惡風に至つて其の絶頂に對したのであつた。これは殊に英國に於いて行はれた弊風であつて、即ち或る期間の間同棲して居た妻に飽きると妻と合意の上で妻の首に綱をつけて之れを引いて牛馬の市場に行き、以て妻を買ふ人の來るのを待つ。買ひ人あれば互に値段の懸け引きをした後に契約が成り立ち、買ひ人はその價を拂つて直ちにその女を已れの妻として引き去り、甚しきは相共に教會に行つて結婚式を行ふものもあるといふ。此の惡風は官憲は勿論之れを禁ぜんとして努力したに係らず、十八世紀の末から十九世紀の初に於いても可なり盛であり、十九世紀の終りに近い頃に於いても尙ほ絶へず、一八八四年頃の一年の中に此くの如き賣買が二十件ほども行はれたといふことであり、其の價も亦最高二十五ギニー(一ギニーは約十圓餘)より最低一ペニー(約四錢)であつたといふ如き記事さへ殘つて居るといふことである。

英國の如く現時に於いて婦人の地位の最も高しと稱せらるゝ大國に於て三十年前まで此の如き陋習の明かに行はれて居たといふことは、如何に歐米に於いても婦人の社會的地位が案外低いものであつて、たゞ單に數年の歐米視察旅行等に於いて表面上からのみ觀察した結果、歐米の婦人が大に高い地位を占めて居るやうに見られても、それは決して實際を見たものとは云へないことを知るに足るであらう。

敢へて歐米の社會の缺點を發いて自ら快とするのも詰らぬことであるが、今日我が國一般の弊習として、歐米の文物を過度にえらきものに見過ぎ、或は有りもせぬことを有るが如くにいひ、或は實際の缺點を正反對に美點なりと誤解して、彼れの長所と共にその短所をも併せ輸入する愚を學ぶものも少からずあるやうであり、又彼れを過度によきものとして、到底我が國の如何に努力するも及ぶ能はざる所として自暴自棄に陥るものも亦多いやうである。彼れに學ぶべき所は無論大に學ぶべしであるが、彼れの短所は之れを拒斥すべきのみならず、その誤りなるを指摘して之れを是正してやるのが當然友人としてなすべき義務でもある。

更に一方から見れば、歐米に於ける婦人の社會的地位が、最近まで案外に低いものであつたに係らず、現在に於いては大體に於いて我が國の到底及ばざる程度の高さにまで達したといふ

ことは、即ち此の方面に向つて努力奮鬪したる西洋の婦人の力の如何に偉大なるかを證明するもので、その努力奮鬪こそは實に我が國婦人の今後の活動に際して取つて以て模範とすべき所であらうと思はれる。

一六、結論

之れを要するに婦人問題は、世界一般殊に我が國に於いて成るべく至急に何とか解決をつけなければならぬ大問題であるが併し現在の此れに關する多くの論者の考へて居るやうに、男女間の差異殊にその心的知的方面に於ける差異が全く無いといふ立場から此の問題に近づくことは、全然誤れる根據から出發するものであつて、其の結論も亦誤謬に陷るべきは當然である。男と女とは其の身體に於いても精神に於いても共に大に相異れる二つの生物であるから、其の人生に於ける任務は全く相異つた事をなしつゝ相助けて行かねばならぬ。即ち男子は現在の世界に活動して現在に必要なる衣食を得ることに努め、女子は將來を目的として、自己の後繼者を自己よりも優れたるものにすることを其の主たる任務とすべきである。女子が男子と同じ職業をやり同じ方面に活動することは、或る程度までは決して不可能では無からうが、それは決して女子としての能率を最も有効に發揮すべき方法ではない。現在の女子が多く男子の生活を羨み、男子と同樣の仕事をせんとして、自己の最も大切なる天職を忘るゝのは、女子として男子の前に降伏したものであつて女子の墮落である。男女は互に相異なる天職に從事するのであるから、決して其の間に優劣の差別を附すべきではない。

此くの如き見地の上に立ちて考ふれば、女子は女子としての天職を盡す上にも、又一個の人としての人格を完成する上にも在來あるやうな低級なる教育に滿足すべきでは無くして更に高等なる教育を受くる機會を充分に與へられねばならぬ。又在來の歐米若しくは今日の日本に於いて見らるゝやうに社會に於ける女子の地位が低いのは非常なる誤りであつて、之れを男子の程度まで引き上ぐべきことは今日多くの婦人問題を論ずる人の說く通りである。たゞ此等の問題について我國人に歐米を師とするものはよいが、從來は餘りに多く歐米をよく見過ぎた傾向があつて、其の結果種々なる弊害を惹き起して居る。實際に於いては歐米の婦人の敎育も、又その社會的地位も、案外低い所があるのみならず、時としては驚くべき野蠻の陋習を見ることすらあることは、我々の尤も注意すべき所である。

婦人問題の如き極めて重要なる問題を論ずるに當つては、單に歐米各國に於ける其の日其の日の狀態變化等にのみ過度に注意して、皮相的な觀察や主張をすることなく、よく問題そのものの根柢から檢討して、出來るだけ根本的な省察を試み、歐米と日本との社會の狀態の相同じき點と相異る點とを綿密に比較考量して後に愼重なる斷案を下すべきであらう。

（九、三、七、稿）

男性よりの解放

（戀愛の自由——相互的の貞操

山川菊榮

一

今日殆ど總ての文明國に共通の家族制度は、男子を主權者とし、代表者とする所の一夫一婦制度である。但し此一夫一婦制度とは、決して嚴正なる一男一女の配偶の意味でなく、女子に取ては純粹に一夫の嚴守を意味するが、男子にとつては、單に正妻を一名に制限せられて居る意味に過ぎないことは斷るまでもなからう。

今日の一夫一婦制の結婚は、女子の掠奪又は賣買に其源を發したものであることは、社會學者の一致する所である。曾て血族共產團體の保護の下に、各その力に應じて生產し、必要に應じて消費することを許されて居た婦人は、生產方法の進化に伴ふ經濟組織の變化、即ち私有財產制度勃興につれて、次第に其自由と獨立とを奪はれ、財產の持主たる家長の慈悲に依てのみ、僅かに生活を保障せらるゝに至つた。斯して婦人は全く其人格を無視せられ、一個の物品として父兄や夫の間に贈與賣買せらるゝに至り、隨つて夫は愛人に非ず、征服者たり主人たる意味を帶ぶることゝなつた。今日の文明社會には、露骨な掠奪や賣買結婚は流石に見られないが、實質上之に類する結婚は、決して珍しくない。成金が貧乏華族から嫁を買取る例などは算ふるに暇もない有樣である。

總ての動物を通じて雄は其性の特質上、相手を選擇するの餘裕に乏しく、ひたすら愛の對象を求むるに急であるに引換へて、雌は其消極的なる性の特質を利用して、相手を入念に選擇し、特に自己の嗜好に適する者にのみ己れを許さうとする。此雌の選擇力は、生物進化の重要なる要素であり、動力であつたのである。雌にこの力があり、且つこの力を十分に發揮し得たればこそ、雄の美音や、强大なる體格や、勇氣や戰鬪力が涵養

し、維持し、發達せしめられて來たのである。

然るに萬物の靈長と誇る人類に於てのみ、獨りこの生物進化の重要なる法則が沒却せられて、女子の選擇力は萎微し、抑壓せしめられ、配偶者の選擇權は全く男子の手に有し、女子は單に選ばるゝ者にして選ぶ者に應ずる思想習慣が一般を支配して居る。これが文明社會に於ける男女關係の頽廢の原因であり、女子の悲慘の根源を成して居るのである。少くとも愛情の自由なる一半に於ては、動物の雌は人間の女性よりも遙かに幸福にして高尚な生活を樂しんで居る。或は自己の欲せざる結婚を強要せられ、或は自己の欲する結婚を妨害せられ、或は寡婦にして再婚の自由を認められぬ等の事は、獨り人類の女性のみが受けて居る束縛である。而して是等一切の束縛壓制の裏には、常に女子に獨立自活の能力なく、一に男子の慈悲に生活資料を仰がねばならぬといふ經濟的原因が潜んで居るのである。

私有財產制度には常に、財產に伴ふ特權の相續といふ問題が起つて來る。そこで財產を父より子に引繼ぐ必要上、特に父系々統の吟味が重大視せられ、女子は單に其間に於ける血統の傳達者に過ぎなくなると共に、男系の不明を恐るゝ餘り、玆に貞操といふ女性特殊の道德が發生して來たのである。故に血統の尊重と云ひ、貞操の強要と云ひ、共に財產保護の必要上起つた道德習慣なのである。

日本に於て女子の財產相續が廢せられたのも、武家の寡婦の再婚が禁ぜられたのも、貞永式目が元である。之は長子相續法に依り、一家の財產及び其れに伴ふ權力を一人の手に集中せしめ、他の家族を之に隷屬せしめて戰爭の際に備へんが爲めであつた。

斯樣に家族制度は私有財度制度と互に持ちつ持たれつして居るもので、其實際に現はれた結果から云へば、財產保護の目的の爲めに、個人の自由と幸福とを犧牲にして省みない制度だといふことが出來る。

二

近代の社會には、個々の人民の生活と遊離した、抽象的な國家の觀念が存在し、又は存在せしめられて、其國家の名に依つて人民の自由や幸福と沒交渉な、時としては其れに背反する『正義』や『道德』が強制される。さういふ場合、人民はその『正義』や『道德』の意義を問ふことは許されない。只だ彼等は、國家は神と等しく絕對であることを信じ、其命令に服する

の義務を負ふのみである。

家族制度も亦國家と等しく無上命令の主體である。其れは個々の家族の自由や幸福とは交渉なく、財產保護の必要上發達した家名とか家系とかいふ抽象的な觀念の前に、各家族の成員の跪拜と犧牲とを要求して已まない。家族制度は最初の經濟上の打算から、個人の思想行動の自由を束縛したのであつたが、今日に於ては經濟狀態變遷の結果、そういふ束縛は何人にも利益を齎さぬのみならず、却て四方八方に迷惑や苦痛をかける許りである。特に保護すべき財產もない家で、財產保護の目的を切離しては全く意味を成さぬ家名や家系を楯に若き子女の行動を束縛するのは、最も無意義であり、寧ろ滑稽である。

かの養子制度なども專ら財產保護の目的に出でた事は明かであつて、世間の所謂跡取り娘は財產のある場合は兎も角、無い場合までも、財產保護の目的の犧牲となり、家といふ抽象的な存在を繼續せしむる爲めに、不自然、不合理な結婚の障害に遭遇せねばならぬのである。

三

人類は久しく家長專制の家族制度に惱まされて來た。此制度の下に在ては、婦人と子供は家長の私有物として、奴隷として、之に服從し奉仕するの義務を負ふのみである。隨つて彼等は個性の自由な發揮を條件とする社會の文化に多く貢獻するとを得ず、同時に文明の成果を樂しむことをも許されなかつた。

然るに資本主義の勃興は此形勢を一變した。之は、婦人と云はず子供と云はず、凡て働ける者には何程かづゝの經濟的支持を與へ、依て家長の專制に致命的打擊を與へた。元より其一面には家庭の荒廢、婦人及び小兒勞働の弊害といふが如き慘澹たる事實の伴うたことは否まれないが、兎にも角にも此變化が固定せる家長の主權を破壞して、個人の自由平等てふ新しき理想の下に、人間關係を調節し直す道を開いた功績は蔽ふことが出來ない。此變化に伴ふて生れた婦人の賃銀勞働の如きも、たとへ一面に於て悲慘なる犧牲を出すにもせよ、男子に依らずして生活するの機會と能力とを婦人に齎らし、依て男子專制の兩性關係に一生面を開かしめた點に於て、明らかに進歩の一段階であると看做すことが出來る。實際今日の所、婦人の職業生活がいかに多くの弊害を伴ふにした所で、家長の壓制や意に染まぬ結婚生活を遁れる手段は、之を措いて外になく、謂はゞ之は、婦人が自主獨立の生活へ近づく第一の踏石なのであるから、排

斥に慣せずして、寧ろ大に、其發達と進化とを期待すべきである。

資本主義の社會は亦た、生産力を豐富にし共勞共働の風習を作りて來るべき共有制の地均しをした。各國に於ける勞働運動の發展は、其制度の到來がもはや時期の問題であることを語つて居る。各人がその力に應じて寄與し、必要に應じて消費することを許す社會に於てはもはや何人も我意を通し、專權を振ふことが不可能である。斯くて男女は一切の經濟的顧慮を忘れ、打算を忘れて、只だ愛情の故に、相手の美や才能や人格の故に結合する。斯くて外に向つて個々の家族が互に家長てふ專制君主を頂き、個有の財産を有する小獨立國として相爭ひ相競ひ、内に於ては個人の自由や幸福が、家長の便宜や其偏見や、又一家の有する些少の財産保護の爲めに犧牲にせらるる、愚かな制度は廢滅に歸し、個人はその環境の爲めに無意義な壓制を蒙ることなく、只だその恩惠のみを享受することゝなるであらう。

四

時代の進運に伴はず、却てその障害を成して居る父權的家族制度が遂に廢滅した時、之に取つて代るべき兩性關係の樣式如何は、元より今日に於て豫想さるべくもない。然し兎に角、男女共に經濟上の顧慮を要せぬ社會に於ては、純粹の愛情のみに依る結合が行はれ、且つ相互の關係は絕對に平等であり得ること丈けは容易に信ぜられる。

今日私共か婦人に戀愛の自由なきを說く時、周圍の壓迫を排して自己の愛情の赴くが儘に結婚した少數の婦人の例を以て、其必ずしも不可能ならざる所以を主張する人々がある。又私共が男子專制の家族制度に抗議を申立てる時、特に女房孝行な夫や、特に女天下である家庭の實例に依て、其反駁を試みようとする人々がある。然しながら共等の例外は、一般的原則としての男尊女卑主義に何等の影響を與へるものではない。特に進歩的な男子が妻子の人格を尊重するとか、特に財産や、才能や、又は強き意思を有する婦人が、敢然自主自由の生活を爲し得るといふことは、總て少數者の持合に限られた特殊の例外であつて、其れ故に一般婦人の運命は毫も緩和せらるゝものではない。而して總ての婦人に向つて左樣いふ例外の例に學ぶことを强ゐるのは、酷であり不合理である。勿論個々の男女の心持次第で、制度の弊害が多少緩和されるのは事實であるが、然し其れとても制度其物の裡に潜む根本的缺陷を如何ともし得るもの

ではない。或一人の夫が其妻を世間並以上に尊重するとか、或家庭では妻の方が夫より勢力があるといふような孤立した個々の事實は、一般的原則としての男性支配の事實を――其事實より發する千種萬樣の悲劇を、毫も緩和するものではない。私共が反對するのは、或特定の人々の家庭生活ではなくて、一般的原則としての男性支配そのものなのである。

　そこで將來の社會に於て兩性の平等が現ぜられるとすれば、たとへ本人同士の希望で形式上今日の其れに類似した一夫一婦の同棲生活が營まれようとも、其内容は全く一變して居る。即ち夫婦はもはや主從ではなくて友人である。

　又男女は長い自由なる愛人の關係をもつこともあらう。而して婦人は、特定の夫をもつと否とに拘らず、其天職の權能として母の本能を滿たし得るに至るであらう。子供は父母の結合の形式如何を問はず、凡て各自の生得の權利に依て、平等に愛し尊重せられる。故に嫡子、庶子、私生兒の區別は撤廢せられ、子供は父母の戀愛の故に汚辱を蒙るの恐なく、一樣に同じ人類の子として、平等の撫育を受けるであらう。

　貞操は相互的のものとなる。先づ自ら之を守ることが相手方に之を要求する條件でなくてはならない。然しどの道、女子に對する此方面の制限は、既に女子に經濟上の自由ある以上、大に寛やかなものとなるであらう。女子が輕々しく男子に許すことは、總ての方面から見て決して得策ではない。故に最も理想に近い男子を得たる後、始めて之に許すのが上乘ではあらうが、實際の問題として、凡てのうら若い娘に左樣いふ冷靜な考察を求めるのは無理である。現に同性の愛人間ですら、相手を買被り、見誤りなどすることは決して珍らしくないのを思へば、異性に對する半ば夢心地の憧憬に冷靜な判斷を蔽はれ勝ちな年少女子に向つて、最初から愛人の選擇に遺漏なきを期待することは無理である。故に幼時より兩性の交際を自由にして、相手に對する正衡なる判斷に資せしむることは必要であるが、たとへ最初の判斷を誤つたからとて、其誤から生じた關係を永續させるにも當らず、又其れ故に尊い一生を葬り去るにも當らない。凡そ此世に何が慘酷であるからとて、一時不適當な異性の誘惑に隨つたが故に、青春の女子を罪人扱ひするほど酷な話はない。將來の女子は、如何なる戀愛をしようとも、決して其戀愛の故に卑しまるゝことなく、只だ戀愛を他の目的の犧牲とした時、社會の當然な輕蔑を蒙るに至るであらう。

　今日に於ては、離婚は女子にとつて無上の不幸と不名譽であると看做されて居る。然し心に染まぬ結婚生活は、離婚に幾倍する不幸と不名譽であるかを世人は省みない。離婚は不幸であ

るかも知れない、然も其不幸を敢て忍ばねばならなかつた程氣の毒な婦人に對して、世間は同情の代りに侮蔑を以てし、依つて其婦人の不幸を幾層倍にもせねば已まない。隨つて單に離別だけの不幸なら當然忍び得る婦人も、世人の侮蔑てふ一層大きな苦痛に恐れを成して、敢て不愉快、不自然な結婚生活を繼續することが少くない。今日の社會では、男子に十二分の非があり、女子には同情すべき點のみであつても、一旦離婚されたなれば、男子よりも女子の方が損な立場に立たされる。事情の如何に關らず、女子の離婚者は、道德上の前科者扱ひを受ける。女子に經濟的獨立の無い今日、殊に女子が久しい屈從に慣れて無感覺になり來つて居る今日、女子が好んで離婚を請求することは稀である。して見れば、離婚は自己の意思に反して、或は眞に已み難きよく／＼の事情に餘儀なくされた結果であると見るを至當とする。然るに斯樣な、制度や運命の悲慘なる犧牲者を、道德上の前科物視し、不幸の上に不幸を加へさせることは、果して人情に背かぬであらうか。『出戻り』『きずもの』是等の醜穢な言葉は、男性支配の社會と共に、永久に地球の上から拭ひ去られねばならぬ。

三

人類を一夜にして聖人君子に變へる靈藥の發明されぬ限り、或人が他人の上に自己の意思を強制し得るが如き制度を維持することには、恐るべき危險が伴ふ。又たとへ一夜にして全人類か聖人君子に變じ得たとしても、猶且つそういふ危險な制度を存續せしむることは無用である不正である。然も人類は今日の所、不完全極まる者である、近き將來に於ても容易に其不完全を脫却し得る見込はない。して見れば其不完全極まる人間の爲めには、成るべく其劣等な、反社會的本能に活動の機會を能へず、高尙な、優秀な方面の性質を發するに好都合な環境を提供するのが第一である。所で個人と個人との利害を相反撥せしめ融和協力を排して利己嫉視を存續の基礎條件とする私有財産制度は、人間の美德とその惡德と、果して孰れをより多く助けるものであらうか。

一階級に依る他階級の經濟的支配、女性に對する男性の經濟的支配總ての專制的支配中の最も基本的なものである是等の支配が廢せられた時、そこに始めて人間惡德を、無用にして不利益ならしむる自由平等の新社會が生まれる。斯して始めて男女は純眞なる愛情に依てのみ結合し、その純化せられた男女關係の中に、未來の人類は生れ且つ育くまれる。それが私共の目さす境地である。

婦人解放の實際運動

沖野岩三郎

□普通選擧の氣勢が高潮に達した時、原首相は議會解散の大鐵槌を揮つた。そして政友會の威信を天下に問はんと斷言した。

□時も時、我日本と同盟國である英國では、二月廿七日の下院で勞働黨の提出に係る女子參政權擴張案が滿場一致を以て可決された。そして其の結果、選擧人五百萬を增加するに至ると傳へられてゐる。

同盟國と言へば兄弟分であるが、どつちが兄さんか知らないが、一寸冷汗が出る。

□女子解放運動と云つても、日本の女子解放は西洋のやうな系統から來てゐるのでは無い。由來日本は女尊男卑の國で、天照太神以後神功皇后を始め隨分女性の權力が男子の上に及んでゐる。天の安河原の『神はかり』といふ民衆議會は議長が女性であつたと思はれる。

芝居を見ても淨瑠璃を聞いても、日本の女といふものは世界稀なる『女士道』といふものに生きて居る。しかも夫れは單に權利を欲しいの生活の安定を與へよのと云ふのでは無く、眞劍に生命を賭して女の道に殉死しようといふのである。藝題を見ても、女の名が必ず先に出る、お半長右衛門、お七吉三、お染久松、お俊傳兵衛など數へるに遑が無い。

□私は今の女子解放の起原を羅馬の家長至上主義の弊害打破から來たといふ說を首肯する。しかし夫れは其の原因が何所にあるにせよ、世界の人類が互ひに『友喰ひ』をして居る世の中では其の經濟的の影響から逃れる事は不可能である。從つて原因がどうであらうが。過去がどうであらうが、そんな事は蹂躙つて、一樣に改造の機運が來る。夫れは白奴と黑奴とを問はないお七吉三と吉三お七とを問はない。經濟問題の産んだ婦人解放問題は何等の歷史を有せずとも哲理を有せずとも、自然に現狀打破の機運を造る。

□本年の二月は普選運動で隨分大騒ぎをした。しかし彼の運動者の頭に『婦人參政』といふ考を有した人が、どれだけ有つたらう？　若しも彼の人達の言ふ普選なるものが、單に男子の選擧權のみを喧々敗々するのであつたなら、夫れはマダ此の問題の半分しか叫ばれて居ないのである。私は言ふ『日本人の半分は婦人である。』其の半數の國家を忘れて居て普通選擧と云へるであらうか。彼の人達の言ふ所は半數選擧である。

□故廣岡淺子は加島銀行の頭取であつた。學問もあつた、演説もした。しかし彼は婦人なるが爲に選擧權を與へられなかつた鳩山春子にも矢島揖子にも神近市子にも三谷民子にも與謝野晶子にも河合道子にも山川菊榮にも、福田榮子にも山脇房子にも山田わか子にも嘉悅孝子にも西川文子にも平塚雷鳥にも選擧權が無い。彼等は如何に侃諤の議論をしても高論卓說を吐いても彼等には一代議士を選擧する權利が無いとは理屈も何も要しない矛盾ではないか。

男と同じ税金を出しても、女には同じ權利を與へないといふ男女の相違は何所から出て來るのであらうか、夫れは男子は强くて女は弱い、男子は生を賭して國家の爲に盡すが女子は家事をするばかりだといふ議論から來た古い／＼感情問題である。換言すれば女は男よりも樂に暮すから其の埋合せとして權利を與へないといふ事になる。然るに今日では最早そんな感情問題は通用しない。男子が二年三年の兵役、幾度の戰陣に出るのと女が子を産む苦痛と何れが苦しいか、三人の子を産めば、三十ケ月の苦痛と、三回の死生の境を走る危險とを負擔するのである。生理學の發達した今日では女子の方が却つて男子よりも多くの犧牲者を國家の爲に出してゐる事を數へる。のみならず將來經濟狀態が漸々變動するに伴れて婦人が男子と同等の地位を占めて財界を司配するのは明である。で、私は今日の所謂普通選擧の運動よりも先づ婦人納税者に選擧權を與ふる事を要求しなければならないと思ふ。更に進んで税金限定を撤廢するといふならば、戸主制をも撤廢して總ての男女に權利を與へなければならない筈である。

□生活上の必要は男女共に同等の智識を要求するに到る。玆に於て男女共に同等の程度で勉强しなければならない。今頃女子を大學へ入れるの入れないのと云ふやうでは文明國でも五大國でもありはしない。日本の女學校の教科書を見よ。女子用、女子用と云つて無暗に低級にしたがる。女と男と夫れだけ頭が相違してゐると思ふのが抑もの誤りである。女學校も中學校も、

高等學校も、大學校も皆な同等にして教育して見るがいゝ、女が男に負ける者と思ひ詰めてゐた迷信は一時に消え去るであらう。夫れから女子を中學高等學校大學の教師にドシ〳〵採用するが宜い。小學教師や中學の教師は女子が最も適當だと思ふ、さうなれば理科や數學の教授に『氣を付け！』の姿勢も必要がなくて今日よりも餘程いゝ教育が出來る。

私の知人が米國で苦學する爲に或る教會のセツキストンになつた男がある。そして夫れが教會の會報に掲載されたのを見てセツキストンとは日本語で何といふのだらうと思つて和英辭典を引いて見ると『寺男』とあつた。古來寺男といふのは大抵馬鹿に决つてゐた。知人は其時『俺も馬鹿かなア。』と思つたさうである。日本でも今の時代に當つて、下男に入込んで、年が年中一生懸命に働いてそして僅に三十圓四十圓の年俸で滿足してゐる男は馬鹿の部類に入れられる人であらう。もう玄關番、書生といふやうな高等下男すら、壯士芝居の舞臺に名殘を留めてゐる。しかしマダ下女といふものが少々殘つてゐる。けれどもこれも段々と『下女種族』として篩ひ落された人種にのみせらるゝ職業となりつゝある。そこで私は今の婦人諸君が＝智識あり學力ある＝進んで此の下女になつて欲しい、そして大いに日本の家庭勞働を改良して欲しい。相當の給料を要求して相當の仕事をするに愧も何もない。婦人解放といふ事は、偉さうに權利振る事でなく、婦人諸君御自身達の多くの同性のしてゐる職業を高い位置に自ら引揚げる事は解放の實際である。選擧權を要求する事も宜い、學問をする事も宜い、しかし婦人諸君が今日の下女のやうな婦人多數のなしつゝある仕事をずんと高い位置に引揚ぐる運動は直ちに實行出來る事であつて有意義な事である。下女といふ名を廢して、ハラスキーパー、家庭整理人内政整理人、名前は何とでも高尙な名がつけられる。

□某縣では婦人を巡査に採用するといふ說があつた。官吏の半數は婦人で充分だと思ふ。何でも宜い。婦人をあらゆる方面に使用し活躍させる事、卽ち男だの女だのといふ區別を撤廢して國民全體が人間として働いて行くといふ事さへ出來れば、總てが解放である。

□婦人解放と共に考へねばならぬは公娼制度の問題である。どうしても今日のやうに法律で許可して淫を鬻がしむるといふ事は束縛である。手を握つた、キスをしたといふ一字一句の爲に發賣禁止を命ぜらるる野卑な小說よりも、一言一句の情話で興行禁止を命ぜらるゝ低級なお芝居よりも、遊廓の存在といふ事

は人生を實に卑猥化せしむる力を有してゐる。某縣の小學校教員が生徒を引率して修學旅行をした時の事であつた。小高い丘から大厦高樓が甍を連ねてゐるのを見た生徒は『先生彼の大きな家は何をする所ですか』と口々に尋ねた、先生は默つてゐたが、餘り執拗く問ふので『鼈甲細工の鴆毒を賣る所だ』と云つて答へたさうである、國家も政府も法律もこれを公許してある所で、しかも生徒に其の名を言ふを憚る場所建物があるといふのは何といふ矛看であらう、私は公娼制度よりも寧ろ私娼制度を宜いと思ふ、場所を限つて惡い事をして宜いのなら、公賊制度公殺人制度を設けて或區劃内だけで惡い事をさせればいゝでないか、種んな理屈は抜きにして平凡に無邪氣に考へて見て公娼制度といふ事が、多くの婦人を束縛してゐるといふ事は明である、公娼の全廢といふ事と淫賣の全廢といふ事とは意味が違ふ先づ斯る婦人を輕蔑した法律規則を我々國民の間から撤去したいといふ事を叫ばねばならない、淫賣云々の如きは事道德問題に屬するもので各自の品性を高むる事に因つて自然に消滅する事である。

身體上より見たる女子解放問題

文學博士
醫學博士　富士川游

身體の上から見て、女子と男子との間に一定の相異の存することは普ねく人の知る所である。生殖器及び性慾の方向は固より言ふまでもなく、その他に女子と男子との身體が、各種の點に於て相違して居ることは解剖學上、生理學上及び病理學上の研究によりて已に明瞭に示されて居る。學術上の言葉で、これを二次性性徴と言つて居るが、この二次性性徴は獨り身體のみでなく、精神の方面にも現はれて、殊に感覺と智力との方面にありて女子と男子との間の相違が著しく認められる。女子にありて感情生活が著しく發達し、男子にありて抽象的思考が著しく發達して居ることは、心理學者の已に唱ふる所であるが、こ

の精神作用の相異は小兒の時代にあつて已に著しく明かに現はれて居る。或はこれを見て、大人の模倣であるといひ、或はこれを見て教育の結果であると主張する人もあるが、それが單一の模倣でなく、又教育の結果でないといふことは諸家の研究によつて明なる事實である。たとへば女の子が男の子に異なりて人形を弄ぶことを愛する類の如きは、決して偶然のことではなく、又單一の教育の結果でないといふことは疑もない次第で、これ等は皆先天性の本能であるとせられ、即ちそのものの先天性素質によるといはれて居る。

○

此の如く女子と男子とにありて、身體及び精神の上に、各自特殊の二次性性徴が現はれて居るのは、畢竟、何の故であるかといふに、それは、人類の間にあつて、その個性及び種族の保存を圖るがために、生殖生活が行はれるといふことに基づくのである。詳かに言へば人類の個性及び種族保存のために、生殖生活が行はれるに方りて、男子と女子との間に、その身體上及び精神上の特殊によりて、分業が行はれ、ますます此の分業が發展して行く内に、適應の作用によりて、その二次性性徴が著明となり、遂に今日に及びてその二次性性徴が一個人に現はるる場合はこれを先天性素質と稱すべきに至つたのである。故に女子と男子との身體上及び精神上に一定の相異の存在する所以は、畢竟女子と男子との自然的職業の相異に基づくものであるといはねばならぬ。

獨逸の婦人科學の泰斗セルハイム教授は「女子の判斷及び其文化發展に對する意義」と題する著述に於て、女子の自然的職業は、婚姻生活に參加して、小兒を産出しこれによりてその家庭國家及び文化に資するにありと論じて居る。セルハイム教授の意見に據れば、此の如き、自然的職業の上から見て女子と男子と同權であるといふことは勿論である。しかし女子と、男子とにありて、その能力が同等であるといふことは出來ぬ。而して女子と男子と、その能力の相異を示す所に文化の發展が現はれるのである、實際に於て文化發展の歷史を案ずれば、女子と男子との精神的作業は互に區分せられて、男子は主に智力的の方面に發展し、女子は主に感情的の方面に發展して居る。これ全くセルハイム教授が言ふ所の女子の自然的職業に基づきてその精神的作用がそれに適應して發育したるためであらう。然るに輓近に至りてその因習的地位から女子を解放して、男子と同等の精神的作業をなさしむるまでに到らしめむとの運動が起つ

た。固よりこの女子解放は、決して人工的に起されたる運動ではなく、一部は人類社會の上位に居るもの變性(Degneeration)の始まりたるがために、それに關聯して、男子の權威が低下したると、父權が衰弱したるに基づき一部は晩近の結婚及び經濟的生活に伴なひて現はるる所の幾多の障碍が認められたるに基づきたるものであるから、この運動には生物學上の根據があるといふことを知らねばならぬ。故に、晩近の女子解放の問題につきては諸般の方面から研究するの必要あることは言ふまでもないが、身體的方面よりこれを議論することも亦必要であると信ずるから、余はここに身體上から見たる點につきて略述しようと思ふ。

○

晩近の女子解放問題をば、身體上から見て議論するに至りては、先づ人類の精神の發達の自然史を調査して、女子が文化の發展につきて如何なるはたらきをなしたかといふことを知るの必要がある。しかし、このことにつきて詳細に敍述することは本篇の目的でないから、ここには略してただ要點のみを擧げる文化の歴史を案ずると健康の女子は、男子の身體的及び精神的特性を上進することに與つて大に力があつた。殊に、獨逸のライプマイル氏が能才(Talent)及び天才(Genie)の研究によりて得たる結論に據ると、男子の能才及び天才の培養にあたりて、女子が多大のはたらきをなすといふことは明瞭である。ライプマイル氏の説に據ると、藝術的能力は父よりも又母よりも共に遺傳すべきとは固より疑のない事業であるが、その程度及び勢力が互に相同じからざるものである。能才及び天才の中で、殊に感情生活を主とする場合のものは、父よりも母の方から遺傳することが多い。又文化の歴史を見ると、男子にありては、主に生存競爭のために働き、家族保護の任に當りて大に努力せねばならぬために、その腦髓はこの點に向つて著明の發達をなすやうになつた。而して此の如くにして發達せしめられたる男子の智力の作用はその男子よりしてその子孫たる男子系に傳ふるのみでなく、女子系にも同樣にこれを傳ふるのであるが、女子はこれを用ふる機會の尠ないためと、又恐くは男子と女子との間に一定の生物學的差異があるために、その智力は潜在性となり又は發育することが僅少の度に止まつて居るのである。しかしながら女子は、此の如く父方よりして遺傳せられて而かも潜伏性に止まれる性格を全然同一の強さに於て、又は減弱せる程度に於て、これをその男子系の子孫に傳ふるの力を持つて居る。

それによりて、女子は能才及び天才の培養の上に常に多大のはたらきをなして居るといふことが明瞭である。

又ライブマイル氏の研究に據れば、能才及び天才の遺傳の有様を見るに、男子と女子とにありて、互に同じからざる所がある。卽ち男子は主に性格の根基となるべきものを遺傳し、女子は主に藝術的の感情を遺傳する。而して、概していふに、能才及び天才の遺傳にありて、男子よりも女子の方が重要の地位を占めて居る。その故は女子はその先祖の能才及び天才的性格を潜在性に傳ふるからである。

その他、諸家の研究の成績に據りて考ふるに、人類の文化が男子と女子との分業によつて發達したといふことは明瞭で、中にも男子は智力の方面を主とし、女子は感情の方面を主としたことは人類の精神の發達の自然史に於て證明せられたる事實である。

○

此の如く、人類の精神の發達に於ける男子と女子との分業は人類の歴史ありてより以來、幾千萬の世代を重ねて行はれたる事實であつて、それがためには、男子と女子とはその有機的、身體的及び精神的機能に於て、それに適應する所の變化を起し、變化したるものが遺傳によりて固定せられて以て今日に至つたのである。自然は因より突如として發呈する所のものではないのである。

今若し、此の如く幾千萬の世代を經て、漸次に適應しつつ、身體的及び精神的に固定したる習性を、一個の世代の內に、敎育の方法等によつてこれを變化せむとするときは、それがために何れかの方向に障碍を現はすべきことは言ふまでもない。しかしながらその人が一生の間に獲得したるところの短時間の適應と習性とは、もしそれが善きものであつても、又は惡しきものであつても、すこしもこれを變化せしめて、すこしもこれに對する反應又は障碍を呈することが無い場合がある。これは全く各個の有機體にすべて調和を欲するの傾向があるためである。故に女子の能才及び天才を培養するが不可能でないといふことは固より言ふまでもないことで、今ここで言ふのは、女子の能才及び天才を培發することが不可能であるといふのではなく、たゞ幾千億の世代の間に適應し、變化し、遂に習性となりたるものを一時に變化することを企つる場合に一定の障碍が現はれるといふ點である。

○

歴史前時代の人類の頭蓋骨に就て見ると、男子と女子との間

の差異は甚だ僅微である。故に最古の人類にありて、男子と女子との腦髓の差異が甚だ小であつたといふことは、人類に近き動物の腦髓にありて見らるると同様であるといふことが推定せられた。然し乍ら、その智力と一定の性格に於ては、男子と女子との間に差異があることは、高等の動物にありて認められると同樣である。文化の歷史の上から見ると、已に前にも言ふ如く、男子と女子との間に作業の分化が行はれ、女子は漸次に經濟的に男子に從屬するやうになり、生存競存の難から免かれ家庭の內にあつて安穩に生活するやうになり、それがために一定の性質の消失するを見ることに、丁度家畜に於けると同樣になつたのである。此の如くにして幾千萬の世代を經過する間に、文化生活の發展と共に作業の分化が益々著しくなり、又その生物學的結果がこれに續きて現はれ、それがために男子と女子との身體に差別を現はすの原因となり、中にも生存競爭のための器官として最も重要なる腦髓に於て、大さと重さとの上に、男子と女子との相違を呈するに至つたのである。男子はどこまでも自己及び妻子の生存のために、外敵と競爭するの任に當るがために、智力を倍養することの必要を生じたけれども、女子はこれに反して、主に小兒の敎育に任ずるために女子的の二次性徵を强く培養して、性の競爭に際して平衡を保つことの必要上、殊に感情の培養をつとむるやうになつた。

○

文化の歷史から見て、男子と女子との精神能力の間に、此の如き根本的の差異あるにより、女子の能才及び天才を現はすことを得るや否やといふことに就て、種々の議論が現はれるやうになつた。多數の人々の說に據ると、女子と雖も男子と同じく能才及び天才を現はすことが出來る、しかも今日まで、能才及び天才が女子の間に現はれざるのは、女子にあつては、この方面の練習が無いのとこれまでの精神作業の分化が累をなしたのであるといふことである。然るに、この說に反對して、女子は客觀性を能くせさるがために、天才にはなれないと極言する人々がある。ワイニンゲル氏の如き、此派の一人で、女子には能才及び天才の素因の培養上に必要のものと認められる所の根基性質が缺けて居ると言つて居る。メービウス氏の如きは更に一歩を進めて女子は眞理を愛するの心を缺き、論理的思考の能力なく、又客觀的思考の能力を有せざるが故に、女子は到底生理的精神薄弱たることを免れぬものであると主張して居る。

○

然れどもワイニンゲル氏やメービウス氏などがいふ所の女子の精神能力の弱點は、その長き文化生活の間に、習性となりたるもので、能才的素質は女子にありても男子と同樣に存在して居るといふことは諸家の證明せる通ほりである。從て女子にありても血液の混交が十分佳良である以上、男子と同じく天才的素質の現ばれるといふことも明確である。それが今日まで天才として發現せざりしは全く、これまで長い時日の間に行はれたる分業と、それに關聯したる教育の結果であるといはねばならぬ。故に教育及び環境の關係が天才的素質の發達に恰適したる場合には女子にも天才が發現して居る。殊に感情に基づく所の藝術及び宗教の範圍にありては女子の天才を見ることが出來る。これを要するに女子にあつて能才及び天才を現はすことは可能である、しかし女子の能才及び天才は現時の狀態にては男子の能才及び天才の培養の程度にまで達することは出來ぬ。これ女子にありては、能才及び天才の培養に必要なる性質が男子に於けるよりも發育が弱いためである。それ故にこれも女子がこれまで長い世代の間分業の狀態の下にありしがためといはねばならぬ。

○

能才及び天才は人類の文化生活にありて重要の因子である。一個の國民の消長は能才及び天才的家族の培養と相關係して居る。若し能才的及び天才的の家族の數が益々多ければ多きほどその國民の生存競爭に對する威力は強くなる。それ故に、能才及び天才の培養は女子にありても、男子に於けると同樣にます〳〵これをつとむべきことは無論である。然れども女子の能才及び天才を培養するがためには、既に上段に說きたるが如く、文化生活に於ける男女分業の關係を破却し、從てこれまでの經濟的、政治的及び生物學的關係を破壞的に變更せねばならぬ。それが文化人類に向つて何等の障碍を致すことが無いか。宜しく研究すべき問題である。

○

從來の男女兩性の精神的作業の分化の狀況にありて、女子に主として重要とせられたる感情生活の培養で、それが文化人類の上に重要とせられ、一定の二次性性徵殊に母的感情の培養と併せて行はれて居つた。而してこの感情は從來の分業の狀況の下にありては生存競爭のために妨げられることなく、男子から保護せられ、殊に佳良の地位のものにありては、練習と昇進とによりて世代を重ぬるに從ふて漸次に培養せられ、それが遺傳せ

られて固定さるゝに至つたのである。しかるに女子が從來の因習的地位から解放せられて、男子と同じく生存競爭に對して努力するやうになり、男子に對抗して天才的素質の培養をつとむることとなれば、感情生活の發達は著しく障碍を受くることになる。感情生活の發達が著しく障碍を受くるに從ひて天才的素質、殊に感情に本づく所の藝術の方面に於て著しく障碍を受くるに至るのである。

○

從來の精神的作業の分化を變更することが、此の如くに生物學上の障碍を起す外に、猶ほそれが人類の文化生活に對して、著しく不良の影響を及ぼすことに注意せねばならぬ。即ち從來の状況にありては、能才及び天才は男子系にて滅亡するのが常で、女子系は永く滅亡するに至らぬのが規則である。その故は男子にありては生存競爭のために障碍を受くることが無いために、その生活が自然に適合し、腦髓の過勞を起すことが無いためである。從つて女子が男子と同じく生存競爭に對して努力するやうになれば、腦髓の過勞を致し、その結果として身體及び精神を傷害し、これによりて能才及び天才家族の女子系が滅亡するやうになる。ライプマイル氏は能才及び天才的家族の男子系が滅亡する所以を研究して、腦髓の過勞は生殖腺の力を傷づくることが著しいために、それが滅亡の原因の一とつとなることを認めたが、女子にありてはこの關係は一層重要であるからそれが滅亡の原因の一とつとすることは言ふまでもない。ライプマイル氏の説に據れば、天才にありて、生殖腺機能の廢絶することに甚だ著明で、天才の最大多數は結婚せず、たとひ結婚するも小兒を産生することが甚だ尠ない。能才にありては、生殖腺の衰弱することは明かに認められる。但し、男子の能才にありては婚姻することは尋常であり、又小兒を産生せざる場合も少數であるが、女子の能才はこれに反して多くは結婚せずたとひ結婚するもその子孫は著しく薄弱にして、それが滅亡することは男子の能才に於けるよりも速かである。米國にありては已に多數の世代の間に女子の能才を培養することが行はれて居ることは人の已に知る所であるが、ミュンステルベルグ氏の報告に據れば、米國に於ける黒人の死亡より出産の過剩なること人口一〇〇〇に對する一七・四である他より移住し來りたる兩親の間にありて米國にて生れたる小兒に就て調査するときに出産過剩は四五六の割合である（多くは貧困のもの）これに反して兩親が既に米國にて生まれたる家族の出産過剩は僅に三八に止

まつて居る。女子運動が盛で、女子の能才の培養が强く行はれて居る地方ではその上流社會に於ける出產の數が、死亡の數を超過せず、却て出產數が死亡數の下位にあること人口一〇〇〇に對する一〇・四〇である。しかるに同一地方にありて下等社會の家族にありては出產過剩が五八・五の割合であることが認められるのである。出產數の減却の原因の中には人工的避姙法が實施せらるゝといふこともあるであらう、しかしながら單に人工的避姙法の實施といふことのみにては說明することの出來ぬほどに出產數が減却して居るといふことは、明かに出產力の減却せることを證明するものである。卽ち天才的素質の培養がその感作を生殖腺の上に及ぼして、その機能を衰弱せしむることを確證するものである。

○

從來の男女の分業が、暗黑の裏面を有して居るといふことは固より疑を容れぬ所である。故にこゝに女子運動が起りてその暗黑の斑點を除くことに努力するは誠に道理至極の次第である。ステトソン氏に據ると、これまで多數の世代の間に女子に對して極端なる感情生活の培養がつとめられたるがために、女子の性的負荷が過度となり、それがために文化人類の社會的經濟的生活が低級の道途に入らねばならぬやうになつた。此の如くにして、殆ど病的の極端まで培養せられたる性的感情は一面にありては失戀のために謀殺及び自殺を發呈せしめ、又一面にありては性慾の倒錯を致さしむるやうになつた。しかしながら、此の如き不良の性慾關係は、單にこれを男女の分業の結果として見るべきものではなく、むしろその濫用の結果と見るべきものに外ならぬこと、丁度文化紀元の有害的結果が文化そのものゝためでなく、人類が文化の進步を濫用するがためであると同一である。この場合に方りて過度の文化から自然狀態に復歸するを要せず、不自然的なる文化生活の發展を中斷し、而して健全なる文化生活の利益を採用するのが合理的である。されど同じく身體上から見て女子解放の問題を考ふるとき根本的の破壞を企つる所の革命よりは、惡を去り善を採る所の革新の方が優越して居るといふことが斷言せられる。

○

輓近の女子解放は、生殖生活に於ける女子の地位を變更して身體的にも、精神的にも、男子と同樣のものとなし、これによりて男子と女子との二次性性徵の差異を尠なくせずとすることに歸するものであるから、その經濟的方面及び社會的方面は現

も角晩近の女子解放問題は生物學的の根據を有するものと考へねばならぬ。晩近の女子解放の結果として女子が男子化すべきは無論のことであるが、身體上から見て、それが危險であることは已に上段に叙述した通ほりである。アルベルト、モル氏の如きは、女子の男子化は必しも女子解放の必要の結果ではないと論じて居るが、それは經濟的及び社會的方面より見ての考である。即ち余がいふ所の革新的女子解放である。それが革命的のものである以上、自然的の女子の職業を變更するのであるから、こゝに必ず身體の障碍が現はるべきである。故にこの問題を解決せんとするに就ては、自然科學的に一層深く、これを考ふることが必要であると余は信ずる。

婦人解放の問題

有島武郎

解放、解放といふ言葉が頻りに呼ばれるが、婦人の解放といふやうな事に關しても、それを呼ぶ人は果してその解放の結果を徹底的に逆視して叫んでゐるのだらうか。

婦人の解放が提唱されその相當した結果に到着した曉には、家族生活が根柢的に破壞されると云ふ事を、叫ぶものは覺悟しそれに危惧を抱いてゐないのか。若しそれを覺悟してゐないものは、而してさういふ結果に危惧を抱くものは、斷然婦人解放の提唱からその聲を潛めてもらひたいものだと思ふ。何故ならさういふ人は結局、勞資問題に於ける溫情主義者と同様にこの問題の純一味を濁す外の用をなし得ない人々であるからだ。

かゝる根本的な問題に嘴を入れようとならば、問題が根本的であるだけに、其實現によつて結果される根本的な生活様式の變革と云ふ事を徹底的に考察した上で嘴を入れてもらひたい。それ無しに輕々しくかゝる事を口にするのは、第一言論の權威を安價にし、第二にそれを口にする人の恥辱となる。

到底そんな事を云ふ柄ではない人から、結局解放の不可能なやうな條件付きで解放贊成の說を聞かされるのは、聞かされるものに取つて眞に堪へ得られない苦痛だ。

新刊紹介

■犯罪者（シルレル原作齋藤高德譯）有名な獨逸の詩人シルレルの小說「犯罪者」と「降神術者」二編を譯し收めてある此の詩人の面影を窺ふに足る（價金九拾五錢神田仲猿樂町越山堂）

■織匠（ハウプトマン原作宮原晃一郎譯）現時我文壇に勞働文學なる言葉があるそれに嵌まるかどうかは知らないが本書は資本家と勞働者の間柄を如實に活寫して一篇の戯曲を作してゐる獨文豪ハウプトマンの腕前を見るべく譯文も明快である勞働文藝叢書の第一篇（價金壹圓四拾錢牛込神樂町叢文閣）

■靜かなる世界（谷崎精二著）著者の短篇小說「再燃」以下九篇を收めたるもの靜かなる世界を題したる如く眞に觀照の眼の靜かに澄んで然かも緊密に事象を寫し出してゐるこの滋味な好藝品を見るがよい（價金壹圓六拾錢牛込横寺町聚英閣）

■勞働者の觀たるマルクスとクロポトキン（遠藤無水譯述）近世社會主義の祖述たるマルクスに對するスパルゴの評集及、近世無政府主義の建設者たるクロポトキンの自叙傳の譯述にして興味深き讀物である。（定價壹圓八拾錢文泉堂發行）

■十六人集（片上伸相馬御風共編）小川未明氏一家流行寒冒にて臥床にありそれを見舞ふ爲め現文壇十六家の創作を聚成一册となして出版せるもの片上伸氏序を書き亦た坪内逍遙博士跋として（且つて本誌創刊等に寄せたる「黒琴に關する私の追憶」）を寄せてゐる（定價金壹圓八十錢牛込矢來新潮社發兌）

■文章辭典（高須梅溪著）シーズンの描寫植物の描寫、天候についての描寫、光線の描寫、地象、都會と田舍、動物、人間、等の部門に分ちて作文法を示し長い間編者の輯錄したるものを主としたるもので作文の資料五百餘點を編む（定價貳圓拾錢飯田町一ノ二天祐社）

■囚はれたる經濟學（大西猪之介著）小樽高商教授として新思想界に著はれたる著者の見識を示すに足るもの、消極的研究として「囚はれたる經濟學」積極的研究として「生と學との距離」の二大項目に分ちて說いて居る、哲學と經濟學史とを連絡せんとする企圖に全力を傾けたる著者の立場は偉とすべし（定價貳圓五拾錢日本橋本石町三貴文館）

■戀愛の社會的意義（山田わか著）婦人問題の解決は人生のベネである愛慾即戀愛を正當に整理し、より精錬し、より高尚にしより豐富にする事に依つても解決すべきであるとの見地に立ち、著者一流の穩健眞摯なる態度を以て詳論せるもの蓋し婦人問題參考書として必讀すべきである（定價壹圓八拾錢東洋出版社發行）

■正義と自由（中澤臨川著）社會の目的は人類が達し得らるゝ最高善の實現にあり、而かも並は萬人に共通のものであらねばならぬその立場に依り論ぜられたる正義と自由以下ラッセルの立場、急進思想家の陷穽、勞働と人生等氏が最近公にせられたる有益なる論文集にして近來の好著たるを失はぬ。（定價壹圓六錢天祐社發行）



批評のために

片上伸

人間の世の中で、人と人とが出くはすたびに、心にもない——といふ程ではないまでも、心の片隅の少しくすぐツたいやうな、その場かぎりのから世辭ばかりを言ひあつてゐたとしたら、どうであらう。當分は滑らかさうにつきあひも出來るであらうが、やがて隨分さびしい氣がして來るであらう。少なくとも私たちにはさう思はれる。うそも方便と言ふから、から世辭もまたその一種に外ならぬ方便でもあらう。なるほどちよいとの間だけは、場合によつてはそれもまんざら惡い氣持ちにはさせまい。うそにも褒められるのはうれしいといふのが、謂はゆる世間の人情でもあらう。しかし考へても見たまへ、人間と人間とが出くはして、その人間たちの生活に就いて何等かの考へが述べられるといふ場合に、いつも〳〵それが相手を褒めることに限るとなつたら、勢ひから世辭でも言はずにはゐられなくなるであらうし、そしてそれは隨分退屈な寂しいまた苦しい氣持ちを當人たちに懷かせることにもなるであらうではないか。昔の芝居の——いや芝居ばかりではない現實に生きてもゐたに違ひないわがまゝな世間見ずのお殿さまか何かなら、人間といふものは凡て顏を見るたびに自分を褒めそやしてくれるものと思ひ込んで、——或ひはさう思ひ込むなどといふほどに自分の意識を働かして見ることさへなしに、世の中とはこんなものといふ氣で平氣で暮らしてもゐられたらうが、さもない限りは、さういふ世界で生きて行くことは隨分寂しくて空虛でたまらないだらう。現にその昔のお殿さまの中にさへ、家來のから褒めから世辭にうんざりして、本當のことを自分に向つて言つて貰ひたい氣になつたといふやうな例があつ

たといふではないか。史實の上ではともかく、つひ近頃の文藝上の作品にも、さういふ風な解釋で忠直卿といふ人の生活を描いたものがあつたではないか。

こんなことは分りきつた話だ。それだのに、その分りきつたことを言はなければ分らなさゝうな人たちが、自分の周圍にもぞく／＼してゐて、うるさくほそ／＼と何か言つてゐるのを聞かされてゐたとして見たまへ。隨分やり切れないといふ感じがするであらう。

實際、自分たちの周圍には、あまりにものの分らない、出たらめを平氣で言つてゐる人たちが多すぎるやうだ。氣が知れないとでも言つてしまはなければ、ちよつと批評する言葉にも苦しむやうな言說があまりに多すぎるやうだ。しかもまた、たゞ氣が知れない人たちだと言つてのけてばかりゐられないやうな場合であつたとして見たまへ、尙更やり切れないではないか。實にうんざりするであらうではないか。實際かういふやり切れない、うんざりせられた氣分は疲勞の氣分である。出來ることなら默つてゐたい。默つてゐるといふのは、念のために斷つて置くが、口から言葉を出さずにゐるとか、筆で文章を書かずに置くとかいふだけの意味ではない。そんなやり切れないやうな、うんざりさせられるやうな出たらめや、ものの分らない言說を、全く問題にしないで、心にかけないで置くといふ意味である。その意味で、心の中が何の響きをも發することなく沈默してゐられたらといふ氣さへするといふのである。しかし、心の中で小うるさくやり切れないと思ふ以上は、口で言ふのも言はぬのも、自分の心もちにとつては結局一つである。言葉でなく文章でなくとも、いつかはその心もちは何かの折を得て出て來るに違ひない。筆を執つて文藝の批評文を書かずとも、友人との坐談の間に、靜かな夜の思考の中に、やはり自然に出て來ずにはゐない。それでもなるべく言葉にも出さず文章にも書かずに置かうといふ氣もするが、やはりつひ何かのきツかけがあると出て來る。それを出すことが、自分の生活を何程も增減しないといふやうな巧利的な考へに傾くこともないではないが、――文學通論のおさらへをするのはたまらないといふやうな氣のして來ることもあるが、やつぱり靜かに考へて見れば、言はずにそのまゝで打ちやつて置かない方

がいゝのだといふ氣持ちになつて來る。自分の言ふことが人に何程のものを與へるか、また人から何程のものを奪ふかは知らないが、更にまだ、自分の言ふことによつて、自分自から何程のものを增したり減じたりするかも知らないが、――少くともそれ等のことは問ふことをやめて、それがたとひ、今人古人の多くの言ひ古し說き古した文學概說の繰り返しに過ぎなくなるにしても、とにかくそれ等の點は顧慮しないで、思ふだけのことは言はうといふ氣になる。私がこんな文章を書いてゐる今の氣持ちはさうである。またそれであつて一向差し支へはない。餘計な、言はずもがなのことを言つてゐるのではない。默つてゐたいといふ氣のするのは、よく考へて見ると、そんなものの分らない、出たらめな、取りとめのつかないやうな言說がそこらにひよこ〳〵出て來なければいゝのにといふ心持ちからである。そんな分らない、口さきの、からな、取りとめのないことを言つてばかりゐないで、同じものを言つたり文章を書いたりするのなら、もつとよく考へて、もつとよく自分の胸の中で哺みあたゝめて、自分の心の底のあたゝかみのある眞實を言つてくれゝばいゝのにといふ心持ちからである。さういふ言說でさへあつてくれたなら、いかにそれが不整頓で、前後してゐようと、斷片的で詳說してなからうと、その眞意は人の胸に通ひ、その言說のぬくもりは人の心の底をあたゝめて呉れるであらう。そして私たちは安心して、信賴して、快く人の言說を聽くことが出來るであらう。自分の沈默は沈默でなくて、直ちに共鳴であるであらう。やり切れないやうな疲勞の感じなどの心に生じよう筈がない。

思ふだけのことは言ふにしても、一つ物足りない氣のすることは、言ふことの大部分が、とかく近頃は啓蒙的で、間違ひを正すといふやうな傾きのものが多くなりがちだといふことである。それがせめて破邪的といふ程にでも行くと、それならそれでまた張りあひもあらうが、何だかそれほどの氣になれないところがある。小うるさく、やり切れない感じはするが、全く打ちやつて置くほど無關心にもなれないといふのが眞實である。また全く打ちやつて置くほど無關心になれないのにも理由がないではない。一體世間一般に、時代の動搖不安に關するいろ〳〵の方面の問題に就いての言

說が、やはり今のところは間違ひを正してもの〻道理を敎へるといふ程度にしか來てゐない。一種の啓蒙時代である。もの〻考へ方が、どの方面の問題にしても、まだ〳〵大ざッぱで、態度があらくて、駈引きや妥協が隨分多くて、腹の底からせき上げて來るもの〻力に迫られて、じつとしてはゐられないといふ程に切實に緊張してゐない。この事はこ〻で言つてゐると長くなりさうだから、序での話に止めて置く。さういふ時代の調子と文學との關係に就いては別に論がなくてはならない。しかしそれはそれとして、今の文學に就いて何か言はうとするときに、いつも氣のつくのは、私たちの言はうとすることが、とかく啓蒙的な調子のものになりがちだといふことである。啓蒙的な調子といふのは、かくれ蔽はれてゐるよきものを開き現はさうとする傾きをいふのである。不自然に、不合理に、出たらめに、亂暴に、我がまゝ勝手に、抑へられたり曲げられたりゆがめられたり無視されたりしてゐる正しい眞實を、さういふ不當な理不盡な亂暴な取り扱ひをするものの手から救ひ出さうとすることを指すのである。しかもまた、その不自然な不合理な、出たらめな、亂暴な我がまゝな取り扱ひぶりといふのが、――ものの考へかたといふのが、それが亂暴で出たらめで不合理で我がまゝであることは、少し落ちついて考へて見たら誰にでも直ぐ分りさうな筈の、極めて明らかな簡單なことなのである。そんなことが分らないのかと言ひたくなるやうな間違ひを、臆面もなく平氣でやつてゐて、しかも得意になつてゐるやうなのである。間違ひそのものは分り切つたことなのだが、それをさも正しいことのやうに言ひ張つたり、平氣な顏でやり通して見たりするのである。あんまり分り切つたことを分らない顏で言つてゐるので、相手にしてとやかく言ふのが馬鹿々々しいやうな氣がするのである。そんなことを今更言はなくつたつて分つてゐさうなものぢやないかといふ氣がするのである。それで少し默つて見てゐると、いゝ氣になつてやツぱしやつてゐるので、困つた人だといふ氣もすれば、一體どうしたといふのだらう、氣の知れない人たちだといふ氣もするのである。傍へ行つてさう言つてやらうかとも思ふが、それを言ふのは、分り切つたことを事々しく言ふやうな氣がして（また實際さうなのだが）一言はずにすむものなら言はずにすました方がいゝとも思ふのである。その中に、さういふ人たちは、誰も何とも言つて咎めな

いので、咎めないどころか、中には眞面目に贊成して見たり、おもしろがつて見たりするものさへ出て來るので、――いやそれだけならまだしも、折角それを間違つてゐると言ふ人が出て來ても、その間違つてゐるといふ人自身の言ふことが見當違ひであつたりして、却つてその批評を受ける方の人たちに、批評するものを輕蔑させ、變な自惚を持たせるやうなことにさへなつたりして、實にこれではやり切れないといふ感じを起こさせるのである。たま〳〵正しさうな殊勝らしいことを言ふ人たちがそこらにゐたところで、それがいかにも弱々しい、腹に響かない、しどろもどろの、上づつた聲だから、亂婆な相手はまるで耳の戸口へも入れはしない。騷々しく――と言つても大して響く聲などではないのだが、とにかくわや〳〵と騷々しくて、かういふ中でものを言ふのは、可なりの骨折であり辛抱を要するといふ氣がする。それがまた、爭つてゐるやうな褒め合つてゐるやうな、言ひたい放題あとさき構はず言ひ合つてゐるやうな、さうかと思ふと頻りに外國の批評家や學者の名前を持ち出して自家の言說を權威づけようとして見たり、殆んど取りとめのつかない有樣なのである。

分り切つてゐる筈のことが分らなかつたり、どこを本音として相手にしていゝのか分らなかつたりするものを、一々相手にして彼れ是れ言ふには當らないといふ氣もする。實際馬鹿々々しいといふ氣もする。隨つて一層多く疲勞の感じも伴ふ。そんなつまらない幼稚な低級な輕薄な文壇といふものを、中んづく批評壇といふものを、相手にして說くだけ野暮ぞ。といふ風に思ふ人のあるのも一應たしかに尤もである。――『今の批評家の多くは、たゞ文壇相手のことだけしか述べない、文藝雜誌がなくなつたら、書くべき場所も必要もないことばかりしか書かない。凡て第二義、第三義の言說である。だが直接人生に呼びかけをしない批評家は、作品に描かれただけの人生しかわからない批評家は、文壇には用があつても私たちには用がない。而して文壇もやがて彼等の存在を必要としなくなるかも知れない』（谷崎精二君の「靜かに生くる者の惱み」新潮三月號所載）――といふ言葉の意味も、私には受け入れることが出來る。この人の激語

の中に、この言をなす人が何を言はうとしたかを味ひ解くべきである。この言葉の區々たる文字や言ひあらはしかたの不備を咎めることをする前に、まづこの言葉の憤りが何を意味するかを感ずべきである。この激語を文字に拘泥して解することなしに、「直接人生に呼びかけをしない」といふ人の眞實に徹して考へて見るがよい。しかし、「直接人生に呼びかけをする」といふことは、文學を離れ文壇の問題を離れて、直ちに人生論をするといふ意味では勿論ない。文壇の問題を論ずることと少しも差し支へない。文壇相手の事を述べること少しも妨げない。たゞ、それ等を對象として考へたり論じたりするに當つて、その考へることを促し論ずることを敢てせしめる何ものかゞなくてはなるまい。何ものかそこに考察と論辯とを促す廣い深い根柢の力がなくてはなるまい。その力は必至の勢を有するものであつて、考へ且つ論ずることのすべてが、その力によつて促され、是認せられ、且つまた喜ばれる。この力が私たちの心の底にある限り、どんな問題であらうとも、それを正しく考へたり感じたりしないでゐることは、――自分がさうしてゐることだけでなく、人がさうしてゐることでも、氣になつて、不愉快で、落ち着いて平氣ではゐられない。文壇當面の紛々たる問題などは、前からも言ふ通り、實にやり切れないほどにうるさく亂暴なものであるにしても、それがうるさいからと言つて、平氣で知らない顔をしてゐられない。分り切つたことを分らないで無茶なことを言つたりしてゐればゐるほど、うるさいには違ひないが、尙更默つてはゐられないやうな氣がするであらう。文壇以内の些々たる問題の如く見えるものも、それを眞によく考へることの出來るものにとつては、決してつまらない、どうでもよいことではないのである。文壇相手にものを言ふことを難ずる意は、たま〳〵考へたり感じたりする力の足りない、ふやけた、弱々しい仲間の間だけで、いゝ加減に考へたり感じたりして、それでいゝ氣になつてお互ひに安心してゐるのを陋なりとするのであらねばならぬ。或ひはまた、さういふ弱々しい、もしくは徒らに小さかしい仲間だけで、いゝ加減に褒めたり貶したり爭つたり和解したりして、それでいゝ氣になつてお互ひに安心してゐるのを陋なりとするのであらねばならぬ。

人はいつでも自分を褒めてくれるものと思つてゐるやうな昔のお殿さまにも、いつでも褒めてばかりゐられるのは哀しくたよりないやうな氣のする時が來る。忠直卿といふ人を主人公にした作品には、さういふ心の悩みが描かれてあつた。このたとへで言つて見ると、作者といふものの多くは、いつでも自分を褒めてゐて貰ひたい忠直卿ともいふべきである。自分の作品を非難するものに向つて恨骨髓に徹するなどと放言するのは、いかにも率直で淡泊でその點はいゝところであるが、少しナイーヴ過ぎて、反省心といふものの發達してゐない小供ならばともかく、率直淡泊がやゝ奔放に出過ぎたとでも言はうか、調子に乘つてわがまゝを言ひ過ぎるといふ感じがする。菊池寛君は、こりずまに人と作品との關係を論じて、人が是認せられる限り作品も同一の程度に是認せられる筈であると言つてゐる（新潮三月號所載の文）が、この論なども議論のための議論――議論をし初めたからにはどうでもかうでも言ひ畧たずには置かないといふやうな、何だか不自然に言ひ張るやうな調子があつて、君自身も恐らくさういふ自分の心持のイル・アット・イーズな變な緊張に氣づいてゐたらうと思はれるものである。私も君の最初の主張を難じた一人だから、そしてその折には（新潮二月號所載の私の文）その非難の理由を書かなかつたから、こゝで言つて置かう。なるほど君の言つてゐる通り、藝術が全人格的表現であることには私も異存はない、さうあるべきだといふことには私も異存はない。これは恐らく誰にも異存のないことであらう。しかし、菊池君、それだからと言つて、すべての藝術上の作品は、いつでも作者の全人格的表現と見て遺憾なきものであるといふことにはならない。あの君の文意から察して、そのことは君も氣がついてゐると見えるがどうであらう。ある作者のある作品が、たま〱その作者の生活の素質の凡てを遺憾なく表現してゐないといふやうな例は、いくらもあることではないか。隨つて、その素質のまだ十分に表現せられてゐない作品を不十分なりとする非難は、その作者として當然受くべきである。一とたび書かれた作品は、未熟なら未熟のまゝで殘ることになるが、それの作者はいつまでもその生活内容を固定させては置くまい。ある作者のある時期の作品の價値が少ないといふことが、必ずしもその作者のすべてを低く評價するのでない位のことは、あまりに明白過ぎることではないか。隨つ

て、たとへば菊池君のある作品をつまらないものだと言つたとて、必ずしも菊池君といふ人を全くつまらない人だと言ふことにはならう筈がない。さういふことのあつた場合に、菊池君自身がさういふ風に思ひ込んで、相手の批評家を恨むなり憎むなりすることがあるとすれば、それを防ぎ止める力は菊池君自身の反省力以外にはないかも知れない。かりに私がさういふことから菊池君に「骨髓に徹する」まで恨まれたとしても、私はたゞ菊池君を存外反省力の鈍い、自己の成長に自信のない人だと思ふまでである。批評といふことの意味を理解しない氣の毒な人だと思ふまでである。私と菊池君との間にもし個人的の交りがあつたら、私はどこまでも君に自分の思ふところを納得させて、君の反省を促すでもあらう、君をして自己の成長に自信を懷かしめることを努めるでもあらう。それでもまだ君が私を恨みつゞけるやうなら、しかたがないから、君の方で事理の分つて來るまで待つより外私としては方法はないかも知れない。君が人間と作品とを一つにして考へる考へかたの根本の點には――藝術即人といふ考へかたには異存はないのだが、ある場合には藝術の上に必ずしも全人が現はれてゐないこともあるといふ點、而して人を一層多く肯定してその人のある作品を一層少く肯定するといふ場合もあるといふ點を會得しようとしないのは、あまりに意地張るやうなきらひがありはしないか。菊池君は作者が自己の作品に對して受けた漫罵とか誤解曲解の批評とかだけを眼中に置いて考へてゐるのかも知れないが、作品に對してであらうと人間に對してであらうと、いづれにもせよ、自己に對して漫罵を加へたり妄りに自己を誤解したり曲解したりするものに對して、快く思はないのは自然であるが、自己に對する他人の批評といふものが、自己を賞讃しないかぎり、自己の價値を推賞しないかぎり、いつでもさういふ曲解や誤解に限ると思ふのは、少し考へかたが單純過ぎる。菊池君のある作品が菊池君の生活のよいところを十分に表現しない場合があるとして、その作品の不十分未熟を難ずるといふことは、菊池君の人間としての價値を認めないといふこととは自のづから違ふ。勿論菊池君自身の氣持ちから言へば、自分の作品は悉く自分の全生活の全人格的表現だと言はねばなるまいが、その結果や出來ばえがいつでもその通りであると思ひ込んで、他人の批評によつて反省することをしようとしないなら、それこそ菊池君

は眞の友人――眞の批評家の愛を亂暴に拒絶することになるであらう。菊池君の最初の言說（新潮一月號所載）に對して、考へかたが足りないと言つたのはこの意味である。菊池君が今度の文章の終りに言つてゐるやうに、作家と人とは同一だといふのも賛成だが、それは君の論に對する非難に答へることにはならない。

ある作品にその作者の素質が不十分にしか現はれてゐないといふことは、その作者の素質が、――人間が、藝術に表現せられるまでに十分に成熟し統一せられてゐなかつたといふことを意味するのであるから、この場合勿論作者と人とを別にしてはゐない。たゞ、さういふ批評を下したからと言つて、菊池君の言ふやうに直ちに人を恨んだりする必要は――理由はないといふのである。君の最初の說に對する私以外の人の難點も、恐らく以上の意に外ならないであらう。

こんな分り切つた道理は、菊池君にも分つてゐるであらうかと察する。そんな意味なら最初から分つてゐるのだと言ふかも知れない。またさうあつてよい筈のことだ。私もこんな分り切つたことを言ふのはつまらないといふ氣もする。あまりに啓蒙的だといふ氣もする。しかし、菊池君は、君がこの問題に就いての言說に就いて、最初からこのあたりまでの省察は所有してゐるべき筈ではなかつたらうか。作品の非難と作者の人間に對する非難との間に、どういふ關係が成り立ち得るかといふことに就いて、このあたりまでの省察はもとよりあるべきではなかつたか。その點に就いて君が今に至るまで少しも思ひ及んでゐないのは寧ろをかしい位である。人間と作家との合致說を持ち出すまでに、考への上にこれ位の用意はあつてよかつた。概括的には、ある作者の一切の作品を否定することは、つまりその作者の天分の否定であるといふ點に議論のありやうはないが、そんなことは事實ない話なのではないか。それはたゞ理屈でさう言へるといふだけの話なのではないか。現在君がこの論を成すに至つたきツかけは、昨年中の君の作品に對して世間の月評家の加へた非難といふものに對する不服に發してゐるのであつて、それとて恐らくどの月評家も君の作品全部を無價値と

して否定したといふではあるまいし、また殊に君の作家としての將來をまでも全く否定したといふやうなわけでは尙更のことなかつたらう。君の作にも出來不出來はあらうし、それを時によつて難じたり低く評價したりすることは少しも差し支へあるまい。そんなことで絶交するやうな菊池君でもなささうだ。またかりに君の作中のよいものを、ある月評家がそれだけに認めず不當の評價を下したことがあつたにしたところで、勿論それは快いことではないに相違ないが、何も自分の作品を全然否定したと思ふには及ぶまいし、隨つて全然自分の人間としての價値を否定したものだと思ひ込むにも及ぶまい。つまり君自身の事實の上で、別に君の言つてゐるやうな危險な全的否定を受けたといふわけではなく、たゞ月評家に對する不滿から、極端な場合を考へて見て、凡そ自分の作品を認めないものは自分の人格を認めないことになる理屈だと、形式論理的に押しつめて考へて見たまでの話であらう。その邊は可なり中學生あたりの討論會でやる議論のやり方、ものゝ考へかたに似てゐるやうに思はれる。君が三月號の新潮誌上の文で精神的細胞などゝいふことを持ち出し、作品の中にそれに對應する細胞がある筈だなどゝいふのを讀むに至つては、ます〳〵さういふ感じがするのである。菊池君も十分知つてゐるであらう如く、よき人格あるもの必ずしも悉く作家ではない。而してまた作家が必ずしもいつでも自己を十分に表現し得るとはきまつてゐないのである。文藝の評價に於いて、その作品の藝術上の價値が認められない場合は、その作者が作者として不十分未熟であるか、もしくは性來藝術的表現をするに不適當な才分の人であるか、もしくは菊池君のいふ如く人間としてもまたつまらない人であるか、凡そこの三つの場合があり得るであらう。とにかく菊池君の如く考へることは、あまりにものゝ考へかたが粗雜で、幼稚で、がむしやら過ぎるといふ感じがする。性來藝術的表現に不適當な才分の人、必ずしも人間としてつまらないとは限るまい。人間としてつまらない人なら、もとより藝術も作れまいが、藝術を作らない人必ずしも人間としてつまらないとは言へない。もとより、最も高い深い意味では、眞の藝術家こそ眞の人間であるといふことはいへる。眞の人間は必ず藝術的天稟を有するといふ意味にも私は同意する。しかし、この場合の論はそこまで飛躍する必要はあるまい。必ずしも藝術品の創作をしない

人であつて、人間としての多くの深さ高さ善良さを有する人は事實に於いて少なくない。菊池君の論はこゝまで延長すべきであらう。また、高い人格の所有者の斷簡零墨に自のづか氣品があるといふやうな場合もあるが、それは嚴密に藝術品として批判すべき限りではあるまい。眞の人間は必ず藝術的天禀を有するといふ前掲の意味によつて考ふべきであらう。

菊池君の論に對する批評としては、以上でもう十分だといふ氣がする。このあたりで打ち止めにして差し支へあるまい。しかし、これだけのことを言つて來たのは、ひとり菊池君のふとした言説を相手に取つて、いつまでもそれに拘泥してゐるつもりからではない。これほどの分り切つたものゝ考へかたに就いてすら、一體にものの考へかたのルーズなイージーゴーイングな今の文壇では、議論をしたり、意地張つたり、説明したりしないでは、事が明らかにならないやうな一例としたまでだ。ものの考へかたが無責任で、主張するものにも十分な用意がなく、確信がなく、見當がついてゐないで、その日ぐらしの言説が多く、贊否何れにもせよ、それを論評するものの側にも、同じく十分な覺悟も識見もないのが多い。本當に自分を愛し、本當に自分を尊重する氣分からは、さういふ結果が生れて來よう筈はないのである。本當に自分の生命に誠實な氣分からは、必ず自分に對し人に對する本當の尊敬の念が生じて來る。もしくは本當の侮蔑の念が生じて來る。そこには本當の悩みもあり、悲しみもあり、本當の頼もしさも喜びもある筈である。今の文壇の言説に缺けてゐるものは、外國の批評家や學者の引抄でもなければ、内容の充實を欲求する聲でもなく、或ひはまた、イージーゴーイングな態度を非難し、批評の不振を歎ずる聲でもない。それ等のものは寧ろありあまるほどにあるかも知れない。ところで唯一つ缺けてゐるものがあるのだ。それはその批評の不振を歎ずる人自身に批評的精神の有無が問題にせられてゐなかつたり、イージーゴーイングな態度を非難する批評家自身ものゝ考へかたがイージーゴーイングで、肝心の問題に就いて悩みも疑ひも懷いてゐなかつたりすることである。さういふ風な人たちが、あちらでもこちらでも言

説を弄んでゐるところは、一見論壇を賑はすらしく見えるかも知れないが、さういふ言説が多く出て來れば出て來るほど、一體どれが本もので、誰が本氣でものを言つてゐるのだか、目まぐろしくてちよつと分りにくゝなる。言ふところは一と通り尤もなことに外ならなかつたりするから、尚更見分けがつきにくゝ、人まねでも、受け賣りでも、自分自身の心の底から出てゐないことでも、それが一向氣にされてゐない。やゝ本氣でものを言つてゐるやうだと思ふと、たゞがむしやらであつたり、人の言説の眞意を正面から受け入れることをしないで横槍を入れて得意にならうとして見たりする。人と人とが本氣で相手になりあはうとしてゐない。卽くのも離れるのも、曖昧で、斜めで、中腰になつてゐて、半分横を向いてゐて、よく／＼顏を見てゐると、重ね寫眞のやうに取りとめのないもので、誰が誰だかしつかり相手を見つめてものを言ふことも出來ない。折角心から人々に向つてものを言つて見ても、それが正しい根據のあることであつた場合に限つて、少なくともさういふ風に理解が出來たらうといふ感じのするときに限つて、誰も何とも言はないで默つてゐる。そして暫くすると、どこかで自分の言つたことのあるやうな同じ言説らしいものを見出だすことが少なくない。もとより、その言説が正しいものである限り、それを言ふものの何人たるかは敢て問ふところでないとも言へよう。またその前後して繰り返されることも、寧ろ眞理を愛するもののためには味方を得たわけであるとして喜ぶべきでもあらう。しかし、事實はそれと趣きを異にしてゐるのである。さういふ反覆と模倣との嫌ひのある言説の多くは、眞の同感と理解と批評とに基いてゐるのでないのだから、いかにも手ぬるい、上辷りな、歯がゆい、本當の心に根ざしてゐない根なし草のやうなものである。試みに思うても見たまへ、自分の折角心から發した言葉が、表面の文句はそれとよく似てゐながら、肝心の精神氣魄を有してゐない別の人の言葉となつて自分の耳に聞かされるときの、擽ぐつたいやうな、殘念なやうな、惜しいやうな、腹立たしいやうな、一種の言ふに言はれない心持ちを。自分の言葉の眞意精神は拔けてしまつて、似寄つたやうな意味が空ろに繰り返されてゐるのを聞いては、いかにもたまらない氣がしようではないか。また殊に、自分の折角心から發した言葉が、眞實な同感と理解と批評となしに、むやみに賛成せられて、一とかど

の味方顔をせられるときの氣持ちは尙更たまらない。ありがた迷惑とは本當にこのことであらう。こんな風で、言論の上に、味方が本當の味方でなく、敵はもとより敵らしいものもない。本氣で人と人とが相手になりあふことがないのだから、本當の尊敬も輕蔑も生れて來ないのだ。もの﹅本當の價値が曖昧にせられてゐて、それで平氣で——少くともあまり大して苦にならずに過ぎてゐるのだから、つまり人間が自分の本質の要求を感じてゐないわけである。自分の本當の生活を冷遇虐遇して、それでもあまり大して苦にしないで、文壇といふ狹い範圍で、何か言つたり書いたりして、ともかく何とか言はれてさへゐれば、その間は自分の立ち場があるやうな、自分の生命があるやうな氣がしてゐるのである。自分の言ふことが自分自身の本當の生活に根ざしてゐないことであつても、自分の本質に基いてゐないことであつても、それが謂はゆる「文壇」の水平線上に並列するところまで行つてをりさへすれば、謂はゆる「文壇」の常識程度にさへ行つてをれば、それで一とかどの評論家批評家といふことに「文壇的」に認められてさへ來れば、もうそれで自分自身に就いて安心してゐるのである。

今の文壇は、巳に拓かれた平坦な道である。その道に上り、その道を通ることは容易であつて、少し脚の達者なものなら大抵ずん／＼通つて行く。道草を喰ひながらぶら／＼してゐても通つて行ける。創作方面の實情がさうであることは私の既に度々說いたところであるが、批評壇の事實もまた大差なしである。實際今の批評壇を見て、何人か談何ぞ容易なるの感じをしないものがあらうぞ。何人か諸士橫議の混亂に想ひ及ばぬものがあらうぞ。志を言はんと欲するものをしておの／＼思ふところを述べしめることはもとより正當である。しかし、それはあらゆる冗語に傾聽することを人に強ひる所以ではあり得ない。論ずるもの雜ずるもの乃至は主張するものが、殆ど皆自分の言はんとするところの何であるかを自分自身にさへ納得せしめ得ず、自分自身にさへ意味してゐない場合に於いて、かくの如きものいよ／＼多く出で﹅いよ／＼論壇は紛糾混亂するであらう。而してこの諸士橫議の混亂に對して、これを傍觀するものも、またたゞ傍

觀してばかりゐられないものも、ともに感ずるところは迷惑であり、輕蔑であらねばならぬ。諸士の横議はこれを輕蔑するに十分値ひするであらうが、それを以て直ちに凡そ一切の論議と主張とを輕蔑し、その意義乃至價値を疑ふに至つては、諸士の横議を取るに足らずとして蔑視傍觀してのみはゐられなくなる。今の批評壇の實情が丁度それだ。人もする批評といふことを、われも試みにやつて見る人たちが多くなつた。作者必ずしも創作一方に自からを限らず、作者もまた一旦論評の筆を執る以上は、もとより自己の言說に責を負ふべきは批評家と一つである。近代の文學界の傾向は、文學上のジャンル（種目）が昔のやうに峻別せられなくなつたやうに、一人にして評家と詩人と小說家と戲曲家とを兼ねるなどといふ人の多くなつたところにも見られる。そこで作者もまた批評の文を書く。それだけのことに差し支へなどのあらう筈はないが、たゞ今の日本の文壇では、批評家側に自分の心から出てゐない、「文壇相手の」、文壇常識程度の言說を行るものの多い上に、かてゝ加へて作者が不用意な亂暴なセンティメンタルな議論を試みて、混亂を一層混亂せしめてゐる。今の批評家といふものも自分の本音を言ふだけの勇氣も自信も批評心もない臆病ものぞろひのやうだが、作者で批評文を書く方も、ものを言ふときは思ひつきのよい加減な亂暴な無責任なことを言ひちらして置いて、まさかの時になると、自分は批評家ではないのだからなどと逃げを張るやうなのが多からう。臆病でそしてずるいのだ。烏賊の兵法といふところだ。かういふ無責任な言說が行はれて、われも〳〵と出て來るのだ。尤もらしい、それでもさすがにいくらかは前後を考へてものを言ふらしい批評家の、自信と批評力との薄弱な言說以上に、かういふ烏賊式の言說が亂暴で無責任であることは察せられよう。今の創作壇を多種多樣で個性表現が自由になつたと觀た人もあつたが、それが必ずしも十分な力ある個性の對立並存でなかつたと同じやうに、今の言說の區々として混亂してゐるのも、賴りどころのある個性の主張の對立並存ではないのである。そこにはたゞ、力のない、弱い、根のない出たらめな、ばら〳〵の言說が入りみだれてゐるだけである。氣力のない、自分の言ふところに自信の根を有たないものの言說が區々であるところでは、人をして徒らに煩瑣の惱みを感ぜしめる。人をして一種の疲勞を感ぜしめる。無責任な放言や自信の根のない言說

でも、それがいま時の文壇の水平線上に立たしめられることになつて見ると、批評の言説はこんなことでも通用するものかといふやうな安心が出て、いゝ氣になつて更にその文壇的水平線上に横議を逞うし、無氣力な、自信の根のない空語を繰り返すことになる。それ等の當事者がこれによつて已れ自身を輕蔑してゐるのであることは勿論だが、それからひいては、一切の批評の言説の權威を墮とし、批評の意義乃至價値を疑ひもしくは輕侮せしめるにさへも至るのである。今の批評壇の實情を公平に見得るものは、この點に就いて私の觀察を否定し得ないであらう。問題それ自身としては分り切つた、つまらない、今更馬鹿々々しいと思はれるやうな問題に就いても、やはりその誤りを是正し、その蒙を啓かずにはゐられないやうな氣のするのは、畢竟これ等の横議空語を傍觀することによつて、批評そのものの價値を疑はしめんとすることを厭ふが故である。批評そのものを侮蔑せしめんことを厭ふが故である。

自已の問題として考へられてゐない言説に光りがなく、透徹力がなく、たゞ中心をとりまいて堂々めぐりをしてゐるに過ぎないやうなのは當り前である。作品の批評を試みるもの必ずしもすぐれた作品の作家であるを要しないことは勿論であるが、この分り切つたことが、そのまゝに受け入れられてゐないで、すぐれた作品を書かないものは他人の作品の批評をしてはならぬかのやうに言はれたりするのも、(時事に於ける南部修太郎君の文)つまりあまりに出たらめな、自已の言ふことを自から意味してゐない、醉ひどれのやうな作品批評家がゐるからでもあらう。しかし、それにしたところで、さういふ幼稚な不道理が尤もらしく眞面目に出て來るのは、これも一種の批評上のセンテイメンタリズムである。自分の言ふことを自分の心の生活の上に置いてさへゐれば、自分の言ふことを自からにだけはせめて十分納得させ承服させてさへゐれば、批評するといふことに對してそれほどの懷疑はない筈である。自已を放散して、自已の中心を失つて、上つらの文壇的社交感情や文壇的常識からのセンティメンタルな批評のある一方で、自分に作品のないものは批評が出來ないと言つたりするのも、一種の自已萎縮で、そこには誇大に恐れ憚るといふ意味でのセンティメンタリズム

があるといへる。批評の眞の意義を理解してゐるものならさうは思ふまい。批評はいつでも結局要求である。自から何を求めるかを知らないところには、また殊に、自から求める心の動かないところには、眞の批評は成り立たない。自から内に空なものが、自己の問題として文藝の批評を試みようとしないものが、たゞいたづらに批評の對象の外圍をめぐつて見當ちがひに褒め過ぎて見たり、貶して見たり、またさうしてゐることがいやになつて來たりするのは當り前であらう。それは自分自身の心の中の生活と全く沒交渉な勞力に過ぎないからである。批評の意義乃至價値に就いても、また批評のさま〴〵の種類乃至その標準などの問題に就いても、この文章で說き及ぶつもりであつたが、あまり長くなりさうだからそれ等はまた別の折を待たう。とにかく批評壇は今頹廢してゐる。諸士横議して堅白異同の辨を立てたりする趣きのあるのがその證左である。批評壇は頹廢して群盲象を議して相爭ふにしても、それがために批評そのものの意義を疑はしめたくない。而して批評壇の頹廢を救ふの道は、たゞすべての言說を自己の心の問題とすることにある。自己の心の底のぬくもりを潛らない言說を排斥することにある。批評の言說を成さうとするものは、自己の求めるものが何であるかを先づ自からの心の底に感知すべきである。自からの中に求める心の動かない生活を悲しむことを知るべきである。今の批評壇は、(もとよりひとり批評壇には限らないが)あまりに自己の內心の問題を忘れ過ぎてゐる。一切の言說思索を自分の心の上に置き直せ、私はこのまゝにして今の批評をやる人々の手に批評を弄ばせて置きたくない。私のこの一文の意はそこにあつまる。(三、一〇)



藝術一家言

谷崎潤一郎

はしがき

私は一體文壇の現狀などゝ云ふことに比較的不注意の方である。月々私の手もとへは可なり多くの雜誌が寄贈されるけれども、それらに載つて居る創作の一つにでも眼を通すことはめつたにない。讀むとすれば多少の年所を經てから猶生命のある作家や作品を擇んだ方が、その値打ちもよく分り、第一無駄な勞力が省ける。さうして、多少の年所と云ふうちにも成るべくならより古い物やより隔たつた物――古典や外國の文學の方を餘計に讀む。日本の物だから、現代の物だからと云つて、特にそれらに親しむことは知らず識らず自分の眼を低くさせ、理解を狹くさせ、覺悟を鈍らせ、雄心を銷磨させる結果に陷る。私は批評家ではないのだから其れで差支へはないと信じて居る。

ところが去年あたりから屢々『日本の文學は明治以後どのくらゐ進歩したか』とか、『一體小說とか戲曲とか云ふものは日本にも昔からあることはあつたが、それが文學の中心を占めるやうになつたのは西洋文化の影響を受けた以後の現象で、われわれは結局小說戲曲を以て西洋のに劣らない藝術を作り出せるか』とか、そんな問題を考へさせられる機會が多く、その爲めに紅葉露伴以後の作品を、少年の頃に讀んだきりもう二十年近くも顧みなかつた物から始めて、近くは漱石以後の二三の作家に至るまで、別段どれと云ふ順序もなくボツボツ讀んで見るやうにし、暇があれば讀後の感じ

をノートの端へ書き止めて置くやうにした。で、それらの感想の中には一度は發表して見たく思つて居たものもあるから、それを引き延ばし又は新たにそれへ附け加へて、今月から時々雜誌『改造』へ寄稿することにした。いつ迄つゞけるか、どの範圍までひろげるかは目下のところ未定である。當分は材料がある積りだが、云ひたい事がなくなればいつでも止めようと思つて居る。主として明治以後の小說と云つても、時にはあらぬ方角へ脫線するかも知れない。作家と云ふよりは寧ろ箇々の作品に就いての批評であるから、同じ作家のものが何度も出て來る代りに、全然言及しない作家が多いことだらうし、兎に角いろいろになると思ふが、それらに就いては豫め何等の計劃も立てず、極めて自由に云ひたい事だけを云つて見たい。明治以後の文壇の傑作を數へ立てるのが趣意ではなく、批評に藉りて藝術上の感想を述べるのが趣意であるから。

猶又、今後『改造』以外の雜誌へも同じ標題で寄稿することがあるかも知れない、が、それらは皆此れの續きであることを御斷りして置く。

その一

さて、最初には先づ現代の作家の物を一つ取り上げて見よう。——

しかしその前に、話がちよつと横道へそれるけれども、私が去年上述の如き動機を以て第一に讀んだのは漱石氏の『道草』と『明暗』であつた。そうして『道草』には殆んど終りまで讀み切れないほどに非道く失望し、『明暗』にも——此の作者の絕筆であり且傑作だと云はれて居る『明暗』にも、可なり失望させられた。その失望の後で、ふとした機會に古い中央公論を引繰り返したら、里見淳氏の『子ころし』と云ふのが眼に止まつたので、つい讀んでしまつた。ついと云つては甚だ失禮ではあるけれども、私が日頃から敬意を拂つて居る此の作者のものとしては、あれは決して優れた作品とは云へなかつたからである。が、『子ころし』を讀んだのが機緣となつて、その後散歩のついでに同氏の短篇集を

見つけて來た。それは新潮社から出た何とか云ふ叢書の中の『恐ろしき結婚』と云ふ小册子である。中には『恐ろしき結婚』『俄あれ』『妻を買ふ經驗』の三つが收められて居た。此の最後のものは、嘗てそれと同時に發表された『失はれた原稿』を讀んだ際に、讀んで見ようと思ひながら讀まずにしまつたので、始めに先づそれを讀んだ。さうして正直のところ豫期したほどでないと云ふ感じを抱かせられた。次ぎには『恐ろしき結婚』を讀んだ。此れも、今度が始めてではあるが、發表された當時に傑作だと云ふ評判を或る友人から聞いて居たのである。ところで此れは果して傑作かどうかは疑問だと思ふけれども、いろいろな點で私に感激を與へ、又作者に對する敬意を新たにせしめるものがあつた。その次ぎに讀んだ『俄あれ』は、意外にも三つのうちで最もすぐれた作品であり、一番短いにも拘らず可愛らしい寶石のやうに渾然とした藝術品であつた。『明暗』を讀んで變に忌ま忌ましい氣持ちになつて居た私は、あの『俄あれ』のお蔭でやつとセイセイしたことを、作者に感謝せざるを得ない。

けれども私は、こゝで『俄あれ』の批評をしようとは思はない。あれはあの通り立派に出來上つたものであるから、別に云ふところはないのである。凡べてあゝ云ふ風な短篇で渾然としたものは、何處がいゝと云つてちよつと摑まへどころがなく、讀んで味ふより外に批評の方法はないやうな氣がする。それよりも寧ろ『恐ろしき結婚』に就いての種々な感想を述べて見たい。なぜならあれは全體としては『俄あれ』よりも不出來であるが、その出來上つて居ないところに作者の氣魄が閃めいて居るから。それから『恐ろしき結婚』のあとで漱石氏の『明暗』に言及する積りである。或は隨所に此の二つを比較するかも知れない。漱石氏と里見氏との間に類似點がある譯ではないけれども、私としては此の二つを同時に讀んだので、比較もして見たくなるのである。

私が『恐ろしき結婚』を不出來だと云ふ主な理由は、あれを讀んだあとで第一に『此れは拵へ物だ』と感じたことである。勿論拵へ物だから必ず惡いと云ふのではない。中には拵へ物でなければならない小說もあらう、が、要するにあ

の物語の世界には藝術的必然性が乏しいと云ふのである。

思ふに作者はあの物語を書くに方つて、最初に或る概念を作り、一つの目標を立て、さうしてその概念なり目標なりに充て嵌めたものを寫實的に書かうとしたに拘らず、書いて居るうちに作者の昂奮が次第に作者を驅り立てて、性急に目標へ屆かせようとした爲めに、知らず識らず寫實から空想の世界へ突入してしまつたのではないだらうか？私は敢て空想と云ふので虛構とは云はない。なぜなら、その空想は作者の心持ちの內では實感があるやうに思へるから。だだ其の現され方が焦燥に過ぎて上すべりがして居るのである。さうして、此の空想と寫實の世界の繼ぎ目の處に、見逃し難い空隙があるやうに思ふ。作者はその空隙を一と跳びに跳び越えて、いち早く結論に到達してしまつて居る。

私は此の物語に取り扱はれたやうな異常な事件を、全然有り得ない事だとは思はない。たとへ今迄は世の中に無かつた事でも、藝術に依つて其れを有らせることは出來ると思ふ。が、有らせる爲めには、あの作品の空隙を充たす必要がある。あの中の夫婦をあの結論へ落し込むには、あれだけの描寫では內面的にも外面的にも不充分ではないだらうか。殊に女主人公の粂子なる夫人が、僅か十九か二十の少女でありながら、男性に對して——夫に對してと云ふよりは、あの筋で見ると抽象的なる『男性』と云ふ觀念に對してである。夫は愛を求めて已まない男であるに拘らず、『男性』それ自身を代表するものとしてのみ彼女の眼に映ずる、作者は其處に此の悲劇の素因を置いて居る。——あれほど迄に堅く冷めたい憎惡の念を抱き、復讐の意志を持ち續けると云ふ事は、餘程不思議な事件であつて、あゝ云ふ夫人の性格を可能ならせる爲めには、もつともつと深みのある細かな說明がなければならない。單に彼女が淋しい片田舍へ里子にやられて偏屈に育つた女である事と、男性に虐げられて自殺をした姉の遺書を見た事と、この二つであの不思議を遂げさせるのは無理ではなからうか。たとへ其の遺書の中には、

……或る時には蟹だ。右の手と右の足、左の手と左の足を堅く縛られたら、蟹だ。から云ふ地獄の繪を知らない處女だけに人生がある。……

と云ふやうな、僅か一二行を以て十行二十行にも當るほどの力强い文句があつたにもせよ、まだまだ足りなくはない

か。男性の憎むべき事を、女性の憐れむべき事を、彼女は理性的には知つたであらう。けれども感情をあゝ迄凝り固めるには——殊に、あれほど熱情的な夫の愛に反抗してまでもあゝなるのには、もう少し直接に、さうして具體的に彼女を動かす物があつて欲しい。(しかしさうすると此の小説は此のまゝでは成り立たないかも知れない。だから此れをリアルな物語として見る時は、根本に矛盾があるのである。それは後段に於いて述べる。)

作者は条子を描くのに成るべく彼女の心理には立ち入らないで、夫たるA子爵の方から描くやうにして居る。作者は条子と云ふものを、多少謎のやうに描く事に興味を持つたらしい。さうして謎のやうに描いた爲めに深みが附くと云ふ結果にはならないで、却て人間離れがした。彼女は前半に置いては生きて居るが、後半——就中結末に於いては、遠い古の物語中の英雄女と化してしまつて居る。夫の自殺を傍觀する前後の沈着な薄氣味の惡い彼女の態度は、彼處だけではよく現はれて居るが、一歩退いて考へて見ると、近代人の纖細な神經を持つ妙齡の女子の行爲としては、何となく突飛で不自然だと云ふ感じを與へられる。

『姉……あれは私の半身でございました。私どもは双兒でございます。きやうだいよりも近いものでございます。片われだけ殘つたわけでございます。——どこに戻るところもございません。』

かう云つた時に、ボタ〳〵と大きな涙が續けさまに膝の上へ落ちた。

——だが、かう云つた時に、彼女が亡くなつた姉と自分の境遇に對してボタ〳〵こぼした涙は、なぜ夫の燃ゆるが如き情熱に對しては、あんなに吝しまれたのであらうか。生れつき頑な女ではあるが、彼女にも矢張り涙はある。さうして夫の方にはあの通りの愛情がある。それが一年間も同棲して居るとしたら、夫の愛情に從ふべきか、姉の遺志を繼いで『男性』に對する復讐を遂行すべきか、に就いての、煩悶ぐらゐはあつていゝ筈である。あゝ云ふ風に始終氷の如き心を持ち通すことは、餘程人間の性情に遠ざかつて居るやうに思はれる。彼女の性格に不自然なところがあるから、從つて彼女に壓倒されて自殺するA子爵の方も、何となく曖昧になつて居る。

尤もあれをあのまゝ一と息に結末まで引張つて來たにしても、彼女の性格の不自然さを幾分か取り消す方法がないで

もない——それは、夫の自殺を冷やゝかに傍觀した後、彼女も徐ろに自殺するか、或は發狂するかである。若しあの物語が事實であつたら、あの後で彼女はさうなつて居るに違ひない。然るに作者は故意にか偶然にか後の事實を構圖の外へ切り捨ててしまつた。思ふに作者の考へでは、グーッと彼處まで一と息に來て子爵の自殺と云ふクライマックスに達したところで、急に打ち切つてしまふ方が、寫實味はなくなつても詩としての効果が強いと思つたからであらう。作者は謎の女性を何處までも謎にして此の世に留めて置き、それに苦められた子爵の魂だけを、天へ昇らせたかつたのであらう。即ちリアリテイーを捨ててポエトリーを取つたのである。勿論ポエトリーもなくてはならないが、そのために他の一方が捨てられては、此の物語が持ち得べき價値の一半は失はれてしまふ。

一體人間の意志は自由であり、心の働き方はどうにでも變るものだから、心理的不自然は物理的不自然ほどには目立たないやうなものゝ、その不自然さに於いては同等であつて、その不自然さを自然に引き卸すむづかしさも同等である。普通には有り得ない心理的跳躍を描くには、李太白を魚にするのと同じくらゐ面倒な手數が入る。同時に又、李太白が魚になるのは空想が目立つて居るから、その作品の出來不出來に拘らず人は始めから空想として許して置く。が、此の小說では是非とも空想と寫實との繼ぎ目を渾然とさせて欲しい。さうしなければ少くも『恐ろしき結婚』の恐ろしき印象が稀薄になつてしまふ。若し此の作者の奔放な空想に加ふるに德田秋聲氏的寫實味と陰鬱味とを以てしたら、どれほど此の作品は光を增したことであらう。『恐ろしき結婚』と云ふ題で內容を豫想して居た私が、讀んで失望した主な理由はこゝにあるのである。恐ろしかるべき物語でありながら、ちつとも恐ろしくないからである。

が、私は失望しながら、此の作品を透して現はれる作者の氣稟や態度からは、多大の感激を受けた。『明暗』を讀んだ時のやうな忌ま忌ましい氣持ちには決してならなかつた。拵へ物だと思つたのは讀んだ後のことで、讀みつゝある際は其れを考へる暇もなく終りまで引張つて行かれた。なぜかなら、此の作は概念で捏ね上げられたものではあるけれども、動もすれば其れを忘れさせるやうな、或る火のやうに燃えつゝある力が全篇を貫き、紙背に滲透して居るからである。さうして、讀んでしまつてからも、——『此れは不出來な作品だ』——さう思ひながらも、——なほ其の力が讀者の胸を

打つのを感ずる。作者は作品に於いて失敗しながら、何等かの點で讀者を征服せずには措かない。昔杜子美は『語つて人を驚かさずんば死すとも休まず』と云つた、その氣魄が此の作品の隨所に溢れて居る。

私がこゝに氣魄と云つたものは、功名心と云ふ風にも取れさうだけれども、功名心だとすれば非常に高い貴い功名心である。さうしてもつと適切な名を以て呼べは、藝術的熱情である。つまり自分の筆の力で、一個獨自の世界を盛り上げんとする熱情である。その熱情は、或る作家の場合には水晶の如く凝結して現れることがあり、それも一種の美觀ではあるが、此の作者の作品では多くの場合火のやうに燃え上つて居て、その燃え上る力の强さは、當代に殆んどその比を見ないと云つてもよい。でそれが自然と讀者の方へまで燃え移つて、讀者自身の熱情を鼓舞激勵する。その力は『俄あれ』にも現れて居なくはないが、あゝ云ふ渾然と出來上つた整つた物よりも、却て歪みなりに出來た物の方に、露骨にはみ出して居るのを覺える。私が此の作品に興味を持つたのは其の點であつた。

だから、失敗の作ではあるが、それでもなほ此の小說は存在の價値があると云へる。ただ、前にも云つた通り此れは何處までも詩であつて、完全な小說ではない。作者が一方に於いてA子爵の愛に對する悲壮なるアスピレーションを描かんとし、一方に於いて殆んど超人的に冷酷な一女性を描かんとしたのは、――而もそれを寫實的に描かんとしたのは、その盛んな意氣込みに於いて敬服に値ひするとは云へ、此の書き方ではどうしても詩と實際との矛盾が目さはりである。社會問題人道問題の一つとしての『結婚』若しくは『性の鬪爭』を取り扱つた如くであつて、實は全然詩であるからである。やはり何とかして其の矛盾を除いた方がよくはなかつたか。さうするのには、始めから全然詩で行くのもよし、或はもつとよくするには其の詩に肉を附け血を盛り、眞に生きた人間を作り出すのである。斯くして天上にある詩を地上に引き卸し、讀者を地上より天上に引き上げるのである。それでこそ始めて、此の小說が小說としての效用を完うしたと云へるであらう。

私は現代の此の卓越せる作家に對し不遜なる妄評を敢てしたことをくれぐれもお詫びして置いて、さて『明暗』の批評に移らう。



社會小説

死線を越えて（第四卷）

賀川豊彦

十八

この晩から榮一は頭が變になつて、強い震ひが、自分の胸に絶えず起つて居る樣に思つた。

そして此の強い震ひは何物にも恐れないが、自分手に自分を顧て折々驚くことを發見した。そしてまた此震ひが強く外界に現はれて來る時には、夢が眞やら眞が夢やら分別がつかない樣な氣がして來る。

鶴子の宅で宿つた翌日の夕方、榮一は表庭に水打つことを命ぜられたが急にバケツや杓を破壞したくなつたので、目茶苦茶に壞して終つた。そして我と我身を不憫に思つたので涙を流して泣いて見た。泣いた後、城山の森の中へ隱れたくなつて夕飯も食はず十二時頃まで大きな樟の木の影で泣いた。十二時頃に鶴子を起してまた泊めて貰つた。

吉三郎とお梅は榮一が全く氣狂ひになつて了つたのだと騷ぎだした。

然し榮一はまたその翌日、ナイフと云ふ者は此那奇麗な柱でも削れるものか知ら、削れるのなら一つ削つてみよう。此柱は父の贅澤のシンボルだ。削つても善いなど考へて表の床の間の檜の眞柱を三四ケ所削つて見た。削ると柱の見えが大分惡くなつたので、笑ひたくなつて笑つて見た。此那笑は心持ちが善い。七十五日位長生きをするなど考へた。

また、あくる朝であつた。吉三郎は憎い奴じやが不憫な奴じや一度毆つて頭をなでゝ可愛がつてやりたいと思つたので、意

氣なり頭に拳固を一つ見舞つた。處が『若旦那、何をなさるんだんぞ？』と生意氣な口返事をするのが憎かつたから其場へ吉三郎を引き倒して馬に乘つて耳を出來るだけ引張つた。すると吉三郎にも感覺があつたのか泣き出した。それで、

『ウフム、アハアハ……』と笑つてみた。

が小學校へ教授に出ると、生徒が皆自分の云ふことを聞くので嬉しくて堪らぬ。それで悧口な美しい女の子を見付けると抱きしめて、心の中で泣いた。女生徒も新見先生に抱かれるのを嬉しがつて居る。

榮一は鶴子を見る毎にじきに泣きたくなつた。鶴子の魂は榮一の掌に充分這入つて居らずに、這入つてもすぐ指の間から拔ける一種の幽靈の樣なものだと思ふからだ。さう云つても鶴子は戀しいから、また鶴子と自分の關係を誰れも邪魔しようと云ふ競爭者も、父兄も無いから、來る日も來る日も會つて夜遲くまで泣いては話し、話しては泣くのが嬉しくて堪らなかつた。

自分には別に氣狂ひになつて了つたとは思はないが兎に角、變な事を爲て居るとは氣が付き乍ら色々ないたづらをして四五日も早や過ぎた。

此間も或時は懷からナイフを取り出してようこんでみたり、新しい白い倉の壁に「超然」「偉大」「化身」と云ふ文字を大きく二重文字で樂書きしたりなどして急しく送つた。

鶴子は六月廿八日の晩十時の蒸滊船で廣島に行くとになつた廿六日は早や來た。土曜日であつたが、田舍から至急話したい事があるから歸つて來てくれと云ふ本妻の手紙を受取つた。——此手紙は既に開封せられて居た。然し別に怒りもせず、お梅や吉三郎がたとへどんな邪推をし惡計を廻らしても勝の汚とも思つて居らぬと心中大に意氣上つて學校を休んで歸つて行つた町を出るとパアと打ち開いた吉野川の平野。もう水田が一面に出來て世界を賑かに見せる。樺色の眞摯な色が飛び〳〵の茅葺の屋根に表はれて泰平の氣が滿ち充ちて居る。

榮一は自分手にバケツや杓を破壞した事がお可笑しく不憫になつて來た。何故すぐに此那打ち開けた日の照る平野に出て來なかつたか、小供じみた氣狂ひの眞似などせずに、と思つた。また併し人間の世界に住むならば折々茶碗の一つ位い割る勇氣も出て來ねば駄目だ。いや駄目處じやない。出す必要がある。必要じや無い。それは預定せられて居る。僕は何にも好いて好んで床の間の柱を削りはせぬ。何だか命ぜられた樣な氣がして削つたまでだ。……とその時の事を回想して事情止むを得なか

つたのを掩護して居る。

一里二里と大分我家に近いて、牛屋島の渡にかゝつた時に、

『アゝ然し自然より戀人と抱き合ふ方が善い。いやさうでもない。自然の戀人と一緒にある方が善い。此那に獨り歩くと淋しくて堪らぬ。勿論獨り居ると氣の立つことも無いが。いや戀人と二人が淋しい荒野で暮すならどれだけ樂しからう。荒野だから別にとがめる人もなし、お梅や吉三郎の樣に惡口を云ふ人もあるまいし。さうであつた鶴子と二人で出かけたら善かつたに、いや〳〵鶴子は馬詰村には恥しくて歸れぬ。ア、鶴子が戀しくなつた。鶴子が戀しい、僕は鶴子にどうしても一日會はずには居られぬ。今日はどうしても歸つて行かう。明後日、出發するのだから一時間でも多く顏を見て置かう。僕は歸つて直ぐ……

……など考へながら歩んだ。

戀人の家屋敷の跡を見た時一寸と立ち止つて、「鶴子樣」と口の中で云つて、自分の家の方に歩を運んだ。

眞面目腐つて家に這入ると、母も妹も裏座敷で針仕事を爲て居るらしい、母屋には居ない。裏座敷へ緣を傳ふと、

『お前はんはほんとに鈍なの。此那處をさへ善う縫ぬので、此那「ヲクビ」の處さへな？　此那とでお嫁に行けるでかだ――』

と母が笑を叱つて居るのが聞えた。榮一は椽の外に立つたまゝ

「お母樣。今日は、御病氣は如何で居らしやいますか？」と尋ねたが、內から障子を開いて、

『榮一樣で、よく來て與れたな。手紙は屆いたかいな。有難うぞ。お蔭で段々……』と沈んだ樣子である。

『榮一樣。笑さんはほんまに鈍でこまりますわ。まだ袷の一枚が獨りで充分縫へんのですからない。』とお久は笑を眺めて云ふ。笑は俛いて「オクビ」を縫ふて居る。

『御厄介でしようが、何分によろしくお願ひ申します。併し御病氣が段々およろしいのは結構で御座ります……お母樣。どんな御用事で御座りますか？　今日は。』

『まア、內へ這入つて疊の上へお座りなはれ、そんなに椽の先で跼まずに。今日はまア緩然なはれよ。明日は日曜でしような笑さん一寸と座蒲團を持つて來て。』

笑は默つて立つて臺所へ走つた。榮一はその後姿を見送つたが、粗末な木綿着に赤い唐縮緬の帶、下手に衣物を着て居るから細帶をしめて居るあたりが格別否らしい。髮は亂れて首筋には汚れが黑くついて居る。大きな足をベタ〳〵と音をさせて走つて行く樣は、自分と兄弟だと決して思へない。

『え、有難う。然し今日は一寸と是非とも歸らねばならぬ用事がありましてね。』

『榮一樣。いつに無い今日は妙な事を云ふな。今夜は泊つてお出でなはれ。妾も此二三日少し身體の具合もよし、今日も此樣

に起きて座れる位いじやけんな、今夜は悠然とお話聞うと思つて居るのじやがな。東京の話でも――』

『いや然し是非とも今夜は歸らねばならぬことがあるのでしてね。』

『そうですか？　用事つて、どう云ふ用事なのです？』

『別に用事と云ふ用事でもないのですが、お友達が此二十八日に廣島の方へ行くので、話せねばならぬことがあるのでして。』

笑が蒲團を持つて來た。

『さ、お敷きなはれ……笑さんお茶を……さうですかその樣な用事なら別に止めは致しませんがな。妾の今日榮一樣に來て貰ふた用事と云ふのはない。外の事でもないが、お父樣が今度急に秋の年貢を四分方引き上げると仰やるのでない……』

『いつ、そんな事を云つて來たのです？』

『何時つて、一昨日、總公が町の方から出て來て早や布れて廻つたのですわ。總公は内に居るよりか町の自分の内に多く居るけんない。内には何にも知りまへんわ。處が昨日になつて新田の方の連中が揃ひで内へ遣つて來て不服をとなへるでないで――そら恐ろしかつたでよ。な笑さん、昨日の朝は恐ろしかつたな。』と茶を持つて來た、笑をも話の中へ引張り込む。

『兄さん、どんなに恐ろしかつたか知れまへんぜ。』

と應じて繼母の機嫌を伺つて居る。

『一體どうしたのです？』

『どうのこうのつて、皆玄關へ並んでな。さう笑さん何人居つたぞいな。八九人も居つただらうな。』

『さうです。十人も居つたかも知れまんない。』

『十人も？　十人も來たのですか？』

『それがな、默つて、旦那樣に御目に懸りたう御座りますと云うて落ち付き拂つて、玄關へ皆つか／＼と上つてくるでないで』

『誰れが出て行つたの？』

『私は恐ろしかつたから出て行かなかつたがな。初め女中が出て行つたんだすわ。そして後から笑さんが出て行つたでわ――な、笑さん。』

『そして出て行つたら？』

『旦那樣はお留守で御座ります』と云はした處が、不服なら駕詰へ云つて來いと總公が申して參りました。旦那樣はお歸りなしていらつしやるに違いないと云ふでないで、何にもお父樣は歸つて來た事はなし、内には何にも年貢の事なぞ知らんだらう

な。そじやけん、そら町の方から云うて參つたのでしようが、私の方では何にも知りません、もし不腹がありなさるなら、町の方へお出でなしたと云つた處がない。さう云ふ事があるものか現在親公が布れて來たのだから眞違ひのあらう筈がない。そして同じ新見でありながら知らぬと云ふ道理はない。知らぬと云ふなら、年貢を納めぬまでぢや。もしそれとも旦那様が居らぬなら奥様でも出て來て呉れと云ふのでよ。ほだけん、奥様は病氣で御座りますと云はした處が、それならお孃様でも善いから出て呉れと下女が云うて來るのでよ。笑さんは恥しいと云うてどうしても出て行かなんだら、お孃様でも出て來ても呉れな此處を動かぬと云ふのでよ。しようことなしに笑さんを出したら裏座敷まで聞えるやうな大きな聲で理屈を並べたてるのでよ——苗代立てる時に御年貢御上げになるならなると仰しやつて下されば私の方でも考へが御座りますが、もう稻も大きくなりまして肥えの二回もやりました時分に四分上げると仰しやるやうなことでは私共の方ではどうも仕方が御座りませぬ。無理を申しますと警察の方からお手をお廻しになるでしようから無理は申しませぬ。然し善くまア私遂の様な貧乏人を御困らせなさりますない。いづれ近々の中には御恩返し致しますからどうぞ宜敷御内儀の方から、町の旦那の方へお傳言を願ひます。あなたの方から無理仰やるならこちらも無理を申します。どうせ警察から年貢を取り立てられるのなら私の方から警察の御厄介になる考へで御座りますから、そのお積りで』と落ち付き拂つて、—こちらが女計りじやと思うて調子を降ろして云うで無いで、私な胸糞が惡うなつて來たでよ。何んぼ女でも。』

『ヘエ、豪い事が起りましたね。』と榮一は別に驚きもせず笑つた。

『ほんとに恐ろしかつたでよ。それで、すぐ十人に暴ばれられたら如何しようかと思つたでわ。男は居らず私は病人なりな。三人が三人ながら殺されるわな、ちきに。』

と稍誇張して、

『フム、お父様は非道い事をしますね。』

『こちらが困ることを知つて居つて、こんなことをするんじやけんな。ほんと困つたな。』

『ほんとにお困りでしたね。それで、どうなさいました。それから？』

裏の堀に子供が二三人蝦網をおろして騷いで居る。「モズ」が柿の木の上で喧しく鳴いて居る。

『内の方では全く知らんけん、町へ聞き合せて見てから、よくよくのお話は致しますと云つて置いたのでよ。』

『そう云ふと歸りましたか？』

『え、一時間計り、互に相談の樣なものをして居つたが、歸つて終ひましたわ。ほだけんど昨日はまたどうせられるかと思つて夜も寢ずに心配して居りましたわ。』

『巡査に云つたの？』

『巡査に云ふたら善いのじやけんど。内の耻を曝らす樣なもんじやけんな。それに巡査に云ひに行く途中でどうせられるや解らんと思うて誰れもやりまへんなんだわ。……然し榮一樣どれだけ昨日は心配したや知れまへんでよ。』

『番頭はどしたの？』

『番頭と云つた處で内の人ではなし、耻かしうてお父樣が四分も年貢を上げて、新田の人が脅しに來たと云へまへんわ。』

『お母樣。それでどうなさるの？』

『それで、おまはんを今日至急來て貰うて、おまはんに相談しようと思つて居つたのですわ？』

『さ。然し、私がどうこうつて困りましたね。』

『然しどうかせな。な。一體鉋公が布れたつて、眞だらうか？』

『嘘の樣ですね。然し嘘であれば、そんなに怒つて來る筈もありますまいね。お父樣のことだから眞でしようよ。利子の拂ひが出來ずに困つて居るのでしよう。』

と半分冗談にして、

『多分それ位いだらうな。併し貧乏して來たら、いやな事が色々起つて來るものじやな。噂ではお父樣今度株で六萬圓損してつて云ふでないで。あれは眞で？』

『どうですか？ 私も此前歸つた時。お母樣さんから聞いただけのです。六萬圓損したつて？』

『それじや、おまはんは一緒に居つても知らんのじやな。六萬圓も損したそうでよ。鉋公がそんなことを云うて居りましたわ。』

『もうそんな事は煩さくつて――』

『ほんまにな。もういやになつて來たな。どうせ近い中には此家屋敷も他人に取られて終ふと思ふたら。』

『なに他人に取られても善いでせんか。裸體で產れたのだから裸體で生きて居つたら善いのでしよう。鳥などは寢ても起きても着のみ着のまゝじやありませんか？』とキリストのソロモンの榮華の譬へを思ひ起し乍ら。

『併し島の樣な美しい衣服を着て居るなら私も不服は云ひませんわ。榮一樣が男ぢやけん、そんな勝手が云へるけんど、女であつたら、中々そんな事は口にも出まへんわ――』

『女ぢやからつて、男と別に變つた事も無いでしよう。人間は衣服着て居るより裸體の方がどんなに美しいか知れませんよ。』と榮一流の裸體主義を遣り始めた。

『そら理屈から云ふたら、まアそうじやな。併し世の中はそんなに理屈計りで行けんからな。』

『理屈じやから世に會はんと云ふ道理がありますかの？　道理ならこそ世の中も渡れるのでしよう。道理は世の中に合はしてこしらへてあるのですもの。』

『もう榮一樣にはかなわね。さう來られては。オホヽヽヽそれではどうしたら善いので、榮一樣の理屈から考へて――此度の事は？』

『此度の事ですか、何にも困つた事でも何でも無いですよ。私から見たら……』

『何でも無い？家をどないにせられるやら解らんのにない？』

『家が燒かれようが壞されようがどうでも善いですよ。人間が殺されても人間の魂は殺される氣遣ひは無いでしよう。』と極端な議論をする。

『併しまア私は家を燒かれるのは嫌ぢやわ。な、笑さんそうでないで。』笑子はたゞ笑つて居る。

『まア榮一樣。そんな事は云はずに今度のことはどうしようで。私また十人も十五人も來られて脅かされるの否ぢやわ。』

『畢竟ですわ。お母樣、十人や二十人が何ですか？』

『大きなことを云ふな。オホ……榮一樣も大分人間が變つたな。な、笑さん。』

『そうですない』とまた笑は曖昧な答をする。

『ほんとに、いゝ、ほだけんど、どうしような。お父樣に尋ねに遣つて眞であつた處で、こちらで、どうする理由にも出來んのぢやからない。まア善い耻暴らしじやな。』

『お母樣。何にも心配入りませんよ。私が引受けますよ。何に些細は無いですよ。お母樣。心配は入らぬですよ。小作人の帳面は内にあるでしよう。』榮一は内庭の水の無い泉水を眺めて居る。苔が穢い臺所の椽の下に、茶色の藥瓶や、硝子の壞れ者が並べてある。こちらの軒に蜘蛛が巣をかけて居る。お日樣がよく照るので蜘蛛の巣が光る。『エ、ありますよ。……それでどうするので』

『處を調べて端書を出すのですよ。此間四分上げると云ふたが都合があつて見合せると云うて――』
『お父様の名前で？』
『お父様の名前でも私の名前でも善いでしよう。』
『そらまたお父様が怒りまつせ。怒られても知りませんでよ。』
『お父様が怒つた位』お久は笑を顧て、
『笑さんもうお晝の支度なされよ。‥‥然しおまはんの善いと思ふ様にしてつかはれ、私はもう心配するのがいやじやけん。』
笑が臺所の方へ椽を走る。
『お父様が勝手なことするから、こちらも勝手をすれば善いでせんか‥‥帳面は何處に』と尋ねて榮一は下女に端書を買ひにやらせて、年貢を引き上げることを見合せると云ふ通知を書いた。
　晝食を終つて二時頃まで書くのがかゝつた。途中で便處へ行かうと思つて臺所へ來ると、笑が「流し」に立つてお釜の中から水で洗ひ落した飯粒を拾つて食つて居るのを見た。そして實に不憫に思つた。
　書き終るとすぐ馬詰を辭して歸らうとした。門を出かけると後から草履で追つかけて來るものがある。
『兄様』と聲をかける。誰かと思ふと笑だ。榮一は鶴子の事許り思つて居たので笑子のことを忘れて終つて居た。笑子の顔を見ると涙が出て居る。
『どうしたの笑さん？』と尋ねると
『兄様、私あなたに聞いて貰ひたいことがあるのですわ。』
『どう云ふこと？』
『此處では皆に見られるから何處か濱の方へでも行きましよう。』
『笑さん。どう云ふこと？笑さん今日は叱られたね。ほんとに氣の毒だつたね。』
　笑子は默つて居る。そしてまた少しして、
『兄様早やう、何處か人に見られん處へ行きましよう。』
　と非常に人に見られるのを嫌つて居る樣だ。
『それじや東の新宅の濱へでも行かうか？』
『何處でも善いけんど、お母様に誰れかがまた告げるとまた叱られますわ。』と門の方を見てそわ〳〵して居る。
『それじや急いで行くから追いていらつしやい』と榮一は急いで早足で歩く。笑も小走に追いて行く。土手に上つて、東の新宅の濱の籔影に二人の姿が隠れた。榮一は綠色の新田と青い川

を眺めながら笑子に問ふた。

『笑さん、どう云ふこと？』

『兄さん、私もう死のうかと思ふ程辛い事許り……』と咽んで默つてしもふ。兄は笑子をぢつと見詰めて居たが、貰ひ泣きをして來た。

『笑さん、なぜそんなことを云ふの？』

『妾はもう馬詰にどうしても、よう辛胞しまへんわ。昨日ちよつと一枚お皿を壞したら來る人來る人に云うて鈍じや鈍じやと布れて吳れるのですわ。今日も朝から怒られて許り居つたのです。私ほんまのお母様があれば……』榮一は唯默つて居る。田宮の濱から新田へ渡し船が渡る。澄み切つた水に蓊がうつる

『今度田敷の十七になる娘さんが西の新宅の高行さんの處へくるのでしよう。その娘さんは、大抵自分手に嫁入の衣裝を縫ふ人ですと、そしたら昨日田敷の叔父様が（お久の從兄にあたる）宅へいらしやると私の眼の前で「うちのこの子は鈍じやけん役に立ちませんね、針のもちようさへまだ知らんし、茶碗の一つもよう洗ひまへんのでよ。」とお母樣が仰しやるのでしよう。私もう、その時死んでしまふかと思ひましたわ——』

『笑さん、そんな短氣を起しては困るね』

『兄さん、併し考へてつかはれ、朝は大抵誰れよりも一番早やう起きて大釜の下を焚き付けて女中さんや番頭さんを起して朝御飯の支度に取りかゝつて、晩と云うたら九時頃まで夕なべさされるんでしよう。それだけ働いてもまだ働きが足らん働きが足らんと仰つて追つ立てなさるのでしよう。それに一つお皿をめいでも償へと仰るのですからない。』

『辨償して居るの？』

『え、昨日やかし五錢償ひましたわ。』

『お母様その金を取る？』

『お取りなさりますとも。』と云つて泣いて居る。

『兄様、ほんまに、私の心を察してつかはれ、……女の親には死に別れ、男の親があつてもあの樣だし、繼母のねきに居つから女中よりつらい辛胞はせなならず……私はもうどうしてもよう辛胞しませんわ。……三日まへない……』と云つて默つて終ふ。笑の胸は何から云つて善いかと思ひ亂れて居るのである。十日程前奥でつまみ食ひをして居る所を見付けられて叱られた時のパノラマや、繼母の御飯をつぐとつぎ樣が下手じやと云はれた事、鷄が一匹七日程前に居らぬ樣になつたが、罪は自分にきせられた事、御佛壇の掃除が惡いと云つて叱られた事、笑さ

んはいつでも行燈に燈火を四本も入れると云つて叱られた事朝晩の味噌汁の鹽梅にいつも小言を云はれる事‥‥先から先へ考へて行つて、三日前に、繼母が床の下に敷いて寢たと云ふ一圓札が紛失したと云うて、罪を自分に着せた事を一番新しく鋭敏に思ひ浮べて居るのでこの時の感想を始めから云はふとして居るのだがどうしても口に出て來ぬ今迄何度か此樣な難題をかけられた事も思ひ出す。

　それで榮一は『三日前にどうしたの？』と尋ねたが、笑は泣いて返事をしない。暫くして、

『三日前にない、兄さん。わたしが取りもせんのにお母樣がお金を盗んだと仰るのですよ。一圓――。あの、お休みになる時床の下へお敷きなしたんが朝になつて無いのですつて――』

『然し笑さんは自分に盗まぬのだらう。盗まぬのなら何にもそんなに苦にしなくても善いじや無いかね。』

『それでも盗まぬものを盗んだと云はれたら辛うございますわ。』

『なに、それ位いの事。町でね笑さん、こきんさんが今度看護婦になつただらうな、あの女中が。そしたらね宅では僕が宅を困らそうと思うて看護婦にした位いまで思うて居るのだよ、何だね、人の誤解を恐れる樣な人間でどうなる？　そら笑さんは辛いだらう。併し僕の事を思つて見給へ何にも辛い事は無いよ。僕は三度の食事も充分に食はして呉れはしないよ。シャツなどは勿論自分手に洗うのさ。そして僕は今これ一枚しか無いのだよ。』とメリヤスの半シャツの汚にじんだ物を現して見せた。

　笑は一目見て泣いた。榮一は『そんな大きな聲で泣くと上を通る人が不審がるから』と制した。

『お父樣と云へばお父樣じや、自分の子が此那に困つて居つても知らぬ顏して居るつて‥‥』と笑は恨んで居る。

『笑さんそれはまだ善いがね。此頃學校へ行つても辨當さへこしらへて呉れないんだよ。それに夜は勉強すると油代が多く入るから、朝、勉強せよと云ふの』

『お父樣がそれまで――』

『それまでなら善いがね、此度益則に後を讓るつて云つて居るよ。』

『あなたを止めて？　兄樣を？‥‥』と笑子は驚いて居る。榮一は涙を拭きながら川の上を見たが靜かな滑かな流れに小波が立つて居る。そして或る處は格別光つて白く見え或處は青く、紋の樣に見える。實に美しい。

『笑さん、泣きなさるな、私が生きて居る間は笑樣に心配はさゝぬよ。ね、少し待つて居て呉れ給へ。』

『然し私は、もう田舎に居るのがいやになりましたわ。こんなに朝から晩まで叱られて計り居つたら、いつか殺されるか死ぬかしますわ。』

『併し忍んでいらつしやい、今少しだから。笑さん今どうするたいて仕方が無いでしよう。』

『それでも兄さん私もふ十日と馬詰に居るのがいやになりました。噫。妾の子つて辛いもんじやな……』と云つて泣いて居る。「妾の子」と云ふ言葉がガクと胸に響くと榮一は決心の色を現して、

『笑さん、いゝよ。それじや私に追いていらつしやい。神戸へ行かう。下女奉公でもする覺悟はあるね？』慌てゝ云ふた。

『下女奉公？　馬詰より下女奉公の方がどれ位いゝやら……』

『笑さん、それじや、そのまゝすぐ行ける？』

『私態も何もいりまへんわ。兄様がかまわぬなら追いて行きますよ。併しお金は？』

『いゝよ笑樣。お金は月給の殘りが十圓計りまだあるから心配は無い。神戸まで之れで充分行ける。一緒に行かう。早く行かう！　内に悟られん間に。』

『それじや兄さん、私を連れて行つてくださるの？』と袖で涙を拭きながら顔を上げた。その顔には可愛い女の弱い依賴心が現れて居た。

二人の後ろ姿は牛屋島に消えた。車で徳島へ飛んだ。徳島へ着いたのが五時頃であつた。榮一は車の上で、今日は妹に涙の爲めの涙を流させられた。——など考へて居た。行く處が無いから瀧の山まで曳かして二人は瀧の山を散歩した。行先を考へるとお日樣がもう西へ這入つて再び東から出ぬ樣な感じがした。

三重の塔の下に立つて徳島全市を眼の下に見ながら榮一は笑子に云つた。

『笑さんに下女奉公などさしたくは無いが……ね』

『兄さん、それでも時の運ですよ。星の廻りが惡いのだから仕方が無いでへんか。』と充分明かに覺悟を示して居る。が榮一は此間は下女を一人出世さして置いて今一月經たぬ中に我妹を下女に出さねばならぬ事を悲しんだ。

『ね、笑さん、笑さんが神戸の何處かへ奉公入しても淋しいと云つて兄さんに手紙は書けないはねえ。それ思つたらほんとに

辛いわ。然し笑さん、兄さんが一月に一度か二月に一度は必度會ひに行きますよ。』

『兄さん、妾もそれを思つたら辛いけんど。かうやつて兄さんと一諸に居ると何だか私は極樂にでも居る樣な氣がしますわ。私、そら兄さんに手紙を出す事の出來んのは辛いわ、それでも田舍のお繼母に泣かされるより善いわ……』と安心して居る。何だか不憫だ。

『ア兄樣、中洲に電氣燈がついた。奇麗な。御覽』と何だか樂し相だ。然し榮一は笑が未來に對する何の自覺もなく。電氣燈を見て居る樣を見て、田舍娘の前途を思ひ、目を眩まし、良心を鈍らす誘惑物の多い都會に彼女を送り出すことを氣遣つて涙を落さゞるを得なかつた。

『兄樣まだ泣いて居らしやるの？』と笑子は榮一の返事の無いので振りむいて云ふた。

『ね、笑さん。笑さんが神戸へ行くのも善いが、病氣にでもなつた時はどうしようかと思つてねえ』

『兄樣、そんな事を思ふたら家を出る事が出來ますものか、兄樣が病身だから、そんな事を思ふんですわ。私の樣な息災な若者が病氣になりますものか？』微笑んで空い勢である。

『併し笑樣、あなたがあまり元氣が善過ぎるので心配するのですよ。田舍の人が町へ出るとそれだから困るのですよ。町が色々と珍しいものだからね。つい浮かされて少しの間は面白くて元氣も善いが順々に夢が醒めるのですよ。町へ出て脚氣に懸る人でも始めは誰れが脚氣に懸ると思ひますか？』と色々誡めると、笑子は默つて萎れて居る。しほれた處を見るとまた可愛くなつて神戸へまで逃してやらうと思ふ。

萎れて居るのを見てあまり哀れに思つたから、

『笑樣、瀧の燒餅でも食ふか？』と云つた。

『兄樣やめましよう。十錢のお金でも今は使へまへんでせんか。』と答へる。

『兄樣もう中洲へ行きませう。蒸汽は何時に出るのか知らん。』

『まだ行くのは早いよ。八時に共同丸が出るが遲い方は十時だからね。』

『もう何時か知らん？』

『もう七時だらう大分暗うなつたから。緩然した方がいゝですよ。あまり苛らたなくて。』

『それでも蒸汽に乘込まなくちや何だか心配だ——』

『なに心配はない。兄樣が付いて居るよ。然し笑さん腹が減ら

ね？　何か食ふか「そば」でも？』

『そばでも？　妾は何にも食べたく無いのですが、兄様はお腹が減いたでしよう。下へ降りて何かめしあがれ。』

それで三宜亭の方から白糸亭の前を通つて神武天皇の銅像の前へ出た。白糸亭の玄關には富田橋俊工祝賀會と筆太く書いた紙が貼つてあつた。三階には三味線やハ喧しい聲が聞えて居た。榮一は笑子に、『笑さん、お父様も多分此の中に混つて居るのでしよう。安氣なものだね。アハハ……』と笑つて話した。

笑子と榮一は晩の八時の蒸汽船で神戸へ行つた。そして相生町の口入屋へ行つて見たが保證人が入ると云ふので吉田由太郎(船頭の)の宅に引き返して事情を打ち開けて話して萬事宜敷頼む、父の方へは一際秘密にして置いて呉れる様にとくれぐれ頼んで置いて、夜の十二時の蒸汽で引上げた。

棧橋まで笑子は送つて來たが、榮一は汽船に乘込うとして一寸と笑子を顧みて

『笑歳近い中に全身出て來るかも知れぬよ。』と云つたが、

『兄様必度出て來て下さい待つて居りますよ』と笑子は頼む様に云つた。

『未だ乘込むのは早いまだ少し話しましようか？』と榮一は棧橋の先に笑子を連れて行つて、人に聞えぬ様に、

『笑さん、ほんとに、しつかりして働いて下さいよ。御頼みだから』と笑子の顔を見詰めた。笑子は項垂れて居たが色は黒いが頬のポツと赤い所には決心の情が現れて居た。續けてまた、

『私ね、もう、ずうと歸らずに居りたい樣な氣がするがね。も一度なり、二度なり、お父様に云つて見る積りだから歸つて行きますよ。そして駄目だと思つたら出て來ますよ。』と云ふた。併し其時は寧ろ父の事より鶴子の事を思つて居た。そして鶴子の美しい薔薇色の頬と髮の散らばつて何とも云へぬ姿を想像した。

笑子は『そら、その方が善いですよ。二人とも隱れて了つたら必度後から探しに來るでしよう。さうすると事が面倒になりますからない。』と兄の意見に贊成した。

話して居る中に汽笛が鳴つたので、榮一は急いで乘込んだ。船は間もなく棧橋を離れた。殘された笑が淋しそうに棧橋に立つて居るのを眺めて居たが、男らしく無いと思つたから三等室に降りた。併し三等室の暗い隅に兵庫の棧橋が現れて、そこに背の低い、髮の赤い縮れた、頬のパアと赤くて色の小黑い、目のパッチりした、手のたゞれた不憫な女が俯むいて立つて居るのを見た。



原敬氏及其周圍の思想

山本實彦

一

原敬氏は思想問題に對しても野暮ではない。錐のやうに鋭い觀察眼があると云ふものもある。しかしそれは嘘らしい。君は佛國に學んだこともある筈である。新聞記者で飯を喰つたこともある筈だ。さうであるならば革命の血潮がまだ醒めやらぬ、佛國の革命氣分を十二分に味つたらう。そして一旦はルウソオの民約論に共鳴したこともあるだらう、グウジュの婦人參政權問題も小耳に狹んだことのある筈だ。

　而も、君の近業を仔細に檢討して見よ、君の思想をつまびらかに解剖して見よ、君の胸中の私語に耳を澄まして見よ、君の周圍の人々の思想に見よ、君の眼の著しく脊光りする凄さに見よ。エライ仕事師、一騎打の名人、議會獨歩の闘將として、その術策の凄さ、その打算の鋭さに「ナール程」と一種の凄味を覺ふるのみである。正義の觀念より來たる嚴肅の氣分、人道主義の氣分から味はるゝ敬虔の念は爪の垢ほどもないのである。

　原君に從へば、法律は萬能であつて、議會は多數を制すれば國民はよかれ惡しかれ、議會に文句の付けやうがなく、それに絕體に服從せなくてはならぬ。勞働運動も、普通選擧運動も、法律的に、議會的に、政治的に行はなければ、片つ端からフン縛つて遣れと云ふヤツツケロ思想である。それも宜しい、道德的良心の痲痺せない關係が上にあつて、自ら奉ずる薄く、自ら行ふことの嚴格なる人ならばそれで宜しいかも知れぬ。それ位の人ならば民衆の多數に信仰があつて案外に滑かな政治が出來

るかも知れん、しかし德望の旺であつた耆公でもその生存中には群衆に納れられなかつた。まして現代の人々はその時代に比すれば數層倍に人が惡い、セチ辛い世を渡らねばならぬ、唯物論とか、女人解放とかいふ思潮が一世を風靡し、その思想が巨大の勢を以て、幾多の資本家、貴族等の階級を征服し、階級戰爭でも始まろうとする暗い世の中だ。平和の時代にさへ、未開の時代にさへ、法律萬能は受入られなかつた。法律一點張りでは、世の中は無趣味のものになる、泉もなければ森もなき沙漠のやうなものになる。原君は丁度自分の頭を法律で冷靜に固めておるから、君の政治的半生涯を外面から展望すれば、殆ど泉のない沙漠のやうに見え、宗教のない人生のやうに見られて何だか餘裕のない、頼り甲斐のない、襟度の乏しいスパルタあたりの鬪將でも見るやうな感じが浮ぶ。

二

君が尤も親近者であつて總選擧のすんだ後で、内閣を讓渡そうと思つているのは、牧野君でなく、後藤君でなく、加藤君でもない、田健治郎その人であるとのことだ。日本最初の文官總督として特に拔擢した位であるから、そこに思想の共通した所もあろう、人格の類似した所もあろう、その共に官僚出にして、思想が低調で、實行力の旺盛なる、萬事に打算的にして術策に長ぜるあたりからの共鳴であろう。

然らば田氏を研究するのは、原君の思想を知るに尤も近道であると云はねばならぬ。田氏は故大浦氏に擧げられてその遞相たるおり、次官として可なりの喝采を博した人だけに、陰鬱の氣漲る官僚氣質は充分に心得ておる。山縣老によく、死んだ寺内氏によかつただけ、貴族院の一角には可なりの勢力を有しておるが、それかとて死んだ三島君ほどでもなく、平田氏ほどでもない。大浦氏ほどの破壞力も建設力もないが、後藤君なぞに比して何處かに手固き思想の持主であるために原氏も信認するに至つたものだろうとの想像がつく。

か丶る道程を歩いた人だけに高遠なる人生の目的とか、政治の理想とかには殆んどお門違ひの感がある。思想界の亂世である現代にか丶る官僚的政治家乃至は藩閥と極く近い古政客を迎へるだけの餘地が介在してゐるか。

田男に定めし不足であろう。乃公は政治家であつて政論家ではなく、實行家であつて批評家ではないと逆襲するかも知れん、しかし田男は普選運動の赤熱的狼火を餘所に、悠々小田原に山

熊公と握手しつゝある政客である。その人を信認して殖民地總督に薦めし原氏の政治的良心は基本に於て時代錯誤に陷つてゐる。そしてその政治的理想も怪しいものだ。就中その立憲的態度に於ては充分に論議する餘地がある。

三

原氏は頃日の民衆運動は、外來思想の惡影響であつて、そして外來思想は一も二も危險思想に近きものであるとの考らしい。これが眞に僞らざる原氏の告白でありとすれば、その頑冥さ、固陋さは呆れ返らざるを得ない。然らば我國の古有思想は何であるか、その古有思想は現代に悉く消化が出來るものであるか、佛敎は當時危險思想ではなかつたか、佛敎の渡來と共に我が國體はいかなる影響を受けたか、老莊の無政府主義は我が國を危機に陷れたか、ソンナ質問もして見たくなる。近時の社會現象が著しく赤色味を帶びて來たのを、外來思想の罪に歸するのは笑ふべきことである。然らばその思想の所有者に箝口令をはめ、或は發賣禁止、罰金、投獄等の刑科を敷いてそれが防遏の出來る性質のものであるか。

いくら原氏の政治的カラーが冷酷味を帶びていたにせよ、世評の如く、貴族院や樞密院、元老、軍閥に對する氣兼のために、如上の取締りを嚴にするのでもなかろう。それほどまでには原氏の政治的良心を疑ゐたくない。原氏は明敏の人である、聰慧の質である。普選案に反對であつても尙早と云ひ、以つて有產階級の選擧區民に媚びるの策は心得ておる。普選案を斷行し得ないで婦人參政權論者に反對じない妙策をも心得ておる。氏の詭辯、權謀の縱横なる全く當代に類例を絕つ。併し我等はもう戰爭にも飽いた。權謀を生命とする政治にも飽き／＼した。それで日本の議會に對してはこの二三年來何等の趣味も有たなければ、何等の期待も有たない。ア、また年中行事が始まつたか、院内で守衛をなぐつた、院外では普選軍が騷いでおる位にしか思つておらぬ。彼等は國民を思ふ純眞の心も失せておる。人間とか人道とかの感じのする議員は極めて少く、まして自分を代表してくれる有難い賴もしい人ぞとの感想などは微塵もおこらない。何たが低級の議員、現代と懸け離れた人々の群れ、よく熊公なぞの如き腕力沙汰や怒鳴り合ひをして日を暮らす人々と蔑みの感じのするのは自分一人ではあるまい。これ等の人々を操縦して行く原氏の苦心や焦慮は一通りではあるまい。議會が解散した瞬間にもそう思つた。ナーニ政友會の便宜のいい時に

解散して、自黨で作成した小選擧區でウント資本家議員や、田吾作議員を擧ぐればそれでいいや。

四

しかし、世の中はいつもお天氣の日ばかりは續かぬ。いよ〱そうなつて、資本家が議員に多くなり、院内を資本家化して、富豪に都合のいい法案ばかりがパスしたその時には院外には無產階級の血の唸りや、涙の悲憤がいよ〱眞劍になつて來る。我にも一個の參政權を與へよ、暖かき國家の庇護に浴せしめよ、人として同じ道を步かしめよの叫喚は期せずして生れるのだ。そうすると院内の聲と、院外の聲とは全然別種の響が聞えるやうになる。階級鬪爭は劇甚になつてくるし、我國の混亂はます〱紛糾を極むるは火を觀るより瞭かである。原氏の明敏にして此處に氣づかざりしは大なる手落ちであつて、政友會が將來自ら顚跌するのは此點にある。唯だ一戰だけの功果は偉ならんも、永久の眞理や同情とを敵としたる現内閣の措置は失當の甚しきものであつた。三百萬人を味方として、七千萬人を敵とした原氏の案は旨いやうでも三年も經てば自ら縊らなくてはならぬ愚案であつた。今日までの日本にありては三百萬人の味方で政治の運用が出來たかも知れぬが、國難に際會すれば矢張り無產階級七千萬人の勝利になるのだ。英吉利に見よ、佛國に見よ、國難の後には必らず選擧權擴張が行はれた。我等は暴動的の性質を帶びた諸種の改革には賛成しがたい。この意味に於て原氏は政友會を提げて自ら普選問題を解決するのが永遠に國民の大多數を味方とする策であつた。原氏が閥族と相通じ、有產階級に阿り、無名の軍にて解散を奏請したりするのは驕る平家の盛時を思はしむる。新たなる靑年が、氣骨ある靑年が、その事大主義の旗風に立つを屑とするだろうか。

五

原氏の周圍には一の哲人もなく、一の科學者もなく、一の宗敎家もなく、一の文學家もない。その謀師として一代の智囊もなく、その周圍の人々は悉く原氏より數段以下の人物のみである。閣議の席上でも中橋も野田も次官格である。入閣當始山本達雄やゝ人格を以て憚られしも、今は何程のこともなかるべく、中橋とて金力を以て打勝てる大臣なれば抱負も經綸もなかるべし、野田も外面の包容力は大なる如くなれど、巧慧にして利己心强く、彼の心事を知るものはその圓覺寺參禪が何の爲めなり

やと一笑に附する位である。村野は清純無比政友會第一の人格者であるが、その思想、識見は依然として舊套を脫する所がない。而して敬氏の左右の新進たる鵜澤の如きは政治的風格なく、學問に哲學がない。横田は勝氣あれど横縱共に不足である。看來れば人物の寂寥晨星の如くである。唯だ原氏の思想及び性格を代表するものは、例の「白紙主義」であり、「憂慮病主義」であつたのである。大隈氏は「理想高遠主義」を標榜し、桂氏は「ニコポン主義」なるものであつて甘言、佞色を以て巧に院の内外を軟化せしめ、寺内氏また「秉公持平主義」を用ゐたが、其何れの宰相も末路甚だ蕭條たるものであつた。原氏の白紙主義なるものは、チヨツト寺内氏の夫に類の近いものであるが、自分の乘りつゝある政策に何等の根抵なく、何等の主義なく、その日〳〵の御都合にて如何やうにも變化し得る變通自在のものである。隨つて内閣の政策とか、廟算とか云へるものがいかがのものであるかは窺ひ知ることは出來ぬのである。原氏の思想はニーチエの主義を悪く踏襲しておる所がある、即ち「强者には勝利の喜びと、勝利品の獲得とあり、弱者には悲哀と苦痛の二つあるのみ、一歩先じて優勝者とならんと欲せば、衆人を抑壓せよ」と、原氏は人道主義者でもない、理想主義者でもない。極端なる現實主義者である、極端なる功利主義者である。故に勝利のためには手段を選ばざることは桂氏によく似ておる。死せる大浦氏によく似ておる、伊藤氏、西園寺氏と異れる點は此處にある。

だから、原氏の周圍の人々の思想はすべてが現實主義である。享樂主義である。見よ、中橋氏は大阪の會社重役、野田氏も朝鮮の會社重役、山本氏、高橋氏は共に日銀の出、原氏とて古河の關係者ではないか。憲政會は之に反し、尾崎氏、武富氏、河野氏、島田氏の有力なる幹部は寧ろ清貧を以て一貫せる無産階級に近いものである。唯だ、加藤氏は一代の暴富をバツクに有せるだけ、資本主義的色彩が濃厚であるのは遺憾である。原氏の周圍の人々に從へば、政治家となるは眞に國民の代表者たるにあらずして、半ばは自己の名譽心を滿足せしむるため、半ばは金儲けをなすには代議士たり、國務大臣たるのが一番便宜であると云ふ結論に到着するのは甚だ以て面白い皮肉である。

六

個性の自由、個性の獨立を期するためには、傳統的悪思想を改革せなくてはならぬことも多い。それかとて吾人は權力の否認、政府の否認、國家の否認をなすアナーキズムは反對である。

唯だ、金も貯めたし、大臣にもなりたし、勲章もさげたし、待合にても御前様と云はれたい現實主義の享樂的政治家に對しては、茲に痛烈なる反省を促さではすまないのである。

原氏は個人としては、淸廉であり、或る階級特權に憧憬しておる人でもないし、平民宰相としての態度は犬養氏、尾崎氏にも優れる優質を有しておるが、而もその周圍の思想を審に解剖し來れば、未だ以て公人しとての原氏の平民政策を謳歌する譯に行かないのである。自ら奉ずること薄く、克己、隱忍の優質は以つて今日氏の地位と勢望とを城いたものだが、その美はしい個性を公人的に徹底する能はざるは如何なる所以であるか、淸濁併呑の雅量は東洋流に解すれば、讚美すべき行徑であらう、しかし國民の代表たり、指導の任に當れる政府首班者が、その政策に、その方針に丸で個性と反對なる行き方を取り、國民多數の希望である普選案を葬り去つたのは、資本階級に厚ふするの政策と稱せられても、眞甲からの辯明は出來まい。吾人は原氏の奮鬪に對しては同情しておる。その一身を處するの淡泊さには敬意を表しておる。その事務を決裁するの果斷にも推服しておる。そしてその女色に對して比較的に批難がないのにも異存はない。郷黨で人望のあるのには郷黨に厚き氏の平常を忍んでその故舊に厚い義心に感謝する。先夫人に對しての情誼の至れるにも感謝する。その議會に於てイラズもがなの揚足取りも元氣縱横の餘技として見逃しておく。

吾人は一家の私事に對しては批評したくない、一私人としての行動には成るべく私議したくない。しかし一家の私事にして美はしき範を示し、ゆかしき私人の情誼に對してはお互に吹聽するのが愉快でもあるし、また世のためにもなるだろうと思はれる。原氏の場合は實に此二理由によつて茲に筆に上せた譯である。

七

私人として麗はしき輝きを有せるの人、必ずしも萬人崇拜の的にはならない。萬人を率ゐるの人必ずしも、それが世の先覺者でもなく、また世のため、人のために必ずしも其人が盡せるものでもない。原氏は我國の大政黨の首領であり、また閣僚の首班に立つてゐる人だけれど、氏が首領たるにより、氏が總理大臣たるによりて我國がどれだけ、いい地位に躍進し、國民がどれだけ幸福になつたかと問はるれば、一言も之に酬ゆるの言辭を見出さないのである。

呂運亨問題はつまらぬものだ、外事秦報事件も何の事もない、あんな問題を業々しく振りかざして白晝堂々とやる勇氣は冷水の出る老人か、氣樂院あたりでなければ見られぬ圖だ。六十を越せる老人心理から割出したら尤もかも知れないが、明治、大正の思想に觸れたものならあんなつまらぬものを問題にはせぬ。しかし、外事秦報事件に對する責任は外務大臣の自由にしたい、内田氏も良心はある筈であるから。

それよりは數萬の同胞が海の彼方で戰つてゐるのを心配せなくてはならぬのだ、六億以上の國帑を糜して戰つてゐる西伯利の現狀をいかにするのだ。一毛の金だとて雨か雪のやうに天からは降つては來ぬ。その一厘、一毛の微に至るまで、皆な營々と働いた我が同胞の血の汗である。涙の結晶である。パンさへ喰へない貧民も御國のためなればこそ、一食を節し、一菜を節して納税の義務は怠らぬ。閣僚諸君はよもや、この苦衷、その節義、その愛國心を知らない事はあるまい。危險思想、外來思想と關係諸君はヒドイ配慮があるやうだが、三圓の國税を奉納することの出來ぬ裏店の車夫の息も死を賭して朔北の野に出征してゐる。命を賭けることは三兩の納税を奉納するよりモツト〳〵國家に對する犧牲心が偉大でなければならぬ筈だ。我等はそんな獻身的な、尊い犧牲者には出來るだけの保護を與へてやるのがよりよき國家の義務だと信じている。參政權も、市民權も、個人としての名譽ある地位をも與へてやりたい。その出征せる將卒の結末はいかになる。上院も、下院も、閣僚も、左黨も、右黨も、思想家も、チト活眼をこの邊に注ぐが刻下の重要なことではあるまいか。出征して、氷下三十度の霜雪と戰ひ、そして得體の知れぬ過激派と戈を交へて貴重の生命を殞す勇士も氣の毒であるが、その父兄に對しても眞に痛はしい。そしてその兵站を無期限に貢ぎつゝある我が總ての階級、就中下層階級はいたわしい限りである。

我が兩院はこの大問題を閑却して、呂運亨問題とか、外事秦報件とかを虎の子のやうにサモ大事に取扱つてゐるのは憫然の至りではないか。原氏はこの偶像にも等しき、兩院議員の無智なるをイイ氣にして、かゝる大問題を等閑に附して、逡巡決せざるは何のためであるか。セミヨノフにせよ、カルムイコフにせよ、日本に賴つた將軍でも、今では日本の態度を怨んでいる。賃金さへ與へてそしてその對償として殘るものは「怨恨」のみであるから堪らない。

外交上の機略なき原氏に註文するのは無理なれどされ〳〵ばとて

當の責任者である以上、輾轉し、督責し、忠言せない譯には行かぬ。西伯利問題に次いで、支那問題をいかにする。

青島や、關東洲在住の人々は云ふまでもなく、上海、天津、其他に散在する日本人は本國政府の對支政策の諒解が出來ない所に持つて來て、數年越しのボイコツトで惱み切つてをる。それに政治を喰物にする支那政治家は或は米國に加擔し、或は英國に組んで邦人を侮蔑し、日貨を排斥し、狼藉、亂暴至らざるはない現狀ではないか。人道主義を解せざる軍閥主義でも、在支の日本人の窮狀には常に一掬の涙を濺いでをる。我黨勝利を夢みつゝ、我黨内閣に醉ゐつゝあるのは宜しい。さりながら同胞のその窮狀をいかにして救出する。

原敬氏は内政の上に於ける決斷は、或は大久保甲東以上であるかも知らぬ、しかし對外策に於ける機略は零であつて、人道主義に於ける理解も殆んど零である。人道的政治家の出現は眞に我國の急務である。小手先きの冴ゆる政治家は寧ろ國家の前途を誤り、却つて希望に輝ける新進國を朽廢せしめる。

八

勝利を夢む初期の勇氣は何者をも溶かし、その光輝は何者にも勝りて燦々たるものである。僕もそんなことがあつた。往々一百票内外の差で勝利の幻影が破れたとき、そこに悲慘なる悲痛の言句が迸發し、鐵板をも突破するが如き憤怒の焔が湧く。金錢の不足で敗軍の味を知つたとき、嗚呼我は須らく實業に走らんとの決意を固めた。それから春秋茲に三年を過ぐ。

勝利に醉ひ、順風裡に航海してをる人は戰ひの痛苦も忘れ、怒濤、狂瀾の恐るべきをも知らない。原氏は院内に於て、院外に於て、幾度も政敵と戰ひ、その間に幾多の辛酸は嘗めた。しかし慨してその勝利の快盃を傾け、順風裡に廟堂に立つに至つた。今回もお誂向きの選擧區制ではあるし、官權の威力は利けるし、それに軍資さへ倉庫に唸つてをるときくから豫定の祝盃が三緣山麓に擧げらるゝことだらう。

しかし恐るべき潜航艇はドーバアに待ち臥せてをる。無産階級や、智識階級によつて白熱化された普選問題は塀一重の彼方にドクロを卷いて虎視眈々たる姿である。僅かの塀一重、垣一重ではあるが、原氏と彼等青年の思想とは既に百里の間隔がある。その社會運動には統一と節制が缺けて、一寸取りどめのつかぬやうであるが、彼等も一層の訓練と、一層の眞劍味とを加へて來たときは決して豎子組し易しと多寡を括ることは出來ぬ

のである。

いかに思想上の關所を固くしたからとて、多數の市民、多數の國民は「禁讀同盟」を以つて政府に迎合するやうなことはあるまい。假令へ發賣を禁止し、そして政府が危險と認定する新聞や雜誌とを秦の始皇のやうに燒棄して見た所が、交通機關の發達せる今日であるから政府の註文通りの思想は培育されまい。それよりは健全なる國民をつくりあげて、その思想も、その行動も健全にするのが早道だ。原氏及びその周圍の人々の思想が此處に氣がつくだらうか。數年前の群衆心理と現時の群衆心理の變り方や、その思想の推移をいかに原氏は觀察しておるか。十年前、政友會の張子房と稱せられて居た、岡崎邦輔氏の近時を支配する思想はどんなものか。

軍國主義より人道主義へ、官僚政治より政黨政治へ、政黨政治より民衆政治へ、もう寡頭政治や、軍國主義、官僚政治等の文字は「共同墓地の碑石」にのみに發見せらるゝのみである。

九

正義の孤立は光榮である。不義の聯合は罪惡である。經濟的にも、外交上にも、政治上にも獨立濶步の出來る國民は國民としての誇りがある。國家としての誇りがある。我國は仁義を以つて國本としておる、博愛正義を以て列國に親交を盟つておる正義のためには七千萬の同胞は死をだに辭せぬ。ところが、列强は我國是を猜視し、我國民の平和主義、人道主義には信をおいておらぬ。米國政府及その國民の我が同胞の强ゆるに、「第二の獨逸」を以て遇ひ、軍國主義の權化、侵略主義の本家のやうに思つてゐる。所が自分が侵略主義の强盜者流でないならば、他國が何とぬかそうが、そんな事には一向取合ふの必要もないのであるが、まだ〳〵他人樣の褌下を借らねばならぬ憫れな狀態であるから、共處に外交上の懸引とか云ふ面倒臭いものが伴つてくる。原氏はその面倒臭い對米政策に對していかに考慮中であるか、「考慮中」なる文字は一般に信ぜらるゝ所に依れば、無能無策を切り拔ける所の唯一の「院內の要塞」であるのだが、その要塞にて小田原評定中に大事は決定してしまいはせぬか。

足一たび、北米の地を踏んだものは、直に分る事だが、我國の正義とか、人道とか云ふことは彼地には蚊の聲ほどにも通用せない、依然として「ヂヤツプの小野心家」として埠頭の上から見下ろさるゝのである。桑港、シヤトル、紐育、ボストン等に於て邦人の侮辱さるゝ報道は應接に遑ない位であつて、[illegible]の[illegible]

の傑つやうなことが殆んど連日吾人の耳に觸れ、机上に堆積される。日米の紳士協約はどうなつた、一九一八年のウヰルソンの經濟均等の教書はどうなつた。山東問題は米國上院でいかに取扱はれた。原氏は太平洋の彼方にある同胞を如何に見てをるのか、光榮と光輝とに生くる我國正義の威力はこんなものであるかと思ふと時々不覺の涙も出る。

さりながら、これは原氏一人の罪ではない、單に現内閣の罪でもない。國民全體無自覺の應報である。呂運亨問題や、外事集報事件はこれ等から見れば、誠に屁のやうなものである。

原氏の思想にして、人道上に深き根帶があるならば西伯利、支那、北米問題に對しても、「もう考慮の要惡」から出でゝくる時分である。眞に大宰相としての能力があるならば、議會に於て雜兵どもの揚足取りは止めにして、最大多數の最大幸福のために敢然として起たなくてはならぬのである。原氏の奮鬪に對しては總ての階級が驚異の眼を睜はりながら、未だ以て理想的の政治家と許さない所以は此處にある。右黨勇者より衷心からの尊敬を拂はれないのもそこにある。

大平洋の彼方の同胞の立場に想ひ及べば眞に熱い涙が出る、單なる國家主義の立場よりしての同情でなく、全く人道主義の別の立場からいつても、我が同胞が牛馬奴隷的待遇、黄色待遇の鐵鎖から解放さるゝのを希ふのは人類當然の要求でなければならぬ。

一〇

原氏は理想の低調なる政治家である。冷たい法律萬能の政治家である。原氏が法相として思想問題に對する行き方に見てもさうである。普選案に對しての態度に見てもそうである。

我等の見解によれば、法律は人類相互の發展を遂げんがために、その個人、その團體と國家との約束である。決してそれ等人類の欲求、本能に對して頭から法律で制限すべきものでないと思つてゐる。そしてその選擧權の如きも一般投票はその最高理想である。誰でも自由は得たい。參政權も獲得したい。そして七千萬中の三百萬人のみが選擧權を行使して國政に參與してをることには吾人も不滿足である。

原氏は輓近の社會運動が病的であつて、その病的發作によ普選問題は、一の階級打破であり、社會組織の脅威であると斷言してをる。吾人は決して近時の社會現象を以て發作的であるとは思はない。從つて普選問題も一部の書生論とも思はねば、

またその施行が尙早だとも思はない。隨つて現代の社會組織で普選を斷行するのは非合法とも、不合理とも思はぬ。

原氏及その周圍の思想は大分現代に後れておる、原氏及其周圍の人々に取つては或は早いかも知れぬ。しかし總ての我國民に取つては尙早ではない。尙早といふ、その頭腦が既に世界の大勢に後れている。我が國の社會思想がいかに進んで來たか、またいかなる方面にどれだけの速力を以て進みつゝあるかは輓近一年間の社會現象で證明されておるではないか。

人間は金よりも値打がある。三圓の奉仕もありがたいが、人間の靈と肉との全部を捧げておる奉仕はモット値打がある、吾人は唯物的の立場にのみで社會奉仕の深淺を測りたくない。現代の思想に伴はぬ現行制度は一日も早く打破する必要がある。隨つて今回の解散が不當であつて、單に政友會及政府の利益から按出されたものであることは、第三者の立場にあるタイムス子の所論を見ても肯定されるのである。

原首相は其手段を全然政略に求めたり而して此舊來の詭策の重なる一面は國民の心理に惡影響を及ぼす事尠からず且つ今日の如き世論囂々たる秋に當り彼等政府者が徒らに國民の選擧權其他人心を沸騰せしめつゝある問題を弄び剩さ首相は袞龍の袖に隱れつゝ其專制的意志を以て憲法に依る選良を恰も小學兒童の一部を退學せしむるが如く斯く手輕に発黜するが如き思ふだに日本國民の最良分子の理解力に取こて不條理極まる侮辱なり斯る弊盤が永く繼續すべしとは想像し得られざる所なり—(三月十七日東京朝日所載)

現時の議員が我國民の最良分子なりとは、遙か海を隔つるタイムス子の誤想である。しかし原氏の專制的意志によりて不當の解散を奏請したと云つたのは、穿つた名評である。吾人は原氏の思想を小學兒童にも均しき幼稚のものだと思つてゐるが、日本の所謂選良なる人々は却つて原氏から小學兒童扱ひにされてしまつた。

かく不當の解散を見たからには、國民の同情は油然として右黨に集まらねばならぬのに、加藤氏の態度が半煮であるために國民の大多數が宙に迷へるが如きは遺憾の極である。加藤氏は立憲政治家としての態度からすれば、原氏及び犬養氏に優つておるが、政機の動く處、人心の動く機微を洞察するの能力が不足しておるが故に、事ごとに原氏に機先を制せられて居るのは惜むべきである。

新緑の天地は意氣に生くる青年の表徴である。吾人はこの機に理想の一階程を越さねばならぬ。人類として尤も進化したる形式と道程とによりてよりよき社會の結合を進めて行かねばならぬ以上、自分が欲する理想の人を選んで、よりよき幸福を追求せねばならぬのだ。依然として偶像のやうな舊政治家によりて政治さるゝとせばもう吾々は精神に餓死するものだ。(三、一七)

社會問題批判叢書

第一編

堺利彦先生著

―最新刊―

恐怖・鬪爭・歡喜

四六版白布上製函入

定價金貳圓

送料拾貳錢

著者の所謂「福田時代が去つて河上時代が來た」最近一年間中に於ける思想界空前の激變に對する著者の透徹せる批評と觀察と立脚地とを見よ

第二篇

生田長江先生著

―近刊―

四月中旬發賣

文化批判

ニイチエイズムの哲學とマルキシズムの精粋を採つて獨自の立脚地を有する、氏唯一の研究的論文集なり、最近の文化運動に對する鋭鋒なる批判を下し、新興階級の哲學を說いて紳士閥の所『謂人道主義を』木葉末盡に論駁せる快著

東京牛込區
横寺町四三

聚英閣

振替東京四七八六九
電話番町四六二番

●遠藤無水譯述■最新刊■定價壹圓八拾錢 送料拾貳錢

忽四版

勞働者の觀たるマルクスとクロポトキン

マルクスは近世社會主義の祖述者にしてクロポトキンは近世無政府主義の建設者なり本書三分の一は小說的叙述として愛讀せられたるスパルゴの別著マルクス傳の全譯にして三分の二は小說以上の興趣を以て世界に讀者を得たるクロポトキンの自叙傳なり獨逸及露西亞の勞働者は此の兩偉人を如何に觀且遇せしか本書は兩者の思想一班の理解を尋ねて其の人物の眞相に觸れんとする者の絕好書なり。

ゴルキイ作 吉田絃二郎序 渡平民譯●

叛逆者の母

定價壹圓七拾錢 送料拾貳錢

『吉田絃二郎氏序の一節に曰く』

『叛逆者の母』の中に納められた十幾篇の作品は一つ一つが光つた散文詩の素直さと暗示と魂の香とを持てゐますゴオリキイの作品のうちでも珍らしい程やさしい人情味を豊に持つた收獲であつたことを私は心からうれしいと思ひます。

四版

通俗資本論

定價金壹圓 送料四錢

資本論解說もまだ難解だと云ふ人が大分ある本書は手ッ取り早く資本論の骨子を呑込ませる

六版發賣

社會主義にかぶれた猫

定價金貳圓 送料拾貳錢

本書は社會主義研究と社會主義を知るに絕好書

東京牛込神樂町二丁目十一番地 文泉堂 振替口座東京四六八七番



私の寺子屋時代

坪内逍遙

上笹島村

極平凡な地勢の、まるで石盤(スレート)のやうに平坦な、さうかと言つて、武藏野なぞのやうに、何處となく大きいといふことを連想させる茫漠とした趣きがあるでもなく、どうしてこんな無特色の地から信長や秀吉が出たらうと不思議に思はれるのが尾張の平原である。その尾張の平原内に於ても、中央部だけに、殊に平面的な名古屋の舊城下には、碁盤割から一里以上踏出して見ても、尙やつと小丘ほどの八事山が只一つあるばかりで、水といつては、海こそは約一里の南に伊勢海へつゞく尾張灣を控へてゐたが、河は堀河の名にし負ふ人工のものがたつた一流れあるばかり。けれども名古屋としては、それが其街を貫いて流れる最大の水であつたので、其やゝ河下の兩岸に植附けられて年を經た櫻の老木は中々見事で、堀河の花見といふと江戸の向島のそれ扱ひ、私が十一二から十四五頃までは、折々父母と共に屋形船なぞに乘つて、見に行つたのを思ひ出す。又沙魚(はぜ)釣りが父の年中行事の一つであつたので、「年に少くとも二度以上、同じく其河を、——家族一同が暗いうちから家を出て、多勢の時は、近親、緣者、出入の者を併せて、二艘仕立で、晝夜の支度をして——船

で下つたのを思ひ出す。で、其頃は、それを随分大きな、隅田川ほどの川とも思つてゐたのだが、其實は、たかゞ小石川の江戸川を、一倍廣くして、岸をずつと高くしたに過ぎない河だ。

さういふ風に自然のニュアンスに乏しい土地柄だから、名古屋は——今でもさうだが、むかしも——ずつと場末へ往つて見ても、郊外へ蹈出して見ても、何等の變化もなく、一體に明けツ放しで、平板で、奥床しさといふものが更に無く、名譽の天守の金の鯱鉾なぞは、殆ど何處からでも萬遍なく見え、殊に、父が退隱地の上笹島村の長屋の窓からは、眞東に當つて、朝日に夕日にぎらついて見えてゐた。

此上笹島村は、正しくは廣井村の一部で、今は立派に町内へ編込まれてしまつてゐるが、私が父と共に初めて名古屋に移住した當時は、名古屋の西郊の村落で、堀河の傳馬橋からは約七町、江川と呼んだ溝川からは約三町の田圃路を隔てゝゐた。笹島村に上と中と下とがあつて、おの／＼六七町づゝを隔てゝゐた。すなはち今の名古屋のステーションが下笹島村の所在地であつた。

笹島は一寸龜井戸といつたやうな風情の處で、とりわけ上の笹島は、藤や躑躅で客を引く泉水築山の小遊園があり、茶店があり、そこに笹島焼といふ名稱の一寸した陶器を燒く老人もをり、風雅な隱宅も一二軒あつて、勝地に乏しい名古屋では、春先の行樂地の内に算へられてゐた。周圍が悉く廣々とした水田なのだから、あたりに邪魔がなく、風はどちらからでも自在といふので、其頃盛んであつた大人本位の大仕掛の凧揚げ競爭の定場所にもせられてゐた。

其上笹島村の取着きの角屋敷を、丁度それが賣物に出てゐたのを幸ひ、父は、家祿を奉還すると同時に、隱宅に買ひ求めた。前住者は城下の米相場師であつたから、ともかくも、土藏が一棟附いてをり、地坪はたかゞ五六百坪でもあつたらうが、築山があり、蓮や菖や河骨の茂る泉水があり、丸太三本の橋があり、青いうちから捥つては叱られた蜜柑の木の大きなのが三四本あり、矮の自分の背よりも高かつた種々の躑躅があちこちにあり、其築山の最高所に立つと、其矮の首さへもすぐ前の黒塀の頂きをずつと抜けて、忍び返しの間から——すぐ前が村の往還で、それに添つて、江川か

ら來る溝川が走つてゐたが、それを越して——ずつと遠くまで、中の笹島、下の笹島、丁度今の名古屋ステーションの界限まで、一面に青々とした田の面が見渡された。前の主人は、時々そこから米の出來を詠めやつては、其秋の氣配をトしてゐたのであつたさうな。

建坪は——さア幾ら程あつたらう？　表門の一方は板塀、一方は門と屋根つゞきの二間建(ふたまだて)の長屋で、それに細長い米搗場兼帶の納屋が附いてゐたから、門から玄關までは六間以上でもあつたらう。玄關は古風に大きく式臺を設けた八疊敷。其脇に、如何にも相場師らしく、米俵なぞを持込むに便宜なやうに、廣々と土間を取つて、其向うに玄關と平行に六疊の女中部屋（或は下男部屋）、土間の正面に京都風の中じきり、その格子戸をくゞると、同じく廣々とした土間を控へた臺所、大きな竈に大きな釜、式(かた)の如くに荒神を祭つて、それに供へた松飾りよろしく、其隣りに普通の二つ竈、それを右に見て裏口へ通り抜けると、そこに井戸があり、外流しがあり、第二の納屋があり、畑があり、裏木戸があり、やゝ離れて花壇があり、そのつゞきに裏庭があるといふ配置。間は八疊が客の間、それと玄關の間が六疊、佛間が長四疊、居間が八疊、其次がやつぱり八疊(?)、中の間が六疊、それに前記の臺所と湯殿。

角屋敷だから、今いつた通り、すぐ前が往來、横も往來、さうしてそれにも溝川が添つて流れてをり、東北には水田を隔てゝずつと一帶に名古屋の市街、其他は、宅と同じ並びに一列、裏手にそれと平行して更に一列の草葺の農家やそれにまじる二三の別莊めいた家と一ケ所の寺院があつたばかりで、左右前後とも水田。其往來といふのもやつと一間ぐらゐの幅であつた。

けれども宅の長屋の前は、田圃づたひに、一方は名古屋へ、一方は日比津海道へ、又一方は佐屋海道へ、一方は例の秀吉や清正の出產地の中の中村方面への四辻に當つてゐたので、自然の必要上、宅の前十間四方ばかりの處だけが一種の共同地(コンモン)になつてゐて、そこに小さな觀音堂があり、形容の岩組に一寸した植込がしてあり、堂に相應した一間建(ひとま)には堂守の老夫婦が住んでゐて駄菓子の家體店を井戸端の石の手洗ひ盤と並べて出して、村の頑童(わんぱく)や馬方や人足や村方廻り

の小商人なぞを顧客にしてゐた。さすがに觀世音の緣日となると、此小コンモンが村の公園の役廻りをして、殊に盆時分には、納凉かた〴〵村の老若男女が集つて來て、夜深けまでさゞめてゐるのが例であつた。ずつと後には、角の長屋を自分の部屋にしてゐたから、私は聞くともなしに、此村相應のいろ〳〵の、スエイン、ラツス間のロマンスをも洩れ聞いた。

此觀音堂は、相應に由緒のある建物でもあるらしく、先年往つて見たら、周圍は悉く家が建て込めて、昔の田が町になつてしまつてゐたのにも拘らず、此堂だけは殆どさながらに殘つてゐた。

讀者よ、赦して下さい。脚本を書く時に、先づ背景や道具立に念を入れるのが癖になつてゐるので、つい詰らん家譜しらべに紙面を費した。もうすぐに本談に入ることにする。

名古屋へ移る以前は、私の父――平右衞門、又平之進、後其榮――は、美濃の尾張領、加茂郡太田の代官所に居た。若い時分からそこに勤務してゐて、代官の次官のやうな役をしてゐたのだが、私が記憶してゐるだけでも、前後三度長官が代つた。最後に、明治の維新に伴つて、藩制が改革され、藩の其頃の傑物田宮如雲が太田へ赴任して、舊代官所が北地總管所といかめしく改稱された時、父は調役といふ職を辭して、尾州藩譜代席格十一石三人扶持を奉還し、前記の上笹島村へ退隱した。もう齡も五十七歲、新時代の職責は負擔し切れないと自分で見切りを附けたのであつたらしい。それは明治二年の六月の事であつた。其頃、私の姉三人はいづれも名古屋の士族の家へ緣附いてをり、一の兄は藩の用務で信州方面へ出張してをり、次の兄は、如雲が特に編成した草薙隊の司令官として營所へ赴任してをつたので、家に殘つた血族は五十八歲の父と四十九歲の母と十一歲の私とだけであつた。

此年齡關係によつても推察されるであらう如く、私は多勢の甥や姪の或者よりも年下で、孫同様の末ツ子で、隨つて幾文がたか甘く育てられ勝ちであつた上に、折柄の維新の騷擾で、丁度私の七つ八つといふ學齡頃から、太田驛が東西來往の一要衝となり、其附近一帶が何となくさは〳〵と落着きのわるい場處柄となつてしまつたので、學問はあがつた

り、明けても暮れても兵法の調練、撃劍の稽古、大砲木砲の打試し。宅の裏手がすぐ高石垣で、そこが廣場になつてゐたから、大砲の打試しがあるたびに、家内中の障子がぴり〱と震へた。さういふ有様であつたから、私はとう〱十一歳までは寺子屋へも遣られなかつた。素讀は『實語教』の「山高きが故に貴からず」を皮切に、一の兄や次の兄に、おひ〱と『孝經』、『大學』と叱られ〱讀み習ひ、習字も兄や姉婿の書いた手本で間に合せ、其他は數へるはうも氣まぐれ、習ふ方は尚更の眞似事同樣で濟し、あとは日がな一日ぬらくらと遊び暮らして、何の益もない繪本や草双紙や稗史を見散らかしたり、「木の實振り」といふくだらん遊戯に夢中になつたり、次の兄にねだつて鳥羽繪まがひの擬造草双紙を毎日のやうに書き繼いで貰つたり、自分で形を成さない木偶の坊を畫き散らしたりして無駄に白紙を使ひなくし、「道理こそ未年生れだ」と言はれ〱して、十一歳の夏までを過してしまつた。

生得が平凡であつた上に、さういふ扱はれ方であつたから、十五で代官所の内詰手代格に出仕した一の兄、七歳で一里餘の近村の手習師匠へ通學し、十三四で名古屋の劍客某の許へ入塾して、十里の道を年に何度と徒歩で往來した次の兄なぞとは、全く種ちがひと見られた程に、私は柄も小粒、智慧も晩手であつた。

衰殘の寺子屋

名古屋へ移つてからは、さすがに斯うしてもおかれぬと、兩親が氣附いたらしく――幸ひに保存された父の其頃の「日記」に據ると――明治二年の七月廿日に、私を名古屋巾下新道町の柳澤といふ手習師匠の許へ入門させることにして、父自身で私を連れて行つた。其束脩が金五十疋だと明記してある。まだ其時分には、父の頭に、丁度小さい赤蜻蛉ほどのチョン髷が乘ッかつてをり、たしか、私は、紫の紐で髮を茶筅に結んでゐたかと思ふ。が、大小は、正月の年始の外は――いや年始にさへも、――もう差さなかつたやうに思ふ。

これが、ともかくも正式に師匠を取つて、敎育を受け始めた時であつた。

今日の初等其他の教育とても、嚴密にいへば、其理想に遠いことは勿論だが、それでも私なぞが受けた家庭や寺子屋のそれに比べると、天地霄壤の相違だ。今の少年は幸福である。如何に私が質が下等で、生得のなまけ者であつたからとて、せめて明治十年後程度の小學教育でも授けて貰つてゐたら、もう少し早く人間並の智慧が暢びたであらうに、十二分の厭氣と倦え氣とを以て、居所の羊の如く見臺の前へ引出され、「穆々タル文王、於緝熙ニシテ敬止ス」だの「節タル彼ノ南山、維レ石巖々」だのと審判官聲で宣告されるのだから、初めから耳ががん／＼して、心そこに在らざれば見れども見えられず、聽けどもすぐ忘れツちまふ。記えないと、審判官は手に持つてゐる尺何寸もある竹の字突きで、見臺の端をぴしりツ！其たびに小羊の左右の腕は覺えず肩ぐるみぴくツとする。さ！「其奥ニ媚ビンヨリハ寧ロ竈ニ媚ビヨトハ何ノ謂ゾヤ。子曰ハク然ラズシテ罪ヲ天ニ獲レバ禱ル所ナキナリ。」さ、もう一度！何度繰返して讀まされたからツて、——とうに問答は濟んでるのらしいけれど、——それが何の謂ひだか、到底呑込めよう筈が無かつた。

習字とても同理であつた。「世界は廣し、萬國は」と和讃式、阿房駄羅式に面白をかしく手本を仕立てることは福澤翁の卓見以後のことなのだから、其以前は、「名頭」、「國盡し」、「商賣往來」、「用文章」いづれも舊式の乾燥無味。「千字文」に至つては、半分以上は陳奮漢でもあり、無用でもあつた。

算術とても同理であつた。二一天作の五が、習ふ者に取つては、全く沒分曉的であり、沒利害的であつたが如く、二進が一進しようと、三進しようと、それがどういふ役に立つのだとも分らなかつた。後年其頃の算數の大家と崇められた何の某が、たしか十五歳で、はじめて算盤を學ばうと志した時、例によつて、手ほどきに八算を教へられたところ、先づ其呼聲の說明を師に求めた。餘計な質問だと師は拒んだ、それを押返して切に乞うて說明して貰ひ、其日は只一遍通り習つたきりで歸つて往つたが、翌日はもう悉く熟達してをり、同じ手續で見一をも卽刻に卒業し、とん／＼拍子に忽ち點竄、開平と進んだとかいふ話があるが、さういふ教授法は、一般の者の曾て見聞したことのない秘符であり、神祕であつた。だから、明治初年頃には、私以外にも、隨分遲緩りの亞流がゐた。私が久しく低能並に止まつてゐたのも

育ち生得が凡庸で、おまけに懶惰者であつたばかりでもあるまい。といふのは、特に私の學齡時代が教育制度の不備な時代であつたからである。それに太田の片田舍育ちであつたからである。都會でも寺子屋組織は弛廢し、さうして新教育制度はまだ成立たないといふ時代であつたからである。尾張が藩でなくなつて、名古屋縣が新學令によつて、先づ舊藩の明倫堂といふ皇漢學本位、筆學本位の中等教育機關を廢して、寺院や舊學館等を假に小學校に充てゝ、新時代の教育に着手したのは、明治四年七月以後のことであつたからである。

それが出來るまでの初等教育機關は、不備を極めた舊寺子屋の殘骸の外にはなかつた。さう　て私の入門した柳澤といふ寺子屋は、恰も其一標本とも見られるものであつた。先代は大分評判のよかつた師匠であつたとかだつたが、當主は、其頃三十四五の、脊の低い、其割に頭の大きい、けれども、顋の方で急に小さく細つた顔の、どういふ威厳もない風采の男であつた。四インチ强のチョン髷は歴々と目に殘つてゐるが、月代は細く剃りあけられてゐたやら、總髪であつたやら、おぼえてゐない。彼れは、行燈袴を穿いて、日がな一日、たかゞ三四坪の中坪を左手に見た六疊か八疊の一間の、床を後ろに、本箱を左右に、後ろに、机と見臺とを前に控へて、引ッ切りなく手本を書く、其讀みを教へる、清書を直す、漢學を教へる。それが其日課であつた。漢學といつても、『孝經』に四書、五經の一部、多分『十八史略』『日本外史』なぞが關の山であつたらう。が、後の二つを習つてゐる者は見たことがなかつた。私は行書や楷書を習ふのと四書の復習と五經の素讀とを目的に入門したのであつた。

新道町は、其名の暗示するが如く、場末の新開町で、西南に向つて、僅かに五町も踏出すと、もうそれは日比津海道といつた往還で、そのあたりは一面の畑か水田。だから、私は笹島の宅から、始終うねりくねつた細つこい田の畔路(あぜみち)を傳つて通つた。

柳澤の家の表がゝりは、京都式で、一間の格子造り、一方に方寄せた格子戸をくゞると、そこからずつと脊戸まで行拔けの土間。右手は壁、左手は二間四枚の舞良戸に、狹い一尺幅ぐらゐの上り段。舞良戸を開けて上ると、そこと其次の間

が教場で、たしか八疊二間のぶつ通し、其奥に更に二間あつて、其かた〳〵が前に言つた師匠の居間、かた〳〵が臺所であつたかと思ふ。尙中坪を隔てゝ、緣側つゞきに、奥に、家族の住む處があつたのだが、一度も入つたことが無かつたから、よくは思ひ出せない。寺子は三十人内外。十二三が年長で、七つ八つが最年少であつた。一疊に少くとも二人づゝ、例の天神机を控へて列を作り、まづ二列が向ひ合つて一の平行線を形造ると、次に第二のそれが隣列の一線と背中合せに坐つて、同じく平行線を畫くといふ按排に、めい〳〵の毎日の坐り場所が定めてあつた。さうして放課後は、毎日當番が二人づゝ殘つて、跡の掃除をすることになつてゐた。狹い處に目白押しをして而も對ひ合つて、互ひにべと〳〵の草紙をはぐつては書くのだから、善惡共に少し意地ッ張がゐれば、すぐに睚み合ひが始まる筈だが、准天才の卵らしいのは勿論、半秀才のお身代りになりさうなのも、涎繰りの正統らしいのさへもゐない平凡を極めた少年團であつたゞけに、至極平穩無事。尻と尻とが衝突する後列同志の時たまの境論も、大抵は、雌雄の不判明な、甘ッたるい名古屋訛りの談判が二三分間交換されるぐらゐで、泣寢入になるのが定りであつた。或は、何かの拍子に、喧嘩に成り、一人が哭き出す、一人は怒鳴る、彌次が囃す、一同が群童意識でどよみを擧げるといふやうな場合でも、師匠の一喝――といつては當らない――甚だ優柔な、甚だ威嚴のない一擊にさへも、すぐと鎭つてしまふやうな甚だ御し易い小雀共であつたから、十一、十二、十三、と約三年間――尤も一年の三分の一は休んだでもあらうが――通つてゐたにも拘らずつひぞ一度も、線香と茶碗とを持つて机の上に立つて鼻汁を垂らしたこともなければ、立たされて垂らしてゐるのを見たこともなかつた。ほど、それほどに、私の寺子屋に於ける經驗は平凡な、單調なものであつた。

若し僅かに其單調を破るものがあつたとしたら、それは師匠の實弟で、其頃廿七八らしかつた坊主頭の低能兒と各寧宣との交渉であつたらう。名は何といつたか僅かには思ひ出せない。「ケイさま」と名古屋式のアクセントで呼んでゐたかと思ふ。その大きな坊やと小さい坊や共との間に、大抵月に一二度づゝは起つた曾我のや劇式の葛藤は、平板を極めた舞臺を賑はす修羅場でもあり、世話場でもあつて、無邪氣な、どよめきの波瀾を作つた。師匠の一喝は多くさういふ

場合に餘儀なくされたのであつた。意地のない、御し易い小雀ばかりだつたとは言つたが、さすがに此喜劇仕立の弱い辨慶を茹章魚(ゆでだこ)のやうに眞赤にならせて、竹箒で追ッ掛けさせる程にいたづらな犬若丸どもは、少くとも二三人ゐた。で、辨慶は、いつも仕舞には大粒な涙をぽた〳〵落して、臺所の土間あたりに衣川の立往生をして、聲をあげて哭き出す。」と、師匠の細君が襷掛のまゝで裏口から入つて來て、取りさへて、辨慶をなだめ賺して引上げさせるといふのが落であつた。

ぬらくら小僧

前に、私は髪を紐で茶煎に結んでゐたやうだつたと言つたが、寺子友達は、殆どすべてが商家の子弟であつたから、みんなまだチョン髷を附けてゐた。私の一ち仲よしは、それは私よりも二つか三つ年下であつたらうが、これも名は忘れた——假に「ヨウさま」としておく。ヨウさまは、色白の綺麗な顔立の少年で、鼻筋が通り、目が大きく、其目尻がやゝ下り加減の、愛嬌のある二重まぶち。頭は飯焚場(まゝたきば)の千松そつくりにお芥子を置いて、其眞中をちよんぼり取り上げて小蜻蛉が尻尾をおつ立てたやうなチョン髷、いつも綺麗に剃り立てゝゐた其周圍は、まるで青黛を塗つたやうに美しかつた。其心持大ぶりな顔の格好と其横顔(プローフイル)が、今だに私の目に見える。といふのは、可哀さうに、此少年の右の目は、どうした病ひでだか、喩が、あの累のそれのやうに脹れ上つてゐて、始終其目をば眞赤にして、涙ぐんで、左右の兩面で、美醜の二役を演じ、悲劇と喜劇の仕分けをしてゐたからであつた。けれども、子供の常とて、久しく慣れつこになつて獨ち氣分には障らぬかして、いつも快活で、愛嬌があつて、聲も鈴を鳴らすやうに賑かで綺麗であつた。私は、どうして此少年を好いてゐたらう？

私は、まだ正式の劇といふものを觀たことのなかつた太田在住の頃、或年、父母につれられて、名古屋へ上る途中、尾州小牧の祭禮の山車を觀たつけが、それは一種特別な、其後何處でも觀たことのない、又記錄でも讀んだことのない

山車であつた。牛が牽く〳〵山車の上に、方一間半もあらうといふ屋蓋附の舞臺が装置されて、其上で、一場づゝの子供芝居を演じつゝ各町内を牽廻るのであつた。私の觀たのは「仙代萩」の御殿場であつたが、政岡、八汐、其他いづれも九歳八歳ぐらゐ、かつら、衣裳も式通り。千松は六七歳の子が勤めた。私には、それが全くの劇らしいものゝ初印象であつたせいか、其千松の顏や姿が目に染みてゐた。ヨウさまを好いたのは、一つはそれが爲、一つは半面の淺ましい不具ぶりに半無意識の同情を寄せたのでもあつたらう。

翌年の四月、十二歳で、私が、他働的に木田華堂といふ四條派の畫家へ入門させられて以來は、殊にヨウさまと親しくなつた。といふのは、此少年の兄は、其頃十四歳ぐらゐであつたらうが、號を杏齋(?)といつて、もう中々畫けて、師匠華堂にも末を樂まれてゐたといふ關係上、私は、兄とも同門といふ別の緣故が加はつたからであつた。斷つておく、畫家へ入門したといふと御大層だが、これは私の何の修養にもならないで終つてしまつた。これに就いても、私の平凡ぶりとぬらくらぶりとを證據立てるに足る多少の追憶があるのだが、管々しくなるから、それは省く。

ぬらくらが持前とはいひ條、寺小屋では、友達と遊ぶといつても、其休憩時間に、例の「への〳〵もへい」式のいたづら書きの競べつこか墨の碎片の引ツかけつこぐらゐのものであつた。引ツかけつこといつたとても、都育ちや今育ちの諸君には分るまい。其時分、名古屋あたりの寺子共は、墨を次第に磨り減らして、一寸限りにもなると、それを竹製の墨挾みに挾んで使つた。さうして終に挾めなくなると新しいのと取換へる。だから長い間には、四分五分といふ墨の端くれが幾らも溜る。時としては、わるさをしながら墨を磨るから、安價墨は折々ぽきり〳〵折れる。新しい墨で撃劍の眞似をして叩き合つて折ることもある。或はわざと碎くこともある。さういふ碎片を互ひに持寄つて、人差指で跳返し合つて、うまく相手の上へ自分のを引掛ければ勝で、相手のを自分の物にする。行き掛りから、買つて來たばかりの上等墨を三つ位に折つて、「もう一番來い!」と突込む少年もあるので、この遊戯が面白以上の意味を持ちはじめる。で、めい〳〵が十箇、二十箇と墨の碎片を貯へてゐて勝負を爭ふ。私の其相手は、主として年下のヨウさまであつた。やれ

くたはいもないことだ！ 私は、こゝにも、立派に平凡ぶりを發揮してゐた。

十二歳の暮頃からは、私の怠け根性を増長させる種が一つ殖えた。それは、母に連れられて、平均月に一二度といふ割合に劇を観はじめたことである。さうでなくても、正月とか盆とかになると、殆どまる一月以上、多勢の甥や姪を遊び友達にして、引ッ切りなしに、順繰りに先づ姉の家へ泊りに行く、甥を連れて戻る、姪が來る、一同宅へ泊り込む、二三日して歸つて行く、それを送つて行く、又先方へ泊り込む、又歸る時に連れて戻るといふ風に、引ッ切なしに遊びほうける。甥や姪との往來は、概して盆か正月かに限つたことであつたが、たとひ獨りになつたからとて、習ひ性となつてゐた私の極樂蜻蛉かたぎは、中々以て眞面目な勉強なんぞをば思ひ立たせなかつた。貸本屋の大惣から、何の役にも立たない、くだらない草双紙や下等な稗史類を小山ほど借出して來ては、腹這ひになつて讀み耽る。それを叱る者も無かつたのか？

父其樂

父は、肉體的にも、精神的にも、極潔癖家で、規帳面な、氣むづかしい、寡默な、同輩へは勿論、上へ向つても決して追從や世辭を言つたことのない、極無愛想な、眞面目くさつた顔の——私の今の顔が、寸をつめて、もつと肉を充實させると、大分よく似てるさうだ——男であつたが、家庭教育に關しては——漢學の復習を怠ると折々叱つたが——餘り彼れ此れと口を出さず、無論自身で敎へるとか指圖するとかいふ事は、つひぞしなかつた人であつた。殊に笹島へ退隠後は、内政、外交を擧げて母に一任し、客が來ても氣に入らん客は、在宅してゐても自分では會はず、おまけに平生は客坐敷を自分の居間に占領して、床の間のすぐ前に、いつも煙草盆を控へて眞四角に坐つて、隨筆、漫錄類を讀むか明治四年以後は、東京の一の兄から送つてよこす新聞、雜誌や或新刊書を讀むか、それに飽くと、暫くは喫煙、やがて二間も向うで襷掛で忙しく働いてゐるお袋を、「おみちィ！」と大きく呼んで、立つてこさせて、餘り緊急でもない用事

を吩咐けたり一寸どう忘れした人名なぞを質問したりして、それも暫く種切れになると、又暫く唾壺を叩く音。ポーンポーン！　父の右の目尻に、小さい瘤が出來てゐたが、退屈した時や不平な時や思案中なぞには、親指と人差指とで頻りにそれを捻り廻すのが癖になつてゐた。で、其癖が、二年、三年と段々に募つた結果、瘤が仕舞には赤ん坊の握り拳ほどに發達して、とう〳〵外科手術騷ぎをしたのを思ひ出す。

蒸しあつい夏の日長を父は最も退屈した。時には横になつて、隨筆本なぞを讀みさして、晝寢をしてゐたこともあつたが、やがては起きて兩袒ぬぎで、さあ灸を据ゑてくれといふ姿勢で、苦り切つて胡坐をかいて、激しく團扇づかひしてゐることが多かつた。晩食後にも、次第に暮れかゝる八疊の中央に、同じ風體で涼んでゐるのが定りであつた。其時が私の御難時であつた。周圍が稲田や溝川や肥料溜の笹島は鐵ツ蚊の名所として知られてゐた位だから、縞のユニホームの輕裝を整へた蚊兵どもが、まだ薄暗くもなり果てぬうちから、出動をはじめる。さうして其斥候兵らしい奴らが逸早くも父が兩袒を露呈してゐるのを見付ける。拔駈けの功名でもしようといふのか、「プーン！」とも何とも言はないでやつ來て、だしぬけに頬、腕、肩、頸、脊中、股、刺しよささうな處をさがしあてゝ、輕く催してゐてチクリッと刺す。頬や腕や肩や頸や股は、父の方にも流石に軍略があつて、わざと一吸ひ吸はせておいて、おもむろにぴしやり！蚊賊は見事に血に塗れて命を落す。が、脊中のは自力に及ばない。で、わざと一二疋止まらせておいて、「勇藏！」其頃は勿論、明治も餘程末までは、戸籍面の文字は此「勇」の字であつたのである。「勇藏！　蚊が止まつた。早く來て叩いてくれ。」取るものも取りあへず、ではなく、「又か！」不承々々、併し足だけは急いで、駈け附けると、もう其あたりは薄昏い。「お父ちま、どの邊でやいも？」「肩の少し下！」「どつちの肩でや？」「右でや！……あ、その下でや！……あッ！くそッ！　逃がしッちまつた。えイ惜しいことをした。チヨ！」流星光底長蛇を逸しでもしたやうにおッそろしく機嫌がわるい。首尾よく誅戮し得て、感賞にあづかるのは十度に四度とはなかつた。窮すると鈍な頭腦からでも工夫は出るもの。翌年の夏頃からは、右とか左とか聞くと同時に、兩方の平手て、其邊一面をいやいふほどぴしやりとやらか

しておいて、すぐ其兩手をぺたりとくツつけたまゝで手早く擦り下した。「え、殺したか？」「えい、殺しました〳〵」其實逃したことの方が多かつたけれども、胸覺が妙に錯雜して、或は殺したとも感じたらしく、よし感じないにしても過した證據を捉へかねて、父はそれからは怒らなくなつた。

公務上では筆まめであつた父であつたが、隱居後は、筆を執るのは東京の兄への通信と數十年來間斷なく繼續して來た日記だけ。其他に對しては、年増しに無精になつて、次の兄が來てをれば、大抵の手紙を代筆させる、或は口授して私に書かせる。どうして其頃の私に、あの特殊な形式の用文章の「被爲在」だの、「可有之」だのが相應に書けるものか？といつぱかりは、何度叱られても、蚊賊退治の場合のやうな妙案も浮ばないで、怒られ通してしまつた。

神道論は平田篤胤、衞生說は貝原益軒が父の信仰であつた。で、食後の運動は必要だといつてゐたが、無精で、容易に庭中を散歩することをもしないで、食後には狹い椽側を何千歩だか目まぐるしく往つたり來たり、往つたり來たりするのが常であつた。それは益軒の說だといふのである。つまり、さう無精だから、倚と退屈でもあつたらう。

が、それほどに自分だけにかまけて、退屈がつてゐたのは不斷の晝間だけの事で、月の三日や朝夕や諸緣日は、父も中々多忙であつた。神道家といつては當らないが、非常な神樣崇拜、皇室崇拜であつたから、正月中は勿論、大げさにいふと、端から端までの、名古屋附近の、主な神社廻りをするのが父の第一の毎月行事であつたといつてよい。朔日には必ず禮服着用で——移住當座は社杯に大小——名古屋からは一里半の熱田太神宮を打留めに、少くとも十五六ケ所の神社を巡拜した。十五日、廿八日も、熱田だけは除くとが多かつたが、ほゞそれに準じた。遊びたくてたまらん小僧が、正月でも何でも其常供を申しつかつた。其代り、晝支度は、朔日はいつも熱田で、蒲燒を相伴するのが嬉しかつた。

神祇に次いで、家が法華宗であつたから、佛をも尊信し、釋尊、祖師、其他の諸佛に因む各記念日には、佛閣巡り。これには、お袋が必ず同伴した。私も無論腰巾着であつた。

家に居ても、神佛の崇拜家としての父の仕事は、朝夕には、中々忙しかつた。父が居間に占領した客坐敷の一方の長

押上二間の間はずらり神棚で、大小さまざまのお札を納めた祠を並べて、そこに先づ日本全國の主なる神々が勧請してあつた上に、次の間にも在り、臺所にも在り、たしか裏庭にも小さな稲荷か何かの祠があつた。その神々へ、三日には、各自に、一齊に、神酒を供へるのである。一齊式の場合には神酒徳利の數が少くとも五十箇以上に上つた。その徳利が、大小の形により、燒附模様の色、圖柄乃至濃淡によつて供へ處が確定してゐたのだから、やゝこしかつた。此神酒道具を一つ〳〵に雪ぎ浄めて、冷酒を注ぎ、杉の芽を栓にして、それ〳〵の神前に供へるのだが、神棚は長押上だから、其たびに踏臺が要る。初めは、其持運びだけが私の役だつたが、次第に目おぼえが神酒徳利に出來たのが因果で、一二年後には、此名譽職が全部私の責任となつて、怠け小僧め、折々横着をして、ぞんざいに持つて行つて供へておくと、徳利の大小が左右あべこべになつてゐたり、天照皇のが譽受さまのと取違つてゐたり、七面宮のが清正公と間違つてゐたりして、大目玉を貰つたことが何度あつたか分らない。でも、三日以外は、たかゞ三箇か五箇か十箇内外であつたから、これは父がいつも自分で供へた。

神酒を供へ了ると、毎早朝、父は柏手式の如く、先づ中央の天照皇太神宮から始めて、端坐して低頭平身、現在の尊貴の人に對すると同様の、普通の散文式の語で感謝の辭を陳べるのが例であつた。「家内安全、息災延命、云々」といふ語も必ず聞えたつけが、主として現在までの平穏無事を神恩であるといつて感謝してゐるのらしかつた。これが約一時間かゝつた。それから、或特殊の記念日には、いつも長四疊の佛間へ坐り込んで、諸佛を、又は其父母及び諸尊屬の靈乃至父の所謂「佛の手合」の靈なぞを拜んだが、日課としての拜佛は、專ら午後であつたやうに記憶する。佛壇の抽出しには、『法華經要品』や『心經』ぐらゐは入れてあつたやうに思ふが、父は、いつも只「ナンミヨレ〳〵」とばかり頻りに指を折りつゝ唱へて、さうして一時間餘を費すのが定りであつた。

それに　致仕當座は、さすがに舊同僚其他の來訪も相應にあり、碁敵きも其頃は、まだ在り、殊に、「醉翁亭記」の「其樂を樂む」から其樂といふ隠居名を或人に附けて貰つた一升上戸の父のことだから、每日には、今の三四時頃からでも

ら晩酌、氣に入らん客でも、酒が行ける口だと、午前からでも一盃といふのだから、中々暇が無い。父の「日記」を見ると「何月何日、誰がし來る、一盃」とか「何がし來る、又一盃」とか、「午後某々も相越す、酒飯」なぞといふ記事が頻りに散見する。さうして此「一盃」は、決して讀んで字の如くではなかつたのだから、父は隨分閑暇のない人であつたのである。

芝居ごつこ

では、母はといふと、これは豫め推察が出來る如く、内外一切の事を一人で切廻してゐたのだから、さう〱は私の世話が燒き切れない。一等怖い物であつた一の兄は東京へ出て、刑部省へ就職、次の兄は、其頃尚司令長官で、遠方の營所へ出張中といふので、自然と放し飼といふ風であつたから、椋鳥はいゝ氣になつて、たかゞ、朝一時間ばかりの間わざと大きな聲で、「家内安全、息災延命」最中の父の耳に聞えるやうに、「四書」なり「五經」なりの素讀を機械的に囀るのを毎日の最大勤勞としてゐたところへ、一時さびれてゐた名古屋の芝居町が、王政維新と共に復活して、新しい劇場が出來る、東京大阪の名優が來るといふ大繁昌。其劇といふものを母が好き、一の姉が好き、甥や姪が好き、相撲好きの父だけは好かなかつたのだが、内外の輿論に敵しかねて、先づ一二度見物を許したが端緒で、いつの間にか観劇は母と私の年中行事の重大なものになつてしまつた。私の讀み耽つた草双紙は、取りも直さず其頃の活動寫眞とも見做すべきものであつたのだが、劇は其役者の似顔で畫いた草双紙の内容が、其表紙繪の極彩色のまゝで活きて躍つて、さうして物を言ふのだからたまらない！　私は只わけもなく、芝居が面白くて〱しやうがなかつた。

毎日の復習の世話こそは燒かなかつたれ、父も母も、さすがに、維新の秩序が整つて、世間が鎮靜して來たのを機會にせめて末子の私には、姉共や兄共にも與へなかつた悠長な修養をも與へたいと思つたらしく、前に言つた如く、此年から畫を習はせた上に、茶、生花の師匠へも通はせ、尚十四歳以後には、特に英學校へも入學させるといふ風に、隨分教

育に注意してくれたのであつたが、肝腎の當人には、更に其氣がなかつた。

我儘ッ子の常として、どうかいふはずみで、少ゝ相手方の諾否が不條理に纏れた結果。すねはじめるといふと、「ではお前の望り通りにしよう」といはれても、もうどうしても應じないで、威されても、賺されても、すね通すといふわるい癖が一つあつて姉達には酷く(ひど)それを憎がられたが、それ以外には、意氣地がないだけに、どういふいたづらをするでもなく、親類以外の遊び友達とても初めは更になく、家にをれば、草双紙や稗史(よみほん)に耽るぐらゐで、平凡兒並におとなしかつたのだが、其代り、怠け者で、自儘者で、何を習はして見ても、師匠にほめられるのは、最初の只二三度だけ。溫習ふといふことをしないから、何事にも進歩がなかつた。自我流では木偶の坊めいたものも畫き散らすが、習はせて見ると、から駄目。指定通りに、依準して、謹んで習ふといふことが大不得手。これは一生を貫いた惡癖で、今日に至るまで、自我流以外に、何一つ藝なしで終つた第一の原因である。正當に謂ふと、私には曾て一人の師匠もなかつたといつてよい。何もかも我流。せめても今日のやうな教授法で導いてくれたならば、何か一つ二つ老後の樂みになるやうな藝を習ひ得てゐたであらうものをと殘念でならない。或は、あの時分、こッぴどく折檻でもされたなら、あゝいふ惡癖が矯正されたでもあつたらう。けれども父母も、兄も、たとひ口ではこッぴどく叱つても、決して手を擧げるといふことはなかつた。打擲といふことは坪內家にはないことであつた。で、私は、今日に至るまで、つひぞ人に撲ち叩かれた經驗がない。又人を打擲したこともない。さういふ溫和過ぎた家庭に育つたのも、私が、何の抱負も主張もない、只のぬらくらな小說好き、芝居好きで、廿三四歲前後までも經過した一因緣であつたらう。

十二三歲以前までは、甥や姪が主な遊び友達で、前にも言つた通り、正月や盆を、まる一月おもに雙六や歌がるたや其他の勝負事で遊び暮したばかりでなく、間の月にでも、或は三日、或は四日と稽古事を休んで、互ひに泊り込んで、何をして遊んでゐたのやら、今ではどうしても思ひ出されないほどのたはいもないことをして遊び過してゐたのだが、十二歲から十三歲へ掛けては、寺子友達を折々宅へ連れて來た。さうして其遊びが――私が最年長で、主人方でもあり

指圖役でもあつたから——劇的であつた。

定連は例のヨウさまの外にもう二人ばかり。其一人は　維新の前までは、江戸詰をしてゐた藩士の子で、十歳ぐらゐで、多分此少年と私だけが柳澤へ通ふ寺子の中での士族出であつたらうが、其父母は最近に東京から名古屋へ歸住したのであつたから、言葉が所謂江戸觸で、アクセントが名古屋のそれと異ふのを皆が笑つた。實際、その頃の純な東京語調は今のとは著しく異つてもゐたのに、他國人で、力めて東京語調に倣はうとしてゐた者のそれには、更に一種の特調があつて、其アクセントが耳立つた。

其少年は萎びたやうな細面で、妙にしいなをする癖があつて、髮を白元結で幾箇所も堅く縛つて、名古屋では普通見られない若衆髷風に取上げてゐて、おまけに、聲の調子も、色白なのも、どことなく女のやうだといふので、それが一座の女形。私が主座俳優を兼ねた舞臺監督、劇をまだ曾て觀たこともない此一座をひきゐて、宅の角長屋を舞臺兼見物席自分らを役者兼見物にして、たはいもない芝居ごつこ。其以前に菓子折や板目紙で、草双紙の畫なぞを見眞似に私が不細工に拵へた切出し式の小道具で、最近に觀た或劇の或場面なぞに似た好い加減の卽興劇。筋は「口立て」で、白はめい〱の出鱈目。つまり、立廻りが主であつたが、それとても出たとこ勝負。渡海屋銀平であつたか、漁師浪六であつたか、浪七であつたか、權と煙草盆と煙管と薙刀を、大分念入りに私が拵へたのを思ひ出す。

十三歳の年の二月頃、もうそろ〱ぽかついて來てゐた時分であつたと思ふ。私は、其友達らと例通りのたはいもない芝居の眞似事に爲飽いて、新中納言知盛の幽靈姿か何かであつたらう、不細工な紙製の鎧出立をして、一夜造りの銀紙ばりの薙刀を手に持つたまゝ、何をしにだか、ヨウさまと共に、表門からひよいと出ると、途端にそこを通りかゝつた二人の少年。一人は十五ぐらゐ、弟らしいのは丁度私と同年配、野川へ釣にでも行くらしく、身裝もかひ〲しく、大分大きな畚に釣道具も辨當も一しよに納れて差し荷ひにし、丁度通りかけたとこだつたが、出逢ひがしらに、弟の方が私を尻目に見流して、極冷かに「辨慶だな！」と嘲笑つた顏を兄と見合せて行き過ぎた。あ！　自分は齡よりも子供だ、と

いふことを不思議にも初めて意識せしめられたのは此一言であつた。私はおそろしく悄げ返つて、そこ〳〵に門内へ引込んだのを憶ひ出す。

父、兄、私がチョン髷や茶煎を廢めて、散髮になつてしまつたのは、いつからであつたか明確な記憶がないが、「辨慶だな！」の一言は鉢卷をしてゐた坊主頭を見ての評ではなかつたらうかとも思ふ。とにかく、斷髮は此年初か、此年中かであつたと思ふ。

すべて師匠筋への支拂は、其頃は盆、暮の二回であつたらしく、亡父の「日記」によると、柳澤へは、いつも金貳百疋、茶花の師匠へも同斷、華堂へは金百疋となつてゐる。其外に、正月十八日の稽古はじめ、九月の月初めのそれなぞに、銀二朱と二もんめ位の菓子折持參云々といつたやうなことが誌してある。そんな相場であつたものと見える。

一の兄

明治四年——即ち私の十三歳の年は、平凡な無脚色な坪内家に取つては、ともかくも名古屋定住以來の初めての記念すべき目出たい年であつた。と言ふのは、家督相續者たる一の兄の、幼名金次郎、後に鐡之助、改め鐡馬が、明治元年三月以來、藩命によつて、信濃地方の騷擾取締りの爲、藩吏水野某に隨從し、多少冒險的の勤務を續けてゐた其勞役が立身の端緒となつて、明治二年正月に廿五歳で刑部省の屬吏となり、同七年に刑部少錄に擧げられ、同八月には刑部大錄、同三年三月には囚獄大佑といふ職に就いて、ことし足掛け四年振で、寸暇を賜はつて歸省するといふ、老父母に取つては、たまらなく嬉しい一件が演ぜられたからである。

幼名金次郎の鐡馬は、三人以上も女の子ばかりが續いた後に、やつと生れた長男であつた上に、十三四歳の頃からもう中々大人びてゐて、前にも言つた通り、十五歳で、ともかくも代官所へ内詰手代格で出仕するといふほどに仕込まれても居り、武藝、學問とも父祖以上には修得し、強健にも育ち、身長も五尺七寸強、坪内家には前後に例の無い立派な

醫格でもあり、性質も極眞卒で、取捌きが直截で、隨分ひどい疳癪持ではあつたが、それをもよく忍び通したほどに溫良で、情の人でもあつたのだが、不思議に常識にも富んでをり、頭が大きくて、顏が長くて、鼻が高く、薄痘痕があつて、目が他の道具の割には小さく、象の目式に優しく愛嬌があつて、在宅の間もよく父母に事へて力になり、出張中も東京へ仕官後も、親思ひの心が厚かつたのだから、父母の一等大切な子寶でもあり、とん〳〵拍子に立身したといふので、自慢を悪德視してゐた父母であつたが、內々大自慢の伜でもあつた。其孝行者の子寶息子が、今年四年振で歸省するのだ。寡默な父も、嬉しさが包み切れないと見えて、だん〳〵歸省の豫定日が近づくにつれて、朝も晝も晩も夜もお袋と鐵馬の噂ばかり。三度の箸の上げ下しにも鐵馬の噂。親類、緣者が來れば、勿論、先方からも口を切るからして鐵馬の噂。舊同僚、知人、出入の者が來ても、何かの序でに、鐵馬歸省の噂。無論「息災延命、家內安全」の次にも鐵馬。「尙此上とも御高恩を蒙りまする鐵馬儀、職務上不行屆無之樣、首尾よく相勤め續きまするやう、何卒御高庇を持ちまして云々、云々」といふ例の禱りが、不斷よりも少くとも二三十分がたは長く聞えた。

次の兄

私に取つては此一の兄の鐵馬は怖い人であつた。尺何寸の字突きで見臺をぴしりッは此兄であつたからである。小謠の手ほどきから始めて「橋辨慶」や「猩々」で、私を手ひどく叱り附けて、幾度も〳〵泣かせたのも此兄であつたからである。手本も主として此兄が書いてくれた。木刀の型もたしか此兄が敎へてくれた。七つ八つ頃の私は、世間の子供並以上のしつッこいお噺ねだりで、二人の兄に噺をねだりはじめると、「もう一つ！もう一つ！」で果てしがなかつた。其お噺を初めは眞面目らしく、中頃出鱈目の滑稽まじりに、とゞの果にうるさくなると、だしぬけに、いやがらせの怪談をはじめ、ふッと行燈を吹消して氣味のわるい聲を出し、「ワアッ！」と私を泣出させて一擧に追ッ拂ふ慣手段を行つたのも此兄であつた。それに此兄は齡も私とは十四もちがつてゐたから、九歲、十歲と生長するにつれて、——彼れは外勤

がちでもあつた――だん〲親みは薄れ、叱られた記憶だけが殘るといふ風であつたのに、私には特に好きな第二の兄があつた。平凡づくめの坪内家としては、此兄は、俊才であつた。武藝、學問、目鼻立、何もかも一の兄よりも上で、畫も書も一寸書き、詩才も、文才も、其他の藝事にも質(たち)がよく、器用で、辛防づよく、此兄にこそうんと習はせたら、きつと物に成りさうであつたのだが、運命がさうはさせず、青年で司令官、次に縣の屬吏、昇級して收税課長、最後が三河某郡の郡長といふ極俗な仕事ばかりして年を取つてしまつた。私よりは九つも年上であつたのに、どういふわけか十七八までは、此兄は專ら私を相手にして妙な遊戯を、――私を遊ばす爲といふばかりではなく、――自分にも面白さうにして遊んだ。それは鳥羽繪式の畫で擬作の草双紙を綴ることゝ椿の實で擬戰的の小説式の遊戯をすることであつたのだが、今回想すると、此兄にこそ多少の文學者的、藝術家的資質があつたのだ、それを運命が故意にか、粗忽でか、取違へて、とう〲出來そこなひの作者に私を拵へ上げてしまつたのに相違ない。とにかく、此次の兄は、怜悧で物事に注意が愼密で、世才もあり、小手が利いて、工夫にも秀でゝゐたから、家に居れば一切の事に父の代理を勤め、母の手助けをもして、或時は染物をもした、料理をもした、鉋、鋸を持出して細工をもした、屛風、襖の貼交ぜをもした、私がねだるまゝに、後には鳥羽繪本位ではなく、文章本位の勇ましい小説めいたものをも綴つてくれた。初めは擊劍に、次に山陽風の書に、中頃は作詩に、最後に珠算に怖ろしく凝つてゐたのを記憶する。和歌や俳句にも氣はあつた。茶、花、謠曲なぞも、見覺え、聞覺えで、一通りは間に合せ得るほどに器用で、趣味が廣く、姉や母を相手に、串談半分、三味線をいぢつて、忽ち手ほどきをすましたこともあつた。屯營所へ餘興に呼んだ落語家の噺を悉く記えてゐて身振假聲で、取換へ引換へ話して、折柄里へ泊り合せた姉三人と姪共とを絶倒させたこともあつた。相應に化政度の戲作類も讀んではゐたが、どちらかといへば『三國志』や『漢楚軍談』や『水滸傳』式のものが好きであつた。けれども劇だけには、全く疎遠で嗜好がなかつた。これは、境遇上、劇を觀る機會が無く、隨つて其趣味性が其方面には發達しないで了つたのであらう。

私が此兄を好いたのは、主として遊び相手になつてくれたからであつたのだが、第二には、其趣味性に相投合する點が多くて、兄みづからも特り私だけを相手にしてさういふ特殊な遊戯をしたといふ意味もあつて、親しみが深かつたからである。それに、此兄は殆ど私を叱るといふことが無かつた。小言をいふにしても、極手柔かであつた。殊に名古屋定住以後は、――其頃此兄は宅には居らず、美濃の屯營の方にゐた――たま〳〵歸宅しても、極やさしかつた。『詩韻含英』をひねくつて、平仄だけを並べることは此兄が教へてくれたのであつたが、やゝ意味だけ通るのが出來ると、頻りに褒めてくれた。畫を畫いても、字を書いても、罵つたり叱つたりしたことは一度も無かつたが、褒めて奬勵してくれたことは時々あつた。少くとも東京へ出るまでは、私は此兄を理想の人物としてゐた。名は初め寅三郎、中頃清之丞、後に義衞といつた。私の十三の年に、彼れは二十二であつた。

鐵馬の歸省

清之丞に比べると、一の兄の鐵馬は、私には苦手で、殊にもう足掛け四年も家を離れてゐたから、子供心にはどういふ懷しい思ひ出も起させない人間になつてしまつてゐた。ところが其兄がもう昨日今日に歸つて來るからといつて、家内中が毎日々々其噂やら、待受けやらで色めき立つてゐた。が、私の小さな胸には、冷溫どちらとも附かない感じや薄ぼんやりとした印象なんかばかりが往來してゐた。

いよ〳〵――父の日記によると――「二月廿三日、鐵馬歸宅。宮泊りにて朝五つ時頃着」、「同廿四日、霽、少冷、清正公、豐國大明神へ鐵馬、勇藏をも同道、參詣」、「同廿五日、クモリ、天滿宮參詣」、「同廿七日、河村（これは其以前世話にでもなつた人らしい）初め近直（これは魚の棚といふ所の一流の割烹店であつた）に於て一盃振舞ニ付鐵馬同所泊」、（泥醉でもして泊つてしまつたものらしい）。「同廿八日、雨、森島初め親類一同相招き酒飯振舞、いづれも一泊」、「同廿九日、晴、おりやう（一の姉）、お米（二の姉）並に中泊、松屋（共に親族）居殘ル、今日鐵馬誕生日に付赤飯焚き振舞、織田（三の姉の夫）來ル、同席

ニテ一盃」、「同三十日、風雨、義衞來ル」、（これは濟之丞が屯營所から、兄に會ひに來たのである。）「三月一日、曇、鐵馬、義衞勇藏、自分とも熱田宮を初め參詣、笹島村權右衞門、善八、（これは村の故老なのであらう）相招き一盃」とあつて、尚此後二三日間來賀者がつゞいてをり、其たびに、無論、「一盃」も續いてゐるが、其一盃は例の讀んで字の如き一盃でなかつたことは言ふまでもない。

一の兄は三月の初めまで滯留し、其五日に父其樂を伴つて東京へ戻つた。畢竟彼れの此歸省は、主として父母を勸めて上京させ、維新の大都會の其目ざましい發展ぶりに老いの目を娛ませようといふのが目的であつたのだが、まだ汽車も濟あたりまでさへすら出來てゐなかつた頃でもあるから、道中をおつくうがり、留守を案じ、昔者の母はどうしても肯んじなかつたらしい。で、父だけが同行することになつたのである。

四月の十二日まで東京に留まつてゐて、父は耳目の放樂、心の滿足を得て、東海道を時々は駕籠や人力車を傭つたでもあらうが、尙十三日に立つてやつと廿五日になつて歸宅してゐる。もつとも脚の達者なのが大分自慢でもあつたから多くは徒歩したのかも知れない。人力車もまだ其頃は地方では例の大八車のそれしかなかつた頃であるから。

歸つた當座の父は、平生の寡默とは打つて變つて、土產話で中々の多辯家になり、殊に東京の日常用語を十通りばかり記えて來て、それを反覆し、頻りに名古屋訛りを攻擊するので、家内中が傾聽せしめられて、辟易したのを思ひ出す。

つい順序が顚倒したが、一の兄鐵馬の歸省は、折柄の櫻時の駘蕩に更に一段の春郁を加へしめたと同時に、坪内一家を擧げて種々の新しい光波に浴せしめたのであつた。何となれば、汽車のまだ通じないで、四日市、横濱間の汽船とても、熱田を經て乘込むといふやうな場合には、東京へ着くまでには、三日も四日もかゝつたのだから、地方の大都會を以て居つた名古屋でも、其頃は、所謂新知識に關しては、中央の首都とは、實際、時代が違つてゐる程に後れてゐたものであつた。東京には、もう大分新聞や雜誌が出來てゐたが、地方の都市でそれを讀んでゐる者といつては、全く算へるほどしかなかつた。まして其近在の、殊に農宅なぞでは、かういふ機會でもない以上、新時代の光線の射入る筈はな

いてのであつた。其樂が其子の濟之丞の義衞にも、末子の勇藏にも、鐵馬の時勢談に動かされて、つい一昔前までは、今尙口にし得ない豚や牛の肉と同樣に、穢らはしいとばかり思ひ込んでゐた其夷狄の學問をさせようと決心するに至つたのも、全く此機會のさせたのであつた。

鐵馬は、此歸省によつて、其父の心に、種々の感化を及ぼしつゝあつたと同時に、其母や姉や弟の勇藏や大勢の甥や姪や其他の親戚や出入の者共には、種々の珍奇な物を土產として齎して來て、其目を駭かせもし、娛ませもした。歸省の翌日、兄が其大きな行李を開いて、「阿母さま、ちよいと」と母を呼んで、行李から取出した小山ほどの、目も文な大小雜多の、夥しい土產物をいろ／＼に取合せつゝ、選り出して、八疊の室のほゞ全周邊に配置し、これは一の姉の家へ、これは二の姉の、これは三の姉の、これは何處、それは何處と、豫て準備の札紙を置添へつゝ、「どうでせう？こんなことでいゝでせうか？」なぞと相談をしてゐるのを、いつの間にか、我れ知らず足を進めて次の間から覗いてゐたのは私であつた。多分其土產物中のやゝ高價品であつたものは反物類や舶來品、すなはち其頃、地方ではまだ頗る珍しかつた蝙蝠傘やソフト帽、或はとんび合羽、綺麗な色々の縞柄のフランネルのシヤツ、流行の下駄類、種々の袋物、村田の煙管、釵、櫛、笄、懷中鏡なぞであつたらうが、最も私の目を牽いたのは、ちよいと押すと、三箇も四箇も自由自在に刃の飛び出す懷中ナイフ。それから、赤い、靑い、さま／＼の心の繰出される奇麗な鉛筆。名古屋では見たことのない種種の西洋手帳。最近刊行の江戶錦繪——役者繪が一種も入つてゐなかつたのは物足りなかつたが、——何十種といふ維新の、又は昔の戰爭繪、新東京の風俗繪。それから、欲しくはなかつたが、初めて見た、たべられさうな髓中石鹼、其他の珍らしい綺麗な石鹼。其頃は異國附木と呼んでゐたマッチのいろ／＼。金玉笛のいろ／＼。が、私は妙に羞かんで、わざと遠くから見てゐた。と、母と相談の切れ目に、察しの早い兄は私を呼んで、「勇藏へ」の札の分を其場でくれたが、如才なく、私の望みの品々は、みんなもう其中に入れてあつた。

兄は明治四年以後、刑部省の改革と共に、東京府へ轉任し、典事となり、大屬となつたが、前後とも專ら自分で立身

じたのでもあり、性來が極卒直な、表裏の無い男でもあり、二つには其頃の磊落な官僚かたぎの然らしめたのでもあつたらう、父母に對つて、平氣で吉原遊びの經驗談なぞを土産話の主なもの丶中に加へてゐた。角海老、稻本、大文字、其他當時「大籬」と稱せられた限りの靑樓で、多くはお職といはれるのが馴染であつたといつて、其花魁共からよこした艶書を何でも七八十通もお袋や姊に見せて、これは誰れ、それは誰れ、これは自筆、それは代筆、これは實際學問も見識もあつて、云々だなぞと說明をして、「私は、いはゞ見物を主に通つたのだから、第一流どこをおの〳〵馴染にするまでづゝ通つた。さうして取換へた。馴染まで重ねて見ねば迚も眞相どころか片相も分るとでないからです。取換へるのは無論、ひどく嫌はれる。けれども私の肚は所謂吉原なるものを知るためが本意だから、さう〳〵一つ處に通つちやゐなかつた。云々。もう其頃には、勿論、全く狹斜から足を拔いてしまつてゐたのであつた。此兄は、何事にも直截で、執着がなく、極淡泊で、洒脫であつた。

前揭の父の「日記」でも分る通り、歸つた當座は、神社の參詣やら、宴會やら、來客やらで、又――父の「日記」には書いてないが――自身で出掛けて他を訪問もしたであらうから――忙しく、閑でゐる日は尠かつた。或は兄はゐても、私が、柳澤又は茶の稽古、又は華堂方なぞへ往つてゐて、顏を合せるのは、先づ夕食時ばかりが多かつた。と、或日、私が柳澤から歸つて來て、いつもの通り、八疊の父の居間の次へ往つて、機械的に頭を下げ、「只今！」といつて顏を上げると、父は居ないで兄がゐた。「勇蔵、歸つて來たな！」といふや否や、突と起つて來た五尺七寸の兄は、十三とはいへ、或は十一くらゐの價値しかなかつたらしい私を――私の袴腰に大きな兩手を掛けたかと見るうちに――中に吊し上げて「いやア！」と囃しながら、自分も其儘仰向に轉がつて、狆ころが足を拭いてくれろといふ時のやうに、長い兩脚を短く縮めて、さうしてゐて私を手の長さ限り、上げたり下したり、まるで剽輕な野良猫が溝鼠をおもちやにするやう！あんまり突然だから、はじめは膽を潰したが、兄の天眞爛漫に似ず、こちらは久し振なので、羞かみ氣味でもあり、晩手の癖に、自分では、もう十三になつたのだ、去年なんかよりは偉くなつてゐるのだと、つい此間の集慶事件以來意識し

かけてゐた處なのを、斯うまるで赤ん坊同樣に取扱はれたのだから、いよ〳〵悄げて、餘りげら〳〵とも笑はなかつたので、興が醒めたか、或は、その三四分で、四年振の氣晴らしが濟んだのか、兄は私を手から離して、無言で元の席へ戾つて行き、すぐ又何か調べ物にかゝつてしまつた。

其翌日でもあつたらう、兄は父に、私の將來の敎育方針に就いて、いろ〳〵注意した末に、習字は誰れ、讀書は誰れに就かせてあるなぞと訊ね、其結果、柳澤の書いた行書の手本を取寄せて見て、頭から罵倒し、「こんな書を習つてゐた日にや師匠以上になつたところで役には立たない。すぐ取換させなくちやいけません。」と父に勸告した。外國語を學ばせることの必要、一日も早く東京へ出すことの必要を父に說いたのも其時であつた。

此勸告が原因で、翌年(十四歲)の春、私は其頃比較的に評判のよかつた書家で、やはり宅から餘り遠距離でもない處に住んでゐた青山某の門に入ることゝなり、同時に柳澤を退つてしまひ、漢學は、丁度次の兄が職を辭して歸宅したので一しよに、增田某の許に通つて、今度は素讀ばかりでなく、『十八史略』であつたか、『日本外史』であつたかの講義をも聽くことになつた。

小團圓

これで凡庸を極めた私の寺子屋時代は終つたのであるから、何の役にも立ちさうにもない此平板な長たらしい昔話を急いでお仕舞にするのが當然であるのだが、話の行懸り上、人物の履歷納めだけをしておかう。

私は明治五年の八月に、次の兄と共に縣の洋學校に入學した。此洋學校は、後に一二回の學規改正を經て、愛知外國語學校となり、そこから選拔されて、明治九年に出京し、一つ橋の開成學校(今の帝國大學の前々身)に入つた。兄の方は、故あつて、中途で退學し、縣の官吏となつた。出京後の私は番町の兄の宅に寄留して通學してゐたが、其頃官を辭して華族銀行の役員を勤めてゐた一の兄が、十一年に其妻を肺患で亡ふと同時に、自分は、其十二年に遺傳の中風症で

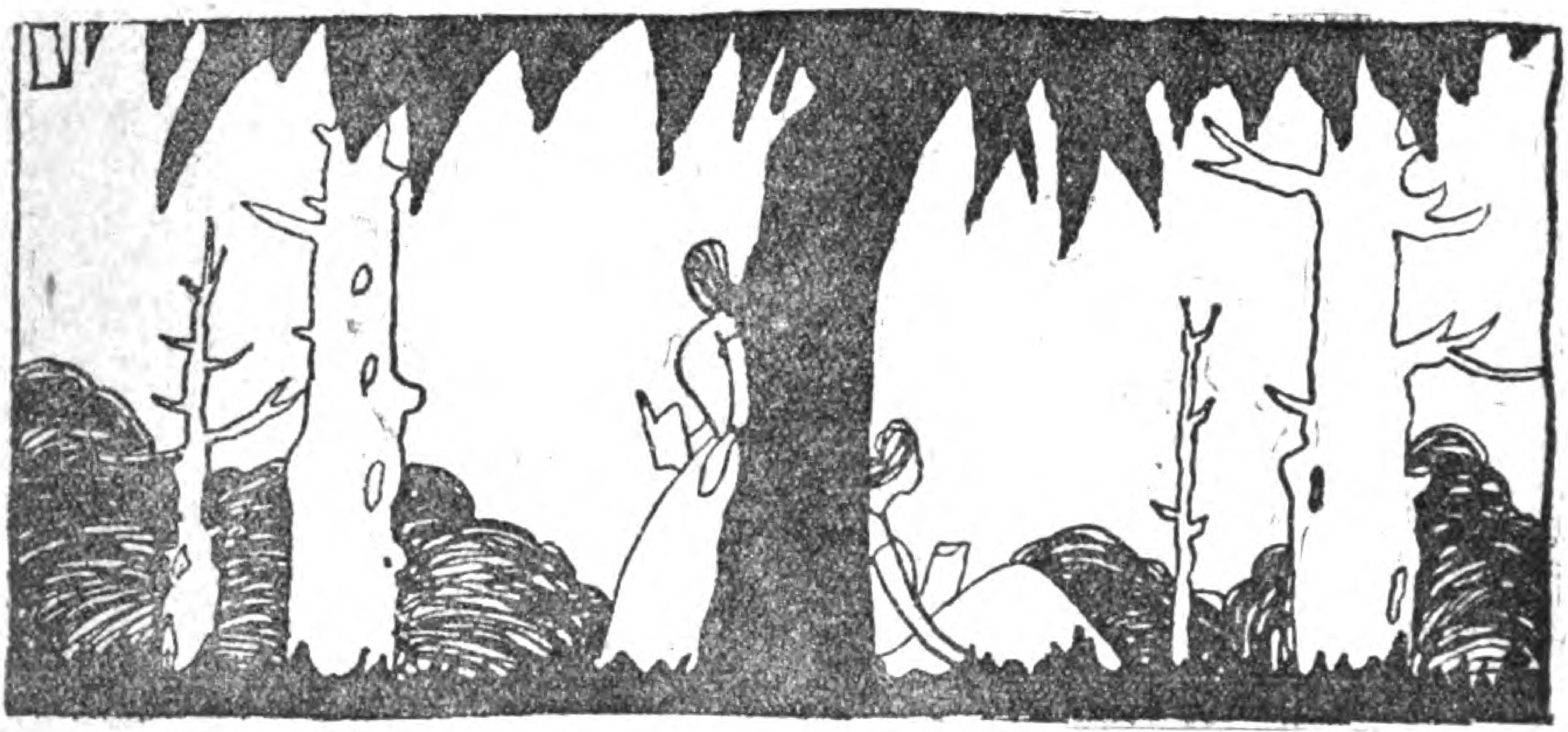
死んだ母と同じに半身不隨症を發し、百方醫療に手を盡してゐる最中、又も其最愛の一人兒をも驚風で亡くしてしまつたので、甚しく悲觀し、殊にどうしても病が癒らぬので、とう〳〵十三年の三月に名古屋へ歸り、其後やゝ回復したが十五年中父の其樂を永遠に見送つた後、更に數年、(十九年)腸チブスに罹つて亡くなつた。四十二歳であつた。名古屋で後妻に生ませた一子があつて、それが坪内本家の家督を相續した。

次の兄は、存生ではあるが、これも二三年前に、突然遺傳の中風症を發したので、今尚進退の不如意なのに困つてゐる。

一の兄の發病當時に、他には只一人の親族縁者も東京には居なかつたので、山出し書生の事でもあり、取りわけ、持前が不器用でもあつた私が、餘儀なく專ら介抱役に當り、今現に居る此熱海へも、十二年の十二月廿六日に兄に從つて彼れの療養の爲に、初めて來て、其翌年の一月開校(一つ橋の東京大學の)頃までゐて歸京し、尚十五年の秋には、夏期休課中に國へ歸つて父の七十の賀宴に侍したが、それが父の顏の見納めであつた。但し兄には、尚其後も數度逢つた。

東京へ出てからも、此兄には、些細な不心得に就いてさへも、隨分手ひどく叱られたが、今になつて考へると、いろ〳〵の意味で、彼れは私の最大恩人であつたことを思ふ。又、同胞中で、最も情の深い人であつたことをも思ふ。苦い〳〵とばかり思つてゐたのが、今更ながら、良藥であつたのだと、兄が歸國して二三年も經つてから、おひ〳〵と分りはじめて來たのであつた。

(九年二月二十九日、熱海に於て)。



小品二種

芥川龍之介

沼

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。唯、どこかで蒼鷺の啼く聲がしたと思つたら、蘿蔦に掩はれた木々の梢に、うす明りの仄めく空が見えた。

沼にはおれの丈よりも高い蘆が、ひつそりと水面をとざしてゐる。水も動かない。藻も動かない。水の底に棲んでゐる魚も——魚がこの沼に棲んでゐるであらうか。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、この沼のほとりばかり歩いてゐた。寒い朝日の光と一しよに、水の匂や蘆の匂がおれの體を包んだ事もある。と思ふと又枝蛙の聲が、蘿蔦に蔽はれた木々の梢から、一つ一つかすかな星を呼びさました覺えもあつた。

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

沼にはおれの丈よりも高い蘆が、ひつそりと水面をとざしてゐる。おれは遠い昔から、その蘆の茂つた向うに、不思議な世界のある事を知つてゐた。いや、今でも

おれの耳には、Invitation au Voyage の曲が、絶え々々に其處から漂つて來る。さう云へば水の匂や蘆の匂と一しよに、あの「スマトラの忘れな艸の花」も、蜜のやうな甘い匂を送つて來はしないであらうか。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、その不思議な世界に憧がれて、蘿蔦に掩はれた木々の間を、夢現のやうに歩いてゐた。が、此處に待つてゐても、唯蘆と水とばかりがひつそりと擴がつてゐる以上、おれは進んで沼の中へ、あの「スマトラの忘れな艸の花」を探がしに行かなければならぬ。見れば幸、蘆の中から半ば沼へさし出てゐる、年經た柳が一株ある。あすこから沼へ飛びこみさへすれば、造作なく水の底にある世界へ行かれるのに違ひない。

おれはとうとうその柳の上から、思ひ切つて沼へ身を投げた。

おれの丈よりも高い蘆が、その拍子に何かしやべり立てた。水が呟く。藻が身ぶるひをする。あの蘿蔦に掩はれた、枝蛙の鳴くあたりの樹々さへ、一時はさも心配さうな吐息を洩らし合つたらしい。おれは石のやうに水底へ沈みながら、數限りもない靑い焰が、目まぐるしくおれの身のまはりに飛びちがふやうな心もちがした。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。おれの屍骸は沼の底の滑な泥に横はつてゐる。屍骸の周圍にはどこを見ても、まつ靑な水があるばかりであつた。この水の下にこそ不思議な世界があると思つたのは、やはりおれの迷だつたのであらうか。事によるとInvitation au Voyage の曲も、この沼の精が惡戲におれの耳を欺したのかも知れない。が、さう思つてゐる内に、何やら細い莖が一すぢ、おれの屍骸の口の中から、すらすらと長く伸び始めた。さうしてそれが頭の上の水面へやつと屆いたと思ふと、忽ち白い睡蓮の花が、丈の高い蘆に圍まれた、藻の匂のする沼の中に、的皪と鮮な莟を破つた。

これがおれの憧れてゐた、不思議な世界だつたのだな。――おれの屍骸はかう思ひながら、その玉のやうな睡蓮の花を何時までもじつと仰ぎ見てゐた。

秋

おれは日比谷公園を歩いてゐた。

空には薄雲が重なり合つて、地平に近い樹々の上だけ僅にほの青い色を殘してゐる。そのせいか秋の木の間の路はまだ夕暮が來ない內に、砂も、石も、枯草も、しつとりと濡れてゐるらしい。いや、路の右左に枝をさしかはせた篠懸(すゞかけ)にも、露に洗はれたやうな薄明りが、やはり黄色い葉の一枚毎にかすかな陰影を交へながら、懶げに漂つてゐるのである。

おれは籐の杖を小脇にして、火の消えた葉卷を啣へながら、別に何處へ行かうと云ふ當もなく、寂しい散歩を續けてゐた。

このうそ寒い路の上には、おれ以外に誰も歩いてゐない。路をさし挾んだ篠懸も、ひつそりと黄色い葉を垂らして、仄かに霧の懸つてゐる行く手の木々の間からは、唯、噴水のしぶく音が、百年の昔も變らないやうに、小止みないさざめきを送つて來る。その上今日はどう云ふ譯か、公園の外の町の音も、まるで風の落ちた海の如く、蕭條とした木立の向うに靜まり返つてしまつたらしい。——と思ふと鋭い鶴の聲が、しめやかな噴水の響を壓して、遠い林の奥の池から、一二度高く空へ擧つた。

おれは散歩を續けながらも、云ひやうのない疲勞と倦怠とが、重たくおれの心の上にのしかかつてゐるのを感じてゐた。寸刻も休みない賣文生活！　おれはこの儘たつた一人、惱ましいおれの創作力の空に、空しく黄昏の近づくのを待

つてゐなければならないのであらうか。

さう云ふ内にこの公園にも、次第に黄昏が近づいて來た。おれの行く路の右左には、苔の匂や落葉の匂が、濕つた土の匂と一しよに、しつとりと冷たく動いてゐる。その中にうす甘い匂のするのは、人知れず木の間に腐つて行く花や果物の香りかも知れない。と思へば路ばたの水たまりの中にも、誰が摘んで捨てたのか、靑ざめた薔薇の花が一つ、土にもまみれずに匂つてゐた。もしこの秋の匂の中に、困憊を重ねたおれ自身を名殘りなく浸す事が出來たら——

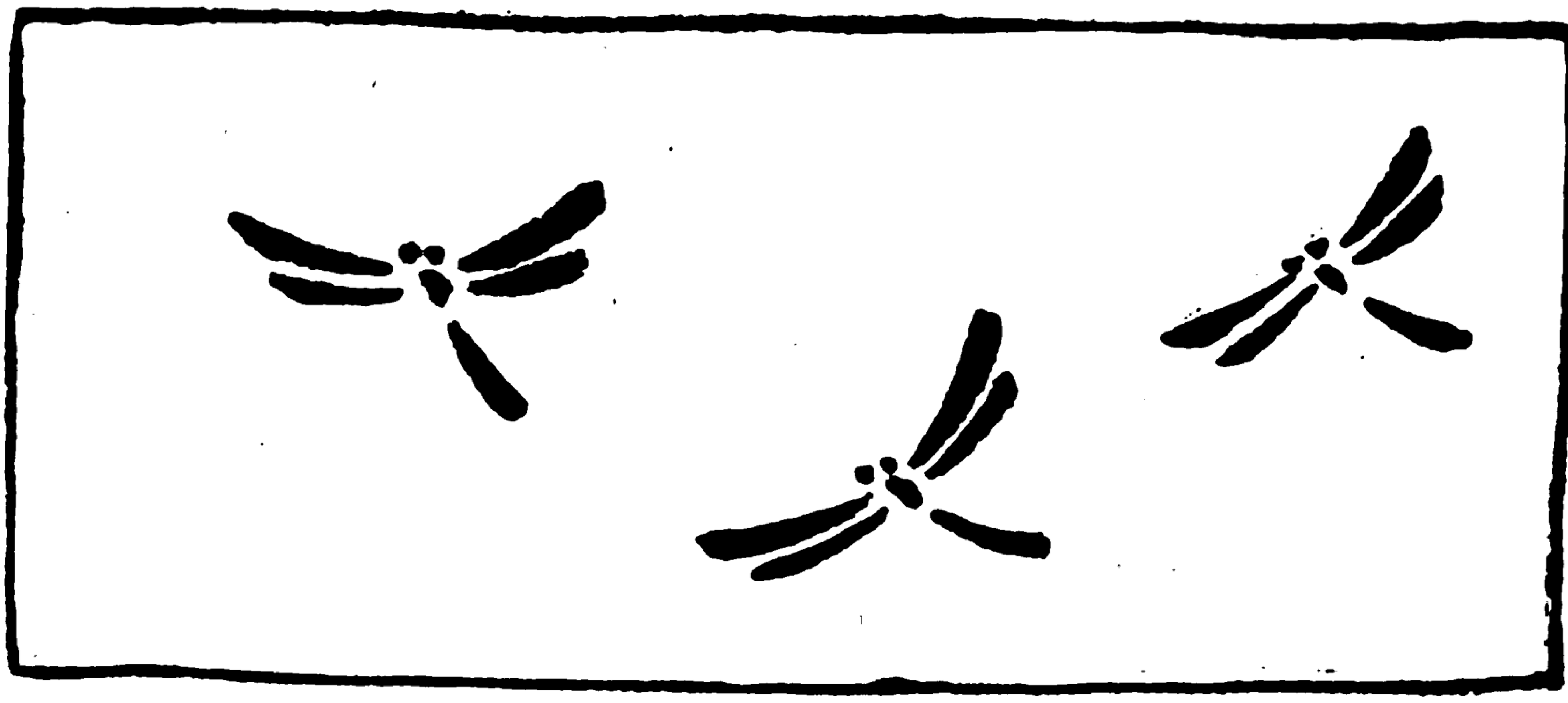
おれは思はず足を止めた。

おれの行く手には二人の男が、靜に竹箒を動かしながら、路上に明く散り亂れた篠懸の落葉を掃いてゐる。その鳥の巣のやうな髮と云ひ、殆肌を蔽はない墨色(すみいろ)の破れ衣と云ひ、或は又獸にも紛ひさうな手足の爪の長さと云ひ、云ふまでもなく二人とも、この公園の掃除をする人夫の類(たぐひ)とは思はれない。のみならず更に不思議な事には、おれが立つて見てゐる間に、何處からか飛んで來た鴉が二三羽、さつと大きな輪を描くと、默然と箒を使つてゐる二人の肩や頭の上へ、先を爭つて舞ひ下つた。が、二人は依然として、砂上に秋を撒き散らした篠懸の落葉を掃いてゐる。

おれは徐に踵を返して、火の消えた葉卷を啣へながら、寂しい篠懸の間の路を元來た方へ步き出した。

が、おれの心の中には、今までの疲勞と倦怠との代りに、何時か靜な悅びがしつとりと薄明く溢れてゐた。あの二人が死んだと思つたのは、憐むべきおれの迷ひたるに過ぎない。寒山拾得は生きてゐる。永劫の流轉を閱しながらも、今日猶この公園の篠懸の落葉を掃いてゐる。あの二人が生きてゐる限り、懷しい古東洋の秋の夢は、まだ全く東京の町から消え失つてゐないのに違ひない。賣文生活に疲れたおれをよみ返らせてくれる秋の夢は。

おれは籐の杖を小脇にした儘、氣輕く口笛を吹き鳴らして、篠懸の葉ばかりきらびやかな日比谷公園の門を出た。「寒山拾得は生きてゐる」と、口の内に獨り呟きながら。



破壞前

正宗白鳥

（一）

「今朝墓地を散歩して見てゐると、家の先祖のお墓の中には天明時代のもありますね。その隣りのは、も一代時代が古いのか、年號が讀めなかつた。」

元吉は二月前に歸鄕して以來同じ家に住んでゐながら、一度も差向ひで打解けた話をしたことのなかつた父親と、久振りで一家内の重大な事に關はつた用談や、村や村の知人についての雜談をしてゐる間に、ふと苔の蒸した墓石を思出してさう云つた。今生きてゐる知人の顏よりも却つて鮮かに彼れの記憶に殘つてゐる亡祖母の面影は云ふまでもなく、幼い時からをり〳〵耳に觸れてゐる幾人もの祖先の名前や人となりが、目先にチラつき心に浮び、彼れをして黴臭い古跡の中に坐つてゐるやうな氣持をさせた。炬燵を隔てて背を曲げて太い煙管を啣へてゐる父親の皮膚のたるんだ老顏や、蟲の喰つた大黑柱や歪んだ鴨居や、赤ちやけた襖なども、彼れの氣持を一層古めかしくさせるに役立つた。

「わしもよう覺えて居らんが、天明時分のお墓は源十郎といふ人のぢやらう。その人が村上家の基礎をつくつたといふことぢや。お寺の古い鐘にも確かその名前が彫

んである筈ぢや」と、父親はそれが何代目前かと指を折つて數へだした。

「して見ると、この家も天明時代に建つたんでせうが、古い譯ですね。百年を餘程越えてるんでせうから」元吉はさう云ふとともに、かねて拵へたり口からも洩らしたりしてゐる事に思及んで、「御維新前の家族の住居に適したやうに建てた家に、そのまゝ住んでるのは詰らんことですね。一月や二月なら古寺見たいなところにゐるのも面白いけれど、こんな所には長く落着いてゐられませんね。家族も少くなつたんだから、ガラン堂の大きな家を維持して行く必要はないと思ひますよ。潰して小じんまりした住みいい家を新築しちやどうです。さうすりや拭掃除の手間も除けて下女も入らなくなるでせう。」

歳を取るにつれて神經の次第に鈍つてゐる父親の耳にも、家を潰すといふ事は、その意味が何であらうとも、手厳しく響いたので、俄かに氣色ばんで、「それはさういふ譯には行かん。わしもこの家を借金付で濟の隱居から讓られた時には、維持するためにどれほど苦勞したか知れんのぢやから」と云つて、聲に力を入れて苦勞ばなしをはじめた。

元吉は失敗つたと思つた。歸郷するたびに一度は必ず聞かされるに極つてゐる父親の黴の生へた苦勞話の緒口を自分から引出したのを後悔した。

父親の養父であつた濟の隱居が若い妾を連れて別居してからの慘澹たる一家の有樣は、元吉も話に聞いてゐるばかりではなく、自分の幼い目で見ていくらか記憶に殘つてゐるのであつた。別れた祖父の家へ子守に背負はれて行つて、食物を饗ばれて來たために、祖母に叱られて雨戸の外の縁側へ追出されたことをも微かに覺えてゐる。朝早く祖母の枕許に坐つていろ〳〵な相談事をしてゐた父親の心配顏をも微かに覺えてゐる。元吉自身父親の吩咐で財布を首に掛けて、半里を隔てた隣村の分限者大野屋へ金を借りに行つたことをも覺えてゐる。七つ八つの頃で、事情はよく分らなかつたが、大野屋で財布へ金を入れて、「落さんやうに」と云つてしつかり首へ掛けて呉れたことも、使賃に蜜柑を二つ三つ貰つて食べながら川端傳ひに歸つて來たことをも覺えてゐる。……その他歳を取つてから思當るやうな記憶の數々を彼れ

は持つてゐる。

隱居は意地の惡い人ぢやつたから、離れ座敷の疊までも持つて行つたのぢやが、祖母さんはあゝいふ風な氣象で體裁を云ふ人なので、疊だけは是非拵へにやなるまい、仙造さんにでも頼んで講をして貰うて早速拵へるがえゝとわしを責めてならなんだ。しかしそんなことをして居れる場合ぢやないから、いろ〳〵に云うて延して置いて、肝心なこの家の維持策を研究したのぢや。それについて、大野屋へも相談に行つたのぢやが、さうすると、大野屋の大將は、先づ家を小さくせい、家が大きいと餘計な費用が懸るからと忠告して呉れたのぢや。一代で身所を作つた人の云ふことぢやから、その通りにするつもりで、祖母さんをも納得させて、大工の梅公を呼んで、二階の取拂ひを見つもらすと、二階をみんな取つてしまうて材木を賣つても、雜用を差引くと、十圓くらゐしか殘りませんと云ふんぢや。建てる時にやどのくらゐ懸つたか知れんものを、十圓のために潰してしまふのは如何にも殘念でならんから、折角の思付も見合せることにしたのぢやが、その時の事を思ふと、わしの生きとる間はこの家を潰して小さい家に建替える氣にはどうしてもなれんぢやないか。……そのかはりわしが死んだらお前だちの自由にどうにもするがえゝ。」

父親は好きな思出話の後で、一言新しい覺悟を洩らした。死んだら自由にしろ、そのかはり死ぬまでは自分の好きなやうにして暮らすと、自分が長い間努力して得て來た者を、誰れにも捥ぎ取られまいと、皺の浮いた手で獅嚙みついてゐるのが、今更のやうに元吉の心に映つた。

「五年も十年も先の事はどうなるか分りやしやしませんよ。それよりも今の間安樂な氣持のいゝ生活を立てる分別をしちやどうです。家中で揃つて溫泉へ出掛けるのもいいぢやありませんか。あなたも大勢の子供を育てて一生の仕事はもう爲盡してしまつたやうなものなんだから、これから隱居して遊んで暮しなさつたらいいと思ひますがね。あなたが少々贅澤をしたつて誰れも何とも云やしませんよ。一生齷齪して働らき通して終るのは詰らないでせう。」

「さう云へばさうぢやが」と、一時氣色ばんでゐた父親も、不斷の弛んだ顔付を回復して、手應へのない返事をして、

「贅澤というても金時計をぶら下げて見たつて何の變哲もないしなあ。食物でもどちらかといふと粗食の方が身體にええ。一時間も菜園いぢりをやつて汗を出すと、腹は減るし夜はよう眠られるし、溫泉なんぞへ行つて退屈な思ひをするよりも養生にええとわしは思ふとるんぢや。人間は好き〳〵ぢやからなあ。東京で學問なんぞをしてる人間は、滋養物を食つたり、避暑だの湯治だのと出歩いて遊ぶ必要もあらうがわしにはさういふ必要はなささうぢや。」

「……浪費はいいことぢやないが、持つてる者は多少利用しなければ駄目だ。……遺産として止むを得ず子供に讓るよりも、少しの者でも今の間にみんなに配けてやつた方があなたも氣持がいいでせう。どうせあの世へ金を持つて行けりやしないんだから」

「しかし、わしもまだ些つと隱居するといふ譯には行かん。去年極めたゞけの分配はその中實行して、後は兄弟救濟費といふ名義にでもして殘してとかうかと思ふたりしてるんぢや。」

「そんなことをしたら。兄弟喧嘩の元をつくるやうなものです。小い時には兄弟の仲が穩かに行つとつても、女房を取つたり子供が出來たりすると、お互ひに慾が出て來て、無邪氣に睦じくしちやゐられないものらしいですからね。」

「それはそんなものぢやらうが……」父親は煙管を置いて、朝日を一本袂の中から取出して炬燵の火で點けて、長い眉尻に笑ひの皺を寄せながら「お前も東京でちつとは金を溜めてるんぢやらうが、その上欲しがつてどないするつもりなんぢや。」

「でないと云つて、私には遣ひ途はいくらも有りますさ。西洋へも行きたいし、東京へ家を建ててもいいし、好きな本を買ひたいだけ買つて緩くり讀んでも見たいし、……」と、元吉は出鱈目に云つた。

「西洋へ行くのには二十日も三十日も懸るんぢやらう。」

元吉は焦立たしい思ひをしながら、「先つきのお話にもあつたやうに、この村にゐたつて稅金は次第に高くなるし、土地の人氣は惡くなるばかりで、昔から親しくしてた家は一軒もなくなつてるんだから、永住するほどの價値はないぢや

ありませんか。他郷にゐるも同樣なやうに思はれますよ。どうせ他郷同樣なら、東京へでも岡山へでも、もつと住みいい土地へ行つて暮すことにしたらどうでせう。家の子供は大抵他所で暮してるんだから、此地にゐたつて兩親の世話をする者もないし、誰れかが病氣になつたら直ぐに困るぢやありませんか。」

「現に此年の夏にも病人で閉口した。昔のやうに近所の者を手輕にボイ使ふ譯には行かんやうになつて、下女さへ、傳染病が家に出來たと分ると逃げて歸る始末なんぢやから。わしも一週間ばかりは帶を解いて寢たことがなかつたんだぜ。さういふ時にや都會なら病院があるから都合がよからう。」

父親は母親が熱病で一月あまりも寢床に就いた折に難澁した話をしだしたが、元吉は空虛な受應へをしながら、右手の長狹い部屋の炬燵の側から襖越しに聞えて來る女同士の話に耳を傾けてゐた。

「お父さんは人の死ぬるのを何とも思うとりやせん、伊三郎が死んだちう電報を見てもフンと云うとつたが、あんな道樂者でも身内と思ひやこそ知らせて來たのに」と、母親は尖つた聲で云つてゐた。末子のとみ子はそれに跋を合せたり唱歌を唄つたりしてゐたが、彼女は自分の小使錢取りに、村の女の重要な内職になつてゐる夏帽子製造をやつてゐるのであつた。父親に強請るよりも自分で働いて取つた金を旅費として近縣の友だちの家へ遊びに行つて來ようと企てたりしてゐた。

「今月中にこれを仕上げて、十二月の一日にはどうしても出掛けにやならん。次手に岡山へも寄つて帶側と手袋とゴム櫛とを買うて來たいけれどなあ」と、母親に謎を掛けた。

「お母さんも宮本へ一度行つときたいんぢやから、一緒に行けるとええけれどなあ。」

「ぢや行かうい。お母さんも今の間手足の利く間に方々へ遊びに行つとくとええがな。家にばかり居つちや損ぢやがな。」

とみ子を中心に、母親や元吉の妻のまつ子などが旅行の話をしてゐる間に、父親は傳染病の事から葬式の事に話を轉じた。

「昔から念佛講とか何講とか云うて二十軒か三十軒一組になつて、お互ひに葬式の手傳ひをし合つとる。籤引か順番かで、穴掘りは誰れ、棺桶の運搬は誰れ、誰れが接待をする、誰れが書付役になると、手分けをして働くことになつてるんぢや。しかし、家ではその仲間に入つとらん。穴掘りの役目が當りでもしたら困るといふ譯で入つとらんのぢやが、しかし、わしが死んだら誰れかゞ穴を掘つて埋めるだけは埋めて呉れるぢやらう。今の世ぢやから、祖父さんや祖母さんが死んだ時のやうに、近所の者が丁寧に世話をしちや呉れまいが、死骸の始末がつかんやうなことはあるまいと、わしは思うとる。」

「人間はさう覺悟してりや結構ですね」。

元吉はさう云つて、欠伸を洩らして座を立つた。そして彼れの居室になつてゐる二階へ上つた。火鉢に火の氣が絶えてゐたので、毛布にくるまつて横になつた。過去四十年の間に祖母の外には葬式一つ出したことのない家は運命の恵みを受けてゐる譯であるが、彼れの心には死相がそこらにちらついてゐるやうに思はれてならなかつた。

「最先に誰れが死ぬる?。惡くするとおれかも知れない。……惡くすると云つたところで、おれが死んだために不幸を感じる者はありやしない。……親爺に向つてつけ〳〵口の利ける者は兄弟中でおれ一人なのだから、おれが死んだら親爺の心を亂すものはない譯だ。……順繰りに家を引繼ぐ男子は幾人も後に扣へてゐる。」

近所の釣針屋の鑢の音や金槌の音が、闇を通してキー〳〵カン〳〵と響いて來る間に、階下から父親の算盤の音が、チ〳〵と聞えて來た。

父親卯助は元吉が襖の外へ去るとともに、後の机の側に堆く積まれてゐる帳簿の一つを取上げて、眼鏡を掛けて調べだした。小作米の收納時節で、貸借の決算期も迫つてゐるので、彼れの頭も忙しかつた。そして、年頃になつた末子の身の收まりや、一家の處分についての元吉の强要などは、冷たい風が顏を掠めて通つたくらゐにしか感じないのであつ

たが、たゞ五番目の息子の榮治の事だけは念頭に留まつて多少の煩ひとなつてゐた。養子に行つて四五年を經て大學をも卒業してゐるのに、先方の娘との結婚を容易に實行しないで、他鄕で自分勝手の生活をしてゐる榮治の氣心が卯助には呑込めなかつた。元來子供が何をしようとも金錢上の迷惑を掛けて來さへせねば、それでいゝとしてゐる卯助なのだが、養家から嚴い督促の手紙を寄越したり仲人から苦情を云つて來たりするたびに、流石に打遣つては置けないやうに感ぜられるのであつた。「道徳上の責任」が感ぜられるのであつた。

四五日前に屆いた養家の手紙にも、結婚を迫つて、當人の意志を明瞭に訊取つて呉れと切望してあつた。榮治の奴手紙で問合せたのでは、生意氣な文句でぬらくらした返事を寄越すばかりで埒が明かぬ、直接當人に會つて膝詰めの談判をしなければならぬ。寒くても近い中に大阪まで出掛けなければならぬがと、その旅立を非常な重い負擔として考へた。

中の間の柱に懸けた大きな八角時計が九時を打つと、下女は老人だちの湯タンポの湯を沸しにかかり、とみ子もまつ子も炬燵の側を離れて自分々々の居室へ歸つた。

歸りしなにとみ子は、階子段の下でまつ子に向つて、

「私、此家に居ると退屈で爲樣がないから、今度岡山へ行つて話の都合によつたら、小學校の教師になつて、當分彼方で暮して見ようと思ふとるの。一月でも二月でもやつていやになつたら何時でも直ぐに戻つて來りやええのだから」とささやいた。

「お父さんが許して下すつて？」

「お父さんにお金を貰やあせず、自分で行つて自分で極めて來るんぢや、お父さんは何とも云やあせんの。」

「さう？。自由な家庭ね。でも、知らない土地に一人で住まつてゐたら淋しいでせう。」

「傍で餘計な口を云はれんだけ、なんぼええか知りやしません。」

とみ子はさう云つて自分の居室へ入ると、敷つ放しの寢床の中へ藻繰り込んで、友だち宛ての手紙を書いて夜を更か

した。

まつ子はこんな片田舎の古ぼけた家で、まづ一日を無事に過したといふ張合ひのない安易を感じながら、一日の中に耳に觸れ目についたことを夫に向つて話した。夫の幼い時分の邪氣ない所行を母親に聞いて多少の興味を寄せたりしてゐたのであつた。

「この部屋だつて日當りはいいし、海は見えるし、避寒に來てゐると思へばいいんだが、ただこの部屋がこの家に附いてゐるからいけないんだね。親兄弟の聲の聞える所にあるから、この部屋の住ひがお前には有がたくないんだね」と、元吉は無斷の神經の疲れを想像しながら云つた。

「人間は誰れだつて自由ほどいい者はないんですね」と云つて、まつ子は二度三度此家へ連れて來られるにつれて、朧ろに分りだしたあの事この事に思及んで、「お母さんも眞劍になつて怒りますよ。お父さんがおひでといふ女にお金をやるつて。今度も手紙を寄越してるらしいが屹度無心を云つて來たのに違ひない。そして、お父さんがその女の旨い口に乘せられて秘密でお金を送つてやるに違ひないと云つてゐますよ。おひでといふ女、そりや口先が上手なんですつてね」と云つたりした。

「傍で心配するほどの事はないんだらう。親爺が續けざまにそんな女に金を送るつてことはあるもんぢやない。

元吉は二十年も前に會つたことのあるおひでといふ女を思出した。色の白い柔順しさうな若い女の顏が目の前にパツと鮮かに浮んでは直ぐに消えた。春雨を相合傘で淩いである家からある家へ送つて與れたことも艶のある思出として浮んだ。……しかし、あの女からの無心の手紙が今も頻繁に來てゐるといふのは可笑い。あるひは神經の敏い母親の思ひ過しではあるまいか。

釣針屋ではキー〱カン〱の音が止んで、そのかはりに尺八の音がしだした。夜業を終つた後で就眠前に口すさむの例としてゐるのだが、その音は元吉夫婦の耳に何時も懐しく響くのであつた。

「この土地では女でもよく働くのね。だから女がみな氣が強くつて人に負けてなんかゐないんですつて。」
「だからお前も人に負けんやうにしたらいいぢやないか。おれはお前に舅姑によく使へよなんて昔風の事を強いはしないよ。身體が惡ければ何時でも横になつてゐればいいんだよ。」
「さうは行きません。……だけど、此處で病氣しちや困ると思ふわ。あなたも用心してゐらつしやい。感冒がこの村にも流行つて來たさうですから。文雄（元吉の弟）さんとこでは二三日中にみんな連れて豫防注射に出掛けるんですつて。あなたも注射をしていらつしやるといい」。
「注射も呪禁見たいなもんだらうから。……文雄も生命が惜しいんだね。惜しくなささうな顔をしてゐるがなあ。」
「そりや惜しいんでせうとも。お嫁さんや子供の事を思つても今死んぢやならないつていふ氣になりますさ。」
「……人間には氣持のいい死に時はないものかな。ヨボ〳〵して生きてゐても詰らないが、今死んでいいつていふ氣にはなれないもんだね。」
元吉は妻に對してよりも自分の心に向つてかう云つた。幼少の頃からこの部屋で死を恐れたり死を憧憬したり、あるひは女ゆへの煩悶焦慮から死の救ひを求めたりしたことを思出して、薄明るい部屋の中を見廻した。……つい先日、文雄の長子の安夫やとみ子などが彼れの古い日記帳を一冊反古箱の中から捜出して、みんなして面白がつて讀んだといふ話を聞いた時に、彼れは「大事にして持つとれ、おれが死んだら、その日記が金になるかも知れないから」と、戯談半分で云つたのであつたが、その日記の中には死についての焦慮懊惱がそれに伴ふ事實とともに書込まれてゐるに違ひなかつた。
「寒い間だけ此處にゐて、春になつたら病氣の養生かた〳〵温泉へでも出掛けるんだね。二月か三月づゝいろんな土地に住んで見るといいだらうな。」
元吉は寢卷に着替えながら稍々肉付いて來た自分の腕を撫でた。

（二）

小作米が持込まれると、卯助は他の手は借らないで自分で受取つて自分で整理して、食事時の遅れるのも忘れてゐた。小作人の持出す苦情に對しても、穩かな口調で靜かに妥協の途をつけた。

新しい俵が先祖代々の頑丈な藏の中に積重ねられるのは、元吉の目にさへ何となく快い感じを與へた。自家の畝から拔いて來たばかりの大根や蕪が、井戸端で洗はれては幾つもの樽へ漬けられるも、初冬の田舍家の色彩として、まつ子の目には面白く見られた。薪や枯松葉も小屋の中へ豐かに收められた。

昨日も今日も空は雲の影もないやうに麗かに晴れて、鳶は舞ひ雀は群をなして、彼方此方に長閑な音を立ててゐた。が、惡性の感冒は次第に暴威を揮つて村民を脅かしだした。傳染避けのまじなひがいろ／＼な形で行はれた。七つの鳥居を潜れば厄を免かれると誰れかゞ言出したので、五人七人連立つて隣村へまでも出掛けて神社を廻つて來る者もあつた。小學生徒をはじめとして覆口器を掛ける者も日に／＼殖えて來た。

卯助は「わしも袋を掛けようか」と云つて、とみ子に一つ造らせて白い髯のムジャ／＼してゐる口に掛けた。「針金が唇にさはつて痛い」と云ひながら我慢して、村役場や銀行や會社などへ出掛けるたびに、覆口器で顏を裝つた。榮治を大阪へ訪ねて行くのにもそれを離さなかつた。

卯助が不承々々に二三日の旅へ出た次の日、とみ子も友だち訪問の旅へ出掛けた。女優髷に結つて濃化粧をして年頃の晴々した顏を村の人々に見られながら俥に乘つた。

「結婚前の娘を勝手に出歩かせるのはようないなあ」と文雄は後で母親に向つて忌々しさうに云つた。

母親は苦笑してゐた。

「あれもすみ子のやうに自分で嫁入口を搜すといい。親や兄が結婚の世話を燒いてやりさうちやないからね」と、元吉

は云つた。

「自分の氣に入つた所へ嫁に行きや一番よからう」母親は子供の誰れにも逆らはぬやうな口を利いて、「原田の莊一さんは人がええ。とみもああいふ婿さんを持つたらよからう。」

　東京に家を持つてゐるすみ子とその夫の莊一との事がみんなの噂に上つた。

すみ子が子供の時から食べ馴れた小魚を欲しがるので、莊一は毎日勤め先から歸りにわざ〳〵魚河岸へ廻つて捜して來るといふこと、出産の際に病院へ連れて行かれたすみ子が、病室の不潔なのや看護婦の痴鈍なのに不平を起して、拗ねだして、子が出かかつてゐるのに無理無體に家へ歸ると我を張通して夫を困らせたこと、そのために壽命が一年も縮まつたと、莊一が此方の母親へ知らせて來たこと、舅姑が自分を恐れてゐると、すみ子が廣言したことなどは、元吉はこの時はじめて聞いたのであつた。

「あのノリキンも、いゝ亭主を見つけたのはいいが、あまりお調子に乘過ぎると亭主罰が當るだらう」と云つて、居並んだ顔を見ながら、「男も竹夫見たいに何時までも獨身でゐるのがいゝかも知れないね。女房といふものは厄介な者だから。」

　結婚してゐる兄弟はみんなそれ〴〵の形で女房の重荷を感じてゐるのであつた。殆んど女房のおさと一人を話相手にもし力にもして、この片田舍で長い年月を暮らして來た文雄にしてもさうだつた。

「おすみは、私は幸福ですと先日書いて來とつた」と、母親は自分だけの心の中で、その知らせで滿足してゐた。すみ子の方から生れたての子供を連れて遊びに來る筈だつたのが、元吉の歸郷によつて妨げられたゝめに、母親の方から來年の花時に東京へ出掛けることになつてゐるので、母子の間は頻繁な手紙の遣取りによつて、その時節を互ひに待ちつ待たれつしてゐるのだつた。

品物の遣取りも頻繁で、此方から海産物を贈ると、向うからいろ〳〵な菓子類を贈つて來た。この頃は母親宛ての小

包の中に、おさとに宛てた小さな一包の入つてゐることもあつた。

「おすみさんはこの頃貴女と仲が悪いから、私の方の風の吹廻しが大變ようなつたんですぞな。セッセと御叮嚀な手紙を呉れるし、旨いお菓子もお姉さんへ云つて贈つて遣あさる」と、ある時おさとはすみ子の贈物の一つをまつ子に裾分しながら皮肉に云つた。

「私には何の事だか分りませんけれど」と、まつ子は笑ひに紛らせて、「此方へ來てからお母さんのお話を承つてゐると、—おすみさんからいろ〳〵なお音信があつたことが分りましたよ。事を起したのが元吉の所爲であつても、結果はみんな私の頭の上へ落ちて來るんですからね。」

まつ子はさう云ひながら、すみ子の結婚の時を思起した。お姉さん〳〵と云寄られるのにいい氣になつて、一人でお先棒につかはれて奔走して、それがために身體を壞したことが、不快な連想を伴つて思出された。そして、すみ子の事ばかりではない、文雄夫婦についても、元吉の我武者な振舞ひが、みんなまつ子自身の責任ででもあるやうに、此家の人だちに取られるのが心外に思はれてゐた。數年前はじめて此家へ來た時分のやうに、無邪氣に周圍を見てはゐられなかつた。

「兄さんはそりや酷い手紙をお父さんや文雄へ宛てゝ送つて來たんですぞな」と、おさとは云はれると、

「さうですつてね」と輕く受けて、「おれも四十の阪を越したんだから、何とか家の仕末をつけると元吉が俄かに云出して歸ることになつたんです。私は何が何やら分らないなりに隨いて來ましたの。」

「兄さんが酷い口でも利いでどうかしなさらにや、何時まで立つても、愚圖々々で家の中の極りはつきやしません。お蔭でこれから自分で御飯を炊いて勝手に頂けるやうになれば、私としては何よりも有難いんです……御飯の一杯や二杯こんな思ひをしてまで食べさせて貰はいでもええと思ふたことが何度あつたか知れんのですから」

おさとは此家の人となつて以來十數年の間、住居だけは別にしてゐたが、三度々々の食事時には母屋へ通つて、大勢

と一緒に膳に向つて、母親が配けて呉れる物を默つて食べて生命をつないで來たのであつたが、今度元吉が相續權を發揮するにつれて、文雄も辛うじて生活費に當るくらゐの田畝を父親から與へられて、食事をも別にすることになつたので、たとへ粗末な物でも、自分で勝手にこしらへて氣兼なく箸が執られるのをおさとは何よりも喜んで、十數年間欝積してゐた息をはじめて胸を開いて吐くやうな思ひをしてゐた。

文雄のゐる別宅では、年内に臺所を造上げるやうにと大工を督促してゐた。夫婦はその新たな臺所で雜煮を造つて、新夫婦見たいな氣持で新たな年を迎へるつもりであつたが、工事は捗々しく運ばなかつた。

「もう十年早うからういふやうに別世帶になつとればよかつたなあ」文雄は建てかけの臺所を見ながら感慨を籠めて妻に向つて云つた。

「過去つたことよりもこれから精を出して稼がにやなりませんがな。」

「わしはもう無理な仕事にまで身を入れて錢儲けする氣にやなれんぜ。これから平和にぢつとして、自分だけの樂みをやつて歳を取りたいなあ。此家に落着いたが最後、親にも兄弟にも會ひたうない。話もしたうない。胸糞が惡いから」

文雄は欝陶しい氣持になつた。十年前から母屋とは交渉しないで夫婦水入らずのコツソリした生活を續けてゐたならと思つてゐたが、ふと、おさとの目顏に不穩な色の浮ぶのを見ると、

「もつと經つて金の都合さへついたら、お寺の下へ小ぢんまりした家を建てて、山へ梨か何かを植えて、山番をしながら暮したらええかも知れんな」と、柔和な眼に微笑を湛へながら努めて快活に云つたが、おさとは返事をしないで奥の室へ入つてしまつた。

文雄は妻の不機嫌な素振りを見ると、仕事も何も手につかなかつた。子供が無ければ明日の日にでも岡山とか東京とかあるひは山の奥へなりとも、この村の土地なら、何處へでも行つて夫婦きりの世を過すのだがと思ふと、子供さへも憎いほどの邪魔者と思はれだした。

「おさと、何をし居るんぢや」と、氣遣はしさに堪へられないで奥の室を覗いて、片隅に蹲んでゐる妻の後姿を見据ゑながら、「湯が沸とるからお茶を入れて飲まうぢやないか。」

「どうせ私は爲様がないんですから。皆なのなぶり物になつて顏を曝して生きとつても何もええ事はありやしません。死ぬくらゐ雜作もないことぢや。」

おさとが過去の暗い身の上に對する自責の念とともに、周圍に對する反抗の發作を感じて、心を亂しだすと、

「藪から棒に何を云ふんぢや。わしは何もお前の氣に觸るやうなことを云やあせんぢやないか」と、文雄は肩越しに妻を見下して云つて、「死ぬる時にやわしも死んでもええなあ」と呟いた。涙は彼れの目を潤した。そして、潤んだ目にはおさとの色の白い細そりした頸や、耳に垂れた亂れた黑い髮がいた〳〵しげに映つた。

「お前はもう彼方の家へ行かいでもええ。兄貴が家へ戻つて相續するんなら、家の手傳ひは兄貴の嫁にやらしやいいがな、それが當然ぢや。」

「おまつさんも老母に下女のやうに差圖されて働かされる氣はないんです。兄さんが目を光らせて庇うとるから敵はん

「そんな勝手の出來る法はない。」

文雄は言葉はげしく云つた。光つた目も光らない目も、兄夫婦の四つの目は彼れに取つてつまりは目障りであつた。生中親身になつて此方のために計つて呉れたりしたために却つて目障りになるのであつた。……すると寛いだ心を保つて無事平和に餘生を過せばいいと、慾も得も憎みも恨みも絕つてゐるつもりの彼れの心の底からも、毒を塗つた尖つた刄先のやうな褻い思ひが燦めいたりした。……さういふ思ひを轉じようとして、日の冴えてゐる椽先へ出て蹲むと、母屋の猫が沙魚を啣へて小庭の方へ驅けて來るのが目についた。

「おのれ糞」と叫んで、小石を掴んで投げつけたが、狙ひは外れて薪小屋の壁に當つた。そして、元吉の姿が庭の入口に現はれた。

一この頃いろんな者を喰過ぎたから腹が重くつていけない」と獨言のやうに云つて、元吉は材木だけ轉がつてゐて、大工の影の見えない工事場を覘いてから、山の方へ足を向けた。

猫は魚を半ば嚙碎いたまゝ後へ殘して何處へか行過ぎた。文雄は兩手を帶へ挿んでブラ〳〵庭へ下りて汚い殘骸を下馱の先で蹴つて泥溝の中へ落した。

やがて母屋からの報知によつて、食事の座へ加はつた文雄は、不機嫌な顔をみんなに見せながら、砂を嚙むやうに物を食べた。

「お父さんは今日戻つて來るぢやらうか」と、母親が、默々として箸を執つてゐる皆んなの前へ話の種を持出すと、

「早う極めりやええものを大儀がつて延すから、行きたうもない所へわざ〳〵出掛たりするやうになるんぢや」と、文雄は卒氣なく云つた。

「榮治が云ふ事を聞かんやうなら、この後家の閾は跨がせんとお父さんは云うとつたが、それぢや榮治が可愛相ぢやないかな。」

「なにが可愛相なものか。さういふ風に甘やかすから惡いんぢやがな」

母親はそれには逆らはないで、苦笑して話を轉じて、「お父さんは他所へ泊ることは嫌ひぢやから、大抵なら今日は戻つて來るぢやらう」と云つたが、誰れもその話に應じなかつた。

膳の前を一人立ち二人立ちした後で、元吉が、

「約束があつたにしてもいやな女と結婚しなくつてもよからう。先方だつて氣の進まない者を強いて家へ入れたつて詰らないだらうと思ふがなあ。いくらか學資を出したといふので、金に未練があるのか知ら」と、獨言のやうに云ふと、母親はその言葉を力に、

「はじめから養子なんぞにやらいでも、此方で修業させときやよかつたのに、お父さんが學資金を儉約しやうと思うた

りするからこんな面倒なことになつたんぢや」

（三）

父親は三日目の晩覆口器(マスク)をつけて歸つて來た。誰れを相手にするともなく、途中の疲勞をくど／＼と云つてゐたが、晩飯時に皆んなが揃ふのを待つて、榮治訪問の次第をゆつたりした口調で話しだした。

「梅村といふ家を訪ねると、市河さんは先日(こないだ)轉居なさつてと云ふ。轉居先を訊(き)いてもよう分らんので、こりや困つたことが出來たと途方に暮れたんぢや。日は暮れるし腹は減るしするから、都合でその梅村といふ家に一晩泊めて貰へんであらうかと賴むと、空いた部屋がないから泊める譯に行かんと斷はられるし、飯を喰はさんかと云うても出して呉れん、兎に角上り口に腰を掛けて、煙草を吸つて暫く休んで居つたんぢやが、さうしとる間に、若い娘が出て來て、市河さんのお友だちがこの近所に居るから其處へ行つてお訊きなさいと云うて呉れたので、やう／＼手掛りが出來たやうな譯なんぢや。その友だちの案内で榮治に會はれたのぢやが、榮治の奴、轉居の通知はした筈ぢやなんて呆けた顏をしとる。それはそれとして、一體結婚の事はどうするつもりぢや。何時までも埒を開けんでヌラクラ延しとつちや、市河家へ對して義理が立たんぢやないかと叱りつけると、まだ夫婦で一軒家を持つだけの收入がないから結婚する譯には行かんと云ふそれは生活費が足らにや市河から補助をすると云うとるし、十圓や二十圓の不足なら、月々わしの方から立替えといてもええと云ふと、學校を卒業した後までも親の世話になるやうなことは好ましうないと云ふんぢや。それは一理屈ぢやが、さうすると、何時になつたら家を持つ望みがあるのか、ここでキッパりした極まりをつけとかにや、先方へ對して返事のしやうがないと云ふと、來年の十二月には俸給も増すことになつとるし、自分の地位も極まるんぢやから、その時結婚すると、兎に角話はそこで一先づ纒つたんぢや。……さう斷言した後で、また變替えなぞされちや困るとわしも氣がついたから、明日でも一緒に市河へ行つて先方の兩親の前で、わしが立合つてお前の口から結婚時期を話すこ

とにせんかと云ふと、行つてもええ、今夜直ぐに行かう榮治も乘氣になつたんでなあ。わしも汽車で疲れとる上に、まだ電車だの何のと云ふのは大儀であつたけれど、これも役目ぢやと思うて、榮治に急かれて出掛けたやうな譯なんぢや。」

阪神電車で神戸へ行つて市河家を訪ねてからの事をも、食事の終るまでにポツ〳〵話した。

「市河ぢや鰆を食はせたが、朝鮮のぢやらうか、旨うなかつた。」

「都會住ひも諸式が高うて暮し難う御座いせうぞい」と、母親一人が聽き役であるやうに受答へをした。

「榮治も隨分小使錢が入ると云うとつた。年末には賞與が貰へるんぢやが、その前にトンビを拵へたいから、百圓ばかりわしに立替えて呉れいと云うとつた。仕方がない、それだけは送つてやらうと云うといたが……」

「彼奴ズルイ奴ぢや」と文雄は口の中で忌々しさうに云つた。

元吉は默つてゐたが、榮治の結婚期については危まないではゐられなかつた。しかし、彼れに取つてはそれはどちらでもいい事であつた。四五年前に不承々々に養子に行くやうになつたのは、榮治の心が弱くて父に對してキッパリ斷り得なかつたためなのだから、一人立ちが出來るやうになつた今、多少氣が强くなつて厭な事を逃げやうとしてゐるのは無理がないとも思はれた。

「榮治さんは小使錢が足らんとか、月給が少いとか云うとりますけど、それは遊ぶからなんですぞな」と、おさとはかつてまつ子に向つて云つた。

「學校をい〻成績で出なすつたんだから、富豪の家へでも養子の口がいくらでもあるんですつてね」まつ子は下の弟から聞いたことを話した。

榮治と婚約のある女は、家のとみ子にいろ〳〵なことがよく似てゐるのださうだと、二人は話合つて互ひに意味ありげな笑ひを洩らした。

「破約でも何でもかまふものか。若い時は二度ないのだ」と、元吉は獨りで考へたり、口からも洩らしたりしてゐたが、

この父祖代々の惡氣の沈澱してゐる古ぼけた家だつて、一度根こそぎに叩潰して新たに建直したらいゝのだ。別宅の臺所だけ新たに繼足したつて仕方がないのだと、だゞ廣い家の中や古跡のやうな屋敷の廻りを懷手してブラ〳〵歩きながら、ひそかに思ひを凝らしてゐた。

父親一人の手で辛うじて命脈を保つてゐる天明時代の舊屋に最後の別れを告げるのが自分であれよと望みながら、破壞の樂みを空想してゐた。

「床の下から小判の入つた壺が出て來るかも知れんぜ」と云つたり、「蛇や百足がドッサリ出て來るかも知れん」と云つたりするので、文雄の子供が叔父さんは無茶ばあ云ふ」と笑つた。

父親は榮治の方の收まりのついたのに安心して、算盤いぢりに忙しかつた。榮治の外套代は直ぐに送つてやつて、それと同時に自分のトンビは岡山の知人に賴んで、出來合ひの格安なのを買需めて送付させることにしたのであつたが、間もなく小包で屆けられたのを開けて身に着けて見ると、身幅も丈も長過ぎて、小柄な彼れにはそぐはなかつた。

「どうかならんかな」と、家の者に向つて頻りに相談を掛けたが、誰れからもいい分別は出なかつた。不格好なのを笑つてケチをつけるばかりであつた。

「切つて直す譯には行かんであらうか。」

「そないなことは出來やしません。寸法を云うて新奇に拵へさせるより外に爲様がないでせう。」

「それぢや、これは返して、わしは古いのを、も一年着ることにしよう。」

父親は十年近くも着つゞけた襤褸トンビでまたこの冬を凌ぐことにした。さう極めてしまふと、雜作なく諦めがついた。

「えゝ氣味ぢやがな。」

家へは端書一本寄越さないで、五日も六日も二三の友達の所で、羽をのばして遊んで來たとみ子は小聲で云つた。

「お父さんは菜治へ外套代を送つた時に、あの女子にも振替えで金を送つたのに違ひないと思ふがな」と、母親も聲を低めながらも棘々しく云つた。

「さう云へばお母さん。とみは××町でおひでさんに會ふたんぢやぞな、派手な服裝をして綺麗にしとるから氣がつかなんだが、あなたはとみさんぢやないかなと云はれて吃驚したの、何ぼ經つても些とも歳を取らんやうに若い顏をしとるがな。」

　とみ子は、「あなたは知らん間にいゝ娘さんになんなさつた」と、おひでに云はれたことなど竊かに思出しながら、何の氣なしにかう云つたが、すると、

「とみはどうしてあんな女子に物を云ふんぢや」と。母親は周圍かまはずに聲を尖らせて、「あんな女子には會はいでもええぢやないか。」

「とみが會ひに行つた譯ぢやないし。お母さんは無茶を云ふ」

　とみ子は笑ひに紛らせた。そして、直ぐに話を轉じて、友だちの家の事を持出しながら、少しの暇も惜しいやうに帽子製造に着手した。

「私も稽古したいから教へて下さいな」と云つて、まつ子も原料を取寄せて、下女やとみ子に教はり〳〵覺束ない手で編みだした。單調な根氣の疲れる仕事だけれど、習つて見ると多少の興味が起らないではなかつた。

「この村では女子が八つか九つになると、みんなこの仕事を覺えますのぢや。よう馴れた者は日に帽子を一つ仕上げて一圓も取るんですから、下女なんかになる女子は次第に無うなつたんですがな。儲かるかはり隨分骨が折れますんぢや。朝起きると夜の十二時頃までも坐りつきりで、御飯も老人か誰れぞに拵へて貰うて自分は箸を採つて食べるだけにしとりまする。それぢやから、この村の若い女の身體は大抵前かゞみの惡い格好になつとりますらあ。力も弱うなつて、水汲みや野良働きは出來んやうになつとります。」と母親は傍で說明した。母親の腹の中では帽子いちりよりも家事の手傳

ひをして貰ひたかつたのだけれど、まつ子は昔からの習慣一方で事を運ぶ愚かな勞働を老人の差圖によつて、つとめるのは氣乘りがしなかつた。

「こんな田舍で身體を惡くしちや困るから、用心しなきやいけないよ」と元吉はたび〳〵注意した。

「私はこの頃每晚のやうに惡い夢ばかり見ていやになつてしまふ。自分の性質が次第に惡くなるんぢやないかと思はれますよ。あんまりお金のことを考過ぎたり、每日周圍の人の尖つて險しいことを見せられたり聞かされたりするもんだから、昔のやうな穩かな奇麗な夢は見られなくなりましたよ」と、まつ子はある夜寢床に就く前に力のない聲で云つた。

「お前も歲を取つたからだらう。東京にゐたつてお互ひにいゝ事はなかつたぢやないか」元吉はさう云つて欠伸をした。

「文雄さんは一日も早く別世帶にならうと思つて焦つてゐますよ。私だちも成べく早く離れへ移つて自分で食物を拵へることにしたいものだ。」

「そりや明日からでも出來ることだが、離れに住んだつて五十步百步だね。……兎に角一度大風でも吹かなきや。何處も此處もサツパリしないよ。」

元吉はさう云つて自分の言葉に刺戟されて興奮した。自他に對する取留めのない烈しい思ひが彼れの心の中を驅廻つた。

「榮治さんは年末の休暇には此家へ歸つて來るんですつてね。大阪の面白い話でも聞かして貰へるのを樂みにしてゐませうよ。」

まつ子はふと氣を變へて快活にさう云つた。

宮の方で梟の聲がした。

雜九十

武者小路實篤

○

疲れたら休み
元氣になつたら又働く
春の日

○

書く、耕す、讀む
そして何かを待つてゐる
毎日、俺は。

○

身體中が元氣で一ぱいだ。
俺の思つたことは何んでも出來る、
そんな氣がする。

○

いかにも春らしい天氣
俺は一人で山路を歩く
春の香がする。
春は矢張りいゝ。

○

花も咲かないではゐられないだらう。
こんな天氣では。

○

俺の子供の時から
憧れてゐる庭園がある。
美しい庭園

そこに死ぬまでに一度住んで見たい。
誰かつくつてくれ
美しい庭園

○

自然のまゝは元よりいゝ
しかし春のやうな心を持つた
藝術家のつくつた庭園、
そんな處に住んで見たい。

○

其處は極樂か
いや人間の憧れの生んだ國

○

美しい花がさいてゐる、
清い水が流れてゐる。
其處には池がある。亭がある。
ありふれた日本風の庭、
だが其處にありふれぬものが一つある
暖かき人間の心。

○

極樂の存在
それをこの世で味つて見たい。

○

見たものよ驚け
人間の生んだ、この美しさ。

○

頭がいら〱して
本もよめない
畑に出て土をいぢつたら
なほつた、
俺も土呂の子だ。

○

工場で働く時も
土呂をいぢる
時と處は
ほしいと思つた。
新しき村の勞働者。

○

俺の眞劍になつて働ける時

うれしいのは
神に愛されてると思ふからだ。
俺が働かない時、
なんだか不安なのは
神に嫌はれさうだと思ふからだ。

○

神と云ふものはないものかも知れないが
俺はこわい。

○

神に愛されてゐると思へる間
俺は強いぞ。

○

まあい丶、
俺の一生を
何かの役にたて丶見せる。
ころぶ時があつても。

○

大きな木を
全部的に見ろ
そこにある虫葉許りを捜しだすな。
こら。小僧。

○

さあ、俺も立ち上るかな、
まあ、もう少し坐つてゐやう。

○

立ち上つたら
どんなことを仕出かすかな
この俺は。

○

果報は寝て待て
だが俺は、眞心を生かして待たう。

○

本氣になれさへすればい丶のだ、
この俺は。

○

俺は、俺はと云ふと氣がひける
春の日。

○

俺をやつてしまへ
自然に、
そして自然の内からまた〱
のこ〱出てくる
俺は

○

袋はくさつたが
中にある寶玉はます〱かゞやきだす
眞理に生きた男。

○

佛陀と云ふ男は
偉い奴だ。
生きたまゝ眞理になつた。
もう死ねない。

○

俺は又、死ぬものを少しは持つて
死なうかな――

○

死ぬ淋しさ
一寸は味はつても見たい
死ぬ時は

○

だが、一寸でも味はつたら
參るだらうな。
味はゝぬにしたことはないかも知れない。

○

一寸おどつても見たい
春の日

○

お前と一緒に
うたへたら
おどれたら
俺もよろこぶだらう
春。

○

俺も強くなつた
お前を恐れずにすむ
昔はおちつかなかつた

お前がくると。
春。

○

健全な人間は生理的に支配されてよろこぶ
春夏秋冬

○

神を忘れて
たのしむことの出來るものは幸だ。
だが歸れよ。いゝ時に。

○

病人は
皆のよろこぶのを
羨やましくも
思ふ
春の日

○

だが皆があそぶ時
眞劍になつて神にすがりつける者も
幸だ

嚴肅な世界に入れる男。

○

ふやけてよろこぶよりは
しつかりしたい
春の日でも

○

俺は大したことを
したい男だ
怠けてゐられない。

○

だが大きく
遊びたい
お前とな
春。

○

雨が降つた
それもいゝだらう
本がよめる。

◎

いゝ本をよむ喜びは
生きるよろこび。

○

惡いものはよめないよ
頭がくさるから

○

粗雜なリヅムに
頭をあはせやうとすると
腹がたつ
飯を嚙むつもりでゐると
砂がちやり／＼では
いくらお前でもたまるまい。

○

眞劍になつてかけるものを
一生かいてゆきたい
眞劍になつて生きられる道を
一生歩いてゆきたい俺は。

○

俺は人間として生れた
だから出來るだけ人間として生きてゆかうとする
それがわるいのかい
お前も、人間。

○

俺が人間になり切れゝば
お前も人間になり切れるのだ
だから俺を助けてくれ
一生懸命で。

○

坂をあがる車の
あとを押すくるしさ、
ひくものはなほ苦しいだらうが
押すものも苦しい。
だが手はゆるめられない
ゆるめたら車に押しつぶされるのだ
もう一息、もう一息。
苦しいが、もう一息。
兄弟。もう一息だぞ。

○

お前の心が美しくなつてくれゝば
俺はどんなによろこぶだらう。
其處で、萬歳。

○

兄弟と枯草をやく
もつと燃えろ、もつと燃えろ
風は加はつて
音をたてゝ燃えてゆく
燒かれた葉は
高く高く上つてゆく
俺達の心も燃えてゆく
もつと燃えろ、もつと燃えろ
景氣よく。
男らしく。

○

「もう一息の處でくたばつたら
恥だぞ」
「くたばらない
俺は恥ち知らずではない。」

○

「正しいことをするものが
くたばると云ふことはよくないことだ。」
「くたばる處か
俺は悠々として生きてゐる、
あまり勝利が明らかなので
つい腰をおろして
呑氣になるのだ。」

○

不正な奴が
がんばつてゐるのを見ると
氣の毒だ。淺ましい氣がする。

○

お前のかくものは詩か
何んでもいゝ。
俺の心が生きれば
なんでもいゝ。

○

俺の嫌いな人間は

嘘つきだ。
それもやむを得ずついたのならいゝが
得する爲にわざ〱出しやばつて
嘘つく
嘘つきは我慢が出來ない。
嘘でかためた
男や女は
蛆でかためた
男や女だ。
我慢が出來ない。

○

「草や木は
仕合ものだ
自然のまゝに生きて
悩みも憂ひもない」
「どうして
わかる
彼等だつて
虫に食はれたり
切られたり
燒かれたり
飢え死にしたり
他の仲間にしいたげられたりする」
「だが
彼等は自然に從順だ、
必然のまゝに
しかも自然のまゝに
御心のまゝに生きて
はづれやうがない
其處がうらやましい。
あゝなれば
すべて自然に任せて
唯一の道を
歩いて安心してゐられる。
道にはづれることはない
其處がうらやましい

○

馬鹿な他人の意志で

—(十九 雜)—

束縛されるのはやり切れない。
御無理御尤、
さうしないと首がとんでゆくのでは
やり切れない。

○

何才から何才の男
兵隊になれ
からトロツキーに
云はれて
兵隊になつて
鐵砲かついで出ないと
殺されるのでは
やり切れない。

○

することだけはするから
俺の一生は俺に任せてくれ
人間共

○

金と暴力で
俺の自由を奪ふものがあつたら
俺は承知はならない。
だから俺は現世が氣に喰はないのだ。
どうかしないではゐられないのだ。

○

俺は俺の頭に切り支配されたくないのだ。
俺の頭にはそれだけの資格があると思つてゐる。
俺の頭よりも、もつと俺にとつて大事な頭の出て來ない限りは。

○

正しいと思ふことならする
いやなことでも、
その他はいやなことはしたくない。
だからさう云ふ世界をつくらうと云ふのだ。
つくらなければ我慢が出來ないからだ。

○

つくれるか、つくれないか、
それは俺の一生で見てくれ、
俺は虫のいゝことは嫌ひだが、他人に自分の運命にさわられ

るのはいやだ。

○

今の人間、殊に政治家と云ふ馬鹿は、他人の運命にさわることを商賣にしてゐる。
やり切れない。

○

昔、聖人の世のなかでは、誰も××のあることを知らなかつた。知る必要がなかつた。
正しいことさへしてゐればよかつた。
そんな世界をこの世につくつて見せるのだ。つくれないと皆云ふから
俺達が出しやばるのだ。

○

基礎はかたまつた
家をたてやう。
獨立獨歩で
しかも協力の家を、
其處には
愛があり、美があり、
眞理があつて
しかも皆、
個人主義、
俺はしたくないことはしないよ
正しいことなら仕方がないが、
不正なことなら
勝手にしろ。俺は知らない
と云ふ家を。

○

その家は
段々ふへてゆき
生長するぞ。

○

俺の望みは
他人によつて氣分を害されない
一人になりたい時は一人になり
皆と一緒になりたい時は
皆と一緒になれる家をたてたい。

○

十年後を見ろ
生きてゐれば
何かしてゐる。

○

俺が、俺がと
云ふ氣を出すから
皆、意氣地のない人間になり
暴力のもとにまけるのだ。
正しい仕事に向つては力を一つにしろ
何にも恐れることのない世界は出來るのだ。
本當につくらうと思へば。
そして俺達は
本當につくらうと思つてゐるのだ。

○

眞理で負けない
他の點で負けられるかい

○

俺の生きてゐる間は
眞理が饒舌る
俺が死んだら
なほ眞理が饒舌る。
さう云ふ人間になれ
兄弟姉妹

○

佛陀の福音に、こんな言葉がかゝれてゐる。
「汝の同胞が汝と同一人であると云ふ眞理を實行せよ。
正義の道を歩け
さうしたら汝は自己に於て死である時、
眞理に於て不滅であることを會得するであらう」
俺の云ひたいことを
俺よりはつきり大きな聲で
三千年前に云つてゐる、
佛陀よ。お前の前に禮拜する。

○

この眞理が實行出來ない間
人は人生を悲觀する資格はない。

○

金山へ行つて土呂をつかんで、
この世に金はない

——(雜　九十)——

あるものは士呂許りだ。
から云ふものは利口か、馬鹿か。

○

眞理より女を愛し、
眞理より金を愛し、
眞理より自己を愛するもの、
お前はわが意に叶はざるものだ。

○

すべてのことは思ふやうにはゆかない。
實に執念深く思ふやうにゆかない。
だが、俺は勝利の自覺をもつて、
もつと執念深かく落ちついてゐてやる。
そして勝利の道を歩いてゆく、
淋しい時もある。はがゆい時もある。
ぬかよろこびする時もある。本當によろこぶ時もある。だが
道は遠くつて、
足はおそい。いら／＼する時もある、
だが俺は自分に克つて落ちついてゐてやる。
運命と辛抱競べをする。
その間に俺の眞心がしなびたらそれつ切りだが、俺は自分の
眞心をその間に鍛へてゆく。
執念深かく鍛へてゆく。

運命は厚意を見せかけて、中々やつて來ない。ぢらせるだけぢらさうとする。
だが俺はぢつとしてゐてやる。來なければ來ないでいゝと云ふ顔してやる。
そのくせ俺は、ます／＼眞劍になり、眞心を生かし運命を引きつけなければおかない資格をつくらうとする。
かくて少しづゝ自分の仕事を築いてゆく。
ものになりさうで中々ならない。
だが俺は失望はしない。ます／＼自分を鍛えてゆく許りだ。
運命を呪ひ出したらもうおしまいだ。運命は、殊に人類は俺を愛して、俺の一日も早くものになつてくれるのを待つてゐてくれるのだが、俺の方が中々ものにならないのだ。
だがいつか、俺は自分をものにする。こゝまで來てものにしなかつたらあまりに意氣地なしだ。

○

俺には何にもかもわかつてゐるのだ。
たゞ實力がまだ足りないのだ。だから人類は托すことが出來るもの切り托さないのだ。

○

子供は手を出した
親はその上に林檎を澤山々々のせたいのだ。だが子供の手が小さくつてのらないのだ。

俺は其子供で、人類はその親だ。俺は人類に不平は云へない。

○

俺にはたしかに自信はあるのだ。
だが今迄の自分の仕事ではあまり心細い。
大事なのは今だ。
精神上の仕事から云つても、今一歩進まねばならない。
物質上の仕事からは知己をよびよせる資格を今一層強くもたねばならぬ。

○

大きな舟は
磁石の力を感じてゐる。
青年の心のうちにある、磁石もたの磁石の力を感じてゐる。
引きつけられたがつてはゐるが、
磁石の力が足りないから仕方がない。
磁石は生長してゐる。
何時かは引きつけられたがつてゐる大物を易々と引きつけるだらう。
磁石さへ段々生長してゆけば。

○

一通りの美しさでは
誰も見に來ない
世界中の人を呼ばうと思へば
それだけの花壇をつくらなければならない、
世界無二のものを持つものは
世界に無視しろと云つたつて
世界は無視しない

○

人類の傲りになるものを持たずに、
よし持つた處がそれがまだ、生長し切つてゐなかつたら、
人類が注意しないのはあたりまいだ。

○

俺達の内に
人類が無視することが出來ない、
人類の光を生み出したなら、
人類はそれを見ないわけにはゆかない、
そのことは俺はちやんと知つてゐる。

○

見かけはどんなにつまらなくつても、
物質的にどんなに貧弱であつても
人類を救ふ力がその内にふくまれてゐるなら。
安心しろ。その力は生きないわけにはゆかない。

○

お前はお前が一番信用し頼りにしてゐたものに背かれた。それも一人ではなく、二人も三人も四人も、

仕方がない、彼等の見るよりも俺はもう少し大きかつたのだ、
それが誤解される元因だつた。
俺がもう少し下らなかつたら、皆はもつと俺に感心してくれたらう。
これは自惚れではない。正直な處だ。
今後も俺はたへず誤解されるだらう。
俺は大將の大將で、
少尉の大將ではない。

○

俺の仕事はどんなことがあつても
俺の豫算からははみ出ない、
世界中が自分の思ふ通りになつても
自分の豫算の內だし、
自分より他の人が皆自分を見すてゝも
豫算の內だ、
俺が明日死んでも豫算の內だし、
百年生きても豫算の內だ。
どつちにころんでも豫算の內だ、
俺はするだけのことはする。
覺悟が出來てゐる。

○

その覺悟が出來てゐるから
俺は安心して生きてゆける
どんな時でも、
そしてぐらつかない。

○

俺の友に天探女がゐたが
俺には天探女を出すことが出來なかつた
どつちでもいゝやうな顏してゐるから
友達がどつちに出ても
自分の豫算の內だから。

○

自分さへまちがつた道に
入り切らなければ
いざと云ふ時に眞心が生きるやうになつてゐさへすれば
あとはどつちにころんでも豫算通りだ。
それ以外には出られない。

○

自分の缺點をなほすだけなほして
自分の信じる道を歩いてゆけたら
自分は成佛出來ることは知つてゐる。
その他は自然に任せる。
自然以外には誰も出られない、
だから豫算以外だ。

（三、九）



戯曲

水車小屋（一幕）

秋田雨雀

人物

盲人　胡弓弾きの乞食
女乞食　その妻
彌作　水車小屋の所有者
太助　その隣人
おみね　彌作の妻
とよ　太助の妻
其他村の娘達

ある温泉地に近い村の郊外の出來事。この戯曲はその日の夕方から翌日の未明までに行はれる。

舞台中央から右手寄りに、半ば廢れた水車小屋があつて、大きな水車は車の輪が所々破損して長い間水に逢はないので、涸いて白ちやけてところ〳〵に苔が生へてゐる。生ひ繁つた雑草の間を、水車小屋には關係がないといふやうに、小川が音をたてゝ流れてゐる。水車小屋の右手はやゝ大きな森になつてゐて、その森の入口に自然石で疊まれた泉があつていゝ水が絶えず湧いてゐて、その水が小川の中に落ちて行く。

舞台の左手は村に通ずる道路になつてゐて、やゝ近く、雪をいたゞいた山脈が見える。道路の兩側には青い雜草が生ひ繁つて、その中に黃色な小さな花なぞが咲いてゐる。

初夏の夕方近くである。二人の農夫は水車小屋の左手の小川にて鍬を洗つてゐる。そして、右手の泉の傍には二人の村の娘達が水桶に水を汲んでゐる。

彌作。(鍬を小川の中から上げて、それを藁束で拭きながら)己ら今夜こそ承知しねいぞ。火付けか盜賊にちげえねい。

太助。(鍬を草の上に大事さうに置いて、煙草を喫む。)然んだとも。第一、己ら方の村さ、然うした者が入り込んで、人の目盜んで好きな眞似してゐるつうのが氣に入らねい。

彌作。今朝な。おみねが水汲みに來た時、この小屋の前に焚火の跡が殘つてゐて、ぶしぶし燻つてゐたつう話だてば。よつぽと、ずうずうしい野郎だ。

太助。ふむ。ずうずうしい野郎だ。そんな奴は、この先き何したこと仕出來すも知れたもんぢやねい。

彌作。去年、己らの家の鷄盜んで行つた奴もこいつの仕業だかも知らねいぞ。何しろ今夜は寢ずの番で、ふん捕へてやるはで、お前も手傳つて呉れろよ。

太助。うむ、よし、己れもやる。然した野郎の顏付あ、何うした顏付きだか見てやりてえもんだ。

(この時二人の娘の一人は自分の手桶に水を充たして、他の一人の娘のゐる方へそれを運んで行く。)

第一の娘。あの人達あ、あこで何してるんだべい？おみねのお父と、とよ家のお父ぢやねいか？

第二の娘。然んだ、今畑から歸つたんだかさ？(彌作に呼びかける。)おみねのお父う！

彌作。おうい、おそのぢやねいか？

第二の娘。お前達あ今畑から歸つたんだか？

彌作。うん。お前達あ。まだ飯食ねいのか？

第二の娘　あゝ、まだ食ねいし。己らこれから仕度するところだあし。（笑ひながら、）お前達あ先刻から其處で何にしやべつてるんだべい？　内密話してるんだば、己らお母にみんなしやべるはでいゝが？

（第一の娘は腹をかゝへて笑ふ。）

彌作。なに内密話だつけすべいな。然した話ぢやねいてばよ。お前達あ、毎晩己らの水車の中さ、誰だか寢てゐる野郎のあるつう話を聞いたべい。

第二の娘。己らも聞いたども、それこと何うするんだべい？

彌作。その野郎を今夜太助と二人でふん捕まへてやるべいと思つてよ。お前達あ朝早く水汲みに來る時に、そんな野郎を見つけねいかな？

第二の娘。（第一の娘に、）己ら見たことあねいなあ。

第一の娘。（點頭する。）己らも見たことねい。誰あ見たんだべい？

彌作。今朝己ら家のおみねが水を汲みに來たら、焚火の跡ぶしぶし燻つてゐたつうし、それに、時々小屋の中さ飯粒だの魚の骨だのを撒き散らかしてゐるところを見れば、きつと誰かこの小屋の中さ寢てゐるに違げえねい。

第一の娘。そんでも。うつかり捕まへて村の人だら何うすべい？

太助。何して村の人あこゝの小屋さ寢てるべいな。

第一の娘。（笑ひながら、）とよ家のお父だつて若い時あ、この小屋さ寢たこともあんべい。

太助。（鍬で打つ眞似をする。）この童子！　いつまでも子供だと思つてゐたけや....

彌作。ほんだら、きつとお前もこの小屋の中さ寢かされたことでもあんべい。己らみんな知つてるはで....

第一の娘。己あそしたこと知らねい！

彌作。村の人だか村の人でねいか、己れにはちやんと解つてるはで、心配はいらねえ。何しろ、今夜は、そいつを捕へて足腰(あしこし)の立たねい目に逢はせてやるつもりだ。

第二の娘。然んだども、小屋の中さ寝たゞけであんまり手荒な眞似するのも不憫でねいか？

彌作。然んでねえよ。今に畑を荒されたり鶏を盗まれでもしたら何うするべい。お前達だつて呆氣(あつけ)らかんとしてゐて見ろ何んなことされるか知れねいぞ。

太助。然んだ、今にお前達だつて、掠さらはれて女郎か淫賣女に賣られてしまふか知れねいぞ！

第二の娘。わい、はあ！　この人達！

彌作。（娘達の方に近寄つて、からかひながら、）何が『わいはあ！』だ。お前(めい)んた徒娘(いたづらむすめ)はさらはれて行つて、鼻の先さ白粉つ子でもつけた方がよかべい。

第二の娘。己ら、そしたこと知らねいし。（第一の娘に、）己らのことを徒娘だつて、自分達こそ助平爺の癖に！

彌作。（鍬を振り上げて娘達を追ひかけやうとする。其瞬間に妻のおみねが手桶を提げて來る。彌作は振り上げた鍬をやり場なさそうに下す

第一の娘。（水桶に手をかけながら、彌作の妻に挨拶をする。）來いしたか？

第二の娘。（氣まり惡りさうに小聲で、）來いしたか？

おみね。（娘等には挨拶もせずに、さつさと泉の方へ行き、天秤棒を下して片々づゝ水を汲む。）

第一の娘。（歩みながら、）明日も天氣になるべいな、夕焼けがして、彼方の空あ眞赤だ。

第二の娘。然んだ、明日も天氣になるべい。

第一の娘。お前、既氣湯(げんけ)さ行くけい？

第二の娘。あゝ、己ら、湯さ行く。

第一の娘。然んだら、己らと一緒に行くべし。待つて呉ろ。

第二の娘。あゝ、待つてゐらあ。飯食つたらすぐに行くべし。

第一の娘。あゝ。（二人は左手の道を村の方へ去る。）

おみね。（水を汲み終へて、）お父う、お前此處で何してゐたのし？

彌作。（鍬を藁束で拭きながら、）何もしてゐねい。太助と一緒に畑から歸つたところだてばな。

（太助はこの時、二人から少し離れて泥まみれになつた足を股引のまゝ小川に入れて洗つてゐる。）

おみね。ふむ。太助と一緒に畑から歸つたら、さつさと家さ歸ればよかべいに。

彌作。然んだはで、己ら家さ歸るところだてばな。

おみね。お父。五十顔さげて見卑い眞似して呉れしな。

彌作。（太助に氣兼ねしながら、）はあ、これや聞きものだ。己ら何に見卑い眞似した。さあ言つて見ろ！

おみね。（水桶を肩から下して夫と對ひ合ふ。）ふむ。あれや見卑い眞似でなふて、何が見卑い眞似だべい。自分の顔さ相談して見たら一番よく解るべいな！

彌作。何んだつて、もう一返言つて見れ、己ら承知しねいぞ！（彌作は鍬の柄に手をかける。）

おみね。己ら、些とも怖なくねい。お父う、女童子供はそしたことしたら逃げたり、騒いだりすべいども、己らには些とも怖なくねいよ。さあ、打つなら打つて呉れろ。

（太助は二人の爭論してゐるのを見て、急いで小川から上つて來る。）

太助。彌助。お前氣でも狂つたのか、やめろつてば。おみねも、何して彌作を怒らせたべい？

彌作。己ら何もしねえのを、この嫉妬やきの牝かすがつまらねえことい ふはで。

おみね。何んだと、この色狂ひ！太助も太助ぢやねいか、いゝ顔下げて女童子供さふざけて、見卑くなかんべいか？

太助。おみね、それやお前の感違だ。己ら達あ何にも女童さふざけてゐねいてば。お前こそい丶年して嫉妬もい丶加減にしろ。實あな、己ら彌作とこ丶で乞食狩りの話してゐたら、あの女童達あ、そんなことつまねいつといふもんだはで、二人でいぢめてやつたとこだ。誰れあ、お前あ丶した童さかまふべな。

おみね。お前達のいふことあ當にならねいよ。いつでも組になつてるはで。

太助。何にが組になるべいな。い丶はで、早く家さ戻れ、彌作まだ怒るはでな。

おみね。（益々に天秤棒を擔いて。）かうした爺あ怒つたつて、何に怖なかべい？……お前達あ、いつまでもこ丶にゐたらよかべい。

（おみねは二人を尻目にかけて左手に去る。）

彌作。（ぼんやりして立つてゐたが、やがて嘆息をもらして、）あの氣狂ひ婆！太助も氣持惡くしたべい？

太助。己ら何んにも氣持惡くしねい。これもみんなこの小屋さ寢てる乞食野郎のためだ。今夜、二人でそいつのことをずた／＼に切殺してやるべい。慈悲も情も要つたもんぢやねい。

彌作。（無智な顔に元氣を帶びて、）然んだ、己れも獸になつた氣持でやつつけべい。お前も確乎しろ！

太助。よし！

（二人は鉈や鎌を持つて立ちかける。）

彌作。日が永ふても、もう日が暮れた。もういつもだば、飯食つて湯さ行くころだ。何うだ、もう溫泉場さ。燈火あついた。

太助。然んだ。もう燈火あついたな。己ら今夜、湯さ行かねいぞ。

彌作。己らも湯さ行かねい。さあ、早く飯食つて仕度すべい。

（二人は村の方へ去る。）

（舞台は一時間暗黒になる。其間に時間の経過したことを示す。）

舞台は青味を帯びた。遠い温泉宿の窓に燈火がついて黄色く光つてゐる。星が青く輝いてゐる。

胡弓の音がする。ある時代に流行した支那楽の「九連環」といつたやうなものを連想させる。初めは人間の姿が見へずに何處ともなく胡弓の音だけ聞える。やがて一人の胡弓を抱へた男の乞食と、病人らしいその妻とが森の中から出て來る。

女乞食。（喘ぎながら。）あゝ咽喉が涸く……一寸待つてお呉れ、私は今水を飲むから……

盲人。あゝ、飲んでおいで。氣をつけておいでよ。そんな身體で怪我されたら大變だ。

（盲人は胡弓を大事さうに左の小脇に挾むやうにして首を曲げて泉の方へ注意する。女は甘さうに水を飲む。）

女乞食。あゝ、いゝ氣持ちになつた……私はこのまゝ死んでしまつてもいゝ……

盲人。馬鹿なことをいふもんぢやねい。

女乞食。私はいつまでもこゝに斯うしてゐたい。さあ、今夜もこの小屋を借りることにしやう。

盲人。己れは些とも疲れやしねえ。お前も疲れたらう、そこへ座つておいでよ。

女乞食。水を飲んだらいゝ氣持になつた。まだ腹が痛いかい？

盲人。お前に死なれて何うするもんか。己れと一緒になつてから、お前は苦勞ばつかりしてゐたな。お前はさぞ己れを腑甲斐のねえ奴だと思つてゐるだらうな。

女乞食。何んのお前こそ、私といふものがあればこそ斯うして苦勞してゐるんぢやないか。もう〳〵そんな事はいひつこなしにしやうよ。

盲人。でも己れはこの先きお前のことを考へると、可愛相で可愛相でならねいんだ。一層のことお前と別れて己れは故郷へ歸へらうかとも道々考へて來たんだよ。己れ一人だけなら、何んなことをしたつて食つて行けるんだからな。

女乞食。お前はそれぢやもう私がいやになつたんだね。それに私の腹にある子供は何うするつもりだへ？

盲人。子供？　然うだな。己れは小兒のことをすつかり忘れてゐた。だが、子供のことは何うにかならうよ。

女乞食。何うにかなるつて、私達には何うにもならないぢやないか。それに私はこの子供は何んなことをしても育てゝ行きたいんだよ。何んな苦勞をしても、この子供だけは人手に渡さないつもりだ。お前はこの子が可愛いとは思はないかい？

盲人。子供が可愛いくないかつて？　憎いとも思はねえが、己れには何んといつたらいゝか譯が解らねえんだよ。己れに子供の出來る譯がねえやうな氣がするんだよ。

女乞食。可笑しな人だね。子供の出來る譯がないなんて、まるで子供のやうなことをいつてるよ。

盲人。己れには然うとしか思へねえんだから、仕方がねえ。それでも子供が生れたら、己れにも可愛くなるかも知れねい。

女乞食。あゝ男といふものは他賴にならないもんだね！

盲人。それは然うともう餘程遲いな。お前寒くはないか？

女乞食。寒くはないけれども、何んだか心細くなつて來た。もし今夜にでも子供が生れたら、私達は何うしやうね。明日の朝村の人達に見つかつて追ひたてられでもしやうものなら、私も子供も死んでしまふ。私は一層子供をお腹に入れたまゝ死んでしまひたい！

盲人。大丈夫だ。明日の朝早くこゝを立つて、町の方へ行かう。町の木賃宿でなら安心して子供を産めるだらう。

女乞食。だけれども、もしか、今夜の內に生れたら何うしやう。あゝ私は死んでしまひたい！

（女は泣く。盲人は胡弓を草の上に置いて、女の身體に觸れやうとする、やう〳〵のことで其肩に觸れる。）

盲人。確乎しろ、己れは村の人に賴んでお前の丈夫になるまで、こゝへ置いてもらふから安心しておいで。さあ、小屋の中へ入らう。

女乞食。ほんとに然うしてお呉れ……あゝ苦しい！　下腹が痛んで來た。今夜の中に生れなければいゝけれども……

(女は苦しさうにして立上る。盲人は草の上にある胡弓を取りあげて、女を抱きかゝへるやうにして小屋の中に入る。舞台は暫く空虚
やゝ長い間を置いて、二人の農夫、彌作と太助は棒、鎌なぞを持って小屋の周圍に忍び寄る。)

彌作。(棒を持って小屋の前に立ち、注意深く中を覗いて見る。)確乎しろよ。お前裏の方で番をしてゐろ。逃げ出したらば、その鎌でずた／＼に切りつけろ、いゝか。

太助。(鎌をふり上げて、)よし、來た。お前も確乎しろ。

(太助は鎌を後に隠すやうにして、小屋の後の方に廻はる。)小屋の前にゐる彌作は棒を振りながら入口の方へ進みかける。その途端に小屋の中から女の呻き聲がするので、彌作は驚いて小屋の外に飛び出す。同時に太助は裏口から出て來る。)

彌作。心配するなよ……己ら小屋の外で怒鳴て見るからな……

太助。うむ。それがいゝ、それがいゝ。まさか人殺しぢやあんめいな。

彌作。例へ人殺しでも己らびくともするもんぢやねい。

太助、然んだとも、無理なことすなよ。危いものでも振廻はして飛出して來られたら大變だてや。兎に角怒鳴る前に先で小屋の上を叩いて見たらよかんべい。

彌作。それも然んだ。この棒で叩いて嚇してやるべい。

(彌作は棒で水車小屋の屋根の上を烈しく叩く。中では女の呻吟の聲がつゞく。)

女乞食の聲。苦しい……苦しい……

彌作。苦しいつてるやうだな。太助、中にはもう一人人間がゐるやうだてば。窓から怒鳴つて見るべい。

(小屋の横手の窓から中を覗き込んで呼びかける。)

そこに居るのは誰れだ？……返事しねいな。返事しねいだらこの棒で打殺してしまふぞいゝか？

太助。（彌作の傍に立って、）彌作確乎しろ！　己らついてるはで！

彌作。兎に角、己らの水車さ、言斷りもなく寢てる奴ぁ錄なものでなかべ。何の某だかいつて見ろ、そこにゐる人間は誰だ？

盲人の聲。………何うか靜かにしてください………後生ですから靜かにしてください………人間一人の生死にの場合ですから………

彌作。（元氣づいて、）何んだと人間一人の生死にの場合だと、生意氣なことといふな、他人の小屋さ言斷りもなく寢込んで靜かにして呉れもねいもんだ、さあ、出て來い、出て來い、出て來ねいば己ら入つて行くぞ、いゝか？

女乞食の聲。…苦しい…苦しい…

盲人の聲。確乎しろ…安心して…己れにしつかり掴つておいで…力を出せ…

女乞食の聲。死にさうだ…一層死んでしまひたい…

盲人の聲。馬鹿なことといふな…今直きだ確乎せ…死んだら己れも一緒に死んでやる…そら、もうもう直きだ…力を出せ…

彌作。（短い沈默の後に、）一體お前達はそこで何にしてるんだ…病氣でもしたのか…はつきり返事しろ…

盲人の聲。一寸の間待つてください……今にみんな解りますから……私等は怪いもんでもなんでもありません…

後生ですからちつとしてゐてください…

彌作。（太助に、）ちつとしてゐて呉れつてよ。何うしたらよかべい……

太助。何うも聞いたことのあるような聲だな……一寸の間ちつとしてゐてやるべし。

彌作。よし、然んだら、ちつとしてやるべい

（二人は注意深く耳を傾ける）

女乞食の聲。……………苦しい……苦しい………

盲人の聲。さあ、もう直きだ……氣を確かに持て……自分の家だと思つて安心してゐろ……

彌作。（再び窓から呼びかける。）其女子は病人だな……藥でもやるべいや……確乎しろ……

盲人の聲。ありがたうございます……藥も何にも要りません、そこを退いてゐてください……あなた方の聲がすると苦しむばかりです……

彌作。己らこゝにゐれば、病人が苦しむばかりだつてよ……（窓から心配さうに覗いて、）藥なら何んでもある、持つて來てやるべいか？

盲人の聲。兎に角、何にもいはないでください……藥も何んにもきかないんですから………

女乞食の聲。………あゝ、死ぬ、死ぬ、死ぬ、死ぬ………（次第に力が弱つて行く。）

（二人の農夫は非常な不安に襲はれて、小屋の前と横手を無意味に歩いてゐる。突然小屋の中から力のある赤兒の聲がする。そしてそれと同時に女の深い嘆息の聲が長く響く。二人は思はず小屋の中に突進して行く。）

彌作。確乎してゐろ………安心してゐろよ………明日からお前さん達あ安心し己らの小屋さ寢てゐてもいゝ……お前安心して寢てゐろよ……

太助。……お前さんは温泉場さ來る座頭の坊ぢやねいか？

盲人の聲。……はい、さやうです……何んとも申譯がありません……

太助。……何にも申譯のねいことあねい……己らお前達だとも知らねいし危いことした、なあ、彌作……

彌作。己ら温泉場で、お前の胡弓聴いたことあるけや、己らの聲お前忘れたげい？

太助。お前達なら、いつまでも誰も何ともいはねいはで、安心してゐろよ……

盲人の聲。ありがたうございます。この間からこいつが身體が當前でないもんですから、町へ歸へるのも可愛相だと思ひまして、つゐ言斷りもなくこの水車小屋を拜借して居りました。

彌作。兎に角、お目出てい話だ。今に夜明ければ己らの嬶達もやつて來るべい。そしたら何んでも用達してもらつたらよかべい。

盲人の聲。ありがたうございます。こゝへ置いてさへいたゞけば何にもいりません。

彌作。うんにや、然うでねい。第一產湯も使はせねばなんめいな、太助。

太助。然んだとも……

彌作。何しろお前達ア安心して寢てゐろ。己らもう歸るべい。

盲人の聲。何うぞ皆さんによろしくお願ひ申します。私もこれでやう〳〵安心いたしました。先刻は私も一層のこと、二人で死んでしまはうかと思ひました。

彌作の聲。馬鹿なことを言ふな。お前も疲れたべ。女子も安心して一寢したらよかべ。己ら行くぞ。

（二人は以前と全く別人のやうな態度で、いそ〳〵として外に出る。外はまだ暗く。星座がひどく傾いて朝の近いことを示してゐる。

（舞台は一旦全く暗くなり、その間時間の經過したことを示す。やがて次第次第に明くなつて青白い光景になる。）

二人の農夫の妻のおみねとよは、一人は大きな皿を一人は湯を入れた大きな手桶を持つて村の方から來る。二人は小脇に小さな風呂敷包みなぞを持つてゐる。

おみね。（小屋の戶口から中を覗きながら。）未だ寢てるべい。起して見るかな？（聲を高くして、）胡弓の坊さま、まだ寢てゐしたか？

盲人の聲。何方です？

おみね。村の女子だ。昨夜、お前さんのとこで、お產があつたつてねし。己ら產湯使はせてあげべいと思つて。

盲人の聲。ありがたうございます。昨晩は彌作さん達に大變お世話さまになりました。

とよ。この人は、彌作のお母でさね。赤坊あ寢てゐしたか？

盲人の聲。はい、よく寢てゐます。然んなら一つ産湯を使はせていたゞきませうか……

二人の農夫の妻は小屋の中に入つて行く、

村の娘達が大勢手桶を提げて泉の方へ來る。その内には昨日の娘達もゐる。小屋の戸口や窓から中を覗き込んでゐる。）皆な好奇心に眼をかゞやかしてゐる

第一の娘。乞食でも子供を産むんだべいか？

第二の娘。はあれ、まあ、この人！　乞食だつて人だもの。

第一の娘。然んだども、あゝした座頭の坊が子供産むなんて、何んだか可笑しいはで。

第二の娘。あれ赤坊あ泣いてる。あれ抱いて來た、抱いて來た。

おみね。（赤子を大事さうに抱いて戸口から出て來る。非常に眞面目な表情をしてゐる。）太助のお母、盥さ湯を入れて呉れろ。己ら洗つてやるはで。

とよ。己らにも、一度抱かせて呉れねかさ。重かべいな、

おみね。湯あ冷めてしまふべいにな。

とよ。さあ、然んだら、己ら湯注ぐべいや。（盥の中に湯を注ぎ入れる。白い湯氣が女達の顔を時々見へなくする。）ちやうどいゝ加減だ。坊さまお前も此方さ來て見たらよかべ。

（盲人は戸口のところに立つて、ざぶ／＼と湯の音がして、自分の子供の洗はれてゐるのを聞いてゐる。）

おみね。坊さまに似ていゝ男だ。かうした大きな赤坊を腹さ入れてゐたら、重かつたべいにな。

とよ。（手拭で子供の股を洗つてやりながら、こんなものを、ぶらさげて今に女子が欲しくなるべいな。

（娘達は腹をかゝへて笑ふ）

盲人。（不安さうに）おかみさん、子供が眼を開いてゐませうか・・・・

おみね。おほ、眼開いてるかつて。大きな眼二つぎろ〳〵開いてお前の方見てるてば。お前にも見せたいほどだ。

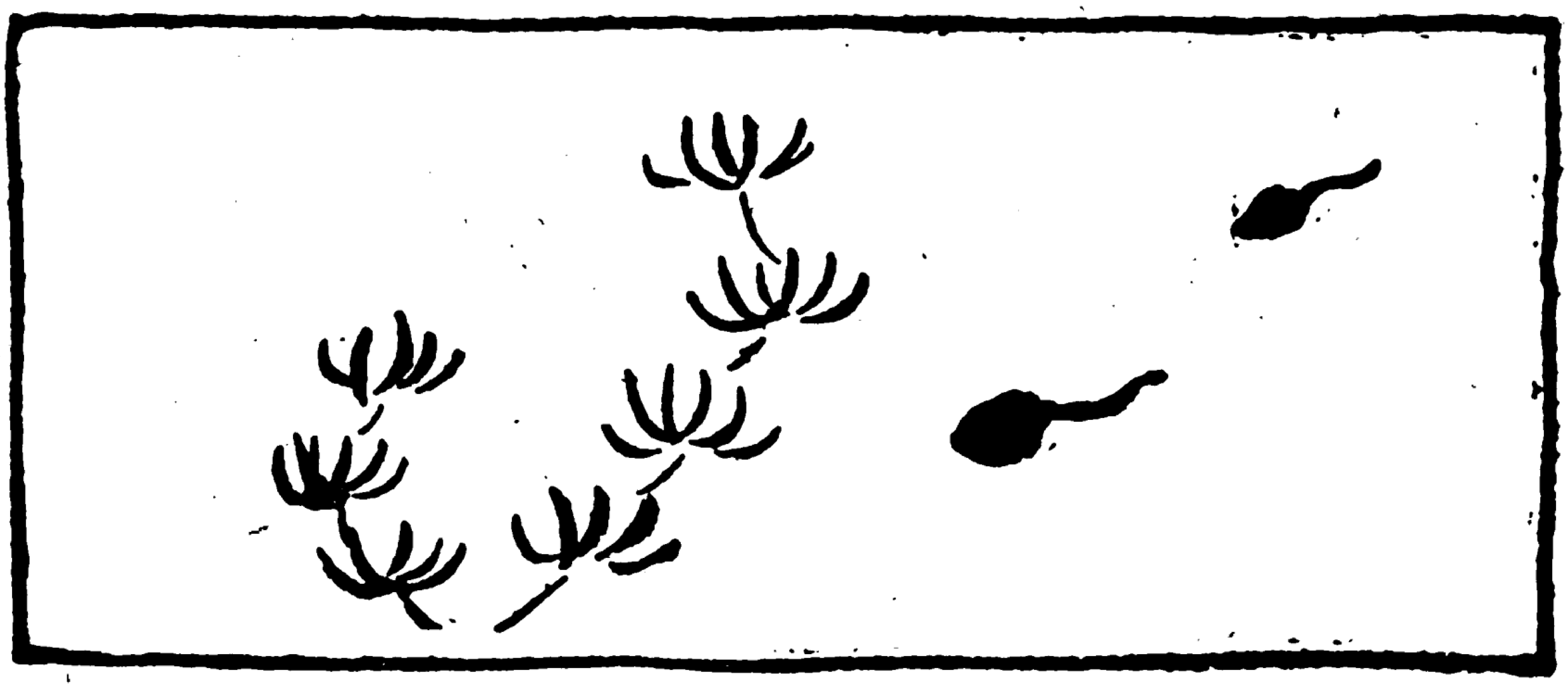
盲人。（尙は不安さうに、）ほんとうでせうか？・・・・・・ほんとうでせうか？

おみね。ほんとうだとも、誰れが僞いふべいな？

盲人の兩眼には涙が一杯に溢れてゐる。

娘達は物珍しさうに、盲の周圍に立つていつまでも赤兒を眺めてゐる。大きな森が眞赤に染つて、小鳥が囀り出す。—幕—

(La 18an de Aprilo '19.)



シスカの一夜

(或る旅行記の一節)

長與善郎

自分が中學の一番上級にゐた年の夏であつた。樺太の南半が日本領になつて間もない頃、地學協會の主催で、新領土樺太への修學旅行團が募集された。自分の同窓に數名の應募者があつたので、自分もふつとそれに加はる氣になつた。

何しろ生れて始めての大旅行なので、母の許しを得てそれが定つた時にはいろ〳〵空想を描いて興奮した。とに角内地とは全で毛色の變つた處に違ひない。面白いもの、變な感じのものがあるだらうと思つた。兄達も面白からうと云つて贊成し、少し樺太に就いて檢べて見ておいて行つたら猶ほ興味があるだらうと云つた。自分は二三の書物を買つて來て讀み、又東洋史の先生であつた白鳥博士から特別に參考の話を聞いたりした。

白鳥さんは其頃自分の尊敬してゐる學者であつた。如何なる熱心と、興味とを以て自分は此人の講義を傾聽し、樂しむだ事であらう。東洋史は自分の最も愛する課目であつた。

從つて又得意な課目でもあつた。

それは自分にとつて學問ではなく、一のローマンスであつた。幻想的事實の長い繪

卷物であつた。一種特別な感じのある美しい英雄的戯曲であつた。

西洋史は教師が白鳥さんに劣つてゐた故もあらうが、東洋史に比してはずつと散文的な感じであつた。それは複雑で、精確で、緻密で、波瀾曲折に富み、幾多の偉大な深刻な、强い事實から成り立つてゐるが、東洋史の大味と、ミスチツクな詩趣に欠けてゐた。それは絶えず緊張してゐるが、餘りに煩瑣で、現實的に忙し過ぎ、悠々とした奥床しさと、秘密とを持つ東洋史とは全然趣きを異にしてゐた。要するにそれは自分には餘りに現實的で、較々殺風景な觀があつた。從つてそれは東洋史とは反對に、ずつと學問であり、科學であつた。

東洋史も近世になるに從つて、西洋史と混合し、現實的になり、小規模になり、特色が褪せてゐる。それは東洋民族の意氣消沈と衰頽を意味する。餘りに非科學的な、非リアリスチツクな民族の衰頽を意味する。はげしい生存競争の爲めの殆んど間斷ない緊張と、充實と、努力との長い試練と、辛酸な苦闘の手に揉まれ〳〵て生長し來つた堅實なる文明族に對する大ざつぱな、夢想家の降服である。明朝以後、清朝となると、東洋史は傳來固有の意氣を失ひ、いじけ、現實の大勢の前に周章狼狽して急にコセ〳〵とし出し、自己の威嚴を失ひ、見るから惨めな狀となる。十九世紀の全部と廿世紀の初半とは東洋史の西洋史に對する降服時代である。それはもう純粹の東洋ではない。四十年の東洋史を假りに現在で切つて見れば、所謂東洋史らしい東洋史は支那の明朝の沒落と共に終りを告げてゐるやうに見へる。だがその東洋史の生命は假りにそれ迄のものとして見ても永久に面白い。永久に價値あり、美あり、生命ある人文史上の異彩である。眞實には永久に味ひ盡せない深い秘密があり、美しい夢があり、詩がある。

だが此詩と、夢と秘密とは偉い獨得の文明と、思想とを世界に加へた漢民族や、又土着の蒙古族とは代つた他の東洋民族に依つて、廿世紀以後に再び世界の文明史上に精華を咲かす時があるであらう。

中世時代に東洋は西洋を襲つた。近世に西洋は東洋を襲つた。しかしそれらの世界的經過に依つて一國は亡び、一民族は滅びても、全體としての精華は亡びない。再び東洋は西洋に迎えられるであらう。侵略者としてではなく、客と

して。友として。東西兩洋は互に自信を持ち、深き自覺を得、而して互の自己を尊重し合ひ、仲よく活かし合ふ時が來るであらう。融合は益々深くなり乍ら互の特色は益ゝはつきりして行くであらう。兩者は互に他に欠けたる美を持つてゐる。天才を持つてゐる。世界はその特長の失ばれざる事を望んでゐる。そしていろ〳〵の特長が皆人類の名譽と、意志と、幸福の爲めに調和の中に活かされきる事を望んでゐる。あらゆる紛擾や、爭鬪や、不調和は畢竟理想的調和に向つての廻りくどい經程(プロセス)である。歴史は此經程と其目標を語る生ける物語であり、碑文であり、教訓である。

歴史の興味は「感じ」にあり、想像にある。想像によつて生き〳〵した感じを味ふ事の出來ない者にはそれは全く死んだ學問である。自分は斯う告白しても差支ない。自分が藝術をやるやうになつた事には東洋史の講義を聽いた事が與つて力があると。何故ならそれはどの位自分の想像力と空想とを引き出し發展させたか知れない。北部亞細亞の游牧民の生活、浪曼的な英雄的傳說、如何なる勢力も撃退する事の出來ない神出鬼沒の不思議なる黒い夢魔、暗澹たる雲が常に低く垂れ、氷のやうな風が吹き洒らし、何處からともなく牧神(メン)の吹く笛のやうな寂しい歌が遠く聞こえ、ケンタウルのやうに男は駿馬に乘つて巧みに曠野を駈けあらし春にはアムールを渡つて移住する羚羊の群を狩り、秋には鷹を射る。如何に醉ふやうな感興を以て自分は又チムールの話を聽き、張騫の遠征や、玄弉三僧の旅行を聽き、中央亞細亞の風景や、サマルカンドの都や、建築や、隊商の幻を描き、天山や葱嶺の寂寞を想ひ見た事であらう。自分は家に歸つて水彩の想像畫を畫き、作曲さへした。

樺太にはさう云ふ英雄的民族の後裔が住み、成吉斯汗の末裔がゐる。カラフトはカラヒト(唐人)の訛りであり、往古は其處を經て唐の商人がいろ〳〵の綾錦(あやにしき)や、金銀財寶を日本に商ひに來たものだとも云はれてゐる。又太古には其處は島ではなく、黒龍口(サガレンウラ)の洲の續きであつたので、從つて其處の地質は全部北部亞細亞大陸と同系である。黒龍口では昔韃靼の王が敗走した時、鮭の背中の上を歩つて向ふ岸に渡り、難を逃れたと云ふ傳說がある程魚が無限に捕れる。樺太も同じである。其處には魚の皮を剝いで衣としてゐる魚皮韃子(ユピダーナ)も住むでゐる。又今度日本領に屬する事

となつた海豹島には夏、幾千匹の海豹の群がカナダの方から太平洋を横切つて遙々子を產みに來る。其處には又ツンドラと云ふ幾ら深く掘つても苔で出來てゐる珍らしい地帶があり、その苔を食つて生きてゐる馴鹿が其處に棲んでゐる。

之等の話を自分は多く聞き、益々行つて見度くなつた。

一行は八月の十日迄に小樽に集合する事になつてゐたので、自分は仲のいゝ同窓の數人と共に松島を見物し、北海道の彼方此方を少し計り見て廻つて小樽に來、八月の十二日に、三四十人から成る修學旅行團として二百五十噸許りの小船に便乘し、天鹽の沿岸を北にのぼつた。

自分は其時の旅行記を玆に一々詳しくは書かない。美しい利尻島や、禮文島を左に見て二日目に樺太のポロアントマリと云ふ港に着き、其處に一泊した。著しく變つてゐる風土は自分等の期待に背かなかつた。ロシア人の馬車に乘つて、新開地らしいホツタテ小屋の並んだ町を通り、或る料理屋で鱒のフライを食つた事を覺へてゐる。トヾ松の生ひ茂つた山の上に戰爭當時の大砲が破壞された儘に轉がつて居り、丸木作りの營舍には戶のない窓に涼しい風が吹きさらしになつてゐた。淡い蒼空の下に屋根の破れた家の庭には雜草が生ひ茂り、黃色い反魂草が咲き、蟲が啼いてゐた。處々に寂然とした高い教會が聳え、町には白粉を濃く塗つたヘンな女が通つてゐた。

「何です。あの女は。」

吾々の或る者が訊いた。

「醜業婦ですよ。日本では新開地にはあれが何よりも先きに來るんです。西洋では新しい土地に誰よりまつ先きに宣敎師が出掛け、敎會が建つのですが、日本では何より先きに酌酒屋が出來、醜業婦が行くんです。でないと移住して來るものがありませんからね。ほら、又馬車に乘つて新しいのが來ました。貴方々の乘つて來た船に乘つて來たんですよ。」

と案內の役人は答へた。

「僕らの乘つてゐた船に？」

「さうです。鯡や鹽と一緒に暗い、臭い室に積まれて、船の中でも——ヘドを吐き乍らも——商賣しつゝ來るんです。きつと越後か、宮城縣あたりからやつて來たんでせう。もう此町にも十人や十五人はゐますよ。だが之から此島の何處の町へでも行つて御覽なさい。移住者が集まらなくてはならない處にはどんなヘンピな山奥だつてあれの居ない處はありやしません。あれさへゐれや何處へでも男はやつて來ます。まつたくあれの行き渡つてゐる事は——「どうしてこんな處に迄」——と人が驚く程ですよ。」

「官廳でそれを公認してゐるんですか。或は秘密に奬勵でもしてゐるんですか。」

「なに、奬勵してゐると云ふ譯でもありませんがね。自然にさうなるんですよ。女の方でもヘンピな土地程いゝ商賣になるわけですからね。いや、實際見共ない話です。しかし止むを得ないと云へば止むを得ないのです。人間は醜業婦を先きに立てゝ、それに引きずられて迄も新しい土地を開拓し度がるものなんですね。それにかう云ふ土地に早く移住して來るものゝ多くは獨り者です。移住者は大抵始めには獨身でかせぎにやつて來て、歸る時には妻子を携へてゐるものです。」

「で、今此處には宣教師は一人もゐないのですか。」

「そんなものがゐなくつたつて人間は困りませんからね。御覽なさい。露西亞人の造つたあの立派な教會は雨の洩り放題です。鳶や、燕の巣になつてゐる許りで。しかし占領された監獄は今度修繕されました。新開地にも之は存在する事の必要なものですからね。——だがあの寺へ案内しませう。元と聖ポール寺院と云はれてゐた寺ですが、分捕物の素敵らしい鐘がありますよ。美事な浮き彫りがしてあります。音のいゝ事は非常です。」

で、吾々は其鐘を見に行つた。そして船に歸つた。

船は其晩ポロアントマリを出發して、樺太の東海岸へ廻つた。眞夜中に船が何とか云ふ岬を廻る時其附近の島で海豹が啼く聲が聞こえたと云ふ事であつたが自分は眠つてゐて知らなかつた。翌朝自分が起きて甲板へ出た時には船は樺太

の東海岸を陸に近く並行して徐ろに北上してゐた。

灰色の重い空は低く垂れて、同じ色の海は眞直ぐな岸邊に長く遠く白い糸を引いてゐた。右には渺茫たるオコツク海が果てしなく擴がり、左には濱邊から直ぐそば立つてゐる苔むしたトド松の森林が同じ高さで幾里ともなく續いてゐる。眠つてゐるやうな霞が幾筋も棚引いてゐるその森林の中には貂や栗鼠が無數に棲むでゐるとの事だ。

凡てがどんよりと重く、眠りに沈んでゐるやうな中でヘンに騷がしい聲が聞こえる。それは濱邊に並んで吾々の船に向つて一齊に吠へてゐる澤山の犬の聲だ。しかしその吠へ方が皆遠吠へなのでその感じは更に此異域の寂寥沈欝の感を深くしてゐる。寂寞を破る聲は更に寂寞を深くする。悲しげな、訴へるやうな、おびへるやうな、その異様な聲の合唱。それが鉛のやうに重い波の音のあいま〳〵に聞こえる。

犬のゐる事は飼主のある事を示す。それらの無數の犬は野犬ではない。皆飼犬である。アイヌの飼犬である。其處にはアイヌの部落がある。其部落の近く迄來た時船のピストンはとまつた。

赤毛布を斷つて縫ひ、上被にした一人の漁師が吾々の船に向つてヘンな舟を漕いで來た。それは日本人であつた。聞くと此處は――第五十何號とか云ふ處であつたが――此附近の中でも殊に漁の多い、漁場で、毎年一人の日本人が此漁場の番人として越年する事になつてゐると云ふ話であつた。妻もなく、子もなく、相坊もなく、唯一人で。アイヌを相手にして一年を暮すのである。船はたまに此沖を通るが、通つても一々此處には寄らない。内地の人の顔を見る事抔は夏の中に一度か二度位である。――「たまらない生活だ。どうして辛棒出來るのだらう。」と自分等は思つた。

吾々は其和船に乘つて上陸した。海岸には鱒や鮭の屍がさらに轉がつてゐる。犬はそれを食ひ飽きて生きてゐる。その屍體には驚く程の蠅がたまつて、ぶん〳〵と吾々に附き纒つた。大きなムク犬は幾匹ともなく見知らぬ吾々の周圍に來て不安氣に遠吠へした。しかし喰いつき相な感じは全でしないので吾々は安心してゐた。そして番人に何か云はれると遠くへ逃げて行つて吠へた。

「どうしてこんなに犬がゐるんだらう。」

「矢張り漁の番になるんです。ぬすとうがありますから。そして冬には雪の上を橇を引くんです。獵犬にもつかひます。――しかし何よりも淋しいからです。私達は人に會へないんです。せめて犬でもゐてくれなくつちやあ。」

いくらか興奮してゐるらしい番人は云つた。

吾々はそれからアイヌの部落を訪ね、間もなく船に歸つた。

「左樣なら。」

「左樣なら。」

吾々は其番人と握手して別れた。

船は又北上をつゞけた。空模樣が少し變つて鼠色の山が西の空にクツキリと見へた。そして右手の沖には時々鯨が鹽を噴くのを吾々は見た。

「夫婦で、屹度二匹づゝ一緒に泳いでゐます。仲のいゝもので、一匹でゐる事はありません。圖體は大きくても一人では矢張り心細いのでせう。」と船員は云つた。

其翌日であつたか、船はある河口の沖で錨をおろした。數十の白い鷗が鼠色の海面の上を綾のやうに忙しく行き交うてゐる樣は、宛ら珍客である吾々の到來におびやかされてゐると云ふよりは喜んで興奮してゐるものゝやうであつた。まつたく鷗丈けは、獨り此陰鬱無氣力な自然の中で潑溂たる元氣のいゝものであつた。

「面白いね。まるでダンスをしてゐるやうだ。」と自分は仲間に云つた。

「いや、實際食ひ物が有り餘つて始終腹が一杯だから腹ごなしにダンスをしてゐるのかも知れないよ。」

こんな事を云ひ乍らぼんやり岡の方を眺めてゐると、矢張り赤毛布の外套を着た漁師が吾々の船に迎えの艀を急いで漕いで來るのが見へた。漁師は歌を唄つてゐる。あゝ、そのふなうた。自分らはその何とも云へぬ哀調を持つ寂しい

ふなうたの調子を忘れる事は出來ない。

「何だつてあんなに唄迄を淋しいへンな節にするんだらう。」

「こんな處にゐると自づと自然に征服されて了つて、知らず〱あんな氣分になつて了ふのだね。反抗的に、快活にするやうな氣力はなくなつて了ふのだらう。——併し之れよりももつと〱遙かに北の寂寞荒涼な土地にも人間は住むのだからね。」

　こんな事を吾々の仲間は云ひ乍ら、その和船に乗り、そしてその珍らしい土地を踏んだ。それはシスカと云ふ有名な大漁場であり、日本領で一番北の大きい町であつた。

　露領當時の舊跡は其處には未だそつくりしてゐた。ロシア人の建てたものを其儘使つてゐる會堂があり、郵便局や、役場や、警察や、旅館や、住宅があつた。町は素より素朴で小さかつたが、小ぎれいで甚だ感じがよかつた。そして其處には大勢の日本人と、——多くは樺太官廳の役人であつた。——數人のロシア人とが住み、ポロナイ（大河と云ふ意味）川と云ふ樺太での一番大きな川を隔てゝ向ふ岸にはギリヤーク人と、オロツコ人と、アイヌとの部落があつた。

　吾々の一行を迎えた此處の役人達の活氣ある顔と、その生き〱した、力のある凡ての調子とは吾々には清涼劑であつた。その元氣のいゝ聲を聞いた丈けでも嬉しいやうな、賴もしいやうな氣もした。會堂の屋根には——其家が一番高いので——日の丸の旗がなびいてゐた。その鮮かな白色と赤色とは不思議に吾々の眼に、爽快な感を與へた。

「午には歡迎會があるんださうだ。どんなものだか一寸面白いね。——しかしまあ歩かう。臭い船に許り乗つてゐたので大いに歩き度くなつた。」

　吾々には荷物は小さい雜嚢一つしかなかつた。で、吾々はその儘直ぐ川ふちへ出、それから漁の市場のやうな處へ行つた。そこでは舟着き場に近い魚藏のやうな建物のわきで、數人の見慣れぬ土人が手と脚とを魚の血にまみらせ乍らうず高く積まれた大魚の數を勘定し、分らない言葉でガヤ〱と聲高く喋舌つてゐた。

「御覧なさい。あれつぱかりの人數の中に五つの人種が集まつてゐます。髮の毛の色はどれも黑ですが、日本人と、毛むしやのアイヌと、それからあの六角形の平べつたい顏をしたギリヤーク人と、背の低い眼の細いオロッコ人。それから此方の土色をした大きな耳輪をつけてゐる長い辮髮が滿洲のトゥングースです。之にロシア人が加はつて六つの人種が一緒に仕事をしてゐる事なぞは珍らしくありません。」一人の役人がかう說明した。

「仕事と云ふと。」

「無論漁業です。冬では馴鹿狩りをする事もありますがね。いや、魚の捕れる事と來たら貴方々は嘘の話と思はれる許りです。後で漁をお目にかけませう。まあ、どの位、容易く、無數に捕れるか、見なくては分りません。丁度金のある處にはうなる程金が餘つてゐるやうなもんでさ。はゝゝ。」

「此川の水はどうしてこんなに黯いのでせう。」

「上流にツンドラがあるからです。上流と云つても此處から一里許り上(かみ)へ行つた處ですが、明日でも舟で行つて御覧なさい。珍らしいものです。ツンドラは世界中に此處と、北獨逸とに二箇所しかないのですが、獨逸の其ホツホモールとか云ふ奴は此處のとは少し質が違ふやうです。其ツンドラの下層の方が褐炭となつてゐるのです。つまりツンドラは限りなく深い苔の層なので、下の方の古い苔が腐つたまゝ固つて褐炭となるのです。此河の水がこんな褐色をしてゐるのはその褐炭が水に溶けるからなんです。そして、うまく出來たものです。魚には此褐炭の水が大變營養にもなり、繁殖を扶け、魚はその水を好くのです。漁船はあの通り澤山停泊してゐますが、夏には此河丈けでも十二分の漁が出來るので餘り他へは出かけません。」

「そんなにいろんな人種が集まつてゐて喧嘩はしませんか。」

「滅多にしません。ギリヤークや、オロッコは平和な溫和しい民族です。溫和しいと云ふよりは衰頽した民族です。まるで活氣も、奮鬪力もないのですね。體もあの通り小さいですし、力も日本人程ありません。僅かの人數の中で血族結

婚をするので、人口はだん／＼減つて行く許りです。千島と、此處とに住んでゐるんですが兩方を併せて今ではもう六七十人しかゐないと云ふ事です。世界中に。人種學の學者達がその保存法を講じてゐますが、何れ遠からず絕滅して了ふのでせう。一寸した流行病でも來れば一度に種子絕えになつて了ふのですから。あの河の向ふの丘の中にポツ／＼小さい天幕のやうなものが見へるでせう。あれがその部落で、棲み家です。歡迎會が濟んだら其處へ御案內しませう。何とも云へぬ哀れな感じがしますよ。」

「アイヌはどうなんです。」

「アイヌは違います。未だ中々滅びはしないでせう。北海道にも、樺太にも、千島にも隨分澤山ゐます。それにアイヌは中々利口です。利にさとくて拔け目がなく、支配者に調子を合はせる事が上手です。エゴイストで、金好きで、强慾で、精力的です。つまり野蠻人としては比較的生存競爭に適してゐるのですね。だから人の好いギリヤークや、オロツコから嫌はれてゐます。此處でも時々アイヌと他の土人との血腥い爭があります。アイヌが他の土人を馬鹿にして狡るい橫着をやるもんですから。まるでアイヌと云ふと眼のかたきです。──だが皆日本人には服從してゐます。何しろ今迄一番長れて從つてゐたロシアを負かしたと云ふ譯でね。ハハ。併し吾々は生蕃を虐めるやうに彼等を扱ひはしません。カナリ可愛がつてやつてゐるつもりです。それで吾々日本人が──土人達は吾々の事を「シヤモ」「シヤモ」と呼んでゐますが、「シヤモ」とはシュメレンクングル「隣りの人」と云ふアイヌ語から來てゐる言葉ださうです。──そのシヤモが彼等の間に立つて治めてゐるので、土人同士の間にさうひどい喧嘩がなくて濟むのです。──ですか、さあ、そろ／＼御案內しませう。彼處です。萬國旗が白樺の間に見へるでせう。どんな歡迎會か、どんな人が貴方々をとりもつか、それはまあ、お樂しみとしておきませう。」

吾々は歡迎會へ行つた。歡迎會の綠門が出來ており、萬國旗をつけた綱が中央の柱から周圍の白樺の枝に八方に引いてあつた。曲りくねつた背の低い白樺の林の中には十字架の墓が彼方此方に立つて、赤い蔦のからまつてゐるその朽ち

木にはロシア字で書かれた名前らしいものがかすかに讀まれた。

吾々は驚いた。其處には十人許りの女が吾々を饗應する爲めに傭はれてゐた。それは勿論藝者――醜業婦であつた。自分は少しガツカリした。いやな事をすると思つた。そんな處へ呼ばれた事を氣持ち惡く思つた。併し仕方ないので其立食の卓でサイダーを飮み、菓子を食べた。

しかし歡迎者を代表して演說を始めた役人の眞劍な顏を見ると又ヘンな氣持ちになつた。

「世界は產物にあり餘つてゐるのです。自然は生產物に過剩と云つていゝ程豐富です。樺太は野朵のやうな植物には適しないが、併し殖林はいくらも出來るし、石炭も澤山ある。そして魚產の點に於ては驚く許り無盡藏であります。吾々は此無盡藏な寶を多くの人々に供給して活かす事が出來ないので苦しむでゐます。此樺太丈けで捕れる一ケ年の魚肉丈けでも、充分な漁業と、完全な分配とが行はれゝば、數百萬以上の人間を裕に一年間食はせる事が出來るのです。否、それ以上に出來るかも知れない。吾々は漁業と云ふ程未だそれをやつてゐないし、又やる事が出來ないのです。たとへもつと完備した漁法と、資力とによつて今の十倍の漁をする事が出來たにせよ、未だ魚は年々繁殖して行く事を止めはしないでせう。無論人間は鱒ばかり食べ續けてはゐられません。それは實際にさなだ虫がわくからのみでなく、又さう云ふ氣持ちがするのです。正直な話、私共は此方へ來て餘り鱒許り食べてゐたので、今ではもうそれを見た丈けでも吐きつぽくなる位です。しかしから云ふ寶の持ち腐れは獨り、樺太や、其他の北海の漁業のみの事ではなく、他のいろいろの方面に於ても同じ不都合があるのです。之は一例です。自然の生產力が如何に驚くべく旺盛無限で、人間が未だそれを活用しきれずに持て餘し、腐らせてゐるかの一例です。然るに人間の需用は斯くの如く多く、自然の供給物は斯くの如く豐富であるのに拘はらず、多くの人間は餓えてゐる有樣であります。――」

こんな風に役員は興奮し憤慨した調子で產業上の事實と、其組織に對する感想を述べてゐた。

歡迎者の方と、吾々一行中の博士のそれとを交へて四つ五つの退屈な演說が終つた時、餘興としてギリヤークとオロ

ツコの一團が酋長を先導に、盛裝して其處へ現はれた。卅人許りのその群れの中には小さい子供があり、十七八の娘があり、少年が居り、老人がゐた。

娘は男と同じく辮髮を垂れ、更紗の風呂敷のやうな布で頭をつゝみ、赤い襟をつけ、革のズボンを穿き、眞鍮の大きい耳輪をぶら下げてゐた。中には魚の皮や馴鹿の革でこしらへた長靴を穿いてゐるものもあつたが、多くは跣足であつた。酋長丈けは大きかつたが、概して皆小柄で、女は溫和しかつた。顏は一樣に平たくて、小さい活氣のない眼が鉛筆で眞直に筋を引いたやうに細く開いてゐた。男達は酒を飲まされて喜び、他愛なく醉ひ、はしやぎ、片言交りの日本語をつかつて喜びをふりまき、女に接吻し、淋しい歌を唄い乍らダンスを始めた。女達はそれを見て笑つた。すると一人の男はその妻？に飛びかゝつて地にねじ倒し、其上に自分もころげ重つて一同の前で馬鹿な眞似をして見せ、女を引きずり起して其頰に接吻し、そして笑ひくずれてゐた。そして娘も、老人も、子供も、此馬鹿巫山戲を見て羞かし氣もなくワツワと笑ひこけてゐた。

一人の役人が彼等に何とか云つた。すると酋長は機嫌よくうなづいたかと思ふといきなり自分達の處に來て握手をし、そして――吾々が弱つた事には――吾々の首を抱きかゝへて一人々々その口に接吻した。自分も此有難迷惑を逃れる事は出來なかつた。そして彼等は笑ひ、何とか喋舌り、白樺の林を拔け、川岸に出で、三艘の丸木船に乘つて向ふ岸の部落の方へ歸つて行つた。

自分等は全くヘンな氣持ちになつた。素より彼等のするどんな馬鹿氣た眞似も笑ふ事は出來なかつた。彼等が他愛なく笑ひ、はしやいでゐるその感じは吾々にとつて決して快活な明るい印象ではなかつた。それはむしろ「笑つてゐる氣違ひ」を見る感じに似てゐた。そして何となく殘酷なものを見たやうな或る不快が後に殘つた。

しかし此等の土人に對する感じはそれから吾々が案內されて丸木舟に乘り、ボロナイ川を渡つてその部落を見た時一層はつきりした強いものになつた。

彼等の棲家は吾々が第五十何號で見たアイヌのそれに比べて又數等劣つた、驚く程ひどいものであつた。アイヌは小さい乍ら棒木を組んでしつかりした家を作り、葺ぶきの屋根を作り、板の間の高い床の上にむしろを敷いて住んでゐた。それは梯子で上るやうに出來て居り、最も貧窮な日本人の棲み家よりも健康的でもあり、いろ〳〵の點で優つてゐた。しかしギリヤークや、オロッコ（此二つの人種は今では互に混合してゐて言語も混同し、一見した處では區別がつかなかつた。）は皮のついた儘の三四本の松材を頂で結び合はせ、方尖塔のやうな形にその根を四方に埋め、木の皮や、茣蓙や、獸の皮でそれをつゝみ、その中の土間にむしろを敷いて住んでゐた。（英語にテピー Tepee と云ふ字があるが、かう云ふ小屋の形は最も原始的なもので容易に造れるので野蠻な土人はよくかう云ふ形をとるらしい。）かう云ふ小屋はマラリヤの發生し相な河原の砂地の上に、叢の間に幾つともなく並んでゐた。頭をこゞめて或る入口の中を自分はのぞいて見た。それでも中は二坪位はあつたであらうか。自分の眼には光線の加減で其中にあるものが直ぐには分らなかつたがやがて大きな鍋が中央につるしてあるのが分り、その鍋の向ふに一人の老婆が自分の方を正面を向いて座つてゐるのが分つた。何事も云はず、何等の表情もなく、かう云ふ見世物になるのには慣れてゐると云ふ風に、その小さい老婆はじいつと自分の方を見乍ら、微動きもせず無言でゐた。數匹の蠅が彼女の顔にとまつたが、彼女はそれを拂はうともしなかつた。自分は眼を轉じた。そして壁？に筒のやうな、嚢のやうなものが吊してあるのを見た。と、自分の眼は何か圓い子供の頭のやうなものがその口から一寸現はれてゐるのを認めた。そして自分には分つた。それは眞個く赤ん坊であつた。赤ん坊はさうして筒のやうなものゝ中にさし込まれて水筒か何ぞのやうに吊しておかれ乍ら（溫和しく眠つてゐるのであらうか）じつとして聲一つ立てない。此老婆と、赤子との感じは實に異様であつた。自分は驚いた。

中央の鍋の中には何か魚のやうなものがグツ〳〵煮えてゐた。それに蓋はしてない。その小屋の中をのぞくが否やプンと油くさい、異様な惡臭がしたのは差し當りその煮物の臭ひであつた事が自分に分つた。自分は猶ほ彼方此方の小屋の中をのぞいたがどの小屋の中にも中央にさう云ふ吊した鍋があり、その中に煮てあるものは重もには鱒や鮭であるが

それは腸もぬかずに頭から尾迄まるごと新たに加へられる許りで、決して鍋を洗ふと云ふ事はない。中實が減ればその上から足して行く。しかし底の方には幾年、或はもつと長い間の古いカスが沈澱したまゝになつてゐるのである。新しく煮る爲めに嘗て鍋をそつくり洗つて替へると云ふ事はない。――自分等はさう說明された。――魚の皮や、頭や、ヒレがドス黒く油ぎつた、濁り汁の中に浮んだり、沈んだりしてゐる樣は內地の犬でも一寸胸が惡くなり相に見へる。そしてその臭ひ。

丁度頭の辮髮を何年に一度位しか解く事がないやうに、鍋を一々洗つたり、中實を新しくかへたりする面倒な事は彼等には思ひもよらぬ事なのであらう。アフリカのある土人の間では老人や病人を養ふ事が生計上困難なので、全く働く事の出來なくなつた老人は森の中へ連れて行つて當分の食物を與へ、その先きの生死は神に任せて祈つて捨てゝ來る習慣がある事を自分は讀んだ事があるが、かの老婆のやうな人間ならさうして捨てられても、それを拒んだり、又捨てられた土地を動きさうにも思はれない。かゝる衰亡民族の癖として、何でもあるが儘、なるが儘、されるが儘になつてゐて自分の方から何一つそれに對して仕かけやうとはしないのだ。全で生きてゐるのか、死んでゐるのか分らない。生きながらのミイラか、土偶のやうである。只、一つの小屋毎にその入口の前に必ず一匹或は二三匹の大きなムク犬が兩手をついてヌツと番をしてゐる。併し側へ行つても別に嚙みつきはしない。全で嚙みつくなんて事は知らない樣に。只何處ともなく空の方を仰いで心配相に何か不服らしく遠吠へをする。彼方でも、此方でも。鬱陶しい沈んだ沈默と、寂寞を破るものは間斷ない蠅の羽音と、グツ々々云ふ煮物の音と、それから時偶聞こえる鈍い犬の遠吠へのみである。生れ來るものは皆かゝる「生きてゐるのか、死んでゐるのか分らない」全く無活動な、懶い、沈頽した空氣の中に育つのだ。未來に對する希望や、繁榮に對する欲望なぞは先祖の時代に投げ捨てゝ了つたか、或は先祖の時代に民族の全精力を出しきつて了つたかのやうに見へる。たとへ目前の滅亡を告げられても、彼等は別に驚き、慌てたりし相にも思へない。今日さへ無事に日向ぼつこをして過す事が出來れば――他の事はどうせ仕方がないのだと諦めてゐるやうに見へる。

彼等を見、それから日本人を見ると、その對比が何とも云へぬ變な感じになる。日本人が――別に悪い事をしなくとも――いやに悪辣に見へ、殘酷に見え、小マシヤクレて、思ひ上つて、傲慢に見へて來る。一寸小面憎いほど生き〲してゐる。悪い精力と活氣ばかり持つてゐるものゝやうに一寸見へる。しかし如何にも自然や、競爭に對して戰鬪力があり、現世の生存には適して居り、いろ〲の悪戰に勝つて進歩發達して行くあくどさと力とを持つてゐるものゝやうに見へる。その露骨な感じは餘りよくない。少しも本當の優越者らしい感じではない。――だが思へば現世に生れた以上はさう云ふ現世的な民族の間に生れたと云ふ事は幸である。こんな異域の茅屋の中に生れて、滅亡の空氣を吸ひ乍ら壁に吊るされて育つては堪らない。こんな運命の中に生れたらよく〲の素質の者でさへもその運命を抜け出られやうとは思へない。又そんな素質の者が生れる筈もない。不愉快や悪の刺戟は多くとも、矢張り人間の自然性から云つて、日本に生れた事は幸である。不思議な幸運である。――吾々はさう思つた。

それでも一年中で一番時候のいゝ今八月、娘達は表へ出て川ふちの草の上に兩足を伸ばし、暖かい日を浴びながら何か縫物をしてゐる。そして川の中で網を張つてゐる若者に揶揄はれてにこ〲してゐる。戀人同士かも知れない。彼等の間にも戀愛があり、戀人があり、結婚の祝ひや、失戀の身投げがあり、冒險的な密會や、美しい詩や、ローマンスがあるのであらう。否、無論あるのだ。若者は女にふざけながらも雜作なく幾匹もの鱒を捕り、砂の上に投げ出された鱒が飛び跳ねて、水の中に入つても眼にも呉れない。

一人の鐵砲をかついでゐる大きい體格の韃靼人が犬を連れて其處へ通りかゝり、若者に何とか聲をかけ、それから娘の辮髮を一寸つまんで引つ張り、顏を見合はせて笑ひ乍ら其處へ並んで腰を卸し、煙草を吹かした。彼はわりにシヤレた上等なゝりをし、若者や、娘は其男に丁寧な愛想を示し、下た手に出てゐた。それは少し離れた村に住んでゐるギリヤークの酋長であつた。

「オイ、酋長。お客さんだ、一つ何か打つて見せないか。」

役人にかう云はれると、日本語の少し分るその韃靼人は黒い唇の間から黄色い歯を見せて笑ひ、頭を振つて、何にも打つものはないと答へた。

「魚でもいゝさ。あの水溜りに行かう。」

さうして吾々は又白楊と、樅の生ひ茂つた處へ行つた。其處には美しい深い水溜りがあつた。

「一寸のぞいて御覧なさい。大きな奴がウヨ〳〵してゐるでせう。こんな處にも此通り魚がわくんです。」

役人にかう云はれて吾々はそのキレイな清水の溜りをのぞいた。底の方に二尺位の鱒が驚く程澤山ゐるのが見へた。

「やつて見ろ。」

韃靼人はうなづいて銃の口をその水の中に向け、出鱈目に火蓋を切つた。と、忽ち――噓ではない。――數匹の銀光りをしてゐる生々しい死骸が浮び上つた。

鐵砲の音に驚いて川岸に倒れてゐる白楊の大木の上に行儀よく列をなして並んでゐた鷗はキ、キ、と啼いて飛び散つた。韃靼人は笑ひ乍ら會釋をし、口笛を吹いて犬を呼び、そして林の奥の方へ行つて了つた。

「此邊には熊はゐないのですか。」

「此邊にはゐません。もう少し奥に行くといくらもゐます。鱒のゐる水溜りのわきにはきつと熊の足跡があります。樺太には熊は澤山ゐるんですが北海道の熊よりは温和しいです。」

併し寒くなつたので吾々は又舟で河を渡り、バラックのやうな家に歸つた。

「明日はツンドラへ御案内しませう。馴鹿が見られるといいのですが、夏分には多く引つ込んでゐますから事によると見られないかも知れません。馴鹿の群が原を走つてゐる様は壯觀ですよ。――あゝ、それから壯觀と云へば海豹島です。是非行つて御覧なさい。無論貴方々は行く筈になつてゐるんでせう。」

「えゝ、明日の夕方此處を立つて其方へ廻る筈です。」

「百聞一見に如かずです。――あゝ、それから今夜外へ出て御覧なさい。少し寒いですが、今夜は丁度空が晴れてゐます。此處で見る北斗七星は大きくて立派ですよ。――では何れ又明日。」

吾々は夕飯を濟ませると、直ぐ外套を着て又表へ出た。

川の向ふから相變らず犬の遠吠へは聞こえたが、四邊は森閑として、川はゆるやかに音もなく流れ、白い舷側と艫とに緑色の唐草模様を施してある幾艘の漁船は帆をおろして、薄い靄の中に赭い灯りを燈してゐた。落葉松や白樺を周圍にめぐらしてゐるロシア人や、日本人の家々の窓にも灯りが點いたが、外は未だ暗くはなかつた。川の面をつたつて冷いやりとした微風が鈍く搖いでゐた。

土手の上を二個の人影が歩いてゐた。自分達はそれとすれ違つた。そしてそれが背の高いロシア人の男と、こつてりと白粉を塗つた日本の醜業婦とであるのに氣がついた。二人は腕を組み、自分達の方を見てニツと笑い、平氣な顔をしてゆつくり通り過ぎて行つた。無論先刻の歡迎會に傭はれてゐた女の一人であらう。何たる異様な運命の人々であらうと自分は思つた。

樺太はよくロシアの囚人の流される土地である。あのロシア人も或はさう云ふ種類の男かも知ない。さうでないにしろ、何れ一通りの運命の男ではあるまい。そしてあの女も。二人は仲よく樂しさうに腕を組んで歩いてゐる。確かに今の瞬間には或る幸福に浸つてゐるのであらう。だが――何と云ふ淋しい感じであらう。

自分等は土手の上に腰を卸し、三日月と、星との薄明りで仄白い帶のやうに見へる靜かな川面を眺めてゐた。と、突然、自分等の耳に何かガヤ〳〵云ふ人聲が聞こえた。遠くに、川べりに、黒い一團の人影が見へた。その影は亂れてゐた。聞いてゐるとその聲々の調子も亦不穩に荒々しく響いた。「何かあるのだらう。」かう思つて物見高い吾々は其方へ近づいて行つた。

すつきりした新月の下に數個の黒い人影は躍るやうに入り亂れてゐた。聲は益々物狂ほしく、高く響いて四邊の寂寞

を破つてゐた。それは土人の群であつた。「喧嘩だな。」と吾々は思つた。

吾々がもう一歩近よつた時吾々は其混亂してゐる群の間に白刄がきらめくのを見た。

驚いた吾々の中の氣の早い一人はいきなり其中へ飛び込んで「シャモだぞ！」と叫んだ。其滑稽な一聲は吾々には可笑しかつたが、其群れに對しては驚くべき効果を持つてゐた。騷擾は一時止まつた。

「何をするんだ。馬鹿！」

意外な效果に調子に乘つた其男は更に本氣でかう呶鳴つた「亂暴すると聞かないぞ！」

一人の鬚むじやのアイヌが地びたから起き上つた。そのアイヌをギリヤークとオロツコとが組んで虐めやうとしてゐるのであつた。しかしそのアイヌには一人の韃靼人の從僕があつた。その從僕が彼等に抵抗したのでギリヤークは遂に白刄を拔いたのであつた。興奮してゐる土人達は何か喧ましくさゞめき乍ら吾々に訴へた。その云ふ處はよくは分らなかつたが、此アイヌが惡い者で彼等の品物を盜んだと云ふのである事は分つた。何でもその盜んだものと云ふのは椀か何かさう云ふ詰らないものであつたが、それは一度の事ではなかつたらしい。吾々はアイヌが狡猾である事と、ギリヤークやオロツコが無知ではあるが、人が好く、正直である事を知つてゐたので、此場合アイヌの方が惡かつたのだと定めるよりなかつた。しかし吾々は騷がしい土人達を一時鎭まらせたが、一番ひどく興奮してゐるアイヌの從僕を默らせる事は出來なかつた。その韃靼人は氣違ひのやうになつて何かを喋舌つてゐるかと思ふと、吾々の前に一々跪いて足に接吻し、手にすがりつき、幾度となく地に頭をこすりつけた。そして吾々が呆氣に取られて爲す事を知らずにゐる暇にその助かつたアイヌは素速く其處を拔け出し、一目散に走つて川岸に出で、丸木舟に飛び乘り、夢中で漕ぎ始め、そして間もなくその姿は暗と、靄の中に消えて行つた。

それは實に奇怪な一場の光景であつた。

吾々は其處を去つて引き返へしたが、かの從僕は何處迄もついて來て吾々の手に接吻し地に頭をつけ、夢中になつて何

かをくどく呟きつゞけてゐた。

「もういゝ。お歸り。」

遂々吾々の中の一人がかう云つた。それで彼は立ち止まり、懷かし氣に吾々を見送り、何遍も祈るやうに頭を下げ、何かを呟き、そして何處かへ行つて了つた。

彼が去ると同時に四邊は再びひつそりとし、又犬の遠吠へが聞こえた。

かの一組——ロシア人と醜業婦との二人——はその時又吾々と行きちがつた。自分達の幸福と、自分達の不幸以外には何事にも全く無關心な態度をとつてゐるやうに見へる彼等二人はさうして何かをひそ〳〵と語り合ひ乍ら、而も互の間に何の深い結合もなく直ぐ別れて了ふ淋しい他人同士のやうに、腕を組み、長い川添ひの土手の上を幾度となく徐ろに往きつ戻りつしてゐた。

「ロシア人の處に行つて見やうか。」

「行つて見やう。未だ起きてゐるかしら。」

吾々は一度床に就いたのであつたが又こんな話から起き上つて外套を着て寒い外へ出、近くの店で四五本のビールを買ひ、それを土產にしてある灯りのついてゐるロシア人の家を訪ね、其處でビールを飲んで騷ぎ、戰爭の話か何かをし、馴鹿の革にアイヌの模樣をつけた敷物を貰ひ、大きい北斗七星を見乍ら主人も傭人もない假りの旅舍に歸つて眠りに就いたのは十二時過ぎであつた。

翌朝は氷のやうに冷たい鐵分を含んだ水で顏を洗ひ、食後は吾々の一行全體と案內者とで川を溯り、ツンドラに行つた。

案內者はアイヌの劍を拔き一本の小さい松を切り、その切り口を吾々に見せて云つた。

「御覧なさい。此年輪のこんでゐる工合を御覧なさい。こんなに小さい木でも、二三百年はたつてゐるのです。堅い事は鐵のやうです。しかしこんなにかじかんでゐて之以上一寸も育つ事は出來ないのです。後何百年たつても此木は枯れる迄之より大きくはなれないのです。のべつ只滅亡に對して抵抗ばかりしてゐるのでかじかんで了ふのですね。しかしこんなに苔がついてゐて枝ぶりも面白い。內地へ持つて行きや立派な盆栽ですよ。」

其處には珍らしい小さなつゝじが咲いてゐた。吾々はいろ〳〵の花苔や、つゝじや、その松の枝を持つて歸つた。馴鹿は見られなかつた。

其晩吾々はシスカを立ち、翌朝海豹島を見て、忘れ難い印象を受け、それから又濃霧の海を航して樺太東岸のサカへ濱と云ふ處に上陸し、三里程歩いてそつくり露領當時の儘でゐるガルキノウラスコエと云ふ村落に一泊した。屋根の拔けた大きい寺院や居酒屋の廢墟があり、水楊の大木が靑々とした新芽をふき、煉瓦造りの監獄の跡があり、周圍の野には珍らしい野花が咲き亂れ、杜にはほとゝぎすが啼き、夜には時々町の中へも熊が出沒すると云ふさびれたいゝ村であつた。その翌日は更に坦々たる野道や、羊齒の生ひ茂つたトド松の森林を横切つて十一里の道々方々の村で韃靼人の店に憩ひ、面白いものを見、買つた菓子を食ひ乍ら歩いた。一日中歩いたが一人の通行人にも逢はなかつた。夕方ウラヂミロフカと云ふ島廳のある稍々立派な町に泊り、次の日にはそこから輕便鐵道で森を拔け、山を登り降り、鈴谷川と云ふ既に日本名のついた川に沿ふて再びポロアントマリに出で、翌日そこから又船で今度は樺太の西海岸に出で、大きな岩の上に一杯に寢轉び、頭を擡げて、遠くを眺め、ガア〳〵と啼き、人を見ると驚き怖れてドボン〳〵と海中に飛び込む七八尺の海馬が群をなしてゐる無氣味な海馬島を見、マウカと云ふ町に來り、翌日は戯れ乍ら吾々の船を追ひ越して行く海豚の一群と共に其處を出て三度びポロアントマリに引き返へし、その翌晩小樽へ歸つた。吾々の豫定ではもつと遠くの露領迄も行つて見る筈であつたが、吾々はもう家に歸り度くなつた。

此等の旅行の間には猶ほ數多の面白い印象や、珍らしい想ひ出があるが自分は今それらを悉々茲に書かうとは思はな

い。海豹島の印象なぞは殊に忘れ難い珍奇なものではあつたが。

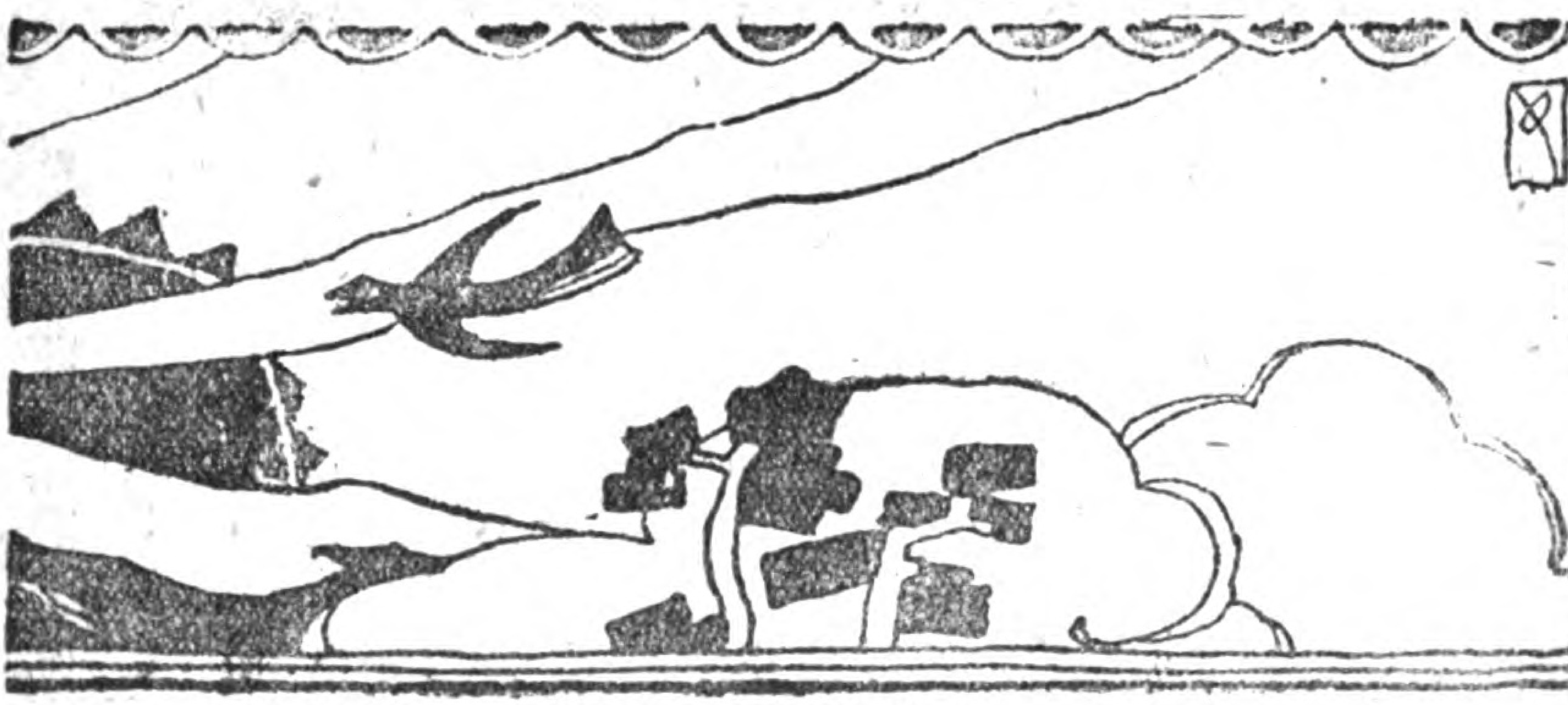
が、今から十四五年も前の事になる此旅行中でシスカでの印象は何う云ふものか特別に自分の腦裡にあり〳〵と殘つてゐる不思議な印象である。自分は當時未だ餘りに幼稚で、思想や感情等の教養が乏し過ぎた爲め、あゝ云ふ對象にぶつかり乍ら深く突きつめて種々觀察したり、考究したりしてその見聞を活かす事が出來なかつた事を殘念に思ふ。今想ふと、寶を只捨てゝ來たやうな勿體ない感がある。自分は彼等の外面の生活も、内面の生活も見る事は出來なかつた。只感じが殘つてゐる。そして今でも其處の事、かの部落の有様や、かの一日一夜の事を想ふと變な氣がする。一種の淋しい愛を感じる。あの喧嘩をしてゐた土人達、脱獄囚のやうに逃げて行つたアイヌとその從僕、ロシア人と醜業婦、グツ〳〵魚を煑た鍋の向ふに默つて永久に座つてゐるやうに見へた老婆と、吊るされてゐた温和しい赤子。川端の土手の上で日向ぼつこをし若者に揶揄はれて笑つてゐたギリヤークの娘、犬の遠吠へ。北斗星。

生存競爭の網目からふるい落された民族。亡びゆく民族。吾々社會の個人に自然な主從があるやうに、人種の間の自然な差別に依つて優秀な民族の從僕となるやうに作られた民族。先祖は剛毅であり、英邁であり、不屈不撓の健げな民族であつたのであらう。――だが現在は。何と云ふ不遇な生れ方であらう。そして自然は老人の病氣の恢復にかまふよりは新しい子を産むで行く事に忙がしい。人類は昔のものゝ修繕や、手當てや、保存によりは新しいものを創建して行く事に忙がしい。又それが性質である。或る一民族の衰亡は現在の人類の問題とはなり得ない。事實彼等を見る感じは誰の眼にも「哀れではあるが、どうも之では仕方がない。」と云ふ感じである。さう云ふ憐愍は一時パッと起つても又さめ易い。無駄な殘酷に精力を費すのは自然も人類も共に望まない處ではあるが、亡國民をその滅亡から防いでやる事の出來る所謂文明國は自分等の社會の中の野蠻や、滅亡的傾向を除き、進歩發達して己が民族の不滅を證する事業を爲す事に忙がしい。人間は人が云ふ程無意味に殘酷ではなく、哀れな者に同情する性情を持つて居り、自然の無情さ（自然は決して殘酷ではないが無感情である。）に段々不滿足になり、それを征服して行く者になり度がつてはゐるが、何し

ろ未だ餘裕がない。物狂はしく走つてゐる局から降りて捨て子を拾つてゐる暇がない。それで只人種學なぞと云ふ人間の追究的性向の一現象である學問を講ずる者が學問上の方の要求から衰亡民族の保存を不熱心に計つたりする位のものである。人種改良學なぞと云ふものが出來てもそれは衰亡民族を問題にして生れて來たものではあるまい。又それが當然である。自分で善くなり、進まうと云ふ氣力のない者は他からどうする事も出來はしない。そして自然は「そんなものは構はなくともよい」と云つてゐるやうだ。結局彼等は亡びるよりないであらう。此世に現在全く種子絶えになつてゐるどの位多種の動物や、植物があつた事か知れない如く、か丶る民族も畢竟その類ひとして、何れ人種史學の上にその名を留める許りになつて了ふのであらう。

無情な寂しい感じではあるが全體としての新陳代謝で進化が行はれ、發達があるならば、人類はそれでい丶とされてゐるらしい。それ以上の事は未だ中々人類の力には餘つてゐる。仕方がない。

樺太は今は隨分變つたであらう。地名もその當時とはそつくり變つて日本の名がつけられた。一寸自分は又樺太へ行く事があらうとは思へない。自分はよく友に此旅行談を話した。そして書いて見る事をす丶められた。其旅行後自分はスケッチや寫眞を挿入して旅行記を書いたがそれは紛失して了つた。話に纏まりがないので自分は今更それを書く氣はなかつた。が、今ふつと或る氣持ちから記念の紀行文として之を書いて見る氣になつた。（二〇、二、二八）



盜　人

藤森成吉

1。

私が始めてシヤウヤンに會つたのは、丁度私がその海岸に建てられた叔母の別荘へ初めて行つた翌日の朝、叔母に連れられて、家の背後の小高い山を切り開いて作られた叔母の畠を、一緒に觀歩いてゐた時だつた。

その、いろ〳〵な夏の野菜物のベッタリ繁つた片隅で、何か又新しい種物を蒔く爲めに、晋吉と云ふ漁師がセッセと肥料を掛けてゐた、――その漁師は、マダ叔父の生きてゐた時分にヒドク叔父に可愛がられて、もう十何年と云ふ間、ズット叔母の家へ出入りして何でも用事を足してゐる男だつた、私がその前の日、その邊鄙な海岸から半里の上も離れてゐる小さな東北の停車場へ着いた時、叔母の吩附で彼がワザ〳〵そこ迄迎へに出て呉れてゐて、それから荷物を擔いで私の先きへ立つて叔母の家まで案内してくれた爲めに、彼と私とは既にスツカリ馴染になつてゐた。

「お早う御座んす。」

肥料で黒金色に汚れた肥柄杓をウネへ突き立てゝ、私達の姿を見かけると、晋吉は叮嚀に私達の方を向いて挨拶をした。

「昨日はどうも有り難う。」

私はその身體の小さな男へ向つてお禮を云つた。

「お早う、……シヤウヤンも居たのかえ。」

その時、それまでそのウネの片端に突つ立つて、海岸の朝の明るい眩ゆい程の夏の日光を浴びながら、ボンヤリとしたやうに腕組みをして音吉の働きぶりを眺めてゐたモウ一人の若者、——背はヤツパリ音吉と同じ位に低いが、顔もその絣の着物の外から出てゐる手も足も日に焦けて全く赤銅色に真黒な、如何にもガツシリと頑丈な身體つきをした男へ、叔母はそう云つて言葉を掛けた。

「ハア、お早う御座んす。」

ややブツキラボウと思へるやうな聲の調子で、するとそのシヤウヤンと呼ばれた男は、その時初めて腕組みを解いて叔母に答へた。

「これはね、ほんとうは聖藏つて云ふ名前だけれど、こゝの言葉で訛つて、みんなシヤウヤン、シヤウヤンて云つてゐるんですよ、じき此の向ふに住んでゐて、やつぱし音吉と同じやうに、ヨクうちへ來てくれる漁師ですよ。」

そう云つてそのシヤウヤンを私に紹介しながら、更に叔母は、シヤウヤンへ對して私を引き合はせやうとした。

「これは、お前も知つてゐるだらう、東京のちか子の旦那様でね……。」

「ハア、昨日あの音やんから聞きました。」

叔母のまだ云ひかけてゐる時に、モウすつかりその事は知つてゐると云つたやうに彼はその言葉を遮つた。

「そうかい、——それぢやあ又遊びに來て、何か面白い話でも聞かせてあげておくれよ。」

「ハア、……面白い話なんかあ何にも無え。」

「お前達に面白く無くても、東京から來たお客様にやあ何でも面白いんだよ。……海がこんなだから、漁にやあ此の頃

ヤツパりちつとも出てゐないんだらう。」

「出てゐ無え。」

「それぢやあ、うちでタダ毎日ぶら〳〵寢ころんで、お酒ばかり飲んでゞもゐるのかい。」

「ハハア、——そんな事は無え、漁にやあ出られず、酒あ飲むぢやあ、身代はマル潰れだ。」

「そりやあそうだねえ、ウマイ儲けでも有ると、おいしいお酒の又一升も飲めるつて云ふ寸法だらう。」

「シヤウヤンは、御隱居様、此の頃毎晩町へ盆踊りにばかり出掛けてゐます。」

そこへ、柄杓で又肥料を一汲み汲み出しかけたまゝ、向ふの方から音吉が叔母へ向つて云ひ掛けた。

「ああ、そうだつてね、ゆうべもキヨ(女中の名)が用があつて町まで行つたら、丁度踊りが途中の途の眞中で始まつてゐたんだつて。それで立ち留まつて、その踊りの環の中を覗いて見たら、シヤウヤンが頰被りをしてその中へ入つて一生懸命鐘を叩いて廻つてゐたつて、そう云つてゆうべ歸つて來て話をしてゐたよ」

「ウレー!。」と、突然に、如何にもたまげたやうな飄輕な叫び聲をシヤウヤンは發した。

「うまい事を云ふわい。」

「何がうまい事なもんか、月の光で見たら、確かにシヤウヤンにちがひなかつたたつてキヨが云つてゐたよ。」

「盆踊りなんて、どんな風にして踊るもんか、おらあ第一そんな踊り方を知ん無え。」

「シラバツクレたつて駄目だよ。」叔母はきめつけるやうな調子で云ひ出した。

「何てつたたつて、チヤアント證人が有る人だからね、‥‥ナア音。」

「エエ、‥‥どうして、シヤウヤンは仲々隅に置け無え藝人ですよ。」

香氣そうに、肥料をザアーツとそこらへこぼしながら、音吉は叔母の云ふ通りに應じた。

「ウレー——こいつあタマゲた、音やん迄そんな事を云ふなんて‥‥。」

「いゝぢやあ無いかよ、何もそんなに隠さなくつたつて、藝人なら藝人で結構ぢやあ無いか。」叔母はさう云ひながら私の方を向いて、

「シヤウヤンの事を、町の子供達は、みんなヲツピのシヤウヤン、ヲツピのシヤウヤンて呼んでゐるんですよ、そら、あのヒヨツトコの面ね、あれをこゝらぢやあ、一口にヲツピつて云ふんですよ、丁度その時で無いからいけないけれど、毎年五月に、此の邊一番の賑かな唐歸山のお祭りつて云ふ祭りが町であつてね、その時にやあ打瀬舟を一艘陸へ引きあげて、その上へ立派な屋臺を作つて、それから、私なんか幾度聞いてゐてもどうしてもその唄の文句も節も解らないんだけれど、何でもその神樣の唐から歸る長い道行きを歌つたとか云ふ唄を聲を揃へて歌ひながら、町の端から端まで、それをギイギイ引つ張り廻すんです。その屋臺の上で、シヤウヤンはそのヲツピのお面を被つて、定つて踊るんです。そりやあどうして、仲々うまいもんでね、それだから、ヲツピのシヤウヤンて云やあ、こゝらの土地ぢやあ誰も知らない者は無い位なんですよ、何もお祭りで無くつたつていゝから、ゐるうちに、是非一遍その踊りをシヤウヤンから踊つて見せてお貰ひなさいよ。」

「ホウ、そんな藝人なんですか、……そりやあ、是非いつか踊つて見せてくれ給へ。」

私は叔母にさう云はれて眼の前に立つてゐる、眉の太く、眼や口のハツキリと整つた、不愛想らしくてゐながらどこかに自然の愛嬌のある、落ち着き拂つてゐるやうでゐて敏捷さうな、男らしく感じのいゝそのシヤウヤンと云ふ男の顔をジツと見ながら頼んだ。

「何が。東京のお客樣になんずおれの踊りを見せたもんなら、それこそいゝ物笑ひだ。」

シヤウヤンは、からかはれて少し忌々しくでもなつたやうに、吐き出すやうにテキパキと云ひ切つた。

「兎に角、マア暇なら遊びにおいでよ、――アア臭い、臭い、これは逃げ出さなくちやあ、迚も臭くなつて來て堪りやあしない、シヤウヤンのお蔭で、朝からほんとに飛んだ臭い目に遭つちまつた、今井さん、サア向ふの臭くない方へ行

きませう。」

「それぢやあ、又遊びにおいでなさい。」

そう云ひながら、私は微笑するやうにして、その一種飄輕な叔母のあとからその肥料の匂ひの強く漲つてゐる畠の傍を離れた。

「旦那、何なら今夜、御一緒に町へ盆踊りを見に行きますべえ。」

音吉が、その時あとから追つかけるやうに私に呼び掛けた。

「ああ、都合がよかつたら連れて行つてくれ給へ。」

「そう、初めてだと面白いから、音に案内して貰つて観ていらつしやい、そうしてシヤウヤンの踊るところを、よく見屆けておいでなさい、……オオ臭！　音つたら、又人が居たつてチツトモ遠慮なくザブザブぶつ掛けるんだもの、そんな處にいつ迄も案山子のやうに立つてゐて、ヨク又シヤウヤンも臭くないもんだねえ。」

叔母は背後を振り返りながら、モウ一遍そんな事をシヤウヤンに云つた。

「臭くつたつて、みんな自分達のしたもんだ。」

私達が離れると一緒に再び腕組みをしたシヤウヤンは、私達のうしろから低い聲で、然し朝の空氣にハツキリと響かせて呟いた。

「面白い男ですね、あのシヤウヤンて云ふ男は――。」

何と云ふ事も無く、そのキビキビとした彼の樣子に、初對面からヒドク自分の心を惹かされたやうな氣がして、私は母屋へ向つて歸りしなに叔母へ話し掛けた。

「氣のサツパリした、そうしてシツカリしたいゝ男さね、――あんなにマダ年は若いけれど、あれで然し仲々遊び人でね、マダ十九かそこらの時に、町の酌婦をしてゐた女に惚れ込んで、七八十圓も身の代金を拂つて退かせてうちへ引つ

張つて來て女房にしてゐたんだけれど、父親とその女とがどうも氣が合はずに——母親はほんとうだけれど、父親は繼親なんですよ、——子供まで出來てゐたのに、トウ〳〵又家から出して、今は何でも東京の料理屋とかへ奉公にやつてあるつて云ふ話ですよ。」

「へえ、あれはそんな風な話の有る男なんですか。」

「酌婦つて云ふものゝ、マダ賣られて來てホンの店へ出たばかりの女だつたとかで、氣立ても好さそうな、シヤウヤンとは丁度似合ひの夫婦だと私なんかは思つたけれど、親父つて云ふ人間が少うし氣むづかし屋だから——今は半中風見たやうになつてゐますがね、——そんな事になつて、あれも可愛想な奴でさ、子供は今年五つばかりになるが、可愛い子ですよ、親父はそんな風だし、母親もモウ年が寄つてゐるし、そんな子供まで擁へて、あれはイヤな顔もせずに自分一人で働いてそれだけの者を食はせてゐるんだから、ほんとに働き者ですよ。」

「マダあんな若さでゐながら、そりや氣の毒ですね、——すると、今年シヤウヤンは二十四五位でせうかね。」

「二十四だらうと思ふ。」

「シヤウヤンとその女とは、モウすつかり手を切つて了つたんですか、それとも、タダ家の都合上別れてゐると云ふだけなんですか。」

「緣を切つて了つたんですよ、……そうだが、今でも內密に時々手紙のやり取り位はしてゐるらしい、何しろ兩方で、厭になつたでも無く倦いたでも無く、生き別れに別れて、おマケに子供まで有るつて云ふんだから、思ひ切れないのも無理が無いわけですさ、その後會つた事は有るまいけれどね。」

丁度叔母がそこ迄話しつゞけて來た時、私達はモウ母屋の入り口まで來て了つてゐた。

2.

その夜、畠の仕事をスッカリ濟ませて了つてから叔母の家で夕飯を食つて、それから着物を着かへる爲めにや丶離れた自分の家まで歸つて、再びワザワザ出向いて來た音吉と一緒に、私は約束通り、十丁ばかりもその邊鄙な小さな部落から隔たつた、山を一つ越した向ふ側の一つの漁師町まで盆踊りを見物に出掛けて行つた。

偶然に舊暦のその土地の盆の時節にやつて來た私は、丁度晴れ渡つた連日の大きな蒼い空の中に、圓く珠のやうになつて來てゐる明かな月を眺めた、その月の光と相應じでもするやうに、陸の方には一向風も無くてゐながら、妙に荒くドウドウと大きな音を立て丶、そこらの海岸に沿つて無數に突き立つてゐる障壁のやうに高い急峻な崖の脚もとに、又その下へ振り撒いたやうに散亂してゐる澤山の岩礁の横面へ、押し寄せて來てブッつかつて狂つたやうな白い飛沫を擧げてゐる海の波の音が、又私の兩方の耳の中へ一杯に響いてゐた。

「こりやあこんな風ぢやあ、當分海の仕事は駄目だね。」

糊の固い、白いサバサバした浴衣一枚を着流しながら、門を出て、モウ一面にシツトリと濡れた細い徑の兩側の青い草の露を心もちよく素足に感じながら、私は先きへ立つてゆく、黑い着物を着た小柄な音吉へ向つて話し掛けた。

「駄目ですよ。」

一種その地方特有なアクセントで答へながら音吉は明るい月の光を頭から浴びて、昨日私達が來た道をズンズン歩いて行つた、が、暫くして、初めて道の傍へ現はれて來た、その高い山路の崖の下へ半分埋もれたやうに立つてゐる一軒の平家建ての家のところ迄來ると、急に思ひついたやうに獨り言をした。

「シヤウヤンは、モウ出掛けたつぺえか。」

「これがシヤウヤンの家かね。」

私はその彼の言葉を聞きとがめてたづねた。

「ハア、そうです。」

「それぢやあ、ゐるやうだつたら一緒に誘つて行からぢやあ無いか。」

「一緒に引つ張つて行きますかね、――一つ聞いて見べえ。」

そう云ひながら、草の中の小道をドシドシ降りて、晋吉は一人でその家の向ふ側の方へ廻つて行つた。

その、狹く汚れた家の中の想像されるやうなコケラ葺きの平家の屋根を見おろしながら、又その家の片側に造られてある井戸を、その井戸の傍に生へてゐる、蔽ひかくすやうに勢ひよく枝をひろげた無花果の厚ぼつたい繁みを眼の前に眺めながら、私は晋吉のその家から出て來るのを待つた、もしやシヤウヤンか、又はその父親らしい者の話し聲でも聞えるか、と思つて、なほ又私はあたり一面の蟲の聲と浪の音との中にジツと耳を澄ませた。

然し別に誰の話し聲も少しも聞えずに、やがて晋吉の姿ばかりが、再び下駄の音を鳴らせながら私の立つてゐる道の方へ登つて來た。

「どうしたの、……居ないのかね。」

「モウさつきに盆踊りへ出掛けたそうです。」

「そいつは惜しい事をしたね、――ヤツパリ踊りたくて、いつ迄もうちにジツとしちやあゐられなかつたんだね。」

「あつちへ行つて踊りん中を探したら、キツト居ませう。」

「晋やんは踊らないのかね。」

「私あ踊りも何にも出來ません、出來さへしりやあ、私も毎晩町へ出掛けて行くだが。」

「シヤウヤンは年はマダ若いが、仲々苦勞人だつてねえ、――その町から連れて來たつて云ふ女は、可成り綺麗な女だつたの。」

「ハア、もうお聞きですか、……ナニ、マダ十六か七で、そんねえに美人て云ふわけでも無かつたが、チヨツト可愛らしい娘でしたよ、親父の因業のせいで別れちまつて、今はそうでも無えが、一時やシヤウヤンも馬鹿に悄げ返つてゐま

したよ。」

そんな事を話し合ひながら、私達二人は、そこらを伐り開いて作つてある水田や畑の間を通り拔けて、月の光に曝されて眞蒼に深い色に盛りあがつてゐる、餘り高くない山の上へ次第にあがつて行つた。

その山の上を少し歩いて來ると、そこからはモウ、今度は叔母の家の在る方の海岸とは反對側の海岸が、月の光が當つて、キラキラと一面に箔でも流したやうに金青色に輝いてゐる海の面が眺められた、その、夜目にも白く波の押し寄せては碎けてゐる廣い弓形の海岸に沿つて、黒い家の屋根や樹の色の中に、眞赤な灯の顆が點々として散り亂れてゐた、それと一緒に、今まで私の耳のうしろの方からばかり響いてゐた波の音が、今度はスッカリ方向を變へて、前面の方から間を置きながら、ザアーッと何か大きな物を洗ひでもする水音のやうに聞えて來た。

「あそこが町だね、……オウ、太鼓の音がしてゐるやうだ。」

その波の音の間に、やや忙しく微かに鳴りつゞけてゐる太鼓の音らしい物音に耳を留めて、私は音吉へ向つて云つた

「ハア、モウ始めてゐるですつペ、マアダ時間は少うし早いやうだが、——いつも九時頃から、十二時頃までやりますが。」そう云つて答へながら、フト思ひついたやうに音吉は私へ訊き掛けた。

「シヤウヤンの鮑つ取りの話は、モウ御隱居樣からお聞きですか。」

「いゝや、……シヤウヤンは鮑を取つて暮してゐるのかね。」

「いんえ、そうぢやあ無えです、——あれの本職あテングサ取りです。」

「テングサ？——ああ、あの寒心太を作る海草だね。」

「ヨク旦那は御存じですね。」

「知つてゐるとも、僕の生れた山國の方ぢやあ、冬の一番寒い最中に、あいつを若者が杵を揃へて唄を歌ひながら、夜中掛つて大きな木の臼で寒水で舂いて、そいつを氷らせてああ云ふカンテンに造りあげるんだからね、……ダガ、そん

なテングサなんぞを採るばかりで、魚の方はシヤウヤンは取らないのかね。」
「魚も、漁業組合の舟に雇はれて漁りに出る事があります、一體は百姓の子ですが、小せえ時から海の漁がどうしてか馬鹿に好きで、それで今あ百姓よりやあ漁師の方になつちまつてゐるです、働き者だから何でもして金を取るんで、仕事の暇の時にやあ、此の近くの鑛山の鑛夫にも雇はれて行つて働くんです。」
「ほう、するとヤツパリ普通の鑛夫のやうに、銅や石炭でも掘り取るのかね。」
「いんえ、掘る方は仲々慣れねえとチヨツトにやあ出來無えで、シヤウヤンは支柱夫つちう奴になつて、掘つて行つた穴ん中へ、土がクマ無えやうにあとからあとから柱をかつて行く仕事をするんです。」
「仲々いろんな事をするんだね、——鮑も、それちやヤツパリその鑛山の仕事と同じやうに、テングサ採りの間々にシヤウヤンは取つてゐるのかね。」
「さうです、……ダガそりやあ、シヤウヤンはただ取つてゐるぢやあ無え、泥棒をしてゐるです。」
「泥棒を？……。」
あまりに唐突な言葉を聞かされて、私はびつくりして思はずその言葉を繰り返した。
「ハア、それで、誰でもシヤウヤンを摑めえた者にやあ、今五十圓呉れるつちう懸賞になつてゐるのです、——ところがシヤウヤンが仲々すばしつこいもんだから、鮑を取る事が解つてゐながら、未だにマダ誰もあいつを摑めえた者が無えんです。」
「それちやあシヤウヤンは、人の取つておいた鮑か、養つてゐる鮑でもコツソリ盗んで賣つてゐるのかね。」
ヒドク自分の心の興味を惹き起されて來て、私は更に問ひ進めた。
「ナアニ、そんな事はし無え、……タダやつぱり當り前に、海ん中へ潜り込んぢやあ岩へくつついてゐる鮑を取るだけのこんだが、こゝで鮑を取るにやあ、チヤント組合へ入つてゐなけりやあなん無えです、ところが、シヤウヤンはその

採鮑組合へ入つてゐずに、勝手に鮑を取るんです。」

「なるほど、そんな組合がヤッパリ鮑採りの仲間にも有るんだね。」

「鮑取りばかりぢやあ無え、カジメ取りにも、テングサ取りにも、みんなそれ〳〵組合が出來てゐるんです。」

「テングサ取りの組合にやあ、一體シヤウヤンは入つてゐるのかね。」

「それにやあチヤント入つてゐます、入るつたつて、テングサの組合はモト金が安いですからね、タッタ五圓かそこらだから。──そうだが、採鮑組合の方は、モト金として八十圓納めなくちやあなん無えんです、八十圓て云やあどうして大金だから、仲々貧乏人にやあチヨツクラ入れりやあし無え、マアそうやつて、出來るだけ組合の中の人數を殖やさ無えやうに、殖やさねえやうに、と考へたもんでさあ今あ組合の人數は四五十人ばかり有りますが、ヤッパリそん中で金の有る奴が、ヤレ理事だの何だのつちう者になつて威張つてゐて、外の者が容易に組合へ入る事も許さねえ風だし、ウメエ汁あ、マアみんなその人間達が吸ひ取つてゐるやうな様子です。」

「フム、……それがほんとうだとすると、そりやあ餘んまりいゝ組合ぢやあ無いね。」

「ヨク無えですとも、そうやつて、自分達で勝手に組合を作つて規則を定めて、もしそれへ入つてゐ無くて鮑を取つたりなんかする者あ、四圓から五十圓までの罰金に處しちまうなんて云つて、──ダガそりやあ、もうチヤント縣の認可だかを貰つてゐる風です、──組合以外の者にやあ手も足も出せねえやうにして置きながら、ナアニ、自分達の方ぢやあ、そつちの組合へも入らずに勝手にカジメを採つたりしやあがるんです、カジメ取りあ大抵みんな女ばつかだから、いゝ氣になつてそんな眞似をやりやあがるんです。」

「……そうだが、そんな組合はモウ昔つから有るのかね。」

「ナアニ、マダそんねえに前つからでも無えです、私の子供時分にやあ、誰だつて見つけ次第取り次第だつたもんでさあ、……それと云ふが、ヤッパリ此の海が焦けて、ダン〳〵草も魚も鮑もみんな減つて尠くなつて來たからです、それ

—(八　五)—

で、そんな喧しい事も云ふやうになつたつちうもんですよ。」

「海が焦ける？　つてどう云ふ事だらう。」

「サア、どう云ふわけですか、此の頃沃度を作る原料になるの何だのつちつて、無暗矢鱈と、カジメだのいろんな海草を取つちまう事もその一つだつぺえが、一つにやあ、どうしてか昔たあ海の様子がちがつて來た風です、潮の工合が變つちまつたです、それだから、今までビツシリ生へてゐた草や貝がダン〳〵岩から剝げ落ちて、その又岩が、マルデかう火かなんずで燒きでもしたやうに、毎年々々白ざけてカサ〳〵になつて行ぐんです。」

「そりやあ困つた事だね、――そんな風だと、今に海岸ぢやあ、モウ何にも取れなくなつて了ふかも知れないね。」

「さうなるべえかとみんな思つてゐるんです、それだから、採る物あ今のうちに、採れるだけみんな採つて置くべえと考へてゐるです、……海ん中も、ヤツパリ陸と同じやうに、年増し世智辛くなつて行ぐですつぺ、そこへ持つて來て又みんなそう云ふ氣になつてゐるだから、海あ荒れて行ぐばつかりですわ、今にこゝらの海ん中あ、幾ら底を覗いて見たつて青い物なんず一ツ片も無くて、タアダ骸骨みたやうに白い石ばつかりが、あつちにもこつちにもゴロ〳〵してゐるやうになるですつぺ。」

「そんな事を考へてゐたんぢやあ、君達も先きが暗い氣もちがする事だらう。」

「どうかしなけりやあ、ダン〳〵暗くなつて行ぐばつかりでさあ、マア、組合だの何だのつて云つたつて、愈々そうでもなつた日にやあ、一文の價打ちも無くなつちまうに定つたもんでさあ、――いつか町まで來ちまひましたよ。」

そう云ひながら、私の注意をちがつた方へ向け變へやうとでもするやうに、晋吉は私の方を振り返つた。

思ひがけない憂鬱と反抗とを――それも、如何にも海に近く住んでゐる者の聲らしい――聞かされたやうな氣がしてそれ迄いつか山を降つて來て了つたのにさへ心づかずにゐた私は、その晋吉の言葉で頭を振りあげた。

すると、丁度その私の眼の前に、そこの小さな家の低い軒先きに、その中に點された赤い蠟燭の火を含んで、七つも

八つもズラリと一杯に懸け連ねられた大きな提灯の黒や赤の紋所が私の心を驚かせた。

「かう云ふ提灯の掛つてゐる家あ、みんな新盆の家ですよ、……新盆の家へは、親類や近所からみんなかう云ふ、向ふとこつちと両方の紋を書いた提灯を贈つてやつて、それが多いほどうちの者あ自慢にするです、——踊りつ子達あ、そう云ふ家の前へ行つて一軒一軒踊つて歩いて、お祝酒を飲んだり、そうでなけりやあ御祝儀を貰ふんです、例の流行つ風で、去年から今年に掛けちやあ、ここらでも恐ろしく人死にがあつたから、踊る者達あ、今年あ張り合えがあつて大喜びですつぺ。」

「なるほど、それでこんなに提灯をさげて置くんだね。」

全く燈籠祭りと云つた感じのするやうな、家に較べてヒドク大きな、澤山な、賑かなその土地の珍らしい提灯の灯を見ながら、私は音吉の説明を聞きながら町の中へ次第に入つて行つた。

如何にも澤山に新盆の家が有るらしく、あつちにもこつちにも、そう云ふ風な提灯を懸けつらねた家が、明るく夜の漁師町を彩つて私の眼に映つた、——その町の向ふの方から、太鼓の音や笛の音や、又それに合はせて歌つてゐるらしい唄の聲やらが、一足づつ先きへ進むに従つて愈々近く私達の耳を打つて來た。

「ハア、やつてる、やつてる。」

そう云ひながら、向ふの提灯の點いた家の前に一杯黒く群つてゐる人ごみの中へ、やがて音吉は私を導いた。

空から漲り落ちて來る月の光を浴びて、或は頬被りをして、或は麥稈帽子を被つて、或は露き出しの頭のまんまで、そこに幾人もの荒くれた身體の恰好をした若者達が、一つの可成り大きな環を造つてゐた、そうしてヒドク言葉の訛つた節で、割合低く又緩かな盆踊りの唄を誰か一人の音頭取りが歌ふにつれて、それへ所々みんなで合の手を入れながら丁度子供達が夕方かなんぞ一緒に集つて手をつなぎ合はせて「ひいらいた！　ひいらいた！　蓮の花アひいらいた！」とうたうのと同じやうな調子で、腰をひねつたり手を叩いたり、中へ足を踏み込んだり、又退いて環をひろげたりしな

がらズル〳〵と廻つてゐた、その環の中に一人專門に笛を吹く者がゐて、それと調子を合はせながら、叉腹のところへ鐘と太鼓とを括りつけた男が二人、その環の眞中で頻りに兩手でその鳴り物を叩きながら飛び歩いてゐた、——周圍の見物人の中には澤山の女が混つてゐたが、環の中には一人の女の姿も見當らなかつた。

「チットモ解らない言葉だねえ。」

暫く立つて眺めてから、私は晉吉の方を振りかへつて呼び掛けた。

「こりやあ、ジヤンガラ念佛つちう唄です。」

「シヤウヤンはあんな風な鐘叩きをやるのかね。」

「そうだつて云つてましたが、……そうだが、あの叩いてゐるなあありやあシヤウヤンちやなし、どうも環ん中にもシヤウヤンは居えやうですね。」

「どうしたんだらうね。」

「どうしただつぺえか。」

晉吉も不審そうに、それでもなほ頻りに探してゐるらしかつたが見つからない風だつた。

……………………………………

それから少し經つた後には、私と晉吉とは、その町の中の或る一軒の、壽司と料理とを兼業の料理屋の二階へのぼつてゐた。

「此の町ん中の料理屋ぢうで、タダこゝ一軒が固えだけです。」

そう晉吉が說明してゐるだけに、その二階へは、タダ女中が銚子と刺身や果物の二三器を運んで置いて行つただけで女は少しも來て留まつてゐなかつた、が、その二階から見下される直ぐ向ふ側の平家の狹い家——その軒燈の下の擦硝子の戸へ持つて行つて、西洋料理、バー、御待合、と三行に並べて下手な字で眞黑く書いてある家——の中には、三四

人の眞白く塗り立てた女が、チラチラと電氣の明りの中で媚かしそうに動いてゐた。

「シヤウヤンは、唄はあんまりうまくないのかね。」

好きは好きだが、一合位きり飲けないと云ふ晋吉を相手に、私達の話は又いつかシヤウヤンの身の上へ移つて行つた。

「節廻しはチヨツトいゝが、聲がどうもよく無えから駄目ですよ。」

「フム、……鮑を取る事は一體上手なのかね。」

「上手とも何とも、マアあれツ位え鮑取りの手に入つた漁師あ、此の浦中探したつて外に一人も有りやあし無えです、――外の鮑取りやあみんな金を持つて行つて、水ん中へ潜り込んぢやあ、〇を見つけるとその金でウマクからグイツと剝がすんです、何しろあゝ云ふ片つぽうダケの貝で、おマケに馬鹿に柱の太え野郎だから、そうやつて金で剝がすにだつて呼吸が有つて、仲々慣れ無え者にあ出來やあし無え、一度岩へピタリツと食つついちまつたが最後、それこそ挺だつて何だつて剝げやあし無えんです、ところがシヤウヤンと來た日にやあ、空手で入つて行つてドン／＼手で岩から捞り取つて、そうして水ん中へ肩まで出して浮かんだまんま、その生の奴をムシヤムシヤ平氣で食つてゐるんです。」

「へえ、そんな生でも食へるのかね。」

「食へるどこぢまあ無え。……それだつて旦那、水貝は生でありますぺえが、――鹽水で食ふだから、水貝とチツトモちがやあし無え、水貝どこか、何しろ取つて直ぐそこで生きた奴を食ふだから、そんなウメエ物は無えつちう話ですよ。」

「ダガまるで、それぢやあ獸だね、――そう云ふ者に出會つたんぢやあ、鮑もスツカリ往生だね。」

「マア一つは、慣れから來てるですつぺえが、兎に角鮑取りに掛けちやあ名人です、そうして又それだけドンドン漁つてゐながら、マダ一度も誰にもそこを摑へられた事が無えつちうだから、エレエもんですよ。」

「知つてゐる事は、モウ誰でもみんな知つてゐるんだね。」

「知つちやあ居ますが、現に眼の前で歴然とした證據を押へ無え日にやあ、ヤツパリどうする事も出來やあし無えです。」

「…ダガ、その取つた貝は一體どうするんだね。眞逆たゞ自分で食つてるのばかりぢやあ有るまいが、それにしても、そんな風ぢやあ、何處へも賣りに行く事も出來なかあ無いだらうが。」

「ナアニ、それをヤツパリ、シヤウヤンは上手に賣つて金にしてゐるんです、今あどうして、鮑あいい金になりますからね、こりやあ内證だが、御隱居樣のとこへも時々持ち込むんです。」

「叔母さんのとこへ？。」

「ハア、御隱居樣の方から、シヤウヤンの方でもコツソリ取つて持つて來てくれろ、なんて仰るんです、此の頃あアンマリ持つて來いつて仰ら無えから、遠慮して取つて行か無えやうですが。」

「そりやあ、そんな事を云つて故物を買ひ取るんぢやあ、叔母さんも立派な共犯人だね。」

「御隱居樣はあゝ云ふ氣象の方だから、そんな事あ平氣で仰るんです、——なんでも此の二三年前の事でしたが、ここの海岸のカジメやバツカ(牝蠣)や鮑の漁獵の檢査に、縣から警察部長や何かがワザワザ廻つて來て、採鮑組合の理事なんかと一緒に、あそこのお邸へ立ち寄つた事が有るんです、そうしたら御隱居樣は、その時そんらの人達に緣先きでお茶やお菓子をお出しになりながら、面と向つてこんな事を仰るんです。

どうも私は、皆さんのなさり方にかねがね不平があります、……外でも無えが、組合の人達あ私の邸の下の海で勝手放題に鮑を取りながら、今まで幾ら取れたつて、一度だつてその貝を私のところへ持つて來た試しが無え、持つて來ないどころか、一言挨拶をした事さへ有りやせん、それでゐながら、外の者が一寸でも取りでもすると、直ぐヤレ罰金を取るの訴えるのつて云つて、ほんとに癪に障るつて有りやしない、これからは私は、自分でも勝手に鮑を取るつもりですから、どうか左樣御承知なすつて下さい、つてそう仰つたんです。

そうしたら縣の人達も笑ひ出して、あなたの御取りになる分にやあ、幾ら採つたつて少しも差し支へは無い、どうぞ御隨意に御取り下さい、なんて云つて歸つて行きましたつけ。」

「ハハア、——そりやあ、如何にも叔母さんの云ひそうな事だな、然しシヤウヤンの外にも、それぢやあヤツパリ鮑を盜んで取る者がゐるんだね。」
「まあシヤウヤンほど酷かあやら無えが、そりやあ居ますとも。……せんだつても二三人で鮑を取りにやつて來て、丁度持つて歸るところを見つかつて、持つて逃げるわけにやあ行かず、困つてみんな御隱居樣の邸の庭の數ん中へ抛り込んで逃げちまつたです、それだもんだから、數ん中あつちもこつちも、ゴロゴロ鮑だらけつちう騷ぎです、あとで組合ひの者達が來て、そいつをみんなさらつて持つて行つちまひましたかね、御隱居樣はそれを聞いてくやしがつて、ほんとに惜しい事をしたもんだ、それを見てゐたら、なぜ早くみんな獄つてうち人持つて來ちまはなかつただ、もし聞かれたら、そんな物あ一向存じませんて云ひさへすりやあそれで濟むものを、つておキヨさんに云つてゐましたつけ。」
「フム、一方で禁じりやあ、ヤツパリどうしても一方にやあ密獵者が出來るんだね、……然し、叔母さんや何かが、反つてみんなその泥棒の方の肩を持つてゐるのは面白いね。」
「肩を持つわけぢやあ無えが、組合のやり方が氣に食は無えもんですからね、——もつともシヤウヤンと私たあ、前つから特別に懇易にしてゐるです、シヤウヤンの鮑を買ひ取りなんかし無えが、今シヤウヤンの住んでゐる家あ、ありやあ實あ私の家です。」
「君の貸家なのかね?。」
「なあにそう云ふわけぢやあ無え、あれが、私のふんとうの家です、——御存じでせうが、私あ御隱居樣に頼まれて、今栗澤さんの空いてゐる別莊の留守番旁々、うち中でみんなあつちの方へ引つ越してゐるもんですからね、それで自分の家あ、ああしてシヤウヤンに貸してあるんです。」
「ああ、そう云ふ事になつてゐるのか。」
「私あ一體、いろ〳〵そんな風な家の世話を頼まれてゐるんです、……ホラ、今夜こつちへ來がけに、あのシヤウヤン

の家の向いてゐる向ふ山の崖んところに、例の盆提灯が三つ四つ赤く點いてゐたですつぺ、ありやあ、あすこの岩を刳り拔いて造つた岩屋ですがね、その岩屋の持ち主あ此の町の人で、自分で始終そんな離れた所を看てゐるわけにも行かねえもんだから、そこの管理もヤツパリ私あ頼まれてゐます、あすこに今住んでゐる夫婦あ、もとシヤウヤンの側の方にゐた者ですが、二三年前の暴風の時に家を潰されちまつて、仕様がなくなつて私んところへ泣きついて來て、私の世話でマアやつとあの岩屋を借りて住むやうになつたもんです、があの夫婦達あ、ありやあシヤウヤンに取つちやあ敵です。」

「敵つて？……。」

「例の組合から頼まれて、二人で始終向ふ側からシヤウヤンの樣子を見張つてゐるんです、あすこの入り口からあ、海の方もズツト一目に見渡せるから、シヤウヤンが海へ入つてゐるところも始終看てゐるです、その爲めに望遠鏡もチヤント組合から貸してやつてあるんです、もしシヤウヤンが鮑を取つた所がその望遠鏡へ映つたもんなら、あの二人あいつでも直ぐにかけて行つて、シヤウヤンをヒツ捆へる手筈になつてゐるです。」

「フム、そんな看視人が附いてゐちやあ、そりやあシヤウヤンもウツカリ油斷は出來ないねえ。」

「出來なえですとも。」

「そんな岩屋の中に、然しその人達あ夫婦つきりで住んでゐるのかね。」

「前にやあ、年寄りの親父が一人おりました、ところが何しろあんな狹い暗い岩ん中で、おまけに始終ジメジメして水が落つてゐるやうな所だから、どうしたつて身體にやあヨク無えんでせう、前つからブラブラしてゐたが、やつぱり去年の流行つ風の時に死んぢまつたです、それだから、ああやつて新盆の提灯を今年あ岩の尖きへ釣してゐるんです。」

「アア、そう云へば成程赤い提灯がフラフラしてゐたつけ、——僕は又、あの邊にお稻荷樣の祠か何かでも有るのかと思つてゐた。」

「どうして、あの提灯がシヤウヤンをジツト睨めえてゐるんです、……シヤウヤンは又シヤウヤンで、あの野郎共、邪

いと同んじに早く死つちまやあいい、なんて云つてゐるです。」

「シヤウヤンの身になつたらそうも思ふだらう……。」

「あいつは酒好きで、愈々腰を据ゑて飲むとなりやあ、一升位はペロリとやつつけます、今夜ゐたら一緒に引つ張つて來ると面白かつただが。――どこか、別の踊りの組ん中へシヤウヤンは入つてゐるのかも知れ無えです、あの太鼓は、ありやあ先刻の奴だつぺえかな？。」

そう云つて、音吉は風に流れるやうに遠く響いて來る太鼓の音に、耳を欹てるやうに赤くなつた首を傾げた。

3。

その晩から五日過ぎた或る日の午後、私はそこらの海岸の散歩のあとで、フト音吉の留守番に入つてゐる別荘の傍を通り掛つてそこへ寄り込んだ。

丁度音吉は、その別荘の片端の開け放した汚れた室の中へ青い蚊帳を釣つて、――それは、その邊に多い大きな藪蚊と蠅との防禦の爲めだつた、――そこの疊の上へジカに仰向けに寢ころんで晝寢をしてゐた、私が行くと急に起きあがつて、留守の女房の代りに自ら茶を酌んでくれたりした、かねがね私がシヤウヤンに會ひたいと云つてゐたのを不意に思ひ出したやうに、それから彼はワザワザ下駄を穿いて、シヤウヤンの家まで彼を呼びに出掛けて行つた。

「今直ぐ來るつて云つてゐました。」

彼と一緒に今しがた海から歸つて來たばかりだから、キツトやつぱり家の中に寢ころんででもゐるに違ひない、と音吉が云つてゐた通り、果してシヤウヤンは家の中にころがつてゐた、そうしてそう云つて返事をした、と音吉は間も無く歸つて來て私に告げた、暫くすると、カタカタと云ふ下駄の音をさせながら、全くどこもかも眞黒く日に焦げた、今直ぐ海の中から出て來たとでも云つたやうな恰好をして、シヤウヤンが庭の小松の茂りの下の方から石段を踏んであ

がつて來た。

青い皺をビク一面にそのおもてへ疊んだ、此のやや強い、然し晴れた海を直ぐ眼の前の方に眺めながら、茶を啜つてそれから私達三人は時の經つのも忘れたやうに話を始めた。

音吉ほどでは無かつたが、シヤウヤンも仲々話好きらしくて、或は音吉へ向つて、或は直接に私に向つて、所々私には解らないやうな土音や言葉遣ひを交ぜながら、彼はいろんな事を話した——。

漁業組合の舟に雇はれて、そこいら一帶の沿岸を魚を漁つてこぎ廻つた折りの事をも彼は話した、その何度となく往來した經驗に依つて、どこの磯の工合がどうなつてゐるとか、どこの岬へ掛つた時にはどんな波を氣を附けなければいけないとか、又風が、どこでは急にどんな風に變つて吹くとか、私などにはハツキリと嚥み込む事も出來ないやうな、漁師の專門的なやうな事をも語つた、ヒドイ暴風雨に出つくはして、もう少しで舟が駄目になつて了ひそうになつた時の事や、そんなふうな絕えず冐險的な、荒く、又機敏を要する生活に從事してゐながら、漁師と云ふ者の一體に恐ろしく臆病で迷信深い事や、或る時暗い海の中で網の中へ入つて來た、丁度ヒラメのやうな燐光を發してゐるものを拾ひあげて見ると、それが爛れてゐる人間の首で、誰一人手を出さない漁師の中で彼がそれを引き受けて始末した時の事や、又或る時、その餌ごろしの所へ臭い糞をドッサリ嚥み込んでゐた鮟鱇を掴へた折りの話や、そう云ふ、百姓をしてなぞゐては迚も思ひもつかないやうな危險の多い苦勞な仕事に從ひながら、その投機的な活動の中に、又百姓なぞには味はれないやうな面白さの有る事なぞを彼はつぎつぎに語つた。

マダ小さい時分から馬鹿に漁好きで、始終磯へばかり行つてゐてヒドク父親に叱られた事や、それでも止めずにテングサを取つて來て、それ一日二錢づつに賣つて、一錢は父親の手に渡して一錢は自分で取つて、その一錢で菓子を買つたり果物を買つたりして食つた味の未だに忘れられない事や、一夏の學校の休みの間に四十錢貯蓄をして、それでつねづね買ひたく思つてゐた水眼鏡を一つ買つた時の嬉しかつた記憶や、遂にそう云ふ漁の樂しみが益々高じて來て、又業

外金も多く取れるやうになつて來たのを見て、父親もとうとう百姓以外に漁を彼がするのを許すやうになつて來た次第や、十七の年、初めて仲間の漁師達に引つ張られて町の料理屋へ一緒に行つた時、こはくてブルブル身體がふるえて、女中が座蒲團を持つて來ても顔を眞赤にして敷きもせず酒も飲まず、タダ二階の手摺りの所から裏の庭を獨りで見おろしてばかりゐた揚句、とうとう便所へ行くと云つて下へ降りて裏口から逃げ出して了つた事や、その次に再び捕へられて、遊びを覺えさせられて、それから後はモウすつかり遊ぶやうになつて了つた事や、又丁度徴兵檢査の前に網曳きに雇はれて激しく働きづめでゐて、その爲めに手が豆でコブコブとしてマルキリ動かなくなつて、檢査の時には、どうしても掌を握つたり開いたりが出來ずに、貴樣のそりやあ一體手か足か、マルデ足見たやうだ、と云つて檢査官から平手でぶたれたと云ふ事や、……そんな風な彼の生ひ立ちからの事をも、ややセキ込んだやうな早口で、又その言葉の足らない所を補ふやうに、それへいつと無く知らず知らずに加はつて來るやうな手眞似を交へて、彼は元氣のいい調子でしやべつた。

「ダガ、そんな丈夫さうな身體をしてゐて、どうして又檢査に合格しなかつたもんだらうね。」

眼の前に彼の身體を眺めながら、何と無くそこに強靱な、ピンピンした球でも見てゐるやうな氣がして私は彼にたづねた。

「ナアニ、背が足りなくて跳ねられちまつたです、――外にやあ、ここが惡いつちう所あ今でも一つも無え、どうかして腹でも痛えやうな時にやあ、おらあただ水せえガブガブ呑みやあケロッと癒つちまう。」

「フム、どうして又水が身體に利くんだらう。」

「どうして利くだか知ら無えが、それだから藥の世話あ要ら無え、――だが、ヤッパリ氣を使ふせいで身體が惡くなつて來ただか、此の頃あおらあ夜でも晝でも、寢るとどうも盗汗が出て來て仕樣が無え。」

「盗汗なら、生きのいい鮑を食つたら癒るべえに。」

音吉が言葉を挾んだ。

「いんや、食つちやあ始終ゐるが、どうしても捻ら無え、外にどこも惡い氣はし無えで、ヤツパリ此の盗人をやめ無えうちあ駄目に違え無え。」

「シヤウヤンは、仲々飽取りの名人だそうだね。」

「シッ! 大きな聲をしりやあじきこれだ。」

急に眞面目腐つたやうに、同時におどけたやうに、彼はその私の言葉を遮つて自分の兩手を身體の背後の方へ廻して繩で縛られでもしたやうな恰好をして見せた、その樣子に私と音吉とが一緒に笑ひ出すと、彼も亦ニヤりと自分の顏を歪めた。

「そうだが、その事はモウ誰もみんな知つてゐるつて云ふ話ぢやあ無いか。」

私は彼に云ひ返した。

「それだから、おらあ餘計油斷がなん無え、……マアええもんさ。」

フト熟々と感じでもしたやうにシヤウヤンは言葉をついだ。

「何か見ても直ぐ氣がつくだから。人の顏を見ても、もしかこいつあ俺を覘つてゐる奴ぢやあ無えかと、ジキそう思つちまふ、盗人は始終氣の休まる暇が無えつちうが、全く俺なんかも、どこで何をしてゐても絶えず氣を配つてゐるやうなもんだ。」

「そうすると僕なんかを見ても、やつぱりそんな氣がしてゐるのかね。」

「ナニ、あんたなんかあ何とも思つちやあ居無え、……親父なんずは、おれの事をブラブラ怠けてばかりゐるゐるつて始終叱言を云つてゐるが、これでもおれの身になつてみりやあ、どうして人一倍氣を使つてゐるだ、親父達のマダみんな寢込んでゐるうちは、夜明け前におらあ一人でコッソリ濱へ出掛けて行つて、一稼ぎやつて何食はねえ顏をして又寢

ちまふ。それから夜になると、又コツソリ出掛けて行つちやあ取つて來る、――それだから親父はチツトモ知らずにゐるけんど、その間に五六圓位えはどうかすつと一度に稼いで來てゐるだ、やつぱりそうやつて働いてゐると、奇妙なもんで、晝間のうちあ何も仕事が出來ねえから、自然おらあ晝寢でもするかブラブラ遊んでばかりゐる、盗人の晝寢つちうがほんとにヨク云つたものだ。」

「盗人つたつて、海と陸たあ譯がちがうでナア、何も、これが人の持つてゐる物を勝手にフンダクルつちわけぢやあ無え、みんなタダ大海のもんだで。」

シヤウヤンの心もちを辯護するやうに、晋吉が口を出した。

「そうさ、みんな大海のもんだ、そう云やあ、云はば漁師あ一人殘らずみんな泥棒だから、おらあ何もそんねえに自分で耻づかしがらなくたつていいと思つてる、それに、泥棒々々つて云ひ立てりやあ、あいつらだつてヤツパリ立派な泥棒さ、――おらあ知つてゐるが、あの組合の中にやあ、チヤントした漁師の鑑札を持つてゐる者あホンの僅かつきり無え。幾ら組合へ入つてゐるの何のつて威張つたつて、チヤアントそれだけの稅をお上へ出さずに採つてゐたら、おれたあ違ふが、ヤツパリ泥棒にやあ違ひ有るめえ、幸ひ、今までおらあ一ぺんもヒツ掴まらずに濟んで來たが、もしおれを捕めえて突き出しでもした時にやあ、おらあ出る所へ出てその事を云つてやる積りだ、そうしたら、あいつらだつて萬更罪に陷ち無え事も無かるべえわさ、おらあ、今でも度胸はシツカリ定つてゐるわ。」

「そうだが、掴つちまつてから、人を何とか云つたつて仕樣が無えだから、マアなりつたけ自分の捕まら無え用心が第一さ。」

「そりやあそうだ、そんだから、おらあいつも氣の安まら無えやうに注意をして暮してゐる、……せんだつても、おらあその事を町の警察の派出所の巡査の所へ行つた序でに訊いて見ただ、私あ今からうやつて盗人をしてえるけんど、もし私をつかめえるなら外の人間だつてヤツパリつかめえなけりやあ不公平ぢやあ有るめえか、つてなあ、そうしたら巡査

はニヤニヤ笑つて、マア此の後も、なりつたけ人に見つから無えやうに取つてゐるがいい、見つかりせえしなけりやあ少うし位えは取つたつて構やあし無えから、おれとしちやあ、そう云ふ事をする者が有るからからうやつて暮して行けるだ、そう云ふ者が居なくなつた日にやあ、おれ達あ暮しが立たなくなつちまう、つて云つてくれた、――そう云ふ盗人が居無くなりやあ、おれ達あ暮して行けなくなつちまう、つてなるほどそう云やあそうに違え無え、それだから、おらあそれから安心して採つてゐるだ。」

「そんな事を云つて、……そうだが、そりやあその巡査の探りちやあ無えか、ウマクお前を掴めえやうと思つて、それでそんな事を巡査はお前に云つたもんぢやあ有るめえかな。」

　鳶色をした額へ皺を寄せながら、晋吉が兄分ででも有るやうな調子で彼の考へを云つた。

「いんや、おれもその時そう思つたが、どもそんな氣もちで云つたぢやあ無えらしい。」

「然し、ほんとにそんな事を云つたのかね、――巡査へ向つてそんな事を云つたとすりやあ、シヤウヤンも隨分亂暴な人間だね。」

「ふんとうですとも、……どうせおれの事あ、おれがそう云は無えつたつて、モウ巡査の耳にやめチヤント入つてゐるに違え無え、ナアニ、幾ら巡査だつて何だつて、おれを掴めえやうと思つたら、ヤツパリ現におれの採つてゐる所を掴めえ無えぢやあ何もなんねえだから、こんな事をしてゐりやあ、一方にやあビクビクしてだんだん氣が鋭くなる代り、一方にやあ反つて氣が強くなつて、それどこか、此の頃ぢやあおらあワザとあいつ達の仲間の前で鮑を採つて見せてゐるだ、現に採つてゐる事が解つてゐたつて、その現場を立派に押へ無えぢやあ、ヤツパリどう仕様も無えだからなあ、幾ら口惜しがつたつて、――おらあ然し、これまでマダ一遍もヒツつかまつた覺えが無えから、そいつが面白くて、あてつけにワザワザ奴等の眼の前で採つて見せちやあゐるだ。」

「盗人猛々しいつて云ふ氣もちだね、――そうだが、そんな事をしてゐりやあ、向ふの方ちやあ愈々躍起になつて來る

に違ひ無いね。」

興奮して來たやうに眼を鋭くキラキラと輝かせて話してゐるシャウヤンの顔を見て、私は何と無く彼の方へ惹きつけられるやうな心もちを感じながら呟いた。

「せんだつても、一人の奴がイキナリおれを一緒に引つ張つて行くつちうです、それだから、ナニ、おれを引つ張つて行ぐ？　引つぱつて行ぐなら幾らでも引つ張つて行け、そうだが、チヤント證據を握つてゐなけりやあ、引つ張つて行つたつておれをどうするわけにも行めえが、つてそう云つてやつたです……。」

雑巾のやうに糸を通した短かい着物の下に、焦げついたやうな色の、そうして身體の割合に小さな足を胡座に重ねながら、彼はフトそう云ひさして、何かに驚いたやうに庭の小松の茂みの向ふの方へ眼を向けた。

4。

十日ばかり居て愈々明日叔母の別莊を立つと云ふ日の晩に、私は叔母に頼んで、暫く懇意にしてゐた人々を叔母の家の海に近い一つの座敷へ呼んで、そこで心ばかりの別れの酒宴を一緒にする事を企てた。

かねて約束してゐた言葉を違へずに、その晩方になると、幾人かの客が次第に叔母の家の臺所をさして集つて來た。——第一番に音吉がやつて來た、彼はその日海へ入つてタコラギで突いて漁つたと云ふ、中位の大きさのヌルヌルとした薄赤い章魚を、二疋紐でブラさげてお土産に持つて來た、それにつづいて叔母の家の門のところに門番代りに暮してゐる一人の老人と、此の海岸の部落で殆んど草分けと云つてもいい程に古くから住んで、百姓や漁師達のうちでは一番家も大きく、又金も馬も持つてゐる嘉衛門と云ふ百姓の後取り息子とが、連れ立つて「お晩です、」と此の邊の晩の挨拶の言葉を云ひながら入つて來た。

それらの客達が來て、暫くの間臺所の傍の圍爐裏つぶちで話してゐるところへ、一番最後にシャウヤンがやつて來た。

「お晩で……。」
モウ眞暗になつた外へ突つ立つて、いつ來たとも解らないやうに急に戸を引き開けて、ランプの光の赤く輝いてゐる中へ首を突つ込みながら彼は呼びかけた。
「どうしただ、馬鹿に晩かつたもんだあ、――おらあ又、お前は今夜は來無えのかと思つた。」
晉吉が胡座の身體を搖りながら彼に云つた。
「ナアニ、切角御馳走してやるつらだものを、おらあ來ねえなんちう事あ無え。」
そう呟くやうに云ひながら、マダそのままやや躊躇つたやうに彼はそこに立つてゐたが、やがて思ひ切つた如く入つて來て、それからその手にさげてゐたビクを默つてイキナリ向ふのキヨのところへ突き出した。
「マア、えらい澤山また採つて來たねえ。」
キヨはビクを受け取つて、その中を覗き込みながらそう云つてシヤウヤンの顔を見あげた。
「ナアニ、たんとなんずちやあ無え、ほんのカタばかりだ。」
「鮑を取つて來たのかい？　ドレ見せ給へ。」
私が手を出すと、キヨはわざわざ立つてそのビクを私のところまで運んで來た。
「なるほど、こりやドツサリ取つて來たね、それに大きな好い鮑だ、……こんなに澤山採つて來なくつたつて好かつたものを。」
そのビクの中へ詰つてゐる、如何にもヨク發育したやうな大形の鮑の嵩なりをランプの濁つた火にすかして眺めながら、私は思はず彼に云つた。
「ドレドレ……。」
そう云ひながら、そこにゐた連中が、みんな代る代るそのビクを受け取つて好奇そうに中を覗き眺めた。

「こりやあ十の上有るなあ、——今夜は、これみんなは食ひ切れ無えわ。」
　嘉衛門の息子が云つた。
「サア、私あこれから組合の人のところへ出掛けて行つて、そう云ひつけて來るよ、もうチヤント、こゝに證據を握つてゐるんだから。」
　叔母が、その時不意に向ふの方から叫ぶやうな聲を出した。
「云ひつけるなら、云ひつけてもいい、……そうだが、そうすつと此の鮑は今夜食へなくなるだつぺえが。」
　云ひ返すやうにシヤウヤンが叔母に答へた。
「ナアニ、鮑の一ツつや二ツつ食はなくつたつていい、それよりか、泥棒を云ひつける方がよつぽど面白いからね、——それとも、それがイヤならもつと鮑を持つて來るか。」
「そんな大きな聲をすつと。ふんとに誰か聞きつけますよ。」
　晋吉が顔を蹙めるやうにして云ひ出した。
「御隠居様に會つちやあ迚も敵はねえ、……。」
　苦笑したやうにシヤウヤンは云ひながら、そのまゝ私の方へ向いて言葉を繼いだ。
「それぢやあおらあ鮑を肴に取つて行くべえ、つて云つただから、もし取らなかつたもんなら來られ無え、と思つて、これでも一生懸命に、夕方暗くなつてから海ん中へ入つて取つて來たですよ、丁度海が荒いもんだから仲々ウマク取れなくて、一度入つてあがつて、それから又入つて取つた、何しろ暗さは暗えし、氣はセクし、そこらぢうの岩つ角へ矢鱈に身體をブッつけられて、ホレ、足なんずこんねえにあつちこつち傷を造えちまつた。」
「フム、そりやあ氣の毒な事をさせたもんだね、——なにも、そんなにして取つて來なくつたつてよかつたのに。」
　私の前へ差し出された、ランプの光で餘計赤黑く見える彼の足の——その割合に小さな足の——ところどころに、な

るほど細く擦つたり截つたりしたやうに見える傷痕を見ながら、私は彼を心から氣の毒に思つた、……一體それは、私が初めから彼にそう云つたわけでは無かつた、然し、シヤウヤンも呼ばうと私が晋吉に云つた時、晋吉が、それぢやあシヤウヤンには鮑を取つて來させますべえ、と一人で嚥み込んだやうに云つてゐたのを、私は別に大して氣にも掛けずに、そのまんまにうつちやらかして置いたのだつた。

「さうだが、取つて來るつて云つて置きながら取つて來ねえぢやあ、おらあどうしたつて濟まねえと思つただから……。」

そう私に云はれてやや愉快そうに、シヤウヤンは眉をピリピリツと動かせながら獨り言のやうに呟いた……。

その取つて來たばかりの鮑や、晋吉の章魚なぞは、叔母までがキヨやばあや達に手傳つて働いて、早速にその晩の酒の肴に料理をされ始めた、——章魚は酢章魚にする爲めに切られた、鮑は、フクラ煮にするか蒸すかと云ふ相談に叔母から持ち出されたが、私と晋吉との意見に從つて、その貝らしい味ひの一番出て來ると云ふ水貝にする事に定められた、それは、同時に一番簡單な方法でもあつた、剝き出された肥つた白い肉は、忽ち大きな骰の目の如くに角にブツブツに切られて、山から樋で引いて來てある淸水のなみなみと盛られた鉢の中へ投げ込まれて行つた。

間も無く、私達はみんな海に最も近い、荒い波の音の絕えずその中へ響いて來てゐる座敷の方へ移つて行つて、その眞中へ二つ續けて並べられたチヤブ臺を圍んで、各々勝手に胡座を搔いた、晋吉はキヨ達に手傳つて臺所の方から、出來あがつた料理を一々運んで持つて來た、いろいろな器物へ入れられて、鰹の吸ひ物だの、酢章魚と胡瓜揉みとを附け合はせた皿だの、やや白濁した水貝の水の鉢だのが、各々の前へ所狹いばかりにゴタゴタと並べつけられた、その眞中へは、恰かも何かの工場の烟突の模型ででも有るかのやうに、モヤモヤと白い湯氣の立ち騰る白い德利が幾本も押し立てられた。

「ヒヤア！——こんねえにハア素敵な御馳走は、おらあ生れて始めてだ。」

眼の前の食べ物や飲み物の列を眺めて、シヤウヤンは如何にも驚いたやうな聲を發した。

「酒はウント買ひ込んであるから、幾らでも安心して飲むがいいよ。」

私は、隣りにゐる彼に盃をさしながら云つた。

「一升一圓の遠藤の酒だ、……どうして、あすこの一圓の酒あそう馬鹿にしたもんでも無えぞ。」

モウ醉ひでもした如くに、元氣づいた聲で晋吉が怒鳴つた。

「ウン、こいつあうめえ、うめえ、——ふんとうの處を云ひやあおらあ、今日を樂しみにしてゐただ　肴も、どれもこれもみんなウマそうだなあ。」

急に子供のやうな嬉しそうな顏つきをして、シャウヤンは頻りに章魚や胡瓜をムシャムシャ食ひ始めた。

「成程。此の水貝はこりやあ非常にうまいねえ。」

私は鮑の水貝と云ふものを、その時初めて口にしてゐた、シャキシャキと固くてゐながら、然かも口の中へ入れて嚙んでゐると、いつの間にか欺しでもした如くに、柔かく融けるやうに舌へ沁みて行く貝類特有の一種の風味に、私は堪らない自分の心の好愛を感じた。

「こいつだきやあ、幾ら食つたつて決して腹を惡くするなんちう心配は無えです。一寸見は硬えやうだが、腹ん中へ入りせえすりやあタダ融けちまう。長く水ん中へ漬けて置きやあ、おしまひにやみんな生つ白い水だけに化けちまう奴だから。」

晋吉が向ふの方から私に云ひ掛けた。

「此の貝は、こりやあみんなあんたに上げますべえ、……ナアニ、おらあ鮑なんちう物あもう食ひ飽きちまつてゐるだ食はつと思やあいつだつて食へるだから、ハア珍らしくも何とも無えどうかすつと二十位え一緒に水ん中で食つちまう事も有るですよ。」

そう云ひながら、シャウヤンは自分の前の水貝の鉢を私の方へ押してよこした。

「それぢやあ、此の章魚の方はシヤウヤンのところへやらう。」

私はその代りに、章魚と胡瓜との皿を彼の前の方へ移した、酒をグイグイと呑みながら、同時に如何にもうまさうに彼は忽ちその二枚の章魚の皿をみんな奇麗にペロリと平らげて行つた。

「おつそろしいうめえもんだな、……何ちうもんだつぺえか、ハヤこりやあ。」

彼は又、鹽ウニの小皿をつツついて驚嘆の叫び聲を擧げた。

「それは雲丹さ。」

「ウニ？……フム、こんな味の物あおらあ生れて始めて食つて見た。」

「何云つてるだあ、鹽ウニこそ玆處らにやあ無えが、こいつの生の奴あ、お前達や幾らでも取つて食つてゐるぢやな無えか――。」

私の片側の門番の老人が、そのシヤウヤンの言葉を聞いて輕蔑したやうに呟き出した。

「泥棒をして取つて來た者かと思ふと、何だか特別な味があるやうな氣がするよ、こんな贓品を食つたからにやあ、然し僕もトウトウ立派な共犯だね、――だがシヤウヤン、あんまり大膽なやり方をして、見つけられ無いやうに精々氣をつけるがいいぜ。」

熱燗の醉ひがのぼつて來て、私は彼の肩を叩きながらしやべつた。

「ウンウン、……。」その私の言葉にうなづくやうに彼は自分の首を上下に搖かしながら答へた。

「おらあハア、實はもう今夜つきりで、ひとまづ鮑取りやあ打ち切る積りでゐるですよ、……どうも、模樣が少うし險呑になつて來ただから。」

「險呑？――見つかりさうな氣がするのか。」

「ウン、ホレ、あすこの岩屋ん中にゐる奴が、此の頃あ餘計おれを目の敵にして、一生懸命見つけべえ見つけべえと擱

つてゐるですよ、あいつあ、おれを掴へりや金が貰へるばかりぢやあ無え。おらあ彼奴と或る事で喧嘩をして、それつきりで今仲が悪いだからどうも安心が出來無え。」

「そうか、今夜はそれぢやあその盗人仕舞ひにウント飲む事にしやうぢや無いか、――ダガ、ここらの人間は馬鹿は随分馬鹿だね、幾らシャウヤンがはしつこくたつて何だつて、今迄どうして一遍も、シャウヤンをふんづかまへる事が出來ないんだらう！。」

「こりやあ内密だが、おれにやあハア、チャント見つから無えやうな秘傳があるだ。」

急にやや聲を低めるやうにして、彼はフト云ひ出した。

「秘傳？。つて、一體どんな秘傳があるんだ。」

「ナアニ、何でも無えがかうだ、ホレ、水ん中へ漁師が入つてゐる時にやあ、誰でもみんな腰から長え綱を引つ張つてその先きへ浮き樽を一ツづつくツつけてゐますべえが、疲れて來ると、そいつを兩手で抱いてから休む、……盗人でもする位えの者にやあ、ヤツパリそれ相應の智慧がチャント附いて來るもんでね、おらあその樽に仕掛けをして、その底を幾らでも自由に開けられるやうにして置いて、海ん中へ潜り込んで取つた鮑あ、その底の板を開けて下からみんなその樽ん中へ入れちまうですよ、そうやつて泳いでせえゐりやあ、ソレ誰にも解りつこが無え、岩の上へあがつた時にやあ、又その樽を尻の下へかつて腰を掛けたまんま平氣な面をして休んでゐると誰も氣が附かねえ、手や褌位えは見てもマサカその樽ん中へ入つてゐるたあ思はなくて、おらあ今日までマダ唯の一遍も、その樽ん中を見せろつて云はれたタメシが無えだ、ハハハハ、――馬鹿つちやあ、人間は存外馬鹿なもんですよ。」

「おい、おい、シャウヤン！。」

門番の老人が、その時彼へ向つて突然に呼びかけた。「おらあ一つ歌ひてえ歌が有るだが、どうもシャウヤンに氣の毒だから、ヤア歌はなんでゐべえよ。」

「歌ひてえ歌があらば、勝手に歌つたらよかつぺえ。」
「歌つてもいいか、シヤウヤン、……ホレ、磯の鮑の片思ひ、つちう奴を。」
「幾らでも歌ひなせえ、――おらあ何も、鮑のやうな片思ひぢやあチツトモ無えだから。」
「ヨウ、ヨウ、シヤウヤン……。」
上ずつた調子で、もう大部酔ひが廻つて來たらしい嘉衛門の息子が向ふからわめいた。
「ダガ一遍、ふんとうにおれもドキリツとしたことが有つたですよ。」
シヤウヤンは、そつちの方へは構はずに。私の方へ向いてさきの話のつづきを始めた。
「或る時丁度向ふの方に見張りの野郎が看てゐる時、そうやつて採つた鮑の樽をさげて、ヤツト舟ん中へあがつただ、そうすつと、うんまり中が重かつたセイだか何だか、その樽を舟の上へ持つて來るが早いか、イキナリ底が抜けてバラバラツと鮑がみんな舟ん中へ堕つちまつたです、その時のびつくりした事つて云つたら！……今度こそあ見つけられたかと思ひながら、何しろ向ふで見てゐるだから、その貝を拾ふ事も出來なけりやあ、舟をこいで歸つて行くわけにも行か無え、ふんとうに、あんな困つた事あ無かつたです。――それでも、トウトウ見つからずに濟んぢまつたから、おらあそれから自分の運を信じるやうになつたです――。」
そうやつてシヤウヤンが私に話してゐる時、一方では音吉や老人や嘉衛門の息子達が、モウ磯節を歌つたり、ジヤンガラ念佛を歌つたり、オイトコ節を歌つたりして盛んに騒ぎ始めてゐた。
「ヲツピ！　ヲツピ！。」
顔が黒くて鼻が尖つて歯の並びが悪くて、一寸何かの面のやうな恰好をした顔の嘉衛門の息子は、やがて堪らなくなつたやうにシヤウヤンを呼びかけた。「話してばつかり居ねえで、チツタア歌ふか踊るかし無えだか。」
「ヨシヨシ、……そんぢやあ、久しぶりにヲツピ踊りでも踊るべえか。」

シヤウヤンは急に、赤々とした顏をそつちの方へ向けてそう云つて應じた。

「萬歲！——そいつを待つてゐただ、サアやつたり、やつたり。」

「ヨシ來た。」

そう云ひながら、つゞいてシヤウヤンはいきなり腰から手拭ひを拔き取つて、それを頭へ鉢卷きに結んでフラフラと立ちあがつた、それから兩方の眼を剝き出すやうにして、グニヤグニヤとした調子で兩手を頻りに上下へ動かし始めた——が、少しそれをやつたかと思ふと、不意に氣が脫けでもしたやうに、又兩腕をダラリと垂らしてそこへ突つ立つた。

「どうしただ、つゞけてやれ、つゞけてやれ。」

ワアワア云つて騷ぎ出した皆の者は、その彼の樣子を見て促し立てた。

「いんや、踊りにやあ。やつぱりハヤシが、附かなけりやあ駄目だ、ハヤシなしぢやあ、間が拔けてゐてマルデ踊れ無え。」

「それぢやあ、おれ達がハヤシをやるべえに、サア踊れ！。」

そう云ひつつ、嘉衞門の息子を始めとして、ガチヤガチヤとみんなでそこに在つた箸で皿小鉢の端を叩き始めた。

「テケ、ヒヤツ、テケ、テケレツヒヤツ！……。」

その騷々しい音に合はせて、自分でもそんな事を口で云ひながら、シヤウヤンは又その手を上下へ搖かして、丁度章魚踊りのやうな恰好をしてそこへ氣輕そうにフラフラと踊り始めた。

「ヤツパリ駄目だ、駄目だ！。」

然し少しすると、全く興味が乘つて來ないやうに再び踊りをやめて、彼はペタリと自分の座へ腰をおろして、その額の鉢卷を解いた。

「ヤツパリ、あお云ふ山車の上なんずで、笛や太鼓の音に合はせて夢中に飛んだり跳ねたりする時にやあ出來るが、斯

う云ふ處ぢやあどうしてもウマク行かねえ。」

　急に悄れたやうな、同時に何か寂しさにでも襲はれたやうな顔つきをしながら、彼はそう云つて、そこに並んでゐた幾つかの盃を取りあげて、自暴のやうにつゞけさまにグイグイと飲み乾した。

「どこで、一體シャウヤンはそんな踊りを覺え込んだんだ、――遊んでゐるうちに、女からでも教つたのかい。」

　その彼の様子を眺めて、私は笑ひをやめて彼に向つて訊いた。

「ナアニ、誰からも教りなんずした事あなえ、タアダみんな自己流だ、一遍何の氣なしにオツピの面を被つて立つて踊り出したら、それからハアみんなで、ヲツピのシャウヤン、ヲツピのシャウヤン、ておれの事を云ふやうになつちまつただ、――アア、そうだがおれも、今夜あ馬鹿に酒が廻つちまつたなあ、いつも此れつ位えでこんねえに酔ふなんちう筈あなえが、ヤツパリ今夜あ氣がらくだつたで、それでこんねえに酔つ拂つちまつただかな。」

　グツタリとしたやうに、そうして如何にも芯から酔ひが廻つて來たやうに、そう云ひながらシャウヤンは太い手を自分の額へ當てた。

…………………………………

　その翌日の朝、私は自分の持つて來た鞄なぞを、ワザワザやつて來た音吉に一切持つて貰つて、その海岸の叔母の家を立つて、停車場へ行く爲めに山を越えて町の方へ一緒に歩いて行つた。

「ゆうべは隨分みんな騒いだねえ。――僕の寝た時は、モウ拾二時過ぎだつたよ。」

　私は先きへ歩いて行きながらあとから、來る音吉に向つて話し掛けた。

「ふんとうに、あんな大騒ぎをした事あ、御隠居様の邸で此の頃始めてです……。」

　そう云ひかけて、音吉はフトぶつきらぼうに附け加へた。「嘉衛門とこの息子とシャウヤンとは、あのまんまマダ今朝までうちへ歸つて來無えだそうです。」

「エ？……。」

私はびつくりして、思はず音吉を振り返つた。「歸つて來ないつて、一體どこへ行つたんだらう—。」

「キツト、あのまんまジツとしてゐられ無えで、二人とも町の草餅屋(淫賣宿)さ行つちまつたですつぺ。」

何でも無い事のやうな、平然とした口調で音吉は私の問ひに答へた。

「アア、そうか、道理で今朝二人の話が何も無かつたと思つたら、——そうだが、あの月も無い暗いおそい晩に、あんな酔つぱらつた危つかしい足どりをして、二人で山を越して又町まで出かけて行つたんだらうかね。」

再び驚かされて私は音吉にきき返した。

「行きますとも、そんな事あ若え者あ平氣ですが、——何しろ二人とも、同じやうに女房をうちへ置けずに出しちまつて、あの若さで一人ぽつちでブラブラ寂しく暮してゐるだから、時々遊びにでも出掛け無くちやあゐられ無えなあ無理あ無えです。」

「嘉衛門の息子も、ヤツパリそんな事になつてゐるのかね。」

「そうです、もつとゝあれの嫁あ、普通の家から貰つたもんですが……。」

丁度晴れた町の方の海を眼の下に眺めながら、その音吉の言葉を聞きながら、私は何と無く二人の無智な若者を、自分からそんな事の方へ唆かしでもしたやうな、一種の諧謔の感じと同時に、湧きあがつて來るやうな憐憫の感情を心の中に覺えた。

「そんな事をして、そうだが惡い病氣にでも罹らないといいがね。」

音吉とその町のこつちの片端のところで別れて一人で俥に乘つて、その夏の朝の輝いた爽かな空氣に包まれでもしてゐるやうな町を過ぎて行く時、兩側に薄汚いやうな形をして立つてゐるそれらしい料理屋を、眞逆とは思ひながら、一つ一つ私は見るとも無く見ながら通つてゐた。

蛇のやうに長さばかりヒドク細長い、その一本道の漁師町を、私の倅が丁度殆んど出はづれやうとしてゐる時だつた、もうそんな氣もちも失つてフト見上げた、右側の或る家の二階の手摺りのところに、その時思ひがけ無くも、私はボンヤリと突つ立つてゐる浴衣掛けの、一人の眞黑く日にやけた逞しい若者の姿を認めた。

「アッ！。」

私と同時に見つけたやうに、殆んど一緒に兩方の口からそう云ふ言葉が洩れた、――その短い叫び聲を發すると、思はず身を退いた如くに、彼はツイと自分の身體を中の方へ引き入れた、が、直ぐ再び手摺りのところへ身體を突き出して、

「ゆうべはどうも……。」

と可成り大きな聲で私に呼びかけながら、シヤウヤンは輕く頭を下げた。

「どうも――。」

倅の上でそう私が答へた時には、私の倅はもうその町の家並みから全く出はづれて了つてゐた。



兄弟

—(或る人間の手記)—

宇野浩二

僕の兄が死んだ、——と言つたら、君は驚くだらう、君と僕とはもう二十年近く附合つてゐる仲なのにも拘らず、君は、僕に兄なぞがあつたのか、とそれを驚くだらう、或ひは、そんなに隨分長い間の附合ひなんだから、薄々君も知つてゐたかとも思ふが無論僕は彼に就いて進んで話したことがないばかりでなく、それに近い若しくは近づく話は避けるやうにしてゐた位だから、元もと他人の一家の事なぞに立入ることの嫌ひな君は、他の世間の兄弟の場合と違つて、僕と僕の兄といふ者に就いて君の頭に浮かべたことはないだらうと思ふ。君にでさへさうなんだから、大概の他の人たちも皆僕に兄があることを知らないだらうと思ふ、事實、僕は大抵の場合、人に、あなたはお一人切りなんですか、御兄弟はおありにならないんですか？　と聞かれた時、いつとなく、實にはつきりと、えゝ一人なんです、と答へるやうになつたものだ、だが、あるものをない、それが品物ではなく人間で、他人でなく現に目上の、骨肉の兄を抹殺することであるから、はつきりと答へるとは言ふものゝ、そのはつきりさが變なのだ、はつきりと答へながら、僕は心の中がうづ〳〵するのを感じることだ、だから、又その感じを壓し潰さうとでもするやうに、えゝ、一人切りなんです、と止めを刺す

やうにさう言ふのだ。そして心の中が先の三倍もうづ／＼するのを感じることだ、その兄が死んだのだ、彼は最早やこれからは僕のやうな不逞な弟に抹殺される氣遣ひなしに、公平無私な、人間よりももつと豪いに違ひない人にこの世から拾ひ上げられて、何でも極樂か天國か、そんなやうな、いゝ人間の行くところへ行つたに違ひないのだ。それに乾度違ひがないやうに、僕は、彼と同じ父を父に持ち同じ母を母に持つ僕は、何でも審判所か閻魔の庭か、そんなやうな所で厳しくやつつけられて、その結果やつぱりどう辯護してもらつても無罪にならずに、到頭針の山か血の池かそんな所に追ひやられることに違ひないのだ。

閻魔の庭に引出されて、さて調べられることになると、僕は今すぐ死んでそこへ行つたとしたところが、流石の彼をも呆れさせる程長いこと掛るに違ひない、僕の惡い事をした數は箇條書位では追付かないで、丁度込入つた家の系圖かカード式の記憶法の圖見たいに、惡い事から惡い事の枝が出て、その枝から又幾つもの枝が出て、別の幹には又別の色々の枝が出て、と言つた風に連綿と盡きないことだらう、それ等の一々をどんな細かい事だつて見発しさうにない閻魔大王は、それ等の中の一つであるところの、僕と僕の今度死んだ兄の事に就ても厳しく調べ且訊問するに違ひないのだ、お前とお前の善い兄とが娑婆にあつた時の事を正直に申し立てろ！　と彼は高い臺の上から、あの松明見たいな目を見張つて言ふだらう、僕だつて、外のどの人間とも同じやうに。そこで、大根の正直をすつかり曝露して、その時は白狀するよ、――これはその下書見たいなものゝつもりなんだ。

兄は僕より七年早く僕等の兩親の長男として生れたものだ、彼が生れて何ケ月かの後、彼がごそ／＼と部屋の中を這ひ廻つてゐる姿を見て、あゝあゝ、と僕等の父は溜息をついて獨言つてゐたさうだ、この子は大きくなつたら、何にしたらいゝもんかなあ？　流石に子を見る者は親に如かずといふ譬の通り、さう言つてお前のお父さんは、そんな子供の分からもう兄さんのことを心配してゐたものだ、と後に僕は祖母だつたかが言つたのを聞いたことがある。僕自身の直

僕の兄に就いての記憶は、年齢の程は後で聞き合はして分つたのであるが、何でも僕が二歳の時のことださうだ、僕の覺えてゐるのは、遠くの方に變な恰好に歪んで建つてゐる城が見えるのだ、そして近くの景色は少しも記憶にないのだが、ぶらんこがあつたのだけを覺えてゐて、そのぶらんこが前後に搖れるのに乘つて、泣いてゐる子供の顏を覺えてゐるのだ、子供の癖に、丁度西洋人の子供のやうに髮の毛を五六分位の長さに延ばしてゐて、その毛が柔かいものだから、生意氣らしく額に垂れ掛つてゐる、その子が澁面を造つて泣いてゐる顏が、遠くの城の景色と、搖れてゐるぶらんこと共に、今でもはつきり思出すことが出來る程に覺えてゐるのだ、それは何でも僕の生れた筑前博多の町の公園の景色だそうだ、その時泣いてゐた子供が、僕の兄なのだ、その時分に寫した彼の寫眞を大きくなつてから見たが、成程、その寫眞の顏とそつくりである、その話を僕が祖母にすると、僕は彼女のことは覺えてゐないが、その時彼女も一緒にゐたとかで、僕が乳母の背中の上からぶらんこを見て、廻らぬ舌で「ぶらん、ぶらん」と言つて、身體を上下に動かして喜んださうである、父もその時一緒だつたさうで、兄以來七年も經つてからのことで、もう後はないのだらう、と言つてたところへ生れた僕のことだから、ひどく僕を可愛がつてゐたとのことである、彼はその後も幼ない僕の顏を見ると、始終「ぶらん、ぶらん、又ぶらんを見に行かうか、」と言つたものださうだ、それは餘談だが、その「ぶらん」に乘つて泣いてゐた兄の顏が、僕が生れて始めての彼の顏の記憶で、無論その時の彼の姿などはちつとも覺えてゐない。

それから彼に就いての記憶はずつと飛んで、その間にも考へたら何かあるかも知れぬが、今思ひ出すのは五歳の時で四歳の時に僕の父は死んだものだから、その時は前の筑前博多を引上げて、神戸に來てゐたが、その町の僕の家には奥の間に對して、四角な庭を挾んだ離家があつたので、その庭を取卷いて、それ等の建物を結ぶやうに椽側になつてゐたものだ、その離家には祖母の妹で、その唯一人息子が東京の大學に行つてゐるとか言ふ、つまり大伯母が住んでゐたものだ、その時分のことで、兄は僕の先に立つて、僕は兄の後から、手に手に大小の金盥を持つて、火箸でそれを叩きな

がら、毎日程その椽側をぐる〱と廻り歩いたことを覺えてゐる、すると一周に一度づゝその大伯母のゐる離れの部屋の前を通る譯なので、彼女が喧しいと言つて怒るのだ、すると兄がワーッと言つてやつぱり金盥は叩き止めずに走るのだ、で、小さい僕も走るのだ、すると母家の方から祖母が喧しいぢやないかと言つて叱るのだ、兄は尙一層、その兩方を逃げようとでもするやうに速力を早めて走るのだ、だが、元もと路はそれ等の兩方の部屋の前を通じて廻つてゐる椽側なのだから、走れば走る程、それ等の叱り手のゐる部屋の前を幾度も通る譯なのだ、そして終には屹度兄は叱られて泣かされるのだ、僕は直接の責任者でないと見られて、叱られないから泣かないで笑ふのだ、けれども翌日の同じ時刻になると、兄は前の日に叱られたことなどはけろりと忘れたかの如くに、僕を從へて又々金盥と火箸を持ち出すのだ。僕はその時の家や椽側や庭の樣子と、そこで惡戲をした兄弟の姿を、まるで他所の子のやつてゐたのを見でもしたやうに、目に浮かべて今も思ひ出すことが出來る、考へて見ると、それが僕の五歲の時だから、兄は十二歲に違ひなかつたのだ、兄はやつぱり何處か低能者に違ひなかつたのだ。

何でも彼は幼ない頃、耳の病氣を患つたのださうだが、それの治療が手遲れにした爲に、彼は聾――と言つても、老人になつてよく人がなる聾のやうに、耳が遠くなるといふ程度で、可成りよく聞える時と、大いに聞えない時とが日に依つてある、と言つた風の種類のそれ――になつたものだ、その爲になつた愚鈍のやうに時には思はれもする事があつたが、いや、やつぱりさうではなく、彼が這ひ歩く赤ン坊の時旣に彼の父が、この子は大きくなつたら何にしたらいゝだらう？と首を傾けながら獨言つたのが噓でないやうに、だがそれは晩年には朝晝晩と一升づゝ日に三升以上の大酒を飮んで、到頭腦溢血で死んだ、當のその父の報いを受けて生れたものだと言へるのだらう、彼は耳が遠い故に、といふよりも、耳が遠い上に、やつぱり幾分の低能者に違ひなかつたのだ。

さて、僕の六歲の時に僕たちの家は神戸から、大阪に引越して來て、そこで僕は七歲の時から小學校に通ひ始めたの

だつた、その間又一寸兄に就いての僕の記憶がない。

僕の行つた學校は主に軍人の子弟のために建てられたやうなもので、軍人の子か、でなければ何でも彼等を保證人に持つてか、の外は入學を許されないといふ性質のものだつた、尋常科一年生から高等科四年生まであつたが、學生は皆制服を着て、そこに本や筆や辨當を入れる爲の背嚢を背負はされたものだ、そしてどんな暑い日に雨が降つたつて、兵隊と同じく、傘を用ひることは許されないで、羅紗の外套に、それに附けられた頭巾を頭から被るのだ、そんな風で、學校も聯隊や何かの建ち並んでゐる一劃の中にあつたが、學校の往復に兵隊のうちの少尉以上の人間に出遭つたら、擧手の禮をせねばならぬ規則なのである、先生のことだつて、先生とは呼ばないで、「教官殿」と呼ぶんだ。兄もその學校に入つてゐたのだつたが、僕が尋常一年生になつた時、年の順で行けば彼はもう高等四年生位でなければならなかつたが、やつと尋常四年か高等一年ぐらゐだつたやうに思ふ、もつとも彼が後年世の中に出てからの成績から思ふと、學校の方はまだしもよかつたやうに見える、と言ふのは、それは後に祖母や何かゝら聞いたことであるが、彼は學校でそんなにひどい劣等生といふ程でもなかつた、無論、一度や二度は落第もしたが、大體身體の弱い子供でもあつたから、まる一年休んだこともあるし、隨分一ヶ月二ヶ月と欠席したこともあるし、したので、といふ話だつた。

さて、僕が尋常二年生位の時だつた、多分梅雨時の雨のつゞいた日のことだ、學校の長い廊下に生徒たち銘々の名を書いた札が貼り付けてあつて、その札の横に銘々の背嚢を掛けるやうになつてゐるのだ、そして又その反對の側にもある各々の札の横の釘には各々の外套を掛けるやうになつてゐるのだ、僕は、何者の皮だか知らないが、茶つぽい毛の生えた革でこしらへた背嚢が、雨に濡れておまけに時候の溫氣に蒸されたものか昔の獸に復つたやうな、いやアな臭のするのをやつとこさと肩から下ろして、僕の釘は可成り高い所にあつたものだから、背延びしいしい難儀してそれを引掛けて、それからこれ又雨に濡れて多分にそれを吸ひ込んでゐるものだから、ぼつてりと犬か何かの死骸見たいに重くてそれに不愉快な湯氣が立つてゐるところの外套を、誰も後から脫がしてくれる者もないのだから、釦を外して肩を縮め

て脫ぎかゝつてゐるところへ、「わつしよい、わつしよい！」といふ數人の叫び聲が近づいて來たので、何氣なくハッとしてその方を見ると、どうだ！　五六人の大きな男、と言つてもやつぱり子供に違ひなかつたのだが、僕から見ると三四年も上級生も上級のそれ等の生徒たちは、場合が場合だから大男に見えたのに無理はないのだ、そのまん中に僕の哀れな顏をした兄が、兩手を左右から吊り上げられるやうにして持ち添えられて、それ等のとても抵抗すべからざる群集に押されてやつて來るのだ、僕のところへ何かしに來たのだな、と僕はその瞬間氣が付くと、外套を脫ぎかゝつたまゝ固くなつた、そこへもう「わつしよい、わつしよい！」はやつて來た。

兄の目は、僕の目とは一々、違つて、卽ち大きくて、切長で、二重瞼でだが悲しい哉、それが無慘に尻下りなのだ。その大きな、そしてどちらかと言ふと白目勝な彼の目は、正眞正銘善良で正直に見えるのだが、と共にその目に映る其の中の印象は、確にはつきりしたものではなく如何にも潑溂としない、どんよりしたものであるらしいのだ。近づいた「わつしよい、わつしよい！」の聲に、一瞬間その方に目をやつて直に又落とした僕の心に刻み込まれたのは、不法な難儀に遭つて、その目がどんよりと物悲しく惱んでゐる姿だつた、少年の僕は泣けない情なさに襲はれたものだ。閻魔樣！　僕はこの時生れて初めて、以來彼が死ぬ迄、この兄の存在は僕にとつて苦痛だと感じたのです。けれども、やつぱりこれは不逞な弟の考に違ひないのだらう、哀れな兄を氣の毒に思はずに、自分にとつてその存在が苦痛だなんて、僕は許すべからざる我儘者に違ひはないのだ。

「おい、吉岡！」とするとその群集の一人が外套を脫ぎ掛つてゐる僕に名を呼びかけた。「お前の兄貴の頭に虱がゐたぞ！」

「弟のにもゐるだらう、」と別の者の聲が叫んだ。

　そのうちにもう群衆は丁度祭禮に出る神輿のやうに僕の傍に押し寄せてゐるのだつたが、その中から一人の男がぐつと腕を延ばして、赤くなつて、恥かしさを隱すために、わざと腰を屈めて靴の紐を解いたり結んだりしてゐた僕の帽子に

手をかけたものだ、で、僕はやつぱり顏を上げ得ないで、下を向いたまゝ手を上げて帽子を抑えると、

「小さい子ぢやないか？」と群集の中から又斯う叫ぶ者があつた、「勘忍してやれ、勘忍してやれ！」

「あんまり苛めると、泣くぞ、」と又別の聲が言ふのだ、「勘忍してやれ。」

その間にも絶えず、「わつしよい、わつしよい！」と叫ぶ聲、「虱、虱」「汚ない、汚ない！」と叫ぶ聲はつゞくのだ。

そして又群集は元來た方へ、「わつしよい、」の聲と共に引返して行つたので、僕はほつとしてちらとその方を見送ると、今度は先に後方にゐた群集が前に立つて、前にゐたのが後になつてゐるので、兩手を吊り上げられるやうな恰好に兩方から身體の大きな生徒に腕を取られて行く兄の後姿が見えるのだ、見ると彼の上衣の下から尻の上にだらりと水色のメリンスの三尺帶が下がつてゐるのだ、それは僕が不斷に家で着物に締めてゐる帶で、十歳以下の子供だつたから未だしもいゝやうなもの、それだつて大抵の他所の子は黑か白かの帶を締めてゐたものだ、可笑しかつたに違ひない。」それを十四五にもなる兄は始終僕に貸してくれと言ひ言ひしたものだが、僕にも氣に入つてたものだから貸さなかつた、見ればいつの間にか彼れはそれを僕に無斷で持ち出して洋服のズボンの腰にバンド代りにしてゐたのが、それが解けて今見るやうに狐の尻尾見たいに尻の上にぶら下つてゐるのだつた、だが僕は恨に思ふよりも、二人の友達に兩方から手を取られて、心持中腰になつて、その水色の帶をだらりと尻尾に下げながら、引きずられるやな恰好で行く彼のみぢめさ加減を見ると、悔やしい程情なく感じられた、もう一つ、向う向きになつて行く彼の首筋の生え下りのところが、毛の質はすつかり違ふのだが、血縁といふものは何といふ變なところででも似るのだらう！　僕のもさうなつてゐる通り、毛がまん中に一筋によぢれて、鼠の尻尾のやうになつてゐるのだ、祖母の話では僕の父がさうなつてゐたさうだが今無慙な群集に引つ立てられて、心もち中腰になつて、首を縮めて行く彼の首筋のところを見るともなしに見るとその鼠の尻尾の毛が、何とそれがいぢらしく憫然に見えるのだ！　すると、それが僕にはもう兄だけの姿には見えぬのだ、同じやうな鼠の尻尾の毛を首筋の生え下りに貯へてゐる、自分自身のその邊がむづ〳〵して來たものだつた、どん

な變な特長でも、兄だけか僕だけかゞ持つてゐるのなら忍ぶことが出來るのだが、あゝ骨肉なんてものは、何といふこの人間を製造した者の惡いいたづらだ！　そのうちに彼の姿はその鼠の尻尾の首筋と共に廊下の曲り角に隠れてしまつたが、さうして僕はごぼ／＼した雨に濡れた外套を脱ぐのも忘れて、長い間その場に立つてゐると、チリチリチリと始業のベルが鳴つたのだつた。

　その日の正午の休憩時間のことを僕は又忘れずに覺えてゐる、ひる前に雨が止んで、その時は鉛色の雲の中から薄日が射してゐた、長い間雨に惱まされてゐた生徒たちは大きに喜んで運動場の濡れた砂の上を駈け廻つたものだ、だが、僕は朝のことがあるので、その日は一體にいつになく樂まなかつた、そして何でも、その日に限つて同じ組の者たち迄僕を兄と一緒に輕蔑してゐるやうな氣がしたので、一人で教室の窓の下にもたれてゐると、ふと遠くの方の何處からか「吉岡さがせ、吉岡さがせ！」と叫ぶ大勢の聲が聞えて來たので、ぎくりとして、一層耳を澄ますと、やつぱり間違ひではなく、

「吉岡さがせ、吉岡さがせ！」と何かの歌のやうに節を付けて叫びながら近づいて來る大勢の聲は、私がそこの板壁にもたれてゐるところの教場と、狹まつた運動場を挾んで相對してゐる唱歌室の向う側から起つて來るらしいのだ、それが次第に近づいて來るのだ。あゝ、又これは屹度兄のことから敷衍して僕をからかひ半分に苛めに來た一團だな、それにしても今度のは朝のやうな上級生らしい者たちの聲ぢやあないやうだが？　などと咄嗟の間にも思ひ惑ひながら、あわてゝそこの教室長屋の玄關から内に駈け込んで、丁度僕が今その窓の下にもたれてゐたところが、僕たちの組の教室だつたので、がらんとした机ばかり並んでゐるその中に、胸をどき／＼させながら飛び込んだ、その中に入ると、自分の胸のどき／＼言ふのが聞えるかと思へる程、變にあたりが氣味惡く靜かなんだ、だが表の方では、例の「吉岡さがせ、吉岡さがせ！」といふ歌のやうな叫び聲が、だん／＼近づいて來るのだつた。

　だが、自分の周圍ががらんとして靜かなのに附けて、表の方の大勢の叫聲と共に僕を脅かしたのは、放課時間に教室

の中に入つてはいけない、といふ學校の規則なのだ、僕は全く困つて、急に足音を忍ばせながら、再び教室を出て、廊下傳ひに玄關の方へ出ようとすると、「吉岡さがせ」がもう明らかに唱歌室の横あたり迄來たらしい聲なので、忽ち足のすくむのを覺えて、今度は玄關口を右に見て二三歩行つた時にふと氣が附くと、同じ右側の取附きに銃器室があつたので、咄嗟の間にその中に飛び込んだものだ、部屋の中は眞暗なのだ、恐らく近頃の雨つゞきで、鐵砲の要る體操が休だつたから、運動場に面した方の窓が悉く戸閉めになつてゐたのだつた、僕はこれこそ屈強な隱れ場所だと思つたので足音を忍ばせてその奧の方に、何かに躓かないように用心しいしい入つて行つた、それは古い建物の教室長屋の一部分なので、同じ棟の僕たちの教室も同じだつたが、普通の家のやうに、戸を閉めた此方側には紙の障子が嵌まつてゐたものだ、そしてその戸が又節穴だらけなのだ、だからそれ等を通して來る表の光線で、部屋の中は幽かに明るいのだつた、「吉岡さがせ」はその間に到頭その教室長屋の前の運動場にくり込んで來たらしい氣配なのだ、その時ふと氣が附くと、それ〴〵の戸の節穴から來る光線が、障子に射した所で、表の景色を繪のやうに逆さまに映してゐることだ、中に一番はつきりそれの映つてゐるのを眺めると、見よ！　その繪の中に「吉岡さがせ」の正體がまざ〳〵と現はれたのだつた、それは十人以上の者が一列に手をつないで、横樣に步く蛇のやうに、そんな蛇はあるまいが、凸凹と波のやうな形で步いて來ながら、それ等の者が聲を合はして「吉岡さがせ、吉岡さがせ」と歌ふやうに叫んでゐるのだつた、そして倘僕の驚きに迄！　それが僕と同じ組の連中だつたことだ、僕に味方ではあつても敵ではない筈のものだ、だが、節穴が障子に映してゐる光景は、正しく、辛うじて薄日の射す程のどんよりとした空が下にあつて、當時僕の學校の中で一番新しくてハイカラだつた唱歌室が青々としたポプラの並木と一緒にその上に逆さまに映つて、その又上の砂地の運動場を、それも亦逆さまにだが、往交ふ他の生徒たちの中に際立つて見える一列に手をつないで動いて來る連中は、僕の同級の、僕と何の怨もない級友たちに相違ないのだ、全く四面楚歌の聲といふ譯なのだ、その時、忽ち又遠くの方から、「吉岡さがせ！」よりも一層太い聲の塊が例の「わつしよい、わつしよい！」といふ叫を上げて來た、僕は、そ

こで、もう節穴の繪を見ることさへ堪えられなくなつて、暗い、油と五味の臭のだん〳〵する銃器室の隅に、目を抑えて蹲んでしまつたものだ。

多分、それから間もなくの頃、兄は學校を下がることになつたので、お蔭でもう彼から敷衍して僕がからかひに苛められるやうな事はなくなつたが、今度は、そのうちに僕が段々智恵のついて來る年だつたから、家庭にあつて、近所の子供たちに對して彼のためにきまりの惡い思をするやうになつたものだ、その同じ年のことに違ひない、僕は或夕方、自分の背よりも高い僕の家の竹垣にもたれて、夏のことだ、子供心に映るものは一寸したものだつて何とも言へず不思議にそして物悲しくそして極めてはつきりと、印象されて見えるものだ、だから今でもよく覺えてゐるんだが、その時空には蠅のやうに無數の點に見える程、蝙蝠がひら〳〵と飛んでゐたことだ、それを見たり、それも亦子供心には妙に慌しくて、何と喧ぶやうに物悲しく見えるところの夕暮の町の景色を眺めたり、僕は妙な變屈な子だつたから、誰とも遊ばずに、さうして默つて竹垣にもたれてゐたものだ、同じ年頃の子供等は僕をおいてきぼりにして、その慌しい町を空の蝙蝠見たいに駈け廻つてゐるのだ、だが彼等は蝙蝠と違つて、口々に何か喋つたり、笑つたり、蹈つたりしてゐるのだが、竹垣にもたれてそれ等を見てゐる僕の耳には、それ等の聲や町のどよめきは何か遠い國の物でゞもあるやうに聞えるのだ、それ等の起つてゐるところは、自分と同じ大地の上の、直近所のことなのだが、自分の行けない違つた所のやうな氣がするのだ、そして僕は夢でも見てゐるやうにぼんやりしてゐたところが、

「坊ちやん、幾つ?」とその時、僕の傍にいつの間にやつて來たのか、近所の者らしいのだが、どこの人だかよくは知らない、赤ン坊を抱いた老人が斯う聞くのだ。

「八歳」多分さうだつたから、さう答へたものだ。

「兄さんは?」とつゞいて老人は聞いたのだつた。

すると僕は、閻魔樣、僕は默つたまゝ首を横に振つたものです。
「ないの？」と相手は追及するのだ。
「えゝ、」と僕は確に斯う口の中で答へた。
「弟さんや妹さんは？」と相手は未だ聞くのだ、それには僕ははつきりと頭を横に振つたところが、「ぢやあ、お一人切りなの？」と聞かれたので、すると
「いゝえ、」と僕は口の中で答へて、それにも頭を横に振つたが、その瞬間自分の嘘が馬脚を現したことに氣がついて、眞赤になつて、こそ／＼と家の中に逃れて入つたのだつた、それから、薄暗い家の中が變に寂しいものだから、玄關の間のところに止まつて、通に面した小窓に寄つて、そこから又背延びしながら外を見てゐたものだつた、先のと同じ空と町とがそこからも見えるのだつた、やつぱり蝙蝠も飛んでゐたし、子供等も遊んでゐた。
その時、ふと横町の方から喇叭の音が次第に近づいて來たが、それは豆腐屋のではなく、兵隊の喇叭らしい響なのだが、確にそれは子供が吹いてゐるらしい調子だつた、間もなく、それは町の腕白子供たちが兵隊ごつこをしてゐて、今しもその小さい兵隊が一列に並んで歩いて來るところだと分つた、そして見よ！一番先頭に、何處から持出して來たものか、彼等に不調和な程大きな旗を持つて、やつて來るのが、今し方、表で見知らぬ老人に聞かれて、ないと言つたところの、僕の兄なのだ、彼の後からは、思ひ思ひに竹や木の棒を鐵砲の代りに肩に擔いだ十人ばかりの子供たちが、いづれも鹿爪らしい顏をして、足を上げて並んで來るのだつた、それ等の棒の鐵砲を擔いでゐる子供たちは僕と同い年位の子供を始として、後から來る者ほど年下の者たちだつた、そして列を離れて、左手で喇叭を吹きながら、右手で竹の棒をサアベルのやうに持つて、大將になつてゐるのは、たしか僕より一つ年上の隣の家の子なのだ、皆の中で一番年上の、大將になつてゐる子よりまだ六歳も年上の、僕の兄は背だけは皆より頭拔けて大きかつたから、大きに先頭の旗持には都合がよかつたのだらうが、皆から存分に輕蔑されてゐるのも思はずに、大きな旗を重さうに持つて、下つた目

を眞面目に落ちつけて、誰よりも如何にも兵隊らしく裝つて、胸を張り、足を上げて步いて來る彼の姿を見ると、僕は堪らなくなつて、今迄の感傷的な氣持からさらりと離れて、彼を睥みつけたことであつた。すると彼は、その時自分の家の方を見て、自分をん睥でゐる弟の姿を目付けたのに違ひなかつたが、平氣な顏をして、而も愛嬌らしくにツと微笑をさへ見せたのだつたが、その時の彼の顏を僕は今でも覺えてゐる、その時、そして僕は仕樣がないので、みんなに見えないやうに、今度は「家にお歸りなさい」と言ふつもりで手招をしたのだが、すると、彼は依然として步き進みながら、頭を二三度横に振つた、僕が窓からのぞいてゐるとは知らない、大將になつてゐた子は兄の他所見するのを目付けて、

「旗持、他見見しちやあいけない!」と吹鳴つた、すると、彼はあわてゝ忽ち以前の眞面目な顏にかへつて、一生懸命に胸を張り、足を上げて進んだものだ、それを見て、僕はまるで自分のことのやうに顏を眞赤にして、皆から見られないやうに窓の下に蹲んでしまつたものだつた。

僕が九歲の時だつたと思ふ、僕の家が解散になつて、僕は兄と一緒に母方の伯父の家に引取られることになつたのだが、多分伯父は僕等を養ふ負擔に堪え兼ねたものか、間もなく或日、僕たち兄弟は神戶の、死んだ父の從兄弟の家に預けられることになつたらしいのだ、その父の從兄弟のA――といふ人間は、まだ僕の父の生きてゐた頃にはひどく不遇で貧乏してゐたので、僕の家で色々と物質上の面倒も見てやつたとのことであるが、當時は或事業が當つて、百萬圓からの財產家になつてゐたのだ、伯父に連れられて、僕たち兄弟は或秋の日神戶、と言つてもA――の家は兵庫の方にあつたので、それに向つたのだつた。

兵庫の停車場を下りると、兩側にちつとも停車場前らしくない、寂しい町がつゞいてゐるのだ、だが、町の兩側には大方葉の眞黃色になつたポプラの並木が行儀よくすく〳〵と並んで立つてゐたもので、さういふ所を一町ほど行くと、

突き當りの、それと直角に交はつてゐる町は一寸した賑かな通で、丁度その角のところに大きな煉瓦の塀をめぐらした家が、僕たちの行くA――家だつたのだ、そこには兄と同い年位の賢造といふ少年がゐたが、彼に連れられて、伯父がA――家の主人か誰かと話をしてゐる間、僕たちは近所の野原に遊びに行つた、まだ明けない時分のことで、町を一寸横に入ると、もう案山子などの立つてゐる田圃に出るのだつた、そこから見ると、今し方通つて來た停車場前の通の町の屋根の上には、黄色いポプラの梢だけがすく〳〵と鈴の穗先のやうに並んでゐる、それも、稲に止まつてゐる蝗取りに夢中になつて、半町も離れた稲田の上に、兄の肩から上が見えてゐるのも、さては又黄色い山がつひ十町ほどのところ迄迫つてゐる景色も、住み馴れた家を離れて、のみならずこれからは知らない人の家で暮さなければならないと思ふ子供心には、何も彼も悲しくて堪らず見えるものだから、僕は並んで歩いてゐる賢造君に、

「もう歸りませうか？」と言つて見た、伯父の顔が見たくもなつたのだ。

「さあ、」と彼は一寸考へてゐる風だつたが、「もう一寸、あそこ」と前方の小高い丘を指さして「あそこ迄行つて見ませう、あの直下を汽車が通りますから、汽車が一つだけ通るのを見て歸りませう、兄さんは？」と言つて、尚夢中で蝗を探してゐる僕の兄の方を見て、「××さ――ん、」と呼んだ。

そこで、二三度呼ばれて、兄はその日から袂のついた着物を着せられてゐたので、その中に取つた蝗を入れたものらしく、それを上から袋のやうにして摑んで、僕たちの傍に歸つて來たが、その恰好が僕は自分のことのやうに賢造君に對して耻づかしい氣がした、目指した丘の上に來て見ると、なる程、僕たちの直足元を刀のやうに光つた鐵道線路が右へ右へと何處までもつゞいてゐるのだ、左の方は一丁程先のところに、先程僕たちがそこで下りたところの停車場が、それに突き抜かれて、横から見たところが見えるのだ、稍々長い間、「もう直西の方から汽車が來ますよ、」といふ賢造君の言葉に從つて、僕たちはその上で蹲んで待つてゐた、僕は汽車はそんなに見たくないのだが、それが通りさへすれば伯父のゐるA――の家に歸れると思つて、待ち遠しがりながら足元の草などを挘つてゐたがやがて、

「あツ、來た！」といふ頓狂な兄の聲に、頭を上げると、なる程、地平の方から白い煙と黒い點が見えて來た、そしてそれがだん〱實景よりも寧ろ活動寫眞めいて、姿をはつきりさして來たかと思ふと、やがて凄まじい音と地響と共に僕たちの目の中一ぱいに膨脹したかと思ふと、早や足元を走つてゐた、その途端、「萬歳！」と十六歳にもなつて、立ち上つた兄は馴れない袂の手を擧げて叫んだ、僕は又、そこで、實造君に對してひどくきまりの惡い思がされて、そつと彼の顏を覘ふと、黒い顏の彼は、その特長の眞白な大きな反齒をぐつと見せて、可笑しくない表情の笑ひ方をしてゐたので、僕はそれを見て更に赤くなつた。

　そして僕が先登に立つてA――家に歸つて行つたところが、元より隨分大きな家なのだから、人の一人や二人が增えようが減らうが何の影響が見える筈がないが、何だか僕は急いでそこの玄關に上つた時、變にうそ寂しい氣がしたと思ふと、果してA――の主婦の言葉に、「伯父さんは今の汽車で急に用を思ひ付いたからと言つて、お歸りになりました、さあ、これからあんた方はこゝの家にゐるんですよ、」と宣告を下された、僕は、しかし、もうその時は餘り驚かなかつた、そんな事だと思つた、と思つたのだ。

　僕たちの父の從兄弟であるところの、A――の主人は變な、規丁面な、衞生家だつたので、毎朝定つた時間、確七時だつた、かに起されて、それから手水を用つたり何かして、そして三十分間と、夕飯前に三十分間とを、「運動」と稱して外を散歩して來る規則を僕たちに與へたものだ、僕はそれが厭で堪らなかつた、けれども仕樣がないので、毎朝定つた時間になると、兄と一緒にそこの煉瓦の門を出て、前の通を町が外れるところ迄出て、そこ迄二三町しかなかつた、そして田圃の裏道を通つてA――家の裏門のところへ歸つて來るのだが、それだけでは、どんなに緩り歩いても、三十分が經たないのだつた、子供のことだつたから、お腹の空いてゐるのも苦しかつたし、その定められた時間が經たないのも苦しかつたし、尙その上に知らない景色を見るものだから、色んな悲しげなことが思ひ出されて、心細くなるのが堪らなく厭だつたのだ、町外れの角に芋屋があつたことを覺えてゐる、いつでもその芋屋の釜から湯氣が立つてゐて、

芋のにほひがしてゐたものだ、僕性來あまり芋を好かないのだが、その時の芋のにほひの思出だけは、今でも僕に芋はうまいものに違ひないと思はせる程、それが欲しかつたものだ、その町外れのあたりには工場が幾つもあつたものだから、子供ばかりでなく、大人の職工もそれを朝から買ひに行つたものに違ひない、だからそんなに早くからその芋屋の釜からは湯氣が出てゐたものだらう、その前では僕よりもつと汚い風をした、しかしもつと自由に違ひない子供がいつも五六人も、壁にもたれて足をばた／＼させながら、今にあの釜の蓋が開いたら買ふんだと嬉しさうな顔をして、ふう／＼吹いて出る湯氣を樂んでゐる光景は、隨分僕に羨しくて堪らないことだつた、だが、僕はそこに立止まることも出來ないで、その方を見ながら、そこが丁度曲り角になつてゐたので、そこを曲つて、氣の引ける兄と並んで、とぼ／＼と田圃路に出て行くのだつた、すると、彼がその二重瞼の切長の大きな、そして悲しい哉！　尻下りの目をにたりと笑はして、

「あれ買はうか？」と言ふのだ。

幾度も言ふ通り、その時兄はもう袂の着物を着てゐる十六歳で、僕は九歳なのだ、そして僕はその瞬間忽ち唾をぐつと呑み込んで、出來るだけ深刻に額を歪めて、千切れる程頭を横に振りながら、すた／＼と足を早めたものだ、すると彼はにたりと笑つてゐた先までの顔を、同じ二重瞼の切長の大きな、が悲しい哉！　尻下りのその目を俄に泣きさうな、そして、何故お前はそんなに機嫌を惡くしたのか知らぬが、勘忍してくれ、と言ふやうな表情をして、のこ／＼と僕を追ふやうに足を早めた、すると、その瞬間僕には、直そこ迄迫つてゐる山も、黄色い稻田も、その中に突つ立つてゐる呆けた恰好の案山子も、世界中が俄然として濡れて光つて見えた、僕は素早く兄に背中を向けると共に、横なすりに目の涙を拭つて、あゝ、そこは朝の田圃路のことだから、誰も近所に人間が見てゐないことだから、と思つて、親しく彼に寄り添つて、心の中で、兄さん、この心のよくない弟を勘忍してくれ、と祈りながら歩いたものだ、すると、兄は兄で心を安めたかして、いつもの調子で、

「向ふに見える、あの一番高い山は何といふ山だか知つてるか？　Ｔ――山といふんだよ、賢造さんがさう言つてた。」といふやうなことを言つた。

「さう。」と僕は言つて、尙殘つてゐた淚を何氣なさうに指の尖で拭いて、兄の指差す方を見ると、その頃は朝は大抵いつも霧が降つてゐたので、晴れて行く白い霧の上に、Ｔ――山の頂を眺めたことだ。

夕方にも亦同じ時間だけの「運動」散步を僕たちはしなければならなかつたのだつた、朝と違つて、夕方の町は變にそわ〳〵と慌しいことだつた、それに先にも言つたやうに、町外れに工場があつたので、家に歸つて行く職工の群がぞろ〳〵と大變なのだ、だが、僕は職工が羨ましかつたものだ、職工は皆眞黑な顏をしてゐるのだが、みんな申合はしたやうに樂しさうで、そして屹度自由に違ひないのだ、そして手足を樂々と延ばせる、汚ないのだらうが、それ〴〵家を持つてゐるであらう、親子三人や、母と子や、兄と弟や、友達同志やが、みんな仲よく、心おきなさうに笑ひながら並んで步いてゐる樣が、その時の僕には不思議な氣がしたほど、さういふことが自分に緣ないことであつたのだ、僕は朝と同じ道を、兄と並んでこそはゐるが、一言も物を言はずに、定められた時間の間步いて來なければならないのだ。」

變な話だが、夕方さうしてＡ――家の煉瓦の門を出て、通を西に向つて步いて行つた時、それがいつの時だつたか、或ひは每日のことだつたか忘れたが、眞西に何工場だかの大きな煉瓦の煙突が立つてゐて、それの尖からもく〳〵した、眞黑な煙が、橫樣に固い棒のやう流れてゐた景色を、今でもはつきり覺えてゐる。

Ａ――家では、僕の父の從兄弟に當るところの主人は大抵一里程離れた場所にある別莊にゐたので、その人の長男がその煉瓦の家の大將だつたが、彼も亦終日會社に出て、會社から又他所に廻るので、その長男の細君と、彼等の二人の幼ない子供と、子供たちの家庭敎師と、三男の賢造君とそして僕たち兄弟とが食卓を一緖にすることになつてゐた、その外には何でも二三人の女中と、二三人の書生のやうな者がゐたが、彼等は僕たちとは食事を別にした、僕が行つてから三日目だつたかの日から、それまで兄は僕と一緖の部屋に寢てゐたのだが、裏の方に別の棟になつて建つてゐる、三

間ばかりある書生部屋で寢起することになつて、僕だけが殘されて、幼ない子供たちと家庭教師と僕と四人で一つの部屋に寢たものだ、すると、その翌日だつたかしら、例の食卓にも兄は姿を見せなかつた、どうしたのだらう、と僕は一寸氣になつたが、聞くのがきまりが惡かつたので、不審に思ひながらもそのまゝにして過ごした、そしたら、その翌朝から、例の朝と晩との「運動」散歩にも僕一人で行け、と主婦から申し渡された、何でもその時主婦が言つたことには、「兄さんはもう大人ですから、これから色々家の用事をして貰はねばなりませんから……」といふのだつた、それを聞いて、僕は子供心に、兄はこれから書生のXやYなどゝ等し並に扱はれるのだな、と氣がついて、僕たち兄弟がこゝの家でそんなに虐待される約束ではない筈だが、といふやうに考へて、心が平かでなかつた、が、それは間違ひで、伯父が始め僕たちをA――家に連れて來た時、そんな約束を結んだに違ひないのだ、だが、僕だけはそれを免れた譯だつた。

すると、その朝のことである、一人で厭な「運動」散歩を濟まして、それから飯も終つて、僕は何をしに行つたのか、臺所の土間――そこを通つて、書生部屋や、一寸した畑や、それから土藏や何かのある、俗に「裏」と呼んでゐるところに出られるのだ――を通つた時に、その土間の通行路の左手に、食器類や何かを入れるものだらう、大きな戸棚が二つばかり並んでゐる前が、細長い板の間になつてゐるのだが、その板の間の前に、オルガンの前に置いてあるやうな、凭れるところのない小さい、丸い椅子が五六脚亂雜に置かれてあつて、その椅子と對して、犬猫用に近い膳が不しだらに並んでゐて、中にはもう用を濟まして、澤庵の一切位が殘つてゐる小皿と飯粒のついた茶碗とが重ねてあるのもあつたが、そこに二脚の椅子に二人の人間が向う向きに腰掛けて、遲いけれども御飯だらう、食事をしてゐる者があるのだ、その中の一人が兄なのだ、僕などゝ違つて、お人善しである程心の素直な彼は、與へられた言葉のまゝに、どんな辛い事をでも、どんな不馴れな事にでも、默々として、恰も生れた時からし續けてゐる事のやうに、從つて身を置くものであつた、だが、その小さい、腰掛の丸い、凭れるところのない椅子に向う向きに腰かけて、身體を屈めて、多分酸つぱ

い、堅い澤庵か何かを骨折つて嚙んでゞもゐたのであらう、彼の特長の黒い房々した髮の毛がもう夙くに刈込を要する程延びてゐたので、例の首筋の生際の、鼠の尻尾の毛が思ふ樣鼠の尻尾になり切つてゐる、それがその時は殊に憫然と見えたので、僕は何か恐いものでも見たやうに、後に引返したものだつた。

それから十日と經たない日のこと、或日、伯父がやつて來て、僕だけが又元の、祖母のゐる彼の家に戻ることになつた、何でも僕は九歲にもなつてゐながら、頭こそ色々と普通の子供より恐らくはずつと働くのだが、惡い癖があつて、その僅ばかりのA――家にゐた間にも二度ばかり寢小便をしたことを覺えてゐる、それのみならず、いろ〳〵餘り手が掛るものだから、A――の方から手紙でゞも、僕のことを養ひ兼ねるとでも伯父の方に言つてやつたのだらう、もつとも彼は僕には、歸りの汽車の中で、「祖母さんがお前がゐないと寂しいと言はれるので、迎ひに來たんだ、」と言つてゐたが、そればかりの爲ではなかつたらう、兎に角、僕は嬉しかつたものだ、それに、當時はまだそこ迄は意識はしなかつたが、それでも心の奥では兄と離れて暮すことが、どんなにか負擔の思がなくて晴々しい氣がしたことに違ひない、まつたく、そして僕は彼のことは殆どその存在を忘れて暮したものだつた。

が、伯父の家が前に行つてゐた兵隊式の學校に餘り遠いので、その後近くの學校に變つて、そこへ通ふやうになつてから、同級の何とか言ふ子供に、彼もやつぱり僕同樣父がないのだが、三十歲にもなる兄があつて、その兄に養はれてゐたものらしかつたが、その子がよく二言目には昨日何々をして兄に叱られたとか、そんなことをすると兄に叱られるとか、よつ程恐い兄と見えて始終そんな事を言つてゐたが、僕はそれを聞く度に、僕も、毎日叱られてもいゝから、そんな叱るやうな兄を持ちたいものだ、とひどく羨ましく感じ感じしたことだ、だが、僕のA――の家に殘された兄は、その後一年に二三度の割合で伯父の家へ歸つて來たものだが、僕を決して叱ることがないどころか、年と共に僕の方が次第にはつきりと彼の兄らしくなつて行くのだ、いつも彼が僕の弟だつたらもつとぴし〳〵と叱ることも出來、幾分か

僕の心が彼に對して、自分に對して、又天地に對して平かなのだらうにと僕は屢々思つたことだ、たまに歸つて來て、彼は何を言ふかと思ふと、ピストルが買ひたいものだ、といふのだ、玩具のニッケル鍍金をした、當時一圓餘りした代物だ、その頃僕は十歳餘りだつたから、彼はもう二十歳に近かつたに違ひないのだ、僕は言下に、あんな馬鹿々々しい物を、と心からさう思つたので、さう言つて貶すと、彼は大眞面目になつて、大方「少年世界」か何かのそれの廣告文で覺えたのだらう、「馬鹿らしくはないよ、」とその二重瞼の、切長の、大きな、尻下りの目を、僕の素氣ない言葉にさも落膽したといふやうな表情をこもらせて、「あれは玩具ぢやあないんだよ、護身用になるんだよ、」と言ふのだ、「護身用」といふ言葉を幾度も幾度もくり返すのだ、で、僕は終には言葉で間に合はなくて、睥みつけたものだ、睥み付けるといふと、その後今に至る迄、僕は彼を幾度いろ〱な場合に當つて睥みつけたことか、あゝ、僕の目に呪あれ！　すると、彼は僕にさうされて、がつかりと泣き出しさうな顔をするのだつた、すると僕には世界中が暗アくなつて、心が痛くなつて來て、反對に彼に急に別の事で優しい言葉をかけるのだが、彼の萎れた表情は直らないのだ、そして僕は憂鬱になるのだ。

そのうち、兄は僕とは違つて學校に行つてゐる譯ではなし、又これからも學校に行つてそれで身を立てるといふ譯には行かないのだからと言ふのでA——の主人が工夫した結果、では彼に最も出來さうな職を手に覺えさしたらいゝ、と云ふのでA——の家の出入の者の身内の足袋屋に、兄は見習に入ることになつた、A——はそして行く行く彼がその職を覺えたら、僅ながらでも資金を出して、彼に小さな店を出させようと考へてくれたものなのだ、だが彼の腕は仲々上達しないのだつた、足袋職人の一番初歩の、足袋の底を縫ふことがいくら經つても卒業しないものだから、幾ら經つても、毎日毎日彼は朝から晩まで、恐らくはそれさへ下手だとか、こんな事ではとか言つて、主人から叱られ通しに、足袋の底ばかり縫つてゐたことだらう、彼だつてどんなにか悲觀したことに相違ないのだ。

さすがに彼もその職業を好まないことを時々洩らしたらしい、當時A——の家からさういふ通知があつたと見えて、

伯父や祖母などもその話をして、困つた者だな、と言つてゐたのを僕も時々耳に挾んだ。その時分のことだつたが、何かの用事で僕はA――の家に行つた時、多分そこの主婦から何かの用事を賴まれたからだつたらうと思ふが、歸りに湊川神社の前の通にあつた、兄のゐる足袋屋を尋ねたことがあつた、彼はその店中で、彼よりもつと年下の、十四五の小僧よりも、十二歲の小僧よりも劣つた職人であつたに違ひないから、その坐つてゐる位置なども、店中での最も末座に當る店頭に、他の者たちが皆一人前らしく趺坐を組んで、生意氣らしく足の指で足袋の切を挾んで、要領よく針を持つて製造しつゝある中に、彼は大きな身體を正式に坐らして、背中を丸くして、それでも一生懸命になつてゐる證據に口を開いて、彼が一生懸命になると口を開く癖は、その後母や伯父のみならず、僕なぞも屢々注告したが直らなかつた、そして彼は足袋の底を縫つてゐた、その恰好は僕にいつかA――の家に行つて間もなくのこと、彼が臺所の土間で向う向きになつて、小さい腰掛に掛けて飯を食つてゐた光景を思ひ出させた、その足袋屋の店頭に、不馴れな恰好とは言ひながら、やつぱり生れた日からそこに置かれたやうな態度で、人の命令を神樣の命令ぐらゐに信奉してゐる、少しの抵抗力もない彼が、如何にも憫然に見えたことなのだ。

店の前に立つた僕の姿を見ると、彼は、まるで百萬の援軍でも得たやうに、嬉しさうににたりと笑つた、そこで、僕がA――の主婦から言傳てられた用事を話して、別れて歸らうとすると、彼は一寸待つて、そこ迄一緒に行かう、と言つて、僕を店頭に待たしておいて、奥の方の帳場格子の中に坐つてゐる主人にその許しを受けに行つたが、元より彼なぞゐてもゐなくても何の差支へも影響も店にないのだから、直に許してくれたらしい、彼はいそ〳〵と立つて來て、そこにあつた下駄を突つ掛けて出て來たので、僕は店の人たちに挨拶をして、彼と一緒に神戸の停車場の方へ行く道を湊川神社の境內を拔けて進んだ、二三町ほど來たところで、

「もうお歸りなさい、あんまり怠けるといけませんから、」と僕はませた口で彼に注告した、その腹の中は注告する深切より何より、一刻も早く彼と別れたかつたからだつた。

「あゝ、」と答へた彼は、味方と心得て、これから大きに不平を訴へようと頼んでゐた私に、さういふ邪險な言葉を掛けられたので、ひどく落膽した表情をして、「だけど、かまはないんだよ、今主人の許しを貰つて來たんだもの、」と今度は弟の、年の行かぬ僕に願ふやうな、その大きな、二重瞼の、尻下りの目で、目付をして言ふのだ、「……僕はね、」とそれからひどく言ひにくさうにして、「僕はね、今の仕事が嫌ひで仕様がないんだ、だから、止めたいんだがなア」と言つて、その白目勝の目で泣きさうな表情をして言ふのだ。

「あなたは何を言ふんです？」と僕は鋭い聲で言つた、「あなたは外に何が出來るんです？　そんな我儘なことを言つて、A——のをぢさんを怒らして、お前のやうな者はもう世話が出來ない、と言つたら、どうするんです？　そして大阪の伯父さんが、あの人は元もと自分で世話が出來ないもんだから、あなたをA——に預けたんです、だから、あなたがA——で見放されて、自分の方でも面倒が見られない、と言つたら、あなたは乞食をしなければなりませんよ、」そんな風な言葉を、强めたり弱めたりしながら、飴屋や風船玉屋やが彼方此方に出て、遊山の大人や子供が雜踏してゐる神社の境内を、人々の間を縫ひながら僕たちは歩くのだつた、そして「嗚呼忠臣楠子之墓」の前の腰掛に腰を下ろして僕は尙言ひつゞけた、彼は泣きさうな顏をして默つてゐるのだ、「あなたは自分のことを考へなければいけません。あなたは耳が遠くて、それに人並でない、といふことを考へなければいけません、あなたはA——のをぢさんにも、大阪の伯父さんにも離れて、一人でやつて行ける覺悟がありますか？　それがあるなら、足袋屋がいやなら、今日からでも止めて、自分の思ふことをやつたらいゝでせう、一人でやれる覺悟があつたら……」

その間にも、見物の人々が「嗚呼忠臣楠子之墓」の前に三々五々とやつて來て、思ひ思ひに楠正成の話などをしながら、僕たちの直傍をぞろ／＼と通るものだから、耳の遠い兄に必要な程度で話さねばならぬ大聲を、僕は屢々抑えねばならなかつた。

「え、え、どうです？」と僕は鋭い、邪險な言ひ方で、詰問したが、哀れな兄は無言のまゝで答へないのだ、大きな、

その白目勝の、どんよりした目には少しばかり涙がたまつてゐたやうに見えた、それから二人は可成り長い間厭アな氣持で默りこくつてゐたが、「さあ、行きませう、」と言つて僕が立上ると、兄ものつそりと立つて、そして二人は又無言で歩き出した、二人の氣分と反對に、世の中は賑かで景氣がよくて何と晴々としてゐたものだ。

それから、またその頃は今日のやうに埋め立てられてゐなかつた、水のすつかり干上つてゐる港川の河原に、そこなら遥かに人目が少なからうと思つて、僕たちは下りて行つて、彼方等此方等と、ぐさ〴〵に下駄の埋もれる砂利の上を歩いた、歩きながら、僕は彼に聞いた、「兄さん、あなたは足袋屋を止して、何の商賣をしたいと思ふのですか？」「商賣ぢやあないよ、」と兄は又急に、私の優しく聞く言葉に希望を見出して、晴々した顔をして言つた、「僕は畫かきか、小說家の家に書生に行つて、畫か小說を書きたいと思ふんだよ。」さう言つて、彼は犬のやうな表情をして、弟の僕の顔色をうかゞふのだ。

僕ははつとして、歩いて行く行先の、向ふの山麓まで眞直に延びてゐる、人氣のない、黄色い河原の砂地が、忽ち眞暗になつて、消えてしまつたかと思つた、この言葉は何の誇張でもないのだ、僕はその時十二歳であつたが、當時商人である伯父が口癖のやうに身を立てるのは商人でなければ駄目だ、月給取なぞは鬼に食はれてしまへ、お前も高等二年も済んだら、商人の家に奉公に行けよ、と暇さへあるとさう言つたものだが、僕は心の中で斷然、商人なぞは死んでも厭なことだ、つい去年あたり迄は嚴谷小波にならうと思つてゐたが、同じなるなら、彼とは友達ださうだが、尾崎紅葉の方がいゝ、でなければ畫かきになりたい、と漠然とだが併し堅く決心してゐたことだ、だが、それは自分のことなのだ自分はさうなんだ、だが、兄が？…そして又斯うも思へるのだ、これがもし兄ではなく、赤の他人がさう言つたとしたら、それは又反對に、僕はどんなに喜んだかも知れないのだ、「おゝ君よ、」と位僕は感激の餘り叫んだつたかも知れないのだ、「おゝ君よ、君と僕とはこの世智辛い世の中で、滅多に人が望まないところの、同じ志望を抱いてゐるのだおゝ君よ、お互に萬難を排して、この荊棘の路を助け合つて進まうではないか？」

けれども、桑原、桑原！（註、大阪地方で雷が鳴る時は、それを避けるまじなひとして祈る言葉）だが、閻魔大王様、これはどういふ人間の心でありますか？　それを、その同じ言葉を、骨肉の兄の口から聞いた時、僕は子供心に、背中がむづ〳〵して、目の先が眞暗になつて、何と婆婆が不愉快に見えたものです、これはどういふ人間の心でありますか？　僕のやうな心の悪い者だけにの呪ひでせうか？

「あゝあゝ、阿呆らしいにも程がある！」と僕はぷんとして言ひ放つて、急にすた〳〵と歩きにくい港河原の砂利の上を、横切る方向に歩き出した、「あなたは正氣ですか？　あなたは並の人間より少し能力が劣つてゐるといふことを自分で氣が付かないのですか？」

すると、僕の後から縋るやうに、救を求めるやうな、實に憐れな表情をして、追つ駈け追つ駈けついて來た兄は、「それや分つてゐるがね……」と言ふのだ。

「分つてゐるんなら、何故そんな愚にもつかないことを言ふんです？」と僕は鋭く叫んだ、「小說家や畫かきと言ふものは、普通の人だつて仲々やれないものなんです、そして仲々それで奔すなどといふことは出來ないものなんです、」と僕はつひ此間伯父に言はれた通りのことを、兄に向つてくり返した、彼はその大きな、光の鈍い、二重瞼の、尻下りの目を地に落しながら、その時僕と並んで港川の堤を町の方に向つて上るのだ、「あなたは學校さへ碌々出來なかつたんちやありませんか？……そんな碌でもないごとを考へないで、折角Ａ――のをぢさんが心配してくれたものを、今の仕事を一生懸命におやりなさい、あんなことさへ出來なくて、十一二の小僧にさへ、あたは遙に及ばないと言ふちやありませんか、勉强なさい、勉强なさい。」

そして僕たちは港川の堤を這ひ上つて、神戸の驛の方に向つて、二人ともそれ〳〵憂欝な顏をしながら歩いて行つた、それから三四町の間、無言で歩いてゐたが、突然兄は、當時流行り出した繪葉書屋の店頭に立止まつて、長い間、口を開けて見てゐるのだ、僕が二三度も、行きませう、行きませうと促したので、漸く思ひ切つたやうに、澁々彼はその店

先を離れたが、一二間來た時、ふと立止まつて、「あのオ……」と如何にも言ひにくさうに、例の哀願するやうな表情で、「お前二十錢貸してくれないか、今度返すから……」と言つた。

「何をするんです？」と僕は無論その用途は分つてゐたが、尋ねると、

「あそこにあつた共進會の繪葉書を貰はうと思ふんだ、」と彼は賴むやうに言つた。「僕は近頃繪葉書を貯めてるんだよアルバムに挾んでね、あれは仲々記念になるものだからね。」彼はいつかのピストルの「護身用」と同じく、「記念」といふ言葉をくり返した。

僕は、そこでもう、刀折れ矢盡きた氣持がして、最早や腹も立たず、寧ろ涙が出る程悲しくなつて來て、僅二十錢の金だが、それをやると、僕の小遣が大きに失はれる譯だつたが、せめてそれが彼への慰めだと思つて、心よく二十錢銀貨を一枚出して與へると、彼はいそ〳〵と繪葉書屋に入つて行つた。僕は泣けさうになつて來たから、大に心を督勵して、『船に帆がある、阿呆に帆がない』といふ俗諺を、往來に立つて彼を待ちながら、くり返しくり返し口の中で稱へた。

だが、停車場で彼に別れる時、僕はもう一度彼に、今の仕事を怠るな、それでは伯父さんや祖母さんがひどく心配するから、と言つた、よく〳〵氣が進まぬのと見えて、彼は下を向いたまゝ答へないのだ、で、僕は苛々して、「ね、え、え？」と駄目を押すやうに、そして銳く、「あなたは僕が先からあんなに言つたのに分らないのですか、それでも厭なんですか？」と言ふと、彼は下を向いたまゝ微に頭を横に振つた、で、「それぢやあ、吃度勉強しますね？　祖母さんも伯父さんもそれを聞かれたら、吃度喜ばれますよ、吃度明日から一生懸命にやりますね、え、え？」と抑えつけるやうに言つた、そして、明らかに、無理抑えに抑えられたが爲のやうに、彼が下を向いたまゝ、頭を重く二三度縱に振つたのを見屆けて、そして別れて改札口を出たが、プラットフォームに出て、隨分暫くしてから、ふと改札口の方を振り向くと、まだそこの柵に凭れて、兄がきよとんとした顔をして此方に向いてゐるのを見ると、僕は又はつと暗い氣がしたので、思ひ切り顔を顰めて、手を強く振つて、お歸りなさい、何を今迄してゐたんです？　といふやうに合圖すると

彼は惜なさうにお辭儀をして、そして心殘りありさうに向ふ向いて、例の鼠の尻尾の首筋を露出しながら、歩いて行つた。

その年の秋、彼が脚氣でＡ——の家に歸つてゐるといふ通知が來た時、僕は、これは彼がどうしても仕事が厭で、僅な病氣を口實にして、怠けたのだな、と推測していゝ感じを持つことが出來なかつた。ところが、それから一ケ月程後の或日、彼は水死人のやうに青腫れした顏をして、僕の伯父の家に歸つて來た。「まあ、こんな病人を十里からある所を汽車に乘せてかへすなんて……」と言つて、祖母は憤慨の語氣だつたし、伯父は又伯父で「餘計病氣を重くするやうなもんぢやないか、そんな身體で汽車に搖られて……」と言ふのだ。彼等は明らかに彼のやつて來たのを大きに迷惑に感じたらしかつた。僕は、死にに來たんぢやあないかな？　と思つて、密かに三界家のない彼を憐れに感じ乍ら、でも、やつぱり面と向ふと、彼に優しい言葉が掛けられないのだつた。蚤ほどの財産がなくなつた爲に、僕たちの家が解散することになつて、僕が伯父の家に、兄がＡ——の家に預けられるにつけて、母は又別の田舍の親類に、家事の取締見たいなものになつて行つてしまつたものだから、それでも伯父の所へは年に一二度は歸つて來たので、その度數だけ僕は彼女と會つた譯だが、兄は滅多にその機會さへ持たなかつた。そして僕にしても彼にしても、さうして離れてゐたゞけ、それだけこの世の中で彼女が最も親愛なものだつた。外に考へることのない彼には、僕の倍も三倍もさうだつたに違ない。殊にさういふ死にさうな病氣で、而も餘り歡迎してくれない家から歡迎してくれない家へと歸つて來て、彼は一層彼女を慕ふ心に堪えなかつたのだらう。子供のやうに、實際彼はその時十八歲だつたが、せい〴〵七八歲の子供のやうな氣持だつたから、一日に幾度となく、僕に、お母さんが來たらいゝのになア、お前はこの前お母さんにいつ會つた？　僕はもう二年から會はない、といふやうな事を、その青腫れした顏を大儀さうに振つて言つた、それにも拘らず、僕はさう言はれてしまふと、やつぱり邪險な返答をして、彼の顏を失望さしたものだ。

彼はそれから毎日太い、行者のつく六尺棒のやうな、杖をついて、短い着物の下から感覺の痺れた丸太ン棒のやうな太い足をよち〳〵と運ばせながら、四五町程離れたところの病院に通つてゐたが、毎日出て行くその後姿を見る度に、僕は、あゝ死にはしないか知ら、思へば彼に辛い弟だつた、勘忍してくれ、と祈る心持で眺めたものだ、何日經つても彼の病症は少しも快い方に向はないのと、醫者がこの上こんなごた〳〵した町の中にゐてはとてもいけない、何處かへ轉地しなければいけない、と言つたとかで、伯父は到頭奮發して、何といふ所だつたか忘れたが、四天王寺から白い齒磨見たいな砂ほこりの立つ街道を一里程東へ行つたところの、畑のまん中に立つてゐる、その建物の大半を脚氣患者の療養所に貸してゐる、破れ寺に彼を養生に遣ることになつた、始め、彼は誰も家の者と離れたそんな所へ行くのは、寂しくて、心細いから厭た、と子供のやうに涙ぐんで斷つてゐたが、祖母と伯父とに叱られて、そこに行つたことだつた、たつた一度、僕は一人でそこに彼を見舞に行つたことがあつた、葉の半分落ちた、ばかに大きな桐の木が番人見たいに立つてゐる、壁だけ塗り替へたらしい、大體がぼろ〳〵の門をくゞつて、薄暗い勝手口に通つて、そこにゐた鼻の尖に眼鏡をかけた、恐ろしく瘠せこけた爺に、兄の名を言つて會ひたいと言ふと、「脚氣かね？」と面倒臭さうに言つて、「脚氣なら、こゝを出て裏に廻つたら、廊下に上り口があるから、その上り口の邊に大勢ゐるだらうから、そこに行つたら分るよ、」と敎へられた通りに行くと、成程、門よりも更に荒れ古びたお堂の横に出ると、ぼろ〳〵の欄干のついた廊下への、これ又ぼろ〳〵の四五段の木の段梯子があつたが、それが目に付く前に五六人の、白い、今思ふと、廢兵の着てゐるやうな着物を着た、大抵は杖をついてゐる男たちが、欄干に腰かけたり、堂の壁にもたれたりして、がや〳〵と何事か喋つてゐるのを發見した、僕は少し氣遲れした氣味で、その人たちの顏を見ないようにして、どうしたもんだらう、と大きにてれた氣味で、當惑しながら、今更引返す譯にも行かず、うろ〳〵してゐると、

「誰に會ひに來たんだね？」とその中から尋ねてくれた者があつたので、それに力を得て、兄の名前を言ふと、（兄の名前を言ふと、そこにゐた連中が、忽ち輕蔑して、一勢に、あの聾の馬鹿か、と言つたやうに、ふんと鼻を鳴らしたやう

な氣がして、僕はぽつと赤くなつた）その人は、その時始めて顏を上げて見ると、背の低い、頭のちやびんの、その瓣その頭と同じやうな顏色の晴々した、明るい感じのするお爺さんだつたが、深切に「そこへ下駄を脫いで、こちらへ上つてお出で」と言つてくれたので、僕はその通りにして彼の後から、そこにゐた人々の前を通つて、見ると、それでなくてさへ古びた廊下の板の間が、大勢の脚氣患者が杖を突くものだから、凸凹して傷だらけなのだ、さういふ所を可成り長い間、その間に上つたり下つたりの段梯子が二つ三つあつたが、通り拔けて、やがてそれが僕たちを、別の棟の長屋のやうな建物の中に導いて行つたが、左右が幾つもの障子の閉まつた部屋になつてゐる所に來ると、ちやびん老人はその中の一つの部屋をがらりと開けたが、「おや、散歩かな？をかしいな、そんな元氣がない筈だが……」と獨言ちてから、僕の方を見て、「あなたは弟さんだな、兄さんが始終あなたのことを言つとられますよ、お入んなさい、こゝが兄さんの部屋です、便所にでも行かれたんでせう」と言つて、案内してくれた、狹い、汚い長四疊の部屋の中には、白い汚れた蒲團が敷き放しにしてある外に、それから枕元に兄が秘藏の繪葉書のアルバムがしよんぼり置いてあるのと、粉藥の袋とがある切りで、何一つないのが、ひどく佗しく見えたものだ、ちやびん老人は部屋の突當りの、二枚の障子の嵌まつてゐる窓のところに行つて、それを開けて、自分はその敷居に腰かけて、僕にはその枕元を差して、そこへ坐れと言つた、彼はその間徹頭徹尾杖こそ突いてゐたが、ちつとも病人らしくなく振舞つてゐた、彼が言ふのだ、「あなたの兄さんはいゝ人ですな、そりや、成程、耳は少し遠い、だけど、あんな正直な、善い人はない、全く佛樣見たいな人ですな。」

そして、それが決して冷やかしや何かではないのだ、彼の言ふことは間違つてはゐないのだ、その通り、兄は正直でそして美い人間なんだ、だが、僕でさへ彼が正直で、佛樣見たいに善い人間だ、と今迄考へたことはないのだ、無理もないのだ、僕は嘗てまだ兄をさういふ風な言葉で賞めた人を一度も聞いたことがなかつたのだつた、だが、さう言はれて見ると、彼は賞めらるべき人間に値しもするのだ、ちやびん老人は倘感激した言葉をつゞけて、「私はこの一週間程前

急にひどい衝心が來ましてね、今こそこんなに生き返つたやうにぴん〳〵してゐますが、本當にその時は危なかつたんです。私は兄弟も親も子も何にもない、全くの一人者なんですが、これ迄人に深切にして貰はうとか、あゝ、深切な人だとか、思つたことは一度もありませんけど、今度あなたの兄さんに會つて、あゝ、深切な人だと、こんなに頭が禿げる迄生きてゐますが、生れて始めてです、泌々嬉しいと思つたのは……」老人は子供の僕をつかまいて、口に唾を一ぱい貯めながら言ふのだつた、だが、その調子が、さういふ言葉を言ふ時の、沈んだ低い聲などではなくて、やつぱり彼の顔のやうに明るい、運動會が何かの話でもしてゐるやうな風だつた、けれども僕の子供心は痛く動かされた、「……その時、あなたの兄ざんは、自分も身體が惡く、足も不自由で、さう言つちやあ惡いですが、耳さい不自由なのに、それは〳〵口で言へない程深切にして下さいましたよ、私は涙が出ましたよ、本當に私は男泣きに泣きました」男泣きといふ言葉を彼が使つたのを、僕は今でも覺えてゐる、そしても僕も彼の言葉を聞いてゐるうちに、目と目の間の鼻の邊がきゆうとむづ痛くなつて來て、それを唾を呑み込んだり何かして色々に堪えて見たのだが、到頭泣けて來たのだ、一しづく涙が出たのが堤が切れたのと同じで、後から涙が溢れて、終には聲さへ洩れて來た、「全く、あなたの兄さんは斯う言つちやあ惡いですが、外の何も知らない馬鹿者どもは、兄さんのことを逆さまに馬鹿にしてゐますが、今でもさうですが、あの人は佛様見たいな、善い人です、實に善い人です、私は……」と言つた時、老人は僕の泣き出したのに氣が附いて、驚いて「どうしたんです、どうしたんです？　私はあなたの兄さんのことを賞めてるんですよ、どうして泣くんです、お腹でも痛いんですか？」と何故僕が泣き出したか、分らないので、ひどくあわてて色々に聞くのだが僕は一々頭を振るだけで、答へずに、尙いくらでもいくらでも、泣きが激しくなつて行つて、困つたものだつだ、その時、ごとん〳〵と重苦しい、如何にも重苦しい、榛の杖を引きずる足音がして來ので、僕ははつと弛んだ氣を引締めるやうな心持になると共に、急いで涙を兩方の筒袖で拭くと、

「兄さんが歸つて見えたらしいな」と老人も僕のそれと共に泣き止んだのでほつとしたらしく言つて、窓際から離れて

廊下に面した障子を開いて首を突出しながら「吉岡さん、弟さんがお見えになつてゐますよ、おや、大變顏色が悪いやうですが、どうかしたんぢやありませんか？」

そしてごとん〳〵と引きずる杖の音が近づいて、兄は家にゐた時より一層青腫れした、寧ろ紫色といつて間違ひないやうな顏色をして、入つて來ると、その大きな、二重瞼の、白目勝の目を、嬉しさうににつと笑はしたが、それが生氣がないものだから、泣顏のやうに見えた、僕は胸を壓されたやうな氣がした。

僕も兄も長い間默つてゐた、ちやびん老人も默つてゐた、そして暫くすると老人は、一寸失禮します、と言つて出て行つた、兄は僕が行つたことがひどく嬉しさうで、明らかに何か言ひたさうなのだが、それが出來ない程苦しさうに見えるので、僕が横になることを勸めると、頭を先に枕にもつて行つて、丁度上から落とされでもしたやうに、がつかりと横たはつた、そして達者な時からが既に生氣がないのに、更に一層生氣のないところの、仰向けに天井に向つてゐる目を、その小さい黒目玉だけを、時々憐を乞ふやうに僕に向けるのが、僕に今し方ちやびん老人が「あなたの兄さんは全く正直な、佛樣見たいな善い人です」と言つた言葉、さう言はれた時の僕の氣掛などを思ひ返された、僕は何か素晴らしい、彼を慰める言葉が言ひ度くなつたものだが、それが何にも言へなかつた、枕元に、彼が今横になる時に、蒲團の上から下に落とした、少年の僕が見ても決して上等のものではない、寧ろひどく安物の、彼の秘藏の繪葉書アルバムが、半開きになつて轉がつてゐるのも、僕の胸を刺すやうに突いた、半開きになつたそこには、僕が持つてゐても捨てゝ顧みないやうな、一枚一錢位な、而も少し皺になつて汚れた、何處かの網目版の名所繪葉書が挾まれてゐて、而もさういふ物を挾んで尙且、その薄いアルバムの半分位にしか繪葉書は埋まつてゐない、恐らくその持主は、年こそ既に十九歲であるが、せい〳〵十歲位の少年のやうな心持で、早くこのアルバムに一ぱいにしたい、と思つてゐることだらう……僕は堪えても堪えても泣けさうになるものだから、兄にその顏を見られまいと思つて、アルバムを手に取つた、僕は今こそ、自分の持つてゐる小遣をみんな出しても、もつと上等のアルバムを兄に買つてやりたい、と思つた、つひで

に、彼は屹度まだあの玩具のニッケルのピストルも欲しいに違ひない、それも買つてやりたい、と思つた、そして僕は僕が生れてこの方彼に對して働いたいろ〳〵な辛い仕打の詫をしたいと思つた。

「兄さん、ひどく苦しい？」と僕は聞いた、「苦しい？」

「…………」答へないで、彼は仰向いたまゝで微かにうなづいた。

——それから、ちやびん老人に來て貰つたり、家に使を出して、祖母に來て貰ふやら、大騒ぎしたものだつた、その時だつたと思ふ、僕が一人で彼の枕元にゐて、看病してゐた時、默つて苦しさうな息をしてゐた彼が、突然

「死ぬの厭…………」と言つて僕の手を摑んだのは……、僕はハツとして彼の顏を見ると、彼はその生氣のない、大きな、而もそれを常よりぐつと開いたところの、二重瞼の目に一ぱい淚をためてゐた、その時こそ僕は何の遠慮も忘れて、彼の手を握りしめて、

「兄さん…………」と言つて、おう〳〵と聲を上げて泣いた。

——だが、幸か？　不幸か？　それは誰が知りませうぞ？　兄はそれから一ケ月程後には大方快くなつて、寺から伯父の家へ、それからA——の家へ、又歸つて行つた。それが丁度機會になつて、彼はあの厭がつてゐた足袋屋を止めることになつた、恐らく餘り坐つてばかりゐて、性來が丈夫な者ではないのだから、運動不足のためにあんな病氣になつたのだらう、と衞生家のA——の主人が氣遣つたからだつた、そして彼はA——の家に歸つて、以來ずつと二十年の間二十年と言へば、我等人間にとつて何と短くない年月だ！　そこで食客とも附かず、下男とも附かず、書生とも附かずと言つて決して執事とも附かず、碌々と、眞に碌々として日を迎へ日を送つたものだつた。……

僕は生意氣盛りの年頃になつて行つた、僕は中學生になつた、兄はやつぱり一年に一度か二度A——の家から暇を貰つて歸つて來たが、僕のゐる伯父の家では、誰も彼を門前から追歸しはしなかつたけれども、だが又誰も彼を歡迎しな

かつたことは確だ、彼はそんなに善良で、そんなに正直で、そんなに眞實であつたにも拘らず、彼はこの世で人に歡迎せられた經驗といふものを持たなかつたらうと僕は想像する、或ひは恐らく彼は歡迎せられないことに大きな不平を持たない程、人間といふものはそんなことをしないものだと思つてさへゐたかも知れない、たまに彼が自分の家のやうなつもりで、神戸のA――の家からいそ〳〵と僕のゐる家へ歸つて來ても、弟の僕さへ彼に如何に冷淡だつたことだ。

僕たちの、僕の生れる前に死んだところの、父方の祖父の命日は一月二日だつたので、兄は必ず日をくり合はしてはその日に歸つて來るやうにして、彼は「祖父さんのお墓參りに行かう、」と僕に勸めるのだつた、彼の墓は町の北の端の長柄といふ所にあつたし、僕たちの家は町の南の方だつたから、その頃は電車がなかつたことだし、二里近くある道を、それが兄ではなく仲のよい友達か何かと散歩するのなら、二里が三里でも進んで行くのだが、彼と共に行くことは、何かを背負つてゞも行くやうな氣がして、僕は厭で堪らなかつた、ところが、事が墓參りなぞといふ性質だから、それはいつもと違つて、祖母なぞも無論兄に讃成するものだから、何か理由を構へないと、どうしても行かねばならぬことになるものだつたから、それでも三度に二度までは、やれ今日は學校の級の者の會があるとか、先生の家に年始の挨拶に友達と一緒に廻るとか、出鱈目な理由をこしらへては、實は友達の家に行つて、かるたを取つたり、煙草をすつて中學生一流の馬鹿話をして暮したものだ、だから、大抵彼は一人で、如何にも不滿さうな、がつかりした顏をして、二里近くの道をとぼ〳〵と、何を祈りに行くものか、祖父の墓に向ふのだつた、もつと甚しい時なぞ、家を出る迄、彼と墓參りに行くことにしておいて、五六町も行つてから、急に出鱈目の用事を思ひついたことにして、彼一人を墓に派遣して、自分は勝手な友達のところへ出かけたこともある、無論、墓參りだけではなく、彼はやつて來ると、恐らくA――の家を出て汽車の中から、否いつ何日に僕の家の方に來ると定つたら、それからずつと、行つたら僕と一緒に彼處此處と胸で考へておいたに違ひないところの、いろ〳〵な物見遊山の場所に僕を誘ふのだつた、そして、僕の記憶では、恐らく二三度も彼とさうして行動を共にしたことがなかつたやうに思ふ。

中略

そのうちに僕は中學を出て、A――(當時はもう僕の父の從兄弟のA――は死んで、その長男の代になつてゐた)の後援で、東京に出て、上の學校に入つたものだが、兄は依然として神戸のA――の家の庭を掃いたり、風呂を焚きつけたり、正直で安心だといふ理由から金錢に關した使を命ぜられたりして、日を送つてゐたことだ、が、いつ頃の事だつたかA――の家の方から斯ういふ話が出た、といふのは、彼もいつ迄も今のまゝにしておく事は出來ない、と言つて、この生存競爭の激しい世に、並の頭の人間でも仲々容易に世渡りの出來ない時代に、到底彼のやうな人間に適當な職業なぞあらう筈がないが、いろ〳〵と考へた末、湯屋がいゝだらう、幸ひ母がゐることだ、番臺に彼女と彼とが代り代りに坐ることにして、そのうちに又適當な女房がないとも限らない、そしたらそれを迎へることにして、といふので目下湯屋の株を手に入れようと奔走してゐるが、湯屋の株だつて仲々高いし、又おいそれと手に入らない、といふことだつた、その事は兄からも僕に手紙で知らして來もしたやうだつた、彼は希望に燃えてゐるやうだつた、僕もそれは極めて結構なことだと思つた、ところが、母がそれを喜ばないらしいのだ、彼女が言ふには、成程、それは一寸思ひ付きがいいやうではあるが、實はさうではない、第一あの湯屋の三助などといふものは皆渡り者で、到底兄のやうな鈍な人間や母のやうな女では使ひこなせるものではない、次にあの湯屋の番臺に坐るといふことは一寸見ては大變樂なやうではあるが、冬はあんな寒い場所はなく、夏はあれ程凌ぎにくい所はない、丈夫な者でも大抵馴れないうちは身體を惡くする位だから、まして母や兄やのやうな餘り達者でない者には一週間以上と勤らない、さう言ふので、だがそれは表面の理由で、彼女は更に聲を低くして言ふには、「私は厭だよ、あんな神戸見たいな所、それに全然知らない所ならいゝが、殊にA――では自分の家の方を彼に時々手傳はせるつもりもあらうから、現に自分とこの近くで家を探してゐると言ふんだから、あの邊は私も前に住んでゐたことがあるし、どんな知つてる人がゐないとも限らない、それがもつと氣のき

いたものなら何だといふこともあるが、お湯屋の番臺に坐るなんて、厭なことだ、それにA――の家が近くもあれば、時々御機嫌伺ひにも行かねばならぬし……、私はあの子と一緒に暮すのは厭だわ。」

斯う母は子供のやうに困つた顔をして、子供のやうに我儘を言ふのだ、僕は、「今日A――の家だつて、何の無理にそんな世話をしたくはない事でせうし、又それ程僕たちの家を世話する義務を持つてゐる譯ぢやないでせうし、そこでそれに馴れて當り前見たいに思つてしまつてゐますが、それでは罰が當りますよ、」と言つた。

「さう言へば、勿論、それはさうだ、」と母は理のある言葉に降參したものゝ、厭なものは何としても厭に違ひないのだから、と言つて、僕の言葉に敵し兼ねて、それで言ひ返せないものだらう、見ると、目に一ぱい涙をためてゐるのだ、

「だが」と僕は、僕も悲しくなつて、言つた、「厭なものを無理に何するのは、決して面白い結果になりませんから、何とかそこはうまく斷つたらいゝでせう。」

そして又僕は憐な兄のために心で涙するのだ、恐らく彼は、生れてからの年を數へたらもう彼此れ三十歳にもなりながら、やつと十二三歳の子供のやうな感情を胸に藏してゐる彼は、湯屋であらうが何であらうが、自分の家が出來るといふこと、それよりも何よりも年頃慕つてゐる、あの人こそ自分の心から愛する人であり、又あの人こそ、(彼を彼女の腹から生んだ)この世の中で一番自分を愛してくれる人だらう、その母親なる人と一緒に暮せるといふことに、極樂の喜を感じたことであらう、――彼は知らないのだ、又どうして知る筈があらう、彼を彼女の腹から生んだ母親でさへ彼と共に住むのを望んでゐないことを……

そして又彼は妻を娶るといふことを、僕たちに想像がつかない程、樂しいことに思つたに違ひないのだ、恐らく、屹度、彼は三十歳のそれ迄、童貞だつたに相違なかつた、けれども、母が厭がつて心配したところの、その湯屋の話はその後いつとなく立ち消えの姿になつてしまつた、無論、女房だつて、誰が好んで、彼のやうな、唯正直でお人好しであ

るといふだけで、聾の、鈍な人間の所へ、來手のある筈がなかつた、けれども、正直者の兄は、長い間、まだ適當な湯屋の株が手に入らないのか、女房なんて仲々目付からないものと見えるな、位に思つて待つてゐたことであらう、終には餘りその話が出ないので、一度ならずA——の主婦に、あの話はどうなりました？ と聞いたといふことだ、そして彼女が曖昧な返事をすると言ふので、伯父のところへ、母のところへ、そして僕のところへ、一々手紙を寄遣して、A——の家へ手紙で宜しく頼んでくれ、と言ひ言ひして來たものだ、誰も屹度それに返事をやらなかつたであらう、僕のところへは二三度もくり返し言つて來て、それに返事さへ僕が寄遣さないことを責めて來たので、色々と都合といふものがある、親だつてさう子の思ふ通りにはしてくれないものだ、ましてA——に一旦言ひ出しておきながら、その事をてきぱきと運んでくれないからと言うて、濫りに催促がましいことを言へた義理ではない、又深切なA——は言はなくても色々と心配してくれてゐるに違ひないから、といふやうな返事を出しておいた、その後も、一年おき位に二三度その湯屋の話は復活したが、いつも、どういふ都合になつたものか、同じやうに立ち消えになつてしまつた、だから、兄は五年前、十年前と同じやうに、少しも變らずA——家の庭を掃き、風呂を焚きつける役をしてゐたに違ひなかつた。

女房のことゝ言ふと、もう一つ、彼が三十三四歳の時だつたか、例の僕が中學を出るまで世話になつてゐた大阪の伯父の、たしか彼がもう死んでからのことだつたかと思ふが、彼の細君、即ち僕の義伯母が、突然僕に手紙を寄遣して、兄さんに丁度いゝ嫁があるから、世話したいと思つて、神戸のA——にもその事を言つてやつたし、目下先方にも掛け合つてゐるところだ、と言つて來たことがあつた、その二三日後に兄からも僕と母（當時東京の僕の方に彼女も來てゐたので）と二人に宛てゝ、斯う斯ういふ嫁の話があつたが、そちらからも是非宜しく頼んでほしい、と書いて來た、その彼の當て字澤山の、角張つた流儀の、廻らぬ筆に如何に熱情がこもつてゐたか、言ふも愚だ、僕は讀んで暗あい氣がしたことだ、それは大變いゝ事だ、と僕たちは思つた、が、愈よ先方が來てくれることになつたとても、それならば、と言つて、僕たちの一存で取り定めても、それをさせるだけの用意が一寸もないのだが、幸ひ兄の手紙にはA——の主

婦にもその話をしたところが、伯母さんの處でいゝと思つた人が來てくれるやうなら、小さい家でも持つことにして、貰つて上げませう、と言つてくれたとのことだつた、色々聞き合はして見ると、それは本當らしく、Ａ――の家の近所に小さな家でも借りて、そこから、出來ればＡ――の家に夫婦で毎日色々な用事をして通ふことにしてもらつて、といふ話だつた、大變いゝ事だ、と私たちは思つたのであつた。

　ところが、それが又二週間と經たないうちに、大阪の方から僕に來た手紙に依ると、破談になつた趣なのだ、さうはつきりとは書いて來なかつたが、先方に急に都合が出來て、話を延ばしてくれといふ返事だ、その通知なのだ、つまり斷りの、別の文句なのだが、それを伯母はその儘に通知して來ただけで、兄には言つてやらなかつたと見えて、兄からはその後も、頻りに、そちらから宜しく頼んで早く話を進めてもらつてくれ、と二日に一度位の割合で書いて來るのだつた、伯母の方にもやつぱりさういふ手紙を出し出ししてゐて、伯母がそれに返事を遣らなかつたものと見えて、終には兄から僕の方への手紙には彼女を恨む文句が現はれて來たものだ、それに僕の方からだつて、兄に仲々返事を出さなかつたものだから、終には僕の方へも憤慨の意を洩らして來た、で、僕の方から、それと殆ど同時に伯母の方からも、先方から少し都合があるから、話を延ばしてくれと言つて來たと書いてやつたところが、それから長い間彼はその言葉通りに取つて、延ばした話の復活するのを、指を繰るやうにして待つてゐたらしいのだつた、彼は、先にも言つたやうに、その時既に三十三四歳であつた、そして彼はやつぱり童貞者に違ひなかつたのだつた、彼はそれから、一ケ月に一度位づゝ、いつかの話はまだか、先方の都合はまだ惡いか、伯母だけに任しておいても他依りないから、そちらから何とか話を進める法はないか、なぞと言つて來た、或時は、彼は到頭その話だけで、Ａ――の家から一日の暇を貰つて、大阪の伯母のところへ出かけて行つたさうだ、その事を報じて、彼女は今は最早やひどく迷惑してゐると、僕たちの方にこぼして來た。

「どうかならないものでせうかね？」と僕は母に言つたことだ、「折角、Ａ――の方でも來てくれる人があつたら、貰

つてやると言つてくれてるのですから……」

「駄目だらうね。」と母は言ふのだ、「私は自分の子のことだが、私に娘があつたとしても、あんな子のとこへ嫁にやるのは、財産でもあれば兎に角、財産があつたつて厭だからね、くれる人も來てくれる人もない譯だよ。」

僕もさうに違ひないと思ふのだ、だが、僕の兄はさうは思つてゐないらしいのだ、千年萬年待つたとて斷然返事のありよう筈のないことを、彼はその正直な、善良な判斷に依つて、而も熱望を以て、今日か明日かと待つてゐるらしいのだ、僕はその事を考へると堪らなくなるのだつたが、だと言つて、何と人事の盡しやうもないことだ。

無論、その話はそれつ切りになつてしまつたことだが、その當分僕は兄から、それに就いての彼の失望を現はした、或時は恨み、或時は悲しみ、又或時は憤慨したところの、樣々の手紙に如何に惱まされたことであつた、人が皆如何に輕薄で、嘘つきで、賴むに足りないかといふことを、人ではない自分の伯母も、弟も、又母までも、自分が愚者(おろかもの)であるといふ故に、自分を、今度ばかりではない、これ迄も、事ある毎に、蔑ろ(ないがしろ)にしたことの恨や愚痴や悲歎やを、それが如何に惻々として人に迫る言葉で書いてあつたか？ それをこゝで僕が如何に詳しく述べたところが、その時の彼の下手な角張つた流儀の文字で書かれた、當て字澤山の、幼稚な、だがその隅々に迄眞情のこもつた幾つかの手紙のうちに、唯の一通にも及ばないことである、僕はそれ等の手紙を母に見せるに忍びなかつたので、すべて彼女に隱してしまつたものだ、それ等の手紙の文句は、如何に舌足らずに語られてゐたとはいへ、又如何に教養の少ない僕の母が眼光紙背に徹する底の讀み手には程遠い人間であるとはいへ、そこにこめられた彼の眞實が彼女を打つことを恐れたのだつた、僕は母に隱れてそれ等の手紙を讀んでは、淚さへ出ないところの、底の知れない悲しさを感じながら、幾度か外に人もない部屋の机に向つて顏を赤め赤め、彼をなだめる手紙の返事を書いたものだ。

すると、それから一ケ月ばかり、彼からの手紙が絶えたかと思ふと、或日珍しくA——の主婦から僕に手紙があつてその内容が又大きに僕を驚かした、といふのは、兄の消息を報じたもので、それに依ると、二週間程前から、何處か特

に惡いといふことなく、唯食慾が非常に減じて時々吐き氣などを催す樣子で、何をするにも物事が大儀らしい風だ、無論醫者にも一二度見せたが、いつになく本人が醫者に行くことを厭がるので困る、日に日に惡くなつて行くといふ風でもないが、と言つて、少しもよくなる樣子がない、無論、醫者も言ふ通り、持病の胃病の少し念の入つたのだらうが、と言ふことであつた、が、僕は、それが不斷は決して、兄が一寸病氣に罹つたといふこと位では、僕に手紙なぞをくれたことのない、A――の家からの手紙であるといふこと以上に、妙に色々と氣遣ひな心掛が起つて、もう少しはつきり言ふと、兄はこの病氣が重くなつて、死ぬんぢやあないかな、といふ不安に攻められたのだつた、で、僕は折返しA――の主婦に、この上とも何分宜しく賴むといふ手紙と一緒に、いつになく早速兄に宛てゝ見舞狀を出した、僕は言ふが、僕等は家庭の事情のためだつたとは言ひながら、隨分緣の薄い兄弟で、今となつて振り返つて見ると、生れてからの年月のうち、その三分の二以上離れて住んでゐる次第だが、僕から彼に出した手紙はやつとその手數だけの數に滿つるか滿たないかだ！　そして僕から時に手紙を出すと、僕の方から先に手紙を出したのは殆どこの時が始めてだが、それが兄からの手紙の返事であつても、彼はその返事に對して直に又手紙を寄越するのが常であるにも拘らず、その時の僕の見舞狀に彼は幾日たつても返事をくれなかつたので、僕は益々不安に思つたが、けれど又すぐ外の事にまぎれて暮してゐると、それから二週間程後のことだつたか、或日母が東京市內にある或親類に何かの用事に行つて歸つて來ての話に、その家の人が最近に神戸のA――に行つたといふ話が出たが、その時聞いたところに依ると、彼の病氣はいまだによくないさうだ、やつぱり胃病だらう、それに持病の脚氣も少し起つてゐるんだらう、が、氣が少し變になつてゐるやうに思ふ、何にしても大分惡いといふことだ、といふのだ、大分惡いといふ言葉も僕を驚かせるに十分だつたが、氣が少し變だといふ話は、僕の背中に突然冷水を浴びせ掛けた以上に吃驚させた、僕はふら／＼と目の眩むやうな感じに襲はれながら、だが母の手前なるべく落着いた風をして、

「氣が狂ふなんて變ですね、」と僕は彼女に言つた、「僕の家にはさういふ系統はないでせう？」

「それはないと思ふけどね、」と母も少し不安な表情をして答へた、「をかしいのね、氣の方は大したことはない、と言つてたけどね、しかし身體は大分惡いといふ話だよ。……」

そして僕たちは變に默り合つて、長い間向ひ合つて坐つてゐたものだ、さあ、惡くなつて、愈よ危いといふことになつても、東京から神戸まで行く旅費の調達にさへ、大きに事を缺く生活狀態だつたから、そんな事まで、色々と考が紛くのだつた。

――だが、その後、彼は又いつとなく普通の健康に戻つた。

僕は神戸のA――の後援に依つて辛うじて大學を卒業したことだが、その甲斐もなく、二年經つても三年經つても浮かばないことであつた、だが、僕の業の成るのを待ち受けてゐた僕の母は、兄に望を失つてゐただけそれだけ僕に望をかけて、僕から見ると一寸押しかけ女房のやうな形で、もつとも大學を出ると共に人間一人の暮し位は立つと彼女が考へるのも少しも無理はないのだが、いそ〳〵と僕をたよつて來て、結局二年も三年も僕と一緒に食ふや食はずの苦勞をさせられた擧句、どうにも斯うにもやり切れなくなつて、東京市内にあるA――の家（それは僕の父の從兄弟のA――の次男で、神戸の當主の弟なのだ）に居候のやうになつて轉がり込むやうな狀態に立ち到つた、そしてそんな狀態が又一年ほども續いたものだ、で、東京のA――の家でも、時々僕を呼びつけては、一體君はどうする氣だ、君一人なら何をしようと勝手だが、君には一人の母があり、又言つちやあ失敬だが、一人の不具に近い兄があることは、僕たちが今更言はなくても承知の筈だ、その人たちを扶養する君には當然義務があるのにも拘らず、君は一體どういふ考なんだ？　それや我々凡人が考も及ばないやうな君は遠大な考を持つて居られるのかも知れん、だが、遠大な考は考、人間としての義務は義務だと思ふがどうだ？　はつきり今日こそ答へて貰ひたい、などゝ責めるのだつた、又或時は、僕はかまはない、又失禮ながら君のお母さん一人位僕の所に來て居られても、別に大して御馳走する譯ちやあなし、僕の家

がその爲に左前になる譯ちやあないからかまはない、が、神戸の兄（即ち神戸のＡ——）から喧しく言つて來るので、實は僕も當惑してゐるんだ、で、今日が今日と言ひたいが、それでも君は困るだらうから、今月一ぱい、即ち後六日間以内に是非お母さんを引取つて貰ひたい、と責めるのだつた。

大體、僕は今こそ斯うして全然別の方面の仕事に携はつて、尤もそのお蔭で今日の食に困るやうなこともない次第だが、その時分はやつぱりまだ小説の一つも仕上げて、大きに文名を馳せるつもりでゐたものだから、何か一つそれらしいものを書かうといふ考で腹の中が一ぱいだつた、これで仲々突拍子もない男に違ひない、といふのは、そのＡ——に母を引取る日限を定められると、これ迄度々の事ではあるし、仕様がないから承諾して歸る途々、現在自分のその月末の下宿代さへも拂ひ兼ねてゐる次第なのに、こゝへ母に歸つて來られては、と思つて、ふと決心して、月末の二日前だつたか、少しの金を手に入れると共に、下宿屋にも無斷で房州の或海岸に出かけてしまつたものだ、そこから友達に賴んで、少しばかりの飜譯の仕事を分けて貰つて、傍それをしながら一生懸命に譯の分らぬ小説をぼつり／＼と書き始めたが、何しろその年になる迄何にもしないで考へてゐたことゝは言ひながら、一度もやつたことのない仕事なので、仲々出來上らないうちに一ケ月半ばかり經つてしまつたのだ、もつとも房州からＡ——に手紙を書いて、二ケ月の猶豫を願つておいたのだが……、すると、或日のこと、母からの手紙に、神戸のＡ——が大變僕のことを怒つて、これは僕がいゝ氣になつて怠けてゐるのだ、で、口だけで催促しては何にもならないからと言つて、今度突然兄を東京のＡ——の家へ手紙をつけて寄遣した、東京のＡ——の話では、いつか僕の手紙通り二ケ月待つから、その上は母と兄とを一緒に引取つて貰ひたい、その二ケ月といふのももう二週間のうちには過ぎるのだから、今度こそ十分に決心してほしい、と言ふのだつた、僕はもう小説どころの騒ではなく、大急ぎで貰つて來ただけの飜譯の仕事をすつかり仕上げて、急に東京へ歸つて來て、前の下宿屋の始末なぞを附けて、新たに下宿を引越して、取敢ず母に會つていろ／＼話し合つて見ると、兄は神戸の引續きのやうに、いろ／＼と東京のＡ——で用事を勤める間に合ふやうだから、當分はそこにゐるだ

らう、で、母だけ取敢ず僕の下宿に、僕と一つの部屋に起伏することになつたが、僕は並々ならぬ氣むづかしい男で、母子二人で下宿の六疊の部屋に同棲するなんて、厭で厭で堪らないことだつた、が、幸ひ東京のA――の家でも、今迄一年近くゐた老女の居候がすつかりゐなくなつて見ると、隨分色んな用事をする手が急に足りなくなつた譯だから、困つて、殆ど毎日程彼女を呼びに來たので、やつと僕は息をつくことが出來たが、兎に角どんな事でもして家を一軒借りなければならぬ、いつ何時あの、その存在が既に僕に人の氣を兼ねさせるところの、兄に來られるかも知れぬ、それやこれやの心遣ひで大變だつた、ところが、丁度東京に借家拂底時代のことで、仲々それが目付からないのだ、母と兄とが、A――の家を根據にして、用事の間々に手を分けて探すのだが、仲々ないと見えるのだ、或日の晝、僕の下宿に母から電話が掛つて、神田の斯う斯ういふ所のカフエーにゐるから、すぐ來てくれ、といふので、何事かと思つて行つて見ると、そこの椅子に母と、久しく、もう何年も六七年以上も見ない、兄とが坐つて僕を待つてゐた、いつかA――に最後の注告をされた以來、僕はそこに顏を出さなかつたものだから、兄が東京に來てゐるといふ報告だけで、僕はその時まで彼に會はなかつたのだつた。

「お前のとこへ一遍行きたいと、始終言つてるんだがね、」と母は兄を顧みて僕に言ふのだ、「お前のとこは始終お友達の方がいらしつてるからね……」

彼は七八年前、神戸のA――の家の書生たちと一緒に、何かの祭日の時手製の花火を上げようといふ相談が出來た時、無論お人好しの彼が少し危險らしい仕事だといふのでその役目を廻されたのだらう、火藥を乳鉢に入れてどうとかして拍子にそれが破裂して、顏中に火傷をしたことがあつた、それが直つてから後も、別に何處から何處までといふ跡は見えないが、彼の顏全體が變に赤黒く光つてしまつたものだ、勿論、その色々の形は昔ながらのもので、目は大きくて、二重瞼で、悲しい哉、尻下りで、白目勝のそれは依然として外界の印象が極めてはつきりとは映らぬらしく見えるのだ、恰好のいゝ鼻をしてゐるのだが、それさへ少しも全體を引立たせる役には立たず、一文字に心持ち山形に反つた

口だつて、少しも威嚴を見せるどころか、持病の胃病のためか何のためか、その兩端に白くあくちの切れてゐる樣なぞ倘のことその持主を恰好には見せぬのだ、彼はそれ等の道具を持つた顏を嬉しさうににた〳〵と笑はせて、「暫くでした。」と僕の顏を見て挨拶をした、その言葉が、耳の遠いために、長い間普通の音聲が耳に入らないのでさうなつたのか、妙に皺枯れて、力がなくて、間が拔けてゐるのだ、弟に向つて『暫でした』と改まつた言葉を使ふのも、何と物悲しく聞えるのだ。

それから、まあ久し振りで、これはもう十年以上振りに違ひない、親子三人で張合ひのない雜談をしたのだが、その兄が耳の遠い上に、母が又さう年もとつてゐないのに、耳が遠くなつてゐるものだから、僕の苦心は一方ならなかつた、そして彼等の行動の一々が、僕と他人ではない、血のつながつてゐる者のそれだけに、僕は何處となく目を藏ひ耳を閉ぢたい氣になつたことだ、考へて見れば、僕の眼に鄙で白痴に近い兄でなく、老いて偷苦勞してゐる母でなく、僕に一番强く且執念く集中されてゐるに違ひはない、兄は、それから貸家に就いて、それが殆どないこと、あつても僕の出したやうな條件、例へば位置とか、間取りとか、値段とか、に適合する家がないこと、だからもう、少し條件を變へて、どうしてはいけないとか、こんな風なのぢやいけないとか、無力な僕を此上なく他依りあるもの〻やうに尊敬した口調で、相談の言葉を言つた、その熱心の樣子は僕にいつかの湯屋の話の時のこと、それから女房の話の時のことを想像させて、僕を何とも言へぬ物悲しい氣の毒さと暗さとの混つたやうな氣持に誘ふのだつた。

だが、それから三四日目の或る夕方、母がA——の家に例の如く手傳ひに行つてゐた留守のこと、斯う斯ういふ貸家があるが、どうだ、と言ふ理由で、といふよりも僕の所に一度來たいためにそれを口實にして、突然兄が僕の下宿にやつて來た、僕はその以前から、母にどうか彼に來てくれないように計らつてくれと賴んでおいたから、安心してゐた際だつたので、ひどく驚いた、僕の驚いて忽ち當惑の表情に變つた顏を彼も感じたに違ひない、下宿の女中に僕の部屋を聞いて上つて來たものと見えて、突然彼は默つて入口の唐紙を開けて入つて來たが、その時一人で机の前に坐つてゐた

僕の變な顏を見ると、一瞬間戸惑ひしたやうな腰付をしたが、やがてその貸家のことを皺枯れた聲で言ひながら、僕の傍に坐つた、こゝへ友達になぞ來られたら、何としよう、と思つて僕は息の窒まるやうな思をしたが、追返す譯には行かないので、なるべく感情を抑えるやうにして、丁度夕飯時分だつたから、食事を一緒にした。彼はやつぱり僕よりもずつと大食ひで、下宿屋の小さな櫃を空つぽにして、食べ終ると子供のやうに「御馳走さん、」と言つて、ぴよこりと弟の僕に頭を下げた、彼はその時たしか三十六七歳だつた、さういふ間も、僕は、なるべく早く歸つてくれゝばいゝと思ふものだから、彼がその時目付けて來てくれた貸家が氣に入らないといふことを答へた外、殆ど言葉なしに暮した、それでも稀に何か話すと、一寸したことにも頓狂な聲を出して笑ふ彼の昔ながらの癖も、僕には昔ながらに氣に入らないのだ、だが、その時は都合よく、誰も友達の來ないうちに、彼は、あんまり遲くなるといけないからと、言つて歸つて行つた。

それから、時々來るのだ、その次の次に來た時だつたか、やつぱり夕方だつたが、O――といふ友達が來てゐた、二人で雜談をしてゐる所へ、がらりと入口の唐紙が開いて、彼が現れたのであつた、無論、彼は來るには、何か必ず口實になる用事を拵つてゐたから、その時僕の不機嫌な顏を見ると、その用事に就いて五分ばかり喋つて、そして歸つて行つたが、彼の歸つて行く本意なさうな樣子に、僕はひどく濟まないやうな氣がしたのだ、玄關まで送つて行きながら、取つて附けたやうな優しい言葉を二言三言掛けたやうに覺えてゐる、そして部屋に歸つて來たが、O――は別に今の人は誰だとも聞かなかつたから、僕も何とも言はなかつた、すると、それから又二三日後のことだつたか、僕が下宿の女中に、一寸外に出て來るけれど、誰か人が來たら待たしておいてくれと言つて、少し遲くなつて歸つて來て見ると、此間のO――が部屋の中にちよこなんと坐つて待つてゐた。

「大分持つたよ、」と彼が言つて、それやどうも失敬したと、僕が言ふと、彼は又言葉を繼いで、「あ、それから、いつか、この前に僕が來てゐた時に來た人ね、變な人、あの人が來て、お母さんが留守か、と言つて、そして歸つて行つた

よ、變な、感じの惡い人だね。」

Ｃ——はまさかそれが僕の兄とは知らないものだから、さう言つたのだが、「あ、さう、」と言つて、僕は卽座に默殺してしまつたものだ、默殺と言へば、やつぱりその時分のことだつたと思ふが、僕の友達にいろ〳〵話し合つてゐると、小學校を大阪の僕と同じ例の兵隊式の學校に行つてゐたといふ男があつたが。彼は僕より三四歲の年長者だから、考へて見ると、僕の兄と同年級ぐらゐに違ひなかつたので、その頃の話をしながら、僕が曾ての「わつしよい、わつしよい！」や「吉岡さがせ、吉岡さがせ！」の時分のことを回想してゐると、

「さう言へば、」と突然彼が笑ひながら言ふには、「僕のクラスにも君と同じ名前の吉岡といふ男がゐたが、これや少し足りない男だつたぜ、まさか君ぢやあるまいね。」

「まさか、」と言つて僕は笑つたが、何で笑へるものか、彼は無心に冗談のつもりで言つたのだらうが、それは正しく僕の兄に違ひないのだ、「わつしよい、わつしよい！」と叫びながら彼も當年僕の兄を引きずつて步いて、その弟の僕を苛めた者に違ひないのだ、僕は變な氣になつて、直に話を變へたことだつた。

ところが、先に話したＣ——が、その頃、別にゐた素人下宿と喧嘩をしたとかで、その外にも色々都合があつて、寢るところに困つてゐたものだから、僕は妙な性分で、彼が遠慮をするのを無理にすゝめて、僕の部屋に居候に置いたものだ、もつとも、その時分はＡ——の家に色々用事が多いといふので、母が殆どそちらに寢泊りしてゐたが、彼女が稀に歸つて來ると、狹い下宿の六疊の部屋で、Ｃ——と僕と母との三人で枕を並べて寢なければならなかつた、だが善人の僕の母は、Ｃ——に就いての僕のおまけ澤山の註釋を聞くと、それはお氣の毒なことだ、と言つて、僕と共に彼を歡迎したものだが、そのうちにＡ——の方の用事も大抵なくなつたので、彼女が大抵僕の下宿の方へ歸りつ切りの姿になつたから、大きに不都合を感じてゐる矢先に、Ａ——の方に又人間が少し增えたといつて、兄にも寢泊りだけは僕の方へ行つてしてくれ、といふ大變なことになつた。僕とＣ——とは大抵夜分は外に散步に出るものだから、十二時頃でな

けれぱ歸らず、朝はC——は十一時過、僕としても、八時半でなければ起きなかつたので、九時過にA——の所から來て、朝六時に起きてA——の所へ歸つて行く兄とは、言葉を交はさずには濟んだものゝ、六疊の部屋に、横に並べてC——と母と僕との寢床があつて、それ等の寢床の足元に、横に敷いた窮屈な寢床は兄の分なのだ、僕たちが夜遲く、どうかするとウヰスキイの一杯位飮んでC——と一緒に歸つて來て、がらりと入口の唐紙を開けると、うつかりすると蹈きさうなところに、兄が、彼のもう頂邊(てつぺん)のすつかり禿げた頭が座蒲團を四つに折つた枕をして轉がつてゐるのだ、彼は山形の口をぽつかりと開いて、尻下りの目を如何にも一日の勞働に疲れたらしく閉ぢて、場所が狹く寢床が小さいものだから、身體を蝦のやうに曲げて、正體なく寢入つてゐるのだつた、C——は汚ないものを見るやうに、その枕元を急いで通つて、自分たちの枕の傍のところに一時間ばかり坐つて、僕たちは色んな無駄話に一頻り夜を更かすのだつたが、兄が大きな鼾をかいたり、時とすると何だか分らない大きな聲の寢言を言ふと、僕は自分がC——の居候でもあるかのやうに、彼の顏色をうかゞつて、生憎その時話が途切れてゐたりすると、慌てて何かの話題を求めて話したりしたものだ。

けれども、それも一週間以上のことではなかつた、といふのは、A——の方で間もなく又兄に此方(こつち)に來て居れ、と言つて來たので、彼は喜んで、實際彼は始めにあれ程望んでゐたところの、僕の窮屈な下宿にゐるよりもA——にゐる方が遙に居心地がいゝ、と後に母に洩らしたさうだが、A——に歸つて行つたが、それから又一週間以上でない或日のこと、母の報告が言ふには、神戸のA——の家から、聞くところに依ると、折角兄が行つてゐるのに、弟の方で碌に世話をしないさうだ、無論又親子で下宿の一間に同棲してゐるやうな狀態では、そこへ割り込んで行く兄が可哀さうだから、神戸の方へ戾せと言つて來たさうだ、と言ふのである、なアに、神戸のA——は何と言つても大家(たいか)のことだから、一それに奉公人が始終變つて、ちつとも馴れた者がゐないといふことだから、兄のやうな正直無比な、鈍には相違ないが、長年ゐて勝手を知つてゐる上に、安心して物を任せる人間が、やつぱりゐないと困るものだから、さう言つて來た

に違ひないとも思へるのだ、が、何にしても、それを聞いた母も僕も、大きに喜んだことだ。隨分血としては薄い親戚であるのに、そんなにも面倒を見てくれるA――に對して、僕はどんなにか感謝の心に充たされたことだ、ところが、何としたことか、兄はその話を聞いて喜ばないばかりか、もう神戸に歸りたくない、と言ふのだ、と言ふのも、現にA――の主婦などは二十年以上三十年近く居馴れた男のことであり、鈍で、耳も遠いが、正直者である彼を愛してくれてゐるのだが、大勢の奉公人が十分彼を輕蔑して、彼に辛く當つたり、辛い用事を押し付けたり、露骨に薄情な行をしたりして、彼を揉むことであらう、それ等のことが、如何に善良な彼とは言へ、神戸に歸ることの辛さを身に沁みて思ひ出させるのであらう、東京のA――の主人がその事を言ひ渡した時も、又母がそれを傳へた時も、四十歳に近い年の彼が、奉公に出されるとて悲しんで泣く少年のやうに、歸るのが厭だと言ふと言ふのだ、その話を聞いて、僕は溜息をついたことであつた。

が、それ迄に厭がりながら、或日彼は又突然やつぱり神戸に歸ると言ひ出したのであつた、他人と餘り變らぬ程の邪險な弟や、何處か素氣ない母や、それよりも何よりもその人たちの餘りに餘裕のない生活に、如何に浮世の印象を受取ることの鈍い彼とて、呆れて且失望したのであらう、「やつぱり神戸に歸ります、」と言つて、彼はその大きな、白目勝の目に涙を一ぱいためてゐたさうだ、僕だつてそれを母から聞いて、小さい、細い目に涙を一ぱいためて、信仰心など微塵もない常の心だが、その時は何者にともなく、我等を憐み給へ、と祈るやうな氣持になつたとは決して噓ではない。

最後に彼が僕の下宿に來た時、丁度O――も誰もゐなかつたので、僕は努めて優しく彼に言つた、「あなたも知つてるやうに、いくら探しても適當な家がなかつたでせう、それに目下のところはこんなに貧乏でせう、だが、もう少し辛抱して下さい、今にもう少しどうかなるつもりですからね、もう少し辛抱つひでに辛抱して、神戸に歸つてゝ下さいね。」

「へえ、」と彼は半分口の中で言つて點頭いた、「へえ、」といふのは昔から少しも變らない、よく目上の人なぞから、返辭だけでももつと確かりと、はつきり言ひなさい、馬鹿が尚馬鹿に見える……なぞと言つて叱られ叱られしたところ

の彼一流の鈍な發音の言葉なのだ、そしてさう發音する時の彼の顔の表情は、抵抗すべからざる者に對する、幾分恨を持つたあきらめの、何とも言へぬ悲しい感じに見えるのだ、少年の頃同級の生徒に「わつしよい、わつしよい！」と叫んで、手を取つて雨の日の廊下を引つ張られた時の顔の表情を、それは僕にさま〴〵と思ひ出させるのだつた。

　それから暫くすると、彼は突然、

「僕、この間からお母さんにも言つといたんだがね、」持前のかすれた、不分明な聲で、恐る恐るのやうに言ふには、「僕セルの袴が欲しいんだ、少し位綿の入つたのでいゝから、お前がお金が入つた時でいゝから、拵へて下さいな。……」

四十歳近くになつた兄が、弟に言ひにくさうに、「……下さいな、」と言ふのだ。

「えゝ、こしらへます、こしらへます、」と僕は今の彼の言葉の節の耳に殘つてゐるのを打消すやうに言つたものだ。

　そして、その翌日、僕はその時丁度○――が、今日は少しばかり金があるから、銀座だつたかを散歩しよう、といふのに誘はれて、停車場に行かなかつたが、長年の間思ひ思つて來た東京に一ケ月以上滯在しないで、又元の、決して樂しいところではない神戸に歸つて行く彼を、母一人に見送らしたのであつた。そしてそのまゝ彼を見ないのだ。……

中略

　そして彼は今度突然、彼の、そして僕の父と同じ病氣の腦溢血で、だが彼の父のやうに朝晩好きな酒を飲んで樂むことも一度も經驗せずに、言はゞ人の家の庭を掃き、風呂を焚きつけ、銀行の使をして一生そんなやうなことをして、そして忽焉としてこの世から消えてしまつたのだ。

　けれども、そこで何の躊躇もなく僕の言へることは、外のどの人間よりも彼は死んで誠にいゝことをしたに違ひない、彼はこの世で彼が住んでゐたところより、百倍も千倍もよい所に、極樂とでも言ふところだ、そこで例へば蓮の花の上にでも坐つて、誰からも苛められたり、輕蔑されたりすることなしに、ぞんざいだと言つて叱られる庭の掃除も。

時間が遅れたと言つて苦情の出る風呂焚もするとなしに、「護身用」のピストルを買ふよりも、「記念」の繪葉書を貯めるよりも、もつともつと嬉しくて、いゝ日を送つてゐるとであらう、そして恐らくそこで彼が一つ息を吐いて一つ息を吸ふ間に、此世の年數の百年位が飛び去つて、そこで僕等のやうな人間共はばた／＼と死んで、閻魔の庭に引出されるのだ。

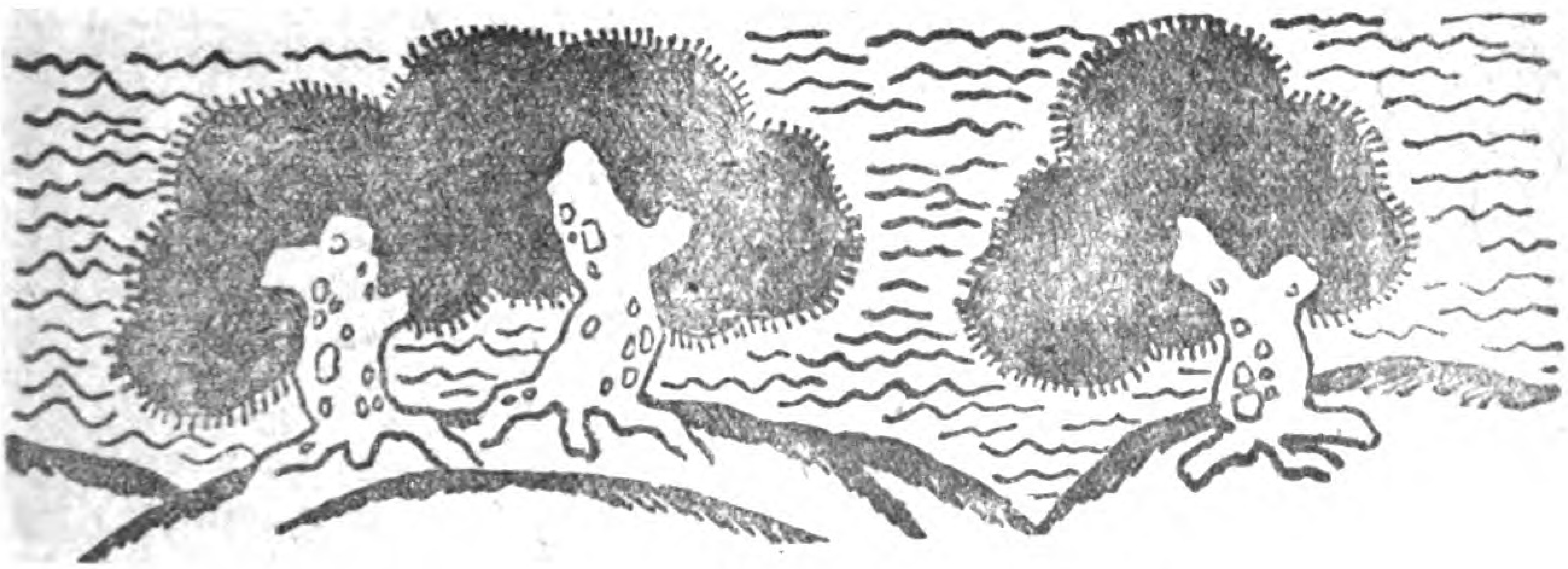
若しその時は、僕は少しも惡びれずに、話す時間さへくれたなら、細大洩らさず娑婆での自分の惡行を白狀するつもりだし、殊に兄に對する弟としての不逞な行狀の數々は、實際にあつた七倍にも誇張して話して、地獄といふものの一番重い仕置にあふことさへ覺悟の前だ、そしてまたその方が僕の氣も濟む譯だ。

だが、君が知つてるなら敎へてくれ、しかし恐らく君にも分るまい、恐らくこの世の誰にも敎へられない、もつともこれは或ひは僕だけの感情かも知れないが、この世で知ることが出來なかつたら、僕は試みに閻魔大王にも聞いて見るつもりだ、といふのは、何故僕が兄にそんなに辛く當つたか、彼に限つてどうして？　と時々考へることがあるのだが、僕は彼が兄でなかつたら、例へば友達とか、友達の兄弟とか、一口に言ふと彼が全然他人であつたなら、君も知つてゐるやうに僕は變な性質で、自分に少しの餘裕もない癖に困つた人間を、もし自分に家があるなら、居候に置くといつたやうな癖に近いものなどを持つてゐる男だ、恐らくその癖を以てしても、僕は唯一つの條件は彼が僕の兄弟でなかつたなら、僕は彼を憐んで彼を無理にでも引張つて來ないとも限らないのだ、と思ふのだ、それが唯僕と同じ血の通つてゐる、骨肉であるが故に、僕が變な負擔を感じたり、遠慮なく言ふと厭惡を抱いたりするのはどういふ譯であらう、これは僕だけの不思議な、曲つた氣持か？　僕はこれだけは是非とも閻魔大王にも聞いて見るつもりだ。

「この馬鹿野郎！」と右側に立つてゐる赤鬼が鐵の棒で、

「このたわけ奴！」と左側に立つてゐる青鬼が鐵の棒で、僕のひ弱い腦天を叩き潰さうとも覺悟の前で、僕は聞いて見るつもりだ。

ともあれ、君の親友の、變な話だがその生前には存在さへも知らなかつたところの、兄のために、遙かに冥福をいゝそして杯を擧げてやつてくれ。……　(九、三、一四)



蒼ざめたる人と車

室生犀星

その日は朝から冷たい雪がふり出して、道路は見てゐるうちに白く積つて寒さも一としほ泌みるやうに強くなつて行つた。私は少しばかりしかない荷物をまとめると、それを室のすみに寄せかけて置いて、窓から人家の屋根や道路を見下ろしてゐた。風が出たらしく雪脚がきうにはげしく亂れて、その二階の硝子戸に吹きよせるたび毎に重く冬らしい陰鬱な音を立てた。硝子戸にくつゝいた雪は見てゐるまに融けはじめ、透明な雫になつては糸を引くやうに辷つて落ちて行つた。けふぢうにどうしても越して行かなければならない追ひ立てを食つた私は、さうとは豫期をしてゐたとはいへ、まだ何處と言つて宿をさがしたといふ的もなく、鬱ぎ込んで、眤と呼吸をつめて硝子戸に頰をつけるやうに外ばかり眺めてゐた。

「今日はどうしたつてお引越しになつて下さらなければ困りますよ。わたしどもゝ道樂で人樣にお室をおかししてゐるんぢやございませんからね。」

と今朝目を覺ましたばかりの溫かい私にいきなり宿のおかみは恁う言つて、齒痒さうに私をながめた。私はその目を思ひ出した。それは一本氣な女の狹い心から出た言葉でもあり、また自然らしくもあつた。氣性のよいとき能く室を拭いたりしてくれたこと

も、いまになると思ひ出された。

私は半年あまり住みなれた室をあちこちと眺め、いまは蟻の卵のやうに乏しい幾冊かの書物をおさめた行李と、二三枚の額縁とに目を止めた。その行李は私のまだ少年であつたころから、郷里の家の押入れに積まれてあつたもので、いろいろな裁ち布片や糸屑や、姉の背負揚のなまめいた古いのなどが入つてゐて、それを六疊の居間一杯にひろげて姉がよく仕事をしてゐたもので、その角縫ひをした黒い強い麻糸なども、よく覺え込んでゐた。それが上京してから私の書物がおさめられて、國から送られてきてから、街裏から街裏をいつも追はれるやうにして移つて歩く私の唯一な荷物であり、しかも最も量のありさうに見える嚴丈な行李であつた。はじめて國から送られたとき、本郷根津の谷間のやうな裏町の或る二階で、私は懷かしげに中をひらいて、茶や煙草や手帳などが着物のあいまに入れられてあつたのを取り出しながら、すぐ感じやすく温かいものに誘はれるようにほろりとしたものであつた。その他に一つの古い加賀人形が殿樣何年とか書いた古本崩しの袋紙につゝまれ、ていねいに本箱におさめられたのが入つてゐた。それは國の古い家々のしきたりになつてゐる三月節句の飾りもので、その袖口の金襴や、御局帽のあたりなどが剝げかかつてゐながら、なほ一層に優しい古い人情の囁きを潜ましてゐるやうな古びた加賀人形であつた。柳の芽がほつれ出すと舊い家々の奥座敷には、ことに女の子のゐる家には皆な美しい雛が飾られた。私の家にも姉が數多い人形を持つてゐて、七八壇もある毛氈をひきつめただんだんに、春はいちはやく飾り立てるのであつた。

私はその加賀人形をいつも下宿から下宿へ越してあるくたびごとに、あるひは書棚の上や、床の間の一端、または机の上などに置いて、朝夕それとなく眺めてはひとりで微笑みを誘はれるのであつた。女らしい心づかひの濃かさ周到さに充ちたこのおくりものは、耳の底まで痛みをかんじるやうな泥醉して歸つてきた晩など、ぐつたりと打倒れて深い醉を吐きながらも、よく腹這ひになつて沁々見詰めるのであつた。その妙につまみあげた小さい鼻や、貝のやうにきらきら光る黑い瞳、乾いたやうな白つぽい頬のあたりなどが、たまらなく醉つた目には白々しく寂しいものに眺められた。私

は立つてふら〳〵と人形を抱きあげて痴呆的に頬摺りをしたり、または泥醉者にありがちなげら〳〵と高い聲で嗤つて見たり、子供をあやす母親のやうな獨り言を繰り返したりしてゐた。何處へ行つても名もない私の作品は用ゐられないばかりか、そのために一頁さへ割愛してくれる雜誌すらなかつた。みんな冷やかな禮節のうちに、わざ〳〵訪ねて行つても追ン出されるやうに歸へらねばならなかつた。私は苦しいまぎれにいつも酒の方へ心をひたした。自然頭ばかりがヒネくれて妙に高踏的な考へやうをして、たゞ、とき〳〵人と話をすれば、人の作品を罵ることさへした。その無爲な唾とともに吐かれる罵倒をやればやるほど、心は深い寂寞に封じ込められるのであつた。私は私の心が不純な濁りをたたへてゆくことを自分でいけない事だと思ひながらも、これをどうすることも出來なかつた。

街燈のきらめくあたり、もう電車もなくなつた通りに徒らに規則正しく走つてゐる軌道(レール)の燈影された蒼白いのを、寂然(しんかん)とした街上にながめながら、毎夜のやうに首垂れ、しびれを切らしたあたまを抱へて歩く姿は自分ながら苦し過ぎてゐた。わづかな書籍、着衣、時計、さういふものは皆金にかへられ、然うして酒代になつて行くばかりでなく、現に明日といふ新しい日を迎へるためにも事缺いてゐた。もとより同鄕の友からも一人離れていつまでも名もない荒廢された日常をおくつてゐることゆえ誰一人私をたづねて與れるものもなかつた。せめてどういふ薄ぺらな雜誌にでもいゝから自分の作品を毎月のせてゐたら、私は決して渠等に負けないとも思つた。さういふ晩、おそく火の氣のない室で的のない作品に熱中した。心は火のやうに燃えた。いまに見ろといふ烈しい怒りが對手なしでいつも私の面にあらはれた。私はガタガタ震へる膝をくみあはして、まるで合掌してゐるやうな形で毎夜おそくまで机に向つた。さうかと思ふとこんどは又た街へ出て行つた。ちび飲みの永い夜はからだのはじからはじを醉はしめ、しびれを切らせた、さうしてまた。同じやうな絶望と深い吐息とにせめさいなまれながら、暗く沈んでは歩いた。おれはもうだめだなとも思へた。生活から言つても、また、ひき上げてくれる友から言つても、さういふものは一人も私にはゐなかつた。私にあるものは宿から宿を追はれる苛酷な運命、も一つはどうして明日をくらさうかといふ烈しい過剰された時間の苦しみであつた。私は貧

屋の明るみに投げ込まれた一疋の小犬のやうにおど〳〵しながら、さらに、こんどは暗い通りをひつそりと音もなく歩くもの丶運命にも似てゐた。

本郷根津の裏通りに、一軒の古い骨董店があつた。そこには、海を渡つて來た古い陶器や、横濱あたりからきた壁かざりや敷物、または皮張りの丈夫な椅子などが所せまく陳べられてあつた。それらの雜然として古い匂ひをこめた骨董や西洋家具類を照してゐる電燈が、たゞ一つ煌々として輝いてゐる下に、腰の折れた主人が幾年も生き延びた墓のやうに、重々しく靜かに坐りこんで、私の出した加賀人形をひねくり廻した。重厚い光をもつた老眼鏡をとき〴〵きらりと光らせながら、その人形の目鼻や、衣裳などを仔細にしらべた。さうしてその最後に紅絹裏のついた裾[illegible]しのところを臆面もなく、さら〳〵と手ざわり荒く剝ぐやうにして人形師の落款を調べやうとした。私はそのとき、小豆(あづき)ほどな白い小指のそろつたすべ〳〵した足のさきから、ふくらみあがつた甲の一部をそうつと見た。それから更らにふくら脛のほそぼそした寂しい乾いたいろに次いで、腰のあたりから下がつてゐるらしい美しい紅い襦袢の下に、その古い人形師の用ゐる茶褐がゝつた楮紙に(賀)(まるが)とかいた落款を見た。そのすべてに弱々しい女性の姿をしてゐる尺足らずの人形を乘せてゐる骨董店の主人の手が、日燒けのしたやうな節高な手であることが、その人形のあまりに纖細で優秀であるにくらべて、これはまた、一つの彫り物のやうに陰影深い皺のよれ込んだ大きな掌(てのひら)であつた。その手首から盲縞のごつい袖口までにあらはれた腕には、まざまざと荒い毛がはじき出てゐるやうに生えてゐて、それが床几に腰かけてゐる私に氣味わるく電燈に透いて見えるのであつた。私はあれほど姉が大切にしてゐた人形をこんな男の手にわたすばかりでなく、裾まではがれてゐるのを見たら姉はどんなに歎くだらうと思つた。さうしてもう人形が汚されたやうにも思はれた。

「さうですね。おいくらにもなりませんね。お古いにはお古いものですが、人形師はやはり京都か東京が本場でしたからね。まあ、おひきとりするとすれば、判らぬなりでお古いところが取り得でせうね。」

と、澁い太い聲で言つた。どこか茶化したやうなところもあつた。

「かねがいるんだが……できるだけいゝ値に引きとつて下さい。」

と私は不愉快な念ひで、やつとこれだけ言つた。

「さあ、お引き取りをしても却つて御損でせうよ。とても値にならないほどお安うございますからね。」

と落ちついて、目金のそとからじろりと私を見た。白眼がちな、しんとした目であつた。

「いつたいどれだけなんです。」

と私はいらいらと急き込んだ。通りに商人體の男が店のものを眺めながら物珍らしさうに聞き澄ましてゐるのも氣になつた。

「お腹立ちになつていけませんよ。まあこれ位ゐなればいたゞけませうさ。」

と、主人は算盤(ソロバン)をとると、四十錢の四のところに一つ玉をはじいた。私はそのとき、いきなり本能的に十のところへ五の玉をカツチリとおろした。それが私として出來すぎるほど速やかで鋭どくやつたものだ。主人は苦笑したが、私の憤怒とも悲しみともわからぬぎらぎらした眼を見ると、

「へえ。ようございます。さう致して置きませう。――」

と言つて大きな銀貨を三枚出した。私はそれを受けとると馳け出すやうにして、通りの明るい方へ出て行つた。

「おれはだめだ。おれは墮落した。」

と私はひとり言をした。いろいろなものを無くした数限りない經驗をもつてゐたものゝ、その日ほど譯なく墮落したと心から然う感じたことがなかつた。埃深い店さきに明日から彼の人形が通りがゝりの人目に曝されることを考へると、姉の心づくしをも踏みしだいたやうに濟まない氣がした。……

私はこれらの惱ましい思ひに亂されてゐるうちに、窓のそとの雪はだんだん烈しくなり出した。もう窓下を通る人の足駄の音も消されるほどの積雪になつて、寒さもどつと強く増して來たやうであつた。かうして荷物をまとめてもまだ

行くところさへなかつた。今朝おかみが今日中に立ち退いてくれるやうに言つてきたので、荷物はまとめたがまだ宿は見つけてはなかつたのだ。

　階段に誰かゞ上つてくるらしいので、息をひそましてゐると、おかみが少し荒々しく障子をあけた。

「お荷物がおできになりましたら、お立ち退き下さい。つぎの方がもう決つてゐるのでございますから。」

　と相變らず剌々しい邪險な聲で言つた。

「分つてゐますよ。でも此通りの雪ですからね。すこし霽れてからでもいゝぢやありませんか。」

　と私は落ちついて冷やかに言つて窓の方を見た。綿雪といふ故郷あたりでよく降るらしいぼかぼかしたのが、しきりなしに降りつゞいて耳のそこがしんとして來た。

「でも最うつぎの宿が定つてゐらつしやいますのなら、わけなく越せるぢやありませんか。」

「ところが決つてゐないんです。これから探さなくちやならないんです。」

　といふとおかみは「まあ。」と少しびつくりして、すぐ喰ひつくやうに言つた。

「あなたの探しにお出になるのを待つてゐられはしませんよ。今すぐにでも次ぎの方が入らつしやると困りますから……」

　と言つて、今にも追ン出すやうに中腰になつて、なかなか出てゆかなかつた。つぎの人なぞもまだ定つてゐないのだ。私のやうに貧しい者に二階を貸して置くのは厭なんだらう。すぐにでも出てゆきたかつたが雪はますます烈しくふりつゞいてゐるので、見す見す道具の濡れるのを承知で出てゆくでもあるまいと思つて、私はだまつて煙草をふかしはじめた。それがいかにも悠然としたやうに思はれたのか、白い吸殻が盆の上に落ちたのを目敏く見てとると、いきなり

「危ならございますよ。火を落さないで行つて下さいまし。」

　と小さく叫んだ。私もかつとした。その血色のよい肉感的な顔をちつと睨んだが、すぐ唾を嚥み下しながら對手にな

るまいと默り込んだ。

「あ、さう、さう、まだおあとに殘つてゐる分の抵當として此行李をおあづかりしますよ。夫もそのやうに申してゐましたから。」

と、急に思ひついたのか、かう言ふと利巧さうに小粒な目を私に向けた。私ははつとしたが、きつとかう言ふにちがひないと豫期してゐたので、やはり默り込んでゐた。やつてしまつたつてい〻。どうせ自分の所有もいつかは人手に渡るのだからと諦めが湧いた。けれども、この行李のそばに姉の坐つてたことを考へると、無暗にこのいやなおかみに渡す氣にもならなかつた。荷物と言つてもこれだけしかないのだ。

「おかねがおできになつたら取りに入らしつて下さい。いつでもお渡ししますから。私どもでは、唯それまでお預りしておくだけなんですから。」

と少し言葉をやはらげて言つて、行李のそばへ寄つて手で蓋の方をなで〻見た。いつの事だつたか私の行李をもし賣るやうだつたら讓つてくれるようにとおかみが言つたことを思ひ出した。私は目を閉ぢるやうにして言つた。

「ではお持ちなさい。なかはガラクタですから……。」

と言つて、私は中から書籍と着衣とを出して、行李だけを其處へ投げ出した。大きな嚴丈な行李は不自然な新しさを窓外の薄明りに寒さうに見せてゐた。

「ちや、たしかにお預りしますよ。」

と言つて、重さうに廊下へ引き摺るやうにして出て行つた。階段の一段づ〻にことん、ことん、と行李が摺れて行く音がして行つた。それがだんだん遠のくと、今更らのやうにもう荷物と言つては机一つしかない私自身が顧られた。それに額が、二枚あるきりだ。さすがに夜の物に手はつけられてなかつたが、何んだか、その机にしろ、額縁にしろ、夜の物にしろ、皆な離れ離れに一つづ〻私から捥ぎ取つてゆくものがあるやうに、自分の所有でないやうな冷やかな目で、

いまは靜かに眺められた。どうせ、からだ一つになつて、何處かへ行かなければならなくなるのだらうと考へた。それよりどうにもならないのだ。

　雪は歇む間なく降つてゐるので、耐りかねて一臺の人力車を私は呼んできて、机や、ガラクタを積み込んだ。その上に幌をおろすと最う白々と雪がつもつた。車夫は

「いやな雪になりましたな。中々急には霽れませんや。ときに、どちらへお越しになるんです。」

と言つた。

「まだ〻さきの宿をさがしてないんだ。何んでも根津の裏通りを引いて行つてくれゝば見つかるよ。」

といふと、車夫は呆れ返つて

「旦那方はのん氣だな。荷物をもつて宿をさがすなんて。」

と言つて引き出した。おかみは勝手の障子から此方を眺めてゐた。私はそれでも帽子をとつて輕く挨拶をした。何を言つても半年ばかりも見なれた顏だつたので。――するとおかみも輕く頭をさげて挨拶をした。その微笑するとも仕ないとも分らない窮屈な表情が、いかにも寂しさうに見えた。こんな雪の日にあゝまで仕なくともよかつたと思はれるほどの、さすがに女らしい氣になつてゐるのだらうと、私は車のあとから額縁をさげながら振り顧りながら行つた。

　本郷の高臺がだんだん根津の谷間のやうな町につゞいて、じめじめした崖になつてゆく千駄木町の奥は、殆んど蜘蛛の巣のやうな貧しい小路が入り亂れてゐた。鳥屋や銘酒屋がところどころにやゝ明るい軒や入口を見せてゐる外は、古材木を積んだ空地、溝にそふたしめつぽいパン屋、箱のやうな狹い米屋、地下室のやうな腰窓のある暗い鍛冶屋などが、何處まで行つてもぐるぐる廻りくねつて、たまに本通りから高臺へつッきる道路に出ても、すぐ、そこの小路から依然とした、さなだむしのやうな裏町がつゞいて、おなじやうな駄菓子や古着屋、瓶屋などが、ごちやごちや居苦しさうに蒼白い雪景のなかに滅入りこんで、ずつと團子坂から池の端七軒町の屑屋ばかりの住むあたりまで續いて、どの一

階家にも、あるひは夫婦者とか、學生や、女工みたいなものが、借間して住んでゐた。從つて貸間も多かつたので、私はあちこちの二階や、路次の奥などをのぞき込んで、そこに貸間の札が下つてゐないかと、とき〴〵、貸家の札を見遁しながらあるいた。ぬかるみになつた雪汁が爪掛けの割れたところから沁みこんで、足袋のさきをびつしよりと濡してゐた。それがひりひりと冷たかつた。

「どうも見當りませんな。いゝ加減にしないともう日が暮れますぜ。」

と車夫が言つた。足袋素足のびしよびしよと雪汁をふむ音と、轍の雪をすべる音ばかりが、聞える寂しい汚ない裏通りを的もなく歩いて行つた。何處かに自分の住む室があるだらうといふ考へが、あくまで自分を信じさせてゐたけれど、もう日暮れ近い通りには色々な物賣りの聲が尻消え消えに彼處此處に起つてゐるのを聞くと、私はもう宿が見つかりさうもないやうな氣がし出すのであつた。たとへ見つかつても、すぐに車と一しよに入るのも變だし、どんな人でも不安な念ひをするに違ひないと考へられた。ことに暮れ近くなつたので、寒さが荒いがりがりしたものを交ぜたやうに、うす暗の上からすぐにからだに沁み込んで幾度となく惡感をさへ催させた。

「旦那、いつたい何處まで行つたらいゝのですか。大概にして見つけて貰はなくちや遣りきれませんぜ。」

と車夫は寒さうな聲で、また、ぶつぶつ言ひ出した。どの二階家にも皆な温かさうな火鉢が置かれて、そこに皆な樂しさうな晩を待つてゐるものゝやうに、或る家にはもう灯がともれてゐたりしてゐた。あんなにして好きなことを考へてゐたらいゝだらうと考へると、自分だけが宿もなくいつまでも雪汁の道を歩かなければならないやうな氣がして、沈んで、口をきく氣にもならなかつた。もう貸間の札を見つけることもいやだし、あつても無くてもいいやうな氣さへ仕出した。唯、かうして袴も着衣も少しばかりの荷物もみんなびしよ濡れになつて、いつまででも裏通りから裏通りをほつつき廻つて歩いてゐるだけが、いまの私の仕事のやうに思はれるのであつた。ことに騒々しい子供等のはしやぎたがる晩ノ時のあちこちの軒下に、珍らしさうに雪を投げ合つたりしてゐる[illegible]な、時々袴の裾をぬらしたけれど、私は叱る

氣にもならず茫然と車の輻のくるくる廻るのを凝視めながら、その輪にくつついた雪が一と廻りするごとに大きくなつたり、あるひは落ちてしまつたりするのを見ては歩いてゐた。

「旦那、あそこにありますぜ。ほら、あの二階です。」

と車夫は車を停めてとある二階を指さした。私はぼんやりと物憂げな目をあけて見ると、そこには白い障子が二枚はまつた二階があつて通りの方へ向けて、はすかいに貸間の札がはられてあつた。私はすぐ其處をたづねると、やつれたおかみが前垂れで手をふきながら出て來た。人のよささうな、ゆめでも見てゐるやうなぼんやりした目のおかみであつた。私はたづねた。

「お宅に貸間があるでせうか。」

といふと、私と車夫とを等分に眺めながら、「實は……もう今日決つたのでございますが、お一人ですか。」

「ええ。」

と私はがつかりして聲を落して言つた。絶望はすぐ私にからみついた。

「お氣の毒さまですが、今朝ならよかつたのでしたけれどもね。」

「は。然うですか。どうもお邪魔をしました。」

と、私はこの軒をはなれた。おかみは濟まないやうな目つきで、私と車とを永く見送つてゐた。

「旦那、もうこんなに暗くなつてしまつては、貸間なんかありはしませんよ。」

と、大きな遠慮のない聲でどなつた。私はそこらの軒にゐる人らに聞えないかとはらはらしながら。

「默つて引いて行つてくれ。そのうちにあるよ。たのむ。」

と言ふと、私は心が煮えるやうな寂しい氣がし出した。私だけが何の科によつてかうしてうろつかねばならないのか。何一つ私がこの世を不合理なものにしたか。などと考へながら、ぬかるみをばちやばちや歩いた。

空は一色の灰だみた色にくもつて、雪が思ひ出したやうにぽつりぽつりと降つてきた。それは激しく降るよりも故つと寂しい姿をもつてゐるやうであつた。まるで、浮いたなりで動かないやうにぢつと考へ込んでゐるかと思はれるほど宇宙にある雪の幾片かが、ときどきの風に吸はれるやうに吹かれては、私のつめたい頬にあたつた。

私はそのとき、誰かが背後から私の名を呼んでゐるやうに思はれたので、急にうしろを向いて見たが誰もゐなかつた。もしかすると先刻のおかみが私を氣の毒がつてあとを趁つてきてくれたのでもあるまいがなどと、苦しい心が少しづつ寛みながらさう思はせたが、ふりかへると誰もゐなかつた。と、今まで氣がつかなかつた兩側の軒燈がみな何時の間にか灯が點いてゐて。赤い懷かしい色に榮えてゐた。しかし夫れは東京の街裏にのみ見られる爛れたやうな、荒んだ氣をおこさせる燈の色でもあつた。私はどうにもならない心でゐて、なほ執念深く歩きつづけたが、もう右と左とにたへず持ち換えてゐたりしてゐる額緣の重みと、外氣の刺戟性のある寒さとが、もうすつかり指を凍えさせてしまつてゐるやうであつた。

「オイ、車屋さん。けふはいつたい幾日かな。」

と私はおもはず尋ねると、車屋は不機嫌な聲で、お世辭とも何ともつかない私の言葉につッかかるやうに。

「十二月の十八日でさ。お觀音樣の緣日ですさ。――。」

と言つた。

「さうか。十八日か。」

と私はそれきり默つてしまつた。さうしてその十二月といふ寒い月を呪ふやうに、凍えて感覺のない足にちからを込めた。そのとき、突然、私はかつと血があたまへ上りはじめたやうに車夫の樣子を窺ふた。車夫はあたまから汗みどろになつて、もう自棄半分になつて引いてゐた。だんだん四邊が暗みをおびて來た。私はとある路次をちらと見ると、そこは穴藏のやうに暗く軒燈一つ點れてゐなかつた。私はそのとき、いきなり、その闇のなかへ逃げ込んだ。車屋にあの

荷物をみんな與れてやつて、私はもう何も彼も係はりのない身になりたかつた。路次のなかは黒汁のやうな濘が雪のなかに浮いて見え、小さい家々の格子戸のなかから暗い五燭の電燈が、あちこちから道の上にうすく射してゐた。私はこんな家でもいいから安らかに睡りたいなどと思ひながら、拔け道があるにちがひないと、四五軒さきへゆくと、果して路次が岐れてゐた。その角を曲らうとすると。

「旦那、旦那。」

と呼ぶ車夫の聲がした。ほんのりと雪明りの路次の入口に、通りの瓦斯燈のうすぐらい光をうしろにして立つてゐる車夫の、雨具合羽がどこかの灯のかげを宿してゐるのが見えた。私は慄然とした。それでも瞬間、すぐに逃げ終へやうと身構へながら一歩足をじとじとな柔らかい泥濘のなかへ踏み込むと車夫はすぐ見つけた。さうして走つて來て

「戯談ぢやありませんぜ。置き放しは酷いや。」

と、注意深く私を見守つた。

「ちよつと知つた家があつたものだから、寄つて見やうと思つたのさ。もういいんだ。さあ行かう。」

と私は疑ひ深さうにしてゐる車夫の前に立つて、闇のなかで顔を心持ち赤めながらかう言つて、くらい路次を出て行つた。さうして

「振りかへると旦那がゐないぢやありませんか。驚いて見ると路次へ這入つてゆくんだもの。」

と語尾を冷笑するやうに濁した。ちよろちよろと暗い路次を鼠のやうに逃げ込んだ自分の姿を私はすぐ目にうかべた。どうして彼麼變な氣になつたのだらうと思はず苦笑すると、車夫もすぐ苦笑ひをした。岩の碎片のやうな皺が渠れの面にうかんだ。何も彼もすつかり知り盡してゐるやうな渠れは氣味わるく默つて煙草を一服のむと、それを掌に入れて又た一服吸つた。私は默り込んでそれを見つめてゐたが、かれは急に煙草入れを腰にさすと

「行きますか。」

と、梶棒をとりにかかつた。

「ああ。」

と返辭をすると、また車の輻がくるくる舞ひはじめた。懶げにじとじとと何時までも灯のはいつた町につゞいた。

「旦那、何時まで歩いたつて駄目ですぜ。」

と車夫が又た言つたので、私はこの通りの裏にあるFの家をおもひ出した。さうだ。Fのところへ一先づ落ちつかう

――と思つて

「逆もどりだ。さうして千駄木館へ着けてくれ。」

と言つて、Fを訪ねると、Fは火のない火鉢のそばで何か書いてゐた。

「じつは宿を斷はられたのだ。」と言ふと、人の善いFはすぐ

「さうか、それりや困つたらうな。まあ上りたまへ。」

と言つて「炭がちつともないんだ。いま買つてくるから待つてゐてくれ。」と出かけやうとするので

「炭の金だ。」

と私はいくらか出した。それから車屋をかへして、二階へ少しばかりの荷物をあげてゐると、Fは風呂敷包みをかかへて二階へ上つてきた。はかり炭は火箸でつゝつく毎に、風呂敷包みのなかでがさがさ鳴つた。貧しい乾いた厭な音であつた。Fはきつとこの炭を買ふときいやな思ひをしただらうと思ひながら、どんどん火を起した。

「たいへん濡れてゐるね。ぢや半日も歩いたんだね。」

「うん。」

と私は火にあたつた。温かい抱きつきたいほどの快よい熱氣が、だんだんからだを廻りはじめた。私は救はれたやうな氣で、そつと財布を出すと

「酒をすこし買つて來てくれ。あとは明日の分だ。」
「さうか。酒はいい思ひつきだ。」
と言つてFは外へ出て行つたが、間もなく色々な鑵詰や煙草や酒などを買つて、寒さうにかじかんだ手つきで懐中からそれらの新しく喜ばしい買ひ物をひろげた。
「いい時にきてくれてよかつた。おれは煙草ものめないでゐたのだ。」
「さうか。僕も君がゐてくれなければ、今ごろは寒い道路をうろつくか、でなければ交番のご厄介になつてゐたかもしれない處だつた。――」
と、お互ひが救ひ合はしたやうな偶然の効果を喜びながら、そろそろ酒をあたため出した。室は四疊で、そこら一杯に新聞や雑誌の古いのが取り亂されて、壁にミレーの繪が一枚寂しくピンで止められてゐた。筆耕同様な仕事をしてゐるFも、ときどき仕事が途絶えては困つてゐた。
「しかし酒はいいな。」
と私はおもはず沁々した氣で言つて、ぬかるみを渡つて歩いてゐた先刻の自分の姿を再び目にうかべた。
「だいぶ溫まつたかい。」
「すこし呼吸があつたまつた。」
と話してゐるところへ、Kといふ歌をかく友人が這入つてきた。これも酔つてゐた。
「今ね。君の宿へ行つたんだ。おかみが噛みつくやうに（もうお引越しになりました。）と言つてゐたつけ。」
と言つて
「酒はいいな。」
と手酌でぐつとやつた。

―とうたう追つ拂はれた。こんな雪の日に僕みたいな男を追つ立てないでもいいのにな。」

と私は酒が廻つたので、つい聲を低くしていふと

「詩なんか書いてゐるからさ。」

とKは言つた。私はかつとした。が、ぢつと耐へてゐた。へいぜいから、私の仕事が表面に立てないこと、それに引きかへてKはもう雜誌にかきかけてゐることを誇るためにも、いつも私に皮肉がましくつツかかるのであつた。

「まあ見てゐてくれ。そのうちに仕事をするから。君が枯れ出したら此方の番だ。」

と言つて、私は幾杯ものみ乾した。その熱すぎるやつがからだを一杯にあたためた。

「負けおしみを言ふなよ。利用に詩なんか止めたらいいぢやないか。」

と冷やかに落ちつき拂つてゐる憎々しいのを私はちらと見ると、ぐらぐらと額が重くなるほど熾烈な憤怒の湧き立つのをかんじた。

「もう一度言へ。」

「詩なんか止めろといふんだ。」

と圖々しく操り返して言ふのを待たずに、私は手にもつてゐた杯になみなみつがれた酒をいきなりKの顔にぶつかけた。それでも足りない氣がして杯を壁のところに叩きつけた。

「亂暴をするな。口で言つたらいいぢやないか。」

「歸れ。歸らないと承知しないぞ。」

と私は動物的にじりじりとKのそばへ寄るとFは

「まあ、いいぢやないか。K君も默つてかへりたまへ。君はすこし圖に乘りすぎてゐるせいもあるから。」

と言ふと、Kは冷笑をうかべながら、立ちあがつて、默つて階段を下りて行つた。あとで私たちは默つて、ちびりち

びりと酒をはじめてゐた。あのKにしろ、なぜあんな風に人につッかかるやうにするのだらう。會へばよく林や野のことなど、なつかしさうに話する男だつたのにと考へ沈んだ。酒の上とはいひながら、なぜ、私はかう何時も氣が荒立つて、あんな亂暴な眞似をするやうになるのだらうと、いつも私の内に潜んでゐるやうな動物的な野性をおそれた。いつも、かつとすると、瞬時にそれをおさへる心に用意ができてゐても、再度の怒りに襲はれるときは、もう鎖を切つた猛々しい動物のやうに荒れるのだ。しかも然うした一定の刻限が過ぎると、却つて反對に心は澄み切つて來るのが常であつた。まるで、その怒さとは殆んど關係のない沈み切つた深い後悔とやるせない自愛とにせめられるのが常であつた。

默つてゐたFは、ぶつつりと口をきつて

「君もあまり彼麼ことをしない方がいいね、君の中にああいふ野蠻なものが有りすぎるほどあるが、これからはあまり仕ない方がいいね。」

と落ちついて苦勞したFらしく言つた。それがいかにも私にはしつくりと聞かれた。

「うん。わるいことをした。」

と私は低い聲で言つて、踞むやうに火の上に手を翳した。さうして「あんなことをすると後でやりきれなく寂しくなるんだ。自分の仕たことが耐らなく不快になる……」と私はまた言つた。

二人は默り込んだ。いつまでも恁うして苦しんでゐて名もなく斃れるやうな生活を送つてゐては、しまひには唯恐ろしくなるばかりだともFは話した。Fはもう一切を失つてゐた。一つとして完全な所有品をもつてゐなかつた。それらに依つて絕えず生活に新しい喜び樂しみを味ふことが、もうFにはなかつた。然うして私と一歩も隔てない貧窮の果に陷ちはまつて行つた。よく私だちはこの話をするごとに首垂れた。この肯定された内にも、とても負けきらない強い慾望がいつも凝固してゐた。いつかは世の中へ出やうといふ心は、たとへば彼の一ペエヂ二ペエヂでも發表したい心に燃えてゐた。Fはしづかに言つた。

「飲まないか。」

「うん。」

と私は杯を受けた。それきり二人はまた考へ込んだ。私は私で、すぐ室の入口に積まれた乏しい荷物をそつと眺めた。それは全で私の乏しい思想のあらはれでもあるやうに、貧弱で之加もたつた一と摑みで持ちあげられさうなものであつた。通りをうろついてゐたうちに雪に濡れたのであらう、覆ひの毛布の毛のさきには皆な小さな露がちらちら光つて、それがひとつびとつに電燈のかげを投影して見えた。

「狹くても世の中へさへ出て居れば、世間は認めるらしいね。かうして君と二人此處に坐つてゐる今の心持からいへば、とても君も僕も唯苦しむばかりで、てんで世間へ出てゆくあてがないぢやないか。」とFがしんみり言つた。

「しかし最つとさきのことを考へると、何かしら樂しみだ。今はしかたがない。第一道がない――。」と私はこたへた。

二人は永く默り込んだ。絕望的な吐息がまるで兩方で靜かにとり合せたやうに、ひとりでに吐かれた　酒はもう盡きてしまつてゐた、暗い電燈にひいた二人の影が、いつまでも動かないで一ところに寫つてゐた。

「もう寢やうかな。こんなときは、よい夢でも見るんだね。」とFは沈んだ聲で言つた。

「よい夢ならいいがね。」

と、私だちは床をのべはじめた。それは非常な凍り方をしてゐるらしく、ガツガツと石をふむやうな雪の凍えたのを踏むのが、この二階まで痛々しく耳にひびいて來た。いつの間にか炭火も消えて寂然とした鋭い寒さが幾すぢとなく戸や障子のすき間から忍び込んで頰のあたりを掠めて行つた。

「ぢやお休み。」

とFのこゑがした。蒼白い曝されたやうな額を氣にしながら、なるべく友達ちの方を向かないやうにして枕についた。そとはめしめし凍りつくらしい寒さの裂けるやうな音がしてゐた。



正月

水上瀧太郎

かねて病氣だつた母親の容體がよくないといふ通知を受取つた茅野は、大晦日の夜行で大阪を立つた。

ふだんから忙しい商賣に疲れた體を、暮には殊に虐待した。正月になつたら、少くとも松の內は、世間並の交際も止めにして、思ふさま呑氣に遊んでやらうと、それればかりを樂みにして居た。それには、子供の頃からの友達の、三田との約束もあつた、心置無く飮みもし、話もしようと、柱暦の一枚々々減つて行くのを待つた。ちいさい時分、指折り數へて待つたお正月の喜びが、再び彼に蘇つて來た。會社に勤めて居る時間は、商品の値段の上り下りばかり氣にして居る同僚にまじつて、彼も一かどの敏腕家だつたが、いくら商賣の道に明るくなり、自分の見込み一つで巨利を占め、會社の上役のうけがよくなつても、彼の方から考へると、自分の日常生活には、如何しても滿足出來なかつた。以前程の熱情はなくなつたけれど、五六人の友達と、文學雜誌を出して居た頃の、藝術に對する憧憬も未だに殘つて居て、會社員としての彼の心得を、屢々裏切るものであつた。その頃の仲間の多くは、文筆の士になつてしまつた。松浦や澤の如きは、第一流の作家批評家として、既に明治

から大正へかけての文學史の幾頁かに名前を止める人であつた。たつた一人、自分と同じやうに、ずるずるに勤人になつてしまつた三田さへ、閑を盜んで書く小説を發表して、それ相當の名聲を博して居るのだ。自分も一とつ奮發して見ようと、幾度も筆を執つたけれど、思想は文字に成らず、幻影は描寫とならなかつた。その創作衝動の不滿を、會社勤務の結果だと考へるのが、彼にとつての心なぐさめであつた。

周圍の無理解――さうだ、それが自分の寂寞だと、彼は常に考へた。誰の月給がいくら上つたとか、今期末の賞與金は月給の何箇月分だらうとか、何處其處の某は成金になつたとか、そんな話ばかりして居る會社の事務室にはぐくまれた孤獨の悲哀は、年と共に深くなつて行くやうに思はれた。第一大阪といふ土地が氣に喰はない。教養の無い文明といふ言葉が使へるならば、それは大阪の事なのだと、彼は人前で云ひもした。學問藝術を尊敬する心持を失ひ切らない者にとつて、學問藝術を輕蔑する人間の安つぽさは、堪へられないものであつた。外の友達は東京にかたまつて居るのに自分一人大阪へ寄越されてしまつた事も、自分の寂寞を増し、藝術家としての自分の發達を阻害した原因に數へられた。

大阪へ行くとしいへど悲しがる
人もあらねば一人酒飮む

初めて支店へ來る事になつた頃、戯れに友達に送つた歌を、彼は時々酒席で、藝者の持つてる扇などに書いてやつた。永い間、友達の無い寂しさに惱み盡して居たところへ、思ひもかけない三田がやつて來たのだつた。三田もその勤務先の會社の出張所詰になつたのだ。土佐堀の濱側の宿屋の二階に、三田の居場所を見付けてやつたのも彼であつた。

「僕はこの四五年といふもの、ほんとに自分の思つてゐる事を口に出した事が無いといつていい。相手が無いんだ。そりやあ大阪は堪らないよ。君なんか到底も辛棒出來ないぜ。」

自分自身驚いた程饒舌になつて、三田をつかまへて喋つた。癇癪持の我儘者の三田とは、今日迄に幾度仲違ひをしたかわからなかつたが、そんな事は一切忘れて、茅野は心から、友達の大阪に來た事を喜んだ。會社がひけると、眞直に

住吉の家に歸るのがおきまりだつたのに、三田が來てからは、お互に誘ひ合つて、何處かで食事をする事が多くなつた。酒飲の三田につきあつて、夜を更かす事も繁くなつた。會社の取引先との、招いたり招かれたりの宴會には、ほとほと閉口してゐたのに、思ふさま勝手に振舞へる竹馬の友と一緒だと、飲めない酒さへ過すのであつた。殊に三田が、宿の六疊に机を据えて、乏しい時間を惜んでは、創作に努力して居るのを見る度に、茅野も、昔描いた若々しい藝術的憧憬にそそられて、自分も文壇に打つて出ようといふ希望が旺んになつた。けれども矢張りいざとなると、彼は根氣が續かなくなつて、倚り馴れた黒檀の机が徒らに冷たく思はれるばかりで、未完成の原稿は、身の側にうづ高くなつた。

「そろばんばかり彈いてゐちや、到底も創作なんか出來ないねえ」

彼は三田に逢ふ度に愚痴を溢したものだつた。

「なあにそんな事があるものか。かへつてその方が藝術的良心を失はないでいいんだよ。毎日々々小説を書いて、そいつを賣る事ばかり考へてゐるのも堪らないぜ。」

三田にいはせると、藝術家の二重生活といふ事は、日常生活の外形できまる問題ではなくて、全然良心の問題である始から終迄、低級な讀者に媚びながら通俗小説を書いて、しかも藝術家面をして居る者こそ二重生活者と呼んでいいのだと云ふのであつた。

「僕なんか晝間は帳面づらが一厘合はないとか、そろばんが一桁違つたとか云つて、齷齪してゐればゐる程、日が暮れて家にかへると、机にむかつて筆を持つのだと考へるのに張がある。少くとも文壇の義理つきあひにまつはられて、不知不識に周圍の影響に壓倒されてしまふ危險に迫られない丈でもいい。自分の賦性を尊ぶ者には、寧ろ吾々の生活の方が自然なんだ。」

飽迄も確信してゐるものの如く、何時もきつぱりいふのであつた。さうして三田は、その言葉通に振舞つて、押通して行くのであつたが、茅野は如何しても心から承認する事は出來なかつた。

「君は體が丈夫に出來てるからそれでもやつて行けるんだ。」

と小面憎くも思ふのであつた。毎晩、四五時間眠れば、晝間の疲勞を回復してしまふ頑健な三田なんかと一緒にされて堪るものかと。自分のきやしやな肉體を誇る氣持もまじへて不服だつた。第一三田は獨身だが、自分には妻もある。」子供もある――と考へると、彼はその妻子も亦自分の天分を萎縮させてしまつた原因だつたやうにも考へた。

「あゝあ、俺も愈々これで數ふ可らざる會社員になり切つたかな。」

茅野はわざと、その妻子の前で嘆息して見せる事もあつたが、相手には一句通じなかつた。

兎に角、此の鬱陶しく曇つた大阪の、儲話の外には何も無い人間の中に、氣心を知りぬいてゐる三田を得た事は、彼にとつて、どれ程の喜びだつたかわからなかつた。

しかしその三田も、やつと二年ばかりゐたと思つたら、急に又東京の本店へ呼戻されて歸る事になつてしまつた。それは十月の初だつた。

「羨しいなあ、なんて云ても矢張り東京に限るね。」

「さうでもないさ。大阪も馴れて見ると捨てられないぜ。」

眞正直に怒りつぽいくせに、喜びと悲しみは顏に出さない三田は、別段東京へ歸る事も希望ではなかつたのだと云つたけれど、いくらかくしてもかくし切れない嬉しさが、確に見えると茅野は思つた。

「もう一寸は大阪へも來ないだらう。」

「いいえ、休暇さへあれば屹度來るよ。お正月に來ようかしら。」

三田は眞面目な顏をして云つた。

「ほんとに來るかい。」

「來るとも、御馳走さへしてくれれば。」

持前の冗談だかわからなない調子で答へた。その時一緒だつた田原も側から念を押した。

「屹度か。」

「くどいなあ。來るつたら來るよ。」

念を押される事の嫌な三田は、ぢれつたさうに舌うちした。

茅野は三田の言葉を信じて居た。來ると云つたら屹度來るのが彼の男だ。どんなに忙しくても、無理算段をしても來るに違ひ無いと思つてゐた。その後、手紙の端に、正月元日の朝梅田に着く時間までも書いて來た。十、十一、十二月と、三田が東京に行つてからの月日は、會社の方も忙しかつたが、茅野は只管正月の會見を樂みにしてゐた。三田が大阪にゐた二年の間にも、お互の我儘から、時には顏を赤くして我意を張合つた事もあつたが、東京に行かれてしまつた後は以前にも增した孤獨感が、彼の心をむしばみ始めた。それ程待つた三田だつたのに、折惡く母の病氣がよくないといふ報知を受けて、茅野は狼狽てて旅立たなければならなかつた。彼は朝早く、三田へ宛た電報を打ちに行つた。大丈夫間に合ふとは思つたが、念の爲め至急報にした。

「明日は病院に見舞に行つて、歸りには三田の新居を驚かしてやらう。」

茅野は夜行の汽車の中で、母の病氣を氣づかひながらも、友達に逢ふ樂しみを胸に描いた。

その朝、三田は旅鞄をぶらさげて家を出た。親の家を離れて、女中に家事を任せ切りにしてゐる呑氣な暮しを、彼は結句喜んでゐた。氣が向かないと口をきかない質なので、殆んど女中と物を言ふ事もなかつた。

「四五日旅行して來るよ。」

格子をあけて外に出る時始めて彼はさう云つた。

「御旅行はどちらでございます。」

女中は驚いて追かけて來た。

「何處に行くかわからない。兎に角四五日ゐないんだ。」

行く先なんか訊く必要はないと思ひながら、その儘歩き出した。

女中はぼかんとして、黒い外套を着た大きな主人の後姿を見送つた。

その日の午後、三田の家に電報が屆いた。女中は、如何していいかわからなかつたが、兎に角開いて見た。

ハハビヤウキクルナソツチデアフチノ

最初は何の事か皆目わからなかつたが、幾度も繰返して讀んで居るうちに、誰かのお母さんが病氣だから來るなといふ意味丈が受取れた。けれども、それが誰から來た電報か、何處から來たものかはわからなかつた。女中は、ふだんの通り三田が會社で仕事をしてゐるとは知らなかつた。鞄をさげて行つた姿が心配で堪らなかつた。もう汽車に乘つてしまつたに違い無いと思つた。いたづらに胸をわく〳〵させながら、電報を讀みかへすばかりだつた。

何も知らない三田は、その晩の夜行の汽車に乘つた。蒸されるやうな室内の暖氣に、食堂で飲んだウヰスキイの醉が出で、いい氣持で寢臺に橫になつた。年末の仕事の忙しさと、その忙しい間に、新年の雜誌に約束した原稿を仕上げた激しい努力の後の疲勞が、責任の無くなつた今になつて、一時に彼を襲つて來た。ごつとんごつとん、一定の間を置いて響く車輪の響さへ、心地よい韻律になつて、三田は枕に顏を埋めると眠の底に沈んでしまつた。

殆んど同じ時刻に大阪と東京を出た上りと下りの急行列車は、東海道の暗い鐵路を、次第々々に近づいて、眞夜中の二時頃、一際すさまじい音響を立てながら擦れちがつた。茅野も三田も、その物音も知らずに熟睡して居た。

翌朝、三田が目をさました時は、汽車は琵琶湖のふちを通つて居た。空も湖も眞靑に澄んで、晴れた日の日輪に、比良の嶺の雪は痛い程まばゆく輝いてゐた。

「食堂にお雜煮の用意が出來て居ります。」

小ざつぱりした白の詰襟を着た給仕が、叮嚀に腰を屈めて、乘客の一人々々に知らせて行つた。

「ア、今日は元日だつた。」

三田は、どんな事も忘れ切つてゐた程のんびりした休日の心持になつて居た。暖い室内の柔い椅子にかけて、硝子越に背中に當る日光を浴びて居ると、窓の外の冬田の景色さへ寒くは感じなかつた。彼は熟睡の後の、まだぼやけてゐる頭腦の中で、行く先の大阪を想ひ描いてゐた。

宿屋の二階にくすぶつて、貧しい生活をしてゐた二年間も、今になつて見ると懷しかつた。知人も少なく、氣に喰はない事だらけだつた大阪の土地にさへ、離れて縁遠くなつて見ると、淡いながらも執着があつた。冬は西風が吹いて寒く、夏は夕日がさし込んで暑い川つぷちの部屋が、まざまざと目に浮んで來た。潮が干ると、泥土の臭が鼻をついて來たが、上り下りの舟や筏も面白かつた。冬になると、海の方から鷗が群つて飛んで來た。お小遣のなくなり切つてしまつた日暮などは、椽側の欄干に凭れて、終日水の流を見て暮した。いつも天氣のいい日には、恰度自分の部屋の下の水面に、泥龜がぽつかりと浮んでゐた。

「あの龜の子はまだゐるかしら。」

それさへ馴染の一人だつたやうに想ひ出して笑ひ度くなつた。元氣のいいおかみさんの肥つた姿、げらげら笑つてばかりゐた女中達の眞赤な頰邊迄目に見えるやうだつた。

「突然自分が行つたら、さぞみんな驚くだらう。」

と思ふと三田の心は樂しかつた。

停車場には、茅野も田原も來てくれるに違ひない。十月の始に、大阪の停車場で別れる時にも、元日の朝の此の汽車で着くと云つたら、必ず出迎へると約束したのだつた。少し首をかしげてうつむき加減に歩いて來る茅野と肩で風を切つて大跨に歩いて來る田原の姿が明瞭に想像された。

汽車は着いた。三田は窓から首を出し度いのだつたが、それよりも、友達の方から探し出して貰ひ度かつたので、他

の客が吾勝に急いで降りた後から、鞄をぶらさげて歩廊に下りた。多勢の人をわけて近づいて來る友達の居る事を、彼はちつとも疑はなかつた。

それなのに、意外にも、茅野も田原もゐなかつた。いくら其處いらを見廻してもゐないのだ。あんまりあてにし過ぎて居た事の裏切られた不滿と、如何したのかわからない不安心に、三田は暫時呆然として佇んだ。

おもてに出て、又一しきり附近を見廻したが、友達の姿は遂に見えなかつた。重たい鞄をさげたまま、彼は兎に角歩き出した。

年始の廻禮に歩く人々の間を、誰の目にも旅人らしい三田は、土佐堀の宿屋をこころざした。重たい外套と、重たい鞄の堪へる體からは汗が出て來た。何時も何時も、その川つぷちを、會社へ通つた頃の事が思ひ出された。毎日同じ時間に、此の道筋で逢ふ娘があつて、その事を冗談に宿の女中に話したのが、宿屋中の評判になつた事もあつた。何處かに勤めてゐるらしい風だつたが、一寸珍しい程目鼻立の整つた娘で、歩きつきに著しい癖があつて、遠くからでもよくわかつた。

「三田さん、今日もお逢ひになりましたか。」

「どうしたんだか今日は逢へなかつた。病氣ぢやあないかと思つて心配してるんだ。」

「おやおや、そやつたら今晩は貴方御機嫌が惡うおまんな。」

女中達は、會社から歸つて來る三田をつかまへて、毎日々々あきもしずに、同じ事を繰返して冷かしたものだつた。あんまりしつつこく冷かされてゐるうちに、しまひには自分でも、その娘に逢はない日は、縁起が惡いやうな氣持さへして來るのだつた。

宿の格子を開けて玄關に立つたが、誰も出て來なかつた。そのくせ奥の方では多勢の笑聲が聞えた。

「今日は。」

二度三度、段々聲を張上げて呼んだら、やうやく廊下に足音が聞えた。
「まあま、貴方三田さんだつか。」
女中のおぬめはあきれた顔をして云つたが、
「おかみさん、三田さんだつせ。」
と奥に向つて叫んだ。續いて出て來たおかなも、
「ほんまに三田さんや。」
と黄色い聲をふりしぼつて、ばたばた式臺に下りると、三田の手から鞄を奪ひ取つた。
「貴方早うお上りやすな。」
女中達は外套の袖をとつて引上げた。その馴々しさが、お正月らしい心持を三田に抱かせた。
「僕はこんな部屋はいやだぜ。僕の部屋はあいてゐないのかい。」
此の家では一番立派な部屋に通されたが、その入口に立止つて注文を出した。
「矢張りお馴染のお部屋の方がよろしおまつか。」
二階の奥の川に臨んだ六疊に導かれた。二年間彼が居た間、春夏秋冬一日も變らずにかかつてゐた浪に日の出の掛物は、矢張りその儘かかつて居た。彼が古道具屋で買つて來たのを、引上の時紀念に殘した古机も其處にあつた。三田は椽側に出て、ゆるく流れて行く川水をなつかしく見下した。
「お目出度う。舊冬中は何かとお引立にあづかりまして難有うございます。今年も亦相變らず。」
肥つたおかみさんが來て改まつて述べたが、それが濟むと急に砕けて、
「私なあ、おぬめどんが、三田さんがお出でになつたといふても嘘やと思ふてましてん。三田さん、貴方何故葉書なとくれはれへんでしたの。」

「だつて面倒臭いんだもの。」
「ほうら三田さんの面倒臭ひが出ました、出ました。」
女中は、度外れな高調子ではやして笑つた。
御祝儀だといふので、お屠蘇を勸められ、上方風のお雜煮も喰べさせられた。正月の事で、客は一人も無く、親類の者や家中の者が寄集つて、双六をして居るのだと云ふのであつた。暫時無駄話をした後で、彼もその双六の仲間に誘はれたが、疲れてゐるといふのを口實に斷つた。
「それはさうと、茅野さんと田原さんが來る筈だから、そのつもりでゐてくれたまへ。」
「へえゝ、貴方さんの來やはつた事知つてはりまんのか。」
「知つてるとも。みんなと約束して來たんだからね。」
三田は女中を呼止めてさう云つた。自分が何の爲めに來たかを、一層明かにして置き度かつたのだ。
鞄の中から新年の雜誌を取出して讀んだが、ちつとも頭に入らなかつた。屹度停車場迄來てゐると思つた茅野も田原もゐなかつたのは、時間が早過ぎたからだ。元日の事だから、いくら呑氣な連中でも、少しはつきあひに廻る家もあるだらうと考へはしたが、しかし矢張り不平だつた。
三田は所在なさに、押入から丹前を出して、横になつた。雨漏のあとの壁の汚點も、天井の板の木目も、毎日それを見て暮した頃を想ひ出させた。ぼんやりと追想してゐると、いつかしら汽車の疲勞が出て來て、思はずしらず、うとうとして來るのであつた。裏の川を通る船の櫓の音が、枕の直ぐ下に微かに聞えた。
「三田さん。」
ふいと呼ばれて目をさますと、鼻のさきにおぬめが坐つて居た。
「貴方もうおひるだつせ。御飯はどないしませう。」

「もうおひるか。おひるはぬきだ。友達が來れば一緒に外へ出て喰べるし、來なければ晩迄寢て居やう。」
「貴方何しに大阪へ來やはりましてん。」
「寢に來たのさ。」
それつきり目をつぶつて、女中が手持不沙汰らしく、捨せりふを殘しながら、行つてしまつた足音を聞いた。
無理に目はつぶつたけれど、もう眠くはなかつた。これぢやあほんとに大阪迄寢に來たやうなものだと思ふと、馬鹿〳〵しく腹が立つた。茅野や田原は、一體如何したんだらうと、又しても友達の事が氣になつた。住吉の松林の中にある茅野の家も、芦屋の濱邊の田原の家も、あり〳〵と想像された。しかし彼はどつちにも、此方から行くのは殘念だと思つた。如何しても遙々來た自分は、先方に出迎へられる役でなければならない。此方は默つて懷手してゐれば、先方でいろ〳〵頭を捻つて、此の四五日を呑氣に暮らさせてくれなければいけない。彼は友達と日を暮らすさまざまの場面を空に描いたが、何時迄たつても空想は盡きないかはりに、空想では我慢が出來なくなつた。
三田は勢よく飛起きて、外套を着て階下に下りて行つた。
「お出かけだつか。」
女中が追かけて來て下駄を出してくれた。
「どちらへ。」
「どちらつてあてもないのさ。」
「お早うお歸り。」
といふ聲を後に聞き流して往來に出た。あてはないと口では云つたが、腹の中では、茅野か田原の家に行つて見ようと考へてゐた。ただ、その二人のどつちにしやうかといふ事が決まつてゐなかつた。何處かに氣難しいところがあつて時とすると、妙に冷たい感じのする茅野のところへ行くのは、此方が當然出迎へて貰ふ筈だつた丈、腹を見透されさう

でいやだつた。さりとて、何時も何時も、用事の手紙をやつても返事も寄越さず、此間も向ふから、工場の監督にいい人があつたら世話をしてくれと頼んで來たので、折角一人見付けて、履歴書迄添へて意向を聞いてやつたのに、それにはちつとも返事もしないやうな、氣まぐれの田原のところへ行くのは、馬鹿にされ切つてゐるやうでいやだつた。自分はその爲めに紹介しようとした人に對して、どの位氣まりの惡い思ひをしたかしれないのだ。三田は決し兼て、ぶらぶら歩いてゐるうちに、電車道に來てしまつた。全く反對の方向に住んで居る友達の、どつちを訪れやうか、彼は又其處に佇みながら迷つた。どつちでもいい、電車の早く來た方にしよう、咄嗟に彼はさう決めた。

北へ行く電車が先に來た。三田はそれに乘つて、田原の家に行く事にした。阪神線に乘つてからも、彼はまだ茅野の方にも心を引かれて居た。しかし、まあいいや、お天氣やの感情家の田原は、自分が行つてやつたら、茅野よりももつと喜ぶに違ひ無い。線の細い顏中を笑にして迎へるに違ひ無い。忽ち大きな聲で喋り出すに違ひ無い。自分に口を開かせない程、あれからそれと移つて行く話を、一人で引受けてしまふに違ひ無い。彼が經營してゐる工場の話――それを勞働問題に結び付けて、社會改革者を以て任じる彼は、自分の工場の新施設を誇るに違ひ無い。三田は暫時の間、すべてを忘れて、友達との歡會を心に描いた。

海邊は流石に風が强かつた。電車を下りて松原を拔けて行く間も、向ふから來る潮風は容赦なく砂を捲いて吹きつけた。後に聳える六甲山の上の方には、雪が眞白に光つてゐた。やがてその松原を通り越さうとするところに、田原の家はあるのだつた。三田は、一瞬間、門前で躊躇した。のめのめと自分の方からやつた來たのが、今更不甲斐なく思はれたのだ。國旗の出てゐる門を入つて格子を開けると、女の子が、むきかけの蜜柑を持つて馳出して來た。

「今日は。お父さんは。」

と云つたけれど、先方はもう見忘れてゐた。うさんくささうに、じろじろ此方の顏を見てゐる。

「彌生さんはもう私を忘れちやつたの。」

ときいても、矢張り默んまりで、鼻を垂した顏で見詰めてゐる。誰でも、俺の顏は怖いといふから、その子供も怖がつてゐるのだと考へて、三田は自分の怖ろしい顏を想像して赤くなつた。

「お父さんは？　お留守？」

少し氣まりが惡くなりながら、三田はもう一度繰返した。

「お留守。」

女の子は、につこりともしないで、口の中で答へた。

「お留守？――お母さんは？」

「ゐる。」

それつきりで、又此方の顏を上目で見ながら、蜜柑を一袋ちぎつて口に入れた。

チエッ無表情な子供だなと、少し癇癪を起しながら、三田は途方に暮れた。もう一度大きな聲で、御免なさいと怒鳴つて見やうかと思つたけれど、現に目の前に女の子が立つてゐるのに、大きな聲を張上るのも可笑しいと考へて止めた。彼は爲方が無いので、名刺を出して子供に渡した。

「これをね、お父さんが歸つて來たらあげて頂戴。」

女の子は默つて受取つて、矢張り三田の顏を見て居るのであつた。

三田は額に立皺を寄せながら田原の家を出た。こんな事なら茅野のところへ行けばよかつたと思つたが、それにしても、自分の來る事を知りながら、田原は何處に行つたのだらうと憤慨した。日が山の背にかくれ初めたので、潮風はあてつけがましく寒くなつた。彼は路傍の石つころを、力任せに蹴飛ばしながら歩いた。

大阪へ歸ると日は暮れた。寒さと空腹にへこたれて、三田は力無く宿に歸つた。

「何方らへ。」

「散步して來た。留守中に田原さん　茅野さんは來なかつたかしら。」
「どなたもお見えになりません。」
三田はおかみさんと、二言三言口をきいたばかりで、二階に上つてしまつた。

年始廻りを濟ました田原は、妻子の待つて居る顏を想像しながら歸つて來た。暮の忙しいさなかに、工場に起つた怠業も、時間の短縮と勞銀の引上で、無事に解決はしたものの、一時は隨分心配させられた。正月になつたらゆつくり寢轉んで、無責任に小說でも讀まうと、それを樂しみにしてゐたが、元日は矢張り廻禮に出なければならない身の上だつた、飲めない酒を强ひられ、窮屈に坐つて、きまり文句のお目出度うを繰返した今日の一日の馬鹿々々しさに疲れてしまつた。今晚は早寢だと思ふと、もう睡氣がさして來る程だつた。格子を開けて玄關の燈火の色を見ると、俄に彼は蘇生した氣がした。

「おかへり。」

妻は乳呑兒を抱いたままで出て來た。

「今日三田さんがゐらつしやつたんですよ。」
「エツ三田さんが。ほんとか。來たか。――待たせてあるのか。」

田原はせき込んで、家の內へ入る事さへ忘れてしまつた。

「それがねえ、私はちつともしらなかつたのですが、彌生が、お母さんこんなものつて、名刺を持つて來たんでしよ、見ると三田さんぢやありませんか。直におもてに出て見たのですけれど、もう見えませんでした――ねえ彌生さん、」

母親は背中につかまつてゐる女の子をかへりみて云つた。

「フウム、ほんとに來たのか。」

田原は嘆息するやうにつぶやきながら上にあがつた。

「けれどもお前も氣が利かないぢやないか。こんな子供を取次に出すなんて。女中達もゐなかつたのかい。」
「だつてほんの一寸の間なんですもの。三田さんだつて、子供に名刺を渡して行かなくたつていいぢやありませんか。何とかして私を呼んで下されぱいいんですよ。」
「其處が三田さ。」
「いくら變つてゐつたつて、遙々東京から來たんぢやありませんか。」
不平らしくつぶやくのを、田原は上の空で聞き流した。彼はほんとに三田が來たと聞いて耻入つた。三月前別れる時に、屹度正月は遊びに來ると云つては居たけれど、忙しい體で、それ程面白くもない筈の大阪迄、わざわざ來るとは信じられなかつた。平生から三田は、自分の事を疑深いといつて攻撃し、何時迄つきあつても友達を了解しないと云つて罵倒したが、ほんとに自分はその通りだ。彼の男が來ると云つたら、來るものと信じてゐればよかつたのだ。來ると云つたら意地にも來るやうな男には違ひ無いのだから。田原はぼんやりと考へ込んでしまつた。彼の男の事だから、折角此處迄やつて來ても、自分がゐなかつたので、さぞかしぷんぷん怒つてゐるだらう。今度顏を合せると、例の口調で、面と向つて憎まれ口をきくに違ひ無い。それに對して、自分は一言も返答が出來ないのだ。田原はすつかり悄氣てしまつた。しかも彼は、大阪の宿に一人つくねんとしてゐる三田を想ふと、直にも飛んで行つて逢ひたかつた。ふだんから書から書かうと思ひながら、性來の筆不精で、返事も出さないでゐた用件なども、一時に頭に浮んで來た。三田の一本調子に怒つてゐる顏付が、いつそ懷しいものに思はれた。
「貴方御飯になさりませんか。」
「ああ。」
妻に促されて始めて食臺に向つたが、不規則に飲み喰ひした元日の腹は空いてゐなかつた。

「何を考へてゐらつしやるの、三田さんの事？」

妻は目元に笑を含ませて訊いた。

「さうよ。屹度三田さんの事を考へてらつしやるのよ。貴方は隨分非道い事を云はれても、不思議に三田さんがお好きなんですね。」

「うゝむ、さうでもないさ。」

あいまいな返事をしたが、あまり適切な事をいふ妻の言葉が意地惡のやうに聞えた。

「いゝぢやありませんか、明日行つてあげれば。どうせあの方の事だから、今晩は何處かで飲んでるでしよ。」

「茅野が一緒かもしれないな。」

さう想ふと、田原は一しほ三田に逢ひ度かつた。

「あいつもなかなかいいとこがあるよ。」

直ぐにも家を出て、大阪迄行からかとさへ考へたが、それも妻の手前羞しかつた。言葉數の少ない女の子が、茶碗の中につつこんでは飯粒をかき込んで居る顏をあげて、時々父親の顏を見るむつつりしたその顏さへ、何となくひけ目を感じさせるやうであつた。

「あゝ疲れた疲れた。」

箸を置くと、田原はわざと欠伸をして、そのまま食臺の下に、頭を抱へて横になつた。

「貴方そんなところで風邪を引きますよ。」

妻にたしなめられたけれど、默つて目をつぶつて居た。

「爲様のない方。」

さう云ひながらも、妻は炬燵を持つて來て、柔かに蒲團をはけた。ほかほかとあつたまる火のぬくみに、三田の事を

おもふ氣力もなく、彼はほんとに寢てしまつた。

朝早く三田は目をさました。暫時の間、障子の外の硝子戸のがたがた鳴る風の氣配を聞いてゐたが、床の中に居るのもつまらなくなつて起きた。

「お早う。よう寢られましたか。」

隣室を掃除してゐた女中が聲をかけたが、三田は返事をするのも面倒臭かつた。顏を洗つて部屋へ戾ると、直にお勝が出て來た。

「昨夜はほんまに面白うおましたなあ。」

「僕はちつとも面白い事おまへんでしたぜ。いく度やつても負けるんだからね。」

正月の事で、客の無いのを幸に、宿の娘や女中達が、遊びに來てゐる親類の子供達と、双六や歌留多をする仲間に、彼もたうたう引込まれたのだ。晩酌に飮んだ少しの酒が空腹に廻つて、存外上機嫌で騷いだけれど、今朝になつて見ると馬鹿々々しかつた。

「今晩も亦やりまほか。」

「やりまほ。」

出たらめな返事をして、膳をさげて行く女中を見送つた。なあんだ、大阪くんだり迄、宿屋の女中のお相手に來たのかといふやうな不平が欠伸と一緒に出て來た。

昨日は如何したのかしらないが、今日は茅野も來るに違ひ無い。殊に田原は、あの名刺を見た筈だから、早くからやつて來るに違ひ無いと、彼は心待に待つて居た。

「三田さん、おひるはどないしましよ。」

女中がさう云つてききに來た頃は、三田は苛々して坐つてゐられない程だつた。
「入らない。」ぶつきら棒に答へて、速かに女中との交渉を斷たうとした。
「茅野さんも田原さへもお見へになりまへんな。」
相手は慰めるつもりで云つたのだけれど、三田には手痛く響く言葉だつた。
「え、今此方から出かけようと思つてゐたのさ。」
彼は額に立皺を寄せながら立上つて、壁にかかつてゐる外套をとつた。
「お出かけだつか。」
女中は狼狽しく擦りぬけて、あたふた階下に下りて行つた。玄關に出ると下駄が揃へてあつた。
「今晩は皆さんとつらつておいでやすな。又双六でまかして、お白粉を塗つてあげまつさ。」
をかしくも無い事を高聲で笑ふ女中に送られて、からつ風の吹く往來に出た。川の中にもさざ波の騷ぐ、心の落つかない日で、馬糞まじりの砂塵が、容赦も無く渦巻いて來た。わざわざ昨日は行つてやつたのだから、飛んで來るに違ひ無いと思つた田原が、午近く迄來ないのを憎めば憎む程、三田には茅野が戀しいものになつた。矢張り向ふから來べき筈だと思ふ不平はあつたけれど、それよりも友達の顏を見度いと思ふ方が强かつた。彼は躊躇しずに電車に乘つた。
住吉の松原には風が鳴つて、下駄に踏まれて崩れる砂は、さらさらと亂れて飛んだ。大阪に居た頃、うるさがられはしないかと思ふ程度々來た門を足早に通つた。
「御免下さい。」
「はい。」
襖のかげで妻君の聲がした。
「まあお珍しい、三田さんですか。」

奇麗な目をした茅野の妻は、その奇麗な目を見張つて驚いた。

「さあどうぞお上り下さい。」

勸められる儘に、何の疑もなく三田は上り込んだ。

「ヤア、三田さんだ、三田さんだ。」

腕白の男の子が、奥から馳出して來て、三田の胸に飛付いた。

「榮ちやん、三田さんが來たよ。」

母親と挨拶してゐる三田の背中に馬乘になつて、妹を呼んだ。直に臺所の方から、慈姑の取手のやうな頭を振り立てて、顏中おできだらけの女の子が出て來た。

「三田さん。」

その子も歡聲をあげながら抱きついて、三田の懷に顏を埋めた。

「茅野さんはお留守ですか。」

「オヤ、御存じありませんの。」

妻君の吃驚した樣子が、三田を一層驚かせた。

「電報は御覽になりませんでしたの。」

「電報つて？」

「實は東京の茅野の母が惡いといふしらせが參りましたので、大晦日の晩汽車で東京へ參りました。貴方とお約束があるからつて心配しまして、自分で電報をうちに參りましたのですが。」

意外だつたといふ風で、妻君は一部始終を話してきかせた。

「それでは電報は屆きませんでしたかしら。」

幾度眉を寄せて、氣の毒がられると、三田は愈々ゐだたまらなかつた。

「をかしなものですね、汽車は何處かで擦れ違つたのですから。もつとも私はぐうぐう寢てゐましたが。」

三田は冗談を云つて笑つたが。その笑は自分ながら、とつてつけたやうに聞えた。

「三田さん、遊ばうよう。」

「何して？」

「何かしてさ。」

子供は兩方から手を取つて迫つた。

「ね、遊ばない、三田さんたら。」

「遊ぶよ。だから何して遊ばうつていふんぢやないか。」

「ぢやあね、紙のお相撲しよう。」

男の子は馳出して行つて、小箱を抱へて來た。蓋をあけると、中から澤山の相撲取の繪をかいた切拔が出て來た。

「いいから、これが土俵だよ。さうしてねこいつとこいつと斯う取組ませるの。」

その相撲取を双方から寄かゝるやうに立てゝ子供は疊を拳固で叩き始めた。

「三田さんも叩くんだよ。」

「かうか。」

三田も云はれる儘に疊を叩いた。

「ほうら東が勝つた。大錦は強いよ。」

子供は夢中になつて、いくつもある相撲取を、順々に取組ませるのであつた。茅野がこしらへてやつたのだといふ相撲は、かなり丹念に出來て居た。一々化粧褌に名前が書いてあつて、横綱大關などは強くする爲めに、一倍大きくこし

らへてあつた。子供を喜ばせる爲めに、茅野が工夫したおもちやさへ、その時は馬鹿々々しさの限りに思はれた。いい年齡をして、こんなものをこしらへてゐるのかと、恰も友達は、毎日そんな下らない事にかかはつてゐるかのやうに受取れた。

女の子は人なつつこく、縋りついて離れなかつた。つぶつぶ一面に腫物の出來てゐる顏を擦りつけて來るのが氣持が惡かつた。こんなうるさい子供達と遊ぶ爲めに、遙々來た自分なのかと思ふと、又しても額の皺が深くなつた。

「三田さあん、もつとしようよう。今度は栃木山と鳳ぢやあないか。」

男の子は、何時迄たつてもあきずに、鼻を叩いた。

「又今度しやう。今日は御用があるからね。」

「御用なんて構ふもんか。」

「まあ、あんな事をいつて――けれどもまだよろしいぢやありませんか。」

妻君も子供と一緒に、お愛想に引とめたけれど、三田は到底もゐたたまれなかつた。

「實は田原さんと約束がありますので。」

彼は思ひついたままを口にして坐を立つた。

「どうもほんとに御氣の毒樣でございました。」

まだ同じ事を繰返してゐる妻君に別れて、三田は松原の道に出てほつとした。一分間も休ませずにひつついて來た子供のお相手を逃れた安心から、冷い風も氣持がよかつた。三田は又大阪へ戻る電車に乘つた。

恰度その時東京では、三田の新居を驚かすつもりの茅野が、母の入つてゐる病院の門を出たところだつた。元日の朝病院を見舞つたところ、豫期したよりも病人は元氣だつた。肝臟肥大症の手術の後、どうしたものか熱がとれなくて、殊に押つまつた暮には、その熱の出具合が面白くなかつた爲め、茅野を呼寄せる事にしたのだつたが、ひとつには久し

ぶりで、息子や孫達の顏が見度かつたのだ。

「オヤ、お前一人かえ。子供達もみんな一緒に來てくれるのかと思つたら。」

さぞかし苦しんでゐるだらうと思つた病人は、茅野の姿を見ると、枕から顏を上げて、存外元氣な聲で云つた。茅野は裏切られた心持がしたが、母の衰へを見なかつた嬉しさに涙ぐんだ。

「私はもつと惡いのかと思ひました。」

彼はその裏切られたと思ふ心持の方丈を、口に出して云つた。

「そりやあね、四五日前はほんとに惡かつたのですよ。ちつとも熱が下らなくて、お腹は痛むし、又手術のやり直しでもしなければならないのかと思つてねえ……」

母は一生懸命で、病氣の惡かつた事を說明して、呼寄せられて不服がましい息子を納得させやうと努めた。

茅野は病院でお雜煮を喰べた。人づきあひの廣い母を見舞がてらに御慶に來る人が澤山あつて、それが又久々で東京に出て來た茅野を珍しがつて、長々と喋つて行くのであつた。母にとつては、成人して口髯さへはやした末つ子が、遙々大阪から見舞に來てゐるといふ事が、何よりの自慢だつた。旅疲れで氣力のなくなつて居る茅野は、それからそれと盡きない話をしながら、母の枕元を離れる事が出來なかつた。その晩は兄の家に行つて泊るつもりだつたが、氣力がなくなつて、病院に泊つてしまつたのであつた。

幸ひ今日は、母も一層氣分がいいといふので愈々安心したが、矢張り相手が手放し度がらないままに愚圖々々して、晝の御飯も病院で喰べてしまつた。やうやく思ひ切つて、母には一寸出て來るといひ置いておもてに出たのだつた。途中で兄の家に寄つたが、廻禮に出かけて留守なので、暫時の間嫂と話をしてゐた。その間にも彼は三田の事を忘れなかつた。

「姉さんは三田君は知りませんかしら。あの小說を書く。あれが今度うちを持つたのですが、麻布の簞笥町つてのはど

の邊でせう。」

「三田さん？　名前は知つてゐますがね――私麻布つてとこは、ちつとも行つた事がないのですよ。」

「さうですか。しかし行つて見れば直きわかるでせう。」

それを切つかけにして茅野は兄の家を辭した。四辻で赤い旗と青い旗を振つて居る信號手に、電車の方向を教はつて、彼は麻布に出かけた。知らない土地が喚起す輕い不安の中には、友達はさぞかし自分を待つてゐるだらうと思ふ樂しさが強かつた。氣短な三田の事だから、昨日自分が訊ねるに違ひ無いと思ひ込んで、待倦したに違ひ無い。彼の男の事だから、顏を合せても、さも怒つてゐるやうな素振りを見せるかもしれない。しかしそれは彼の男の本心ではないのだ。自分にはよくわかつて居る。茅野はそんな事を考へながら一人で微笑した。

やうやく探し出した粗末な新建の二階家の前に立つて、茅野は又をかしくなつた。何時迄たつても書生時代の腕白の面影の殘つて居る三田が、いかに兩親の家の方が手狹になつたからと云つて、家を持つのは似合はなかつた。夙の昔に家を持ち、妻を持ち、子供を持つた茅野は、その時、いかにも兄らしい心持で友達の事を想像した。

三田正太郎と、番地も何も書いてない名刺を貼付けてあるのも三田らしかつた。

「御主人は御宅ですか。」

茅野は、わざと、御主人といふ、いかにも三田にからかつてやるやうな心持のする言葉を口にして笑ひ度くなつた。

「どなた樣でございますか、主人は旅行中でございますが。」

「旅行？　何處へ行きました。」

驚いて茅野は詰つた。

「それが何處ともおつしやいませんのですが、大晦日の日にお出かけで、四五日留守になるといふ事でございました。」

「四五日？。まさか大阪へ行つたんぢやありますまいね。」

云ひながら名刺を出した。

「私はかういふ者ですが、私の打つた電報は屆きませんでしたかしら。」

「電報は參りました。參りましたのは參りましたが、もうお出かけになりました後で、どちらにゐらつしやるのかわかりませんものですから……」

女中は奥へ馳込んで、皺くちやになつた電報を持つて來て見せた。妙にねばりつ氣のある言葉で、しかも細々と廻りくどく、自分の手落ではない事を說明した。

「そいつは弱つたなあ。」

茅野は全く途方に暮れてしまつた。大阪へ行つた三田も困つてゐるだらう、田原はゐてくれるに違ひ無いが、それにしても彼の癇癪持は、又ぷんぷん怒つて八當りをして居るに違ひ無い。彼は暫時の間、あだに心配するばかりで佇んで居た。

「如何も爲方が無い。お歸りになつたらよろしく。」

茅野は力の拔けた氣持で往來に出た。直ぐにも大阪へ引返し度い、引返さなくては氣が濟まないと思つた。日の暮の早い山の手の夕空を仰いで、その浮雲の向ふに、三田が所在なく佇んでゐるやうに想ひながら、日　下の町の、早くもきらめき初めた燈火の中へ足を向けた。

茅野の留守宅を訪れた三田が、大阪の町へ歸つて來たのは、恰もそのひともし頃であつた。昨日も今日も友達を訪問して、二度ともすかを喰つた自分は、のめのめ宿屋へ歸られないもののやうに考へられた。わざわざ東京から、人の留守宅をたづねに來た自分だと、往來の人迄も嘲笑してゐるやうな氣がした。エ、今晩は一人で飮んでやれと、何かしら強烈な刺戟が欲しくなつて、宿屋近くを通り越して、新地のお茶屋の門をくぐつた。

「誰かとおもふたら三田さんやおまへんか。」

大丸髷の仲居は、仰山に後へ身を反して、吃驚した表情を見せた。
「その三田さんさ。」
彼は答へながら、さつさと上つてしまつた。
「貴方何時おいでやしたの。」
「昨日來たには來たのだが、約束しといた友達が一人も居ないので、どうして暮さうかと迷つてゐたんだ。」
「そんなんやつたら私とこで引とりまつさ。」
仲居はわざとらしく笑つたが、急に改まつた顔をして、
「お目出度うございます。昨年中は毎度御贔負にあづかりまして……」
と馬鹿叮嚀に頭をさげて、年頭の辭を述べ出した。
酒が出て盃を手にしても、三田の心は浮かなかつた。顔馴染の無い藝者が並んで、自分達ばかり勝手なお喋りをしながら、つきだしの鯛煎餅やするめを、せつせと喰べてゐた。面白くも無い酒落を聞かされたり、自分なんかには到底もわからないお客の噂や、仲間うちの陰口などを聞いてゐるうちに、愈々深く相手の無い寂しさを感じて來た。
「貴方、どないしやはりましてん、どうない沈んでてだんな。」
藝者は不思議さうに覗き込んだ。
「つまらないんだよ。」
その時三田は、又しても友達の事を考へてゐた。茅野は東京に行つて、自分に逢へるつもりで居たのださうだから、行違ひになつたしつて、吃度がつかりしてゐるだらう。しかし田原は如何したんだらう、若しかすると留守中に、宿へ來たかも知れない——と思ふと、こんなところでつまらなく酒を飲んで居るのが、益々面白くなくなつて來た。眞直に宿へ歸ればよかつた、と彼は悔いた。

「おいおい、誰か僕の宿屋に電話をかけてくれないか。

彼はその番號を教へて、果して留守中に田原が來たかどうかを確めさせた。

「姐さん、行つて來まつさ。」

狐のお面のやうに眞白く光つた額の藝者がついでに空つぽのお銚子を持つて立上つた。

「あのなあ、その田原さんといふ方なあ、先刻にから貴方さんのおかへりを待つてゐやはりませんねと。」

「なに、田原が待つてゐるつて？」

思はずしらず勢よく立上つた。

「それぢやあ歸らう。」

「田原さんやつたら私かて逢はして欲いわ。」

「貴方歸らんとその方を呼んだらよろしうおまつしやろ。」

女達は口々に引とめた。

「さうか、それぢやあ直に來いつてさう云つてくれたまへ。」

三田は緊張した心持になつて、今にも元氣のいゝ友達の顏が、目の前に現はれるのを豫想しながら盃をふくんだ。

朝のうちに三田の宿へ行かなければならないと思ひながら、田原は工場の職工達が、かはるがはる酒を飲みに來る相手になつてゐた。何かしら目の前に新しい事が起れば、それを振切つては行かれない性質の彼は、ふだんから可愛がつて居る職工達を捨てて置いて、家を出る氣にはなれなかつた。やうやく午後になつて、客の絶えた時、狼狽てて家を飛出した。

「三田さんと御一緒だと、どうせ今晩は遲いのでせうね。」

玄關に見送る妻は一本釘をさした。

「なあにそんなに遲くはならないつもりだ。」
「駄目ですよ。貴方は直き醉つてしまふんですもの。」
あんまり本當の事を云はれたので、田原は返事が出來なくて、そのまま歩き出したのだつた。
三田は吃度、額に深い皺を刻んで、苦り切つてゐるに違ひ無い。いきなり顏を見ると、遠慮會釋もなく、やつつけやあがるんだらう。田原の目には、友達の顏が憎らしい程はつきり見えて來た。
大阪に着くと、自働車を雇つて、土佐堀の宿屋へ急がせた。
「三田さんゐますか。」
田原は、それが癖になつてゐる附元氣で、音高く格子を開けた。
「田原さん、お久しうおまんな。」
顏馴染の女中が出て來て、年賀の祝詞を述べさうなので、彼は愈々せき込んでたたみかけた。
「三田さんはゐないの。留守かね。」
「三田さんだつか。三田さんは貴方さんとこへ行かはつたのと違ひまつか。」
「僕のとこへ？」
度外れに大きな聲を出してききかへした。
「それでなければ茅野さんのお宅だつしやろ。」
「フウム。」
田原は首を傾けて考へた。
「兎に角僕は待つて見よう。」
「そんならお上りやす。」

女中は彼を三田の部屋へ案内した。

若しも自分のところへ行つたのなら、彼は直に引かへして來るに違ひ無い。萬一[illegible]野のところへ行つたにしても、彼は自分の來る事を豫想して歸つて來るだらう。うつかり後を追つて住吉迄行つて見たところで、かへつて行違ひになるかもしれないのだ。——しばらく待つのが得策だらうと考へた。机の上にある雜誌を讀みながら、田原は其處に待つてゐたのだ。

燈火がついて、椽先の空も暮れ、川の水も暗くなつたが、三田は歸つて來なかつた。幾度となく歸つてしまはふと思つたが、昨日自分をたづねてくれた三田に對して、今日は飽迄も待つて居るのが、自分の酬ゆべき友情だと考へた。遲くなつて歸つて來ても、此處に自分が居るのを見たら、彼は必ず感じるに違ひ無い。そんな事迄田原は考へてゐた。

「田原さん、貴方御退屈だづしやろ。」

女中は心配して、時々顏を出したけれど、彼は取合はないで雜誌を讀んでゐた。さうして三田からの電話の取つがれた時迄、辛棒強く動かないで、待つてゐたのだ。女中は大きな聲でよびかけながら、階下から馳上つて來た。

「さうか、それぢやあ直に行かう。百川だね。ようし、今晩は三田公を醉拂はして遊んでやるぞ。」

あんまり長い間つくねんとしてゐた自分の立場を見よくする爲めに、わざと景氣のいい事を云つて立上つた。

よそ目には元氣のいいくせに、その實非道く羞しがりの田原は、この年になる迄、一人ではお茶屋の門口を入れなかつた。お正月の事とて、門口に高張提灯を出し、定紋を染出した幔幕を張つたお茶屋の、軒並に並んでゐる新地に足を踏入れると、それが男だらうが女だらうが、ゆきあふ人の一人々々に、しげしげと顏を見られるやうな氣持がして、甚だ氣まりが惡かつた。

「御免。三田公ゐますか。」

氣まりの惡いのをまぎらす時、わざと突拍子も無い聲を出したり、心にもない惡ふざけをして、その場をごまかさう

とするのが彼の癖だつた。

「先刻にからお待兼だつせ。」

　こつちの高調子に應じた甲聲を出して、醉拂つた仲居が出て來た。

「田原さん、お久しう——あけましてお目出度う。」

「ヤア、お久しう。先づあけましてお目出度うございます。ええと、それからなんだつけな、舊冬中はいろいろだつたかしら。」

　その仲居の顏に見覺えもなかつたが、さも知つてるやうな顏をして、わざとらしく、をかしみたつぷりでやつたつもりだつた。

　二階の座敷では、三味線太鼓で、陽氣に騷いでゐて、舞妓の黄色い聲や、助平つたらしいお客の笑聲が聞えて來た。廊下で擦れ違ふ客も、藝者も、仲居も、どれもこれも醉拂つてゐて、その家中が酒にひたされて居るやうに思はれた。一杯も酒を飲まないうちから、田原は醉つてしまつた。

「どうぞこちらへ。」

　導かれるままに襖をあけて入ると、正面に床の間をしよつて、いやに悠然と坐つてゐる三田の苦い顏が見えた。奴さん、御婧嫉斜めだなと思ふと、田原には、眞當面に相手の顏を見る事が出來なくなつた。折角遙々自分に逢ひに來たのに、必ず來ると云つた言葉を本氣に受けないで、出迎へにも行かず、わざわざうち迄來てくれれば留守だつたし、重ねがさね氣の毒な事をしたのも、みんな自分の落度だと、彼の心はしきりに責めた。

「イヨウ皆さん、あけましてお目出度う。」

　彼はいきなり藝者達の方に向つて平身低頭した。さうして頭を持上ると、今度はてれかくしに、目の前の食卓の上に三つ四つ、女達の飲みかけて置いた盃のあるのを、順々に素早く干した。

「酌をしてくりやれ。」

誰が飲んだのか、コップに半分ばかり冷水の殘つてゐるのを盃泉の中にあけると、彼は見覺えのある藝者の前に手を差延して、太い聲を出した。

「河内屋ア。」

とその藝者は、酌をしながら云つたが、田原自身は左團次の聲色のつもりだつたのだ。

「オイオイ、此方には挨拶もしないのかい。」

壓服するやうな幅廣い聲で、澁い顔をしてゐた三田が云つた。田原の、とつてつけた振舞の一つ一つが、いかにもごまかしくさくて片腹痛かつた。なんといふ灰汁の拔けない人間だらう、柄にも無くはしやいでゐるのは、例のてれかくしなんだ。よせよせ、そんなてれかくしは通用しないぞと云つてやり度かつた。相手は自分に對してひけ目を感じてゐるのだと直感して、自の優勢を確め度かつた。

田原は、しまつた又やられたなと思ふと、その拍子に手にしたコップの酒を仰いで飲んだ。

「美事々々。」

手をうつて藝者ははやしたけれど、強烈な酒の臭ひに鼻をつかれて、田原は見苦しく咳入つた。

「プッ、よせばいいのに、飲めもしないくせに。」

三田は、友達のあくどいごまかしに、ぴりぴりして、あからさまにつぶやいた。

「默れ默れ、默りをらう。」

咳入ると同時に全身に醉が廻つて、ほんとの高調になつてしまつた。さうして、どうかして此の不手際をとりかへし、三田の癇癪を直してやらうと考へてゐた。それがかへつて、三田には苦々しい事だつた。

「馬鹿だねえ。此の男は羞しいものだから、てれかくしに騷いでゐるんだぜ。おきまりなんだ。」

「へえゝ、羞しい時に騷ぐのだつか。珍しいお人やなあ。」

　年增の藝者は口をとんがらかして調子を合せた。

「威張るない三田公。こいつはねえ、おつかない面をして、小言ばかり云つてやあがるが、實は俺に惚れてるんだ。だから遙々東京からやつて來やあがつた。」

　田原は、いふまいと思つて居たのだが、ついつい、友達が自分に逢ひに來てくれた事を感謝する心持を、それとなく示し度くなつて來た。

「嘘をつけ。こんな奴に惚れる奴があるもんか。」

　もう出たらめはよせといふやうに、三田は話を中斷した。

「なんでえ、なんでえ、畜生。」

　醉へば必ずいふ癖で、田原は駄々子らしく繰返した。

「なんでえ畜生、威張るない。」

「空威張はそつちの事ぢやあないか。」

「なんでえ、なんでえ。口惜しけりやあこれで飲んで見ろ。」

　自分ながら脈絡の無い事を云つてるなと思ひながらも、田原には別にいふ事がなくなつたので、空のコップを三田にさした。

「いやだよ、コップなんかで飲んだつてうまくないや。」

　三田は、先刻から飲んだ分量をおもひやつて斷つた。彼も充分醉つてゐた。

「ざまあみやがれ。弱卒め。」

　田原は圖に乘つて、そのコップに酒をつがせて、一息に飲んだが、今度も亦はげしくむせかへつた。

「コップ酒はかうして飲むんだ。」

彼は又しつつこく三田の鼻さきにつきつけた。少ししつこ過るかと思はないでもなかつたが。

「よし、そんな事はわけなしだ。」

三田はコップをグイと取ると、手酌でついで飲干した。

「こんなものさ。コップ酒はかうして飲むんだ。」

さう云つて田原にかへした。その飲振りのあざやかさに、田原は又してもやつつけられた氣持がして、如何にかして氣勢を回復したかつた。

「なんでえ、畜生——お酌だ、お酌だ。」

くすくす笑ひながら傍觀してゐた藝者達の方に、性懲もなく長い手を差延した。

「田原さん、貴方はもうやめにしときなはれ。」

「飲みつくらやつたらあかんわ、三田さんはタンクや——。」

女達はしきりにとめたが、止められれば止められる程、意地を張り度かつた。

「大丈夫だよ、なんでえ畜生。」

さういひながら、お銚子を持つてる藝者の手をつかんで引寄せた。

「あれえ。」

と口では云ひながら。藝者は馴れた手つきで酌をした。

「もうよせよ。馬鹿々々しい。」

三田は口では荒々しく云つたが、眉を寄せて心配した。自分のやうな大酒でなく、直に醉拂つてしまふ友達に、飲ませた後で心にかかつた。

「サ、そいつを此方に貸したまへ、僕が飲んでやらう。」

彼は手を延ばしてコップを奪ひ取らうとした。

「なんでえ畜生。」

田原はその手を振拂つたが、その勢にゆすぶれて、酒は波うつて胸に溢れた。

「あああ、こないにべべを濡らして。」

輕く舌うちしながら、年増の藝者は半巾を出して拭いてやらうとした。

「なんでえ、なんでえ。」

舌も廻らなくなつた口でつぶやきながら、田原はコップに口をつけて仰むいた。自分では、美事に飲んでやらうと思つたのだが、酒は大概膝の上にこぼれてしまつた。

「爲樣がないなア。」

相手が醉拂ひ切つてしまつたので、何時の間にか自分の方が、介抱人になつてしまつた迷惑を感じながら、三田は憐れむやうな心持でつぶやいた。

「なんでえ、なんでえ、畜生。」

ぶつぶつ一人で云つてゐた田原は、ぶらぶらと立上らうとしたが、足がもつれて倒れてしまつた。

「なんでえ。」

ままにならない體を、いつたんは起したが。

「ああもう目が見えない。」

と叫ぶと同時に、頭をかかへて横倒しに寢轉んでしまつた。直に鼾が聞えて來た。

「馬鹿な奴だなあ。」

とり殘された寂しさを感じながら、三田はまだ盃を放さなかつた。目の前に意氣地なく倒れてしまつた相手を見るとどうしても心からは憎めなかつた。自分などに比べて、邪氣の無い心持を持つてゐる友達が、寧ろ羨しかつた。

「ほんまに田原さんは面白いわ。」

と藝者達も、何時迄たつてもむつつりして、酒ばかり飲んでゐる三田よりは、はしやいで、騷いで、醉拂つて、寢てしまつた田原の方が、比べ物にならない程扱ひよかつたのだ。一人減り、二人減り、何時となくこつそりとぬけて行つて、藝者の數も少なくなつた。二階座敷の騷ぎも止んで、正月らしい早仕舞の町々の靜な氣分が、此の座敷にも忍び込んで來た。

「このまま寢かしとくと風邪を引くから、何かかけてやつてくれないか。」

三田は氣づかつてさし圖した。派手な友染の夜着を抱へて來て、仲居がそれを田原にかけた。

その夜着の重たさに氣がついたのか、田原はむくむく起上つて、兩手を擴げて欠伸をしたが、どう思つたのか、いきなり立上つた。

「三田公、俺は歸るぞ、失敬。」

といふかと思ふと、ふらふらと部屋の外に出て行つた、どすんどすん其處いらの襖にぶつかる音がしたが、荒い足音は玄關に消えてしまつた。

「それぢやあ僕も歸る。」

三田も狼狽てて立つた。

「まだ早うおまんが。」

お愛想に聲をかけた者もあつたけれど、別段強いて止めやうともしなかつた。

「オイ、歸るなら一緒に歸らう。」

もう下駄を履いて、歩き出した田原の後から聲をかけたが、相手には聞えなかつたと見えて、返事もしずに行つてしまつた。

それを追かけて三田も出た。後の方で仲居の聲が、何か云つたらしかつたが、それには頓着しなかつた。五六間先を操人形の足で歩いて行く友達に追ついて、その肩を叩いた。

「どうした。しつかりしないか。」

田原は一寸ふり向いて、とろんこの目を見張つて三田の顔を見たが、何も云はなかつた。

「苦しいのか。」

三田は心配して、柔かに訊ねたが、矢張り返事はなかつた。

二人はお互に、足下がきまらないので、寄つたり離れたりしながら四辻へ出た。田原は北へ、三田は南へ行くからだだつた。

「大丈夫かい、僕は此方だ。左様なら。」

三田はさういつて左へ曲つた。

「三田公。」

後から田原が呼んだ。

「明日又逢はう。」

「よし、宿に來てくれるか。」

「行く。朝早く行くぞ。それから京都に行かう。島原のおいらんを見せてやら。」

夜更の町に響き渡る高聲で、存外はつきり云つたが、そのままつんのめるやうに歩き出した。

「大丈夫か。」

三田は心配して呼びかけた。人通りの絕えた町筋を、奴凧のやうにふらついて行く友達の、丈高い後姿の見えなくなる迄立ちつくした。晴れて高い星空を吹いて、冷たい風が白く流れてゐた。

午近く迄三田は寢込んでしまつた。昨夜の酒が少しばかり頭に殘つてゐて、起上つた時は、一寸ふらついたが、晴れわたつた朝の空に、いつぱい漲つてゐる日光を見ると、忽ち氣分は清々した。

「昨晩はおたのしみ。」

とからかひながら、女中がお膳をつきつけた時は、流石に胸がむかむかしたが、無事にお茶漬を流し込んだ。

「今日は何處かへお出ましだつか。」

ときかれて、始めて彼は昨夜田原と京都行の約束をした事を思ひ出した。さうだ、もう直き田原が來るに違ひ無いと思つた。

「今日はね、田原さんと京都へ行くんだ。」

「へええ、よろしうおまつしやろな。」

女中に相槌をうたれると、友達と此の晴れた日に京都へ行くのが、一層樂しみになつて來た。硝子戸の外の青空を見ながら、今來るか今來るかと待つてゐた。

その日は東京の空も晴れてゐた。茅野は高臺の病院の一室で、母と話をしながら、窓から入つて來る日光に背中を溫めてゐた。まるで小春日のやうな日であつた。それからそれと聞きながら母の質問に答へながら、自分達の暮しむきの事、妻子の健康の事、子供達がいかに悧巧であるかといふ事を繰返してゐるのが、張合ひの無い事に感じられて來た。若し大阪にゐたら、今日あたりは三田を引張つて、溫泉場にでも行くか、それとも泊りがけで京都へでも行つたのになどと、とりとめもない考へにふけつてゐた。何時だつたか、三田が、一度は見度いと云つた島原の太夫の道中の事など

も、はからず彼の頭腦に浮んで來た。藝者を呼んでも藝者扱をするのが嫌ひな三田は、太夫に側に坐られたら如何するだらうと想像すると、武骨な格好をしてゐる友達の樣子が、ありあり浮んで來て、彼は思はず微笑した。

「ほんとに此の次には、みんな連れて來ておくれ。賢ちやんも葉ちやんも見違へるやうになつてるでせうからねえ。」

母は又しても孫達の事をいひ出した。

「ええ、いたづらになりましたよ。」

外の事を考へてゐた茅野は、狼狽して返事をしたが、又かと思ふと、思はずも欠伸が出た。

それにも、かかはらず、彼も亦自分の家に遊び狂つてゐる子供の姿を想ひ起させられた。おもてに出てゐて、うちに歸ると、兩方から抱きついて來る二人の樣子を想像すると、今でも首筋に絡みつく柔かい手を感じるやうだつた。今日も終日母の枕元で、ろくに身動きもしないで坐つて居るのかと思ふと、彼は俄に大阪へ歸り度くなつた。母の容體が意外によかつた事も、わざわざ來たのを馬鹿らしく思はせた程だつた。

「お母さん、私は今晩歸らうかと思つてるんです。」

幾度も躊躇した後で、彼はたうたう切出した。

「え、今晩？　私はもつとゆつくりしてゐてくれるのかと思つてゐたら……」

母の言葉は怨言めいてゐた。

「實は少しひつかかつてる用事もありましてね――いづれ近いうちに、今度はうち中揃つて來ますよ。」

「ほんとにみんなで來てくれるの。」

「ええ、その頃はお母さんもすつかりよくなつてゐるでせうから。」

茅野は子供をすかすやうに、暖くなつたら、必ず妻子をつれて上京すると、繰返し繰返し約束した。やうやく母を納得させると、安心して一息したが、既に彼の目の前には、明日の朝大阪の宿で、三田の寢込みを驚かす計畫が躍つてゐた。

午後になつても、三田は只管友達の來るのを待ちながら、苛々して、宿の二階に坐つてゐた。あれ程固く約束して置きながら、一體田原は如何したのだ、又出たらめを云つたのかしらと考へると、昨夜の田原の振舞が、一々癇癪の種だつた。なんだあの態は、座敷に入つて來ても、自分を出迎へもしなかつた氣まりの惡さから、とつてつけたをかしみでお座を持たうとしてゐるのが見え透いてゐた。かんじんの此方には、遂々一言も眞面目な口はきかないで、自分の工場の監督を採用する用件なんかも、當然返事をしなければ、ならないのに、これつぱかしの挨拶もなく、飲めもしない酒を飲んで、急ち醉拂つてぶつ倒れたのだ。もうあんな奴とはつきあつてやらないと、三田は大きな聲で歌でもうたはなければ、此のむしやくしやのやり場がないと思つた。そのくせ矢張り、今來るか今來るかと待つてゐた。

部屋の中には、もう西日がさして來た。幾度となく出して見る時計の針先が、人を馬鹿にしてゐるやうで小憎らしかつた。火の氣のなくなつた火鉢に噛りついて、彼は體のやり場に困つてゐた。

「三田さん、三田さあん、お電話だつせ。」

梯子段の下から大きな聲で呼ばれて、彼は廊下に出た。

「田原さんからお電話だつせ。」

「よし來た。」

ばたばた馳出して電話室の方へ下りて行つた。

「どうしたんだ。今朝早くから待つてるんだぜ。」

受話器をとると直に奴鳴つた。

「もしもし、三田さんでゐらつしやいますか。」

細い金屬性の聲が三田を恐縮させた。しまつた、田原の女房だと思ふと、おもはずしらず汗が出て來た。

「宅に電話がごさいませんので、遲くなつて濟みませんが、昨晩歸つて參りましてから、少々發熱致しまして、折角で

ございますが、今日はお伴出來ませんので、どうぞ不惡……。」
「御病氣ですつて？。餘程熱でも高いのですか。」
「ええたいした事もございませんが、九度少し越しまして、それが下りませんのです。それだもんですから、折角お誘ひ下さつたのですが、お伴出來兼ますので……。」
「いえ、どう致しまして。毎度醉拂はせて濟みません。どうぞお大事に。」
一刻も早く切つてしまひたかつた。
「もしもし、それから病人が心配して居りますのは、貴方樣は今日はお一人で京都へお出かけで御座いませうか。」
「さあ、どうするかわかりません。」
「まだ四五日はこちらの方にお出ででございませうか。」
「それもわかりません。」
「まことに勝手な事を申して、をかしいのでございますが、若し今回はこれぎりお目にかかれないかもしれませんが、東京へお歸りになりましたら、澤奄のあさづけを送つて頂き度いと申して居ります……。」
「あさ漬ですか。承知しました。」
三田は荒々しく答へて電話を切つた。
馬鹿にしてゐやあがると思ふと、一時に血が頭に上つて來た。だからコップ酒なんか飮むなと云つたんだ。それなのに、あんなにぐでぐでに醉拂々あがつて——彼は又しても昨夜の田原の醉體を忌々しく思ひ出した。おまけに京都へ行かうと云ひ出したのは田原自身なのに、今の妻君の言葉では、いかにも此方から誘つたやうな事になつてゐる。彼の男は女房の手前、そんな風に話をしたんだな、と考へると、今の電話で、誘つたのは貴方の御亭主ですよと、云つてやらなかつたのが殘念で堪らなかつた。なんのこつた、あさ漬を送れとは、三十九度の熱に惱んでゐるといふ病人のそれが

せりふか。餘りの事に、三田は額の皺を深くして苦笑した。

「馬鹿々々しい、東京へ歸つちまはふ。」

　彼は口に出してつぶやいて、手を叩いて女中を呼んだ。

　田原は惡感に震へながら、吐いて吐いて吐きつくした後の、疲れた體を床の中に埋めて、電話をかけに行つた妻の歸つて來るのを待ちながら、つくづく自分の意志の弱いのがいやになつた。三田に逢つたら、眞面目に話し度い事が澤山あつたのだが、つまらないその場限りのてれかくしから、しまひには調子に乘り過ぎて、飮めもしない酒に前後もわからなくなつてしまつた。四辻の角で別れる時、京都へゆく約束をしたの丈は、妙にはつきり覺えてゐるが、外の事は何もわからない。電車に乘ると直に、密閉した車內の空氣に胸を壓されて、急ち吐氣を催した。我慢しようと思ふ腹の底から、二度三度口元迄逆行して來たのを堪へたが、遂に窓をあけて吐いた。車掌が來て、何かぶつぶつ云ひながら、首を引込めさせたが、又暫時すると吐き度くなつた。しまひには到底も我慢が出來なくなつて、何處だかわからないが、途中の驛で降りて、停留場のかげの畑で吐いた。冷たい夜の風が吹いて通る度に、少しづつ正氣に返る氣持だつたが、もう大丈夫だと思つて電車に乘ると、又しても酸つぱい液が鼻をついて來た。何處かの松林の中で、松の木の幹に體を支へながら吐いてゐた自分の姿がおもひ出される。暗い梢を透いて、星がきらきら光つてゐたつけ、それから後は、どうなつたのか考へ出せない。又更に電車に乘つたのか、その儘遠い夜道を歩いたのか、どつちだかわからない、氣の付いた時は、自分の家で惡感に震へながら寢てゐたのだ、妻が枕元に坐つてゐて、朝の光が障子にさしてゐた。子供が出たらめに彈くオルガンに合せてうたふ歌の聲が、隣の室で聞えた。

「只今。」

　さういつて妻が戾つて來た。

「どうしたい、三田公は怒つてゐやあしなかつたか。」

「どうなんでせう、私にはあの方は、年中怒つてるやうに思はれるんですもの。」

妻は別段三田の事なんか氣にもしないで云つたが、田原には氣がかりな事だつた。

「あさ濱の事もさう云つたのかい。」

「ええ、承知しましたつて。」

よせばよかつた、そんな事迄はせなくてもよかつたと『田原は悔ゐた。吃度三田は怒つてゐるに違ひ無く、その怒つてゐる三田に、思ひもかけない事を云つて、吹出させてやらう、と彼は考へて、先刻は、あさ濱の事を妻に云はせたのだつた。そんな冗談で、少しでも三田に對して濟まないと思ふ心持を、樂にしようと思つたのだ。けれども、今になつて考へて見ると、そんな事を云つた爲めに、一層三田の氣持を惡くしやあしなかつたかしら。彼は頭から夜着をかぶつて、すつぽかされて宿の二階に、癇癪筋を立てながら、立つたり坐つたりしてゐる三田の姿を想像した。どうしたものか、その三田の姿さへ心寂しくおもはれた。

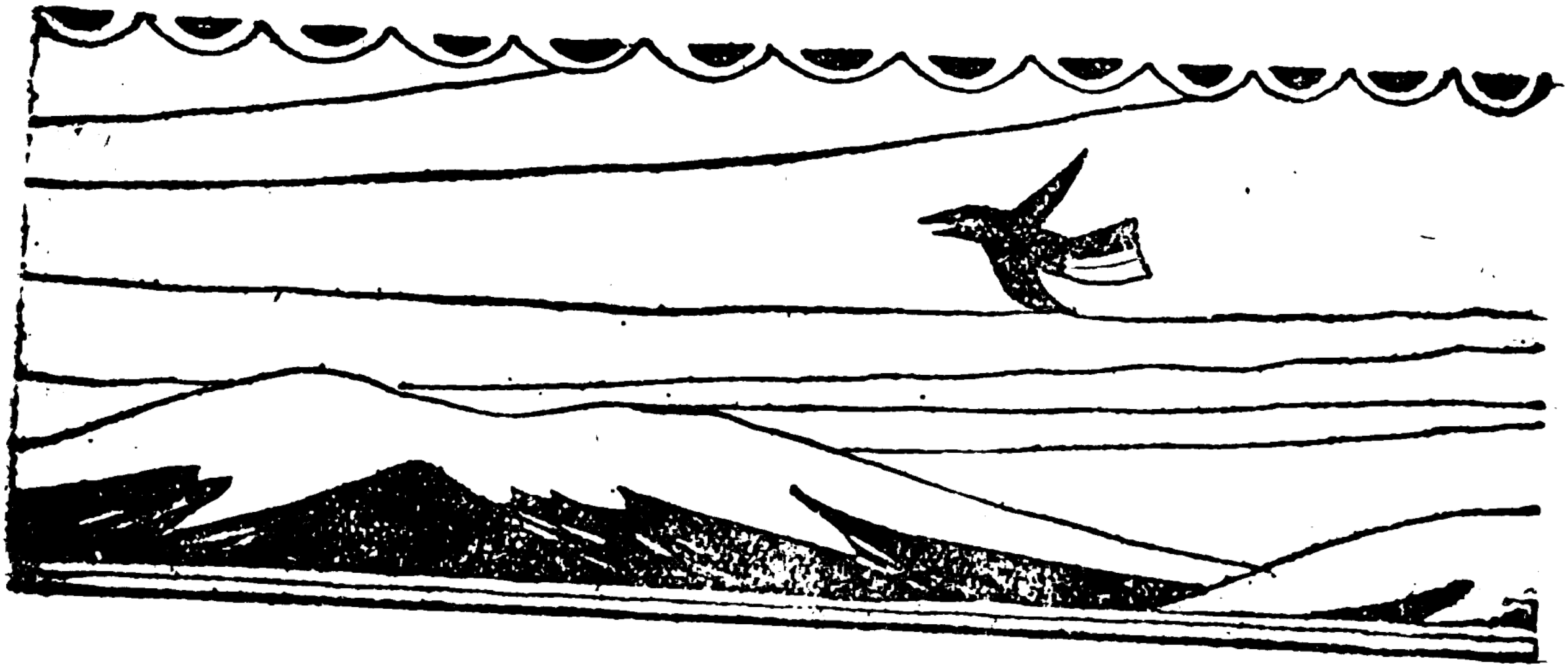
その日も遂々暮れてしまつた。枯柳の枝にかすかに鳴る程の風の出た銀座の町を、茅野は子供のお土産を買ひ集めながら歩いてゐた。黄昏の微光の間の極く短い冬の日は、見る間に暗い夜になつて、はなやかな灯の町は、水底のやうな氣持がした。詩人らしい感傷的な氣持を失はない茅野は、何となく涙ぐましく、兩手に餘るおもちやを抱へ、家に待つ妻や子や、今頃は何處で何をしてゐるかわからない大阪の三田の事を考へながら、東京驛へ急いだ。

恰度その頃川田も宿屋を出た。女房も女中達も、突然歸るといひ出した後の言葉に驚いて引留めたが、どうしても歸ると云つてきかなかつた。乘物の嫌ひな彼は、例の通り旅鞄をぶらさげて歩いた。昨日にもまして冴えかへつた冬空に一つ一つの數を增して輝き始めた星の方に、何かしら心を引かれてゆく氣持で、彼は一人を寂しく感じた。

「いつたい自分は何をしに大阪に來たんだ。」

と思ひかへして苦笑したが、愈々東京へ歸るとなると、それ程腹も立たなかつた。それよりも東京に行つたら茅野に

途はふと考へると、樂しみだつた。病氣の母を看護してゐる友達の姿が懷しく想像された。同時に又、妻に看護されて寢てゐる田原の事も、まざまざと想ひ浮べる事が出來た。あの弱い男に酒を飮ませたのは、自分の所業だつたとしか考へられなくなつて來た。無理にもコップ酒なんかやめさせるのが、自分の役目だと思ふと、友達に對しても、その友達の妻に對しても、申譯の無い心持に責められた。さうだ、東京に歸つたら、直ぐにあさ漬を送つてやらうと思ふと、そんな些細な事でも、友達を慰める事が出來るやうに思はれて微笑まれた。彼は珍しく靜かな心持になつて、夜行の汽車に乘つた。（大正九年三月十四日）



山の生活にて

志賀直哉

其日は朝から雨だつた。午からずつと二階の自分の部屋で妻も一緒に、畫家のSさん、宿の主のKさん等とトランプをして遊んでゐた。部屋の中には烟草の烟が籠つて、皆も少し疲れて來た。トランプにも厭きたし、菓子も食過ぎた。それは三時頃だ。

一人が起つて窓の障子を開けると、雨は何時かあがつて、新緑の香を含んだ氣持のいゝ山の冷々した空氣が流れ込んで來た。煙草の烟が立迷つてゐる。皆は生返つたやうに互に顔を見交はした。

浮腰で、づぼんのポケットに深く兩手を差し込んでモジ〳〵して居た主のKさんが、

「私、一寸小屋の方をやつて來ます」と云つた。

「僕も描きに行かうかな」と畫家のSさんも云つて、二人で出て行つた。

出窓に腰かけて、段々白い雲の薄すれて行く、そして青磁色の空の廣ろがるのを眺めて居ると、繪具函を肩にかけたSさんと、腰位までの外套を只羽織つたKさんとが何か話しながら小屋の方へ登つて行つた。二人は小屋の前で少時立話しをし

て、そしてSさんだけ森の中へ入つて行つた。
それから自分は横になつて本を讀んだ。そして本にも厭きた頃、側で針仕事をしてゐた妻が、
「小屋にいらつしやらない？」と云つた。
小屋と云ふのは近々に自分達が移り住む爲めに、若い主のKさんと年を取つた炭燒きの春さんとで作つて呉れる小さい堀立小屋の事である。
Kさんと春さんとは便所を作つて居た。
「割りに氣持のいゝ物になりました」とKさんが云つた。自分も手傳つた。妻も時々手を出した。
半時間程すると、Sさんが前の年の濕つた落葉を踏んで森の中から出て來た。
「これはよくなつた。これだけ出つ張りが附くと家の形がついた」と便所の出來榮を讃めた。Kさんは
「厄介物にされた便所が大變いゝ物になりましたよ」と嬉しさうな顔をして云つた。小屋の事は一切Kさんに任かせてある。Kさんは作る事に興味を持つて、實用の方面ばかりでなく、家全體の形とか、材料の使ひ方にも色々苦心して、出來るだけ居心地のいゝ家にしようとしてゐた。
夜鷹が堅い木を打ち合はすやうな烈しい響きをたてゝ鳴き始めた。暗くなつたので仕事を切上げた。春さんは手のひらで雁首の煙草をつめ更えながら、
「牛や馬が登つて來たから、早く柵を拵へないといけないね」と云つた。
「左うですね。作りかけを食べられちやあ、氣が利きませんからね」とKさんが答へた。家を食はれると云ふので笑つた。此山には壁土になる泥がないので、宿屋でも壁の所は總て板張りにしてある。此小屋では其所を炭俵と同じ質の大きいものを作らせて、それを二タ重にして其間に蓆を入れた。
「牛や馬には此家は御馳走だからね」と春さんは笑ひもせずに云つた。皆は笑つた。

山の上の夕暮れは何時も氣持がよかつた。殊に雨あがりの夕暮れは格別だつた。其上、働いて其日の仕事を斷めながら一服やつて居る時には誰の胸にも淡く喜びが通ひ合つて、皆快活な氣分になつた。

前の日も午后から晴れて、美しい夕暮れになつた。昨日は鳥居峠から黒檜山の方へ大きな虹が出て尚美しかつた。皆は永い事、此所で遊んだ。小屋は檜の林の中にあつたから、皆で其高い檜に木登りをして遊んだ。虹がよく見えると云ふと妻まで登りたがるので、Kさんと二人で三間程の所まで引張りあげた。

自分と妻とKさんとは一つ木に登つた。Sさんは其隣りの木に登つて、SさんとKさんとは互に自身の方が高くならうとして五六間の高さまで張り合つて登つて行つた。

「まるで安樂椅子ですよ」Kさんは高い所の具合よく分かれた枝の股に仰向けに寢て、卷煙草をふかしながら大波のやうに其枝を搖すぶつて見せたりした。

Kさんの二番目の兒をおぶつた「市や」と云ふ年の割りに顔の大きい低能な男の兒が夜食の知らせに來て、漸く皆が木を降りた時には妻が木の上から落とした櫛が灯りなしでは探せない程、地面の上は暗くなつて居た。

自分は前日の此樂みを想ひながら、

「晩、舟に乘りませんか」と云つた。皆贊成だつた。

食事だけ別れ〱にして、四人は又下の大きい圍爐裡に集まつた。Kさんは爐の大きい茶釜の湯で赤坊に飲ますコンデンスミルクをといて居た。

Kさんは氷藏から檜の厚い板を抱えて來た。四人は大きい樅の木に被はれた神社の暗い境内を拔けて行く。神樂堂の前を通る時、Kさんはお札を賣る人に「お湯にお入りなさい」と聲をかけた。樅の太い幹と幹の間に湖水の面が銀色に光つて見えた。

小舟は岸の砂地へ半分曳き上げてあつた。晝の雨で溜まつた水をKさんがかひ出す間、三人は黒く濡れた砂の上に立

つて居た。

Kさんは抱えて來た厚い板を舟べりのいゝ位置に渡して「お乘り下さい」と云つた。妻から先へ乘せた。小舟は押し出された。

靜かな晩だ。西の空には夕映えの名殘りが未だ殘つて居た。然し四方の山々は蠑螈の脊のやうに黑かつた。

「Kさん、黑檜が大變低く見えるね」とSさんが舳から云つた。

「夜は山は低く見えますよ」Kさんは艫に腰かけて短かい櫂を靜かに動かしながら答へた。

「焚火をしてますわ」と妻がいつた。小鳥嶋の裏へ入らうとする向ふ岸にそれが見える。靜かな水に映つて二つに見えて居た。

「今頃變ですね」とKさんが云つた。「蕨取りが野宿をして居るのかも知れませんよ。あすこに古い炭燒の竈がありますから、其中に寢てゐるのかも知れませんよ。行つて見ませうか」

Kさんは櫂に力を入れて舳の方向を變えた。舟は靜かに水の上を滑つた。Kさんは小鳥嶋から神社の方へ一人で泳いで來る時ハ湖水を渡つてゐた蛇と出會つて驚いた話などをした。

焚火はKさんのいふやうに竈の焚口で燃えて居た。

「本統にあの中に人が居るのかね、Kさん」

「乾度居ますよ。若し居なければ消して置かないと惡いから、上りませうか」

「一寸上がつて見たいわ」と妻が云つた。

岸へ來た。Sさんが繩を持つて先へ飛び降りて、舟の舳を石と石との間へ曳き上げた。

Kさんは竈の前にしやがんで切りに中を覗いて居た。

「寢て居ますよ」

冷々としてゐるので皆にも焚火はよかつた。Sさんは落ちてゐる小枝の先でおき火をかき出して煙草をつけた。

窟の中でゴソ〱音がして、人の呻吟る聲がした。

「然し、かうして寢てゐたら溫かいだらうね」とSさんがいつた。

Kさんは其邊に落ち散つてゐる枝を火に積上げながら、

「仕舞ひに消えますからね。寢込んで了うと、明方は隨分寒いでせうよ」といつた。

「こんな側で焚いても窒息しませんの？」

「中で焚かなければ大丈夫です。それより窟が余り古くなるとひとりでに崩れる事があるんですよ」

「可恐いわ。Kさん敎えてやるといゝわ」

「本統に敎えてやる方がいゝね」とSさんも云つた。

「わざ〱敎えなくても」とKさんは笑ひ出した。「これだけ大きな聲で話して居ればみんな聽こへてゐますよ」

窟の中で又ゴソ〱と枯葉の音を立てた。皆は一緒に笑ひ出した。

「往きませうか」と妻は不安さうに云ひ出した。

舟へ來ると、Sさんは先へ乘込んで「今度は僕が漕がう」と云つた。

小鳥嶋と岸の間は殊に靜かだつた。星の多い晴れた空を舟べりから其儘下に見る事が出來た。

「こつちでも焚火をしませうかね」とKさんが云つた。

Sさんは癖になつて居るドナウ、ウエレンの口笛を吹きながら漕いで居た。

「オイKさん。どの邊へ着けるんだい？」

「丁度此見當でようムんすよ」

それから、何んといふ事なし皆は暫く默つて了つた。舟は靜かに進んで行つた。

「岸位までなら泳げるか？」と自分は妻に訊いて見た。
「どうですか。泳げるかも知れないわ」
「奥さん、泳げになるんですか？」Kさんは驚いたやうに云つた。
「何時頃から泳げるの？」と自分はKさんに訊いた。
「少し温かい日なら今でも泳げますよ。去年今頃泳ぎましたよ」
「少し寒むさうだ」自分は水へ手を浸して見て云つた。「然し先に紅葉見に行つて、朝早く芦の湖で泳いだ事があるけれど思つた程ではなかつた。それよりも、四月初めに芦の湖で泳いだ事がある」
「昔はお偉らかつたのね」と妻は此頃は一番寒がりの自分を冷やかした。
「此邊でいゝかい？」
「えゝ。どうぞ」
Sさんは三櫂四櫂力を入れて漕いだ。舟の舳はザリ／＼と音をさせて砂地へ着いた。
皆は砂へ降り立つた。
「こんなに濡れて居ても焚火が出來ますの？」
「白樺の皮を燃しつけるんです。油があるので濡れて居てもよく燃えるんですよ。私、焚木を集めますから、白樺の皮を澤山お集め下さい。」
一面に羊歯や山葡萄や八ツ手の葉のやうな草の生ひ繁つた暗い森の中に入つて焚火の材料を集めた。
皆は別れ／＼になつたが、KさんやSさんの巻煙草の先が吸ふ度に赤く見えるので其居る所が知れた。
白樺の古い皮が切れて、その端を外側に反らしてゐる、それを手頼に剝くのだ。時々Kさんの枯枝を折る音がポキン／＼と靜かな森の中で響いた。

持てないだけになると、岸の砂地へ運んだ。もう大分溜まつた。

何かに驚いて、Kさんがいきなり森から飛出して來た。

「どうしたんだ」

「居ましたよ。蟲ですよ。あの頭の光つてゐる奴が、かうやつて頭を振つてゐたんですよ。堪つたもんぢやあない」Kさんは尺取り蟲の類を非常に可恐がつた。息をはづませて居る。

それを見に入つた。先に立つたSさんが、

「此邊かい?」と後ろの方に居るKさんを顧みた。

「其處に光つてるぢや、ありませんか」

「成程、これだね」Sさんはマッチを擦つて見た。一寸程の裸蟲が其割りに大きい頭をもたげてゆる〳〵振つて居た。其口の邊が青くぼんやり光つて見える。

「これが、そんなに可恐いかね」とSさんが云つた。

「これからは其奴が居るんで、うつかり歩けませんよ」とKさんは云ふ。そして「もう大概ようムんすから、焚きませうか」と云つた。

皆は又砂地へ出た。

白樺の皮へ火をつけると濡れた儘、カンテラの油煙のやうな眞黑な煙りを立てゝ、ボウ〳〵燃えた。Kさんは小枝から段々大きい枝をくべて忽ち燃しつけて了つた。其邊が急に明るくなつた。それが前の小鳥島の森にまで映つた。

Kさんは舟から楢の厚板を持つて來て、自分達の腰を下ろす所を作つて呉れた。

「蟲だけは山に育つた人のやうぢやあ、ないね」とSさんが云つた。

「本統ですよ」とKさんも云つた。「初めから知つて居ると、それ程でもないんですが、不意だと隨分魂消ますよ」

「山には別に可恐いものつて、居ませんの？」
「何んにも居ませんよ」
「大蛇なんて居ないの？」
「居ませんよ」
「蝮は？」と自分が訊いた。
「箕の輪邊まで下りると時々見かけますが、上では蝮は一度も見た事はありませんよ」
「昔は山犬が居たんだらう？」とSさんが云つた。
「子供の頃よく聲だけ聽きました。夜中に遠吠えを聽くと、淋しい、いやな氣持がしたのを覺えてゐますよ」
Kさんは Kさんの亡くなつたお父さんが夜釣りが好きで、或る時山犬に囲まれて、岸傳ひに水の中を歸つて來た話とか、此山が牧場になつた年、馬が食はれて半分位になつて居るのを見た話などをした。
「其年、肉にダイナマイトを入れて、殺したら、一週間で絶えて了ひました」
自分は四五日前、地獄谷の方で小さい野獸の髑髏を見た話をすると、Kさんは、
「乾度笹熊でせう。貂かなんかに食はれたのかも知れませんよ。笹熊は弱い獸ですからね」と云つた。
「ぢやあ、此山には何んにも可恐いものは居ないのね」と臆病な妻はKさんに念を押した。すると、Kさんは、
「奥さん。私大入道を見た事がありますよ」と云つて笑ひ出した。
「知つてますよ」と妻は得意さうに云つた。「霧に自分の影が映るんでせう？」妻はそれを朝早く、鳥居峠に雲海を見に行つた時に經驗した。
「いゝえ、あれぢやあ、ないんです」
子供の頃、前橋へ行つた夜の歸り、小暮から二里程來た大きい松林の中でたう云ふものを見た、と云ふ話だ。一町位先

でぼんやり其邊が明かるくなると、その中に一丈以上の大きな黒いものが起つたと云ふ。然し、暫くして大きな荷を背負つた人が路傍に休んで居たので、其人が歩きながら煙草をのむ爲めに荷の向ふで時々マッチを擦つたのだと云ふ事が知れたと云ふ話である。

「不思議なんて、大概そんなものだね」とSさんが云つた。

「でも不思議は矢張りあるやうに思ひますわ」と妻は云つた。「左う云ふ不思議はどうか知らないけど、夢のお告げとか左う云ふ事はあるやうに思ひますわ」

「それは又別ですね」とSさんも云つた。そして急に憶ひ出したやうに、「そら、Kさん、去年君が雪で困つた時の話なんか、左う云ふ不思議だね。未だ聽きませんか？」と自分の方を顧みた。

「いゝえ」

「あれは本統に變でしたね」とKさんも云つた。

かう云ふ話だ。

去年山にはもう雪が二三尺も積もつた頃、東京に居る姉さんの病氣が惡いと云ふ知らせを受けて、Kさんは急に東京へ出た。

然し姉さんの病氣は思つた程ではなかつた。三晩泊つて歸つて來たが、水沼に着いたのが三時頃で、山へは翌日登る心算だつたが、僅か三里を一ト晩泊つて行く氣もしなくなつて、Kさんは豫定を變へて、然し若し登れさうもなければ山の下まで行つて泊めて貰うつもりで、水沼を出た。

そして丁度日暮れに二の鳥居の近かくまで來て了つたが、身體も氣持も餘りに平氣だつた。それに月もある。Kさんは登る事に決めた。然しそれから登るに從つて、雪は段々深くなつた。Kさんが山を下りた時とは倍位になつて居た。それでも人通りのある所なら、深いなりに上が固まるから、左程困難はないが、全で人通りがないので軟らかい雪へ膝

位まで入る。其上、一面の雪で何所が路かよく知れないから、幾ら子供から山に育つて慣れ切つたKさんでも、段々にまいつて來た。

月明りに鳥居峠は直ぐ上に見えて居る。夏は此邊はこんもりとした森だが、冬で葉がないから上が直ぐ近くに見えて居る。其上、雪も距離を近かく見せた。今更引き返えす氣もしないで、蟻の這うやうに登つて行くが、手の屆きさうな距離が實に容易でなかつた。若し引き返えすとすれば、幸ひ通つた路を間違はず行ければまだいいとして、それを反れたら困難は同じ事だ。上を見ると、何しろ其所だ。Kさんは、もう一ト息、もう一ト息と登つた。別に恐怖も不安も感じなかつた。然し何んだか氣持が少しぼんやりして來た事は感じた。

「後で考へると、本統は危なかつたんですよ。雪で死ぬ人は大概左うなつて其儘眠つて了うんです。眠つた儘、死んで了うんです。」

よくそれを知りながら、不思議にKさんは其時少しも左う云ふ不安に襲はれなかつた。そして、兎も角、氣持を張つた。何しろ身體がいゝ。それに雪には慣れてゐた。到頭それから二時間餘りかゝつて、漸く峠の上まで漕ぎつけた。雪の深さは一層増さつた。然しこれからは一寸、下りになる。下ればずつと平地だ。時計を見ると、もう一時過ぎて居た。

遠くの方に提灯が二つ見えた。今時分、とKさんは不思議に思つた。然し兎も角一人きりの所に人と會うのは擦れ違ひにしろ嬉しかつた。Kさんは又元氣を振ひ起こして、下りて行つた。そして、覺滿淵の邊でそれらの人々と出會つた。それはUさんといふ、Kさんの義理の兄さんと、その頃Kさんの家に泊つてゐた氷切りの人夫三人とだつた。「お歸りなさい。大變でしたらう」とUさんが云つた。Kさんは「今時分何處へ行くんですか？」と訊いた。「今、お母さんに起こされて迎ひに來たんですよ」とUさんは何んの不思議もなささうに答へた。Kさんはゾッとした。

「私が其日歸る事は知らしても何んにもなかつたんです。後で聽くと、お母さんがみいちやん（Kさんの上の子供）を

抱いて寢て居ると、――別に眠つて居たやうでもないんですが、不意にUさんを起こして、Kが歸つて來たから迎ひに行つて下さいと云つたんださうです。Kが呼んでるからつて云ふんださうです。あんまりハッキリして居るんで、Uさんも不思議とも思はず、人夫を起こして支度させて出て來たと云ふんですが、よく聽いて見ると、それが丁度、私が一番弱つて、氣持が少しぼんやりして來た時なんです。山では早く寢ますからね、七時か八時に寢て、丁度皆ぐつすりと寢込んだ時なんです。それを四人も起こして出して寄越すんですから、お母さんのは餘程ハッキリ聽いたに違ひないのです」

「Kさんは呼んだの?」と妻が訊いた。

「いゝえ。峠の向ふぢやあ、幾ら呼んだつて聽こえませんもの」

「左うね」と妻は云つた。妻は涙ぐんで居た。

「そんな氣がした位では却々、夜中に皆を起こして、腰の上まで埋まる雪の中を出してやれるものではないんです。それは卷脚絆の卷き方が一つ惡くても、一度解けたら、凍つて棒になつて了ひますから迚も、もう卷けないんです。だから支度が隨分厄介なんです。支度にどうしても二十分やそこらかゝるんですよ。其間お母さんは、ちつとも疑はずにおむすびを作つたり、火を焚きつけたりして居たんです」

Kさんとお母さんの關係を知つてゐると此話は一層感じが深かつた。よく知らないが、似てゐるので皆がイプセンと呼んでゐたKさんの亡くなつたお父さんは別に惡い人ではないらしかつたが、少なくとも良人としては餘りよくなかつた。平常は前橋邊に若い妾と住んでゐて、夏になると其れを連れて山へ來て、山での收入を取上げて行つたさうだ。Kさんはお父さんの左ういふやり方に心から不快を感じて、よく衝突をしたといふ事だ。そしてこんな事がKさんを一層お母さん想ひにし、お母さんを一層Kさん想ひにさせたのだ。

先刻から、小鳥嶋で梟が鳴いてゐた。「五郎助」と云つて、暫く間を置いて、「奉公」と鳴く。

焚火も下火になつた。Kさんは懐中時計を出して見た。

「何時？」

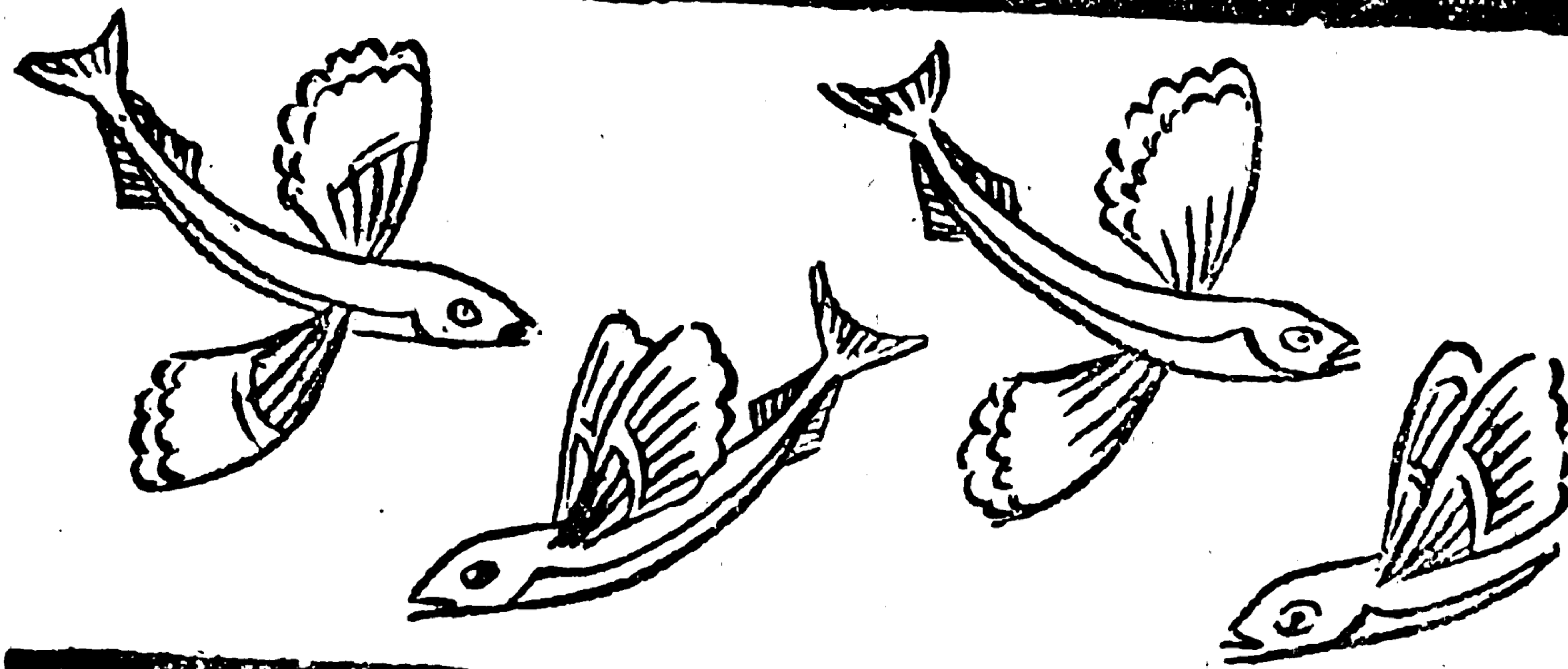
「十一時過ぎましたよ」

「もう歸りませうか」と妻が云つた。

思ひ出したやうに梟が「五郎助――奉公」と鳴いた。

Kさんは勢よく燃え殘りの焚木を湖水へ遠く抛つた。焚木は赤い火の粉を散らしながら飛んで行つた。それが、水に映つて、水の中でも赤い火の粉を散らした焚木が飛んで行く。上と下と、同じ弧を描いて水面で結びつくと同時に、ジユツと消えて了ふ。そして暗くなる。それが面白かつた。皆で抛つた。Kさんが後に殘つたおき火を櫂で上手に水を撥ねかして消して了つた。

舟に乗つた。蕨取りの焚火はもう消えかゝつて居た。舟は小鳥嶋を廻はつて、神社の森へ靜かに滑つて行つた。梟の聲が段々遠くなつた。　（完）



活辯と思はれる

里見弴

大阪にゐた時分、私はまるで名もない一介の書生だつたが、それでもなんとなく名を惜しむやうな氣持があつた。文壇からも世間からも一向に顧られなかつたとは云ふ定、その四五年前から、S——と云ふ筆名で或る同人雜誌に創作を發表してゐた。その誰一人として知るものもないやうな筆名を惜んで、たつた二人しかない大阪の友達にも、若し自分を誰かに紹介するやうな場合があつたら、必ず本名を云つてくれ、忘れてもS——だとは云つてくれるな、と堅く頼んで置いた。——と云ふのは、その頃私は、家庭や、一緒に仕事をして來た仲間から全く離れて、右顧左眄するところのない、水の低きにつくやうな、ごく自然な、素の生活をしたいと、それを第一に心懸けてゐたから、いつなん時、どんなことを爲出かすか、我ながら見當がつかなかつた。そんな時、新聞などですぐ「あれ見よ、S——が……」とでも云はれさうに、餘計な自惚ながら考へられたのだ。それに、一つは見榮坊もあつた。なんとかして私の放浪を思ひ止らせやうとした兩親に、今までうちにゐた時と同じ額の小使でやつて行く氣なら……と云ふ條件をつけられて出て來た身の上だつたから、至つてお手元が不如意だつた。そのひけた氣持からも、「私はS——でござい」とは云ひたくなかつた。——しばらく身を市井に隱した、と云

ふ氣持だつたのだ。

それでも、隱棲してゐた露次のうちでは、兎に角私は「屋根裏の哲學者」然たる取扱ひを受けてゐた。法音寺の二階に通つてゐる仲居さんに、手紙の代筆を賴まれるやうな「先生」だつた。机に向つて書きものをしたり本を讀んだりしてゐる時間がわりに多いところから、何が出來るのかわからないながらに、いつとはなく「先生」と呼び馴されて了つたわけだ。

私が二階借をしてゐた階下うちに始終出這入りしてゐたえたいの知れない爺が、或る日、ミシ／＼と急な梯子段を匍ふやうにあがつて來た。

「御勉强中えらいすみまへんけど、一寸お願ひ申したいことがごはして……」

さう大阪と京都とが混り合つた彼一流の訛をもつて云ひながら、敷居ぎはでいやにペコ／＼小腰をかゞめて、黄疸病のやうに白眼の黄色い眼を、狡猾らしくしばたゝいた。

「なんです」

私はやゝ突慳貪に答へた。

「えゝ、一寸御邪魔させてもろて大事おまへんやろか……」

「どうぞ」

それで爺は、茶の湯の心得でも見せるつもりか、シュウ／＼と二度に膝行り寄つて机のそばへ來た。

「なんや、えらい蒸しまんな」

「ひと雨くるといゝんだけれど」

「さよ／＼。もうかれこれ一月も降れしめへんさかい……。それに今年の暑さはまた別だつせ。あんたはん、こつちやの夏は初てだつしやろ」

「えゝ、東京よりはちつとえらいやうですね」

「えろおまつくらゐか……。新聞で見たかて、大方毎日二三度、四五度から違ひがおますもん。一寸拜借……」

と爺は、マッチを添えた煙草盆を引きよせて、腰から、伊勢の名物で、「古なる光る强い紙なり」を「降る鳴る光る强い雷」にきかせた和歌まで出來てゐる一種の油紙の煙草入をぬき出した。それは、廣告用の和歌を證明し顔に、古くなつて光つてゐたが、丈夫かどうかの、肝腎の點はわからなかつた。

「そこで御用と仰有るのは……？」

「へ」

と頭をさげながら、兩の頬に深い溝がはひるほどシュウと一服吸ひ込んでから、「えらいひつ禮なことをお尋するやうだすが、あんたはん獨逸語をなさいまつしやろか」

「出來ませんね」

思はず私は微笑んで、「然しなんです。貴方と獨逸語の取り合せが面白い」

「ほんまにイな」

爺も、根本二三分を殘して白と黑の染め分けになつた髪の毛を、熊手にした指で掻き上げながら笑つた。

聞いて見ると、この爺は、千日前に活動の小屋をもつてゐる一寸した興業師の手代だつた。で、今度來たフイルムの字幕が、稀しいことに獨逸語で書いてある。英語だと大抵辨士が讀むのだが、獨逸語の出來ると云ふ人が一寸知り合ひにもないし、醫學校の先生を頼まうと云ふ話もあつたが、それも餘り大袈裟だしと云ふので困つてゐた。その時爺がふと私のことを思ひついて話すと、主人も是非行つてお願ひしてみろと云ふので、甚だ失禮とは思つたがお願ひに出たわけだ、と、かう云ふ話だつた。

「いや、そんなことおまへんやろ。……いえな、實はな、あの先生やつたら、きつとでけはる云ふて、わがでにきめこ

んでな、」もうちやんと引き受けて來ましてん。……いや、どうでも、でけはるに違ひない。能ある鷹は爪を隱すとやら云ふて、あかん云やはるお方にかぎつて、きつとでけまッ」

「ところが、實際あかないんですよ」

「さうかて、まる／＼あかんのと違ひまつしやろ」

「まづまる／＼だね。習つたことは習つたんですけれど、その時分にア怠け放題だつたし、それにもう大分前の話ですもの」

よせばいゝのに、おだて上手にかゝつて、能なき鷹が爪の垢をほぢくつたのが間違ひのもとになつた。たうとう爺に口說き落されて、その晩私は興業師の自宅に試寫を見に行く約束をさせられて了つた。

行つて見ると、赤ら面ででつぷりと肥つた、道で遇つてもそれと知れさうに興業師然とした四十格構の主人が、ゆかたがけの卷帶かなんかで、口でこそ「先生」と呼びはするが、一向「先生」らしくもない小僧ツ子あしらひで、すぐ私を二階の廣間に案內した。娘とも女房とも下女とも、さうかと云つて妾とも片づかないやうな女が幾人もゐて、代る／＼茶や菓子を運んで來た。私はその頃の誇り本然たる「素な心持」で、けうとく控えてゐた。

やがて試寫用の機械の仕度が出來たが、電燈を消してみると、賑かな明るい往來に面した部屋なので、おもての灯で、そこらが充分暗くならなかつた。それで、たゞさへ蒸し暑い晩に雨戸をたてたのだから、その暑苦しさと云ふものはなかつた。そのなかで、カタ／＼カタ／＼と耳のそばに機械の音を聞きながら、電力が足りないとかで、小さく、――方二尺ほどに、次の間の黄大津の壁へちかに映る映畫を、私はちつと見詰めなければならなかつた。

それは女王ルイゼの一代記だつた。一番初めに、よく繪では馴染の、齒の痛い人のやうに頭から顎へかけて布を捲きつけた女王の肖像（勿論何某と云ふ女優の扮した）が現はれた時には、私は、こいつは厄介なことになつた、と思つた。何故なら、中學時代からの學課のうちで、凡そ歷史くらゐ私の嫌ひなものはなく、從つてそれに就いては、古今東

西を問はず、なんにも知らないと云つてもいゝほどの無智を、寧ろ誇りとしてゐた。それで、トルストイがカザンだつたかの大學で、歴史なんぞ習ふと、人間獨創力を失つて馬鹿になるばかりだ、とかなんとかその課目の教師に理屈をこねて、退校された話を讀んだ時などは、大に意を强うしてゐた男だつたから……。

果して、この無智が祟つた。女主人公が子供のうちはまだよかつた。阿母さんに或る日から云つたとか、粗忽をした侍女に對してこんなに寛大だつたとか云ふうちは、懷中に忍ばせて來た字引なしにでも、どうやらかうやらやつつけてゐたが、そのうちに亭主にでも死別れたらしく、王位を踏んでからがことだつた。歴史上ではいづれもお歴々なのだらうが、どこの宰相だか、姦臣だか更に見當のつかない人物があとから〳〵と出て來て、獨逸人にはお馴染でも私にとつてはチンプンカンプンな臺詞を、あとさきなしに字幕の上へ擲りだして行く。獨逸の話だと思つてゐるうちにナポレオンが出て來る。群集が矢鱈に帽子や手を振り廻しゐる。字幕で見ると、我等に自由を與へよ、然らされば死を、なんてどこかで聞いたやうなことを叫んでゐるらしいのだが、一體どこの人民が誰に向つてそんなに興奮してゐるのか、歴史的低能兒には一向通じない。それにだん〳〵語彙がむづかしくなつて來て、おそろしく長い字が、矢鱈に黄大津の壁へ匐ひ出すので、有繋の「先生」も參つて了つた。仕方がないから、襖のかげに雪洞を引ッ張つて貰つて、字幕へ來ると機械を止めさせて、覗いては寫し、覗いては寫しして、うちへ歸つてからゆつくり字引と相談することにした。さうかうするうちに、どうしたはづみか戰爭が始る。

「まアうけるのはこゝらだぜ」

と活辯の一人が、他のものに云つた。

「さうだ〳〵。さう云ふとこは、尙更しつかり先生に伺つとかんとあけへんで」

暗闇で、興業師が煎餅をボリ〳〵やりながら注意した。

「どこと戰爭が始つたんでせう」

「佛蘭西さ。ナポレオンとルイゼの喧嘩さ」

と私は小説家的想像力を利用して、泰然として答へた。

「あゝ、さう云へば、ナポレオンの一代記にもこんなところがありましたつけ」

「さうだらう、つまり普佛戰爭だね。プロイセンと佛蘭西が戰爭を始めたんだから」

「先生、どつちが佛蘭西の兵隊です」

「白い褌みたいなものをかけた方だ。……と、待つてくれ、だらうと思ふんだがね」

「おや／＼、こつちのもかけてますよ」

「だつて、帽子が違ふさ」

「あ、やられた／＼。あれア誰です」

「コロネルだから大佐だね。大佐の×××と云ふ男だね」

「えらいんですか」

「×××大佐奮戰苦鬪の光景でございます、とかなんとか云つとけばいゝじアないか」

「プロシヤの大佐ですか」

「さア、そいつがね……」

十一時半頃までかゝつて、やつとこの退屈に長たらしいフイルムが終つた。私は脂汗でネト／＼となつてゐた。

「あんまり面白いことないな」

から興業師が結論を與へるやるに云つた。

「おんなじやうなとこは切つて了ひませうか」

「さうだんな、ちよつとなどすぎまんな」

と、先刻から、自分のつれて來た先生の說明が大分あぶなつかしいので、いくらか「鼻ぺシャ」に感じて、隅の方に小さくなつて控えてゐた爺が相槌をうつた。

「つまりこれア、神功皇后みたな人なんで、獨逸人が見れア、あゝあの話だな、このことだなとすぐに解るくらゐ有名な事跡ばかりだから、字幕の說明も、その、至つて簡單なんだが、吾々外國人が見たんぢア、よつぽど歷史に明るくないと解らないところがあるんですよ」

私はさう自己辯護をしてから、いづれ二三日うちに寫しとつた解らない部分は調べて置くからと約束して、その晩は歸つて來た。

が、私はうちでコツ〳〵字引を引いて讀んでみる氣にもなれなかつた。書かれただけの意味は解つても、どつちみち全體のいきさつは、歷史を調べない限り解らないのだ。近代ものゝ、何か日常茶飯の間に起りさうな仕組のものとばかり思い込んで、安受合に出かけて行つたことを、私はつく〴〵後悔した。

そこでその翌日、大阪人である友達の日本畫家を尋ねて、誰か獨逸語のよく出來る人があつたら紹介してくれと賴んだ。いゝ按配に、その友達が畫を敎えに行つてゐるうちで、主人が永く獨逸に留學してゐたと云ふのがあつた。然もその日が丁度そこのお稽古日にあたつてゐた。

ぢア一緒につれて行つて貰はふ、と云ふので、夕方から、私はその川崎氏のうちに行つた。私を玄關に待せて、友達だけ先にあがつて行つたが、暫くすると、私も座敷に通された。こちらは、だしぬけに敎えを乞ひに行つた人間だから勿論さう鄭重にされやうとも思はなかつたが、その主人の扱ひと云ふのが、可なりいけぞんざいだつた。あとで考へてみれば、一切の素性をかくしてくれるやうにと常から賴んで置いた友達が、簡單に用向きだけを話したのだから、川崎氏の

一家は、活辯がやつて來たくらゐに思つたに違ひない。いや、慥にその扱ひだつた。友達が大聲に笑つたりしてゐるそばで、私は全く Out of place な人間だつた。一段品くだつたもの丶浸入だつた。父母の膝下で、豐かに、何一つ辛い思ひも知らずに育つて來た私にとつては、さう云ふあしらひは、最初の經驗だつた。ひとから見くだされると云ふ氣持がどんなものだか、私は初めて識つた……。とあつて、今更あとへも引けなかつた。

「御面倒ですが、それではどうか一つお願ひ申します」

そこには、親しい家族でも加つて、一緒に繪のお稽古が始るらしく、座布團なども用意してあつたので、私はさつさと用件を片づけて歸らうと思ひながら、主人の側へ躙り出た。

「さア、どうかな、解ればいゝがな」

人のよささうな主人は、さう云ふのすら友達の方へ向つて笑ひかけた。

私は、活動のちらしのあまつたのゝ端へ寫しとつて來た說明書を取り出した。主人は低聲に音讀してから「おゝ、それはいかに烈しく、そして、なんてつたらいゝかな、悲しくでもないが、さう、慘憺たるかな、いかに烈しくさうして慘憺たる砲兵戰であつたことよ、かな。まアそんな意味だね」などゝ譯してくれた。

「えゝと、侍從長がその時から云つたてんだ、それは女王陛下に屬するものだ。つまりケエニギン・ルイゼのものだつて云つたんだが、それはつてのが何を指してるのか僕には寫眞を見ないから解らないね。何か女王が手に持つてるか、そこらに置いてあるか、なんかあるんだらう。それともまた抽象的なものでもいゝんだが、なんです」

「なんにもないんですが、人民かなにかのことでも云つてるのかも知れません」

「あゝ、そんなことだらう」

こんな按配で結局要領は得られず、それの上、主人の厚意に對してちつとも感謝の氣持が起らないほど、自分の立場にひけめを感じなければならないはめに立ち至つたことで、(自分から起したことながら)ムシャクシャと腹立たしくな

りながら、私は一刻も早く中止してほしいと思つてゐた。そこに、奥さんや娘さんづれの客がはいつて來て、一層私と云ふものは居たゝまれない人間になつて了つた。

「お邪魔でせうから、もう結構です」

と切り出した。主人も大分苦しんでゐる箇所もあつたので、それでは自分の友人に醫學博士で、自分などより逈に獨逸語の達な男があるから、それへ紹介してやらう、と云つてくれた。私はもうどこへ行つたつてとても要領は得られないものと締めて了つたが、折角親切にさう云つてくれるのを、無下にも斷りかねてゐるところに、川崎氏の奥さんが近よつて來た。少し横平たい憾みはあるが、目鼻だちのはでな、美しい人だつた。きつと無邪氣な器量自慢に違ひないと思はせるやうな一體の表情が、一層その人を美しくみせてゐるとでも云つた風な奥さんだつた。その奥さんが親切に――目下のものに對する親切さで、自分がつれて行つて紹介してやるから、明日の朝八時前にうちまで來いと云つてくれた。いつの間にか私は、泣き出したいやうな情ない氣持になつてゐた。誰も彼も自分よりはえらい人のやうな氣持になつてゐた。ペコ〳〵頭をさげて禮を云つて、友達を殘して、一人先におもてに出た。大阪市の東を走る岡から、東京の山の手に育つたものには懷しい坂道をだら〳〵とおりて行くと、煙とも靄ともつかない空氣の厚ぼつたさの彼方に、眞赤な太陽が、五分の一ほど顔を出して、いま靜かに落ちて行くところだつた。街の騷音が、蚊柱のやうにもつれながら立ち騰つてゐる。奴隷がクレオパトラに戀したやうな氣持で、私は奥さんを思つた……。

玄關のそばにある芙蓉の葉を、引つぱつて、裂いて、千切つて、掌ひらでもんで丸にして擲つた時分に奥さんが出て來た。

「お待ちどうさま」

「どう致しまして、朝早くからお氣の毒様です……」

その日はほんとに普段のまゝらしいゆかたがけの素足で、束髪も少し亂れてゐた。私たちは坂をおりて電車道へ出た。

「遠いんでせうか」

「いゝえ、電車に乗るほどもないんですが、それでもふた丁場、いゝえ、三つめだつたかしら」

「さうですか。……ほんとにいろ／＼お世話様になります」

「いゝえ、ちつとも。……あなた、こちらではないやうですね」

「えゝ、東京です」

「さうですか」

と感に堪えたやうに云ふのが、若い身空で、他國で、活動の辯士なんぞしてゐる私を哀むと云ふやうにも釋れた。

電車には丁度一人分の空席があつた。私はそこに奥さんをかけさせて、少し離れて立つてゐた。やがて車掌がはいて來たので、私が切符を買はふとすると、奥さんはその離れた席から乗り出すやうにして制めて、帯の間から回數券を出して二枚切らせた。私は、元來小さな體が、一層小さくなつて行くやうな氣がした。そのことが、情なく、さうかと云つてまたまんざらでもなく感じられた……。

醫學博士のうちは、玄關の横手から格子戸をくゞると、方言の「には」（土間の臺所とでも云ふべきもの）を廣々ととつた、純大阪風の建てかただつた。奥さんは案内も乞はずにそつちからはいつて行つて、そこに働いてゐた女中に、氣さくに聲をかけた。

「奥さんまだおやすみ……？」

「おこしやす。……いいえ、もう……」

女中も笑ひながら、さう挨拶して奥へ駈け込んで行つた。

ほどなく私たちは、離れのやうな六疊間に通された。前の晩電話でもかけてあつたとみて、そこに醫學博士の奥さんが出て來ても、別に私の用件は持ち出されなかつた。たゞ「この方です」と云つて顧みられただけだつた。
そこの奥さんも美しい人だつた。細面で、川崎氏の奥さんよりツンとしたところがありながら、どこか、——多分口の周りの表情かなにかで、ひどく肉的な性質に裏切られてゐるやうな人だつた。あとで聞くと、この二人は、大阪の流行界の先驅者だつたのだが、すぐ話が三越へ行つて、いつまでも果しなくそこに低徊してゐた。私はまた、そこのメッセンチアボオイほどにも値うちなく、部屋の偶に小さくなつて膝に手を支へてゐた。
「あなた、お待どうさまね」
とそれでも一二十分してから私に聲をかけて、「ほんとに寢坊でしようがないのよ。私一寸起して來ますわ」
「まアいゝぢやないの」
「だつてもう宅診の患者だつて來てゐるんですもの。ほんとにしようがないわ」
さう云つて醫者の細君は立つて行つた。
「お綺麗な奥さんでせう」
とお綺麗な奥さんが私を顧みて云つた。私はわけもなく赤くなつて、然りと答へるよりほかなかつた。
ほどなく私は奥さんたちに禮を述べて、ひとり博士の書齋へ導かれた。博士はこの「事件」中、私に對等な心持で話しかけてくれた唯一の人だつた。そして語學も川崎氏より確かさうだつたが、結果としては、私が豫期してゐた通り、相變らず全篇の筋は一向に解らずじまひだつた。でも私は、お妨樣じみた依頼心からつまらないことを友達に頼んだばかりに、自分から陷らなければならなかつた情けないほどみじめな立場から、さつぱりとぬけ出せることで勇みたつて、陋巷の家へ歸つて來た。

活辯の教授は、いゝ加減なことで誤魔化して了つた。川崎氏と醫學博士へとは、興業師から屆けてよこした招待劵を何枚か送つて、お禮の顏出しはごめん蒙つた。そして私が活辯扱ひをうけた報ゐとしては、到來ものを廻してよこしたらしい葡萄酒が三本だつた。

大袈裟に廣告したにも係らず、そのフィルムは客を呼べなかつたやうだつた。ほんもの丶活辯は、私の想像にまた輪をかけて、大ヨタを飛ばしてゐた。けれども、調子で、わけがわからないながらに、いかにもケェニギン・ルイゼが文武兼備の名女王だつたやうな氣をさせるところは、有數に商賈だと感心するよりほかはなかつた。

四五年後に、東京で、同じ畫家の友達によつて、私は川崎氏の奥さんに、改めてS――として紹介しなほされた。云ふところによると、奥さんはS――の讀者だつた。

その時彼女は、活辯としてのS――を知つてゐることを誇らしく、また恥しく感じるやうに見えた。――兎に角私に對する具合は全く違つてゐた。この人も、總ての女のやうに、有名ずきらしかつた。私は馬鹿々々しいほどいゝ心持になつて、「有名になるつてことも、一寸惡くないな」なんぞと、腹の底をムヅ／＼させてゐた。



或些やかな恥

徳田秋聲

貞三が或時机に向つてゐると、日本橋の或大きな呉服店の配達小僧がとゞけて來たのだといつて、妻のおけいが小さな紙包をもつて見せに來た。

「安村さんからのお屆けものだと言つて、こんな物が……。」

おけいはさう言つて、その包みを机の端におきながら、「多分切手でせう」と呟いてゐた。

「安村？」さう言つてその包みを眺めながら、彼は何だか妙な物が舞込んだと云ふ氣がした。

「え、安村さんですて。」おけいは別に疑ふところはない、屆けてくれたものなら受取つておくのが當然だとでも言ひさうな、勿論普通の女としては、別に鄙吝な心はないにしても、呉服切手などゝ云ふものは、何となく厭な氣持はしないものなので、幾分の不安と喜悅の情とをもつて言つた。

けれどそんな物を貞三は何處からも誰からも贈られる筈はなかつた。その上安村といふ名前の人は二三人知つてゐないではなかつたが、一人は以前時々作物などをもつて訪ねて來た青年で、今は新聞記者をしてゐるが、三四年何の交渉もなかつたし、今は一人はこれも中年の文學者で、會や何かでをり〳〵顏を合してゐても、別に禮物を受けるやうな關係が、こ

の頃生じてゐるといふ譯でもなかつた。今一人同じ苗字の人はあつた。これも通俗な雜誌などに時々何か書いてゐる人で、いつか化粧品を發明したときに、その製品をもつて來て、使つてみたうへで世間へ吹聽してくれろと言つて來たことはあつたが、それも古いことで、現在では何等の交渉もなかつた。この三人の何れもから、呉服店の切手など貰ふ筋のないことは、深く考へるまでもなかつた。

今一箇所全然別方面で、同苗字の人があるにはあつた。しかしそれは非常に身分の懸隔した人で、これも新年の宴會などで顔を見たことがあり、その人の歸朝の歡迎會などにも列したり、園遊會に招待されたりなどしたことはあつても、それは郷黨の一人としてゞ、別に個人的の交際がある譯ではなかつた。勿論彼はひどく高貴な門地の人であつた。

「どうも可笑しい。こんな物を安村と云ふ人からもらふ覺えがない。」貞三は苦笑した。

「さうですね。」おけいも首を傾げてゐた。

「ちよつと待つてくれ。」貞三はさう言つて、小僧を呼止めさせたが、そのまゝ返すのも不安であつた。

「僕のところでは、安村と云ふ人から物をもらふやうな處はないんだがね、店へ歸つたらよく調べてみてくれんかね。安村何と云ふ人だか。又何處の人だかと云ふこともね。」貞三は小僧に言つた。

「は、可うございます。」小僧は答へたがいづれ序があるから、詳しいことが判つたら知らせるといつて、歸つてしまつた。

二人はまた座敷へ歸つて、包みを眺めた。

「兄さんぢやないんですか。」おけいは先刻から考へてゐたことを、口へ出してしまつた。

さういへば貞三の二番目の兄が、この頃ちよつと上京したと言つて、京橋の宿屋から俥でやつて來て、一時間ならず話して直ぐ歸つて行つたといふ事實はある。おけいの考へでは、その時手土産をもたないで忙しいなかを訪ねて來たので、田舍へ歸りしなにそんな物を送るやうに取計つたのであらうと云ふ推測は、强ちそんなに蟲の好いことでもなささ

う に思はれた。ルーズな頭腦の彼女としては、そこへ聯絡をつけたのも、さほど不自然なことではなかつた。その上貞三の兄は、彼女の良人の慘な境涯に比べては可成有福でもなかつた。のみならず、子供もなかつた。子や孫は近頃あるにはあつても、それは双方とも餘所から貰つた養子女であり、その養子女に産れた幼兒であつた。それに又若い人たちは、遠く離れて任地に暮してゐた。

しかし其よりも、おけいは不思議と貞三の義兄の八十島に好感をもつてゐた。良人の貞三以上にも彼に親しみを感じてゐた。それは彼女の性癖として、感情的にも理性的にも、誰を好いて誰を憎むと云ふやうな好惡感の劇しい方ではなかつたので、八十島に對しても別に深い理由や主觀から來た、强い感じを抱いてゐる譯ではなかつたけれど、しかし彼に對する其の漠然とした好い感じは、彼女としては亦正直な女らしい感情の發露であつた。八十島が今迄五回も貞三夫婦を訪れたときの印象から言ふと、彼は貞三とはまるで反對の、立派な大きい肥えた體格の持主で、眉も濃く長い切目にも優しみがあつて、頰がふつくらしてゐた。貞三たちの旦那寺の慾深な和尙が、「お祖師さまに似てゐるから私は貴方が好きだ」と言つたとほりに、彼はさう云つたやうな風貌を備へてゐた。のみならず彼はひどく靜かな落着いた性質で、低い聲で內輪に口を利き、融けるやうな微笑を目尻にたゝへてゐた。勿論貞三の知つた限りでは、强ちさうとばかりも限られなかつた。荒い氣分もその靜かな波の底に眠つてゐるのであつたが、それはおけいには幾んど信じられないことであつた。義兄は貞三たちの子供を見るのを樂しみにしてゐた。一人々々彼等を傍へ呼びよせて、小さい方をば膝のうへへ子猫のやうに載せて、頭を撫でながら、優しい言をかけてゐた。

「これあ眞實に好い兒だわい！」などゝ彼は持前の微笑を目元に波うたせながら飽きることを知らないと云ふ風であつた。

子供たちは直に年取つた伯父さんに懷いていつでも其の顏を覺えてゐた。

「わしも老人を見送つてしまへば、東京へでも出てくるかも知れない。こちらはこんなに子供もあるんだし、弟は體が

弱いから其の事も心配してゐる。」

　彼はおけいにそんなお愛想を言つたりした。貞三が學校を罷めて、何か物を書く人になりたいと言つて、兄達に其の熱情を訴へたときの古い話なども、貞三の留守の間に、彼は何時かおけいに話して聞せた。

「わしは其を危ぶんだけれど、彼はどんな苦しみをしても介意はないと言つて聞かなかつたのだ。厄介には決してならないと言つて、剛情を張つたものだ。義兄はさうも言うて笑談のやうに貞三の過去を話した。

　おけいはそんなやうな事から、この義兄をひどく頼もしく思ふやうになつた。

「それあ然うはいかない。八十島の兄にしたつて、若い時分はやはり同じやうに苦しみを嘗めさせられて來たんだから。」貞三はそれを否定した。

「それにあの兄の氣質として、慈善めいたことは昔から大嫌ひなんだ。話がわかれば、決して鄙吝な人でも冷たい人でもないがね。」

「さうですかね。お國の方は皆さん餘り好く仰しやらないやうですけれど……。」おけいはさう思ひながらも、自分たちだけには優しい兄のやうに思はれてゐた。

　その頃義兄の心はいくらか弟の子供たちの上に傾いてゐた。それほど彼は自分の老後を寂しく思つてゐた。しかし間もなく義兄夫婦は、女の養父の意志で相續者をも取決めて、孫まで出來てしまつて、氣分の轉換を來してゐることは、感じの鈍い貞三に明かに感ぜられた。勿論彼としてはそんな期待をももつてゐなかつた。いつ逢つても生活上の話に觸れやうと思つたことすらなかつた。母が異ふと云ふことが、此の兄には何となく貞三にそんな感じを抱かせてゐた。

　この頃來たときにも、兄はその支配をしてゐる鑛山事業の經營者の令孃の結婚式について、ちよつと上京したと言つて、一時間も落着いてゐられなかつた。貞三は殊にも忙しい時だつたので、その頃若い女の人に新聞の原稿を筆記してもらつてゐたが、兄はその間も待遠しいやうであつた。それにその時貞三の姉がその娘と二人で、家計上のことで貞三

に相談したい用件があつて出て來てゐた。姪の方は他の問題で、貞三がわざ〳〵呼寄せたのではあつたが、最近に良人に死別れた姉母子は、弟の家へ來てゐることを、八十島の兄に知られるのを、ひどく厭がつてゐた。殊にも娘――貞三たちの姪――の方が然うであつた。姪は八十島の世話で、しばらく其の鑛山の持主の世話になつてゐたが、或事件のために、そこを出ると同事に、八十島の兄――彼女のためには伯父――から峻烈な叱責を受けたとかで、ひどく彼を怨み咀つてゐたので、そこへ彼の來訪したことは、彼女母子に取つて、可也苦痛であつた。

しかし貞三としては、姉や姪を一應兄の前へ呼出さないわけに行かなかつたので、厭がるのを強ひて連れて來て、挨拶させた。そしてこの姪を呼寄せた事情について、簡短に說明もして彼の同意をも求めた。

八十島の兄は、この母子に對して、言ひたいことが喉にむづ〳〵してゐるやうに見えたが、貞三の前別に何にも言はなかつた。たゞ歸りしなに玄關で、「しつかりしなくては駄目だぞ。彼方へふら〳〵此方へふら〳〵してゐるやうでは爲樣がないではないか」といふやうな意味のことを言つて、母子を見返して行つたきりであつた。

「姉と姪の來てゐることをしつて、來たのかもしれない。」貞三は其時もさう思つて、姪對八十島の兄の問題の內容や波紋をちよつと咄嗟的に見徹し得たやうな氣がしたのであつた。

「はるさんは三階へ入つて泣いてゐますよ。あんな人に逢つたのが口惜しいつて。」おけいは、八十島の兄があわたゞしく歸つて行つたあとで。何か物足りない寂しさを感じてゐる貞三の傍へ來て、そつと私語いた。

「何だつて‥‥。」

「何だか知らないけれど、餘程肚が立つとみえますね。あの人たちは、自分に都合がわるくなると、人に難癖をつけて遁擴つてしまふなんて‥‥何かそんなに肚の立つことがあるんでせうか。」

「一つはあれの我儘もあるだらうが‥‥。」貞三はうつかり批判も下しかねると云ふ氣持で、その事件を想像してゐた。

そんな事があるので、まさかとは思つたがおけいが「きつと兄さんからの贈り物ですよ」と言つて、それに決めてゐるのを、貞三としては絶對に否認しながらも、兄にも弟の弱いところがあるから、貞三たちに惡く思はれないために、偶然としたら、そんな事をしたかも知れないと云ふ氣がしないこともなかつた。

しかし又考へてみると、同じ血の通つてゐる貞三にも共通點があるとほりに、自分の氣持に疚しいとか、後で人に自分を卑くしてゐなければならぬやうな事を、絶對に嫌ひな兄としては、たとひ其事が多少惡いことであるにしても、それが自分の自信に基いて爲たことである以上、弟の歡心をまで買ふ必要を感じてゐやうとは、何うしても思はれなかつた。品物などで、自分の弱點――假に意識してゐるとして――を蔽隱すことの出來ない、それは惡くすると殆んど一刻とか因業とか思はれやすいほど、そんな點については撓みにくい心を、貞三がもつてゐる以上に、彼の兄も有つてゐる筈であつた。

「いや、どう考へても兄からの贈りものだとは思へない。」貞三は否決した。そして終ひに惱ましさをさへ感じて來た。

「安村と八十島の間違ひぢやないでせうかね。」おけいは最初の推測から、何うしても離れられないやうな氣持で言つた。彼女には、手にした其の包みに、いつか淡い執着さへ生じてゐたことも、爭へなかつた。

「とにかく明けてみやう。何かまたヒントを得るかも知れない。」貞三は其の表包みの封を指頭で剝して、そつと中をあけてみた。桐で張られたボール紙の薄い箱が出て來た。そして蓋を取つてみると、餘り多くもないが、さりとて餘り少くもない金額が。その切手に記されてあつた。中位な反物の一反くらゐは買へさうな額であつた。

「をかしいな!」貞三はそれに全く拘つてしまつたやうに呟いてゐた。

「まあ可いぢやありませんか。しばらく然うやつておいても。」おけいは稍かしさうに言つた。

「しかし何だか氣になるな。」貞三は終ひに笑出した。

「お前はもう當然貰つたもののやうな氣がしてゐるか知れないが……たとひ八十島の兄にしたところで、貰ふ理由は少

しもないんだからね。」

「でも兄さんは、さう云ふやうな方ぢやありませんか。立ちがけに、宿から電話で屆けるやうに言つてお置きなすつたに決つてゐますわ。みつ子に着物を下すつたときだつて、ほんとにお手輕でね。」

「それあ然ういふところもあるけれど……まさか間合す譯にもいかないし。然うでなかつた場合に、お互に氣拙い思ひをしなければならんからね。」

「でも兄弟ですもの、その位のことは……。」おけいは良人の氣持を異しむやうに言つた。

勿論貞三とても、自分の生活の苦しみを感じる折々には、兄の財產について全然考へないこともなかつた。兄としても多くの係累をもつて、始終生活に追れがちな弟を助けることはそんなに無意義なことではないなどゝも思つた。兄が近年その愛してゐる女に、金を投じて料理屋を經營させてゐるなぞといふことも、從弟たちから聞いたりなどしてゐた。そしてそんな事から考へると、おけいの推測もそんなに理由のないことゝも思はれなかつた。しかし金錢上のことは、たとひ兄に好意があるとしても、彼から切出さないうちは、決して自分から切出すまいと考へてゐた。貞三から切出さないうちは、たとひ貞三にどんな要求があらうとも、自分から甘い言をかけるやうな彼では無論なかつた。

「餓死しても決して厄介になりません。」と、そんな事を、健忘性の貞三は自分が言つたか何うかすら、疾の昔しに忘れてしまつてゐたが、おけいに言つて聞かしたことから察しると、兄は今でも分明それを記憶してゐるらしかつた。

貞三は文學熱などに浮かされてゐた頃の、若い自分の盲目的な惱みと悶えとを、遠い昔しの夢か何ぞのやうに、微かに憶起すのであつたが、その悶えは幾分癒され酬ゐられたにしても、生活の苦しみは依然として彼に續いた。それは彼に取つては、長い〳〵酸苦の聯續であつた。墓穴にまでも續くであらうと思はれる苦しみであつた。彼は時々櫓を推すことに疲れた手を休めて、頭を擡げて四邊を見まはしながら溜息をついた。どこにも助けを呼ぶやうな舟は見られなかつた。彼と他人とが、そんな點に於て全く沒交渉であつたとほりに、彼と彼の兄ともお互ひに孤獨であつた。彼は泣面

を掻きながら、また萎え疲れた腕を動かした。

しかしおけい自身には、世間がさう峻烈なものとは何うしても思へなかつた。貞三から彼の死後の生活の惨苦を繰返し聞かされても、それを信ずる氣にはなれなかつた。

學問の進物の切手は箪笥のけんどんに仕舞はれたまゝ、幾日も〱……一ト月も二タ月も其まゝになつてゐた。

貞三は時々それが氣にかゝつたが、まるで忘れてしまつたやうにけろりとしてゐるともあつた。ちやうど失せ物の行方が氣にかゝるやうに、つひ何處かそこいらに贈り主がゐながら、それが思出せないやうな心焦燥を感じながらも、それかと言つて別に心咎めのすることでもなかつたので、刺さつた刺が、いつか除れてしまつたやうに、物忘れをしてゐる日が多かつた。

「をかしな事があるもんだね。」彼はどうかすると、親しい友達と外で夕飯を食べようとしてゐる時に、ふと其を思出して――事によつたら何か手係りにでも有つくかも知れないと云ふ、微かな望みを抱きながら、其の經緯を話したりした。

「多分兄だらうとは思ふが、まだ訊かずにゐるんだ。」彼はさうも言つた。

そして然う思ひ〱してゐるうちに、何時とはなし贈り主が兄に決まつてしまつたやうな形になつて來た。もう其は疑ふことのできない事實のやうに思はれて來た。そして左に右一度問合せてみやうと考へた。

或日彼は叮嚀な手紙を兄に書いた。そして早急にこの事の眞實を知らうと焦心つた。その手紙には、然うと斷定しかねるやうな口吻をも含めておいたにはおいたが、幾分お禮の心持をも微見かした。

「果してさうだとすると、お禮を申しあげなければならないので、念のためお伺する次第です……。」貞三はそんな風に書いた。昔しから自分のそゝかしい事は、事實以上に兄が認めてゐるのに乘じて、彼を氣寄がらせないやうな手段の意味を書加へることも怠らなかつた。實際彼は、少年のをり中學の入學試驗の日を忘れて、餘所へ遊びに行つた出先き

で、ふと其を注意されて、急いで支度をしに家へ歸つたことなどもあつた。
「よく氣を練つてやらなくちや駄目だぞ。」兄はその時、玄關まで送出して、嚴かな警告を貞三に與へた。
彼は試驗に合格した。
また最近兄夫婦が上京したとき、貞三は彼等を芝居へ案内した。そして勘定をするとき、帽子の中の縁に金を挿んでおいたことを忘れて、鰐口の底をはたきながら、ちよつと狽狼へた。同行したおけいの弟が、懐ろから出してくれたので、其時はそれで濟んだが、男衆にあづけた帽子を受取つてから漸と氣づいた。彼は必ずしもそんなに金錢に無頓着ではなかつたが、兄はそれを見て笑つてゐた、とにかく彼がそんなに兄の心を苦しめることでもなからうと云ふ氣安めの下に、その手紙は書かれたのであつた。
「貴方は兄さんのお宅へ宛てたんですかお勤先へお出しになつたんですか。」おけいは其事を訊いて不安さうに訊ねた。
「勿論宅の方さ。」貞三は應へた。
「若しかすると、義姉さんに秘密ぢやなかつたでせうか。」おけいは浮かぬ顔をしてゐた。
「そんな事はない。」貞三は斷言した。「勤め先へなぞ訊いてやれば、尚をかしい。」
おけいは默つてゐたが、不安の色が隱せなかつた。
幾日か經つた。兄から返辭は來なかつた。七日も十日も經つたが、何の沙汰もなかつた。
「をかしい――」貞三はまた不安になつて來た。兄が返辭に困つてゐるのではないかといふ氣がした。惡いことをしたものだとも悔ひられた。何か當つけがましいことのやうに取られはしないかと憂へた。然しもう追着かなかつた。何うでもいゝ事だと考へた。そんな事で頭腦をつかふのは、莫迦々々しいと云ふ氣がした。
すると大分たつてから、兄から葉書が來た。そんな覺えはない。何かの間違ひだらうと言ふのであつた。
「やつぱり然うぢやなかつたんだ。」貞三はおけいに話しながら、苦笑を禁じ得なかつた。

「さうですかね。」おけいはまだ全く自分の推測を撤回しかねる風であつた。
「義姉さんの前、そんな返事をお出しなさつたのかも知れませんよ。」
「まさか。」貞三はそれに就いては、確信をもつてゐた。
「しかし愈よ兄でないとすると、安村といふのは一體どこの誰だらう。」
貞三は兄でないことが知れてから、いくらか安易を感じたが、しかし疑問はやつぱり疑問であつた。で、いづれ買ひたい物もあるから、その呉服店へ行つた時、調べてもらつた方がいゝと云ふおけいの説を容れることにした。

それから又一ト月もたつた或日のこと、貞三は東北の方の或る文學志願者から、一通の手紙を受取つた。其の手紙の差出人は、もう青年ともいへない年輩の男で、一つの寺を所有してゐる宗教家であつた。勿論彼がその男から手紙を受取つたのは、今度が初めではなかつた。のみならず彼は其年の秋の末に、彼の訪問をすら受けて、三十分ばかり文藝談などを交したくらゐの間柄であつた。彼はその頃貞三も見ることになつてゐた、或社の懸賞作品の應募者の一人として、自分の作物の成行を氣づかひつゝ、わざ〳〵上京して來たのであつた。
「金なぞは別に欲しくはありませんので、先生のお力で他二先生の御意見をもお纒め下さることができますれば、非常の幸なのです。」
彼はさう言つて、妥協を申出たのであつたが、その作が貞三の手元へ廻つてゐないのを知ると、いくらか失望の色を浮べてゐた。
「何うせあんな物は駄目かとも思ひますが、若し幸ひにお手元へまはつて來ましたら、何分どうか宜しく。また其に拘はらず、是からも御示教を仰がなければなりませんのでこれを御緣に何うかお力添えを願ひます。」彼はさくりとした調子で、深く其の作品に執着するでもないらしい語を遺して歸つて行つた。

彼は郷里へ歸ると直ぐ、一度手紙を寄越したが、今また長い手紙を貞三に書いたのであつた。勿論作品については、八九分どほり諦めてゐた。たゞ今後の交通を希望する意味を述べると同時に、東京を去りぎはに、些少ながら聊か切手を差上げておいたが、多分お納め下すつた事と信じます云々と、そんな事が書いてあつた。

今まで貞三は、まるで其の男のことを失念してゐた。それに名前も別に氣に留めなかつたし、最初受取つた手紙の封書に書記された町の名や姓名も、可也能筆な其の文字の崩し方が、何うしても判斷がつかなかつたので、何禪とか云ふ名と、縣と郡とだけは讀めても、其以外は何う判斷してみても、返辭を書くべき自信を貞三に與へることが出來なかつた。

今彼は初めて彼の姓名を明かに讀むことができたと共に、長い間の謎が頓に釋けてしまつた。

貞三は幾分肚立しくも思つたが、それを全然賄賂と決めてしまふのは酷のやうに思れた。

貞三は二三日たつてから、それだけの金を小爲替に組んで、手紙のなかへ封じて送返した。そして其から間もなく、其の切手を買ひものゝ足しに使ふことにした。おけいが其の時必要を感じてゐた、著物の裾廻しなどを買ふために使はれたのであつた。

「何といふ莫迦々々しいことだ！」貞三はこぼした。

「ほんとうにね。」おけいも笑ひながら、「兄さんが嘸擽つたくお思ひなすつたでせうか。」

「少しはね。しかし何と思ふものか。そんな吝くさい兄でもないんだ。」

貞三とおけいは買ひものゝ歸りに久しぶりで鳥屋で晩飯を食べながら、そんなことを言ひ合つてゐた。

「何と云ふ大人氣なさであつたらう！」貞三は心で思つた。

それから又幾日か經つた或日、その男から又手紙が來た。そして中に小爲替がそつくり捲込んであつた。

「あれはほんの些少のもので、決してそんな意味ではなく、全くお邪魔をしたをりの御好意、又今後仰がなければならぬ御示敎に對して、愚生の寸志にござ候ゆえ、其まゝ御納めおき下されたく願上候。」

手紙はそんな意味で書かれてあつた。

眞三は何だか煩はしくなつて來た。何かそれだけの書物を贈るのが、この事に幾分の誠意と情味とを添えるらしくも考へられた。が、それは何うにでも方法はあらう、兄に對しては何だか氣持を見すかされたやうな淡い悔と恥とが遺つた。

（をはり）



平將門

露伴道人

千鍾の酒も少く、一句の言も多いといふことがある。受授が情を異にし啐啄が機に違へば、何も彼もおもしろく無くつて、其も是もまづいことになる。だから大抵の事は默つてゐることに越したことは無い、大抵の文は書かぬが優つてゐる。また大抵の事は聽かぬがよい、大抵の書は讀まぬがよい。何も申の歳だからとて、見ざる聞かざる言はざるを尙ぶわけでは無いが、嚢を括れば咎無しといふのは古からの通り文句である。酒を飮んで酒に飮まれるといふことを何處かの小父さんに敎へられたことがあるが、書を讀んで書に讀まれるなどは、酒に飮まれたよりも詰らない話だ。人を飮むほどの酒はイヤにアルコホルの强い奴で、人を讀むほどの書も性がよろしくないのだらう。そんなものを書いて貰はなくてもよいから、そんなものを讀んでやらなくてもよい理屈で、「一枚ぬげば肩がはら無い」。世をあつさりと春風の中で遊んで暮らせるものを、下らない文字といふものに交渉をもつて、書いたり讀んだり讀ませたり、擧句の果には讀まれたりしてそれが人文進歩の道程の、何のとは、はてあり難いことではあるが、どう

も大抵の書は讀まぬがよい、大抵の文は書かぬがよい。酒をつくらず酒飲まずなら「下戸やすらかに睡る春の夜」で、天下太平、愚痴無智の尼入道となつて、あかつきのむく起きに南無阿彌陀佛でも吐出した方が洒落てゐるらしい。何かの因果で、宿債未だ了せずとやらでもあるか、毛武總常の水の上に度々遊んで蘧底の夢の餘りによしなしごとを書きつけはしたが、もとより人を醉はさう意も無い、書かずともと思つてゐるほどだから、讀まずともと思つてゐる。たゞ宿醉猶殘つて眼の中がむづつく人もあらば、羅山が詩にした大河の水ほど淡いものだから、却つて胃熱を洗ふぐらゐのことはあらうか、飲むも飲まぬも讀むも讀まぬも、人々の勝手で、刀根の川波いつもさらつく同樣、紙に鉛筆のあたり傍題。

六人箱を枕の夢に、そも我こそは桓武天皇の後胤に鎭守府將軍良將が子、相馬の小次郎將門なれ、承平天慶のむかしの恨み、利根の川水日夜に流れて滔々汨々千古經れども未だ一念の痕を洗はねば、偏に鬱懷の委曲を語りて、修羅の苦因を晴るけんとぞ思ふ、と大ドロ〳〵で現はれ出た譯でも何でも無いが、一體將門は氣の毒な人である。大日本史には叛臣傳に出されて、日本はじまつて以來の不埒者に扱はれてゐるが、ほんとに惡むべき覬覦の心をいだいたものであらうか。それとも勢に驅られ情に激して、水は靜かなれども風之を狂はせば巨浪怒つて騰つて天を柏つに至つたんだらうか。先づそこから出立して考へて見ることを敢てしないで、いきなり幸島の僞闕、平親王呼はり、といふところから不屆至極のしれ者とされゝば、一言も無いには定まつて居るが、事跡からのみ論じて、心理を問はぬのは、乾燥派史家の安全な遣り方であるにせよ、情無いことであつて、今日の裁判にはも少し潤ひがあつて宜い譯だ。そこで自然と古來の史書雜籍を讀んで、それに讀まれてしまつた人で無い者の間には不服を稱ふる者も出て來て、現に明治年間には大審院控訴院宮内省等に對して申理を求めんとした人さへあつたほどである。然無くても古より今に至るまで關東諸國の民、あすこにも此所にも將門の靈を祀つて、隱然として其の所謂天位の覬覦者たる不屆者に同情し、之を愛敬してゐることを事實に示してゐる。此等は抑ゝ何に胚胎してゐるのであらうか、又何を語つてゐるのだらうか。たゞ其の驍勇無

悍をしのぶためのみならば、然樣はなるまいでは無いか。考へどころは十二分にある。

心理から事跡を曲解するのは不都合であるが、事跡から心理を妄斷するのも不都合である。まして事跡から心理を妄斷して、そして事實を想像し出すに至つては、愈々以て不都合である。日本外史はおもしろい書であるが、それによると、將門が在京の日に比叡の山頂に藤原純友と共に立つて皇居を俯瞰して、我は王族なり、當に天子となるべし、卿は藤原氏なり、關白となるべしと約束したとある。これは神皇正統記やなぞに據つたのであるが、これでは將門は飛んでも無い純粹の謀反人で、其罪逃るゝよしも無い者である。然しさういふ事が有り得るものであらうか。楚の項羽や漢の高祖が未だ事を擧げざる前、秦の始皇帝の行列を觀て、項羽は取つて以て代るべしと言ひ、高祖は大丈夫應に是の如くなるべしと言つたといふ、其の史記の記事から化けて出たやうなことだ。二人の言ですら、性格描寫として看れば非常に巧妙であるが、事實としては、史記に醉はぬ限は受取れない。黃石公を實在の人として受取るほどに讀まれてしまへば、二人の言も受取らうし、大鏡を信仰しきつて、正統記を有難がれば、それまでだが、どうも史記の香がしてならない。丁度將門亂の時の朱雀帝頃は漢文學の研究の大に行はれた時で、天慶の二年十一月、天皇樣が史記を左中辨藤原在衡を侍讀として始めて讀まれ、前帝醍醐天皇樣は三善清行を御相手に史記を讀まれた事などがある。それは兎に角大日本史も山陽同樣に此事を記してゐるが、大日本史の筆法は博く采ることはこれ有り、精しく判ずることは未だしといふ遣り方である。で、織田鷹洲などは頭から叡山々上の談を受取らない。清宮秀堅も受取らない。秀堅は鷹洲のやうに將門に同情してゐる人では無くて、「平賊の事、言ふに足らざる也、彼や鴟梟之性を以て、豕蛇の勢に乘じ、肆然として自から新皇と稱し、僞都を建て、僞官を置き、狂妄ほとんど桓玄、司馬倫の爲に類す、宜なるかな踵を回さずして誅に伏すや、」と云つて居るほどである。然し下瞰京師の事に就ては、「將門はもと檢非違使佐（スケ）たらんことを求めて得ず、憤を懷いて鄕に歸り、遂に禍を首むるのみ、後に興世を得て始めて僭稱す。猶源賴朝の蛭が島に在りしや、僅に伊豆一國に主たらんことを願ひしも、大江廣元を得るに及びて始めて天下を攬みしが如き也、正統記大鏡等、蓋し其跡に就いて而し

て之を擴張せる也、故に採らず」と云つてゐる。此書は心裏を想ひやつて意を立てゝゐるのだから、此も亦中ると中らざるとは別であるが、而も正統記等が其跡に就いて擴張したのであらうといふことは、一箭双鵰を貫いてゐる。宮本仲笏は、扶桑略記に「純友遙に將門謀反之由をきゝて亦亂逆を企つ」とあるのに照らして見れば、是れ將門と相約せるにあらざること明らかなりと云つてゐる。純友の南海を亂したのが同時であつたので、如何にも將門純友が合謀したことはたとへば後の石田三成と上杉景勝とが合謀した如くに見え、そこで天子關白の分ちどりといふ談も起つたのであらう。純友は伊豫掾で、承平年中に南海道に群盜の起つた時、紀淑人が伊豫守で之を追捕した其の事を助けてゐたが、其中に賊の餘黨を誘つて自分も賊をはじめたのである。將門の事とはおのづから別途に屬するので、將門の方は私鬪——即ち常陸大椽國香や前常陸大椽源護一族と鬪つたことから引つゞいて、終に天慶二年に至つて始めて私鬪から亂賊に變じたのである。其間に將門は一旦上京して上申し、私鬪の罪を赦されたことがある位である、それは承平七年の四月七日である。さすれば純友と將門と合謀の事は無い。隨つて叡山瞰京の事も、演劇的には有つた方が精彩があるかも知れないが、事實的には受取りかねるのである。そこで夙に覬覦の心を懷いてゐたといふことは、面白さうではあるが、正統記に返還して宜いのである。正統記の作者は皇室尊崇の忠篤の念によつて彼の著述をしたのであるから將門如きは出來るだけ筆墨の力によつて對治して置きたい餘りに、深く事實を考ふるに及ばずして書いたのであらう。山陽外史に至つては多く意を經ないで筆にしたに過ぎない。

將門が檢非違使の佐たらんことを求めたといふことも、神皇正統記の記事からで、それは當時の武人としては有りさうな望である。然し檢非違使でゝもあれば兎に角、檢非違使の別當は參議以上であるから、無位無官の者が突然にそれを望むべくは無い。して見れば檢非違使の佐が尉かを望んだとして解すべきである。これならば釣合はぬことでは無い。其代りに將門の器量は大に小さくなることであつて、そんなケチな官を望む者が、純友と共に天子關白わけ取りを心がけるとなると、前後が餘りに釣合はぬことになる。明末の李自成が落第に憤慨して流賊となつたやうもなのであると、

秀堅は論じてゐるが、それは少しをかしい。彼國の及第は大臣宰相にもなるの經路であるから、落第は非常の失望にもならうが、我邦で檢非違使佐や尉になれたからとて、前途洋々として春の如しといふ譯にはならない。随つて攝政忠平が省みなかつたゝめに檢非違使佐や尉になれ無いとて、謀反をしようとまで憤怨する譯もない。此事は、よしやかゝる望を抱いたことが將門にあつたとしても、謀反といふことは餘りに懸離れて居て、提燈と釣鐘、釣合が取れ無さ過ぎる。奧洲は頭から受取らないが、奧洲で無くても、警部長になれなかつたから謀反をするに至つたなどゝいふのは、如何に關東武士の覇氣勃々たるにせよ、信じ難いことである。で、正統記に讀まれることは御免を蒙らう。随つて將門始末に讀まれることも御免蒙らう。

　將門謀反の初發心の因由に關する記事は、皆受取れないが、一體當時の世態人情といふものは何樣なであつたらう。大鏡で概略は覗へるが、世の中は先づ以て平和で、藤原氏繁盛の時、公卿は榮華に誇つて、武士は漸く實力がありながら官位低く、屈して伸び得ず、藤原氏以外の者はたま〳〵菅公が暫時榮進された事はあつても遂に左遷を免れないで筑紫に竄せられた、丁度公の竄せられた其年に將門は下總に勇ましい産聲をあげたのである。抑醍醐帝頃は後世から云へばまことに平和の聖世であるが、また平安朝の形式成就の頂點のやうにも見えるが、然し實際は何に原因するかは知らず随分騷がしい事もあり嶮しい人心でもあつたと覺えるのは、史上に盜の多いので氣がつく。佛法は盛んであるが、迷信的で、僧侶は貴族側のもので平民側のものでは無かつた。上に貴胄の私曲が多かつたゝめでもあらうか、下には武士の私威を張ることも多かつた。公卿や嬪媛は詩歌管絃の文明にも醉つてゐたらうが、それらの犠牲となつて人民は可なり苦んでゐたらしい。要するに平安朝文明は貴族文明形式文明風流文明で、剛堅確實の立派なものと云はうよりは、纎細優麗のもので、漸々と次の時代、即ち武士の時代に政權を推移せしむる準備として、月卿雲客が美女才媛等と、美しい衣を纒ひ美しい詞を使ひ、面白く、貴く、長閑に、優しく、迷信的空想的詩歌的音樂的美術的女性的夢幻的享樂的虚榮的に、イソツプ物語の蟋蟀のやうに、いつまでも草は常緑で世は溫暖であると信じて、戀物語や節會の噂で日を送

つてゐる其の一方には、粗い衣を纏ひ荒い詞を使ひ、面白くなく、陋しく、行詰つた、凄じい、これを繪畫にして象徵的に現はせば餓鬼の草子の中の生物のやうな、或は小說雜話にして空想的に現はせば、酒呑童子や、鬼同丸のやうなものもあつたのであらう。醍醐天皇の御代と云へば、古今集だの、延喜式だのゝ出來た時であるが、其御代の昌泰二年には、都で放火殺人が多くて、四衞府兵をして夜を警めしめられ、其三年には上野に群盜が起り、延喜元年には坂東諸國に盜起り、其三年には前安藝守伴忠行は盜の爲に殺され、其前後博奕大に行はれて、五年には逮捕をせねばならぬやうになり、其冬十月には盜賊が飛驒守の藤原辰忠を殺し、六年には鈴鹿山に群盜あり、十五年には上野介藤原厚載も盜に殺され、十七年には朝に菊宴が開かれたが、世には群盜が充ち、十九年には前の武藏の權介源任が府舍を燒き官物を掠め、現任の武藏守高向利春を襲つたりなんどするといふ有樣であつた。幸に天皇樣の御聖德の深厚なのによつて、大なることには至らなかつたが、盜といふのは皆一揆や騷擾の氣味合の徒で、たゞの物取りといふのとは少し違ふのである。此樣な不祥のある度に威を張るのは僧侶巫覡で、扶桑略記だの、日本紀略だの、本朝世紀などを見れば、厭はしいほど現世利益を祈る祈禱が繰返されて、何程厭はしい宗教狀態であるかと思はせられる。既に將門の亂が起つた時でも淨藏が大威德法で將門を詛ひ、明達が四天王法で將門を調伏し、其他神社佛寺で祈立て責立てゝ、とう〳〵祈り伏せたといふ事になつてゐる。かういふ時代であるから、下では石淸水八幡の本宮の徒と山科の八幡新宮の徒と大喧嘩をしたり、東西兩京で陰陽の具までを刻繪した男女の神像を供養禮拜して、岐神、(さいの神、今の道陸神ならん)と云つて騷いだり、下らない事をしてゐる。先祖ぼめ、故鄕ぼめの心理で、今までの多くの人は平安朝文明は大層立派なものゝやうに言做してゐる者も多いことであるが、少し料簡のある者から睨んだら、平安朝は、少くも政權を朝廷より幕府へ、公卿より武士へ推移せしむるに適した準備を氣長に根深く叮嚀に順序的に執行して居たのである。かういふ時代に將門も純友も生長したのである。純友が群衆追捕に從事して、そして盜魁となつたのも、盜賊になつた方が京官になるよりも有理であり眞面目な生活であると思つたところより、亂暴をはじめた後に從五位下を以て招安されたにもかゝはらず

猶伊豫讃岐周防土佐筑前と南海山陽西海を狂ひまはつたのかも知れない。純友は部下の藤原恒利といふ頼み切つた奴に裏斬りをされて大敗した後ですら餘勇を鼓して一擧して太宰府を陥れた。苟も太宰府と云へば西海の重鎭であるが、それですら實力はそんなものであつたのだらう、當時倔強の男で天下の實勢を洞察するの明のあつた者は、君臣の大義、順逆の至理を氣にせぬ限り、何ぞ首を俯して生白い公卿の下に付かうやと、勝手理屈で暴れさうな情態もあつたのである。

　將門は然しながら最初から亂賊叛臣の事を敢てせんとしたのではない。身は帝系を出でゝ猶未だ遠からざるものであつた。おもふに皇を尊び公に殉ずる心の強い邦人の常情として、初は尋常におとなしく日を送つて居たのだらう。將門の事を考ふるに當つて、先づ一寸其の家系と親族等を調べて見ると、ざつと是の如くなのである。桓武天皇樣の御子に葛原親王と申す一品式部卿の宮がおはした。其の宮の御子に無位の高見王がおはす。高見王の御子高望王が平の姓を賜はつたので、從五位下、常陸大掾、上總介等に任ぜられたと平氏系圖に見えてゐる。桓武平氏が阪東に根を張り枝を連ねて大勢力を植つるに至つたことは、此の高望王が上總介や常陸大掾になられたことから起るのである。高望王の御子が、國香、良兼、良將、良繇、良廣、良文、良持、良茂と數多くあつた。其中で國香は從五位上、常陸大掾、鎭守府將軍とある。此の國香本名良望は蓋し長子であつた。これは卽ち高望王亡き後は一族の長者として、勢威を有してゐたに相違無い。良兼は陸奥大掾、下總介、從五位上、常陸平氏の祖である。次に良將は鎭守府將軍、從四位下或は從五位下とある。將門は此の良將の子である。次に良繇は上總介、從五位上とある。それから良廣には官位が見えぬが、次に良文從五位上で、村岡五郎と稱した、此の後に日本將軍と號した上總介忠常なども出たので、千葉だの、三浦だの、源平時代に光を放つた家々の祖である。次に良持は下總介、從五位下、長田の祖である。次に良茂は常陸少掾である。

　扨將門は良將の子であるが、長子かといふに然樣では無い。大日本史は系圖に據つたと見えて第三子としてゐるが、第二子としてゐる人もある。長子將持、次子將弘、第三子將門、第四子將平、第五子將文、第六子將武、第七子將爲と

系圖には見えるが、將門の兄將弘は將軍太郎と稱したとある。將持の事は何も分らない。將弘が將軍太郎といひ、將門が相馬小次郎といひ、系圖には見えぬが、千葉系圖には將門の弟に御厨三郎將頼といふがあつて、其次が大葉原四郎といつた事を考へると、將門は次男かとも思はれる。よし三男であつたにしろ、將持といふものは蚤く消えてしまつて、次男の如き實狀に於て生長したに相違無い。イヤそれどころでは無い、太郎將弘が早世したから、將門は實際良將の相續人として生長したのである。將門の母は犬養春枝の女である。此の犬養春枝は蓋し萬葉集に名の見えてゐる犬養淨人の裔であらう。淨人は奈良朝に當つて、下總少目を勤めた人であつて、淨人以來下總の相馬に居たのである。此相馬郡寺田村相馬總代八幡の地方一帶は多分犬養氏の蟠據してゐたところで、將門が相馬小次郎と稱したのは其の因緣に疑無い。寺田は取手驛と守谷との間で、守谷の飛地といふことであり、守谷が將門擁有の地であつたことは人の知るところである。**將門は斯樣いふ大家族の中に生れて來て、澤山の伯父や叔父を有ち、又伯父國香の子には貞盛、繁盛、兼任、伯父良兼の子には公雅、公連、公元、叔父良廣の子には經邦、叔父良文の子には忠輔、宗平、忠頼、叔父良持の子には**致持、叔父良茂の子には良正、此等の澤山の從弟を有した譯である。

此の中で生長した將門は不幸にして父の良將を亡つた、將門が何歲の時であるか不明だが、弟達の多いところを見ると、蓋し十何歲であつたらしい。幼子のみ殘つて、主人の亡くなつた家ほど難儀なものはない。母の里の犬養老人でも丈夫ならば、差詰め世話をやくところだが、それは存亡不明であるが、多分既に物故してゐたらしい年頃である。そこで一族の長として伯父の國香が世話をするか、次の伯父の良兼が將門等の家の事をきりもりしたことは自然の成行であつたらう。後に至つて將門が國香や良兼と仲好くないやうになつた原因は、蓋し此時の國香良兼等の伯父さん風を吹かせ過ぎたことや、將門等の幼少なのに乘じて私をしたことに本づくと想像しても餘り間違ふまい。さて將門が漸く加冠するやうになつてから京上りをして、太政大臣藤原忠平に仕へた。これは將門自分の意に出たか、それとも伯父等の指揮に出たか不明であるが、何にせよ遙々と下總から都へ出て、都の手振りを學び、文武の道を修め、出世の手蔓を得よ

うとしたことは明らかである。勿論將門のみでは無い、此頃の地方の名族の若者等は因緣によつて都の貴族に身を寄せそして世間をも見、要路の人々に技倆骨柄を認めて貰ひ、自然と任官叙位の下地にした事は通例であつたと見える。現に國香の子の常平太貞盛もまた都上りをして、何人の奏薦によつたか、微官ではあるが左馬允となつてゐたのである。今日で云へば田舎の豪家の若者が從弟同士二人、共に大學に遊んで、卒業後東京の有力者間に交際を求め、出世の緖を得ようとしてゐるやうなものである。此點で考へらるゝことは、將門も鎭守府將軍の子であるから、まさかに曾我の兄弟のやうに貧窘しては居るまいが、一方は親無しの、伯父の氣息のかゝつてゐるために世に立つてゐる者であり、一方は一族の長者常陸大掾國香の總領として、常平太とさへ名乘つて、仕送りも豐かに受けてゐたものである貞盛の方が光つて居たらうといふことは、誰にも想像されることである。ところが異しいこともあればあるもので、將門の方で貞盛を惡く思ふとか惡く噂するとかならば、媢嫉猜忌の念、俗にいふやつかみで自然に然樣いふ事も有りさうに思へるが、別に將門が貞盛を何樣の斯樣のしたといふことは無くて、却つて貞盛の方で將門を惡く言つたことの有るといふ事實である。

勿論事實といつたところで、古事談に出て居るに過ぎない。古事談は兼顯の撰で、餘り確實のものとも爲しかねるが大日本史も貞盛傳に之を引いてゐる。それは貞盛が將門の在京中に、貞盛が嘗て式部卿敦實親王のところに詣つた。丁度其時に將門もまた親王の御許へ伺候して歸るところで、從弟同士はハタと御門で行逢ふた。彼方がジロリと見れば、此方もギロリと見て過ぎたのであらう。貞盛は親王樣に御目にかゝつた後、殘念なことには今日郎等無くして將門を殺し得ざりし、郎等ありせば今日殺してまし、彼奴は天下に大事を引出すべき者なり、と申したといふ事である。これは甚だ不思議なことで、貞盛が呂公や許子の術を得て居たか何樣かは知らないが、人相見でも無くて思ひきつたことを貴人の前で言つたものである。此時は將門純友叡山で相談した後であるとでも云は無ければ理屈の立たぬことで、將門はまだ國へも歸らず刀も拔かず、謀反どころか喧嘩さへ始めぬ時である。それを突然に、郎等だにあらば打殺してましも

のを、と言ふのは餘りに従弟同士として貴人の前に口外するには太甚しいことである。親王様に貞盛がこれだけの事を申したとすれば、もう此時貞盛と將門とは心中に双を研ぎあつてゐたとしなければならぬ。未だ父の國香が殺された譯でも無し、將門が何を企てゝ居たにせよ、貞盛が牒者をして知つてゐるといふ譯も無いのに、たゞ惡い者でござる、御近づけなさらぬが宜しい、とでも云ふのならば、後世の由井正雪熊澤蕃山出會の談のやうな事で、まだしも聞えてゐるが打殺さぬが口惜しいとまで申したとは餘り奇怪である。然すれば貞盛の家と將門とが、もう此時は火をすつた中であつて、貞盛が其事を知つてゐたゝめに、行く〳〵は無事で濟むまいとの豫想から、そんな事を云つたものだと想像して始めて解釋のつく事である。こゝへ眼を着けて見ると、古事談の記事が事實であつたとすると、國香が將門に殺されぬ前に、國香の悴は將門を殺さうとしてゐたといふ事を認め、そして殺さぬを殘念と思つたほどの葛藤が既に存在して居ると睨まねばならぬことになるのである。戯曲的の筋は夙く此の邊から始まつてゐるのである。

將門は京に居て瀧口の衞士になつたか知らぬが、系圖に瀧口の小次郎とも記してあるに據れば、其のくらゐなものにはなつたのかも知れぬ。が、其の詮議は擱いて、將門と貞盛の家とは、中睦じく無くなつたには相違無い。それは今昔物語に見えてゐる如く、將門の父の良將の遺産を將門が成長しても國香等が返さなかつたことで、此の様な事情は古も今もやゝもすれば起り易いことで、曾我の殺傷も此から起つてゐる。今昔物語が信じ難い書であることは無論だが、此の事實は有勝の事で、大日本史も將門始末も皆採つてゐる。將門在京中に既に此事があつて、貞盛と將門とは心中互におもしろく無く思つてゐるところから、貞盛の言も出たとすれば合點が出來るのである。

今一つは將門と源護一族との間の事である。これは其の原因が不明ではあるが姻森のもつれであるだけは明白である。護は常陸の前の大掾で、そのまゝ常陸の東石田に居たのである。東石田は筑波の西に當るところで、國香もこれに居たのである。護は世系が明らかでないが、其の子の扶、隆、繁と共に皆一字名であるところを見ると、嵯峨源氏でゝもあるらしく思はれる。何にせよ護も名家であつて、護の女を將門の伯父上總介良兼は妻にしてゐる。國香も亦其一人を娶

にして貞盛の妻にしてゐる。常陸六郎良正もまた其一人を妻にしてゐる。此の良正は系圖では良茂の子になつてゐるがおそらくは誤りで、國香の同胞で一番季なのであらう。

將門と護とは別に相敵視するに至る譯は無い筈であるが、此の護の一族と將門と私鬪を起したのが最初で、將門の伯叔父の多いにかゝはらず、護の家と緣組をしてゐる國香の家、良兼の家、良正の家が特に將門を惡んで之を攻擊してゐるところを見ると、何でも源護の家を中心とし、之に關聯して紛糾した事情が有つての大火事と考へられる。將門始末では、將門が護の女を得て妻としようとしたが、護が與へ無かつたので、將門が怒つたのが原因だと云つて居る。して見れば將門は戀の叶はぬ焦燥から、車を横に推出したことになる。さすれば良正か貞盛か二人の中の一人が、將門の望んだ女を得て妻としてしまつた爲に起つた事のやうに思はれるが、如何に將門が亂暴者でも、人の妻になつてしまつた者を何としようといふこともあるまい。又それが遺恨の本になるといふことも成程野暮な人の間には有り得るにしても、皆が一致して手甚く將門を包圍攻擊するに至るのは、何だか逆なやうである。思ふ女をば奪はれ、そして其女の緣に連る一族總體から、此の失戀漢、死んでしまへと、攻立てられるといふのは、何と無く奇異な事態に思へる。又たとへ將門の方から手出しをしたにせよ、戀の叶はぬ忌々しさから、其女の家をはじめ、其姉妹の夫たちの家まで、撫斬りにしようといふのも、何と無く奇異に過ぎ酷薄に過ぎる。何にせよ決してたゞ一條の事ではあるまい、可なり錯綜した事情が無ければならぬ。貞盛が將門を殺したがつた事も、戀の叶つた方が戀の叶はぬ者を生かして置いては寢覺が惡いために打殺すといふのでは、何樣も情理が桂馬筋に働らいて居るやうである。

故蹟考ではかう考へてゐる。將門が迎へ得た妻は、源護の子の扶、隆、繁の中で、懸想して之を得んとしたものであつた。然るに其の婦人は源家へ嫁すことをせずして相馬小次郎將門の妻となつた。そこで娟嫉の念禁じ難く、兄弟姉妹緣に連なる良兼貞盛良正等の力を併せて將門を殺さうとした。一面國香良正等は之を好機とし、將門を滅して相馬の夥しい田產を押收せんとしたのである。と云つて居る。成程源家の子のために大勢が骨折つて得て呉れようとした美人を

得損じて、面目を失はせられ、しかも日比から彼が居らなくばと願つて居た將門に其の婦人を得られたとしては、要擊して恨を散じ利を得んとするといふことも出て來さうなことである。然しこれも確證があつてゞは無い想像らしい。たゞ其中將門を滅すれば田產押收の利のあるといふことは、據るところの無い想像では無い。

要するに委曲の事は徵知することが出來ない。耳目の及ぶところ之を知るに足らないから、安倍晴明なら識神を使つて悟るのであるが、今何とも明解することは不能だ。天慶年間、即ち將門死してから何程の間も無い頃に出來たといふ將門記の完本が有つたら譯も分かるのであらうが、今存するものは殘闕であつて生憎發端のところが無いのだから如何とも致方は無い。然し試みに考へて見ると、將門が源家の女を得んとしたことから事が起つたのでは無いらしい、即ち將門始末の說は受取り兼ねるのであつて、むしろ將門の得た妻の事から私鬪は起つたのらしい。何故といへば將門記の中の、將門が勝を得て良兼を圍んだところの條の文に、「斯の如く將門思惟す、凡そ常夜の敵にあらずといへども（良兼は）脉を尋ぬるに疎からず、氏を建つる骨肉なり、云はゆる夫婦は親しけれども而も瓦に等しく、親戚は疎くしても而も葦に喩ふ、若し終に（伯父を）殺害を致さば、物の譏り遠近に在らんか」とあつて、取籠めた伯父良兼を助けて逃れしめてやるところがある。その文氣を考へると、妻の故の事を以て伯父を殺すに至るは愚なことであるといふのであるから、將門が妻となし得なかつた者から事が起つたのでは無くて、將門が妻となし得たものがあつてそれから伯父と弓箭をとつて相見ゆるやうにもなつたのであるらしい。それから又同紀に據ると、將門を告訴したものは源護である。記に「然る間前の大掾源護の告狀に依りて、件の護並びに犯人平將門および眞樹等召進すべきの由官符、去る承平五年十二月二十九日符、同六年九月七日到來とあるから、原告となつた者は護である。眞樹は佗田眞樹で、國香の屬僚中の錚々たるものである。これに依つて考へれば、良正良兼は記の本文記事の通り、源家が敗戰したによつて婦の緣に引かれて戰を開いたのだが、最初はたゞ源護一家と將門と間に事は起つたのである。して見れば將門が妻としたものに關聯して源護及び其子等と將門とは鬪ひはじめたのである。

戯曲はこゝに何程でも書き出される。かつて同じ千葉縣下に起つた事實で斯ういふのがあつた。將門ほど强い男でも何でも無いが、可なりの田邑を有してゐる片孤があつた。其の兒の未だ生長せぬ間、親戚の或る者は其の田邑を自由にして居たが、其の兒の成人したに至つて當然之を返附しなければならなくなつた。ところで其の親戚は自分の娘を其の男に娶らせて、自己は親として其の家に臨む可く計畫した。娘は醜くも無く愚でもなかつたが、男は自己が拘束されるやうになることを厭ふ餘りに其の娘を强く嫌つて、其の婚儀を勸めた一族達と烈しく衝突してしまつた。悲劇はそれから生じて男は放蕩者となり、家は亂脈となり、紛爭は轉輾增大して、終に可なりの舊家が村にも落着いて居られぬやうになつた。これを知つてゐる自分の眼からは、一齣の曲が觀えてならない。眞に夢の如き想像ではあるが、國香と護とは同國の大椽であつて、二重にも三重にもの緣合となつて居り、居處も同じ地で、極めて親しかつたに違ひ無い。若し將門が護の女を欲したならば、國香は出來かぬる緣をも纏めやうとしたことであらう。其の方が將門を我が意の下に置くに便宜ではないか。して見れば將門始末の記するが如きことは先づ起りさうもない。もし反對に、護の女を國香が口をきいて將門に娶らせようとして、そして將門が强く之を拒否した場合には、國香は源家に對しても、自己の企に於ても償ひ難き失敗をした譯になつて、貞盛や良兼や良正と共に非常な嫌な思ひをしたことであらうし、護や其子等は不面目を得て憤恨したであらう。將門の妻は如何なる人の女であつたか知らぬが、千葉系圖や、相馬系圖を見れば、將門の子も、良兌、將國、景遠、千世丸等があり、又十二人の實子があつたなどゝ云ふ事も見えるから、桔梗の前の物語こそは、藥品の桔梗の上品が相馬から出たに本づく戯曲家の作意ではあらうが、妻妾共に存したことは言ふまでも無い。で、將門が源家の女を蔑視して顧みず、他より妻を迎へたとすると、面目を重んずる此時代の事として、國香も護の子等も、殊に源家の者は默つて居られないことになる。そこで談判論爭の末は双方後へ退らぬことになり、武士の意氣地上、護の子の扶、隆、繁の三人は將門を敵に取つて鬪ふに至つたらうと想像しても非常な無理はあるまい。

鬪は何にせよ將門が京より歸つて後數年にして發したので、其の場所は下總の結城郡と常陸の眞壁郡の接壤地方であ

り、時は承平五年の二月である。どちらから戰をしかけたのだか明記はないが、源の扶、隆等が住地で起つたのでも無く、將門の田園所在地から起つたのでも無い。將門の方から攻掛けたやうに、歴史が書いてゐるのは確實で無い。將門と源氏等と、どちらが其の本領まで戰場から近いかと云へば、將門の方が近いくらゐである。相馬から出たなら遠いが本郷や鎌庭からなら近いところから考へると、將門の結城あたりへ行かうとして出た途中を要撃したものらしい。左も無くては釣合が取れない。若し將門が攻めて行つたのを禦いだものとしては子飼川を渉つたり鬼怒川を渡つたりして居て、地理上合點が行かぬ。將門記に其の鬪の時の記事中見ゆる地名は、野本、大串、取木等で、皆常陸の下妻附近であるが、野本は下總の野爪、大串は眞壁の大越、取木は取不原の誤か、或は本木村といふのである。攻防、いづれがいづれか不明だが、記には「爰に將門罷まんと欲すれとも能はず、進まんと擬するに由無し、然して身を勵まして勸據し、刄を交へて合戰す」とあるに照らすと、何樣も扶等が陣を張つて通路を截つて戰を挑んだのである。此の鬪は將門の勝利に歸し、扶等三人は打死した。將門は勝に乘じて猛烈に敵地を燒き立て、石田に及んだ。國香は既に老衰して居た事だらう、何故といへば、國香の弟の弟の第二子若くは第三子の將門が既に三十三歲なのであるから、戰つて殺されたのか、燒立てられて自殺したのか、後の書の記載は區々である。双方の是非曲直は原因すら不明であるから今評論は出來ぬが、何にせよ源護の方でも鬱懐已む能はずして是に至つたのであらうし、將門の方でも刀を拔いて見れば修羅心熾盛になつて、遣りつけるだけは遣りつけたのだらう。然しこゝに注意しなければならぬのは、是はたゞ私鬪であつて、謀反をして國の治者たる大掾を殺したのではない事である。

貞盛は國香の子として京に在つて此事を聞いて暇を請うて歸鄉した。記に此場合の貞盛の心を書いて、「貞盛倩ゝ案內を檢するに、およそ將門は本意の敵にあらず、これ源氏の緣坐也云々。孀母は堂に在り、子にあらずば誰か養はん、田地は數あり、我にあらずば、誰か領せん、將門に睦びて云々乃ち對面せんと擬す」とある。國香死亡記事の本文は分らないが、此の文氣を觀ると、將門が貞盛の父を心底から殺さうとしたので無いことは、貞盛が自記してゐるので、源氏

の緣坐で斯様の事も出來たのであるから、無暗に將門を惡むべくも無い、一族の事であるから寧ろ和睦しよう、といふのである。前に云つた通り將門は自分を攻めに來た良兼を取圍んだ時もわざと逃がした人である。國香を强ひて殺さう譯は無い、貞盛が此の言を考へると、全く源氏と戰つたので、餘波が國香に及んだのであらう。伯父殺しを心掛けて將門が攻寄せたものならば、貞盛に斯樣いふ詞の出せる譯も無い。但し國香としては田邑の事につきて將門に對し心弱いこともあつた歟、さらずも居館を燒亡されて撃退することも得せぬ耻辱に堪へかねて死んだのであらうか。こゝにも戯曲的光景がいろ／＼に描き出さるゝ餘地がある。まして國香の郎等佗田眞樹は弱い者では無い、後に至つて戰死して、居る程の者であるから、將門の兵が競ひかゝつて國香を攻めたのならば、何等かの事蹟を生ずべき譯である。

良正は高望王の庶子で、妻は護の女であつた。護は老いて三子を盡く失つたのだから悲嘆に暮れたことは推測されるそこで父の歎、弟の恨、良正の妻は夫に對して報復の一ト合戰をすゝめたのも無理は無い。云はれて見れば後へは退けぬので、良正は軍兵を動かして水守から出立した。水守は筑波山の南の北條の西である。兵は進んで下總堺の小貝川の川曲に來た。川曲は「かはわた」と訓んだのであらう、今の川又村の地で當時は川の東岸であつたらしい。一水を渡れば豐田郡で將門領である。貞盛が此時加擔して居なかつたのであるのは注意すべきだ。將門の方でも其義ならば伯父とは云へ一ト鹽つけてやれと云ふので出動した。時は其年の十月廿一日であつた。將門の軍は勝を得て、良正は散々に打なされて退いた。此も私鬪である。將門はまだ謀反はして居らぬ、勝つて本鄕へ歸つた。

負け碁は兎角あとをひく也で、良正は獨力の及ぶ可からざるを以て下總介良兼（或はいふ上總介）に助勢を賴んで將門に憂き目を見せようとした。良兼は護の緣につながつて居る者の中の長者であつた。良兼の妻も内から牝鷄のすゝめを試みた。雌鷄は終に閧の聲をつくつた。同六年の六月二十六日十二分に準備したる良兼は上總下總の兵を發して、上總の地で下總へ斗入してゐる武射郡の徑路から、下總の香取郡の神崎へ押出した。神崎は滑川より下、佐原より上の利根川沿岸の地だ。それより大河を渡つて常陸の信太郡の江前の津へかゝつた。江前はえのさきで、今の江戸崎である。

それから翌日良正がゐる筑波の南の水守へ到着したといふ事だ。私鬪は段々と大きくなつた。關を打破つて通りこそせされ、間道々々を通つて、苟も何の介といふ者が、官司の禁遏を省みず武力で爭はうといふのである。良正は喜んで迎へた。貞盛も參會した。良兼は貞盛に對つて、常平太何事ぞ我等と與にせざるや、財物を掠められ、家倉を燒かれ、親類を害せられて、穩便を旨とするは何ぞや、早々合力して將門を討ち候へ、と叔父樣顏の道理らしく說いた。言はれて見れば其の通りであるから、貞盛も吾が女房の兄弟の仇、言はず語らずの父の讐であるから、心得た、と言切つた。姉妹三人の夫たる叔父甥三人は、良兼を大將にして下野を指して出發した。下野から南に下つて小次郎めを脅迫しようといふのだ。將門はこれを聞いて、御座んなれ二本棒ども、とでも思つたらう。財布の大きいものが、博奕はきつと勝つと定まつては居ないのだ。何程の事かあらん、一ト當あてゝてやれと、此方からも下野境まで兵を出したが、如何さま敵は大軍で、地も動き草も靡くばかりの勢堂々と攻めて來た。良兼の軍は馬も肥え人も勇み、鎧の毛もあざやかに、旗指物もいさぎよく、弓矢、刀薙刀、いづれも美々しく、搔楯ひしくと垣の如く築き立てゝ、勢ひ猛に壯んに見えた。將門の軍は二度の戰に甲冑も損れ、兵具も十二分ならず、人數も薄く寒げに見えた。譬へば敵は毛羽艷やかに鷄冠紅に聳えたる鷄の如く、此方は見苦しき羽拔鳥の肩そぼろに胸露はに貧しげなるが如くであつたが、戰つて見ると羽ふくよかなる地鷄は生命知らずの軍鷄の敵では無かつた。將門の手下の勇士は忽ちに風の木の葉と敵を打拂つた。良兼の勢は先を爭つて逃げる、將門は鞭を揚げ名を呼はつて勢に乘つて吶喊し驅け崩した。敵はきたなくも下野の府に閉塞されてしまつた。こゝで將門が毒惡に攻立てたら或は良兼等を酷いめにあはせ得たかも知らぬが、將門の性質の美の窺知らるゝところはこゝにあつて、妻の故を以て伯父を殺したと云はるゝを欲せぬために一方をゆるして其の逃ぐるに任せた。良兼等は危い生命を助かつて、辛くも遁れ去つてしまつた。そこで將門は明らかな勝利を得て、府の日記へ、下總介が無道に押寄せて合戰をしかけた事と、これを追退けてしまつたことをば明白に記錄して置いて、悠然と自領へ引取つた。火事は大分燃廣がつた、私鬪は餘程までの騷ぎになつたが、しかもまだ私鬪である、謀反をしたのでは無かつた。これ

だけの大事になつたのであるから、四方隣國も皆手出しこそせざれ、目を側だてゝ注意したに相違ない。將門が國廳の記錄に事實をとゞめ、四方に實際を知らしめたのは、爲し得て男らしく立派に智慮もあり威勢もあることであつた。

源護の方は事を起した最初より一度も好い目を見無かつた。痴者が燒け穴をいぢるやうに、猿が疵口を氣にするやうに、段々と惡いところを大きくして、散々な事になつたが、いやに賢く狡猾なものは、自分の生命を抛出して闘ふといふことをせずに、いつも他の勢力や威力や道理らしいことやを味方にして敵を窘めることに長けたものだ。何樣いふ告訴狀を上つたか知らぬが、多分自分が前の常陸大椽であつたことゝ、現常陸大椽であつた國香の死したことを利用して將門が暴威に募り、亂逆を敢てしたことを申立てたに相違無く、そしてそれから後世の史に、將門常陸大椽國香を殺すと書かるゝに至らしめたのであらう。去年十二月廿九日の符が、今年九月になつて、左近衛番長の正六位上英保(アホ)純行、英保氏立、宇自加(ウヂカ)支與等によつて齎らされ、下毛下總常陸等の諸國に朝命が示され、原告源護、被告將門、および國香の麾下の佗田眞樹を召寄せらるゝ事になつた。そこで將門は其年十月十七日、急に上京して公庭に立つた。一部始終を申立てた。阪東訛りの雜つた聲音で、三戰連勝の勢に乘じ、がん〳〵と遣付たことであらう、もとより事實を隱蔽して白粉を傅けた談をするが如きことは敢てし無かつたらう。箭が來たから箭を酬ひた、刀が加へられたから刀を加へた、弓箭取る身の是非に及ばず合戰を致して幸に斬り勝ち申したでござる、と言つたに過ぎまい。勿論私に兵仗を動かした責罰譴誨は受けたに相違あるまいが、事情が分明して見れば、重罪に問ふには足ら無いことが認められたのに、かてて加へて皇室御慶事があつたので、何等罪せらるゝに至らず、承平七年四月七日、一件落着して恩詔を拜した。檢非違使廳の推問に遇うて、そして將門の男らしいことや、勇威を振つたことは、却つて都の評判となつて同情を得たことゝ見える。然し干戈を動かしたことは深く公より譴責されたに疑無い。で同年五月十一日に京を辭して下總に歸つた。

とは記に載つてゐるところだが、これは疑はしい。こゝに事實の前後錯誤と年月の間違があるらしい。將門は幾度も符を以て召喚されたが、最初一度は上洛し、後は上洛せずに、英保純行に委曲を告げたのである、將門はそれで宜いが、

良兼等は其倦指を啣へて終ふ譯には、これも阪東武者の腹の蟲が承知しない。甥の小伜つ子に鹽をつけられて、國香無き後は一族の長者たる良兼が屈してしまふことは出來ない。護も貞盛も女達も瞋恚の火を燃さない譯は無い。將門が都から歸つて來て流石に謹愼して居る狀を見るに及んで、怨を晴らし恥辱を雪ぐは此時と、良兼等は亦復押寄せた。其年八月六日に下總境の例の小貝川の渡に良兼の軍は來た。今度は良兼もをかしな智慧を出して、將門の父良將祖父高望王の像を陣頭に持出して、さあ箭が放せるなら放して見よ、鋒先が向けらるゝなら向けて見よと、取つて蒐つた。籠城でもした末に百計盡き力乏しくなつてならばいさ知らず、隨分いやな事をしたものだが、如何に將門勇猛なりとも此には閉口した。親の位牌で頭こつゝり、といふ演劇には、大概な暴れ者も恐れ入る格で、根が無茶苦茶な男では無い將門は神妙におとなしくして居た。おとなしくした方が何程腹の中は強いか知れないのだが、差當つて手が出せぬのを見ると、良兼の方は勝誇つた。豐田郡の栗栖院、常羽（いくはの）御厩や將門領地の民家などを燒掃つて、其翌日さつと引揚げた。

芝居で云へば性根場（しやうねば）といふところになつた。將門は一ト鹽つけられて怒氣胸に充ち塞がつたが、如何とも爲ん方は無かつた。で、其月十七日になつて兵を集めて、大方郷堀越の渡に陣を構へ、敵を禦がうとした。大方郷は豐田郡大房村の地で、堀越は今水路が變つて渡頭では無いが堀籠村といふところである。併し將門は前度とは異つて、手痛くは働か無かつた。記には、脚氣を病んで居て、毎事朦々としてゐたといふが、それぱかりが原因か、或は郡での訓諭に恐懼して、假りにも尊族に對して私に兵具を動かすことを惡いと思つたしほらしい勇士の一面の優美の感情から、叶と忍耐したのかも知れない。弱くない者には却つて此樣いふ調子はあるものである。で、はかゞ〳〵しい抵抗も何等敢てしなかつたから、良兼の軍は思ふが儘に亂暴した。前の恨を霽らすは此時と、郡中を攻掠し焚燒して、隨分甚い損害を與へた。

將門は猨島（サシマ）郡の葦津江、今の蘆谷といふところに蟄伏したが、猶危險が身に逼るので、妻子を船に乘せて廣河の江に泛べ、おのれは要害のよい陸閑といふところに籠つた。廣河の江といふのは飯沼の事で、飯沼は今は甚しく小さくなつてゐるが、それは德川氏の時になつて、伊澤彌惣兵衞爲永といふものが、享保年間に飯沼の水が利根川より高いこと一丈

九尺、鬼怒川より高いことと横根口で六尺九寸、内守谷川辰口で一丈といふことを知つて、大工事を起して、水を落し、數千町歩の新田を造つたからである。陸閉といふ地は不明だが、蓋し降間の誤寫で、後の岡田郡降間木村の地だらうといふことである。降間木もと降間木沼といふ沼があつたところである。さあ物語は一大關節にさしかゝつた。將門が斯様におとなしくして居て、むしろ敵を避け身を屈して居るやうになつたところで、良兼方の一分は立つたのだから、其儘に良兼方が凱歌を奏して退いて終つたらば、或は和解の助言なども他から入つて、宜い程のところに双方折合ふといふことも成立つたか知れないのである。ところが轉石の山より下るや其の勢必ず加はる道理で、終に良兼將門は兩立す可からざる運命に到着した。それは將門が安穩を得させようとして跡を埋め身を隱させた其の愛妻を敵が發見したことであつた。どうも良兼方の憎惡は此の妻にかゝつて居たらしい。それ占めたといふのであつたらう、忽ちに手對ふものを討殺し、七八艘の船に積載した財貨三千餘端を掠奪し、かよわい妻子を無慚にも斬殺してしまつたのが、同月十九日の事であつた。元來火藥が無かつた譯では無いから、如何に一旦は神妙にしてゐても、此處に至つて爆發せずには居ない。後の世の頼朝が伊豆に潜んで居た時も、たゞおとなしく世を經つたかも知れないが、伊東入道に意中の女は引離され兒は松川に投入れらるゝに及んで、ぶる／＼と其の巨きい頭を振つて牙を咬んで怒り、せめては伊豆一國の主になつて此恨を晴らさうと奮ひ立つたとある。人間以上に心を置けば、恩愛に惹かれて動轉するのは弱くも淺くも甲斐無くもあるが、人間としては恩愛の情の已み難いのは無理も無いことである。如何に相馬小次郎が勇士でも心臓が筑波御影で出來てゐる譯でもあるまいから、落さうと思つた妻子を殺されては、涙をこぼして口惜がり、拳を握りつめて怒つたことであらう。これはまた怒れ出さずには居られない譯だ。しかしまだ私闘である、私闘の心が劇烈になつて來たのみである、謀反をしようとは思つて居ないのである。

記の此處の文が妙に拗れて居るので、清宮秀堅は、將門の妻は殺されたのでは無くて上總に拘はれたので、九月十日になつて弟の謀によつて逃歸つたといふ事に讀んでゐる。然し文に「妻子同共討取」とあるから、何様も妻子は殺され

たらしく、逃還つたのは一緒に居た妾であるらしい。が、「爰將門妻去夫留、忿怨不少」「件妻背同氣之中、逃歸於夫家」とあるところを見ると、妻が拘はれたやうでもある。「妾恒存貞婦之心」「妾之舍弟等成謀」とあるところを見ると、妾のやうでもある。妻妾二字形相近いから、何共紛らはしいが「妻子同共討取」の六字があるので、妻子は殺されたものと讀んで居る人もある。どちらにしても強くは言張り難いが、「然而將門尙與伯父爲宿世之讐」といふ句によつて、何にせよ此事が深い怨恨になつた事と見て差支は無い。しばらく妻子は殺されて、拘はれた妾は逃歸つた事と見て置く。

此事あつてより將門は遺恨已み難くなつたのであらう、今までは何時も敵に寄せられてから戰つたのであるが、今度は我から軍を率ゐて、良兼が常陸の眞壁郡の服織即ち今の筑波山の羽鳥に居たのを攻め立つた。良兼は筑波山に據つたから羽鳥を燒拂ひ、戰書を贈つて是非の一戰を遂げようとしたが、良兼は陣を堅くして戰は無かつた。で將門は復讐的に散々敵地を荒して歸つた。斯様なれば互に怨恨は重なるのみであるが、良兼の方は何様しても官職を帶びて居るので官符は下つて、將門を追捕すべきことになつた。良兼、護、今は父の後を襲ふた常陸大掾貞盛、良兼の子の公雅、公連それから秦淸文、此等が皆職を帶びて、武藏、安房、上總、下總、常陸、下野諸國の武士を驅催して將門を取つて押へようとする、將門は將門で後へは引け無くなつたから勢威を張り味方を募つて對抗する。諸國の介や守や椽やは、騷亂を鎭める爲に戮力せねばならぬのであるが、元來が私鬪で、其の情實を考へれば、強ち將門を片手落に對治すべき理があるやうにも思へぬから、官符があつても誰も好んで矢の飛び劍の舞ふ中へ出て來て危い目に逢はうとはしない。將門は一人で官職といへば別に大したものを有してゐるのでも無い、たゞ伊勢太神宮の御屯倉を預かつて相馬御厨(みくりや)の司であるに過ぎぬのであるに、父の餘威を假るとは言へ、多勢の敵に對抗して居られるといふものは、勇悍である故のみでは無い、蓋し人の同情を得て居たからであつたらう。然無くば四方から壓逼せられずには濟まぬ譯である。

良兼は何様かして意を得ようとしても、尋常の勝負では勝を取ることが難かつた。そこで便宜を伺ひ、巧計を以て事を濟さうと考へた。怠り無く偵察してゐると、丁度將門の雜人に支部(はせつかべ)子春丸といふものがあつて、常陸の石田の民家に

戀中の女をもつて居るので、時々其許へ通ふことを聞出した。そこで子春丸をつかまへて、絹を與へたり賞與を約束したりして、將門の營の勝手を案内させることにした。將門は此頃石井に居た。石井は「いはゐ」と讀むので、今の岩井が即ちそれだ。子春丸は戀と慾とに心を取られ、良兼の意に從つて、主人の營所の勝手を悉く良兼の士に教へた。良兼はほくそ笑んで、手腕のある者八十餘騎を擇んで、ひそ〳〵と不意討をかける支度をさせた。十二月の十四日の夕に良兼の手の者は發して、首尾よく敵地に突入し、風の如くに進んで岩井の營に斫入つた。將門の士は十人にも足らなかつたが、敵が襲ふのを注進した者があつて、急に起つて防ぎ戰つた。將門も奮鬪した。良兼の上兵多治良利は一擧に敵を屠らんと努力したが、運拙く射殺されたので、寄手は却つて散々になつて、命を落す者四十餘人、可なり手痛き戰はしたが、敵地に踏込むほどの強い武者共が隨分巧みに、うま〳〵近づいたにもかゝはらず、此の突騎襲撃も成功しなかつた。双方が精鋭驍勇死物狂ひを極め盡した活動寫眞的の此の華々しい騎馬戰も、將門方の一騎士が、結城寺の前で敵が不意討に來たなと悟つて、良兼方の騎士の後から尾行して居て、鴨橋（今の結城郡新宿村のかま橋）から急に馳拔けて注進したゝめ、危く將門は勝を得てしまつた。良兼は此の失敗に多く勇士を失ひ、氣屈して勢衰へ、怏々として樂まず、其後は何も仕出し得ず、翌ゝ年天慶二年の六月上旬病死して終つた。子春丸は事あらはれて、不意討の日から幾程も無く捕へられて殺されてしまつた。

突騎襲撃の不成功に終つた翌年の春、良兼は手を出すことも出來無くなつてゐるし、貞盛も爲すこと無く居ねばならぬので、かくては果てじと、貞盛は京上りを企てた。都へ行つて將門の横暴を訴へ、天威を藉りてこれを亡ぼさうといふのである。將門はこれを覺つて、貞盛に兎角云ひこしらへさせては面倒であると、急に百餘騎を率ゐて追駈けた。二月の廿九日山道を心がけた貞盛に、信濃の小縣の國分寺の邊で追ひついて戰つた。貞盛も思ひ設けぬでは無かつたから防ぎ箭を射つた。貞盛方の佗田眞樹は戰死し、將門方の文室好立は負傷したが助かつた。貞盛は辛くも逃れて、遂に京に到り、將門暴威を振ふの始終を申立てた。此歳五月改元、天慶元年となつて、其の六月旬、朝廷より將門を召すの符

を得て常陸に歸り、常陸介藤原惟幾の手から將門に渡した。將門は符を得ても命を奉じ無かつた。惟幾は貞盛の叔母婿であつた。

貞盛が京上りをしたりなどした翌天慶二年の事である。武藏の國にも紛擾が生じた。これも當時の地方に於て綱紀の漸く弛んだことを證據立てるものであるが、それは武藏權守興世王と、武藏介經基と、足立郡司判官代芝武とが葛藤を結んで解けぬことであつた。武芝は武藏國造の後で、足立崎玉二郡は國中で早く開けたところであり、それから漸く人烟多くなつて、奥羽への官道の多摩郡中の今の府中のあるところに廳が出來たのであるが、武芝は舊家であつて、累代の恩威を積んでゐるから當時中々勢力のあつたものであらう。そこへ新に權守になつた興世王と新に介になつた經基とが來た。經基は清和源氏の祖で六孫王其人である。興世王とは如何なる人であるか、古より誰も餘り言はぬが、既に王といはれて居り、又經基との地位の關係から考へて見ても、帝系に出でゝ二代目位か三代目位の人であらう。高望王が上總介、六孫王が武藏介、およそかゝる身分の人々がかゝる官に任ぜられたのは當時の習であるから、興世王も蓋し然様いふ人と考へて失當でもあるまい。其頃桓武天皇樣の御子萬多親王の御子の正躬王の御後には、住世、基世、助世、倫世などいふ方々があり、又正躬王御弟には保世、繼世、家世など皆世の字のついた方が澤山あり、又桓武天皇樣の御子仲野親王の御子にも茂世、輔世、季世など世の字のついた方々が澤山に存在であるところから推して考へると、興世王は或は前掲二親王の中のいづれかの後であつたかとも思へるが、系譜で見出さぬ以上は妄測は力が無い。たゞ時代が丁度相應するので或はと思ふのである。日本外史や日本史で見ると、いきなり兇險にして亂を好むとあつて、何となく熊阪長範か何ぞのやうに思へるが、何樣いふものであらうか。扨此の興世王と經基とは、共に我の強い勢の猛しい人であつたと見え、前例では正任未だ到らざるの間は部に入ることを得ざるのであるのに、推して部に入て檢領しようとした。武芝は年來公務に恪勤して上下の譽も好いものであつたが、前例を申して之を拒んだ。ところが郡司の分際で無禮千萬であると、兵力づくで強ひて入部し、國内を凋弊し、人民を損耗せしめんとした。武芝は敵せないから逃げ匿れると、

武芝の私物まで檢封してしまつた。で、武芝は返還を逼ると、却つて干戈の備をして頑として聽かず、暴を以て傲つた是によつて國書生等は不治悔過の一卷を作つて廳前に遺し、興世王等を謗り、國郡に其非道を分明にしたから、武藏一國は大に不穩を呈した。そして經基と興世王とをまた必らずしも睦ましくは無く、樣々なことが隣國下總に聞えた。將門は國の守でも何でも無いが、今は勢おのづから生じて、大親分のやうな調子で世に立つて居た。武藏の騷がしいことを聞くと、武芝は近親では無いが、一つ扱つてやらうといふ好意で郎等を率へて武藏へ赴いた。武芝は喜んで本末を語り、將門と共に府に向つた。興世王と經基とは恰も狹服山に在つたが、興世王だけは既に府に在るに會ひ、將門は興世王と武芝とを和解せしめ、府衙で各々數杯を傾けて居つたが、經基は未た山北に在つた。其中武芝の從兵等は丁度經基の營所を圍んだやうになつた。經基は仲惡くして敵の如き思ひをなしてゐる武芝の從兵等が自分の營所を圍んだのを見て、ただちに逃れ去つてしまつて、將門の言によりて武芝興世王等が和して自分一人を殺さうとするのであると合點した。そこで將門興世王を大に恨んで、京に馳せ上つて、將門興世王謀反の企を致し居る由を太政官に訴へた。六孫王の言であるがら、忽ち信ぜられた。將門が兵を動かして威を奮つてゐることは、既に源護、平良兼、平貞盛等の訴によりて、かねて知れて居るところへ、經基が此言によつて、今までのさま〴〵の事は濃い陰影をなして、新らしい非常事態をクツキリと浮みあらはしめた。

將門の方は和解の事畫餅に屬して、おもしろくも無く石井に歸つたが、三月九日の經基の讒奏は、自分に取つて一方ならぬ運命の轉換を齎らして居るとも知る由無くて居た。都ではかねてより阪東が騷がしかつた上に愈々謀反といふことであるから、容易ならぬ事と公卿諸司の論議に上つたことであらう。同月二十五日、太政大臣忠平から、中宮少進多治眞人助眞に事の實否を尋ぬべき由の教書を寄せ、將門を責めた。將門も謀反とあつては驚いたことであらうが、たとひ驕傲にせよ實際まだ謀反をしたのでは無いから、常陸下總下毛武藏上毛五箇國の解文を取つて、謀反の事の無實の由を、五月二日を以て申出た。餘國は知らず、常陸から此の解文は出しさうも無いことであつた。少くとも常陸では、將

門謀反の由の言を幸ひとして、虚妄にせよ、將門を誣ひて陷れさうなところである。貞盛の姑夫たる藤原惟幾が、將門に好感情を有してゐる筈は無いが、まさか未だ曾て謀反もして居らぬ者に謀反の大罪を與へることは出來兼ねて解文を出したか、それとも短兵急に將門から攻められることを恐れて、責め逼らるゝまゝに已むを得ず出したか、一寸奇異に思はれる。然し五箇國の解文が出て見れば、經基の言はあつても、差當り將門を問ふべきも無く、實際また經基の言は未然を察して中つてゐるとは云へ、興世王武芝等の間の和解を勸めに來た者を、目前の形勢を自分が誤解して、盃中の蛇影に驚き、恨を二人に含んで、誣ひるに謀反を以てしたのではあるから、「虚言を心中に巧みにし」と記にある通りで將門の罪せらる可き理據は無い。又若し實際將門が謀反を敢てしようとして居たにせよ、不軌を圖るほどの者が、打解けて語らつたことも無い興世王や經基の處へわざ〳〵出掛けて、半日片時の間に經基に見破らるべき間抜さをあらはす筈も無いから、此時は未だ叛を圖つたとは云へない。むしろ種々の事情が分つて見れば、東國に於ける將門の勢威を致した其の材幹力量は多とすべきであるから、是の如き才を草萊に埋めて置かないで、下總守になり鎭守府將軍になりして其父の後を襲がせ、朝廷の爲に用を爲させた方が、才に任じ能を擧ぐる所以の道である。それで或は將門を薦むる者もあり、或は將門の爲に功課ある可きの由が廷に議せられたことも有つたか知れない。「諸國の善狀に依り、將門の爲に功果有るべきの由宮中に議せらるゝ」と、記されて居るのも、虚妄で無くて有り得べきことである。備前介藤原子高を殺し播磨介島田惟幹を殺した後にさへ、純友は從五位を授けられんとしてゐる、其は天慶二年の事である。何にせよ善かれ惡かれ將門は經基の訴の後、大なる問題、注意人物の雄として京師の人々に認められたに疑無いから、經基の言は將門の運命に取つては一轉換の機を爲してゐるのである。

良兼は今はもう將門の敵たるに堪へ無くなつて、此年六月上旬病死して居るのであるが、死前には病牀に臥しながら鬚髮を除いて入道したといふから、是も亦一可憐の好老爺だつたらうと思はれる。貞盛は良兼には死なれ、孤影蕭然、たゞ叔母婿の維幾を頼みにして、將門の眼を忍び、常陸の彼方此方に憂き月日を送つて居た。良兼が死んでは、下總一

國は全く將門の旗下になつた。

興世王は經基が去つて後も武藏に居たが、經基の奏によつておのづから上の御覺えは宜しくなくなつたことだらう。別に推問を受けた記事も見えぬが、新に興世王の上に一官人が下つて來た。それは百濟貞連といふもので、目下の者とさへ睦ぶことの出來なかつた興世王だから、どうして目上の者と親しむことが成らう、忽ち衝突してしまつた。ところが貞連は意有つてか無心でか知らぬが、まるで興世王を相手にしないで、膝に坐位をも得せしめぬほどにした。上には上があり、強い者には強いものがぶつかる。興世王もこれには憤然とせざるを得なかつたが、根が負け嫌ひの、恐ろしいところの有る人とて、それなら汝も勝手にしろ、乃公も勝手にするといつた調子なのだらう、官も任地も有つたものでは無い、ぶらりと武藏を出て下總へ遊びに來て將門の許に、居てやるんだぞぐらゐな居候になつた。居候の王だからおもしろい。置候の相馬小次郎は我武者に強いばかりの男では無い、幼少から浮世の鹽はたんと甞めて居る苦勞人だ。田原藤太に尋ねられた時の様子でも分るが、ようございますとも、いつまでゞも遊んでおいでなさい位の挨拶で快く置いた。誰にでも突掛かりたがる興世王も、大親分然たる小次郎の太ツ腹なところは性に合つたと見えて、其儘遊んで居た多分二人で地酒を大酒盃かなんかで飲んで、都出の興世王は、どうも酒だけは西が好い、いくら馬場處の相馬の酒だつて、頭の中でピンピン跳ねるのはあやまる、將門、お前の顏は七ツに見えるぜ、なんのかのと管でも卷いてゐたか何樣か知らないが細くない根性の者同士喧嘩もせずに暮して居た。

大親分も好いが、繩張が廣くなれば出入りも多くなる道理で、人に立てられれば人の苦勞も背負つてやらねばならない。こゝに常陸の國に藤原玄明といふ者があつた。元來が此は是一個の魔君で、餘り性の良い者では無かつた。圖太くて、いらひどくて、人をあやめることを何とも思はないで、公に背くことを心持が好い位に心得て、やゝもすれば上には反抗して強がり、下には弱みに付入つて劫やかし、租税もくすねれば、押借りも爲ようといふ質で、丁度幕末の惡侍といふのだが、度胸だけは吽と坐へたところのある始末にいかぬ奴だつた。善惡無差別の惡平等の見地に立つて居るや

うな男だが、それでも人の物を奪つて吾が妻子に與れてやり、金持の懷中を絞つて手下には潤ひをつけてやるところが感心な位のものだつた。で、こくめいな長官藤原維幾は、玄明が私した官物を辨償せしめんが爲に、度々の移牒を送つたが、斯樣いふ男だから、横道に構へ込んで出頭などはしない。末には維幾も勘忍し兼ねて、官符を發して召捕るよりほか無いとなつて其の手配をした。召捕られては敵はないから急に妻子を連れて、維幾と餘り親しくは無い將門が丁度隣國に居るを幸に下總の豐田郎ち將門の擁庇に逃げ込んだが、行掛けの駄賃にしたのだか、初對面の手土産にしたのだか、常陸の行方郡河内郡の兩郡の不動倉の糒などゝいふ平常は官でも手をつけてはならぬ筈のものを掻浚つて常陸の國ばかりに日は照らぬと極め込んだ。勿論これだけの事をしたのには、維幾との間に一ト通りで無いいきさつが有つたらうが、何にせよ惡辣な奴だ。維幾は怒つて下總の官員にも將門にも移牒して、玄明を捕へて引渡せと申送つた。ところが尋常一樣の吏員の手におへるやうな玄明では無い。いつも逃亡致したといふ返辭のみが維幾の所へは來た。維幾朝臣も後には業を煮やして、下總へ潜かに踏込んで玄明と一ト合戰して取挫いで、叩き斫るか生捕るかしてやらうと息卷いた。維幾も常陸介、子息爲憲もきかぬ氣の若者、官權實力共に有る男だ。斯樣なつては玄明は維幾に敵することは出來無い。そこで眼も光り口も利ける奴だから、將門よりほかに賴む人は無いと、將門の所へ驅込んで、何樣ぞ御助け下さいと、切りに將門を拜み倒した。元來親分氣のある將門が、首を垂れ膝を折つて賴まれて見ると、餘り否ばしくは無いと思ひながらも、仕方が無い、口をきいてやらう、といふことになつた。居候の興世王は面白づくに、親分・縋つて來る者を突出す譯にはいかねえぢや有りませんか位の事を云つたらう。で、玄明は氣が強くなつた。將門は常陸は元から敵にした國ではあり、また維幾は貞盛の縁者ではあり、貞盛だつて今に維幾の衿の蔭か袖の蔭に居るのであるから、うつかり常陸へは行かれない。興世王はじめ皆相談にあづかつたに相違ないが、好うございますは、事と品とによれば刄金と錫とが挨拶を仕合ふばかりです、といふ者が多かつたのだらう、とう〳〵天慶二年十一月廿一日常陸の國へ相馬小次郎郎黨を率ゐて押出した。興世王ばかりではあるまい、平常むだ飯を食つて居る者が、桃太郎のお供の猿や犬のやうな

鎧をして出掛けたに違無い。維幾の方でも知らぬ事は無い、十分に兵を用意した。將門は、件の玄明下總に入つたる以上は下總に住せしめ、踏込んで追捕すること無きやうにありたいと申込んだ。維幾の方にも貞盛なり國香なりの一まきが居たらう。維幾は將門の申込に對して、折角の御申狀ではあるが承引致し申さぬ、とかう仰せらるゝならば公の力刀の上で此方心のまゝに致すまで、と刎付けた。然らば、然らば、を双方で言つて終つたから、論は無い、後は斫合ひだ。揉合ひ押合つた末は、玄明の手引であるので將門の方が利を得た。大日本史や記に、將門發つて三千人を殺すとあるのは大袈裟過ぎるやうだが、敵將維幾を生捕りにし、官の印鎰を奪ひ、財寶を多く奪ひ、營舍を焚き、凱歌を擧げて二十九日に豐田郡の鎌輪、卽ち今の鎌庭に歸つた。勢といふ條、こゝに至つては旣に遣り過ぎた。大親分も宜いけれども、奉行や代官を相手にして、談判をした末、向ふが承知せぬのを、此奴めといふので生捕りにして、役宅を焚き、分捕りをして還つたといふのでは、餘り强過ぎる。

玄明の事の起らぬ前、官符があるのであるから、寺門が微力であるが維幾が猛威を有してゐるならば　將門は先づ維幾のために促されて都へ出て、糺問されねばならぬ筈の身である。それが有つたからといふのも一つの事情か知らぬが又貞盛緣類といふことも一ツの理由か知らぬが、又折つてかゝつて來たからといふも一の所以か知らぬが、常陸介を生捕り、國廳を荒し、掠奪焚燒を敢てし、言はず語らず一國を掌握したのは、相馬小次郎圖に乘つて暴れ過ぎた。裏面の情は問ふに及ばず、表面の事は亂賊の所行だ。大小は違ふが此類の事の諸國にあつたのは時代の一ツの現象であつたに疑無いけれど、これでは叛意が有る無いにかゝはらず、大盜の所爲、又は暴擧といふべきものである。今で云へば縣廳を襲撃し、縣令を生擒し、國庫に入る可き財物を掠奪したのに當るから、心を天位に掛けぬまでも、大罪に相違無い。玄明、興世王なんどの遣口を大規模にしたのである。將門猶未だ僭せずといへども、既に叛したのである。純友の暴發も蓋し此樣いふ調子なのであつたらう。延喜年間に盜の爲に殺された前安藝守伴光行、飛騨守藤原辰忠、上野介藤原厚載、武藏守高向利春などいふのも、蓋し維幾が生擒されたやうな狀態であつたらう。孔孟の道は尊ばれたやうでも、賞

は文章詩賦が流行つたのみで佛敎は尊崇されたやうでも、實は現世祈禱のみ盛んで、事實に於て神祠巫覡の徒と妥協を遂げ、貴族に迎合し、甚しく平等の思想に缺け、人は戀愛の奴隷、虛榮の從僕となつて納まり返り、大臣からしてが賭をして他の妻を取るほど博奕思想は行はれ、官吏はたゞ民に對する誅求と、上に對する阿諛とを事としてゐる、かゝる世の中に腕節の强い者の腕が鳴らずに居られよう歟、此の世の中の表裏を看て取つて、構ふものか、といふ腹になつて居る者は決して少くは無く、惡平等や撥無邪正の感情に不知不識陷つて居た者も、所在にあつたらう。將門が水滸傳中の豪傑が危い目に度々遇つて終に官に抗し威を張るやうな經路を取つたのも、考へれば考へどころはある。特に長い間引續いた私鬪の敵方荷擔人の維幾が向ふへまはつて互に正面からぶつかつたのだから堪らない。此方が勝たなければ彼方が勝ち、彼方が負けなければ此方が負け、下手にまごつけば前の降間木につぐんだ時のやうな目に遇ふのだらう。玄明をかくまつた行懸りばかりでは無い、自分の頸にも繩の一端はかゝつてゐるものだから、向ふの頸にも繩の一端をかづかせて頸骨の强さくらべの頸引をして、そして敵をのめらせて敲きつけたのだ。常陸下總といへば人氣はどちらも阪東氣質で、山城大和のやうに柔らかなところでは無い。野山に生へる杉の樹や松の樹までが、常陸ッ木下總ッ木といへば、大工さんが今も顏をしかめる位で、後年の長脇差も俠客も大抵利根川沿岸で血の雨を降らせあつてゐるのだ。神道德次は小貝川の傍、飯岡の助五郎、笹川の繁藏、銚子の五郎藏と數へ立つたら、指がくたびれる程だ。元來が斯様いふ土地なので、源平時分でも、德川時分でも變りは無いから、平安朝時代でも異なつては居ないらしい。現に將門の叔父の村岡五郞の孫の上總介忠常も、武藏押領使、日本將軍と威張り出して、長元年間には上總下總安房を切從へ、朝廷の兵を引受けて二年も戰ひ、これも叛臣傳中の人物となつてゐる。かういふ土地、かういふ時勢、かういふ思潮、かういふ內情、かういふ行懸り、興世王や玄明のやうなかういふ手下。とう〱火事は大きな風に煽られて大きな燃えくさに甚だしい焰を揚げるに至つた。もういけない。將門は毒酒に醉つた。興世王が將門に對つて、一國を取るも罪は赦さるべくも無い同じくば坂東を幷せて取つて、其の氣色を見んには如かじと云ひ出すと、如何にも然樣だ、と合點して終つた。興世王

は實に好い居候だ。親分をもり立てゝ大きくしようと心掛けたので、天井が高くなければ頭を銼えさせる譯には行かない。蔭で親分を惡く言ひながら、臺所で偸み酒をするやうな居候とは少し違つて居た。併し此の居候のお蔭で將門は段々罪を大きくした。興世王の言を聞くと、もとより焔硝は澤山に籠つて居た大筒だから、口火がついては容赦は無い。ウム、如何にも、いやしくも將門、刹帝利の苗裔三世の末葉である、事を擧ぐるもいはれ無しとはいふ可からず、いで先づ掌に八箇國を握つて腰に萬民を附けんと大きく出た。かう出るだらうと思つて、そこが性に合つて居た興世王だから、イヨー親分、と喜んで働き出した。藤原の玄明や文室(ブンヤ)の好立等のいきり立つたことも言ふ迄は無い。ソレッといふので下野國へと押出した。馬を駈けさせては馬場所の士だ。將門が猛威を張つたのは、大小の差こそあれ元が猛威を振つたのと同じく、騎隊を驅使したためで、古代に於ては汽車汽船自働車飛行機のある譯では無いから、驍勇な騎士を用ゐれば、其の速力や負擔力に於て歩兵に陪從するから、兵力は個數に於て少くて實量に於て多いことになる。下總は延喜式で左馬寮御牧貢馬地として、信濃上野甲斐武藏の下に在るやうに見えるが、兵部省諸國馬牛牧式を見ると、高津牧、大結牧、本島牧、長州牧など、澤山な牧があつて、兵部省へ貢馬したものである。鎌倉時代足利時代から德川時代へかけて、地勢上奧羽と同じく産馬地として鳴つて居る。特に將門は武人、此の牧場多き地に生長して居れば、十分に馬政にも注意し、騎隊の利をも用ゐるに怠らなかつたらう。天慶の二年十一月二十一日に常陸を打從へて、すぐ其の翌月の十一日出發した。馬は龍の如く、人は雲の如く、勇威凛々と取つてかゝつたので、下野の國司は辟易した。經基の奏の後、阪東諸國の守や介は新らしい人々に換へられたが、斯樣いふ時になると新任者は勝手に不案内で、前任者は責任の解けたことであるから、いづれにしても不便不利であつて、下野の新司の藤原の公雅は抵抗し兼ねて印鑰を差出して降つて終つた。前司の大中臣全行も敵對し無かつた。國司の館も國府も悉く虜掠されて終ひ、公雅は涙顏天を仰ぐ能はずすご〳〵と東山道を都へ逃れ去つた。同月十五日馬を進めて上野へ將門等は出た。介の藤原尙範も印鑰を奪はれて終つた。十九日國廳に入り、四門の陣を固めて、將門を首め興世王、藤原玄茂等堂々と居流れた。(玄茂も常陸の者であるから

蓋し玄明の一族であらう。）此時、此等の大變に感じて精神異常を起したものか、それとも玄明等若しくは何人かの使嗾に出てたか知らぬが、一伎あらはれ出でゝ、神がかりの狀になり、八幡大菩薩の使者と口走り、多勢の中で揚言して、八幡大菩薩、位を蔭子將門に授く、左大臣正二位菅原道眞朝臣之を奉ずと云つた。一軍は譯も無く忻喜雀躍した。興世王や玄茂等は將門を勸めた。將門は遂に神旨を戴いた。四陣上下、擧つて將門を拜して、歡呼の聲は天地を動かした。

此の仕掛花火は誰が製造したか知らぬが、蓋し玄茂玄明の輩だらう。理屈は兎もあれ景氣の好い面白い花火が揚れば群衆は喝采するものである。群衆心理なぞと近頃しかつめらしく言ふが、人は時の拍子にかゝると途方も無いことを共感協行するものである。昔はそれを通り魔の所爲だの、天狗の所爲だのと言つたものである。群衆といふことは一體鰯だの椋鳥だの鴉だの鰊だのゝ如きものゝ好んで爲すところで、群集に依つて自族を支へるか、個體となつては餘りに弱小なものゝ取る道である。人間に在つても、立敎者は孤獨で、信敎者は群集、勇者は獨往し、怯者は同行する、創作者は獨自で、模倣者は群集、智者は寥々、愚者は多々であつて、群衆して居るといへば既にそれは弱小蠢愚の者なることを現はして居る位のものである。群衆心理は即ち衆愚心理なのであるから、皆自から主たる能はざるほどの者共が、相率ゐて下らぬ事を信じたり、下らぬ事を怒つたり悲しんだり喜んだり、下らぬ行動を敢てしたりしても何も異とするには足らない。魚は先頭魚の後へついて行き、鳥は先發鳥の後へつくものである。群集は感の一致から盲從妄動するもので、淺野内匠頭の家は潰され城は召上げられると聞いた時一二が籠城して戰死しようと云へば、皆爭つて籠城戰死しようといふのが即ち群衆心理である。其實は主家の爲に忠に死するに至つた者は終に何程も有りはし無かつた。感の一致が月日の立つと共に破れると御金配分を受けて何處かへ行つてしまふのが却つて本態だつたのである。そこで衆愚心理を見破つて、これを正しく用ゐるのが良い政治家や軍人で、これを吾が都合上に用ゐるのが奸雄や煽動家である。八幡大菩薩の御託宣は群衆を動かした。群衆は無茶に歡んだ。將門は新皇と祭り上げられた。通り魔の所爲だ、天狗の所爲だ。衆愚心理は巨浪を猨島に持上げてしまつた。將門は毒酒を甘しとして其の第二盃を仰いでしまつた。

道眞公が此處へ陪賓として引張り出されたのも面白い。公の貶謫と死とは餘ほど當時の人心に響を與へてゐたに疑無い。現に榮えてゐる藤原氏に反對側の公の亡靈の威を藉りたなども一寸をかしい。たゞ將門が菅公薨去の年に生れたといふ因縁で、持出したのでもあるまい。本來託宣といふことは僧道巫覡の徒の常套で、有り難過ぎて勿體無いことであるが、迷信流行の當時には託宣は笑ふ可き事では無かつたのである。現に將門を滅ぼす祈禱をした叡山の明達阿闍梨の如きも、松尾明神の託宣に、明達は阿倍仲丸の生れがはりであるとあつたといふことが扶桑略記に見えてゐるが、これなぞは隨分變挺な御託宣だ。宇佐八幡の御託宣は名高いが、あれは別として、一體神がゝり御託宣の事は、日本に古傳のあることであつて、當時の人は多く信じてゐたのである。此の八幡託宣は一場の喜劇の如くで、其の脚色者も想像されることではあるが、或は又別に作者があつたのでは無く、偶然に起つたことかも知れない。古より東國には未だ曾て無い大動搖が火の如くに起つて、瞬く間に無位無官の相馬小次郞が、下總常陸上野下野を席捲したのだから、感じ易い人の心が激動して、發狂狀態になり、斯樣なことを口走つたかとも思はれる。然らずば、一時の賞賜を得ようとして、斯樣なことを妄言するに至つたのかも知れない。

田原藤太が將門を訪ふた談は、此の前後の事であらう。秀卿は下野掾で、六位に過ぎぬ。左大臣魚名の後で、地方に蟠踞して威望を有して居たらうが、これもたゞの人ではない。何事の罪を犯したか知らぬが、延喜十六年八月十二日に配流されたとある。同時に罪を得たものは、國同人で同姓の兼有、高鄕、興貞等十八人とあるから、何か可なりの事件に相違無い。日本紀略にも罪狀は出て居らぬが、都まで通つた惡事でもあり、人數も多いから、いづれ黨を組み力を發せて爲た事だらう。何にしても前科者だ、一筋で行く男では無い。將門を訪ふた談は、時代ちがひの吾妻鏡の治承四年九月十九日の條に、昔話として出て居るので、「藤原秀鄕、僞はりて門客に列す可きの由を稱し、彼の陣に入るの處、將門喜悅の餘り、梳けづるところの髮を肆らず、即ち烏帽子に引入れて之に謁す。秀鄕其の輕忽なるを見、誅罰す可きの趣を存じ、退出し、本意の如く其首を獲たり云々」といふので、源平盛衰記には、「將門と同意して朝家を傾け奉り、日本

圖を同心に知らんと思ひて、行向ひて角といふ」と卷二十二に書き出して、世に傳へたる變の事、飯粒の事を書いて居る。盛衰記に書いてある通りならば、秀郷は隨分怪しからぬ料簡方の男で、興世王の事を爲さずして終つたが、興世王の心を懷いてゐた人だと思はれる。齊堂竹堂が論じた如く、秀郷の事跡を觀れば朝敵を對治したので立派であるが、其の心術を考へれば惡むべきところのあるものである。然し源平盛衰記の文を證にしたり、日本外史を引いて論じられては、是非も共に皆非であつて、田原藤太も迷惑だらう。吾妻鏡は、「僞はりて稱す云々と記し、大日本史は、「秀郷陽に之に應じ、其の營に造りて謁を通ず」と記してゐる。此の意味で云へば、將門の勢が浩大で、獨力之を支ふることが出來無かつたから、下野掾の身ではあるが、尺蠖の一時を屈して、差當つての難を免れ、後の便宜にもとの意で、將門の許を訪ふたといふのであるから、咎むべきでは無い。竹堂の論もむだ言である。が、盛衰記の記事が眞相を得て居るのだらうか。大日本史の記事の方が眞相を得て居るだらうか。秀卿の後の千晴は、安和年中、橘繁延僧蓮茂と廢立を謀るに坐して隱岐に流されたし、秀卿自身も前に何かの罪を犯してゐるし、時代の風氣をも考へ合せて見ると、或は盛衰記の記事、竹堂の論の方が當つて居るかとも思へる。然し確證の無いことを深刻に論ずるのは感心出來無いことだ。愼るべきことだ。田原藤太を强ひて、何方へ賭けようかと考へた博奕打にするには當らない。

將門に逐ひ立てられた官人連は都へ上る、諸國よりは櫛の齒をひくが如く注進がある。京師では驚愕と憂慮と、應變の處置の手配とに沸立つた。東國では貞盛等は潜伏し、維幾は二十九日以來鎌輪に幽囚された。

將門は舊恩ある太政大臣忠平へ書狀を發した。其書は滿腔の鬱氣を伸べ、思ふ存分のことを書いては居るが、靜かに味はつて見ると、强い言の中に柔らかな情があり、穩やかに委曲を盡してゐる中に手强いところがあつて中々面白い。

將門謹み言す貴誨を蒙らずして、星霜多く改まる、渴望の至り、造次に何でか言さん。伏して高察を賜はらば、恩幸なり恩幸なり。」然れば先年源ノ護等の愁狀に依りて、將門を召さる。官符をかしこみ、忩然として道に上り、祇候するの間、仰せ奉りて云はく、將門之事、既に恩澤に霑ひぬ、仍つて早く返し遣る者なりとなれば、舊堵に歸着し、兵事を

忘却し、妓を綏くして安居しぬ。」然る間に前下總國介平良兼、數千の兵を起し、將門を襲ひ攻む、將門背走相防ぐ能はざるの間、良兼の爲に人物を殺損奪掠せらるゝの由は、具さに下總國の解文に注し、官に言上しぬ。爰に朝家諸國に勢を合して良兼等を追捕す可きの官符を下され了んぬ。而るに更に將門等を召すの使を給はる、然るに心安からざるに依りて、遂に道に上らず、官使英保純行に付いて、由を具して言上し了んぬ。未だ報裁を蒙らず、鬱包の際、今年の夏、同じく平貞盛、將門を召すの官符を奉じて常陸國に到りぬ。仍つて國內頻りに將門に牒述す。件の貞盛は、追捕を免れて踊踏として道に上れる者也、公家は須らく捕へて其の由を糺さるべきに、而もかへつて理を得るの官符を給はるとは、是尤も矯飾せるゝ也」。又右少辨源相職朝臣、仰せの旨を引いて書狀を送れり、詞に云はく、武藏介經基の告狀により、定めて將門を推問すべきの後符あり了んぬと」。詔使到來を待つの比ほひ、常陸介藤原維幾朝臣の息男爲憲、偏に公威を假りて、たゞ寃枉を好む。爰に將門の從兵藤原玄明の愁訴により、將門其事を聞かんが爲に彼國に發向せり。而るに爲憲と貞盛等と心を同じうし、三千餘の精兵を率ゐて、恣に兵庫の器仗戎具並びに楯等を出して戰を挑む。是に於て將門士卒を勵まし意氣を起し、爲憲の軍兵を討伏せ了んぬ。時に州を領するの間滅亡する者其數幾許なるを知らず、況んや存命の黎庶は、盡く將門の爲に虜獲せらるゝ也」。介の維幾、息男爲憲を教へずして、兵亂に及ばしめしの由は、伏して過狀を辨し了んぬ。將門本意にあらずと雖も、一國を討滅しぬれば、罪科輕からず、百縣に及ぶべし。之によりて朝議を候ふの間、しばらく坂東の諸國を虜掠し了んぬ」。伏して昭穆を案ずるに、將門は已に柏原帝王五代之孫なり、たとひ永く半國を領するとも、豈非運と謂はんや。昔兵威を振ひて天下を取る者は、皆史書に見るところ也。將門天の與ふるところ既に武藝に在り、等輩を思惟するに誰か將門に比ばんや。而るに公家褒賞の由无く、屢譴責の符を下さるゝは身を省みるに恥多し、面目何ぞ施さん。推して之を察したまはゞ、甚だ以て幸なり」。抑將門少年の日、名簿を太政大殿に奉じ、數十年にして今に至りぬ、相國攝政の世に意はざりき此事を擧げんとは。歎念の至り、言ふに勝ゆ可からず。將門傾國の謀を萠すと雖、何ぞ舊主を忘れんや。貴閣且つ之を察するを賜はらば甚だ幸なり。一を以て萬を貫く、將門謹

言。

天慶二年十二月十五

謹々上　太政大殿少將閣賀恩下

此狀で見ると將門が申譯の爲に京に上つた後、郷に還つておとなしくてゐた樣子は、兵事を忘却し、弓弦を緩くして安居す、といふ語に明らかに見はれてゐる。そこを突然に良兼に襲はれて酷い目に遇つたことも事實だ。で、其時に將門は正式の訴狀を出して其事を告げたから、朝廷からは良兼を追捕すべきの符が下つたのだ。然るに將門は公の手の廻るのを待たずに、良兼に復讐戰を試みたのか、或は良兼は常陸國から正式に解文を出して辨解したゝめ追捕の事が已んだのを見て、勘忍ならずと常陸へ押寄せたのであつたらう。其時良兼が應じ戰は無いで筑波山へ籠つたのは丁度將門が前に良兼に襲はれた時應戰し無かつたやうなもので、公邊に對して自分を理に敵を非に置かうとしたのであつた。將門は腹立紛れに亂暴して歸つたから、今度は常陸方から解文を上つて將門を訴へた。で、將門の方へ官符が來て召問はるべきことになつたのだ。事情が紛糾して分らないから官使純行等三人は其時東國へ下向したのである。將門は辯解する上京はせぬ。そこへ又後から貞盛は將門の橫暴を直訴して頂戴した將門追捕の官符を持つて歸つて來たのである。これで極めて鮮やかに前後の事情は分る。貞盛は將門追捕の符を持つて歸つたが、將門の方から云へば貞盛は良兼追捕の符の下つた時良兼同罪であつて同じく配符の廻つて居た者だから、追捕を逃れ上京したは公に於て取押へて糺問さるべき者であるにかゝはらず、其者に取つて理屈の好い將門追捕の符を下さるゝとは怪しかぬ矯飾であると突撥ねてゐるのである。こゝまでは將門の言ふところに點頭の出來る情狀と理路とがある。玄明の事に就ては少し無理があり、信じ難い情狀がある。玄明を從兵といふのが奇異だ。行方河內兩郡の倉糧を奪つたものを執へんとするものを、寃枉を好むとは云ひ難い。爲憲貞盛合體して兵を動かしたといふのは、蓋し事實であらうが、要するに維幾と對談に出かけたところからは、將門のむしやくしや腹の決裂である。此書の末の方には憤怨恨悱と自暴の氣味とがあるが、然し天位を何樣しよ

ゝうの何のといふそんな氣味は少しも無い。むしろ、亂暴はしたが同情しても宜いでは無いか。あなたには御氣の毒だが仕方が無いぢやありませんか、といふ調子で、將門が我武者一方で無いことを現はしてゐて愛す可きである。

將門は厭な浮世繪に描かれた如き我武者一方の男では無い。將門の弟の將平は將門よりも又やさしい。將門が新皇と立てられるのを諫めて、帝王の業は智慧力量の致すべきでは無い、蒼天もし與みせずんば、智力また何をか爲さんと云つたとある。至言である。好人である。斯樣いふ弟が有つては、日本ではだめだが國柄によつては將門も眞命の天子となれたかも知れない。弓削道鏡の一類には玄賓僧都があり、淸盛の子に重盛があり、將門の弟に將平の有つたのは何といふ面白い造物の脚色だらう。何樣も戯曲に眞の歴史は無いが、歴史には却つて好い戯曲がある。將門の家隷の伊和員經といふ者も、物靜かに將門を諫めたといふ。然し將門は將平を迂誕だといひ、員經を心無き者だといつて容れなかつた由だが、火事もこゝまで燃えほこつては、救はんとするも焦頭爛額あるのみだ。「とゞの詰りは眞白な灰」になつて何も浮世の埒が明くのである。「上戸も死ねば下戸も死ぬ風邪」で、毒酒の美さに跡引上戸となつた將門も大醉淋漓で島廣山に打倒れゝば、「番茶に笑んで世を輕う視る」といつた調子の洒落れた將平も何樣なつたか分らない。四角な螢に圓い螢、「生きて居る間のおの〳〵の形」を果敢なく沙に痕つけたまでだ。

將平員經のみではあるまい、群衆心理に攝收されない者は、或は口に出して諫め、或は心に秘めて非としたらうが、興世王や玄茂が事を用ゐて、除目が行はれた。將門の弟の將頼は下野守に、上野守に常羽御厩別當多治經明を、常陸守に藤原玄茂を、上總守に興世王を、安房守に文室好立を、相模守に平將文を、伊豆守に平將武を、下總守に平將爲を、それ〳〵の受領が定められた。毒酒の宴は愈々はづんで來た。下總の亭南、今の岡田の國生村あたりが都になる譯で、今の葛飾の柳橋か疑はしいが檥橋といふところを京の山崎に擬らへ、相馬の大井津今の大井村を京の大津に比し、こゝに新都が阪東に出來ることになつたから、景色の好いことは夥しい。浮浪人や配流人、なま學者や落魄公卿、いろ〳〵の奴が大臣にされたり、參議にされたり、雜穀屋の主人が大納言金時などゝ納まりかへれば、掃除屋が右大辨汲安な

どゝ威張り出す、出入りの大工が木工頭、お針の亭主が縫殿頭、山井屋仙老が典藥頭、賓卜の岩洲友當が陰陽博士になるといふ騒ぎ、たゞ暦日博士だけにはなれる者が無かつたと、京童が云つたらしい珍談が殘つてゐる。

上總安房は早くも將門に降つたらう。武藏相摸は新皇親征とあつて、馬蹄戞々大軍南に向つて發した。武藏も論無く相摸も論無く降伏したらしく別に抵抗をした者の談も殘つて居ない。諸國が弱い者ばかりといふ譯ではあるまいが、一つには官の平生の處置に悅服して居なかつたといふ事情があつて、むしろ民庶は何樣な新政が頭上に輝くかと思つたゝめに將門の方が勝つて見たら何樣だらうぐらゐに心を持つてゐたのだらう。それで上野下野武藏相摸たちまちにして舊官は逐落され、新軍は勢を得たのかと想像される。相摸よりさきへは行かなかつたらしいが、これは古の事で上野は碓氷、相摸は箱根足柄が自然の境をなしてゐて、將門の方も先づそこらまで片づけて置けば一段落といふ譯だつたからだらう。相州秦野あたりに、將門が都しようかとしたといふ傳説の殘つてゐるのも、將門軍がしばらくの間彷徨したり駐屯したりしてゐた爲に生じたことであらう。燎原の勢、八ケ國は瞬間にして馬蹄の下になつてしまつた。實際平安朝は表面は衣冠束帶華奢風流で文明くさかつたが、伊勢物語や源氏物語が裏面をあらはしてゐる通り、十二單衣でぞべらぞべらした女どもと、戀歌や遊藝に身の膏を燃して居た雲雀骨の弱公卿共との天下であつて、日本各時代の中でも餘り宜しく無く、美なること冠玉の如くにして中空しきのみの世であり、やゝもすれば暗黑時代のやうに、外面のみを見て評する人の多い鎌倉時代などよりも、中味は充實してゐない危い代であつたのは、將門ばかりでは無い純友などにも覘く西部を突崩されて居るのを見ても分る。元の忽必烈が少し早く生れて、平安朝に襲來したならば、相摸太郎になつて西天を睥睨してウムと堪へたものは公卿どもには無くつて、却つて相馬小次郎將門だつたかも知れはし無い。「荒壁に蔦のはじめや飾り繩」で、延喜式の出來た時は賴朝が頤で六十四州を指揮する種子がもう播かれてあつたとも云へるし、源氏物語を讀んでは大江廣元が生れない遙に前に、運氣の既に京畿に衰へてゐることを悟つた者が有つたかも知れないとも云へる。忠常の叛、前九年、後三年の亂は、何故に起つた。直接には直接の理由が有らうが、間接には粉面涅齒の

公卿共がイソップ物語の屋根の上の羊みたやうにして居たからだ。奥州秀衡家が何時の間にか、だんまり蟲が壁を透す格で大きなものになつてゐたのも、何を語つてゐるかと云へば、都のうつけ郭公待つ、其間におとなしくどし〳〵と勵鍬を動かして居つたからだ。天下樞機の地に立つ者が平安朝ほど階弱苟安下らない事をしてゐたことは無い位だ。だから將門が火の手をあげると、八個國はべた〳〵となつて、京では七斛餘の芥子を調伏祈禱の護摩に焚いて、頓死頓滅を祈らせたと云傳へられて居る。八箇を一月ばかりに切從へられて、七斛の芥子を一七日に焚いたなぞは、帶紐の緩み加減も隨分太甚しい。

相撲から歸つた將門は、天慶三年の正月中旬敵の殘黨が潛んでゐる處のある常陸へと出馬して鎭壓に力めた。丁度都では此時參議右衛門督藤原忠文を征東大將軍として、東征せしむることになつた。忠文は當時唯一の將材だつたので、こ後に純友征伐にも此人が擧げられて居る。忠文は命を受けた時、方に食事をしてゐたが、命を聞くと箸を投じて起つて節刀を受くるに及んで家に歸らずに發したといふ。生ぬるい人のみ多かつた當時には立派な人だつた。しかし戰ふに及ばぬ間に將門が亡びたので賞に及ば無かつたのを恨んで、拳を握つて爪が手の甲にとほり、怨言を發して小野宮大臣を詛つたといふところなどは餘り小さい。將門が常陸へ入ると那珂久慈兩郡の藤原氏どもは御馳走をしてへいこらへいこらをきめた。そこで貞盛爲憲等の在處を申せと責めたが、貞盛爲憲等は此等の藤原氏どもに捕へられるまで間抜でも弱蟲でも無かつた。其中將門軍の多治經明等の手で、貞盛の妻と源扶との妻を吉田郡の蒜間で捕へた。蒜間江は今の茨城郡の涸沼である。

前には將門の妻が執へられ、今は貞盛の妻が執へられた。時計の針は十二時を指したかと思ふと六時を指すものだ。女等は衣類まで剝取られて、みじめな態になつたが、この事を聞いた將門は良兼とは異つた性格をあらはした。流浪の女人を本屬にかへすは法式の恒例である、と相馬小次郎は法律に通じ思ひやりに富んで居た。衣一襲を與へて放ち還らしめ、且つ一首の歌を詠じた。よそにても風のたよりに我ぞ問ふ枝離れたる花のやりどを、といふのである。貞盛

の妻は恩を喜んで、よそにても花の匂の散り來れば吾が身わびしとおもほえぬかな、と返歌した。歌を詠みかけられて返しをせぬと、七生啞にでもなるやうに思つてゐたらしい當時の人のことで此の返しはあつたのだらう。此歌此事を引掛けて、源護の家と將門との爭鬪の因緣にでもこじつけると、古い淨瑠璃作者が喉を鳴らしさうな材料になる。扶の妻も歌を詠んだ。流石に平安朝の匂のする談で、吹きすさぶ風の中にも春の日は花のにほひのほのかなるかなとでも云ひたい。淸宮秀堅がこゝに心をとめて、將門は凶暴といへども草賊と異なるものあり、良兼を放てる也、父祖の像を觀て走れる也。貞盛扶の妻を辱かしめざる也。と云つて居るが、實に其の通りである。將門は時代が遠く、事實が詳しく知れぬから、元明天正あたりの人のやうに細かい想像をつけることは叶はぬが、何樣も李自成やなんぞのやうなものでは無い。やはり日本人だから日本人だ。與世王や玄明を相手に大酒を飲んで、醉拂つて管さへ卷かなかつたらば、氏は異ふが鎭西八郎爲朝のやうな人と後の者から愛慕されただらうと思はれる。

戲曲はこゝにまた一場ある。貞盛の妻は放されて何樣したらう。およそ情のある男女の間といふものは、不思議に離れてもまた合ふもので、蟲が知らせるといふものか、何か分らぬが、慮つて而して知るにあらず感じて而して然るなりで、動物でも何でも牝牡雌雄が引分けられてもいつか互に尋ねあてゝ一所になる。銀杏の樹の雄樹と雌樹とが、五里六里離れて居てもやはり實を結ぶ。漢の高祖の若い時、あちこちに逃惑つて山の中などに隱れて居ても、妻の呂氏がいつでも尋ねあてた。それは高祖の居るところに雲氣が立つて居たからだといふが、いくら卜者の娘だつて、こけの烏のやうに雲ばかりを當にしたでは無からう。あれ程の眞黑焦の燒餅やきな位だから、吾が夫のこと、ヒステリーのやうになると、忽ちサイコメトリー的、千里眼的になつて、「君が行へを寝ぬ夢に見る」で、ありありと分つて後追駈けたものであらうかも知れぬ。貞盛の妻もこゝでは憂き艱難しても夫にめぐり逢ひたいところだ。やうやくめぐり逢つたとす

ると、ハッとばかりに取縋る。流石の常平太も女房の肩へ手をかけてホロリとするところだ。そこで女房が敵陣の模様を語る。柔らかいしつとりした情合の中から、希望の火が燃え出して、扨は敵陣手薄なりとや、いで此機をはづさず討取りくれん、と勇氣身に溢れて常平太貞盛が突立上る、チヨン、チヨン〳〵〳〵と幕が引けるところで、一寸おもしろい。が、何の書にもかういふところは出て居ない。

然し、實際に貞盛は將門の兵の寡いことをば、何樣して知つたか知り得たのである。將門精兵八千と傳へられてゐるが此時は諸國へ兵を分けて出したので、旗本は甚だ手薄だつた。貞盛はかねて絲をひき謀を通じあつてゐた秀郷と、四千餘人を率ゐて猛然と起つた。二月一日矢合せになつた。將門の兵は千人に滿たなかつたが、副將軍春茂（春茂は玄茂か）陣頭經明遂高、いづれも剛勇を以て誇つてゐる者どもで、秀郷等を見ると將門にも告げずに、それ駈散らせと打つて蒐つた。秀郷、貞盛、爲憲は兵を三手に分つて巧みに包圍した。玄明等大敗して、下野下總界より退いた。勝に乘じて秀郷の兵は未申ばかりに川口村へ襲ひかゝつた。川口村は水口村の誤で下總の岡田郡である。將門はこゝで自から奮戰したが、官と賊との名は異なり、多と寡との勢は競は無いで退いた。秀郷貞盛は息をつかせず攻め立てた。勝てば助勢は出て來る、負ければ怯氣はつく。將門の軍は日に衰へた。秀郷の兵は下總の堺、即ち今の境町まで十三日には取詰めた。敵を客戰の地に置いて疲れさせ、吾が兵の他から歸り來るを待たうと、將門は見兵四百を率ゐて、例の飯沼のほとり、地勢の錯綜したところに隱れた。秀郷等は僞宮を燒立てゝ敵の威を削り氣を挫いた。十四日將門は猨島郡の北山に遁れて、疾く吾が軍來れと待望んで居た。大軍が歸つて來ては堪らぬから、秀郷貞盛は必死に戰つた。此の日南風急暴に吹いて、兩軍共に楯をつくことも出來ず、皆ばら〳〵と吹倒されてしまつた。人々面々相望むやうになつた。修羅心は互に頂上に達した。牙を咬み眼を瞋らせて、鎬を削り鍔を割つて爭つた。こゝで勝たずに日がたてば、秀郷等は却つて危

ふくなるのであるから、死身になつて堪へ堪へたが、風は猛烈で眼もあけられなかつたゝめ、秀郷の軍は終に利を失つた。戰の潮合を心得た將門は、轡を聯ね馬を飛ばして突撃した、下野勢は散々に駈散らされて逍迷ひ、餘るところは屈竟の者のみの三百餘人となつた。此時天意かいさ知らず、二月の南風であつたから風は變じて、今度は下野軍が風の利を得た。死生勝負此の一轉瞬の間ぞと秀鄕貞盛は大童になつて鬪つた。將門も馬を乘走らせて進み戰つたが、たま〳〵どつと吹く風に馬が蹶いて立つた途端猛風を負つて飛んで來た箭は、はつたとばかりに將門の右の額に立つた。憐れむべし剛勇みづから恃める相馬小次郎將門も、こゝに至つて時節到來して、一期三十八歲、一燈忽ち滅えて五彩皆空しといふことになつた。

本幹已に倒れて、枝葉全からず、將門の弟の將頼と藤原玄茂とは其歲相模國で斬られ、興世王は上總へ行つて居たが左中辨將末に殺され、遂高玄明は常陸で殺されてしまひ、弟將武は甲斐の山中で殺された。

將門の女で如藏尼といふのは、地藏菩薩を篤信したと、元亨釋書に見えてゐる。六道能化の主を賴みて、父の苦患を助け、身の悲哀を忘れ、惡因によつて、勝道を成さんとしたのであると考へれば、まことに哀れの人である。信田の二郎將國といふのは將門の子であると傳へられて、系圖にも見えてゐるが、此の人の事が傳說的になつたのを足利期に語りものにしたのであらうか、まことにあはれな「信田」といふものがある。しかし直接に將門の子とはして無い、たゞ相馬殿の後としてある。そして二郎とは無くて小太郎とあるが、まことに古樸の味のあるもので、想ふに足利末期から德川初期までの多くの人々の涙をしぼつたものであらう。信田の三郎先生義廣も常陸の信太に緣のある人ではあるが、それは又おのづから別で、將門の後の信田との關係はない、義廣は源氏で、賴朝の伯父である。

將門には餘程京都でも驚きおびえたものと見える。將門死して二十一年の村上天皇天德四年に、右大將藤原朝臣が奏

して云はく、近日人々故平將門の男の京に入ることを曰ふと。そこで右衞門督朝忠に勅して、檢非違使をして捜し求めしめ、又延光をして滿仲、義忠、春實等をして同じく伺ひ求めしむ、といふことが、扶桑略記の卷二十六に出てゐる。馬鹿々々しいことだが、此の様な事もあつたかと思ふと、何程都の人々が將門に魘えたかといふことが親知られる。菅公に魘え、將門に魘え、天神、明神は澤山に世に祀られてゐる。此中に考ふべきことが有るのではあるまいか。こんな事は餘談だ、餘り言はずとも春は紺より水淺黄よしだ。

幸田露伴新著（好評忽三版）

幽情記

洋裝菊版布製全一冊（定價金一圓六十錢）郵稅金十二錢

詩のあるところ必ず情あり情の發するところ或は詩となる詩となつて情を惹くに至つて詩は妙に情の凝つて詩となるに及んで情は幽なり。幽情記一篇蓋し著者會心の著なり。文壇寂寥の今日敢て江湖に推奬す。

加藤咄堂新著（大歡迎忽再版）

國民の精神的基礎

洋裝四六判布製全一冊（定價金一圓六十錢）郵稅金十二錢

本書は我國民理想の變遷を背景として外來思想の調和融合より國民元氣の振興に及び其間幾多の事例を擧げて國民精神の歸嚮すべき方途を暗示し思想統一上に根本原義を提唱して眞に日本人としての眞精神を發揮せしめんとせられたる著者苦心の著述なり。

東京市日本橋角　大倉書店　振替東京二三八番

謹告と五月號の豫告

■印刷料三割値上、紙價の騰貴等、不得止事情の爲め、今回東京雜誌組合の決議に依り、本誌定價を四月より金七十錢と改めたり、右御諒承を乞ふ。

■三月號昇曙夢氏のクロポトキンの社會學說は、不備の點ありし爲め三枚切取りし爲め落丁となれる箇所あり、又堀江博士の論文末尾は、組込の間違ひにて第百十三頁始めに在り、併せて編輯者の粗漏を謝す。

■本號（一週年記念號）は、凡ての點に於て我が誌界に一大記錄を印したるは欣快とする所也、唯印刷料値上其他の影響を蒙りて「生產組織の社會化」に關する硏究は、之を次號に延期したるは遺憾なり。

■五月號は現下の政局に關し、更に深刻なる、更に峻烈なる評論を試んが爲、學者實際家の寄稿承諾を得たり。其呵烈なる筆鋒、其嚴肅なる論陣、譴し腐腸政治家の心膽を寒からしめ、國民の政治的歸趨を示して遺憾なきを信ず、其他同人一流の新計畫は新綠誌界を驚倒するに足るものあるは、贅言を要せざる所也。

■文藝欄に至りては、藝術の眞髓を發揮せんが爲に努力すると共に、文壇中堅の作家に依賴したれば既に其の力作の筆を進めつつあり、新しき傾向小說として斯界に問題たるべきを期す。

毎月一日發行　一回

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	七十錢	三錢
半ケ年	四圓二十錢	不要
壹ケ年	八圓四十錢	不要

外國行郵稅は一部十四錢增大號は別に定價を定む

廣告

▼廣告料は直接本社並に取次店に御照會願上候
▼廣告は御便宜の取次店へ御依賴願上候

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▼增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待って雜誌を發送す
▼見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事
▼御拂込は振替によるゝを最も便利とす

本誌大賣捌所

東京堂　東海堂　北陸館　上田屋　至誠堂

大正九年三月二十六日印刷納本
大正九年四月一日發行

本號に限り
金壹圓五十錢

[illegible]行者　東京府中目黑七八六　橫關利藤太
印刷所　東京市[illegible]町廿七番　秀英舍

發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二


專賣特許
完全燃焼
巴風呂
外釜式
内釜式
燃料節約
時間の短縮
労力の省略
外釜式の図


春の訪づれ……
登録商標
赤帽印
滑ネクタイ
スリップ
赤帽印ネクタイ發賣元
大阪
南商店
東京